松江市文化財調査報告書　第 185 集

城山北公園線都市計画街路事業に伴う
松江城下町遺跡発掘調査報告書 8

松江城下町遺跡

第　1 ブロック (殿町 198-7 外)
第 13 ブロック (南田町 108-1 外)
第 14 ブロック (南田町 101-21 外)
第 16 ブロック (南田町 130-6 外・134-1 外)
総括編

平成 30(2018) 年 3 月

島　根　県　松　江　市　教　育　委　員　会
公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団

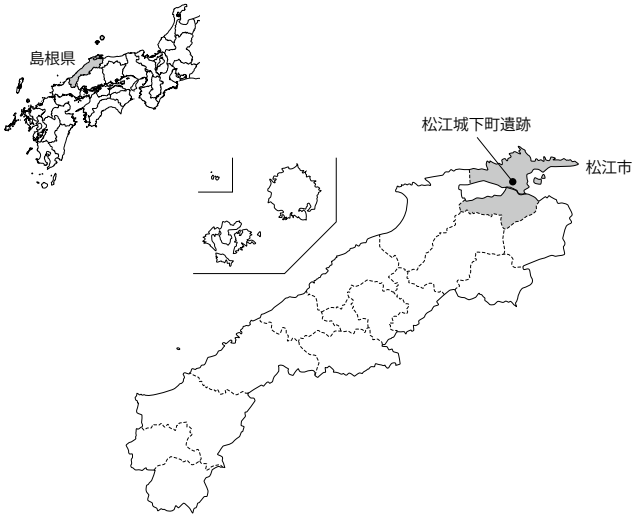
松江市文化財調査報告書　第 185 集

城山北公園線都市計画街路事業に伴う
松江城下町遺跡発掘調査報告書 8

松江城下町遺跡

第　1 ブロック (殿町 198-7 外)
第 13 ブロック (南田町 108-1 外)
第 14 ブロック (南田町 101-21 外)
第 16 ブロック (南田町 130-6 外・134-1 外)

総括編



平成 30(2018) 年 3 月

島　根　県　松　江　市　教　育　委　員　会
公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団

例　言

1. 本書は平成 29 年度に委託を受けた、城山北公園線都市計画街路事業に伴う松江城下町遺跡発掘調査報告書（その 5）作成事業の成果品である。
2. 本書の第 3 章に掲載した「調査」は、平成 24 年度から 29 年度にかけて島根県松江県土整備事務所から松江市教育委員会が依頼を受け、公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団が実施した発掘調査である。調査体制については例言 6 を参照されたい。
3. 本書の第 5 章に掲載した「総括」は、平成 18 年度から 29 年度にかけて実施した城山北公園線都市計画街路事業に伴う松江城下町遺跡発掘調査の成果について、これまでに報告されている松江城下町遺跡全体に関わる遺構と遺物の再検討と再評価を行い、その中から指標遺跡として抽出した遺跡を中心にまとめた総括である。第 3 章に掲載した本調査および立会調査のまとめについては、各ブロックの節末に「小結」の項目を設け、その中でそれぞれの遺跡について遺構面の変遷と遺跡の評価を詳述した。
4. これまでに松江市教育委員会および当財団が刊行した報告書については、『市』の後に松江市文化財調査報告書の巻次を配した。また、城山北公園線都市計画街路事業に伴う発掘調査報告書は「城山」の後にシリーズ番号を記して区別する。(例：本書の場合は『市 185』「城山 8」となる)
5. 各年度の調査組織

【平成 24(2012) 年度】　発掘調査

調査主体者	松江市教育委員会		教育長	福島律子
事務局	松江市教育委員会文化財課		課長	錦織慶樹
	〃	調査係	係長	赤澤秀則
	〃	〃	主任	川上昭一
実施者	財団法人松江市教育文化振興事業団		理事長	松浦正敬
	〃	埋蔵文化財課	課長	藤原　博
	〃	〃　調査係	係長	古藤博昭

【平成 25(2013) 年度】　発掘調査

調査主体者	松江市教育委員会		教育長	福島律子
			（～平成 25 年 5 月 20 日）	
	〃		教育長	清水伸夫
			（平成 25 年 5 月 21 日～）	
事務局	松江市教育委員会文化財課		課長	錦織慶樹
	〃	調査係	係長	赤澤秀則
	〃	〃	主任	川上昭一
実施者	公益財団法人松江市スポーツ振興財団*		理事長	福島律子
			（～平成 25 年 5 月 31 日）	

公益財団法人松江市スポーツ振興財団　　理　事　長　　清水伸夫
（平成 25 年 6 月 1 日～）
〃　　埋蔵文化財課　課　　長　　三島秀幸
〃　　〃　調査係　係　　長　　古藤博昭
（＊平成25年4月に財団法人松江市教育文化振興事業団を改称）

【平成 26(2014) 年度】　発掘調査

調査主体者　　松江市教育委員会　　教　育　長　　清水伸夫
事　務　局　　松江市歴史まちづくり部*　　部　　長　　安田憲司
〃　　統　括　官　　錦織慶樹
（埋蔵文化財調査室　室長兼務）
〃　　まちづくり文化財課　　課　　長　　永島真吾
〃　　調査係　係　　長　　赤澤秀則
〃　　〃　主　　任　　川上昭一
実　施　者　　公益財団法人松江市スポーツ振興財団　　理　事　長　　清水伸夫
〃　　埋蔵文化財課　課　　長　　三島秀幸
〃　　〃　調査係　係　　長　　古藤博昭
（＊平成 26 年 4 月に松江市教育委員会文化財課が移行）

【平成 28(2016) 年度】　発掘調査

調査主体者　　松江市教育委員会　　教　育　長　　清水伸夫
事　務　局　　松江市歴史まちづくり部　　部　　長　　藤原亮彦
〃　　次　　長　　永島真吾
（まちづくり文化財課　課長兼務）
〃　　まちづくり文化財課
〃　　〃　　専　門　幹　　飯塚康行
（埋蔵文化財調査室　室長兼務）
〃　　調査係　係　　長　　赤澤秀則
〃　　〃　専門企画員　　川上昭一
実　施　者　　公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団*　理　事　長　　清水伸夫
〃　　埋蔵文化財課　課　　長　　曽田　健
〃　　〃　調査係　係　　長　　川西　学
（＊平成28年7月に公益財団法人松江市スポーツ振興財団を改称）

【平成 29(2017) 年度】　発掘調査・報告書作成業務

報告書作成　　平成 29 年 4 月 1 日～平成 30 年 3 月 31 日
主　体　者　　松江市教育委員会　　教　育　長　　清水伸夫
事　務　局　　松江市歴史まちづくり部　　部　　長　　藤原亮彦

	松江市歴史まちづくり部	次　　長	永島真吾
		（まちづくり文化財課　課長兼務）	
	〃　まちづくり文化財課		
	〃　〃	専　門　官	飯塚康行
		（埋蔵文化財調査室　室長兼務）	
	〃　〃　埋蔵文化財調査室　調査係	係　　長	赤澤秀則
	〃　〃　〃　〃	主　　幹	川上昭一
	〃　〃　〃　〃	学　芸　員	三宅和子
実　施　者	公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団	理　事　長	清水伸夫
	埋蔵文化財課	課　　長	曽田　健
	〃　調査係	係　　長	川西　学
	〃　〃	主　　任	小山泰生（担当者）
	〃　〃	調査補助員	宇津直樹

6.　本報告第３章に掲載した各ブロックの本調査体制は以下のとおりである。

第１ブロック (1-3 区)：第３章第１節　［平成 29 年度調査］

名　　称	松江城下町遺跡（殿町 198-7 外）発掘調査		
所　在　地	松江市殿町 198 番地７外		
調査期間	平成 29 年６月 26 日～平成 29 年８月８日		
調査面積	32.3㎡		
調査指導	島根県教育委員会文化財課	主任主事	人見麻生
実　施　者	公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団	調　査　員	徳永桃代
	〃	調査補助員	黒田裕司
	〃	〃	木村由希江

第 13 ブロック (13-2 区)：第３章第２節　［平成 28 年度調査］

名　　称	松江城下町遺跡（南田町 108-1 外）発掘調査		
所　在　地	松江市南田町 108 番地１外		
調査期間	平成 28 年 10 月 27 日～平成 29 年３月 24 日		
調査面積	162.7㎡		
調査指導	島根県教育委員会文化財課	企　画　員	守岡利栄
	大阪文化財研究所	総括研究員	趙　哲済
実　施　者	公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団	主　　任	小山泰生
	〃	調査補助員	宇津直樹

第 14 ブロック (14-1 区)：第３章第３節　［平成 25 年度調査］

名　　称	松江城下町遺跡（南田町 101-21 外）発掘調査
所　在　地	松江市南田町 101 番地 21、101 番地 22

調 査 期 間　平成 25 年 6 月 27 日～平成 25 年 9 月 30 日
調 査 面 積　67.5㎡
調 査 指 導　島根県教育委員会文化財課　企 画 幹　角田徳幸
実 施 者　公益財団法人松江市スポーツ振興財団　係　長　古藤博昭
〃　調査補助員　黒田裕司

第 16 ブロック (16-5 区)：第 3 章第 4 節 ［平成 24 年度調査］
名　称　松江城下町遺跡（南田町 130-6 外）発掘調査
所 在 地　松江市南田町 130 番地 6、130 番地 8、130 番地 9
調 査 期 間　平成 24 年 7 月 2 日～平成 25 年 3 月 15 日
調 査 面 積　214.4㎡
調 査 指 導　島根県教育委員会文化財課　企 画 幹　今岡一三
実 施 者　財団法人松江市教育文化振興事業団　調 査 員　徳永桃代
〃　調査補助員　黒田裕司

第 16 ブロック (16-6 区)：第 3 章第 5 節 ［平成 25 ～ 26 年度調査］
名　称　松江城下町遺跡（南田町 134-1 外）発掘調査
所 在 地　松江市南田町 134 番地 1 外
調 査 期 間　平成 25 年 11 月 5 日～平成 26 年 7 月 8 日
調 査 面 積　479.0㎡
調 査 指 導　島根県教育委員会文化財課　企 画 幹　角田徳幸
〃　主　幹　深田 浩
実 施 者　公益財団法人松江市スポーツ振興財団　調 査 員　徳永桃代
〃　調査補助員　渡邊真二

7. 発掘調査・出土遺物検討会・報告書作成にあたっては、以下の方々から多大なご指導、ご教示、ご協力を頂いた。記して感謝の意を表する。（順不同、敬称略）
大橋康二（佐賀県立九州陶磁文化館名誉顧問）、松尾信裕（大阪歴史博物館研究主幹）、嶋谷和彦（堺市文化観光局文化部文化財課学芸員）、魚島純一（奈良大学文化部文化財学科准教授）、澤田正明（島根県立古代出雲歴史博物館学芸員）、西尾克己（大田市教育委員会石見銀山世界遺産センター）、足立正智（松江市文化財保護審議会委員）
8. 本書に掲載した遺物の復元・実測・浄書・整理および遺構の浄書は、以下の者が行った。
宇津直樹、金坂昇、木村由希江、塩田陽子、須藤佳奈子、角優佳
9. 本書に掲載した木製品の赤外線写真は、島根県立古代出雲歴史博物館のご協力を頂いた。
10. 本書の執筆・編集は、松江市埋蔵文化財調査室の協力を得て小山が行った。
11. 動物遺存体の鑑定は、石丸恵利子氏（広島大学総合博物館埋蔵文化財調査部門研究員）のご教示を得て、本書の第 4 章に掲載した自然科学分析の成果について玉稿を頂いた。
12. 測量データ・出土遺物・実測図・写真等の資料は、松江市教育委員会で保管している。

凡　例

1. 遺跡名については、松江城下町遺跡の後に町名と代表地番を（カッコ）内に付記して呼称している。
2. 立会調査の場合、調査を実施した地点順に連番を付して管理しており、各立会調査地点に冠せられる冒頭の MJR とは「松江（Matsue）城下町（Joukamachi）立会（Rikkai）」の略号である。
3. 本書における主な遺構名の表記は以下のように略号を冠した。

   塀・柵（SA）、建物（SB）、水路・溝・屋敷境（SD）、井戸（SE）、道路（SF）、池（SG）、土坑・穴蔵（SK）、水田・畑（SN）、柱穴（SP）、礎石・石列（SS）、石垣（SW）、その他の遺構（SX）

   遺構番号は遺構面毎に番号を付していたが、番号が重複しないように各遺跡で通し番号に振り直した。
4. 本書で用いた方位は平面直角座標北を示し、座標値は世界測地系に準拠した平面直角座標系第Ⅲ系の値である。また、水準値は海抜標高を示し、本文中では標高○mと記した。
5. 本書で用いた地層の土色は『新版 標準土色帖』農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修に拠った。
6. 本書で用いた陶磁器の編年と器種名については以下の文献を参照して記述した。これら以外のものについては、出土遺物検討会等で指導を受けた年代を記載しているものもある。

   ［貿易陶磁器］森毅　1995「十六・十七世紀における陶磁器の様相とその流通」『ヒストリア第 149 号』大阪歴史学会

   ［肥前系陶磁器］九州近世陶磁学会　2000『九州陶磁の編年－九州近世陶磁学会 10 周年記念－』

   肥前系陶磁器について、本文中では「九陶○期」の略号と「生産地年代」（西暦もしくは世紀）での表示を基本とした。

   ［瀬戸美濃焼］愛知県史編纂室　2007「瀬戸・美濃大窯製品編年表」『愛知県史別編窯業 2』

   ［京信系陶器］畑名英二　2007「第二節　信楽焼の編年と技法」『続・信楽焼の考古学的研究』

   ［備前焼］乗岡実　2000「備前焼擂鉢の編年について」『第 3 回中近世備前焼研究会資料』中近世備前焼研究会

   ［須佐焼］佐伯昌俊　2010「近世須佐焼に関する一考察」『山口考古第 30 号』山口考古学会

   ［焙烙］難波洋三　1992「徳川氏大坂城期の焙烙」『難波宮址の研究　第九』大阪市文化協会

   ［焼塩壺］田中一廣　1991「泉州名産　焼塩壺」『関西近世考古学研究Ⅱ』関西近世考古学研究会

   ［軒丸瓦・軒平瓦］花谷浩　2017「出雲における中近世の瓦と松江城築城期の瓦」『松江市史研究 8 号』松江市
7. 註と引用・参考文献は各章末に掲載した。
8. 本報告で使用する近世の時期区分は、堀尾期・京極期・松平期を採用して記述した箇所が含まれている。これは一般的な区分とは異なるが、松江城下町遺跡を解釈する上で設定した区分である。

   堀尾期…堀尾氏が松江城築城および城下町建設を開始したとされる 1607(慶長 12) 年前後から 1633(寛永 10) 年

   京極期…京極氏が藩主となり統治していた 1634(寛永 11) 年から 1637(寛永 14) 年

   松平期…松平氏が藩主となり統治していた 1638(寛永 15) 年から 1871(明治 4) 年
9. 掲載した遺構図の縮尺は、各図に縮率とスケールを配した。遺物実測図の縮率は原則、陶磁器・土師器は 1/3、木製品・瓦は 1/4、金属製品・石製品・銭貨は 1/2 とした。
10. 陶器と磁器を区別するために陶器の断面は白ヌキ、磁器の断面は黒塗りで示した。また、陶磁器の施釉範囲 (鉄釉・青磁釉など)、漆塗り、土師器の油煙痕、瓦の断面は網掛けで示した。

目　次

例　言
凡　例

第１章　調査に至る経緯と経過 …… 1
第１節　調査に至る経緯 …… 1
第２節　調査の方法 …… 2
第３節　報告書の作成と経過 …… 5

第２章　位置と環境 …… 7
第１節　地理的環境 …… 7
第２節　松江平野周辺の微地形 …… 8
第３節　歴史的環境 …… 9

第３章　調　査 …… 13
第１節　第 1 ブロック (1-3 区)　殿町 198-7 外 …… 13
第２節　第 13 ブロック (13-2 区)　南田町 108-1 外 …… 33
第３節　第 14 ブロック (14-1 区)　南田町 101-21 外 …… 59
第４節　第 16 ブロック (16-5 区)　南田町 130-6 外 …… 81
第５節　第 16 ブロック (16-6 区)　南田町 134-1 外 …… 103

第４章　自然科学分析 …… 185
松江城下町遺跡における動物資源利用 …… 185

第５章　総　括 …… 193
第１節　はじめに …… 193
第２節　松江城下町遺跡の地層 …… 198
第３節　指標遺跡における遺構と遺物の検討 …… 203
第４節　松江城下町遺跡の陶磁器の消長 …… 214
第５節　松江城下町遺跡の変遷 …… 216
第６節　結語 …… 231

写 真 図 版
報告書抄録

挿図目次

第 1 図　城山北公園線標準断面図 …… 1
第 2 図　調査地位置図 (城山北公園線) …… 1
第 3 図　調査ブロック配置図 …… 2
第 4 図　報告書掲載箇所一覧 …… 6
第 5 図　松江平野の微地形分類図 …… 8
第 6 図　中世以降の城館跡・遺跡位置図 …… 9
第 7 図　富田城と松江城下の位置 …… 11
第 8 図　堀尾期松江城下町絵図 …… 12
第 9 図　第 1 ブロック本調査区配置図 …… 14
第 10 図　1-3 区土層図 …… 15
第 11 図　第 1 遺構面平面図 …… 16
第 12 図　SD01 平面図・断面図 …… 17
第 13 図　SD01 出土遺物 …… 17
第 14 図　第 2 遺構面平面図 …… 18
第 15 図　SE01 平面図・断面図 …… 19
第 16 図　SE01 底板・木枠下段板材 (部分) 実測図 …… 19
第 17 図　SE01 出土遺物 …… 20
第 18 図　第 2 面遺構面遺構外出土遺物 …… 21
第 19 図　第 3 遺構面平面図 …… 22
第 20 図　SS01 平面図・断面図 …… 23
第 21 図　第 3 遺構面遺構外出土遺物 …… 23
第 22 図　第 4 遺構面平面図 …… 24
第 23 図　SD02 平面図・断面図 …… 25
第 24 図　第 1 ブロック立会調査地点位置図 …… 26
第 25 図　堀尾期松江城下町絵図 …… 27
第 26 図　寛永年間松江城家敷町之図 …… 28
第 27 図　出雲国松江城絵図 …… 28
第 28 図　松江城絵図 …… 28
第 29 図　松平期松江城下町絵図 …… 29
第 30 図　1-3 区遺構変遷図 …… 30
第 31 図　上水桶の構造 …… 31
第 32 図　第 13 ブロック本調査区配置図 …… 34
第 33 図　13-2 区土層図 …… 35
第 34 図　第 1 遺構面平面図 …… 36
第 35 図　SE01 平面図・断面図 …… 37
第 36 図　SE01 出土遺物 …… 37
第 37 図　SD02 平面図・断面図 …… 38
第 38 図　SK01 平面図・断面図 …… 38
第 39 図　SK01 出土遺物 …… 38
第 40 図　第 1 遺構面遺構外出土遺物 …… 39
第 41 図　第 2 遺構面平面図 …… 40
第 42 図　SD03 平面図・断面図 …… 40
第 43 図　SD03 出土遺物 …… 40
第 44 図　SK09 平面図・断面図 …… 41
第 45 図　SK09 出土遺物 …… 42
第 46 図　SK14 平面図・断面図 …… 43
第 47 図　SK14 出土遺物 …… 43
第 48 図　砂層出土遺物 …… 44
第 49 図　第 3 遺構面平面図 …… 45
第 50 図　SB01 平面図・断面図 …… 46
第 51 図　SD04 平面図・断面図 …… 47
第 52 図　SD04 出土遺物 …… 48
第 53 図　第 3 遺構面遺構外出土遺物 …… 49
第 54 図　第 4 遺構面平面図 …… 49
第 55 図　SD05 平面図・断面図 …… 50
第 56 図　第 13 ブロック立会調査地点位置図 …… 51
第 57 図　堀尾期松江城下町絵図 …… 52
第 58 図　寛永年間松江城家敷町之図 …… 53
第 59 図　出雲国松江城絵図 …… 53
第 60 図　松江城絵図 …… 53
第 61 図　松平期松江城下町絵図 …… 54
第 62 図　13-2 区遺構変遷図 …… 56
第 63 図　堀尾期絵図 (第 13 ブロック周辺) …… 57
第 64 図　京極期絵図 (第 13 ブロック周辺) …… 57
第 65 図　第 14 ブロック本調査区配置図 …… 59
第 66 図　14-1 区土層図 …… 61
第 67 図　第 1 遺構面平面図 …… 62
第 68 図　SS01 平面図・断面図 …… 62
第 69 図　SK01 平面図・断面図 …… 63
第 70 図　SK01 出土遺物 (1) …… 64
第 71 図　SK01 出土遺物 (2) …… 65
第 72 図　第 1 遺構面遺構外出土遺物 (1) …… 66
第 73 図　第 1 遺構面遺構外出土遺物 (2) …… 67
第 74 図　第 2 遺構面平面図 …… 68
第 75 図　SG01 平面図・断面図 …… 69
第 76 図　SG01 出土遺物 …… 69
第 77 図　SK02 平面図・断面図 …… 70
第 78 図　SK02 出土遺物 …… 70
第 79 図　第 2 遺構面遺構外出土遺物 (1) …… 70
第 80 図　第 2 遺構面遺構外出土遺物 (2) …… 71
第 81 図　第 3 遺構面平面図 …… 71
第 82 図　SK03・04 平面図・断面図 …… 72
第 83 図　第 14 ブロック立会調査地点位置図 …… 73
第 84 図　MJR378 調査区配置図・堀変遷図 …… 75
第 85 図　京極期絵図 (南田町周辺) …… 75
第 86 図　MJR378 土層断面柱状図 …… 75
第 87 図　MJR378 出土遺物 …… 75
第 88 図　堀尾期松江城下町絵図 …… 76
第 89 図　寛永年間松江城家敷町之図 …… 77
第 90 図　出雲国松江城絵図 …… 77
第 91 図　松江城絵図 …… 77
第 92 図　松平期松江城下町絵図 …… 78
第 93 図　14-1 区遺構変遷図 …… 79
第 94 図　第 16 ブロック本調査区配置図 …… 82
第 95 図　16-5 区土層図 …… 83
第 96 図　第 1 遺構面平面図 …… 84
第 97 図　SD01 平面図・断面図 …… 85
第 98 図　SD02 平面図・断面図 (部分) …… 85
第 99 図　SK01・02 平面図・断面図 …… 86
第 100 図　SK01 出土遺物 …… 86
第 101 図　SK03 平面図・断面図 …… 87
第 102 図　SK03 出土遺物 …… 87
第 103 図　第 1 遺構面遺構外出土遺物 …… 88
第 104 図　第 2 遺構面平面図 …… 88
第 105 図　SK04 平面図・断面図 …… 89
第 106 図　SK04 出土遺物 …… 89
第 107 図　SK05 平面図・断面図 …… 89
第 108 図　SK05 出土遺物 …… 90
第 109 図　第 2 遺構面遺構外出土遺物 …… 90
第 110 図　第 3 遺構面平面図 …… 91
第 111 図　SB01 平面図・断面図 …… 92
第 112 図　SK06 平面図・断面図 …… 93
第 113 図　SK06 出土遺物 …… 93
第 114 図　第 3 遺構面遺構外出土遺物 …… 94
第 115 図　第 4 遺構面平面図 …… 95
第 116 図　第 16 ブロック立会調査地点位置図 …… 96

第 117 図　堀尾期松江城下町絵図 ……97
第 118 図　寛永年間松江城家敷町之図 ……98
第 119 図　出雲国松江城絵図 ……98
第 120 図　松江城絵図 ……98
第 121 図　松平期松江城町絵図 ……99
第 122 図　16-5 区遺構変遷図 …… 100
第 123 図　第 16 ブロック本調査区配置図 …… 104
第 124 図　16-6 区土層図 …… 105
第 125 図　第 1 遺構面平面図 …… 106
第 126 図　SP01 平面図・断面図 …… 107
第 127 図　SP01 出土遺物 …… 107
第 128 図　第 1 遺構面遺構外出土遺物 …… 107
第 129 図　第 2 遺構面平面図 …… 108
第 130 図　SE01 平面図・断面図 …… 109
第 131 図　SK01・02 平面図・断面図 …… 109
第 132 図　SK03 平面図・断面図 …… 109
第 133 図　SK03 出土遺物 (1) …… 110
第 134 図　SK03 出土遺物 (2) …… 111
第 135 図　第 2 遺構面遺構外出土遺物 …… 111
第 136 図　第 3-1 遺構面平面図 …… 112
第 137 図　SB01(新) 平面図・断面図 …… 115
第 138 図　SX01 平面図・断面図 …… 115
第 139 図　SX01 出土遺物 (曲物 1) …… 115
第 140 図　SX01 出土遺物 (曲物 2) …… 116
第 141 図　SX02 平面図・断面図 …… 116
第 142 図　SX02 出土遺物 (曲物・折敷) …… 117
第 143 図　SD01 平面図・断面図 …… 118
第 144 図　SD02(新) 平面図・断面図 …… 118
第 145 図　SA01 平面図・断面図 …… 119
第 146 図　SA02 平面図・断面図 …… 119
第 147 図　SK04 平面図・断面図 …… 120
第 148 図　SK04 出土遺物 (1) …… 121
第 149 図　SK04 出土遺物 (2) …… 122
第 150 図　SK05 平面図・断面図 …… 123
第 151 図　SK05 出土遺物 (1) …… 123
第 152 図　SK05 出土遺物 (2) …… 124
第 153 図　SK06 平面図・断面図 …… 125
第 154 図　SK06 出土遺物 (1) …… 127
第 155 図　SK06 出土遺物 (2) …… 128
第 156 図　SK06 出土遺物 (3) …… 129
第 157 図　SK06 出土遺物 (4) …… 130
第 158 図　SK07 平面図・断面図 …… 131
第 159 図　SK07 出土遺物 …… 131
第 160 図　SK08 平面図・断面図 …… 132
第 161 図　SK08 出土遺物 …… 132
第 162 図　第 3-1 遺構面遺構外出土遺物 (1) …… 134
第 163 図　第 3-1 遺構面遺構外出土遺物 (2) …… 135
第 164 図　第 3-2 遺構面平面図 …… 136
第 165 図　島状整地平面地形測量図・土層断面図 …… 137
第 166 図　SB01(古) 平面図・断面図 …… 139
第 167 図　SB02 平面図・断面図 …… 140
第 168 図　SX03 平面図・断面図 …… 141
第 169 図　SD02(古) 平面図・断面図 …… 141
第 170 図　SD03・04 平面図・断面図 …… 142
第 171 図　SD04 出土遺物 (1) …… 143
第 172 図　SD04 出土遺物 (2) …… 144
第 173 図　SD04 出土遺物 (3) …… 145
第 174 図　SA03 平面図・断面図 …… 146
第 175 図　SK09 平面図・断面図 …… 146
第 176 図　SK09 出土遺物 …… 147
第 177 図　第 3-2 遺構面遺構外出土遺物 …… 149
第 178 図　第 4 遺構面平面図 …… 150
第 179 図　SN01 平面図・断面図 …… 152
第 180 図　SN01 出土遺物 (1) …… 154
第 181 図　SN01 出土遺物 (2) …… 155
第 182 図　第 4 遺構面遺構外出土遺物 (1) …… 156
第 183 図　第 4 遺構面遺構外出土遺物 (2) …… 157
第 184 図　第 5 遺構面平面図 …… 158
第 185 図　SK10 平面図・断面図 …… 158
第 186 図　SK11 平面図・断面図 …… 159
第 187 図　SK11 出土遺物 (1) …… 159
第 188 図　SK11 出土遺物 (2) …… 160
第 189 図　第 5 遺構面遺構外出土遺物 …… 161
第 190 図　第 6 遺構面平面図 …… 162
第 191 図　堀尾期松江城下町絵図 …… 163
第 192 図　寛永年間松江城家敷町之図 …… 164
第 193 図　出雲国松江城絵図 …… 164
第 194 図　松江城絵図 …… 164
第 195 図　松平期松江城下町絵図 …… 165
第 196 図　16-6 区遺構変遷図 (1) …… 166
第 197 図　16-6 区遺構変遷図 (2) …… 167
第 198 図　16-6 区遺構変遷図 (3) …… 168
第 199 図　16-6 区遺構変遷図 (4) …… 169
第 200 図　16-6 区遺構変遷図 (5) …… 171
第 201 図　16-6 区遺構変遷図 (6) …… 171
第 202 図　16-6 区遺構変遷図 (7) …… 172
第 203 図　動物遺存体出土地点 …… 185
第 204 図　貝類の大きさ組成 …… 187
第 205 図　城山北公園線位置図 …… 193
第 206 図　城山北公園線 (拡幅工事前) …… 194
第 207 図　城山北公園線 (拡幅工事後) …… 195
第 208 図　絵図・地図に見る城山北公園線の変遷 …… 197
第 209 図　松江城下町遺跡基本土層模式図 …… 199
第 210 図　城山北公園線東西土層横断図 …… 202
第 211 図　指標遺跡の位置と遺構面の区分 …… 205
第 212 図　素掘りの大溝 (区画境) 検出地点 …… 217
第 213 図　区画境大溝検出地点 (第 3 ブロック) …… 220
第 214 図　屋敷境溝の変遷 …… 221
第 215 図　石組水路断面模式図 …… 225
第 216 図　石組水路と道路面 (第 5・6 ブロック) …… 226
第 217 図　井戸の種類 …… 227
第 218 図　町屋 (米子町) の変遷 …… 228
第 219 図　町屋 (米子町) の出土遺物 …… 229
第 220 図　近代の遺物 …… 230

挿表目次

表 1　遺構面の設定区分 …… 2
表 2　発掘調査報告書刊行経過一覧 …… 5
表 3　主な山城の変遷 …… 10
表 4　松江藩主の時期区分 …… 11
表 5　第 1 ブロック本発掘調査箇所 …… 13
表 6　第 1 ブロック立会調査箇所一覧 (平成 25 ～ 29 年度) …… 26
表 7　第 13 ブロック本発掘調査箇所 …… 33
表 8　第 13 ブロック立会調査箇所一覧 (平成 28 ～ 29 年度) …… 51
表 9　第 14 ブロック本発掘調査箇所 …… 58
表 10　第 14 ブロック立会調査箇所一覧 (平成 26 年度) …… 73
表 11　第 16 ブロック本発掘調査箇所 …… 81
表 12　第 16 ブロック立会調査箇所一覧 (平成 25 ～ 26 年度) …… 96
表 13　第 16 ブロック本調査箇所 …… 103
表 14　松江城下町遺跡における鉄球出土地点一覧 …… 172
表 15　貝類の種類と生息環境 …… 187
表 16　魚類の種類と生息環境 …… 188
表 17　鳥類・哺乳類・爬虫類の種類と生息環境 …… 190
表 18　基本層序の呼称と層位間の整合性 …… 198
表 19　城山北公園線沿線の遺構面検出標高一覧 …… 203
表 20　指標遺跡の遺構面と検出遺構 …… 206
表 21　指標遺跡の時期区分の基準と遺跡間層序の対応関係 …… 206
表 22　指標遺跡の時期区分と検出遺構の対応関係 …… 208
表 23　遺構面層序と出土陶磁器の対応関係 …… 213
表 24　A 遺跡　松江城下町遺跡 (殿町 344 外) 産地別陶磁器組成 …… 213
表 25　B 遺跡　松江城下町遺跡 (母衣町 180-28・29) 産地別陶磁器組成 …… 213
表 26　C 遺跡　松江城下町遺跡 (南田町 134-11 外) 産地別陶磁器組成 …… 213
表 27　松江城下町遺跡における陶磁器の消長 (産地別) …… 215
表 28　素掘りの大溝 (区画境大溝) 検出地点一覧表 …… 219
表 29　指標遺跡と松江城下町遺跡の時期区分および遺構面年代の対応関係 …… 231

図版目次

本文中写真

写真 1　松江城と城山北公園線 …… 3
写真 2　調査地周辺の航空写真 …… 7
写真 3　MJR362 石組水路断面 …… 26
写真 4　砂層検出状況 …… 44
写真 5　砂層堆積状況 …… 44
写真 6　MJR362 大溝西肩土層断面 …… 51
写真 7　城山北公園線 …… 197
写真 8　城山北公園線 …… 197
写真 9　水田跡と耕作面に残る足跡 …… 216
写真 10　17 世紀初頭の島状整地 …… 222
写真 11　障子堀 …… 223
写真 12　城下町東端の土手 …… 223
写真 13　与力屋敷の礎石建物跡 …… 224
写真 14　地下室 …… 224
写真 15　長屋門跡 …… 225
写真 16　石組水路 …… 225
写真 17　廃棄土坑 …… 227
写真 18　大工道具 …… 229
写真 19　細工品の原材 …… 229
写真 20　建物解体に伴う瓦の一括廃棄 …… 230
写真 21　転用廃棄土坑 …… 230

写真図版

図版 1　1　調査地遠景 (南東から)
　　2　第 1 遺構面 完掘後 (北から)
図版 2　1　第 2 遺構面 完掘後 (北から)
　　2　木枠井戸 SE01 検出状況 (南西から)
　　3　SE01 段下げ状況 (南東から)
　　4　SE01 断面 (北から)
　　5　SE01 掘り方埋土 (北東から)
図版 3　1　第 3 遺構面 完掘後 (北から)
　　2　石列 SS01(北から)
　　3　SS01 塀基礎部分 (西から)
　　4　素掘りの大溝 SD02 断面 (北西から)
図版 4　1　調査地調査前全景 (南西から)
　　2　基本土層断面 (南西から)
図版 5　1　第 1 遺構面 完掘後 (北東から)
　　2　石積井戸 SE01(南西から)
　　3　溝 SD02(北から)
　　4　土坑 SK01 完掘状況 (南西から)
　　5　山土造成土中出土遺物 (第 40 図 -2)
図版 6　1　第 2 遺構面 完掘後 (北東から)
　　2　溝 SD03(北東から)

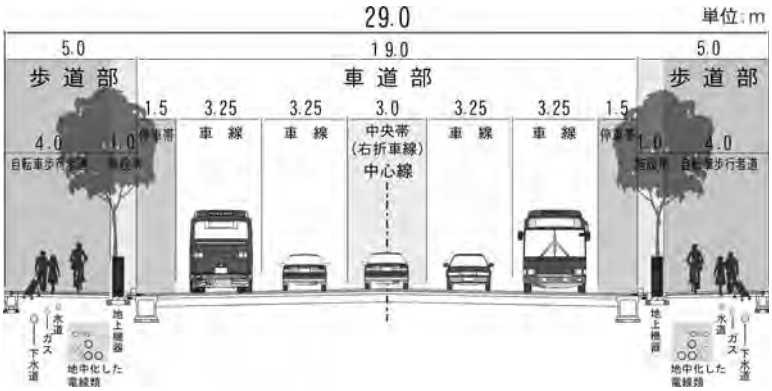
図版 7　1　石積土坑 SK09 完掘状況 (西から)
2　SK09 上部の竹囲い検出状況 (北東から)
3　土坑 SK14 完掘状況 (東から)
4　第 2 遺構面下位の砂層の落ち込み (南から)
図版 8　1　第 3 遺構面 完掘後 (北東から)
2　SX01 土盛りの痕跡 (北から)
3　建物跡 SB01(北西から)
4　素掘りの大溝 SD04 西側断面 (南から)
5　SD04 東側断面 (南から)
図版 9　1　第 4 遺構面 完掘後 (北東から)
2　素掘りの大溝 SD05 完掘状況 (北東から)
3　SD05 埋土断面 (南東から)
4　大溝埋め戻しの作業単位 (南から)
図版 10　1　調査地調査前全景 (西から)
2　14-1 区基本土層断面 (南東から)
図版 11　1　第 1 遺構面 完掘後 (南西から)
2　石列 SS01(西から)
3　土坑 SK01 掘り下げ状況 (南から)
4　SK01 完掘状況 (南東から)
図版 12　1　第 2 遺構面 完掘後 (南西から)
2　SG01 昇降部分 (南から)
3　池 SG01 完掘状況 (南から)
4　土坑 SK02 完掘状況 (南東から)
5　砂層堆積状況 (南から)
図版 13　1　第 3 遺構面 完掘後 (東から)
2　土坑 SK03 完掘状況 (北から)
3　土坑 SK04 完掘状況 (西から)
4　第 4 遺構面～自然堆積層 断面 (西から)
図版 14　1　調査地調査前全景 (南から)
2　16-5 区基本土層断面 (西から)
図版 15　1　第 1 遺構面 完掘後 (南東から)
2　溝 SD01・02(南から)
3　埋桶土坑 SK01(東から)
4　埋桶土坑 SK02(東から)
5　土坑 SK03 完掘状況 (西から)
図版 16　1　第 2 遺構面 完掘後 (南東から)
2　土坑 SK04 完掘状況 (北東から)
3　土坑 SK05 完掘状況 (北から)
4　柱穴 (柱・根石)
5　柱穴 (柱の抜き取り痕)
図版 17　1　第 3 遺構面 完掘後 (南東から)
2　掘立柱建物跡 SB01(北から)
図版 18　1　柱穴 SP01(西から)
2　柱穴 SP03(礎盤石)
3　柱穴 SP04(礎盤石)
4　土坑 SK06 完掘状況 (南から)
5　第 4 遺構面 完掘後 (南東から)
図版 19　1　調査地調査前全景 (西から)
2　16-6 区基本土層断面 (南西から)
図版 20　1　島状盛土部分の土層断面 (西から)
2　屋敷境 SD03・04 付近北壁土層断面 (南から)
3　第 1 遺構面 完掘後 (北西から)
4　鉄球埋納遺構 SP01 半截 (南から)
5　SP01 鉄球出土状況
図版 21　1　第 2 遺構面 完掘後 (北西から)
2　石積井戸 SE01(北から)
3　土坑 SK01 完掘状況 (西から)
4　土坑 SK02 完掘状況 (西から)
5　土坑 SK03 完掘状況 (北西から)
図版 22　1　第 3-1 遺構面 検出状況 (南東から)
2　第 3-1 遺構面 完掘後 (南東から)
図版 23　1　礎石建物跡 SB01(新) 建て替え後 (南から)
2　炭化層に含まれる建築部材 (東から)
3　表口部分の三和土断面 (西から)
4　表口周辺の礫敷と石列 (北西から)
5　竹木舞 検出状況 (南東から)
図版 24　1　曲物埋納遺構 SX01(西から)
2　曲物埋納遺構 SX02(北から)
図版 25　1　溝 SD01(東から)
2　溝 SD02(新) 石組検出状況 (南から)
3　土坑 SK04 完掘状況 (南西から)
4　土坑 SK05 完掘状況 (南から)
5　土坑 SK06 完掘状況 (南東から)
6　土坑 SK07・08 完掘状況 (東から)
図版 26　1　第 3-2 遺構面 完掘後 (南西から)
2　第 3-2 遺構面 完掘後 (南西から)
図版 27　1　礎石建物跡 SB01 建て替え前 (南から)
2　SB01(古)(北から)
図版 28　1　掘立柱建物跡 SB02(北から)
2　柱穴 SP05(東から)
3　祭祀遺構 SX03(西から)
4　第 3-2 遺構面造成土中の葦敷 (北から)
5　溝 SD02(古)(南から)
6　溝 SD03・04(北から)
図版 29　1　第 4 遺構面 完掘後 (南東から)
2　第 4 遺構面 完掘後 (南東から)
図版 30　1　第 5 遺構面 完掘後 (北東から)
2　第 6 遺構面 完掘後 (北東から)
図版 31　第 1 ブロック (1-3 区) 出土遺物
図版 32　第 13 ブロック (13-2 区) 出土遺物
図版 33　第 13 ブロック (13-2 区) 出土遺物
図版 34　第 13 ブロック (13-2 区)・
第 14 ブロック (14-1 区) 出土遺物
図版 35　第 14 ブロック (14-1 区) 出土遺物
図版 36　第 14 ブロック (14-1 区) 出土遺物
図版 37　第 16 ブロック (16-5 区) 出土遺物
図版 38　第 16 ブロック (16-5 区)・
第 16 ブロック (16-6 区) 出土遺物
図版 39　第 16 ブロック (16-6 区) 出土遺物
図版 40　第 16 ブロック (16-6 区) 出土遺物
図版 41　第 16 ブロック (16-6 区) 出土遺物
図版 42　第 16 ブロック (16-6 区) 出土遺物
図版 43　第 16 ブロック (16-6 区) 出土遺物
図版 44　第 16 ブロック (16-6 区) 出土遺物
図版 45　第 16 ブロック (16-6 区) 出土遺物
図版 46　第 16 ブロック (16-6 区) 出土遺物
図版 47　第 16 ブロック (16-6 区) 出土遺物
図版 48　第 16 ブロック (16-6 区) 出土遺物
図版 49　第 16 ブロック (16-6 区) 出土遺物
図版 50　第 16 ブロック (16-6 区) 出土遺物
図版 52　第 16 ブロック (16-6 区) 出土遺物
図版 53　第 16 ブロック (16-6 区) 出土遺物
図版 54　第 16 ブロック (16-6 区) 出土遺物
図版 55　第 16 ブロック (16-6 区) 出土遺物
図版 56　動物遺存体 (1)
図版 57　動物遺存体 (2)
図版 58　動物遺存体 (3)
図版 59　動物遺存体 (4)

第１章　調査に至る経緯と経過

第１節　調査に至る経緯

国宝松江城本丸の南東に位置する大手前 (殿町) から東の南田町に向かう城山北公園線 (主要地方道松江鹿島美保関線の一部および県道本庄福富松江線の一部、通称：大手前通り) は、すでに 4 車線化されている宍道湖大橋と国道 485 号線 (通称:くにびき道路) を結ぶ松江市内循環線の一部として、東西を連結させる重要な幹線道路となっている。現在の城山北公園線は 2 車線あるものの、歩道が狭小で右折レーンが確保されていないなど、幹線として十分な機能が保たれていなかった。

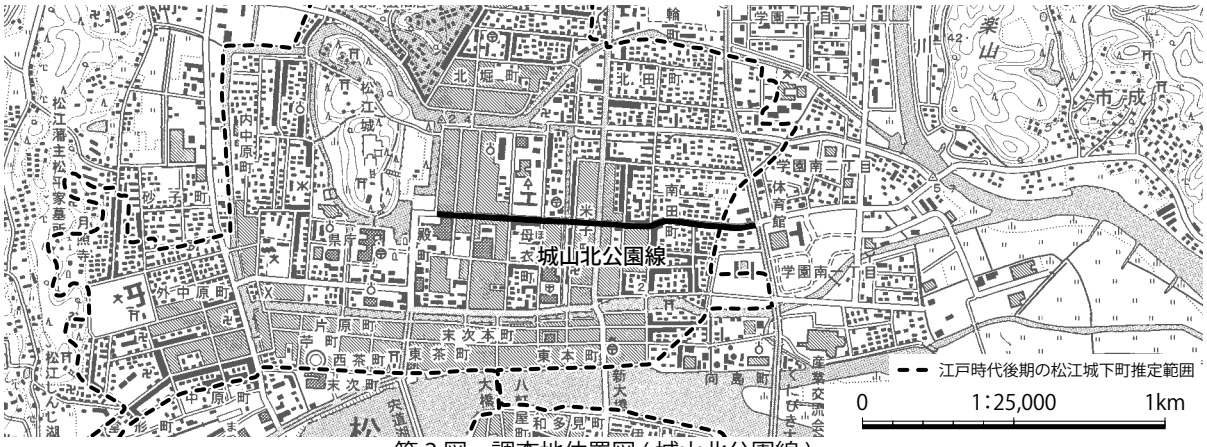
このため島根県では、島根県民会館 (殿町) から国道 485 号線 (学園南) までの東西 1,047 m区間を「3.3.30 号　都市計画道路　城山北公園線」として、2 車線の車道の 4 車線化 (車道部：整備前車道幅員 8 ～ 10 m→整備後車道幅員 19 m) と両側の歩道 (歩道部片側：整備前歩道幅員 1.5 m→整備後歩道幅員 5 m) の道路幅員南北 29 mを整備するために、交通渋滞の緩和と歩行者の安全確保を目的とした道路拡幅工事を行うことになった (第 1 図)。



第 1 図　城山北公園線標準断面図

工事は、市道北田大手前線から市道南田南北線までの区間 (殿町・母衣町・米子町・南田町地内) を「第 1 工区」とし、市道南田南北線から国道 485 号線までの区間 (南田町・学園南地内) を「第 2 工区」として実施している。工事範囲について、第 1 工区は東西全長 620 m、城山北公園線北側への拡張は約 10 ～ 13 m・同線南側への拡張は約 4 ～ 7 mである。第 2 工区は東西全長 427 m、城山北公園線北側への拡張は約 10 ～ 13 m・同線南側への拡張は約 4 ～ 18 mである (第 2 図)。

道路拡幅範囲は、近世城下町の範疇にあたるものと考えられるため、松江市教育委員会では本工事に先立って用地買収の完了した地点から随時試掘調査を実施し、遺跡が確認された地点については文化財調査を行うこととしている。



第 2 図　調査地位置図 (城山北公園線)

第２節　調査の方法

第１項　調査区の設定と遺構面の認定

現地調査は、事前の試掘調査成果を踏まえて、遺跡が確認された地点については本発掘調査を行っている。立会調査は、道路拡幅工事のうち電線共同溝埋設・上下水道管やガス管の管路掘削および敷設・道路側溝の撤去および敷設・土壌改良など、工事の進捗状況に併せて断続的に発掘調査を行っており、その他の掘削工事が発生した狭小範囲や道路横断部分なども立会調査で対応している。

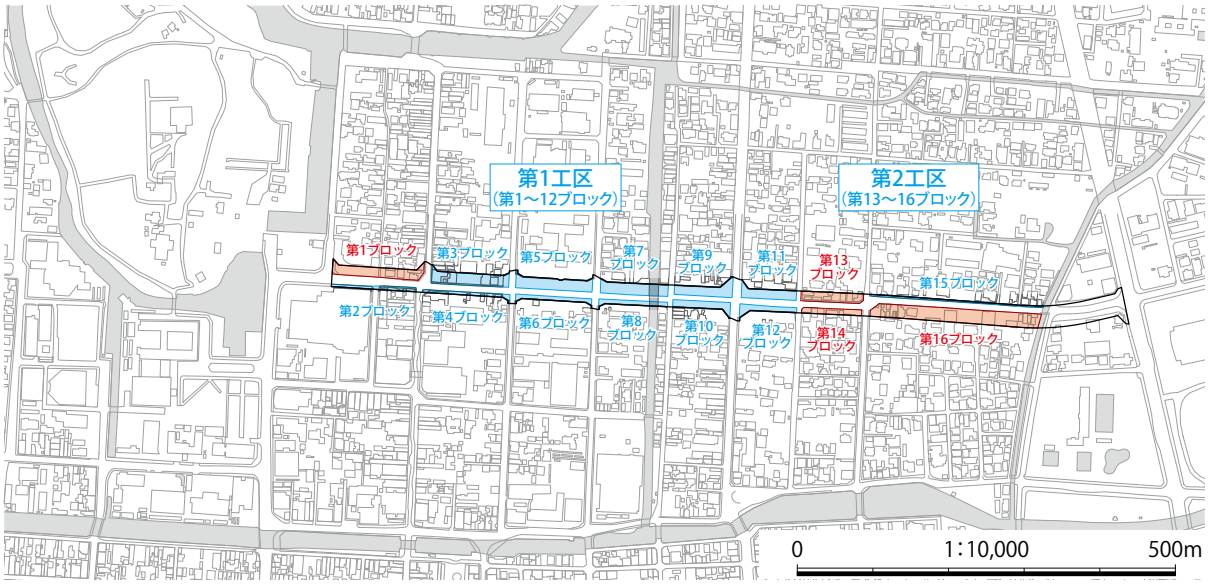
発掘調査成果の報告については近世城下町の屋敷配置等を考慮して、便宜的に街区を城山北公園線の西側から順に１～16までブロック分けを行い、この区分を用いて報告書を刊行している。これにより、第１工区は第１～12ブロック、第２工区は第13～16ブロックの区分となっている（第３図）。

本報告の第３章に掲載した調査対象地は、第１工区内では第１ブロックに所在する松江城下町遺跡（殿町198-7外）、第２工区内では第13ブロックに所在する松江城下町遺跡（南田町108-1外）・第14ブロックに所在する松江城下町遺跡（南田町101-21外）・第16ブロックに所在する松江城下町遺跡（130-6外）と松江城下町遺跡（南田町134-1外）で、これまでに未調査地や未報告となっていた５遺跡を扱った。これらの遺跡の位置は、江戸時代の絵図や文献史料[(1)]から武家屋敷が存在していた場所に比定され、調査区はいずれも屋敷地の表口あるいは側面部分に該当している。

遺構面は、事前の試掘調査成果をもとに、現地調査時に人為的な造成面・生活面（機能面や廃絶面）・遺構の掘り込み面などを基準として認定している。現地調査では、上層から下層へ検出した順に「第１遺構面」「第２遺構面」…「第６遺構面」と呼称しており、本報告でもそれを踏襲して、上層から下層の遺構面順に各遺跡の発掘調査成果について報告を行う（表1[(2)]）。

表１　遺構面の設定区分

層位	調査時・本報告共通	遺構面の把握
上層	現地表面	現代の生活面
↑	第１遺構面	幕末～近代の生活面
	第２遺構面	↑
	第３遺構面	江戸時代の生活面
	第４遺構面	↓
↓	第５遺構面	城下町初期造成面
下層	第６遺構面	旧地表面



第３図　調査ブロック配置図

第２項　本調査の手順

城山北公園線沿線の調査対象地は、発掘調査開始以前には公共施設・宅地・店舗・駐車場などが建ち並んでいた場所にあたる。そのため、現地調査で掘削を行う際に、表土以下から上層の遺構面までの間には、部分的に近現代建物の基礎が残っている箇所や大規模な撹乱を受けている箇所が確認されることがある。また、表土以下から上層の遺構面までの間に検出した遺構の中には、撹乱層を取り除いたところで検出した任意の遺構面を設定し、厳密には生活面ではない部分を遺構面としたものが含まれる。特に第 1 遺構面で検出している遺構には、撹乱を免れた遺構や第 1 遺構面よりも上層から掘り込まれた遺構の底部を図示している可能性もある。第 1 遺構面以下の下層の遺構については、低湿地に築かれた城下町であるためか遺構の遺存状態が良好な場合が多く、サブトレンチを設定して層序を把握した後に、面的な遺構検出が可能な遺跡も存在している。

撹乱層の除去は、バケットに平爪を装着したバックホーを用いて掘削を行い、以下は人力により遺構面まで掘り下げて精査および遺構検出を実施した。遺構検出は、鋤簾により精査した後、さらに草削りを用いて遺構検出に努めた。遺構の掘り下げは主に移植ゴテにより実施している。

遺構内の調査は、大型土坑や溝等は土層観察用畦 (ベルト) を設置し、柱穴等は平面的に全体を検出し終えた後に、柱痕跡の有無や遺構が切り合うものについては先後関係を確認し、その後の段階で半截して断面図を作成した。

調査区および遺構の平面測量にはトータルステーションを用い、その測量図と遺構を照合しながら平面図をおこしてレベルを記入した。方位は、世界測地系に準拠した座標北を基準としている。土層図はレベルを用いて手測りにより縮尺 1/10 ～ 1/20 で作成し、土色は新版標準土色帖を使用して注記を行った。遺物の取り上げについては、トータルステーションとレベルを併用した。

遺構写真の記録は、デジタル一眼レフカメラ (Nikon D3300) とフルサイズデジタル一眼レフカメラ (Nikon D610) を主に使用し、フィルムカメラによる 35㎜モノクロ・35㎜リバーサルを援用して撮影した。なお、原則として報告書に掲載が見込まれるものについては 6 × 7 判フィルムカメラによる撮影を行った。各調査区の全景写真は、遺構面調査終了ごとに写真撮影用足場を用いて、高所からの撮影を実施した。

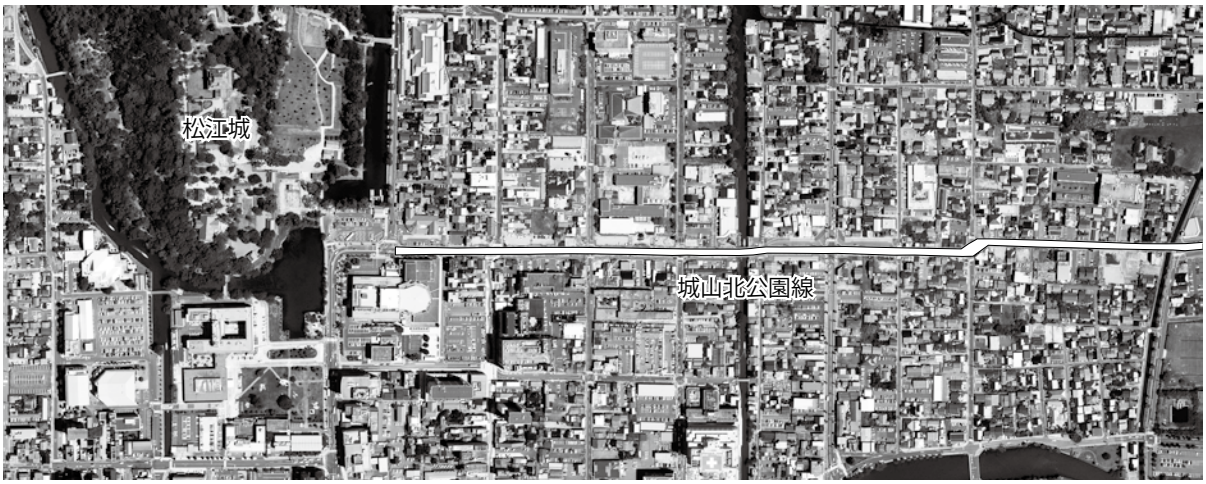


写真１　松江城と城山北公園線

第３項　松江城下町遺跡における基本層序について

松江城下町遺跡の発掘調査対象地は、江戸時代に武家地や町屋となっていた場所に位置しており、下層では城下町形成以前に堆積したと考えられる自然堆積層が見られ、その上層には人為的な活動による土層の積み重なりが観察されている。

松江城下町遺跡の基本層序は、平成 24 年度の松江城下町遺跡検討会において城下町の層序を把握する上で、上層からＣ層・Ｂ層・Ａ層・Ⅰ層・Ⅱ層・Ⅲ層の考え方が示され、これまでの発掘調査および報告ではこの提示に当てはめて層序を概観していた。今回の報告にあたって提示した基本土層は、これまでに報告されている各調査地点の土層図の中から指標となる遺跡を抽出し、改めて松江城下町遺跡の層序について再検討および再構築を行った成果をまとめたものである。本報告ではこの成果を踏まえ、土層の層相や出土する遺物の年代観などから同時期と推定できる土層を同じ層準の土層と判断し、記述していくこととする。以下に上層から下層の順で層序の概要を記す。

松江城下町は嵩上げ造成により現在の生活面の高さとなっており、現地表は松江城に近い殿町で標高約 2.00 m、松江城から東へ約 1㎞離れた南田町で標高約 1.50 mとなっている。

MJ0 層：近現代の撹乱層で、既存建物の基礎を含む (層厚は調査地点で異なる)。

MJ1 層：砂質土を主体とする盛土層で、遺構面から 19 世紀前半～後半の陶磁器類が出土する。調査地点にもよるが、上層の撹乱によって消失している場合や明治以降の盛土も含まれる。

MJ2 層：山土を主体とする嵩上げ造成による整地層で、遺構面から 18 世紀前半～後半の陶磁器類が出土している。調査地点によって山土の他に砂層や有機物層などが堆積し、細分できる地点では、上位から MJ2a 層・MJ2b 層・MJ2c 層. . .　と細分する。

MJ3 層：砂質土～シルト～粘質土を主体とする嵩上げ造成による整地層で、遺構面から 17 世紀前半～後半の陶磁器類が出土している。一部の調査地点では畠の耕作土が堆積し、細分できる地点では、上位から MJ3a 層・MJ3b 層・MJ3c 層. . .　と細分する。

MJ4 層：有機質粘土～泥炭質粘土と細砂の混合土を主体とする城下町形成当初の整地層で、松江城下町遺跡の広範囲にわたって確認できる土層である。基本的に MJ4 層の下位にある MJ5 層と MJ6 層の掘り上げ土で構成され、遺構面から 17 世紀初頭～前半の陶磁器類が出土している。城下町形成以前の旧地表面上に盛られた松江城下町の初期造成土である。

MJ5 層：城下町形成以前の旧地表面の堆積層で、MJ6 層の上面にほぼ均一の厚さで水平堆積する有機質粘土～泥炭質粘土である。末次砂州の北の水域が流水のない滞水状態の時代に堆積した自然堆積層の腐食土で、土壌の分解が進んだ黒褐色を呈する有機質粘土を MJ5a 層、土壌が未分解で茶褐色を呈する泥炭質粘土を MJ5b 層とする。一部の調査地点では、水田耕作土として使用される場所や上面にコケ類が繁茂している状況を確認している。

MJ6 層：細砂を主体とする自然堆積層で、松江市街地北部の丘陵から末次砂州の北の水域に水が流れていた時代に堆積した土層である。灰色を呈する細砂を MJ6a 層、青灰色を呈する細砂を MJ6b 層とするが、この土層は色調の違いがあるだけで同じ細粒砂層である。

これらの層序の模式図および詳細については、第 5 章第 2 節を参照されたい。

第３節　報告書の作成と経過

報告書作成にあたっては平成 29 年度から整理作業に取り掛かり、まず平成 24 年度～平成 29 年度にかけて発掘調査を実施した 5 遺跡について、遺構・遺物の検討および遺物の実測作業を行った。その後、本報告の第 5 章に掲載した総括の作成に伴い、平成 18 年度～平成 29 年度の過去 12 年間にわたって発掘調査を実施している松江城下町遺跡に関わる全ての遺構と遺物の再検討および再評価を行い、その中から指標となる遺跡の抽出作業・遺構面と検出遺構の精査・地層の把握 (連続と非連続)・基本層序の確立・陶磁器組成・松江城下町の変遷など、多岐にわたる検証を行った。

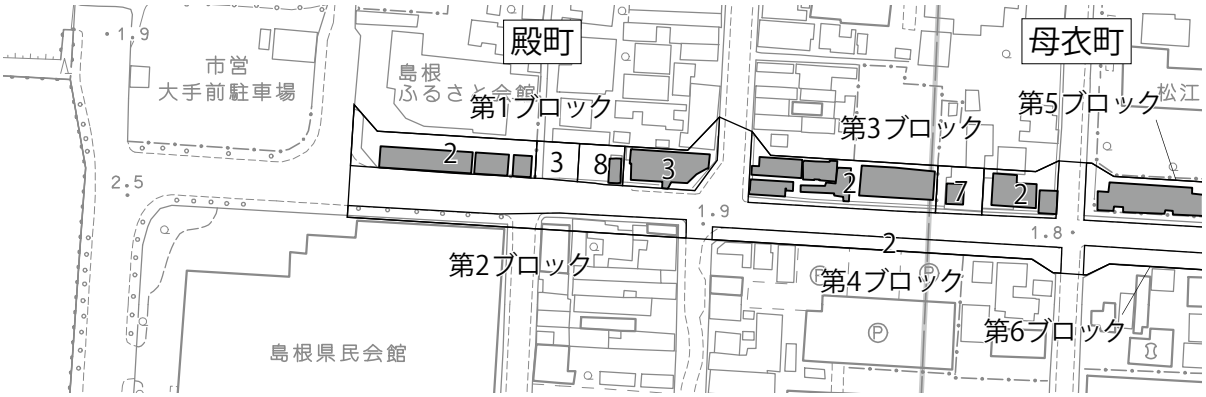
本報告に掲載した図版類は、全てデジタルデータで作成している。遺構図および遺物実測図は、原図をフラットスキャナーで取り込み (400dpi)、Adobe IllustratorCC2017 を用いてトレース作業を行うことによってデジタルデータ化した。編集にあたっては DTP 方式を採用し、図版を作成した後に Adobe InDesignCC2017 を用いて割付作業と原稿執筆を行った。

松江城下町遺跡に関連する発掘調査報告書は現在までに 12 冊刊行し、このうち城山北公園線都市計画街路事業に伴う発掘調査報告書はこれまでに 7 冊刊行しており、本書はその 8 冊目となる。[(3)] 城山北公園線都市計画事業に伴う発掘調査報告書の刊行経過は以下の表 2 に示したとおりである。

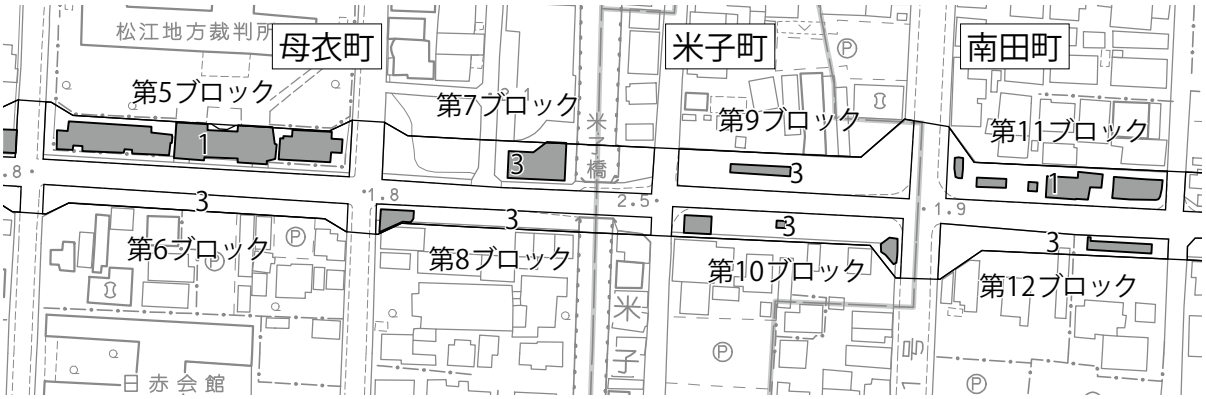
城山北公園線都市計画事業に伴う発掘調査報告書には巻次を配しており、これまでに報告書を刊行した地点を第 4 図に図示した。図中に記載した「1 ～ 8」はシリーズ番号である。なお、第 2 ブロックと第 15 ブロックは、工事の進捗状況に併せて全て立会調査で対応している。いずれも調査面積が狭小で、松江城下町遺跡において主要な位置付けとなる遺構を確認していないことから未報告箇所となるが、調査で得られた測量データ・出土遺物・写真等の資料は松江市教育委員会で保管している。

表 2　発掘調査報告書刊行経過一覧

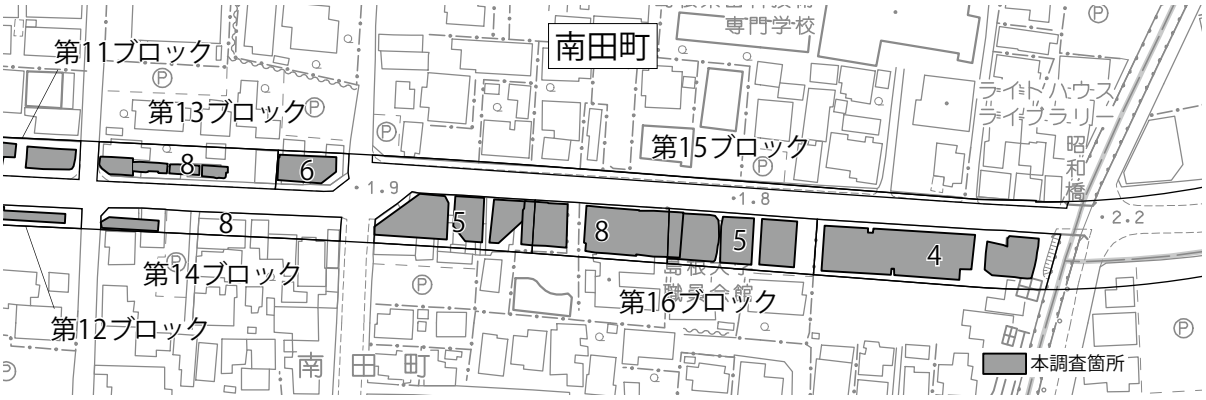
刊行年度	巻次・シリーズ番号	工区	掲載ブロック	調査地	主な検出遺構
平成 23 年度	『市 148』「城山 1」	第 1 工区	第 5 ブロック	母衣町地内	屋敷境・石積土坑・廃棄土坑
			第 11 ブロック	南田町地内	石積土坑・廃棄土坑
平成 24 年度	『市 154』「城山 2」	第 1 工区	第 1 ブロック	殿町地内	製材関連遺構・廃棄土坑
			第 3 ブロック	殿町・母衣町地内	区画境・石積土坑・廃棄土坑
			第 4 ブロック	殿町・母衣町地内	区画境・石組水路
平成 25 年度	『市 156』「城山 3」	第 1 工区	第 1 ブロック	殿町地内	区画境・建物跡・上水樋遺構
			第 6 ブロック	母衣町地内	区画境・石組水路
			第 7 ブロック	母衣町地内	水田跡・区画境大溝・外堀石垣
			第 8 ブロック	母衣町地内	区画境・石組水路
			第 9 ブロック	米子町地内	町屋関連遺構
			第 10 ブロック	米子町地内	町屋関連遺構
			第 12 ブロック	南田町地内	区画境・廃棄土坑
	『市 157』「城山 4」	第 2 工区	第 16 ブロック	南田町地内	土手跡・畠跡・建物跡 (与力屋敷)
平成 26 年度	『市 163』「城山 5」	第 2 工区	第 16 ブロック	南田町地内	畠跡・建物跡 (与力屋敷)・屋敷境
	『市 167』「城山 6」	第 2 工区	第 13 ブロック	南田町地内	堀跡 (障子堀)
平成 27 年度	『市 171』「城山 7」	第 1 工区	第 3 ブロック	殿町・母衣町地内	区画境・長屋門石垣
平成 29 年度	『市 185』「城山 8」	第 1 工区	第 1 ブロック	殿町地内	区画境・井戸
		第 2 工区	第 13 ブロック	南田町地内	区画境・屋敷境
			第 14 ブロック	南田町地内	池状遺構・廃棄土坑
			第 16 ブロック	南田町地内	畠跡・建物跡 (与力屋敷)・屋敷境



第1工区 - 第1ブロック～第4ブロック（殿町・母衣町地内）



第1工区 - 第5ブロック～第12ブロック（母衣町・米子町・南田町地内）



第2工区 - 第13ブロック～第16ブロック（南田町地内）

第４図　報告書掲載箇所一覧

註

（１）根拠とした絵図は「堀尾期松江城下町絵図」、「寛永年間松江城家敷町之図」、「松平期松江城下町絵図」である。文献は「松江藩列士録」、「雲藩職制」、中国五県土地租税資料文庫のうち「松江城下武家屋敷明細帳」を参考とした。

（２）表１に示した内容については、調査地によって検出した遺構面数や遺構の遺存状態が異なるため、全ての松江城下町遺跡に共通するものではない。ここでは、松江城下町遺跡の遺構面設定における一例として理解していただきたい。

（３）これまでに刊行されている城山北公園線都市計画街路事業に伴う発掘調査報告書以外のものは、松江歴史館整備事業に伴う『市 139』、アルファステイツ母衣町Ⅱ新築工事に伴う『市 149』、松江赤十字病院別棟建設に伴う『市 153』、松江地方裁判所庁舎新営工事に伴う『市 164』、小泉八雲記念館整備事業に伴う『市 170』、山陰電力所設置工事に伴う『市 182』の６冊である。

第 2 章　位置と環境

第 1 節　地理的環境

松江城下町遺跡は、島根県東部松江市にある松江平野の中央に位置する。松江平野の北には島根半島の山地、南には中国山地へ向かう高地が存在する。また、松江平野の東には境水道を介して日本海と繋がる中海、西には大橋川・中海・境水道を介して日本海と接続する宍道湖の汽水域が広がる。

松江城は、宍道湖北東岸のやや北側に位置し、南北方向に延びる宇賀丘陵と地続きにあったとされる丘陵南端部の亀田山に築かれている。松江城下町は、城郭を取り囲むように武家地が配置され、その外側に町人地や寺社地が置かれていた (第 8 図参照)。

17 世紀初頭の松江城築城に際して、城の外郭となる内堀の開削を行っており、この開削あたっては松江城が置かれた亀田山と北側の宇賀丘陵を分断して堀を貫通させる必要があった。かなりの大規模工事であったと考えられ、内堀の開削時に生じた亀田山と宇賀丘陵の掘削土 (山土) で北田町・南田町・中原町の沼沢地を埋め立てたという伝承が残っている[(4)]。しかし、この山土を城下町の初期造成土として使用している場所は、現段階で松江城の北惣門 (脇虎口) の正面に位置する家老屋敷：松江城下町遺跡 (殿町 287・279 外) の限られた屋敷地でしか確認していない[(5)]。発掘調査では、城下町形成以前に堆積していた自然堆積層を掘削した素掘りの大溝や土取穴が見つかっており、これらは城下町形成段階に屋敷地の縁辺部分や境界部分にあたる場所に掘削され、掘削時に生じた残土を初期造成土として利用していることが明らかとなっている。この初期造成土は、松江城下町遺跡のほぼ全域で確認することができ、調査時に層序を把握する際のひとつの指標としている[(6)]。

また、松江城下町の様子を伝える文献には、大雨や河川の氾濫等による洪水に幾度も見舞われていたことを示す記述が残されている。発掘調査の知見では、江戸時代を通して大規模な屋敷地造成を数回施していることや、江戸時代から現在までの間に平均して約 1.5 mの嵩上げ造成を行っていたことが判明しており、これらは度重なる洪水に対処するために施されたという一面が考えられる。

写真 2　調査地周辺の航空写真 (1947 年 11 月撮影：国土地理院)

第２節　松江平野周辺の微地形

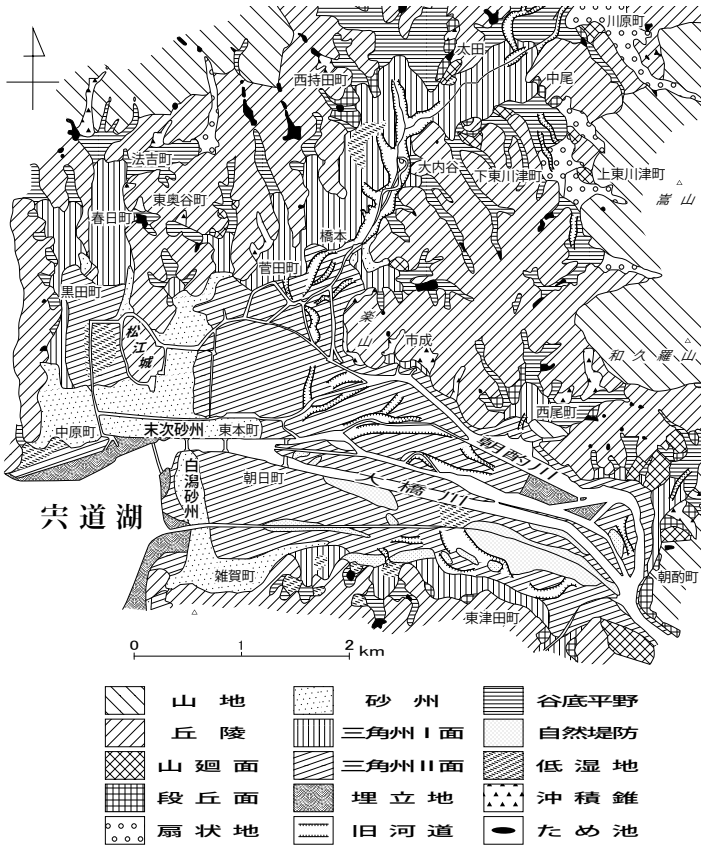
松江平野は、宍道湖東岸に位置する東西約 4㎞、南北約 2.5㎞、標高１～３ｍの低湿な三角州平野である。中海と宍道湖を結ぶ大橋川や朝酌川・馬橋川などの小河川の沖積作用によって形成されたもので、宍道湖に面して小規模な砂州が存在しているために後背湿地が広くなっている[(7)]（第５図）。

松江平野の基岩は、地下６～20ｍにある新生代新第三紀中新世の松江層であり、その上位に第四紀層（完新統～更新統）が分布する。松江層は、砂岩・泥岩・玄武岩・凝灰岩の互層からなる。

松江平野の沖積低地を特徴づけるのが、砂州と低湿な三角州である。砂州は宍道湖東岸の大橋川を挟んで南北に分布し、東方および北方に延びる砂嘴状の形態を示す。北の砂州は、中原町付近から東本町までの東西方向に形成され、宍道湖と北側の低地を区切っている。中世にはこの砂州上に末次の集落が展開していたとされる（末次砂州）。末次砂州の北側には南北方向に延びる宇賀丘陵があり、その南端に亀田山がある。南の砂州は、白潟付近に南北方向に形成され、宍道湖東岸をせき止める形となっている。中世にはこの砂州上に中町・白潟の集落が展開していたとされる（白潟砂州）。これらの砂州地帯は近世松江城下町の中心地となっていた場所であり、城下町の発展に伴って人為的な微高地も造成されている。

砂州の背面には三角州Ⅰ面が分布する。標高２～５ｍで谷底平野面に連続するが、傾斜は緩やかである。三角州Ⅰ面は、朝酌川に沿って中尾付近まで広がる。表層部は河川によって運搬された土砂に覆われるが、下部には海成の泥層が存在して平坦な地形を呈する。三角州Ⅰ面の末端部の菅田や黒田には小規模な砂州状の微高地も見られる。西持田と大内谷の間の平地には条里制遺構が存在し、古くから人々の生活の場所となっていたことが分かる。

三角州Ⅱ面は、砂州より東側の大橋川沿いや松江城の西側に広がる。標高２ｍ以下で三角州Ⅰ面よりも一段低く、非常に平坦で洪水時には常に冠水する低湿な土地である。三角州Ⅰ面を切る旧河道面へと連続しており、Ⅰ面とⅡ面との境界部には比高差１ｍ以下の小崖も認められる。三角州Ⅱ面が現在のように陸地化したのは比較的新しい時代で、「出雲国風土記」には三角州Ⅱ面上に位置する神社・寺院などの記載は見られない。三角州Ⅱ面の前面には人工的な埋立地が広がっているが、これは明治時代以降の新しい陸地である[(8)]。



第５図　松江平野の微地形分類図

第３節　歴史的環境

松江城下町遺跡は、松江城を中心としてその周囲に位置する近世遺跡である。さらに広域に見ると、松江平野の北西部に位置している。この平野部には周知されている原始・古代の遺跡は少なく、ここでは周辺部を含めた中世後半の状況と中・近世の城跡ついて若干触れておく。

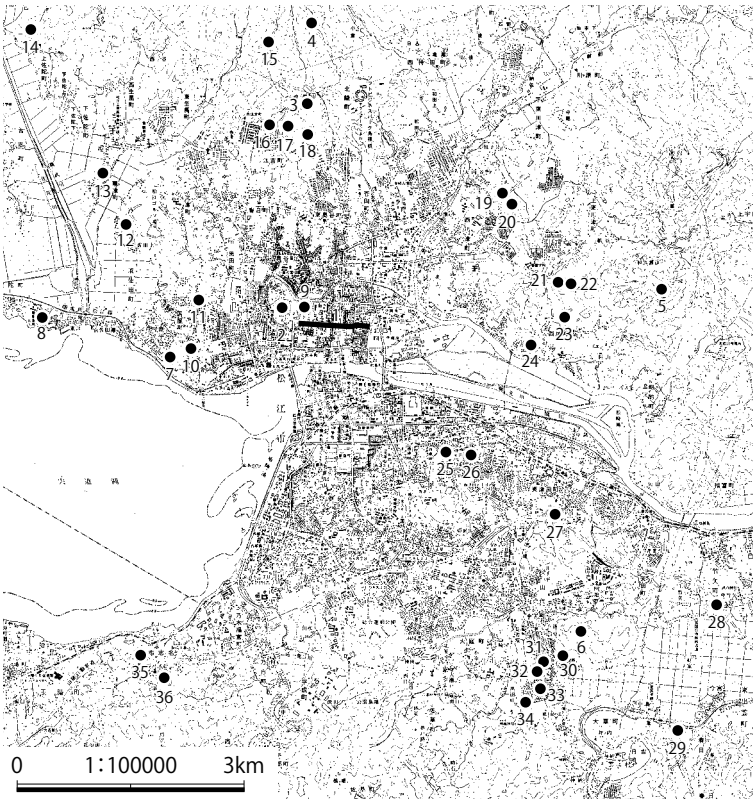
第１項　中世の松江と中・近世の主な城館跡 (第６図)

近世以前の松江は８世紀頃からあまり変化がなく、沼や浅い湖が残る湿地帯が広がっていた[(9)]。中世になると宍道湖東岸沿いの砂州上に「末次」「中町」「白潟」の３つの港湾集落 (町場) が展開していたとされる。近世城下町形成以前の松江城周辺には、京都東福寺の荘園である末次荘・法吉荘・西長田郷があり、これらの荘郷には中原・黒田・奥谷・菅田・末次の５つの名(みょう) (村) が点在し、この他にも多くの名も置かれ、新開地の開発が進んでいたとされる[(10)]。

戦国時代の「末次」は末次氏が治めており、永禄 12(1569) 年の尼子再興戦では尼子・毛利両軍の争奪戦の舞台となった。また、永禄 6(1563) 年に末次氏が毛利氏から末次森分や市屋敷(いちやしき)等をあてがわれていることから末次荘内に定期市が立ち、市場集落が形成されていたことが窺える[(11)]。

「白潟」は、中国の明代に著された『籌海図編(ちゅうかいずへん)』(明の嘉靖 41 年：1562 年) の中に出雲地方の港湾の一つとして「失喇哈町(しらかた) (白潟)」と記され、日本海から宍道湖内奥部に至る水運ルートの重要な港湾であったと考えられている。また、毛利氏が河村又三郎なる人物を白潟・末次・中町の磨師・塗師・鞘師の司に任じていることから、この地に商人や職人の集団が存在し、町場が存在していたものと推定されている[(12)]。近世松江城下町は、末次・中町・白潟の既存の港湾集落を取り込むように形成されており、城下町の成立過程を考察する上では、中世の姿を念頭に置く必要がある。

1. 松江城下町遺跡 (城山北公園線)
2. 松江城 (末次城)　3. 白鹿城跡
4. 真山城跡　5. 和久羅山城跡
6. 茶臼山城跡　7. 荒隈城跡　8. 満願寺城跡
9. 松江城下町遺跡 (殿町 287・279)
10. 荒隈城跡 (小十太郎地区)
11. 舎人遺跡　12. 薦津殿山城跡
13. 高柳城跡　14. 海老山城跡
15. 大高丸跡　16. 高つぼ山城跡
17. 小白鹿城跡　18. コゴメダカ遺跡
19. 堂頭山城跡　20. 川津城跡
21. 稲葉山城跡　22. 二保山城跡
23. 城処城跡　24. 城山城跡
25. 西城ノ前遺跡　26. 東城ノ前遺跡
27. 石台遺跡　28. 中竹矢遺跡
29. 天満谷遺跡　30. 市場遺跡
31. 黒田館跡　32. 下黒田遺跡
33. 黒田畦遺跡　34. 出雲国造館跡
35. 布志名焼窯跡群　36. 布志名城山城跡



第６図　中世以降の主な城館跡・遺跡位置図

松江城 (2)…松江平野の北西端部に位置する亀田山 (標高 28 m) に築かれた輪郭連郭複合式平山城である。関ヶ原の戦い後、慶長 5(1600) 年に堀尾忠氏が出雲・隠岐両国 24 万石を拝領し、父吉晴と共に安来市広瀬町の富田城に入った後、慶長 12 ～ 16(1607 ～ 11) 年にかけて築いたとされている。縄張りは亀田山の最高所に本丸があり、五層六階の望楼式の複合天守をもち、本丸周縁には櫓を配置して高石垣をめぐらす。天守東側に二之丸、二之丸下ノ段、南側に三之丸、西側に腰郭を配置し、これらの外側に内堀をめぐらす。島根県史によると中世において亀田山には末次城があったとされる。

白鹿城跡 (3)…松江城の北西約 3㎞のところに位置し、松江市街地北側にある北山山脈から派生する白鹿山 (標高 154 m) に築かれた山城である。戦国時代には出雲の戦国大名尼子氏の重要な支城であり、安芸の戦国大名毛利氏との雲芸攻防戦の舞台となる。城は白鹿山頂上部の平坦地を主郭とし、険しい地形を活用し大小の郭を設置する。

真山城跡 (4)…白鹿城跡の北隣に位置する真山 (標高 256 m) に築かれた山城である。「雲陽軍実記」によると平安時代末期に築いたとの伝承がある。毛利元就が白鹿城を攻めた時に元就の次男吉川元春が向城として陣を置き、白鹿城陥落後は毛利氏による周辺支配の拠点となる。その後、尼子再興戦では尼子軍の手に落ちるが、尼子氏の出雲出国後に再び毛利氏の手に戻り、江戸時代を迎え破却される。城は尾根伝いに郭を築き、土塁や石積みも見られる。

和久羅山城跡 (5)…松江城の東約 5㎞のところに位置する和久羅山 (標高 262 m) に築かれた山城である。城主は当初、尼子方の原田氏であったが毛利氏の手に落ち、尼子復興戦の折には再び尼子方の羽倉氏が城主となり、尼子氏出雲出国以後に再度毛利氏の手に帰した。城は中海・宍道湖をはじめ松江市街が一望できる和久羅山の最高所に 4 つの郭をもち、腰郭や虎口がある。

茶臼山城跡 (6)…松江城の南東約 6㎞のところに位置する茶臼山 (標高 171 m) に築かれた山城である。築城年代や城主は定かではないが、「雲陽誌」には雲芸攻防戦の際に村上伯耆守が拠ったとされている。茶臼山の最高所に主郭を持ち、その東西を別の郭で囲まれ、さらにその外側の東西に尾根を遮断する堀切が掘られ、山の斜面には連続竪堀群がある。

荒隈城跡 (7)…松江城の西約 1.5㎞のところに位置する荒隈山 (標高 40 m) に築かれ、雲芸攻防戦における毛利軍の前線拠点となっていた山城である。また、宍道湖北岸沿いに築かれたこの城は、宍道湖一帯の水運や流通機能を掌握して取り込んでいた。

満願寺城跡 (8)…宍道湖北岸に接し、宍道湖の水運を握る水軍の拠点でもあった湯原氏の居城とされ、当初は尼子方に属していたが毛利元就の出雲進出により毛利方に属した。また、雲芸攻防戦での争奪の舞台にもなる。城の主郭部分には横堀があり、宍道湖に面する斜面には階段状遺構も認められる。

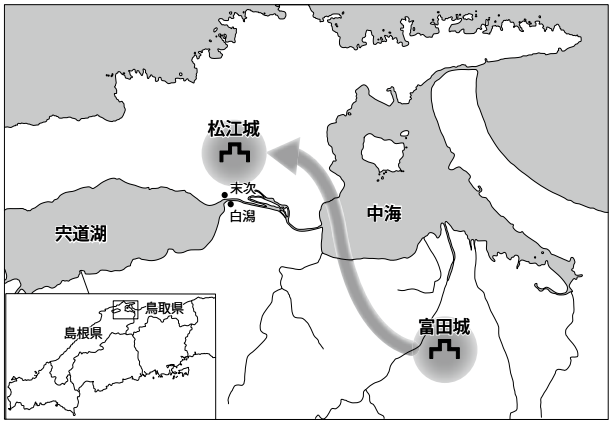
表 3　主な山城の変遷

城　名	城主の移り変わり
白　鹿　城	尼子氏の居城 (尼子十旗のひとつ) →毛利氏
真　山　城	吉川氏→毛利氏→尼子氏→毛利氏
和久羅山城	原田氏 (尼子方) →毛利氏→羽倉氏 (尼子方) →毛利氏
茶 臼 山 城	城主不明
荒　隈　城	毛利氏の前線拠点
満 願 寺 城	湯原氏 (尼子方) →湯原氏 (毛利方)

第２項　松江藩主の移り変わり ―堀尾氏・京極氏・松平氏の出雲国統治―

藩主の変遷 (第 7 図、表 4)

慶長 5(1600) 年、関ヶ原の戦いで武功を上げた堀尾忠氏は徳川家康から出雲・隠岐両国 24 万石を拝領し、遠江国浜松（現：静岡県浜松市）から父吉晴と共に富田城に入る。その後、最初に拠点とした富田城が出雲東部に偏り、城郭も急峻な山頂にあり城下が狭隘であったことや物資輸送の利便性などの理由により城地移転を考えた。そして、領国支配のために出雲国の中心に近く、城下が広くとれ、海上輸送を掌握できる宍道湖岸の松江に新しい城地を求めたとされる。[13]



第 7 図　富田城と松江城の位置

慶長 12 ～ 16(1607 ～ 11) 年[14]、吉晴が早世した忠氏の遺志を受け継いで亀田山に松江城を築き、城下町を形成した。吉晴が孫忠晴や家臣と富田から松江へ移転したのは慶長 13(1608) 年とされる。[15] 堀尾氏は 33 年間出雲・隠岐国を統治し、城下町建設の基礎を築くが嗣子無く二代で断絶となった。

続いて、寛永 11(1634) 年、徳川家光から出雲・隠岐両国 26 万 4 千 2 百石を拝領した京極忠高が、若狭国小浜（現：福井県小浜市）から出雲へ入国して松江藩主となるが、寛永 14(1637) 年に逝去、一代で断絶となる (半年後に播磨国龍野 6 万石で再興)。忠高は、わずか 3 年余りの統治であったが、その間に治水工事や殖産興業を行うなど、その治績は大きかった。[16]

寛永 15(1638) 年、徳川家光から出雲国 18 万 6 千石 (隠岐国は預り地) を拝領した松平直政が、信濃国松本（現：長野県松本市）から入国して松江藩主となる。明治時代を迎えて廃藩置県が実施されるまでの 233 年間、松平氏十代にわたり藩政が続いた。

表 4　松江藩主の時期区分

時代	安土桃山時代	江戸時代				明治時代
		初期	前期	中期	後期 / 幕末	
世紀	16世紀	17世紀		18世紀	19世紀	20世紀
西暦	1600年		1700年		1800年	1900年
松江藩主の変遷		堀尾期(1600年～1633年)：忠氏、忠晴				
		京極期(1634年～1637年)：忠高				
		松平期(1638年～1871年)：直政、綱隆、綱近、吉透、宣維、宗衍、治郷、斉恒、斉貴、定安				
遺跡周辺の状況	低湿地	城下町				城下町の解体

第３項　松江城下町の立地と構造

松江城下町の構造と屋敷地の配置 (第 8 図)

堀尾氏は慶長 8(1603) 年に幕府の許可をとって新城の建設に乗り出す。そこで注目したのが、宍道湖と中海の境にあり、本州と島根半島の地峡部に位置する宍道湖岸の地である。

松江城下町の全体構造は、北側に寺社や武家地が点在する丘陵地を背にし、松江城を中心に東西に武家地を配置して左右を固め、その南側に末次町の町人地を東西に配置している。天然の堀となる大橋川で区切り、その南側に白潟町の町人地と寺社を配置し、さらに南側には竪町を配置している。

松江城下町は松江城本丸がある亀田山を中心に、城の東側には重臣が多く居住する殿町が広がり、さらに東に上級・中級家臣が居住する母衣町がある。城の西側には中級家臣が居住する内中原町がある。これらの武家地を外堀で囲み、外堀の東側に町人地である米子町、さらに東に下級家臣が居住する北田町・南田町が展開する。南田町の一角、城下町の南東端にあたる場所には重臣屋敷を配して出城のような機能をもたせていた。外堀の西側には下級家臣が居住する外中原町があり、北側には町人地である北堀町、さらに北に武家屋敷や寺院が点在する奥谷町が展開する構造となっている。

第８図　堀尾期松江城下町絵図

階層別堀尾期絵図（トレース図）

註

（４）島根縣内務部島根縣史編纂掛　1930『島根縣史９』藩政時代（下）46 頁　「…城山と赤山との中間なる低き丘陵宇賀山を截ちて鹽見畷の大濠を作る…此堀鑿土を以て彼の南北田町及中原の沼澤地を埋立たり…」とある。

（５）松江城下町遺跡（殿町 287）の発掘調査では、屋敷境を境界として北屋敷と南屋敷に分けて調査を実施している。これまでの調査で、山や丘陵を削って運び込まれたものと考えられる黄褐色の松江層軟砂岩（山土）を屋敷地の初期造成土として使用を確認したのは、北屋敷の事例だけである。この屋敷地は、松江城内堀の北東角に隣接する位置にあたる。

（６）東京（江戸）・大阪・京都などの近世遺跡で見つかっている焼土層のように、遺跡の年代指標となる鍵層はこれまでの松江城下町遺跡の発掘調査では確認していない。松江城下町遺跡のほぼ全域に見られる初期造成土は、旧地表面上に盛られた最初の造成土であることを前提として、17 世紀初頭の堀尾氏による城下町形成段階に施されたものと位置付けている。

（７）島根大学附属図書館編　2006「松江平野の地形とその形成過程」『絵図の世界』から引用。

（８）林　正久　1991「松江周辺の沖積平野の地形発達」『地理科学 46-2』から引用。

（９）註７と同じ。

(10) 島根県編　1965『新修島根県史』史料篇２・近世（上）のうち「雲陽大数録」（春日鎌三郎所蔵、天保三年写本）による。

(11) 山根正明　2009『松江市ふるさと文庫６　堀尾吉晴－松江城への道－』松江市教育委員会から引用。

(12) 岡　宏三　2008「中世のプレ松江」『松江藩の時代』山陰中央新報社から引用。

(13) 松尾　寿　2008『松江市ふるさと文庫５　城下町松江の誕生と町のしくみ』松江市教育委員会から引用。

(14) 島根縣内務部島根縣史編纂掛　1930『島根縣史９』藩政時代（下）51 頁　※県史の記述は年代の根拠が示されていない。

(15) この年代根拠については、『堀尾古記』に記載されている慶長 13 年の条「松江越　十月二日」によるが、諸説ある。

(16) 西島太郎　2010『松江市ふるさと文庫８　京極忠高の出雲国・松江』松江市教育委員会から引用。

第 3 章　調　査

本章では城山北公園線都市計画街路事業のうち、これまでに未報告となっていた本発掘調査および立会調査の成果を報告する。掲載した本発掘調査の対象遺跡は、第 1 節で第 1 ブロックに所在する松江城下町遺跡 (殿町 198-7 外)、第 2 節で第 13 ブロックに所在する松江城下町遺跡 (南田町 108-1 外)、第 3 節で第 14 ブロックに所在する松江城下町遺跡 (南田町 101-21 外)、第 4 節で第 16 ブロックに所在する松江城下町遺跡 (130-6 外)、第 5 節で第 16 ブロックに所在する松江城下町遺跡 (南田町 134-1 外) の 5 遺跡を扱った。立会調査は、各ブロックの本調査区に付随する多数の立会調査の中から、遺構の連続性が認められるものや松江城下町遺跡の変遷を考察する上で重要と思われる遺構を検出した地点 (MJR) を抽出して掲載した。

以下、第 1 ～ 5 節では各ブロックの調査区の位置および層序の概要を記し、各遺跡で検出した遺構面の状況や遺構と遺物について、年代が新しい上層の遺構面から年代が古い下層の遺構面の順に説明を行う。併せて遺構の変遷と遺跡の評価については、各節末に設けた小結でまとめることとする。

第 1 節　第 1 ブロック (1-3 区)　松江城下町遺跡 (殿町 198-7 外)

第 1 ブロックは、市道北田大手前線から県道松江・鹿島・美保関線に挟まれた城山北公園線の北側部分、殿町地内の東西約 120 m×南北約 10 ～ 13 m区間である。ここでは第 1 ブロックのうち、平成 29 年度に発掘調査を実施した松江城下町遺跡 (殿町 198-7 外) の調査成果を報告する。

調査地周辺は、調査開始以前には城山北公園線沿いの民家や店舗が建ち並んでいた場所となっていた。調査前には、すでに建物基礎等の解体工事による掘削および真砂土での埋め戻しがなされていたため、安全を考慮して調査区の四方 (東西約 4.0 m×南北約 8.0 m) を鋼板矢板で囲って発掘調査を実施した。また、土層堆積状況を把握するために表土～撹乱層を除去した後、調査区東側に土層観察用の壁面を残して全体の掘り下げを行った。

発掘調査の経過は、第 1 ブロックではこれまでに 2 箇所の本発掘調査と 37 箇所の立会調査を実施しており、本調査区の呼称は便宜的に 1-1 区・1-2 区としている。1-1 区は平成 24 年度に刊行した『市 154』「城山 2」に、1-2 区は平成 25 年度に刊行した『市 156』「城山 3」においてそれぞれの調査成果が報告されている。今回報告する調査区は、第 1 ブロックでは 3 箇所目の 1-3 区となり、調査区と遺跡名の関係および掲載報告書は以下の表 5 に示した。

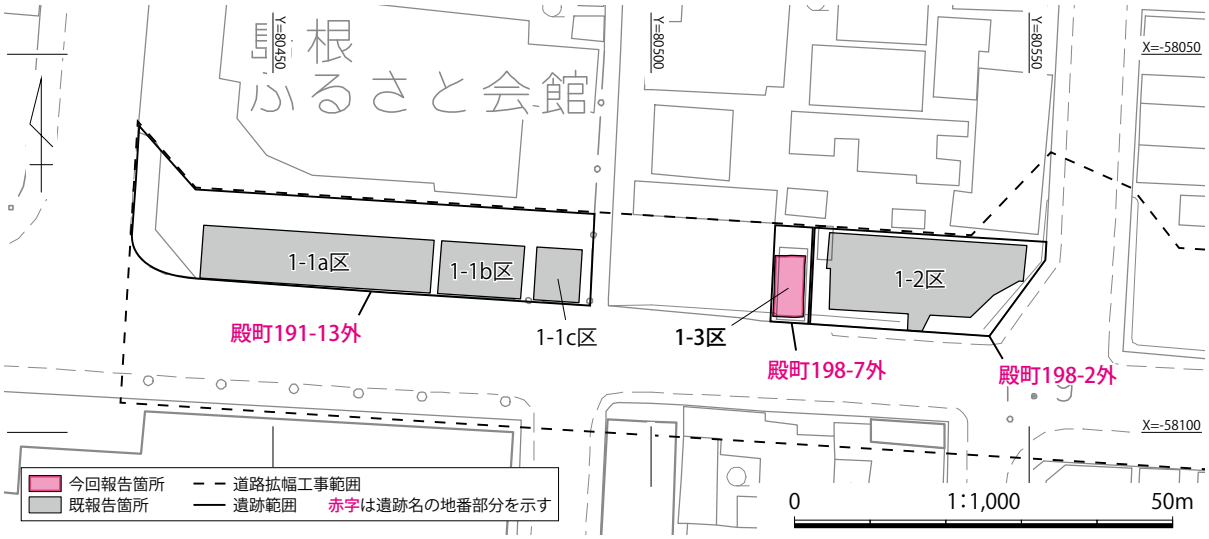
表 5　第 1 ブロック本発掘調査箇所

ブロック名	調査区名		遺跡名	掲載報告書
第 1 ブロック	1-1 区	1-1a 区	松江城下町遺跡（殿町 191-13 外）1 区	『市 154』「城山 2」
		1-1b 区	松江城下町遺跡（殿町 191-13 外）2 区	
		1-1c 区	松江城下町遺跡（殿町 191-13 外）3 区	
	1-2 区		松江城下町遺跡（殿町 198-2 外）	『市 156』「城山 3」
	1-3 区		松江城下町遺跡（殿町 198-7 外）	『市 185』「城山 8」

第１項　調査区の位置 (第９図)

発掘調査対象地である 1-3 区は、松江城大手前から東へ約 150 mの地点に位置する。調査範囲は東西約 4.0 m×南北約 8.0 m、調査面積 32.3㎡の調査区を設定した。

第 1 ブロックを現存する堀尾期・京極期・松平期の各絵図と照合すると、街区の東西に 2 軒存在していた武家屋敷のうち 1-3 区は東側にあたり、江戸時代を通して 1200 ～ 3000 石の重臣 (家老) の屋敷地に比定される。なお、街区東側の 1-2 区と今回報告する 1-3 区は同じ屋敷地内にあたる。



第９図　第１ブロック本調査区配置図

第２項　遺構面と層序 (第 10 図)

調査区の遺構検出と土層堆積状況の観察を行った結果、4 つの遺構面を確認した。遺構面は、上層から主に現地表面～撹乱層・造成土 (盛土)・旧地表面・自然堆積層に分け、その中から生活面と考えられる整地層や遺構の機能面を把握した。

本調査地は、現代の建物基礎や撹乱がおよぶ場所以外は近世の土層が良好に残されている。現地表は標高 1.90 mで、最深部で現地表下約 2.35 m (標高 -0.45 m) までの土層堆積を確認した。第 10 図の土層図は、調査区の東側に設定した東壁土層 (A-B 間) を掲載している。なお、基本的な層序は第 1 章第 2 節第 3 項で示した松江城下町遺跡基本土層と共通するものであり、遺構面で区分した土層の呼称についてはこれに準じて対応する土層名を付した。以下､各遺構面の土層堆積状況について、上層から下層の順に説明する。

MJ0・1 層：現地表面～撹乱層　標高 1.90 m、層厚 40 ～ 50㎝

MJ0 層は既存建物の基礎を含む撹乱層である。MJ1 層は褐色～灰褐色砂質土を主体とする近現代の盛土層だが下層の江戸時代の造成土まで撹乱層が入る。そのため本調査地では、MJ0 ～ 1 層までを撹乱層とした。この土層中から 19 世紀中頃～近現代の陶磁器類が出土している。

MJ2 層：第 1 遺構面　標高 1.40 ～ 1.50 m、層厚 30㎝

黄色～橙色粘質土の山土を主体とする嵩上げ造成による整地層である。この遺構面から 19 世紀前

半～中頃の陶磁器類が出土している。

MJ3 層：第 2 遺構面　標高 1.20 m、層厚 20 ～ 40㎝

灰色粘質土～黒褐色砂質土に少量の黄色粘土ブロックが混ざる土層を主体とする嵩上げ造成による整地層である。MJ3 層の下位では、MJ4 層を掘り込んで新たに造成をしている状況が観察される。この遺構面から 17 世紀後半～ 18 世紀後半の陶磁器類が出土している。

MJ4 層：第 3 遺構面　標高 1.00 m、層厚 20㎝

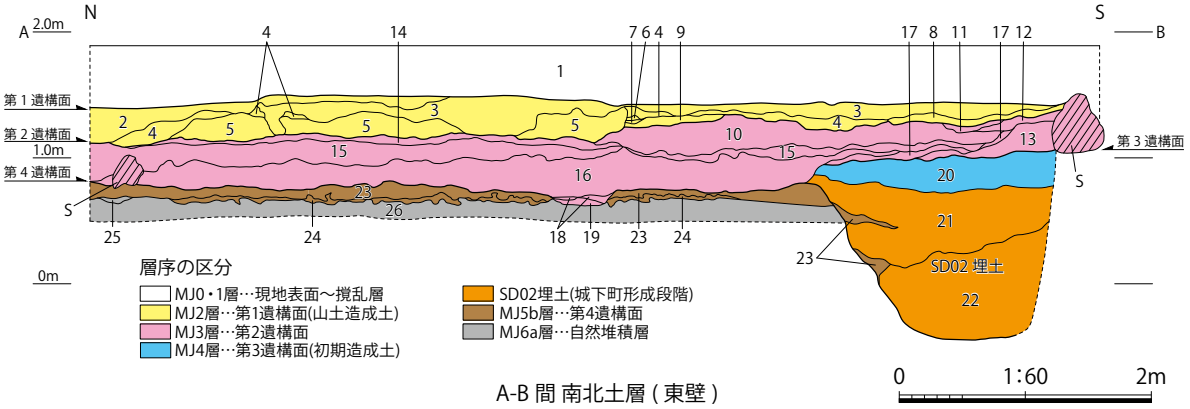
城下町形成以前の旧地表面の上に盛土された城下町初期造成段階の整地層である。MJ4 層よりも下位にある MJ5a 層の黒褐色有機質粘土と MJ6a 層の灰色細砂の混合土を主体とし、この土壌は素掘りの大溝の掘削などによって生じた残土をそのまま造成土として使用しているものと考えられる。この遺構面から肥前系磁器を伴わない 17 世紀初頭～前半の陶磁器類が出土している。なお、MJ4 層は上層の掘り込みによって大半は消失しており、調査区の南側約 3 分の 1 程度の範囲で確認している。

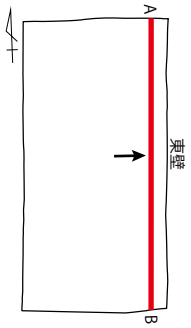
MJ5a 層：第 4 遺構面　標高 0.80 m、層厚 10㎝

城下町形成以前の旧地表面の堆積層で、下位の MJ6a 層上面にほぼ均一の厚さで水平堆積している。本調査地では、土壌の分解が進んだ黒褐色有機質粘土の堆積を確認し、この土層中には直径 1㎝程度の砂礫が少量含まれていた。また、調査区の南側には MJ4 層直下に城下町形成段階に掘削されたと考えられる素掘りの大溝SD02があり、MJ5a層とMJ6a層を切り込んで掘削している状況を確認した。

MJ6a 層：自然堆積層　標高 0.70 m

灰色細砂を主体とする堆積層で、松江市街地北部の丘陵から末次砂州の北の水域に水が流れていた時代に堆積した土層である。





1　撹乱層(近現代)
2　黄灰色粘土ブロック(山土)
3　灰色シルトと淡黄色粘土の斑層(山土)
4　緑灰色～淡黄色粘土ブロック(山土)
5　灰褐色粘質土
6　灰色粘質土
7　灰白色シルト
8　灰色粘土(黄橙色粘土混ざる)
9　オリーブ灰色粘質土
10　浅黄色粘土ブロック
11　黄灰色粘質土
12　灰色シルトと淡黄色粘土の混合土
13　オリーブ黒色砂質土
14　黒褐色砂質土
15　暗黄褐色土と黄色粘質ブロックの斑層
16　黄灰色粘土ブロック(松江層軟砂岩の塊)
17　灰色粘質土(黄色粘土ブロック混ざる)
18　暗オリーブ褐色砂質土
19　灰色シルトと黄色粘土ブロックの混合土
20　灰色細砂と黒褐色粘質土の混合土
21　灰色シルト質細砂
22　灰色シルトと黒褐色粘質土ブロックの混合土
(下層に松江層軟砂岩含む)
23　黒褐色粘質土(小礫含む)
24　オリーブ黒色粘質土
25　灰白色細砂
26　灰色細砂

第 10 図　1-3 区土層図

第３項　調査の結果

ここでは検出した遺構面の概要や遺構と遺物について、年代が新しい上層の遺構面から年代が古い下層の遺構面の順に示す。なお、本項に掲載した遺構と遺物は検出した遺構や出土した陶磁器の内容が遺構面の年代を示す上で指標となるものや良好な一括資料を図示し、そのほかの遺構と遺物については本節末に設けた小結の中にまとめて記述した。

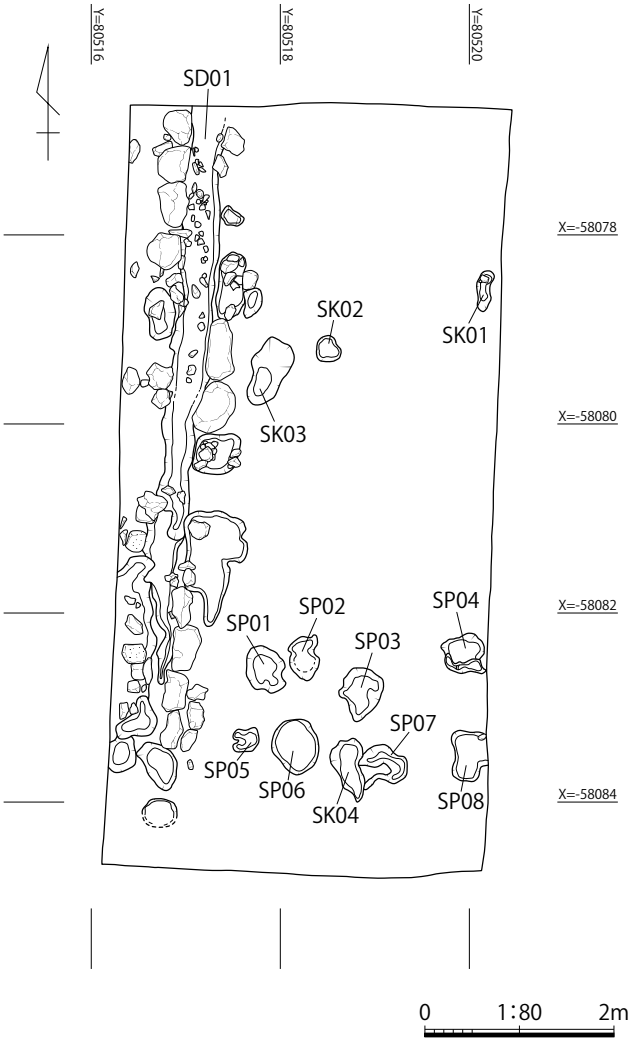
（1）第１遺構面

ｉ）第１遺構面の概要（第 11 図）

第１遺構面は、標高 1.40 ～ 1.50 m で検出した遺構面である。遺構は、溝 SD01、土坑 SK01 ～ 04、柱穴 SP01 ～ 08 を検出した。

遺構面は、現地表面（標高 1.90 m）以下に堆積する層厚 40 ～ 50㎝の撹乱層を除去した段階で遺構を検出した任意の遺構面である。そのため、遺構面検出とした土坑や柱穴の中には、上層から掘り込まれた近現代の遺構の底部を図示したものが含まれている可能性もある。

第１遺構面の基盤となる MJ2 層は、黄色～橙色粘質土の山土を主体とする嵩上げ造成による整地層で、概ね８層に細分できる（第 10 図第２～９層）。層厚は 30 ㎝を測り、最上位の山土造成土を露呈した面で遺構を検出したことから、これを第１遺構面とした。遺構面の時期は、出土遺物の年代から 19 世紀前半～中頃を想定している。



第 11 図　第１遺構面平面図

ii）第１遺構面の遺構と遺物

溝 SD01（第 12 図）

調査区の西側で検出した石組を伴う南北溝で、規模は長さ 7.70 m、幅 0.40 m、深さ 0.15 mを測り、さらに北側へ向かって延びる。溝の両端に石組を伴い、石組の天端は標高 1.60 m、主軸方位は N －4°－ E である。溝底部は標高 1.35 ～ 1.45 mで、排水方向は北から南へ向かう。

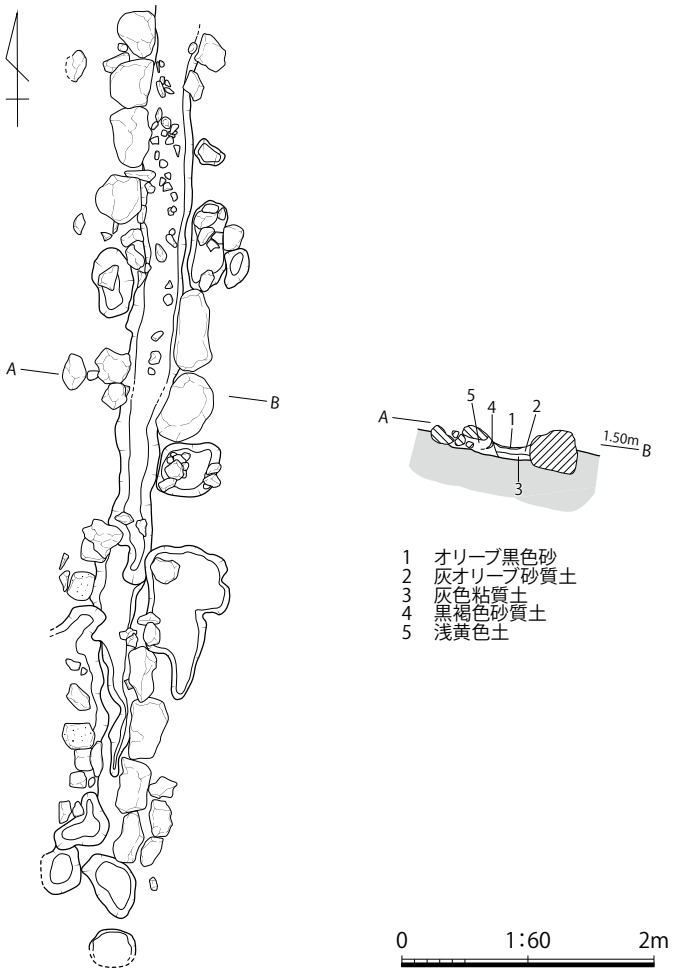
溝埋土は上層からオリーブ黒色砂（第１層）、灰オリーブ砂質土（第２層）、灰色粘質土（第３層）が堆積する。石組は１～２段積みで、溝の内側に対して面をもつ。石材には長軸 30 ～ 50㎝を測る大海崎石[17]・島石[18]・川原石が混在して使用されている。SD01 は石組水路と考えられるが、上層からの

撹乱により石の抜き取り痕跡しか残っていない部分もある。

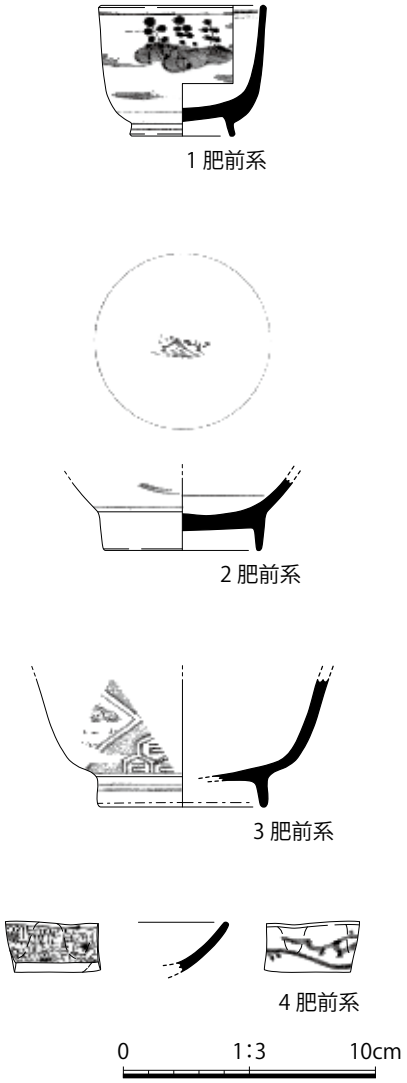
SD01 の性格は、検出位置から屋敷地から道路側溝 (水路) へ向かう排水用の溝と考えられる。調査区内では柱穴 SP01 ～ 08 を検出しているがいずれも掘り込みが浅く、厳密に建物跡と確定できる遺構は検出しておらず、SD01 は雨落ち溝のような建物に付属する溝なのか、あるいは単独で機能していた溝なのかは定かではない。

SD01 出土遺物 (第 13 図)

ここでは SD01 の埋土および石組周辺から出土した遺物を掲載する。13-1 ～ 4 は国産磁器である。13-1 は肥前系磁器の小丸碗である。胴部外面に桐文を描き、畳付は無釉。九陶Ⅴ期 (1780 ～ 1810 年代)。13-2 は肥前系磁器の広東碗である。底部のみ残存し、見込みに岩波文を描く。九陶Ⅴ期 (1780 ～ 1810 年代)。13-3 は肥前系磁器の碗である。胴部は口縁部に向かってやや外反し、外面に区画文を描く。九陶Ⅴ期 (1820 ～ 1860 年代)。13-4 は肥前系磁器の皿である。口縁部のみ残存するが、型打ち技法で成形された蛇ノ目凹形高台の変形皿と考えられる。体部内面にみじん唐草文、外面に蔓草文を描く。九陶Ⅴ期 (1780 ～ 1860 年代)。



第 12 図　SD01 平面図・断面図



第 13 図　SD01 出土遺物

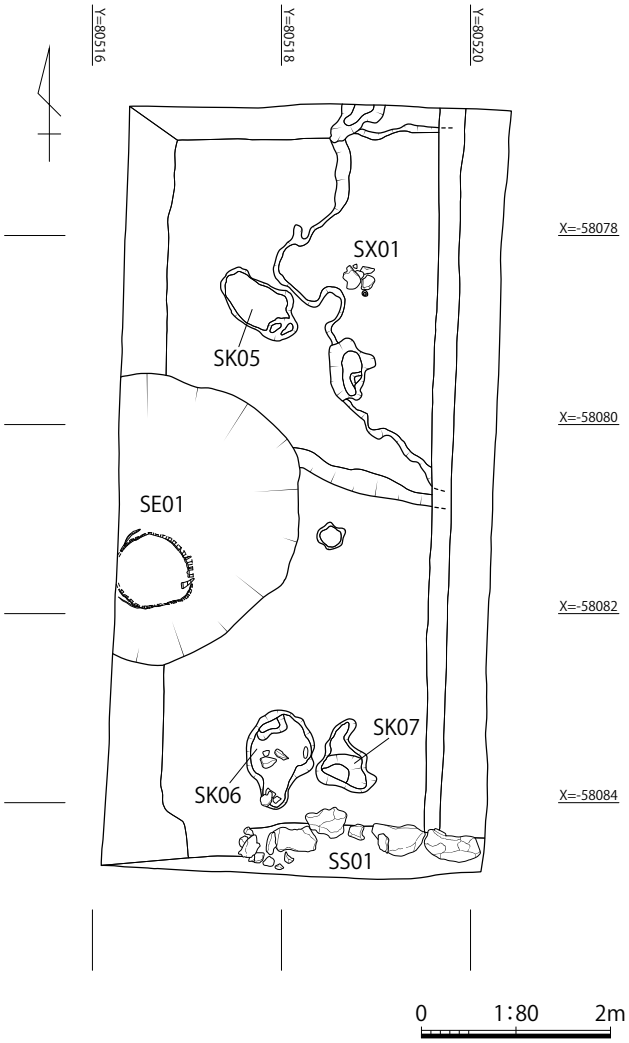
（2）第２遺構面

ｉ）第２遺構面の概要（第 14 図）

第２遺構面は、標高 1.20 mで検出した遺構面である。遺構は、木枠井戸 SE01、土坑 SK05 ～ 07、その他の遺構 SX01 を検出した。

第２遺構面の基盤となる MJ3 層は、灰色粘質土～黒褐色砂質土に少量の黄色粘土ブロックが混ざる土層を主体とする嵩上げ造成による整地層で、概ね 10 層に細分できる（第 10 図第 10 ～ 19 層）。層厚は 20 ～ 40㎝を測り、最上位の整地層を露呈した面で遺構を検出したことから、これを第２遺構面とした。

また、MJ3 層の下位では、第３遺構面の基盤層となる MJ4 層を掘り込んで新たに松江層軟砂岩[19]を含む粘質土で造成を施している状況を確認した。このことは、第２遺構面を造成する際に第３遺構面を掘り込んで土壌の置き換えを施していたものと考えている。遺構面の時期は、出土遺物の年代から 17 世紀後半～ 18 世紀後半を想定している。



第 14 図　第２遺構面平面図

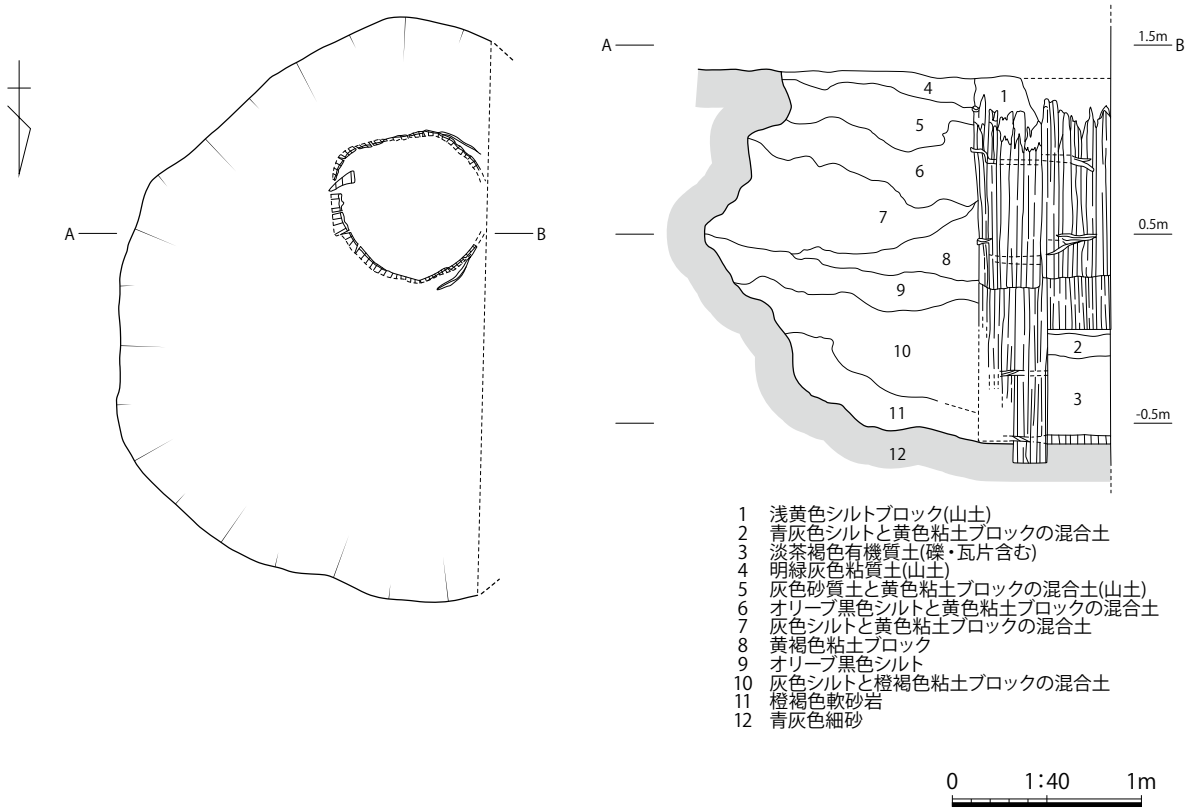
ii）第２遺構面の遺構と遺物

木枠井戸 SE01（第 15・16 図）

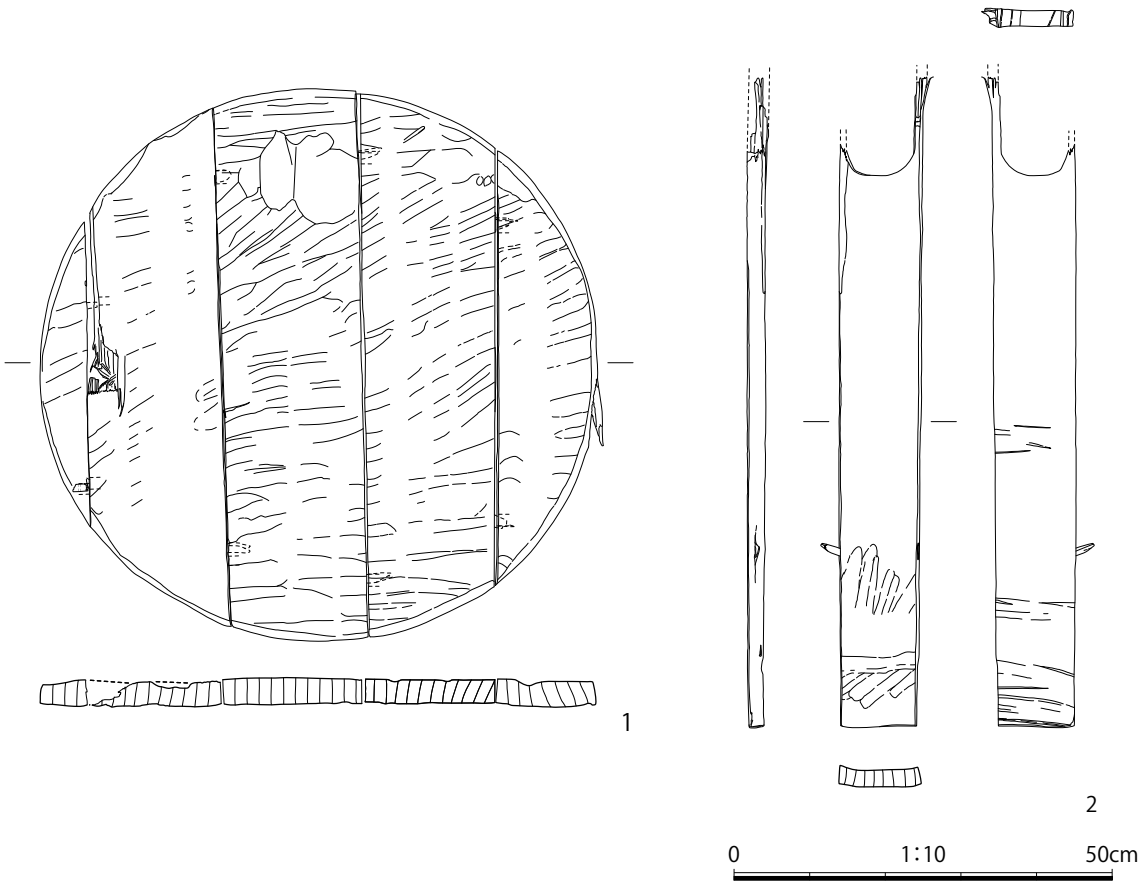
調査区の中央部～西側で検出した木枠井戸である。検出面は標高 1.38 mで、井戸の掘り方は直径 3.00 m、深さ 1.94 mを測り、西側は調査区外となるが平面形は円形を呈するものと考えられる。井戸側となる木枠は掘り方の中心からやや南寄りに位置し、上端は破損しているが残存していた部分で標高 1.20 m、深さ 1.98 mを測る。

木枠は上下二段構造で円筒状に埋設され、ひとつの木枠の規模は直径 0.80 m、高さ 1.05 ～ 1.10 mを測る。使用する板材は幅 10 ～ 12㎝、長さ 105 ～ 110㎝、厚さ 2㎝の木板 30 枚を目釘で輪状に繋ぎ合わせ、竹製のタガで木枠の外周上下を２箇所固定している。井戸底には直径 75㎝、厚さ 3.3㎝の底板 (16-1) が残っていた。井戸の最下部は自然堆積層の青灰色細砂に 15㎝ほど掘り込んで据えられており、木枠の外側に粘土層を入れることによって水の滞留を施していたものと考えられる。

また、木枠下段の取り上げ時に、木板の一部を直径約 10㎝の楕円状に刳りぬいたものを１枚確認した (16-2)。この刳りぬきは、長さ約 100㎝の木板の下端から約３分の２程度上部にあたり、竹樋



第 15 図　SE01 平面図・断面図



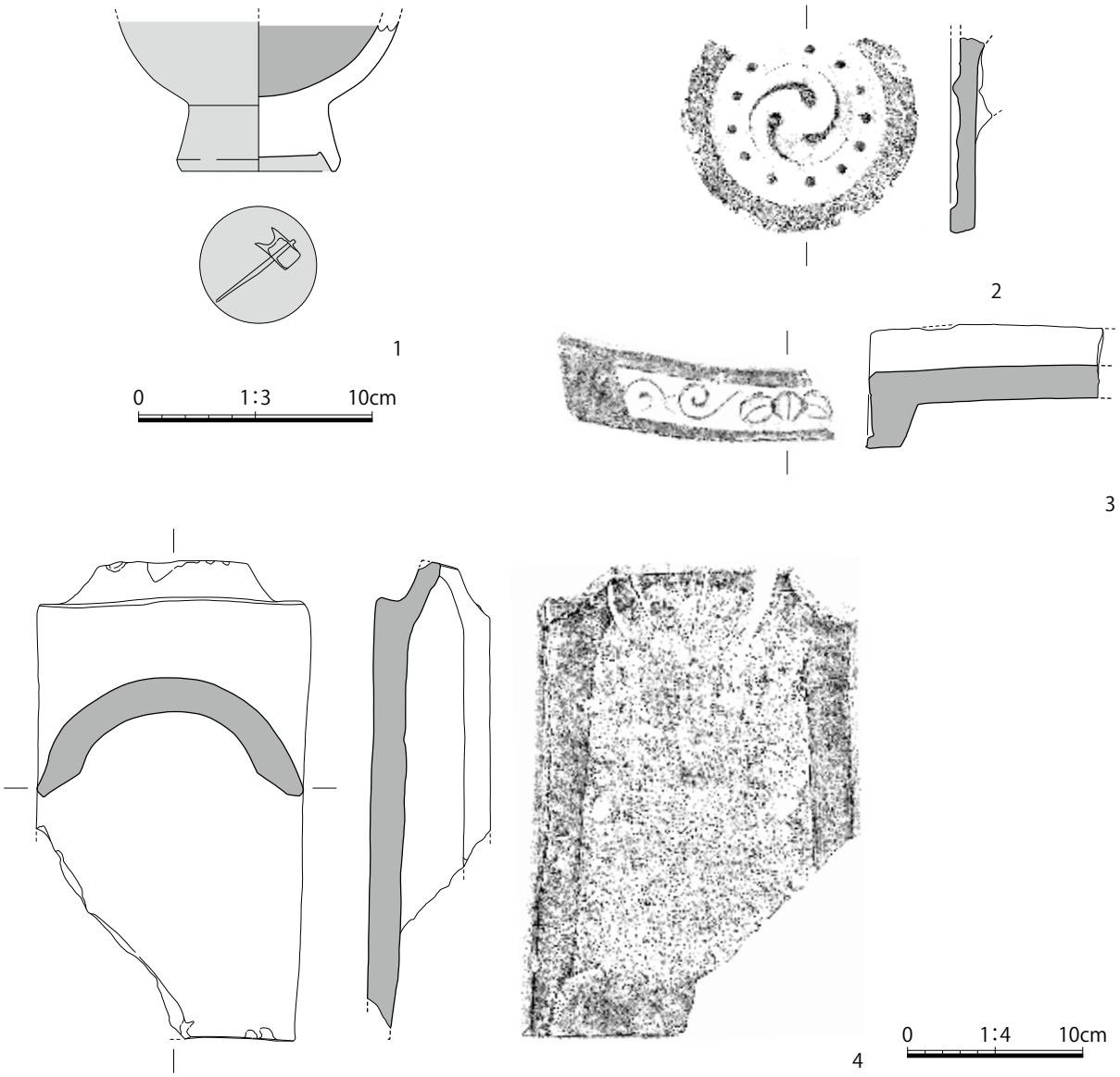
第 16 図　SE01 底板・木枠下段板材 (部分) 実測図

を井戸側の木板と結合させて木枠の側面から上水を引くための連結部分と考えられる。

調査区東側に隣接する松江城下町遺跡 (殿町 198-2 外) では上水施設である木樋や竹樋を検出している。今回の調査で竹樋は検出していないが、SE01 は同じ屋敷地内にあたることから、これらは上水道施設に関わる一連の遺構と捉えることができ、SE01 の性格は上水を汲み上げるための施設 (上水井戸) と考えている。

SE01 出土遺物 (第 17 図)

ここでは SE01 の埋土から出土した遺物を掲載するが、これらは井戸を埋めた際の廃棄段階のものである。17-1 は漆器椀で、胴部上方は欠損している。外面に文様はないが高い高台をもち、高台見付に鉞文の線刻がある。17-2 ～ 4 は瓦である。17-2 は軒丸瓦である。圏線がない左巻きの三巴文とその外側に珠文が 13 個配され、松江城軒丸瓦分類 B-1 類に該当する。17-3 は軒平瓦である。中心飾りに葉脈を入れた下向の三葉を置き、外側に 2 回反転の連続しない唐草文が配され、松江城軒平瓦分類下向三葉 B-1 類に該当する。17-4 は玉縁式丸瓦である。凹面にコビキ B と布目痕を見せる。



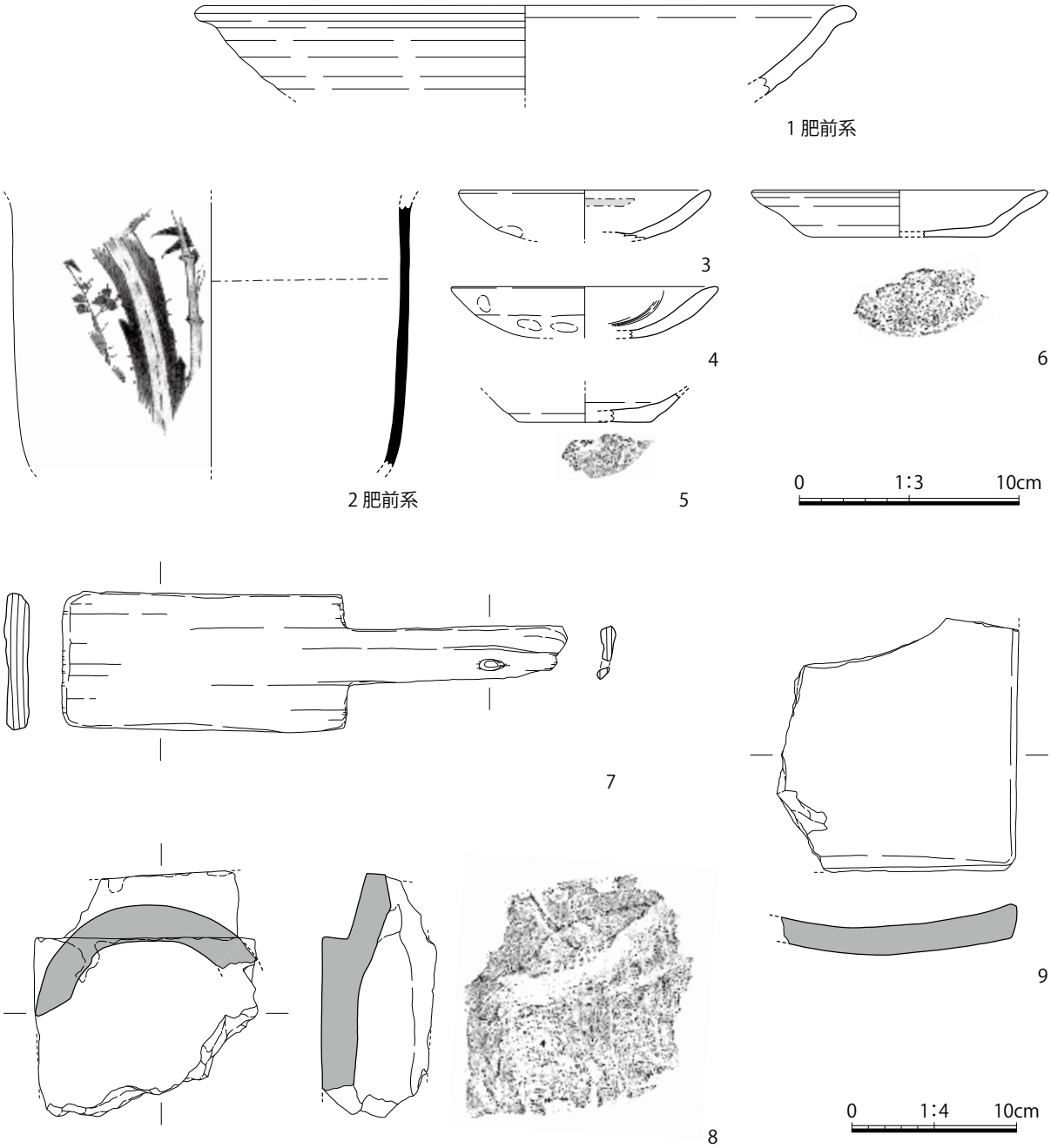
第 17 図　SE01 出土遺物

第 2 遺構面遺構外出土遺物 (第 18 図)

ここで掲載する遺物は、第 2 遺構面直上から出土したものを遺構外出土遺物として取り扱う。

18-1・2 は国産陶磁器である。18-1 は肥前系陶器の大皿である。内外面に白土を掛けて内面を刷毛目文としたもので、口縁部を外傾させる。九陶Ⅳ期 (1690 ～ 1780 年代)。18-2 は肥前系磁器の袋物である。胴部のみ残存し、外面に梅竹文を描く。九陶Ⅳ期 (1690 ～ 1780 年代)。

18-3 ～ 6 は土師器皿である。18-3・4 は手づくね成形の京都系土師器皿で、いずれも外面に指頭圧痕をもつ。18-5・6 はロクロ成形の在地系土師器皿で、底部に糸切り痕をもつ。18-7 は用途不明の羽子板状木製品である。18-8・9 は瓦である。18-8 は玉縁式丸瓦である。下方は欠損しているが、凹面にコビキ B と布目痕を見せる。18-9 は平瓦である。厚さ 1.8㎝で凸面に離砂が付着する。



第 18 図　第 2 遺構面遺構外出土遺物

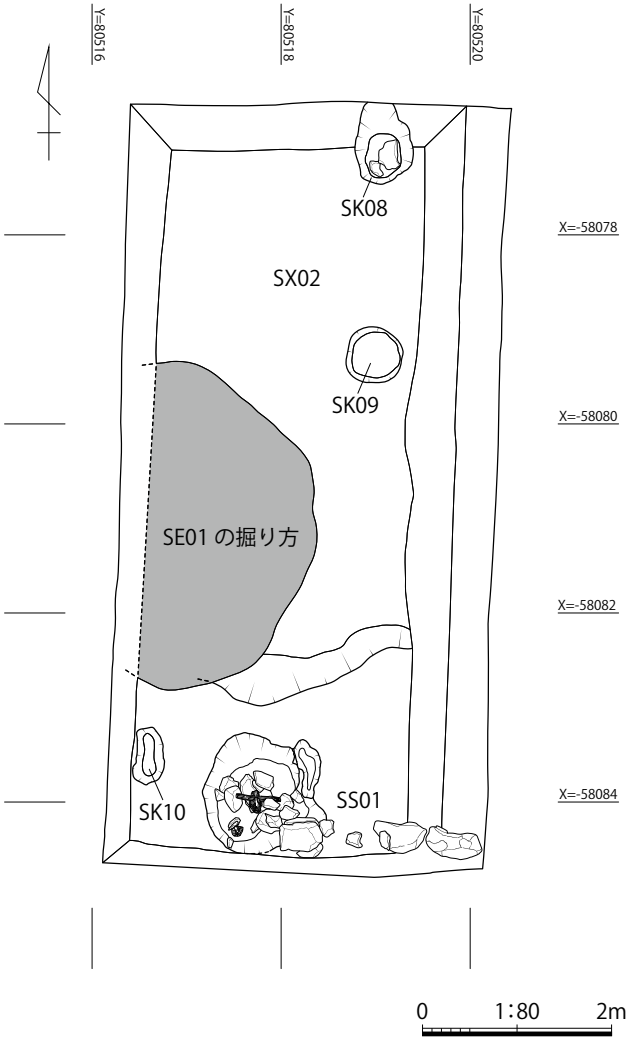
（3）第３遺構面

ｉ）第３遺構面の概要（第 19 図）

第３遺構面は、標高 1.00 ｍで検出した遺構面である。遺構面は、第２遺構面からの掘り込みや SE01 の掘り方によって第３遺構面の整地層の大半は消失しており、この遺構面が残っていた範囲は調査区の南側約３分の１程度である。

遺構は、石列 SS01、土坑 SK08 ～ 10、その他の遺構 SX02 を検出した。調査区の南端で検出した石列 SS01 は、この遺構面の時期に構築されたもので、前述した第２遺構面の段階まで使用されていたものと考えている。調査区の北側～中央部で検出した SX02 は、第２遺構面を造成する際に第３遺構面を掘り込んで土壌の置き換えを施した痕跡の底面を示している。

第３遺構面の基盤となる MJ4 層は、灰色細砂と黒褐色有機質粘土の混合土を主体とする城下町初期造成段階の整地層である（第 10 図第 20 層）。この土壌は、後述する素掘りの大溝の掘削などによって生じた残土をそのまま造成土として使用しているものと考えられる。層厚は 20㎝を測り、整地層を露呈した面で遺構を検出したことから、これを第３遺構面とした。遺構面の時期は、出土遺物の年代から 17 世紀初頭～前半を想定している。



第 19 図　第３遺構面平面図

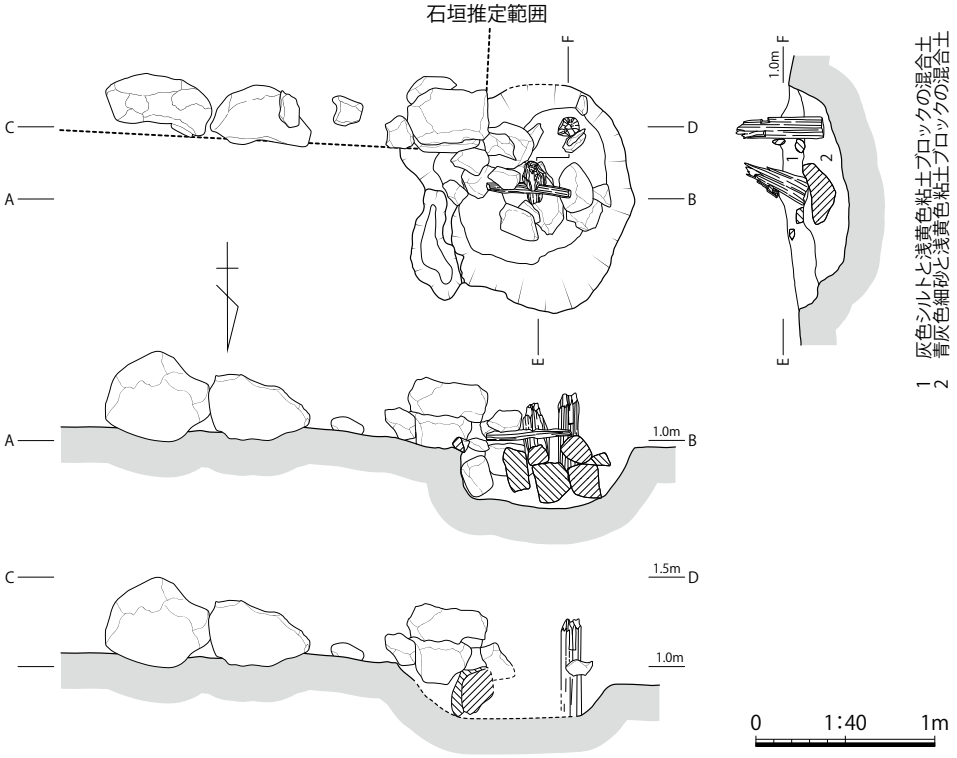
ii）第３遺構面の遺構と遺物

石列 SS01（第 20 図）

調査区の南端で検出した東西方向の石列で、規模は長さ 3.00 ｍ、幅 0.40 ｍを測り、東側は調査区外へと続いている。石列の天端は標高 1.52 ｍ、下端は標高 1.00 ｍ、主軸方位は E － 4°－ S である。石列に使用される石材はすべて大海崎石で、大きいものでは長軸 50 ～ 60㎝の石が据えられ、石の面は北側の屋敷側に向かって揃えられている。

石列の西端では柱材２本と根石を含む土坑を検出した。土坑は直径 1.24 ｍ、深さ 0.50 ｍを測る。土坑中の柱材には横木を組んだものがあり、直径 15㎝、残存長 36㎝の柱に、直径 5㎝、長さ 48㎝の横木を十文字に組み合わせた状態で検出した。この柱材の直下に根石を置いていることや横木を据えていることから、加重による沈下を防ぐための下部構造と捉えている。

SS01 の性格は屋敷地を囲う塀の土台 (基壇) 部分で、検出した土坑は塀を補強するための控え柱と考えられる。調査地はこの時期に比定される堀尾期絵図を根拠とすると、大通りに面した屋敷地の表口付近に位置していることが分かる。この時期の塀は石垣の基壇をもつ塀で、基壇の中央には控え柱を伴う土塀を構築していたものと想定している。SS01 は屋敷地の内側に面した塀の一部を検出したものと考えられる。



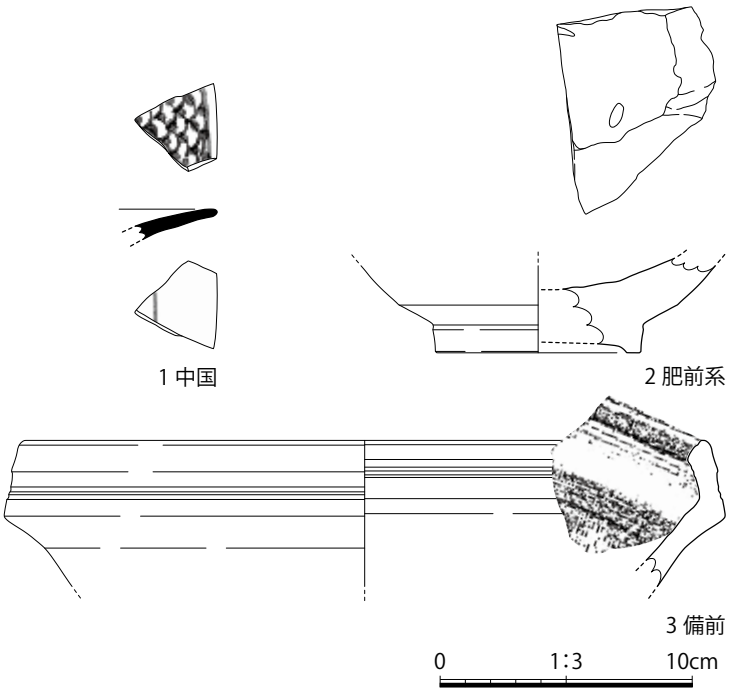
第 20 図　SS01 平面図・断面図

第 3 遺構面遺構外出土遺物 (第 21 図)

ここで掲載する遺物は、第 3 遺構面直上から出土したものを遺構外出土遺物として取り扱う。

21-1 は中国磁器の皿である。漳州窯系の鍔皿で、内面に呉須で青海波文を描く。17 世紀初頭のものである。

21-2・3 は国産陶器である。21-2 は肥前系陶器の大皿である。内面に灰釉を施釉し、胎土目痕が残る。九陶 I -2 期 (1594 ～ 1610 年代)。21-3 は備前の擂鉢で、乗岡氏編年近世 1 期 c(1600 ～ 1620 年代) に該当する。



第 21 図　第 3 遺構面遺構外出土遺物

（4）第 4 遺構面

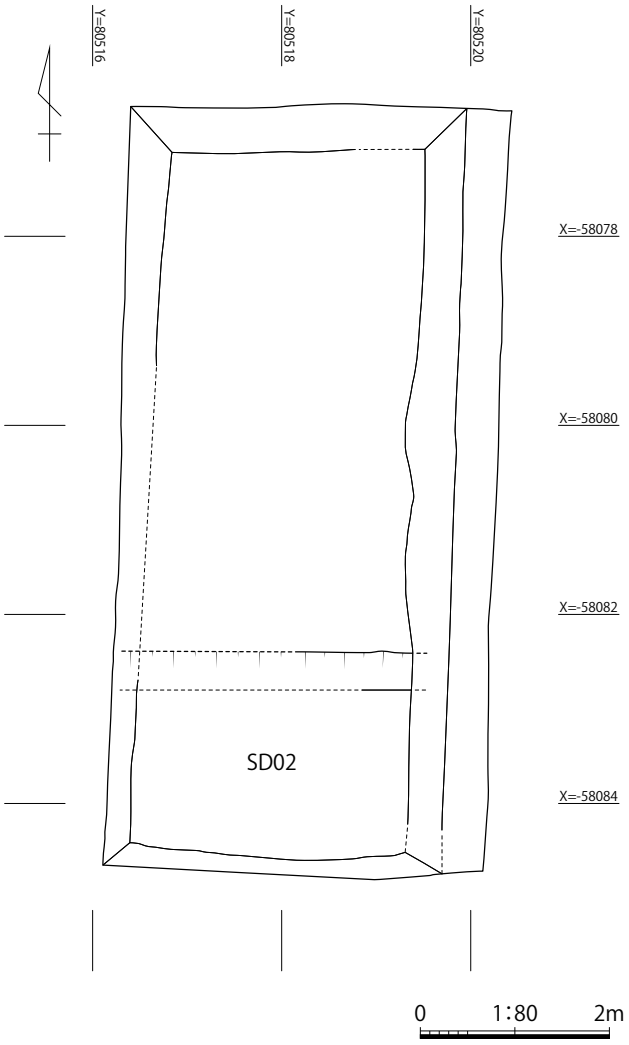
ｉ）第 4 遺構面の概要 (第 22 図)

第 4 遺構面は、標高 0.80 mで検出した城下町形成以前の旧地表面である。遺構は、素掘りの大溝 SD02 を検出した。調査区の南側で検出した SD02 は、城下町形成段階に掘削されたと考えられる素掘りの大溝で、土層断面から MJ5a 層と MJ6a 層を切り込んで掘削している状況が観察される。

SD02 が機能していた時期は、厳密には第 3 遺構面の城下町初期造成が開始される直前あるいは造成開始とほぼ同時期に位置付けられるが、SD02 の遺構平面プランは第 4 遺構面検出時に確認した。

第 4 遺構面の基盤となる MJ5a 層は、下位の MJ6a 層上面に層厚 10㎝のほぼ均一の厚さで水平堆積しており、調査区内では平坦面を確認している。MJ5a 層は、土壌の分解が進んだ黒褐色有機質粘土で、この土層中には直径 1㎝程度の砂礫が少量含まれていた (第 10 図第 23・24 層)。

なお、調査区の東側に隣接する松江城下町遺跡 (殿町 198-2 外) で確認した旧地表面では、水田耕作面として利用されていた可能性が指摘されているが、ここでは水田耕作面と考えられる痕跡は見つかっていない。遺構面の時期は、上限は不明だが、下限は第 3 遺構面の城下町初期造成土が盛られる前段階までを想定している。



第 22 図　第 4 遺構面平面図

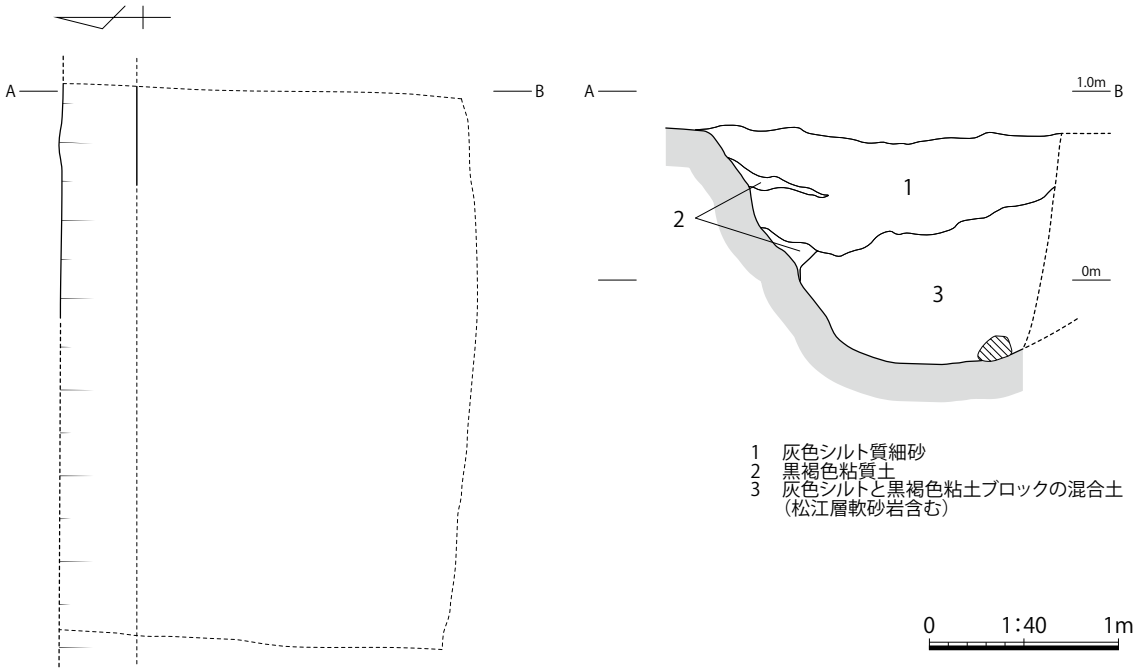
ii）第 4 遺構面の遺構と遺物

素掘りの大溝 SD02(第 23 図)

調査区の南側で検出した東西方向に一直線に延びる素掘りの大溝である。規模は長さ 3.50 m、幅 1.80 m、深さ最大 1.25 mを測る。検出面は大溝上端部で標高 0.80 m、溝底は標高 -0.45 mを測り、断面形は U 字状を呈する。大溝南側上端部は調査区外となるため検出できていないが、これまでの調査成果から溝幅は推定 4.00 m前後と考えられる。

調査区の東壁で確認した大溝埋土は、上層には灰色シルト質細砂と黒褐色有機質粘土が乱れて入る土層が堆積し、下層には灰色シルトと黒褐色粘土ブロックの混合土が堆積する。大溝底部には 20 ㎝を測る松江層軟砂岩の塊が一部混入していた。これらの埋土は、第 4 遺構面の基盤である黒褐色

有機質粘土 (MJ5a 層) と第 4 遺構面よりも下位にある灰色細砂 (MJ6a 層) の掘り上げ土と考えられ、灰色細砂と黒褐色有機質粘土が撹拌された状態で確認されるのは、大溝を掘削してからあまり時間を置くことなく埋め戻されたためと理解している。SD02 を掘り直した痕跡や自然堆積層は確認されず、廃絶時には溝の上端部まで人為的に一気に埋め戻している状況を確認した。SD02 から遺物は出土していない。



第 23 図　SD02 平面図・断面図

第 4 項　第 1 ブロックの立会調査

第 1 ブロックの立会調査対象となる主な調査原因には、電線共同溝埋設工事・上下水道管路掘削工事がある。工事の進捗状況に併せて断続的に調査を実施していることから、調査区が重複する地点も生じているが、立会調査を行った各地点をひとつの調査区 (MJR) として管理している。

第 1 ブロックで平成 18 ～ 29 年度までに立会調査を実施した地点は 37 箇所である。そのうち平成 18 ～ 24 年度に立会調査を実施した 22 箇所については『市 154』「城山 2」と『市 156』「城山 3」で報告済みであり、ここでは報告書刊行後に未報告となっていた平成 25 ～ 29 年度に立会調査を実施した 15 箇所を取り扱う (第 24 図)。表 6 には、第 1 ブロックにおいて平成 25 ～ 29 年度に立会調査を実施した調査成果を一覧表にして示した。

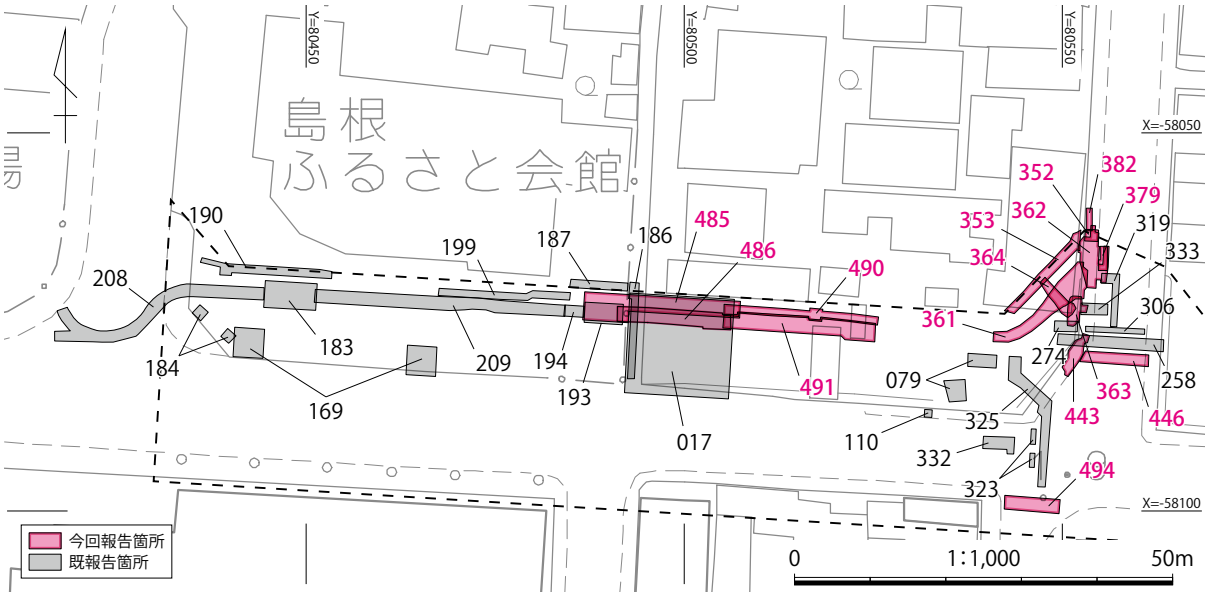
立会調査は各地点によって掘削深度が異なり、江戸時代の遺構面まで調査した地点や浅い掘削で撹乱内で掘削が終了した地点がある。ここでは一覧表に示した 15 箇所のうち、城下町の成り立ちを考える上で重要な MJR353・361・362・363・382・443 で検出した石組水路について触れておきたい。

第 1 ブロックで検出した石組水路は、歩道部分にあたる既存の道路側溝直下に位置する。MJR362 の屋敷側の石組は、道路側に対して面を揃えて 3 段積み上げられていた。石組の天端は標高 1.70 m、深さ 0.80 mを測る。石材は、最上段には来待石[20]を、以下では大海崎石を使用していた。この状況か

ら石組水路の構築以降、江戸時代を通して石組の上部は改修されるが、街区を囲う水路の位置は変わらないことを示している。

石の組み方の違いについては、石組水路の構築に時期差が生じているものと捉えており、特に道路側の石組は、度重なる洪水に対処するために嵩上げされながら現在の道路高まで積み上げられたものと想定され、道路面を嵩上げする時期によって異なる石材を使用していることが考えられる。

写真３　MJR362　石組水路断面 (北から)



※図中の番号は調査区 (MJR) を示す

第 24 図　第 1 ブロック立会調査地点位置図

表 6　第 1 ブロック立会調査箇所一覧 (平成 25 ～ 29 年度)

番号	調査区	地番	調査日	調査面積	掘削深度	検出遺構	出土遺物
1	MJR352	殿町 (県道西側)	14.01.16	2.6㎡	0.74m	遺構なし	遺物なし
2	MJR353	殿町 101 外	14.01.23	18.5㎡	0.75m	石組水路 (南北方向)	陶磁器・瓦
3	MJR361	殿町 101 外	14.03.13 ～ 03.15	33.8㎡	1.26m	石組水路 (南北方向)	陶磁器・瓦
4	MJR362	殿町 (県道西側)	14.03.22 ～ 03.26	19.1㎡	1.00m	石組水路 (南北方向)	遺物なし
5	MJR363	殿町 101 外	14.03.28	7.1㎡	1.00m	石組水路 (南北方向)	遺物なし
6	MJR364	殿町 101 外	14.04.01	16.0㎡	0.60m	遺構なし	遺物なし
7	MJR379	殿町 (県道西側)	14.06.27	3.4㎡	0.50m	遺構なし	遺物なし
8	MJR382	殿町 (県道西側)	14.08.01	2.4㎡	1.10m	石組水路 (南北方向)	遺物なし
9	MJR443	殿町 (交差点北西側)	15.06.26 ～ 06.29	8.4㎡	1.20m	石組水路 (南北方向)	遺物なし
10	MJR446	殿町 (交差点北側)	15.07.07 ～ 07.08	13.2㎡	1.10m	遺構なし	遺物なし
11	MJR485	殿町 198 外	16.11.11	54.9㎡	2.10m	石積遺構	瓦
12	MJR486	殿町 198 外	16.12.06 ～ 12.07	30.3㎡	1.50m	石積遺構	遺物なし
13	MJR490	殿町 198-7 外	17.05.24 ～ 05.25	23.0㎡	2.30m	遺構なし	遺物なし
14	MJR491	殿町 198-7 外	17.06.09	45.4㎡	1.20m	遺構なし	遺物なし
15	MJR494	殿町 (県道南側)	17.07.24	12.0㎡	1.10m	遺構なし	遺物なし

※ 1 ～ 5 は平成 25 年度、6 ～ 8 は平成 26 年度、9・10 は平成 27 年度、11・12 は平成 28 年度、13 ～ 15 は平成 29 年度の立会調査

第 5 項　小結

前項までに発掘調査成果の概要を示し、1-3 区で検出した遺構・遺物について検討を加えた。本項ではまず、調査地が松江城下町絵図のどこに位置するのかを提示し、調査地周辺の様子を概観する。そして、調査地の遺構面の時期区分と変遷を整理し、併せて調査成果についてのまとめを行うことにしたい。

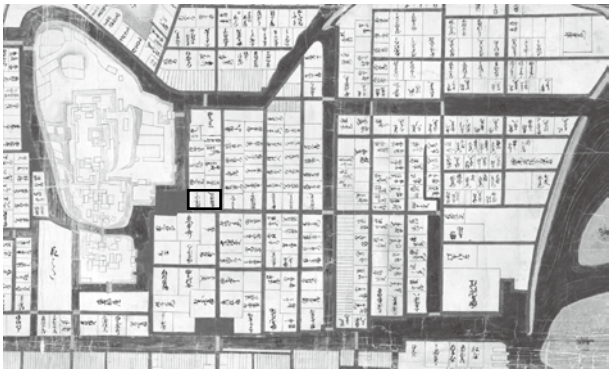
(1) 松江城下町絵図に見る調査地とその周辺

現存する江戸時代の松江城下町絵図から、17 世紀前半～ 19 世紀後半 (堀尾期・京極期・松平期) の松江城下町における屋敷地を知ることができる。ここでは屋敷地の変遷を知る上で資料とした絵図の詳細・屋敷地名義・禄高を各絵図の説明の中で記載する。なお、各絵図左側には調査地周辺部分に第 1 ブロックを示す黒枠で加筆したものを、右側にはその部分を拡大し、1-3 区推定箇所を示す黒枠を加筆して掲載した。

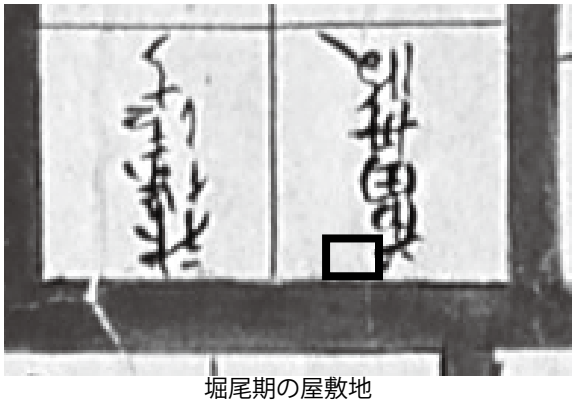
松江城の東に隣接する第 1 ブロック (殿町) は、江戸時代を通して重臣家臣の屋敷地が配置されていた街区となっていた。屋敷地は、この街区を東西にほぼ二分する形で屋敷割りがなされており、調査地である 1-3 区は街区の東側にあたる 1200 ～ 3000 石の屋敷地に比定される。絵図に記載されている屋敷地名義の向きを根拠とした場合、屋敷地の表口 (玄関部分) は江戸時代を通して城山北公園線に面した南側にあたり、調査地はこの表口周辺部分に該当するものと考えられる。

以下では各時期の絵図 5 点を通して調査地周辺の様子を概観する。

①堀尾期絵図 (第 25 図)　堀尾氏が統治していた時期の絵図として「堀尾期松江城下町絵図」(絵図作成年代：1620 ～ 33 年、島根大学附属図書館所蔵) がある。この絵図は複数枚現存する松江城下町絵図の中で、松江開府の間もない時期を示す最も古い絵図とされる。第 1 ブロックが所在する街区には 11 軒の屋敷地が配置され、明瞭な界線で屋敷地を区画している。第 1 ブロック東側の 1-3 区が比定する地点には「前田丹波」の記載が見られ、堀尾期の段階から屋敷地となっていたことが分かる。前田丹波は禄高 3000 石である。



第 25 図　堀尾期松江城下町絵図



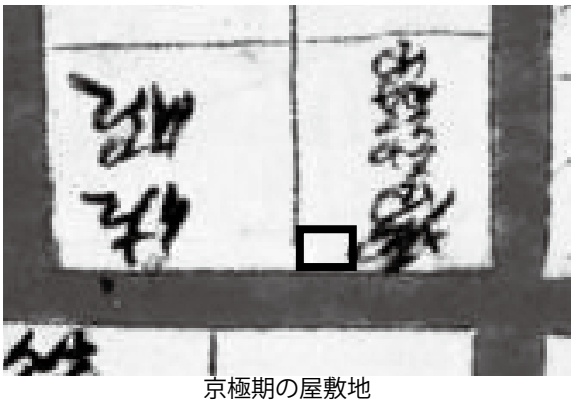
堀尾期の屋敷地

※絵図は上が北

②京極期絵図 (第 26 図)　京極氏が統治していた時期の絵図として「寛永年間松江城家敷町之図」(絵図作成年代：1634 ～ 37 年、丸亀市立資料館所蔵) がある。この絵図は京極家が所蔵していた伝来の確かな絵図である。ただし、現存の京極期絵図は清書本の写しと考えられ、所々に誤写がある[(21)]。第 1 ブロックが所在する街区は、絵図に描かれた屋敷割りが堀尾期絵図の 11 軒から京極期絵図では 8

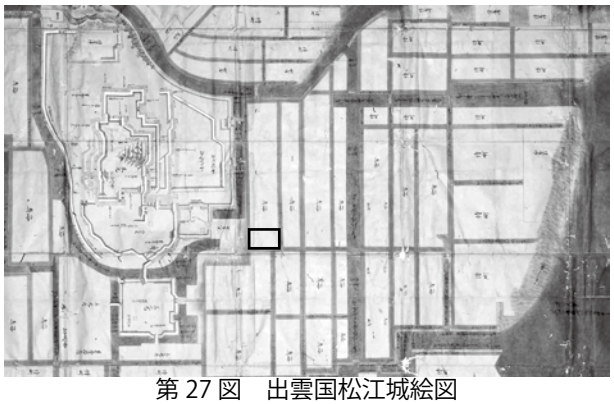
軒の屋敷地に変化している。1-3 区が比定する地点には「堀田勘解由」の記載が見られ、堀尾期の屋敷地を踏襲している様子が窺える。堀田勘解由は禄高 1200 石である。

第 26 図　寛永年間松江城家敷町之図

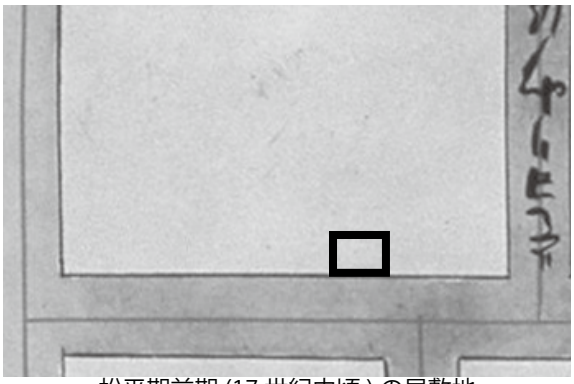


京極期の屋敷地

③松平期前期絵図 (第 27 図)　「出雲国松江城絵図」(絵図作成年代：1644 ～ 48 年、国立公文書館所蔵) は、松平氏が統治を開始した寛永 15(1638) 年に近く、17 世紀中頃の正保年間に幕府が諸藩に命じて作成させた絵図である。絵図には「侍町」の記載しか見られないが、1-3 区に武家屋敷が配置されていたことが分かる。



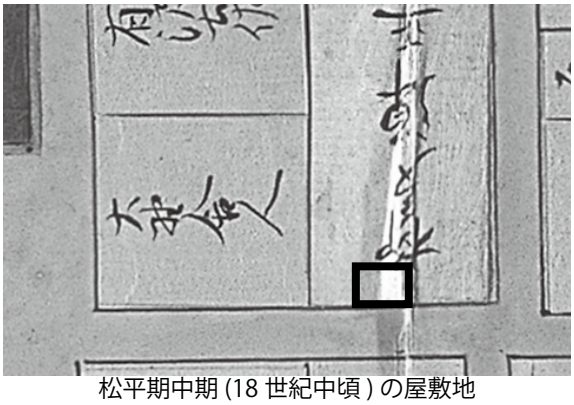
第 27 図　出雲国松江城絵図



松平期前期 (17 世紀中頃) の屋敷地

④松平期中期絵図 (第 28 図)　「松江城絵図」(絵図作成年代：1736 ～ 48 年、島根県立図書館所蔵) は、18 世紀中頃に作成された絵図である。第 1 ブロックが所在する街区は、絵図に描かれた屋敷割りが京極期絵図の 8 軒から松平期中期絵図では 5 軒の屋敷地に変化している。1-3 区が比定する地点には「柳多弾正」の記載が見られ、屋敷地の北側が拡張されて南北に長大な屋敷地に変化している。柳多弾正は禄高 2800 石である。

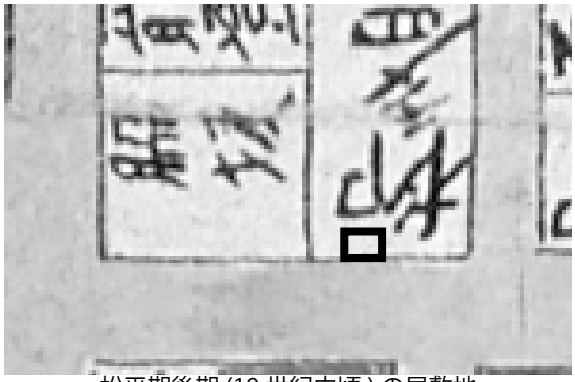
第 28 図　松江城絵図



松平期中期 (18 世紀中頃) の屋敷地

⑤松平期後期絵図 (第 29 図) 「松平期松江城下町絵図」(絵図作成年代：1825 ～ 51 年、島根大学附属図書館所蔵) は、19 世紀中頃に作成された絵図である。1-3 区が比定する地点には「柳多四郎兵衛」の記載が見られ、屋敷地北側の界線が一部変化するものの、屋敷割りは松平期中期から大きく変わらない。柳多四郎兵衛は禄高 2300 石である。

第 29 図　松平期松江城下町絵図



松平期後期 (19 世紀中頃) の屋敷地

(2) 遺構面の時期区分と変遷 (第 30 図)

ここでは、年代が古い下層の遺構面から年代が新しい上層の遺構面の順に遺構面の時期区分と変遷を示すことで、調査成果のまとめを行う。

i) 遺構面の時期区分

主な盛土や整地層、遺構の状況などを併せると遺構面の変遷は四つの時期に区分される。

第 4 面：MJ5a 層上面が相当する第 4 遺構面である。城下町が形成される以前の時期で、実年代の手がかりはないが、これより上位の層序での出土遺物の状況から見て 17 世紀初頭までが下限となるものと考えられる。

第 3 面：MJ4 層上面が生活面となっていた時期に相当する第 3 遺構面である。城下町初期造成などを含む城下町建設当初の時期から始まり、17 世紀初頭～前半の城下町成立期にあたるものと考えられる。陶磁器は中国磁器・肥前系陶器・備前擂鉢が出土している。

第 2 面：MJ3 層上面が生活面となっていた時期に相当する第 2 遺構面である。嵩上げ造成による整地が行われ、17 世紀後半～ 18 世紀後半までが含まれる。陶磁器は京信系陶器・肥前系陶磁器が出土している。

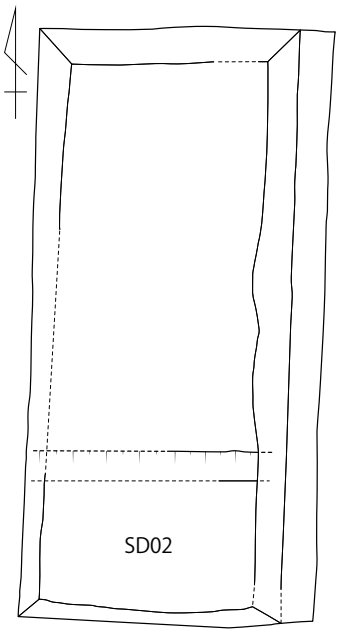
第 1 面：MJ2 層上面が生活面となっていた時期に相当する第 1 遺構面である。嵩上げ造成による整地が行われ、19 世紀前半～中頃までが含まれる。陶磁器は在地系陶器・肥前系磁器が出土している。

以下では各時期の状況についてまとめていくことにする。

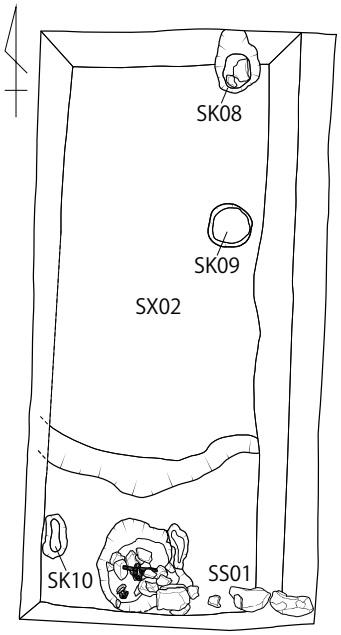
ii) 遺構面の変遷

第 4 面：城下町形成以前

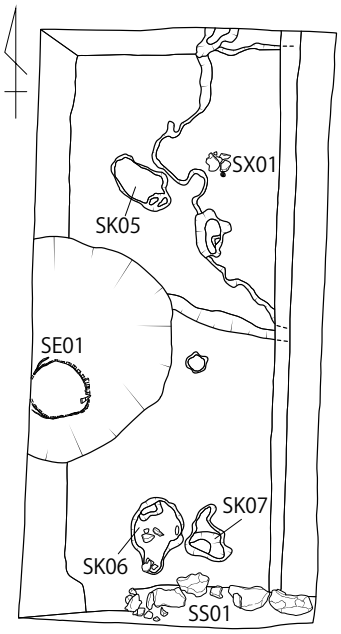
今回の発掘調査で検出した最も古い遺構面は、17 世紀初頭以前の MJ5a 層上面 (標高 0.80 m) で、城下町形成以前の旧地表面に相当する第 4 遺構面である。調査地の東側に隣接する松江城下町遺跡 (殿町 198-2 外) で確認した旧地表面では、水田畦畔状の高まりや足跡の痕跡を検出したことから水田



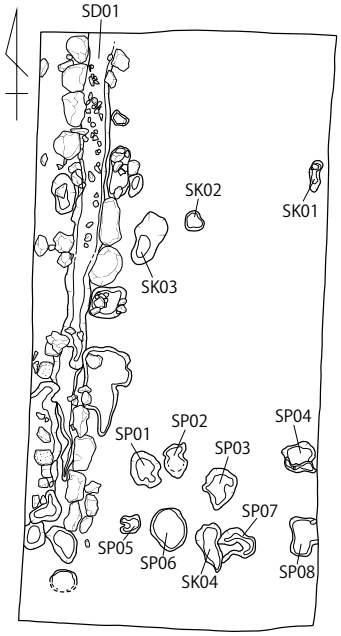
第4遺構面：城下町形成以前



第3遺構面：17世紀初頭～前半



第2遺構面：17世紀後半～18世紀後半



第1遺構面：19世紀前半～中期

0　1:100　4m

第 30 図　1-3 区遺構変遷図

耕作面となっていた可能性が指摘されているが、本遺跡では同様の遺構は確認できなかった。

第 4 遺構面精査中に検出した素掘りの大溝 SD02 は、城下町の形成に際して最初に造作されたと考えられる遺構である。検出位置は城山北公園線の北側部分にあたり、東西方向の道路と並行する位置関係である。主軸は座標軸東から 4 度ほど南を向き、道路軸と同じ傾きを示している。この大溝は、道路と屋敷地を区画するための区画境大溝に位置付けられる。

SD02 の存続期間は、これまでに城山北公園線沿線の発掘調査で検出されている区画境大溝と同様に、17 世紀初頭に城下町の地割りと屋敷地の造成を行っていた城下町初期造成段階に大溝を掘削し、造成完了後には一気に埋め戻して廃絶するといった、かなり短期間で過渡的な時期に限定的に機能していたものと考えられる。

第 3 面：17 世紀初頭～前半

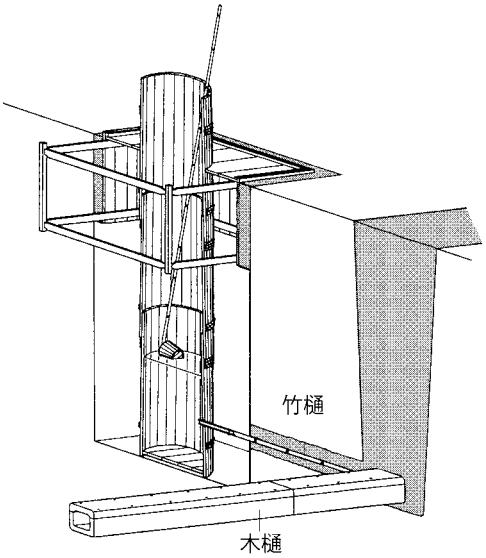
城下町初期造成段階の遺構面として確認できたのは、MJ4 層上面の第 3 遺構面である。遺物はすべて遺構面出土のもので少量に留まったが、MJ4 層上面の遺構は、出土遺物から 17 世紀初頭～前半に存在したものと考えられる。今回の調査では、前述した SD02 を埋め戻した後に、第 3 遺構面の基盤である MJ4 層で覆い、その直上に石列 SS01 を構築していることが明らかとなった。

検出した SS01 は、屋敷地の周囲を囲む塀の土台 (基壇) と考えられ、塀の下部構造が確認できたことから屋敷地表口周辺の構築物を考察する上で有効な資料といえる。SK08 ～ 10 は、円形や楕円形を呈する土坑と考えられるが遺物は含まれず、その性格については判然としていない。SX02 は、上層の第 2 遺構面を造成する際に第 3 遺構面を掘り込んで土壌の置き換えを施した痕跡と考えられる。この痕跡によって第 3 遺構面の整地層の大半は消失しており、整地層が残っていた範囲は調査区の南側約 3 分の 1 程度となっていた。

第 2 面：17 世紀後半～ 18 世紀後半

MJ3 層上面の第 2 遺構面の遺構は、遺構面出土遺物から 17 世紀後半～ 18 世紀後半に存在したものと考えられる。第 2 遺構面は、第 3 遺構面で確認した城下町初期造成土である MJ4 層の上に MJ3 層の灰色粘質土～黒褐色砂質土で嵩上げ造成を施した整地層で、この上面を生活面と捉えている。

検出した SE01 は、井戸側の木板に竹樋を結合させて水を引くための連結部分を確認したことから、上水を汲み上げる施設 (上水井戸) と考えられる。上水施設の類例として江戸遺跡の上水桶があり、構造は桶側利用の掘り井戸で伏せた桶を重ねて埋設している (第 31 図)。桶は三段構造で、上から一番側・二番側・最下底の桶は根側と呼び、底板が付く。根側には「呼樋」という竹樋が挿入され、木樋側面から導水する仕組みになっている。SE01 は、江戸



第 31 図　上水桶の構造
図説江戸考古学研究辞典 (2001) より一部加筆して転載

遺跡の上水桶と類似した構造をもつものと考えられるが、松江城下町における上水の供給源や経路・上水樋の規模と構造・屋敷内での上水の経路や使用方法などについて解明すべき課題が残る。

SS01 は、第 2 遺構面の段階まで残っており、一部改修しながら同じ位置に配置されていた可能性がある。SK05 ～ 07 は、楕円形や歪んだ円形を呈する土坑でいずれも掘り込みは浅いが、埋土に陶磁器の小片を含むことから廃棄土坑と捉えている。SX01 は、土層堆積状況から嵩上げ造成を施す過程での掘り込みの痕跡と考えられる。

第 1 面：19 世紀前半～中頃

MJ2 層上面の第 1 遺構面は、山土造成土による整地層上に形成された遺構面で、溝 SD01 や遺構面に含まれる遺物から 19 世紀前半～中頃に存在したものと考えられる。

検出した SD01 は、溝の両端に石組を伴うもので、屋敷内における排水用の溝と捉えている。SD01 の付近には建物の存在が想定されるが、今回の調査では明確な建物遺構は確認できなかった。SK01 ～ 04 の土坑群と SP01 ～ 08 の柱穴群は、いずれも掘り込みが浅く第 1 遺構面に伴わない上層から掘り込まれた近現代の遺構の底部を検出している可能性がある。

上記のように、今回の調査では調査範囲が狭小であったものの、城下町初期造成段階の素掘りの大溝、17 世紀初頭～前半の塀の土台 (基壇)、17 世紀後半～ 18 世紀後半の上水井戸、19 世紀前半～中頃の石組を伴う溝といった遺構を検出した。断片的ではあるが、これらは屋敷地の表口周辺の構造を復元していく上での手がかりになるであろう。

ⅲ）出土遺物の様相

1-3 区における出土遺物は全体量としては少ないが、遺構面において陶磁器・土師器皿・木製品・瓦が出土した。遺物組成について、前述した遺構面に追従する形で以下にまとめておきたい。

第 4 面：城下町形成以前に該当する遺物は本遺跡では出土していない。

第 3 面：17 世紀初頭～前半は、中国磁器と肥前系陶器が主体となる時期である。肥前系陶器の出土状況から見る限り胎土目段階のもので占められており、17 世紀前半の砂目段階のものは含まない。この状況から本遺跡では、17 世紀初頭に近い時期の遺物組成を示すものと考える。土師器皿は手づくね成形の京都系のみで、底部に糸切り痕をもつ在地系は出土していない。

第 2 面：17 世紀後半の肥前系陶器が減少して肥前系磁器が増加する時期から始まり、18 世紀前半～後半にかけて肥前系磁器に京信系陶器や在地系陶器が加わる時期である。17 世紀後半は中国磁器の出土がほぼ認められず、肥前系陶磁器が充足される段階と考えられる。18 世紀前半～後半は肥前系陶器が減少していくが､代わりに京信系陶器や在地系陶器などが増加し、肥前系磁器が一定量出土する段階と考えられる。本遺跡では、中国磁器が出土せず、すでに肥前系磁器が主体となっていた時期を上限とし、下限は肥前系磁器の広東碗が入ってくる前段階までと考える。土師器皿は京都系と在地系が出土し､在地系の占める割合が優勢である。

第 1 面：19 世紀前半～中頃は、肥前系磁器を主体とする組成から在地系陶器を中心とした組成に変化する時期である。本遺跡では、肥前系磁器の小丸碗や広東碗と共伴して在地系陶器である布志名焼や石見焼の出土が認められる。土師器皿は出土していない。

第 2 節　第 13 ブロック (13-2 区)　松江城下町遺跡 (南田町 108-1 外)

第 13 ブロックは、市道南田南北線から市道北田大橋線に挟まれた城山北公園線の北側部分、南田町地内の東西約 85 m×南北約 10 ～ 13 m区間である。ここでは第 13 ブロックのうち、平成 29 年度に発掘調査を実施した松江城下町遺跡 (南田町 108-1 外) の調査成果を報告する。

調査地周辺は、調査開始以前には城山北公園線沿いの民家や店舗が建ち並んでいた場所となっていた。本調査区の北側にあたる民家や店舗の裏手では、13 ブロックを東西に横断する形で事前に立会調査が行われており、本発掘調査は民家や店舗の建物解体後に実施している。

発掘調査の経過は、第 13 ブロックではこれまでに 1 箇所の本発掘調査と 11 箇所の立会調査を実施しており、本調査区の呼称は便宜的に 13-1 区としている。13-1 区は平成 27 年度に刊行した『市 167』「城山 6」において調査成果が報告されており、調査では 17 世紀初頭～前半に位置付けられる堀と堀の底部構造として障子堀が検出されている。今回報告する調査区は、第 13 ブロックでは 2 箇所目の 13-2 区となり、調査区と遺跡名の関係および掲載報告書は以下の表 7 に示した。

本発掘調査における調査区は、発掘作業工程により 4 つの調査区 (13-2a 区～ 13-2d 区) に分割して設定を行っている。13-2a 区では、本発掘調査完了後に電線共同溝管路設置のための城山北公園線道路南北横断工事が予定されていることから、安全を考慮して調査区の四方 (東西約 10.8 m×南北約 6.0 m) を鋼板矢板で囲って発掘調査を実施した。13-2b 区～ 13-2d 区では、鋼板矢板の打設は行わず、壁面に安全勾配 45°の傾斜を残しながら発掘調査を実施した。また、土層堆積状況を把握するために表土～撹乱層を除去した後、調査区北側および東側に土層観察用の壁面を残して全体の掘り下げを行った。なお、第 3 遺構面で検出した素掘りの大溝 SD04 については、本調査では溝幅が確定できなかったため、本調査完了後に松江市埋蔵文化財調査室による確認調査を実施しており、その調査成果は本文中に含めて掲載している。

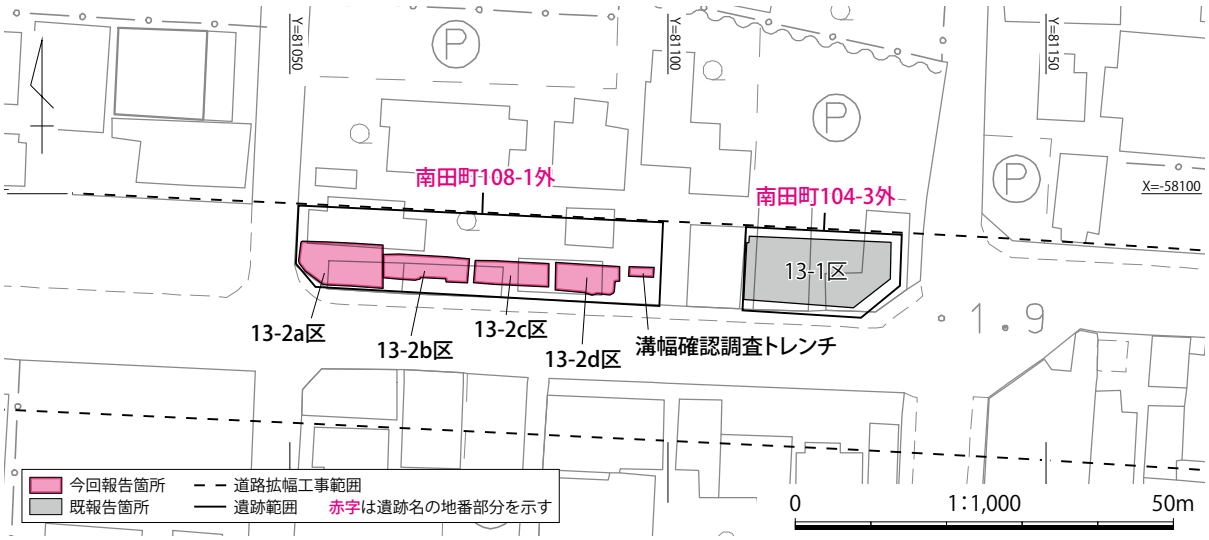
表 7　第 13 ブロック本発掘調査箇所

ブロック名	調査区名		遺跡名	掲載報告書
第 13 ブロック	13-1 区		松江城下町遺跡（南田町 104-3 外）	『市 167』「城山 6」
	13-2 区	13-2a 区	松江城下町遺跡（南田町 108-1 外）1 区	『市 185』「城山 8」
		13-2b 区	松江城下町遺跡（南田町 108-1 外）2 区	
		13-2c 区	松江城下町遺跡（南田町 108-1 外）3 区	
		13-2d 区	松江城下町遺跡（南田町 108-1 外）4 区	

第 1 項　調査区の位置 (第 32 図)

発掘調査対象地である 13-2 区は、松江城大手前から東へ約 700 mの地点に位置する。調査範囲は東西約 43.0 m×南北約 3.2 ～ 6.0 m、調査面積 162.7㎡の調査区を設定した。

第 13 ブロックを現存する堀尾期・京極期・松平期の各絵図と照合すると、堀尾期には街区に屋敷地が 1 軒、京極期～松平期には街区の東西に屋敷地が 2 軒存在していた場所に該当する。13-2 区は街区の東側にあたり、江戸時代を通して 500 ～ 750 石の家臣の屋敷地に比定される。



第 32 図　第 13 ブロック本調査区配置図

第２項　遺構面と層序 (第 33 図)

調査区の遺構検出と土層堆積状況の観察を行った結果、4 つの遺構面を確認した。遺構面は、上層から主に現地表面～撹乱層・造成土 (盛土)・旧地表面・自然堆積層に分け、その中から生活面と考えられる整地層や遺構の機能面を把握した。

本調査地は、現代の建物基礎や撹乱がおよぶ場所以外は近世の土層が良好に残されている。現地表は標高 1.50 m で、最深部で現地表下約 1.50 m (標高 0 m) までの土層堆積を確認した。第 33 図の土層図は、13-2a 区の東側に設定した東壁土層 (A-B 間) を掲載している。なお、基本的な層序は第 1 章第 2 節第 3 項で示した松江城下町遺跡基本土層と共通するものであり、遺構面で区分した土層の呼称についてはこれに準じて対応する土層名を付した。以下、各遺構面の土層堆積状況について、上層から下層の順に説明する。

MJ0・1 層：現地表面～撹乱層　標高 1.50 m、層厚 50㎝

MJ0 層は既存建物の基礎を含む撹乱層である。MJ1 層は灰色～橙褐色粘土ブロックを主体とする近現代の盛土層だが下層の江戸時代の造成土まで撹乱層が入る。そのため本調査地では、MJ0 ～ 1 層までを撹乱層とした。この土層中から 19 世紀後半～近現代の陶磁器類が出土している。

MJ2 層：第 1 遺構面　標高 1.00 m、層厚 10㎝

黄白色粘土ブロックと緑色粘土ブロックの混合土の山土を主体とする嵩上げ造成による整地層である。この遺構面から 17 世紀後半～ 18 世紀前半の陶磁器類が出土している。

MJ3a 層：第 2 遺構面　標高 0.90 m、層厚 15㎝

灰色～暗灰色粘質土を主体とする嵩上げ造成による整地層である。この遺構面から 17 世紀前半～中頃の陶磁器類が出土している。

MJ3b 層：標高 0.75 m、層厚 15㎝

第 2 遺構面の下位に堆積する土層で、灰色～暗灰色砂層を主体とする。MJ3b 層は砂層および砂礫

層が互層状に堆積し、砂粒子の大きさや水平堆積と斜交堆積の違いにより分層を行い、13-2a 区～13-2b 区西端までの範囲で確認した砂層である。この砂層について、現地での地質指導では「洪水砂」の可能性が指摘されている[22]。砂層中から瓷器系陶器や須恵器の小片が出土している。

MJ4 層：第 3 遺構面　標高 0.60 m、層厚 15㎝

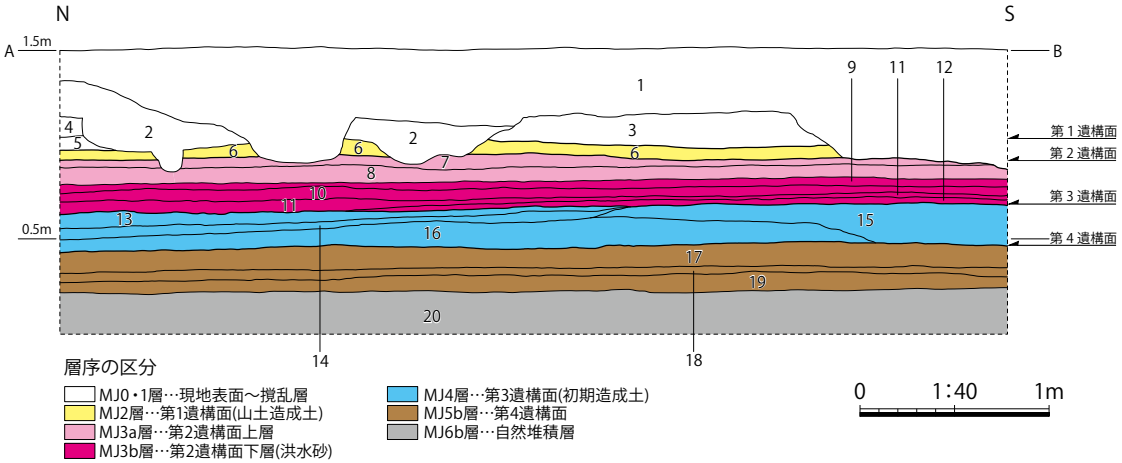
城下町形成以前の旧地表面の上に盛土された城下町初期造成段階の整地層である。MJ4 層よりも下位にある MJ5b 層の茶褐色有機質粘土と MJ6b 層の青灰色細砂の混合土を主体とし、この土壌は素掘りの大溝の掘削などによって生じた残土をそのまま造成土として使用しているものと考えられる。この遺構面から肥前系磁器を伴わない 17 世紀初頭～前半の陶磁器類が出土している。

MJ5b 層：第 4 遺構面　標高 0.45 m、層厚 25㎝

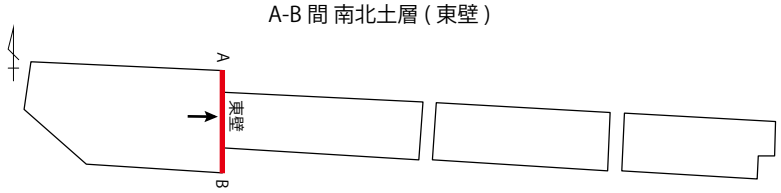
城下町形成以前の旧地表面の堆積層で、本調査地では茶褐色有機質粘土の堆積を確認した。この土層は水平堆積のラミナ層が確認でき、下位には黒色有機物層と淡茶色有機物層が堆積する。いずれも未分解の有機物層であり、水際あるいは水辺からやや離れた陸地であったことが想定される。また、調査区の西側には MJ4 層直下に城下町形成段階に掘削されたと考えられる素掘りの大溝 SD05 があり、MJ5b 層と MJ6b 層を切り込んで掘削している状況を確認した。

MJ6b 層：自然堆積層　標高 0.20 m

青灰色細砂を主体とする堆積層で、松江市街地北部の丘陵から末次砂州の北の水域に水が流れていた時代に堆積した土層である。



A-B 間 南北土層 (東壁)



1　撹乱層(近現代)
2　灰色～橙褐色粘土ブロック
3　橙褐色シルトと白色粘土ブロックの混合土(山土)
4　灰白色粘土ブロック(山土)
5　淡灰色砂層
6　黄白色粘土ブロックと緑色粘土ブロックの混合土(山土)
7　灰色粘質土
8　暗灰色粘質土
9　灰色細粒砂
10　灰色砂層と砂礫の混合土
11　淡灰色砂礫層
12　暗灰色砂層と灰色粘土の混合土
13　灰白色粗砂
14　暗灰茶色砂礫
15　茶褐色有機質粘土
16　青灰色細砂と茶褐色有機質粘土の混合土
17　茶褐色有機質粘土
18　黒色有機物層
19　淡茶色有機物層
20　青灰色細砂

第 33 図　13-2 区土層図

第３項　調査の結果

ここでは検出した遺構面の概要や遺構と遺物について、年代が新しい上層の遺構面から年代が古い下層の遺構面の順に示す。なお、本項に掲載した遺構と遺物は検出した遺構や出土した陶磁器の内容が遺構面の年代を示す上で指標となるものや良好な一括資料を図示し、そのほかの遺構と遺物については本節末に設けた小結の中にまとめて記述した。

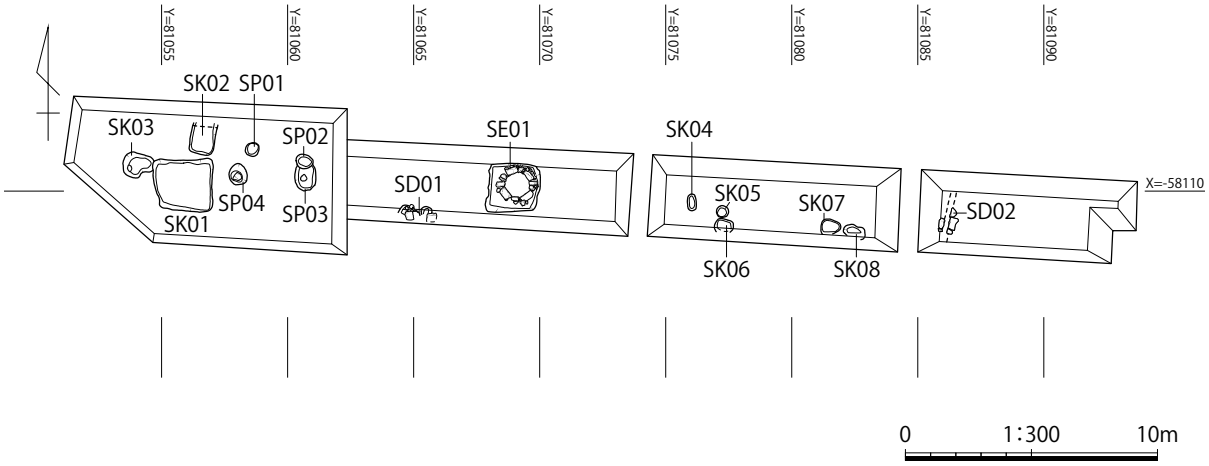
（1）第 1 遺構面

ｉ）第 1 遺構面の概要 (第 34 図)

第 1 遺構面は、標高 1.00 mで検出した遺構面である。遺構は、石積井戸 SE01、石組水路 SD01・02、土坑 SK01 ～ 08、柱穴 SP01 ～ 04 を検出した。

遺構面は、現地表面 (標高 1.50 m) 以下に堆積する層厚 50㎝の撹乱層を除去した段階で遺構を検出した任意の遺構面である。そのため、遺構面検出とした石積井戸・溝・土坑の中には、この遺構面に伴わない上層から掘り込まれた遺構の底部を図示したものが含まれている可能性もある。

第 1 遺構面の基盤となる MJ2 層は、黄白色粘土ブロックと緑色粘土ブロックの混合土の山土を主体とする嵩上げ造成による整地層である (第 33 図第 6 層)。層厚は 10㎝を測り、山土造成土を露呈した面で遺構を検出したことから、これを第 1 遺構面とした。遺構面の時期は、出土遺物の年代から 17 世紀後半～ 18 世紀前半を想定している。



第 34 図　第 1 遺構面平面図

ⅱ）第 1 遺構面の遺構と遺物

石積井戸 SE01(第 35 図)

13-2b 区の中央部で検出した石積井戸である。検出面は標高 1.00 mで、井戸の掘り方は東西 2.10 m、南北 1.90 m、深さ 2.00 mを測り、平面形は方形を呈する。井戸側の上部は消失しているが、直径 1.00 m、深さ 0.50 mを測る円形に配置された石積を確認した。

井戸側の石材は島石・来待石・大海崎石・川原石を使用し、来待石の外面には工具による加工痕が見られることから、石組水路等に使用していた来待石を転用したものと考えられる。井戸内には直径 6㎝、長さ 1.80 m竹管が残っており、井戸の廃絶時には竹管を井戸内に立てる「筒立て」がなされたものと捉えている。石積井戸の埋土は暗灰色シルトの単層で、埋土中から陶磁器と多量の平瓦が出

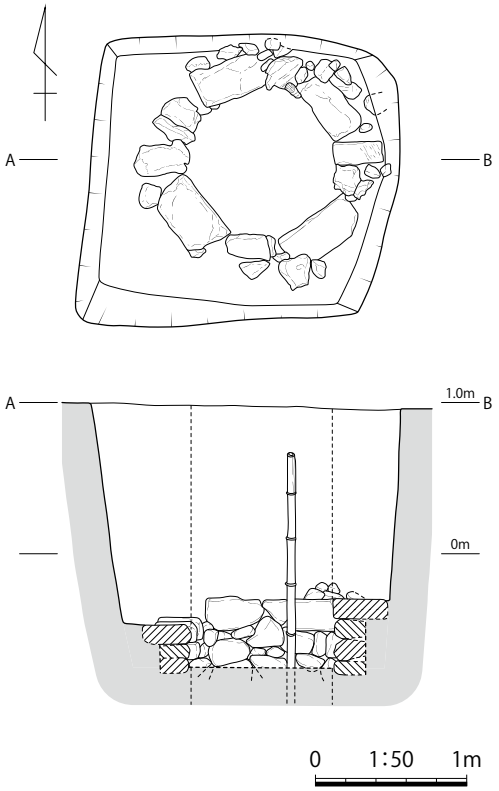
土しており、いずれも廃絶時に廃棄されたものである。なお、SE01 は第 1 遺構面に含めたが、出土遺物から第 1 遺構面よりも上層から掘り込まれた 19 世紀後半の遺構と考えられる。

SE01 出土遺物 (第 36 図)

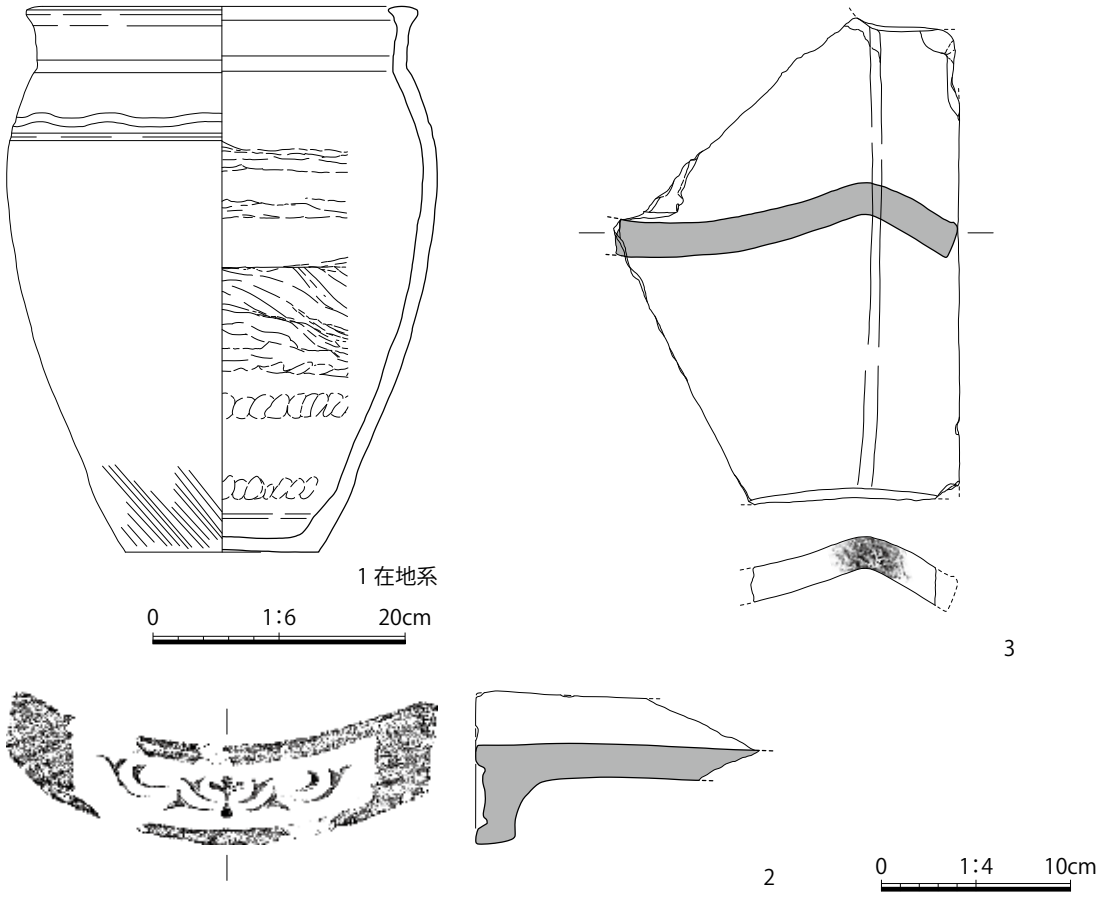
ここでは SE01 の埋土から出土した遺物を掲載するが、これらは井戸を埋めた際の廃棄段階のものである。この他、在地系陶器や瀬戸磁器が出土しているが、いずれも小片で図化できるものではなかった。

36-1 は在地系陶器の甕である。胴部外面上方に 2 条の波状文を施し、内面上方～中央に横と斜め方向のケズリ、下方に指押さえの痕跡が残る。19 世紀後半か。

36-2・3 は瓦である。36-2 は軒平瓦である。中心飾り下端の珠文と連結する橘文を置き、外側に簡略化された唐草文を配す。松江城軒平瓦分類橘 B 類 I に該当する。36-3 は左桟瓦である。尻側は欠損するが切り込みが入るもので、頭側に菊花文のスタンプが押される。



第 35 図　SE01 平面図・断面図

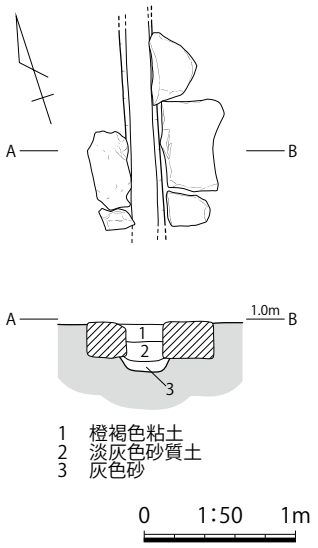


第 36 図　SE01 出土遺物

溝 SD02(第 37 図)

13-2d 区の西端で検出した石組を伴う南北溝で、規模は長さ 1.50 m、幅 0.20 m、深さ 0.32 mを測る。溝の両端に石組を伴い、石組の天端は標高 0.98 m、主軸方位は N － 4°－ E である。溝底部は標高 0.60 ～ 0.64 mで、排水方向は北から南へ向かう。

溝埋土は上層から橙褐色粘土 (第 1 層)、淡灰色砂質土 (第 2 層)、灰色砂 (第 3 層) が堆積する。石組は 1 段で溝の両端に据え置かれ、溝の内側に対して面をもつ。石組の北側は上層の撹乱により消失している。石材には長軸 30 ～ 50㎝を測る大海崎石が使用されている。SD02 の性格は、検出位置から屋敷地内における排水用の溝と考えられる。SD02 から遺物は出土していない。



第 37 図　SD02 平面図・断面図

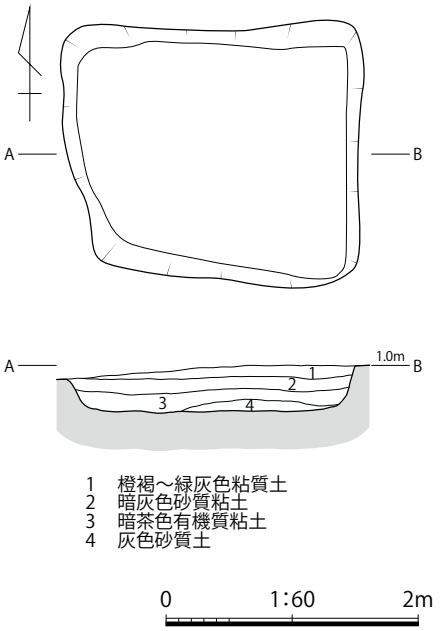
土坑 SK01(第 38 図)

13-2a 区の西側で検出した廃棄土坑である。検出面は標高 1.00 mで、平面形は方形を呈する。規模は上縁長軸が 2.35 m、短軸が 1.95 m、深さ 0.36 mを測る。

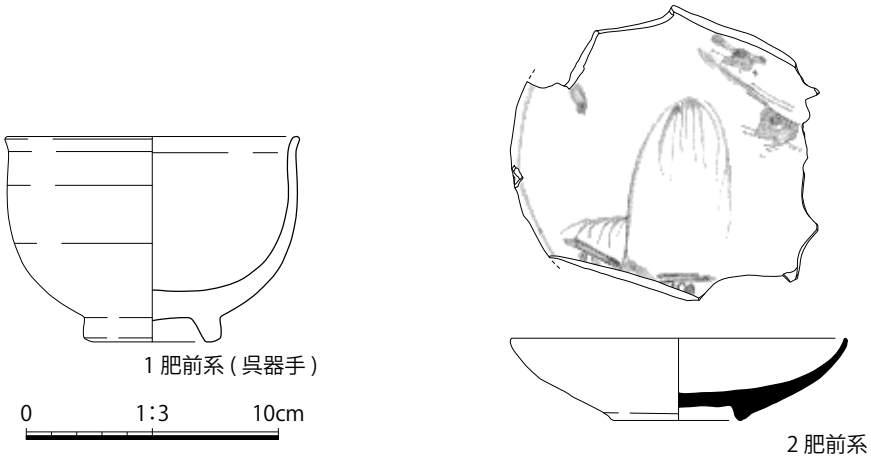
土坑埋土は 4 層に分層でき、下位の暗茶色有機質粘土から陶磁器が出土している。

SK01 出土遺物 (第 39 図)

ここでは SK01 の埋土から出土した遺物を掲載する。39-1・2 は国産陶磁器である。39-1 は肥前系陶器の呉器手碗である。高台から上方に向けて緩やかに胴部が延び、口縁部がやや外反する。畳付は無釉。九陶Ⅲ期 (1650 ～ 1690 年代)。39-2 は肥前系磁器の皿である。畳付は無釉で、内面に柳文を描く。九陶Ⅲ期 (1650 ～ 1690 年代)。



第 38 図　SK01 平面図・断面図

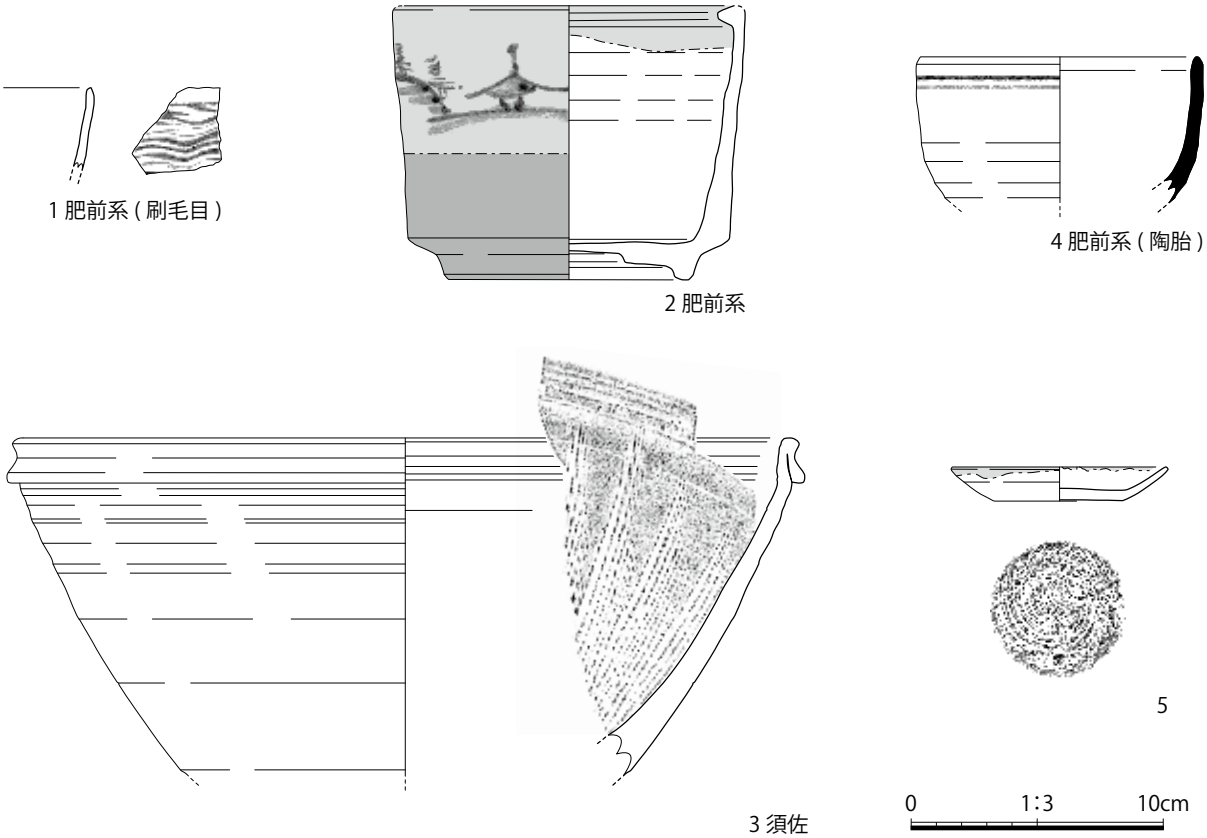


第 39 図　SK01 出土遺物

第 1 遺構面遺構外出土遺物 (第 40 図)

ここで掲載する遺物は、第 1 遺構面直上から出土したものを遺構外出土遺物として取り扱う。

40-1 ～ 4 は国産陶磁器である。40-1 は肥前系陶器の刷毛目碗である。口縁部のみだが、外面に白土を掛けて刷毛目文とする。九陶Ⅲ期 (1650 ～ 1690 年代)。40-2 は肥前系陶器の火入である。口縁部～胴部外面上半に長石釉と下半に鉄釉の掛け分けを施し、胴部上半に山水文を描く。蛇ノ目高台で、高台内は無釉。九陶Ⅳ期 (1690 ～ 1780 年代)。40-3 は須佐 (山口) の擂鉢である。やや内湾気味の胴部と口縁部直前で直立させて折り返す口縁をもつ。17 世紀後半～ 18 世紀前半のもので、佐伯氏分類Ⅰ群Ａ類に該当する。40-4 は肥前系磁器の陶胎染付碗である。九陶Ⅳ期 (1690 ～ 1780 年代)。40-5 はロクロ成形の在地系土師器皿で、底部に糸切り痕をもつ灯明皿である。



第 40 図　第 1 遺構面遺構外出土遺物

(2) 第 2 遺構面

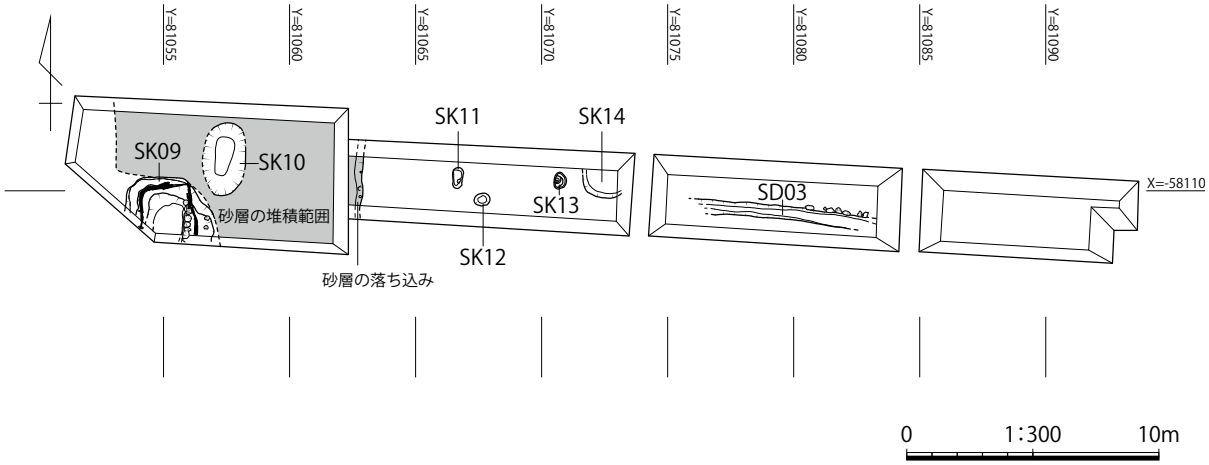
i) 第 2 遺構面の概要 (第 41 図)

第 2 遺構面は、標高 0.90 m で検出した遺構面である。遺構は、溝 SD03、土坑 SK09 ～ 14 を検出した。

第 2 遺構面の基盤となる MJ3 層は、上位と下位で土層堆積状況が異なるため、上位の灰色～暗灰色粘質土を主体とする嵩上げ造成による整地層を MJ3a 層、下位に堆積する灰色～暗灰色砂層を MJ3b 層とし、概ね 6 層に細分した (第 33 図第 7 ～ 12 層)。層厚は 30㎝を測り、最上位の整地層を露呈した面で遺構を検出したことから、これを第 2 遺構面とした。

MJ3a 層は 13-2a 区～ 13-2d 区までの調査区内のほぼ全域で確認したが、MJ3b 層は 13-2a 区～ 13-2b 区西端までの限られた範囲で確認した砂層である。この砂層について、現地での地質指導では

「洪水砂」の可能性が指摘されている。遺構面の時期は、出土遺物の年代から 17 世紀前半～中頃を想定している。



第 41 図　第 2 遺構面平面図

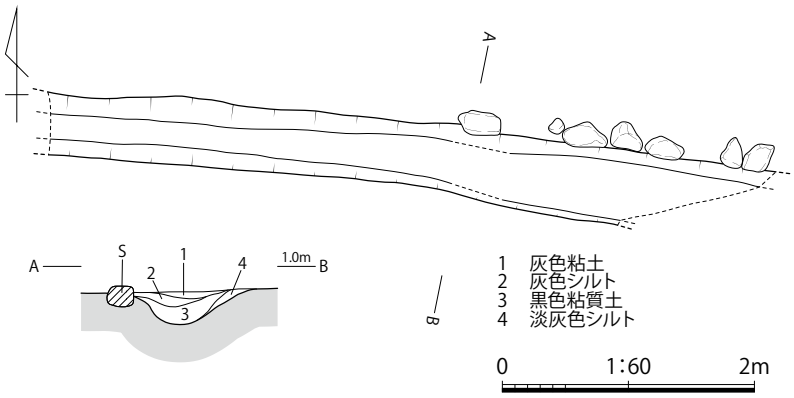
ii）第 2 遺構面の遺構と遺物

溝 SD03(第 42 図)

13-2c 区で検出した東西溝で、規模は長さ 6.00 m、幅 0.50 m、深さ 0.25 mを測る。溝の北側では石列を検出し、土層断面から溝に伴う石列と捉えている。石列の天端は標高 0.85 m、主軸方位は E － 4°－ S である。石列は 1 段で溝の北側に据え置かれ、溝の内側に対して面をもつ。西側の石列は消失しているが、石材には長軸 20 ～ 30㎝を測る大海崎石が使用されている。溝底部は標高 0.40 ～ 0.60 mで、排水方向は西から東へ向かう。

溝埋土は上層から灰色粘土 (第 1 層)、灰色シルト (第 2 層)、黒色粘質土 (第 3 層)、淡灰色シルト (第 4 層) が堆積する。

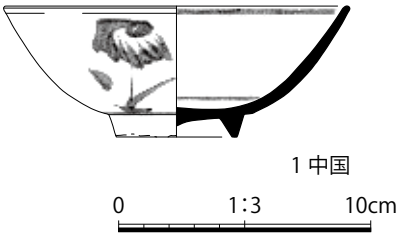
SD03 の性格は、検出位置から屋敷地内における排水用の溝と考えられる。なお、溝の片側だけで検出した石列は、屋敷地内の建物と空閑地の区画境となっていたことも想定される。



第 42 図　SD03 平面図・断面図

SD03 出土遺物 (第 43 図)

ここでは SD03 の石列上面から出土した遺物を掲載する。43-1 は中国磁器で、漳州窯系の青花碗である。胴部外面に草花文、内面上下に圏線を描く。内外面とも口縁部～胴部のみに施釉し、見込みと高台内に釉薬は掛からない。16 世紀末～ 17 世紀初頭のもので、森氏分類青花碗 G 群粗製に該当する。

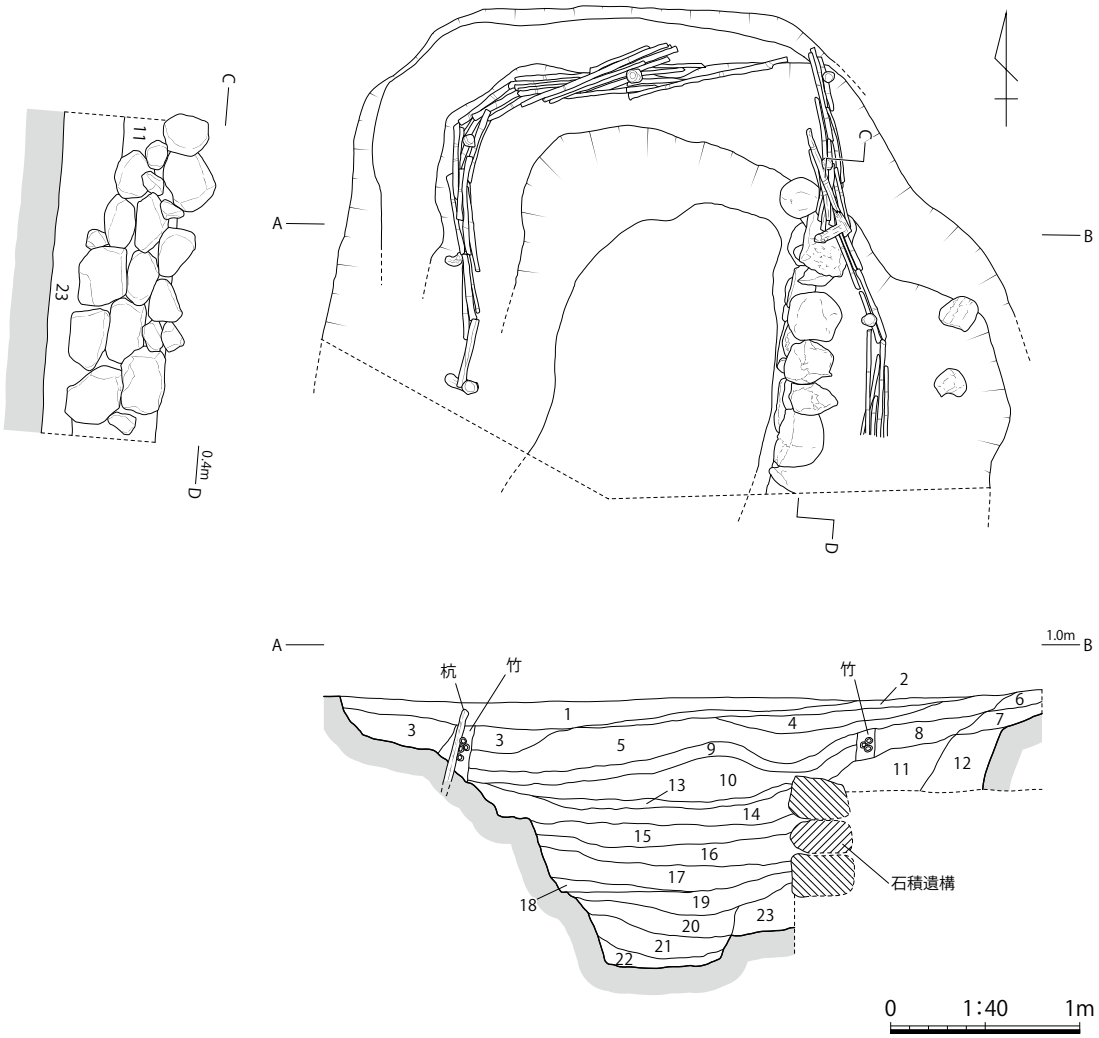


第 43 図　SD03 出土遺物

石積土坑 SK09(第 44 図)

13-2a 区の南側で検出した石積土坑である。検出面は標高 0.84 mで、平面形は長楕円形と考えられるが土坑の南側は調査区外となるため、遺構検出は２分の１程度と想定する。規模は上縁長軸が 3.60 m、短軸が 2.45 m、深さ 1.44 mを測る。

土坑中で検出した石積は東面のみを確認したが、遺存していない石積は廃棄段階に壊されたものと捉え、機能当初には方形で四面あったものと想定している。石積は標高 0.30 mで天端を検出し、長さ 1.70 m、深さ 0.70 mを測り、３段の石積を確認した。石材には長軸 30 ～ 40㎝を測る大海崎石と川原石が使用されている。



1　灰色砂とオリーブ灰色粘土ブロックの混合土
2　暗灰色粘土
3　淡灰色砂質粘土
4　灰色砂と白色粘土ブロックの混合土
5　灰色砂(礫混じり)
6　暗灰色砂
7　灰色砂
8　灰色粘土
9　茶灰色有機物層
10　淡赤灰色粘土
11　青緑灰色粘土ブロック
12　暗茶色有機質土
13　暗灰色粘土(有機物含む)
14　灰色砂礫層(3～5cm大の礫敷き)
15　淡灰白色砂
16　淡茶灰色粘土
17　暗灰色砂(シルトブロック混じり)
18　黒色有機物層
19　淡灰色粘土
20　暗灰色粘土(シルトブロック混じり)
21　オリーブ灰色シルト質粘土
22　黒色粘土
23　暗茶色有機物層

第 44 図　SK09 平面図・断面図

石積の直上では東西 1.90 m、南北 2.10 mの範囲で竹囲いを検出した。検出した竹は長さ 80㎝前後で、3 ～ 5 本単位で重なった状態を確認し、竹囲いの範囲には直径 5㎝、長さ 80㎝の木杭が 50 ～ 60㎝の間隔で打ち込まれていた。石積を囲うように竹囲いが施されていることから、竹囲いを設置することによって石積へ土砂の流れ込みを防ぐための遮蔽物と捉えている。

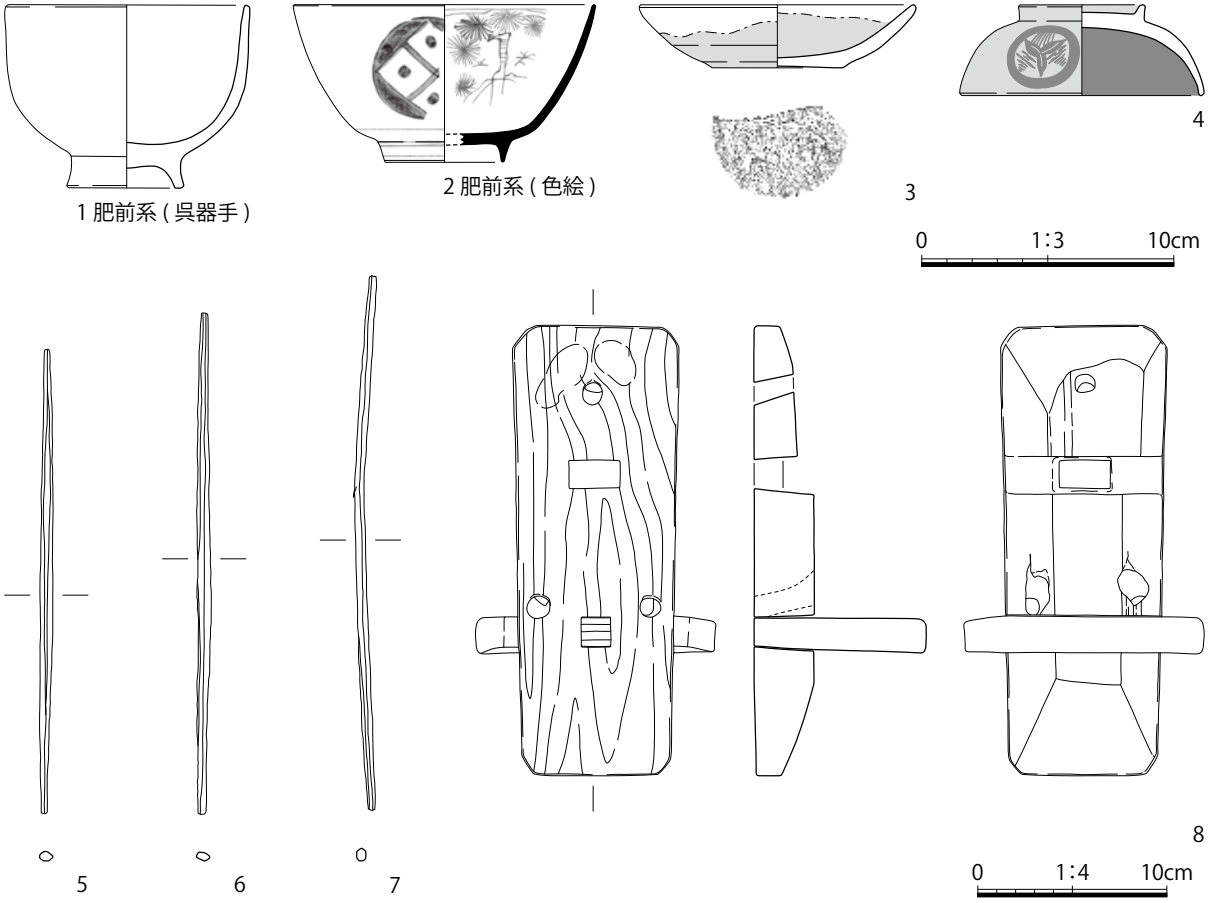
土坑埋土は粘土層・砂層・砂礫層・有機物層が堆積し、土層断面の茶灰色有機物層 (第 9 層) と灰色砂礫層 (第 14 層) から陶磁器・土師器皿・木製品が出土している。

SK09 の性格は、機能段階には竹囲いを伴う石積の地下室あるいは井戸として利用されていたが、最終的には廃棄土坑として利用されたものと考えられる。

SK09 出土遺物 (第 45 図)

ここでは SK09 の埋土から出土した遺物を掲載する。45-1・2 は国産陶磁器である。45-1 は肥前系陶器の呉器手碗である。高台から上方に向けてほぼ直立に胴部が延び、畳付は無釉。九陶Ⅲ期 (1650 ～ 1690 年代)。45-2 は肥前系磁器の色絵碗である。色絵は被熱により全体的に色飛びが見られるが、胴部外面に四つ目菱文、内面に松文を描く。九陶Ⅲ期 (1650 ～ 1690 年代)。45-3 はロクロ成形の在地系土師器皿で、底部に糸切り痕をもつ灯明皿である。

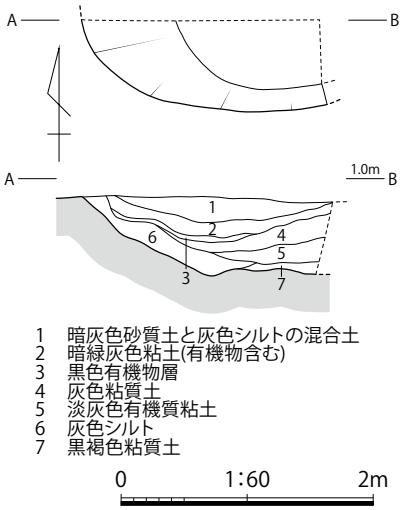
45-4 ～ 8 は木製品である。45-4 は漆器椀の蓋である。塗色は外面が黒色、内面が赤色で、外面に草文の漆絵を施す。45-5 ～ 7 は白木の箸で、長さ 24 ～ 28㎝を測る。45-8 は角型差込下駄である。木取りは柾目、歯高は 9.1㎝を測る。



第 45 図　SK09 出土遺物

土坑 SK14(第 46 図)

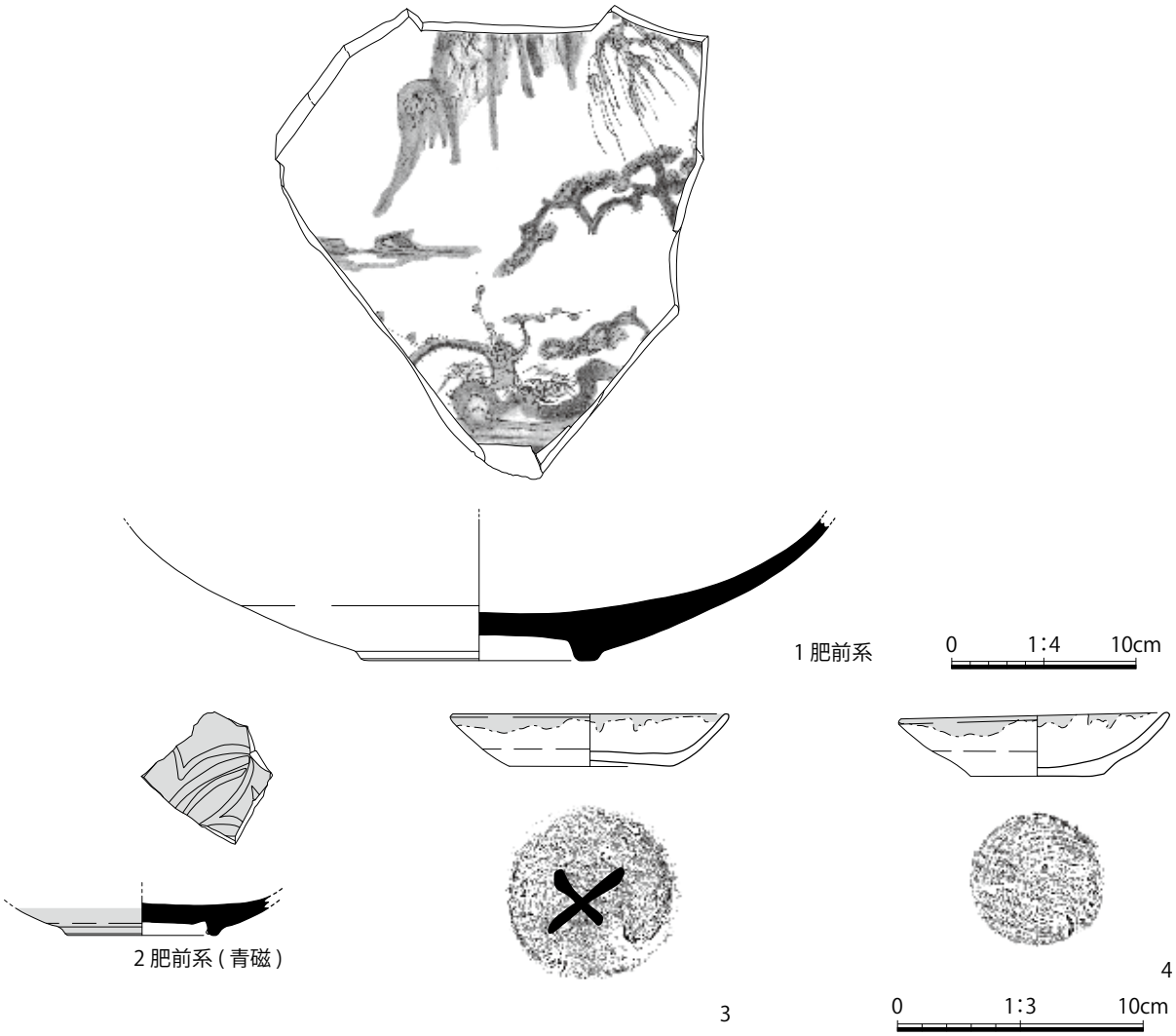
13-2b 区の北東角で検出した廃棄土坑である。検出面は標高 0.85 mで、平面形は楕円形と考えられるが、土坑の北側および東側は調査区外のため、遺構検出は 4 分の 1 程度と想定する。規模は上縁長軸が 1.90 m、短軸が 0.74 m、深さ 0.55 mを測る。土坑埋土は 7 層に分層でき、下位の淡灰色有機質粘土から陶磁器と土師器皿が出土している。



第 46 図　SK14 平面図・断面図

SK14 出土遺物 (第 47 図)

ここでは SK14 の埋土から出土した遺物を掲載する。47-1・2 は国産磁器である。47-1 は肥前系磁器の大皿である。内面に植物文を描く。畳付は釉剥ぎで、体部断面には漆継ぎの痕跡が見られる。九陶Ⅱ -2 期 (1630 ～ 1650 年代)。47-2 は肥前系磁器の青磁皿である。内面にヘラ彫りによる花弁文の陰刻を施す。九陶Ⅱ -2 期 (1640 年代)。47-3･4 はロクロ成形の在地系土師器皿で、底部に糸切り痕をもつ灯明皿である。47-3 には底部外面に墨書で「×」印が描かれる。



第 47 図　SK14 出土遺物

砂層の堆積について

第２遺構面の下位に堆積し、標高 0.75 mで検出した MJ3b 層は、13-2a 区～ 13-2b 区西端までの限られた範囲で確認した砂層である。この砂層について、自然に堆積したものなのか人為的に造成したものなのか評価が分かれるものであった。現地での地質指導では前者の自然に堆積した可能性が指摘された。

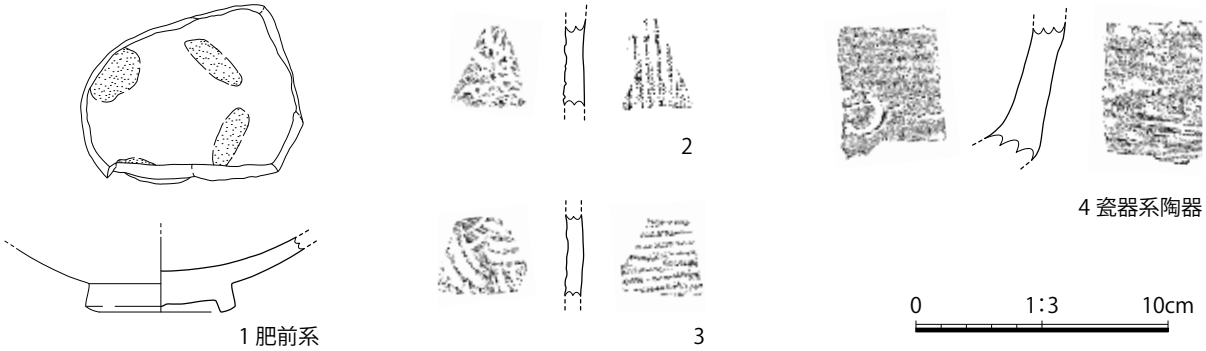
MJ3b 層は砂層および砂礫層が互層状に堆積し、砂粒子の大きさや水流による水平堆積と斜交堆積が観察されることから、数回にわたって堆積したものと捉えられる。砂層の供給源は現段階では不明となるが、調査区内の土層断面では北から南へ向かって砂層が斜交堆積している状況が見られることから、調査地周辺に堆積していた砂層が洪水の影響を受けて当地へ向かって堆積した可能性が考えられる。また、砂層中から須恵器の小片が出土していることは、他所から砂層が運び込まれていた可能性を示すものである。砂層が堆積した時期は、後述する第３遺構面の生活面が廃絶した段階以降～第２遺構面の整地層である MJ3a 層を造成するまでの間に限定される。

写真４　砂層検出状況 (東から)

写真５　砂層の堆積状況 (西から)

砂層出土遺物 (第 48 図)

ここでは砂層上面および砂層中から出土した遺物を掲載する。48-1 は砂層上面から出土した肥前系陶器の砂目皿である。内面に４箇所の砂目痕が残り、畳付は無釉。九陶Ⅱ期 (1610 ～ 1650 年代)。48-2・3 は砂層中から出土した須恵器の甕の小片である。内面に同心円状のタタキ、外面に格子状のタタキを施す。48-4 は砂層中から出土した瓷器系陶器の壺甕類の底部片である。内面に横方向のナデ痕跡をもち、丸印のスタンプが押されている。16 世紀後半か。



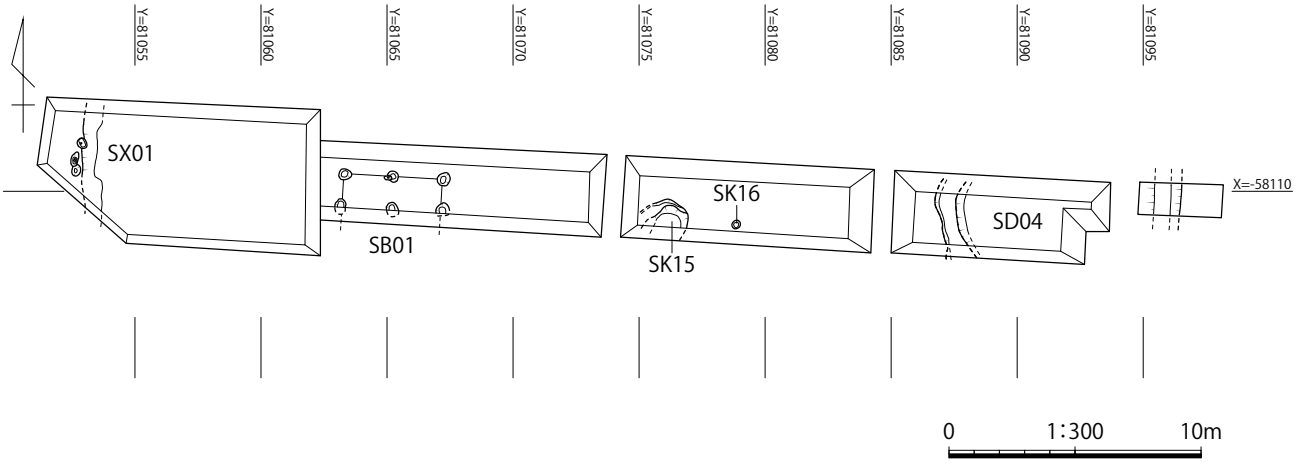
第 48 図　砂層出土遺物

(3) 第 3 遺構面

i) 第 3 遺構面の概要 (第 49 図)

第 3 遺構面は、標高 0.60 m で検出した遺構面である。遺構は、建物跡 SB01、素掘りの大溝 SD04、土坑 SK15・16、その他の遺構 SX01 を検出した。13-2d 区で検出した SD04 は、本調査では溝幅が確定できなかったため、本調査完了後に松江市埋蔵文化財調査室による確認調査を実施しており、その調査成果は本文中に含めて掲載している。13-2a 区の西端で検出した SX01 は、本遺構面の基盤層を土盛りした痕跡である。この土盛りについては、屋敷地に伴う土羽やここを道路面としていた可能性が想定される。

第 3 遺構面の基盤となる MJ4 層は、青灰色細砂と茶褐色有機質粘土の混合土を主体とする城下町初期造成段階の整地層である (第 33 図第 13 ～ 16 層)。この土壌は、後述する素掘りの大溝の掘削などによって生じた残土をそのまま造成土として使用しているものと考えられる。層厚は 15㎝を測り、整地層を露呈した面で遺構を検出したことから、これを第 3 遺構面とした。遺構面の時期は、出土遺物の年代から 17 世紀初頭～前半を想定している。



第 49 図　第 3 遺構面平面図

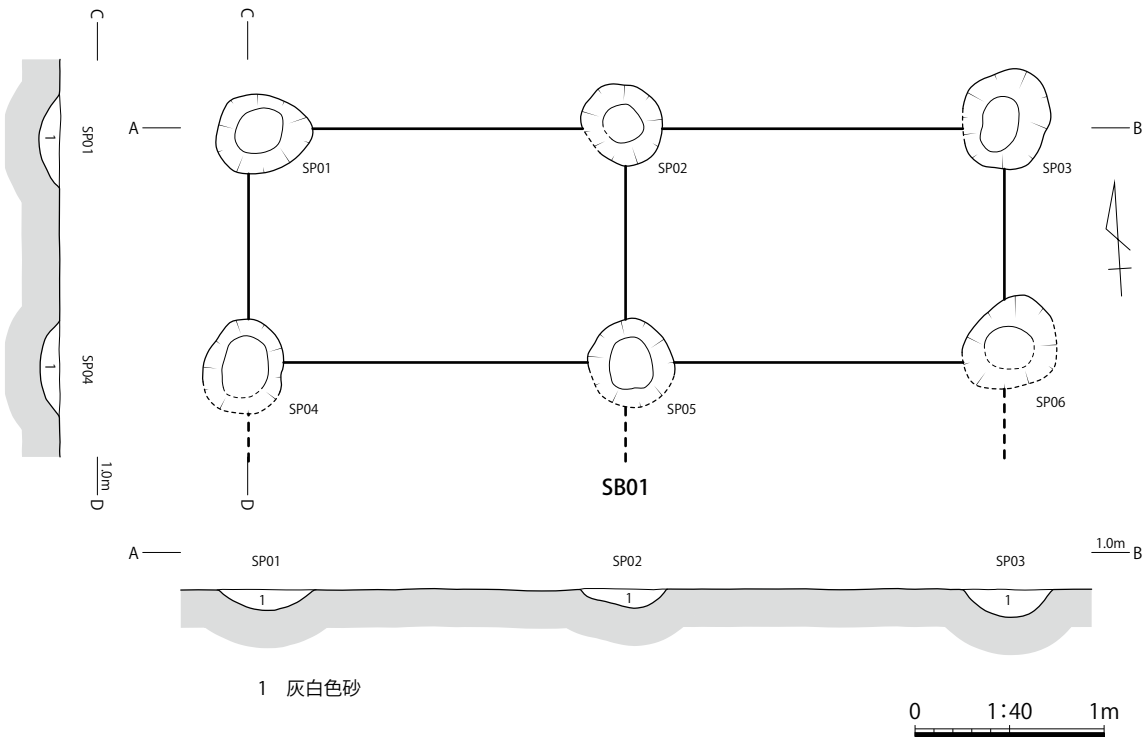
ii) 第 3 遺構面の遺構と遺物

建物跡 SB01(第 50 図)

13-2b 区の西側で検出した建物跡である。検出面は標高 0.75 m で、建物の主軸方位は E － 4°－ S である。規模は東西 2 間×南北 1 間以上の構造で、東西 3.92 m、南北 1.96 m を測る。柱間寸法は現地測量での 1 間＝ 1.96 m (6 尺 5 寸) を基準としている。

建物を構成する柱穴は 6 穴検出した。いずれも直径 40 ～ 50㎝の円形を呈し、深さ 10 ～ 15㎝の浅い掘り込みであった。柱穴埋土には灰白色砂の単層が堆積し、柱痕跡や根石は見られない。

SB01 の性格は、屋敷地側面の道路側に近接する位置にあたることから、簡易的な長屋や倉庫等の建物が想定される。なお、建物検出部分とそれ以外の場所では造成土に使用される土壌が異なっており、建物検出部分では茶褐色有機質粘土が多く含まれ、それ以外の場所では青灰色細砂が多いといった造成土の違いを観察した。SB01 から遺物は出土していない。



第 50 図　SB01 平面図・断面図

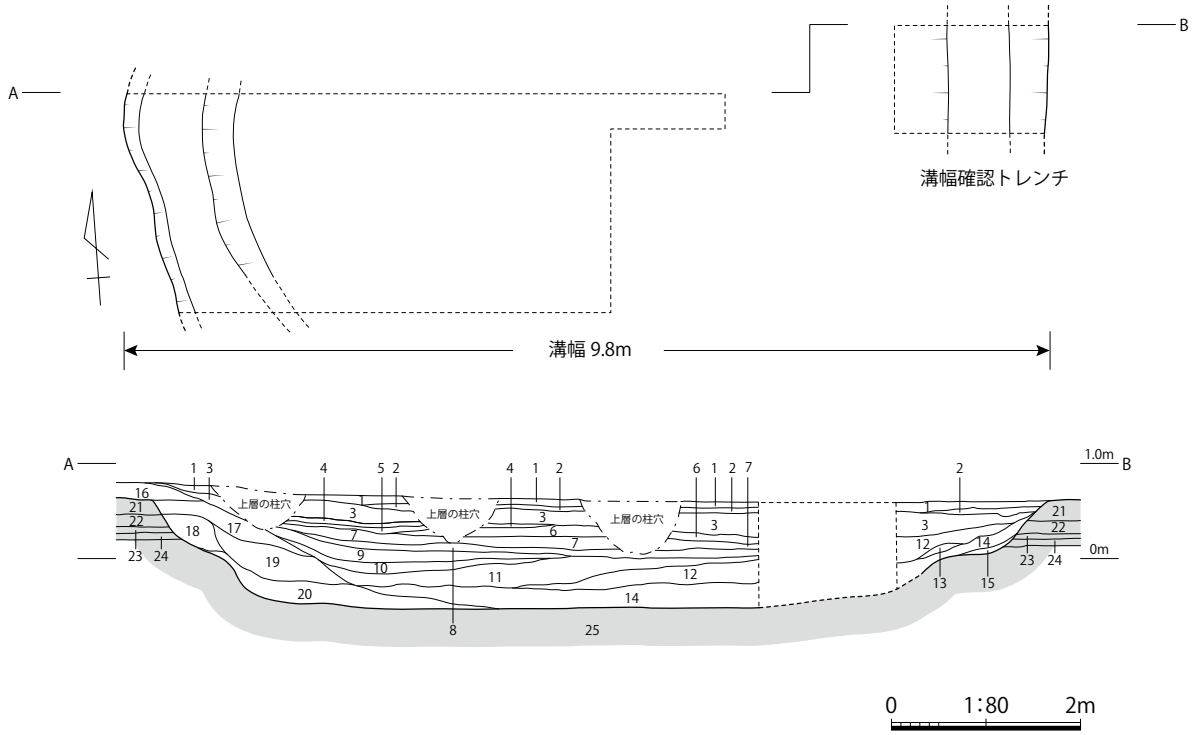
素掘りの大溝 SD04(第 51 図)

13-2d 区で検出した素掘りの大溝である。SD04 は、本調査前に 13-2d 区の北側で実施している立会調査 (MJR475) で検出した大溝と繋がる遺構であることが判明し、南北方向に延びる大溝と考えられた。検出面は大溝上端部で標高 0.80 m、溝底は標高 -0.50 mを測り、断面形は U 字状を呈する。

規模は立会調査の成果を含めると長さ 8.50 m、深さ最大 1.20 mを測る。本調査では溝肩西側の立ち上がりを確認したが、溝幅が確定できなかったため、本調査完了後に松江市埋蔵文化財調査室による確認調査を実施した。この調査によって SD04 の溝肩東側の立ち上がりを確認し、大溝の東西幅は 9.80 mであることが判明した。これまでに確認した大溝の中でも最大規模の部類に入るものである。また、大溝の溝肩西側は南東方向へ向かって緩やかに湾曲し、調査区の南側に位置する既存の道路側溝まで到達しない状況を示していた。

大溝埋土は、粘土層・砂層・有機物層・自然堆積層が堆積する。埋土の下位には自然に埋まった堆積層が見られ、上位には人為的に埋め戻された砂層や有機物層が見られる。土層断面から SD04 は、第 1 段階と第 2 段階の 2 時期にわたって機能していることが考えられた。特に大溝埋土西肩付近の土層堆積状況を見ると、第 1 段階の大溝は掘削された後、一定期間はオープンな状態で機能していたことが考えられる。この大溝を一度埋め戻す際に、土層断面第 17 ～ 20 層が堆積するが、第 2 段階で新たに大溝が掘り直されたものと理解している。第 2 段階の大溝も一定期間はオープンな状態で機能していたが、土層断面第 1 ～ 15 層で人為的に埋め戻しを行い、埋め戻しの際に廃棄されたものと考えられる陶器・食物残滓・木製品などを含む有機物層の堆積が見られる。

SD04 の性格は、屋敷地と屋敷地の境界となる屋敷境大溝と考えられるが、その他の用途も想定できることから、詳細は本節末の小結の中で出土遺物と絵図を含めて検討を行う。



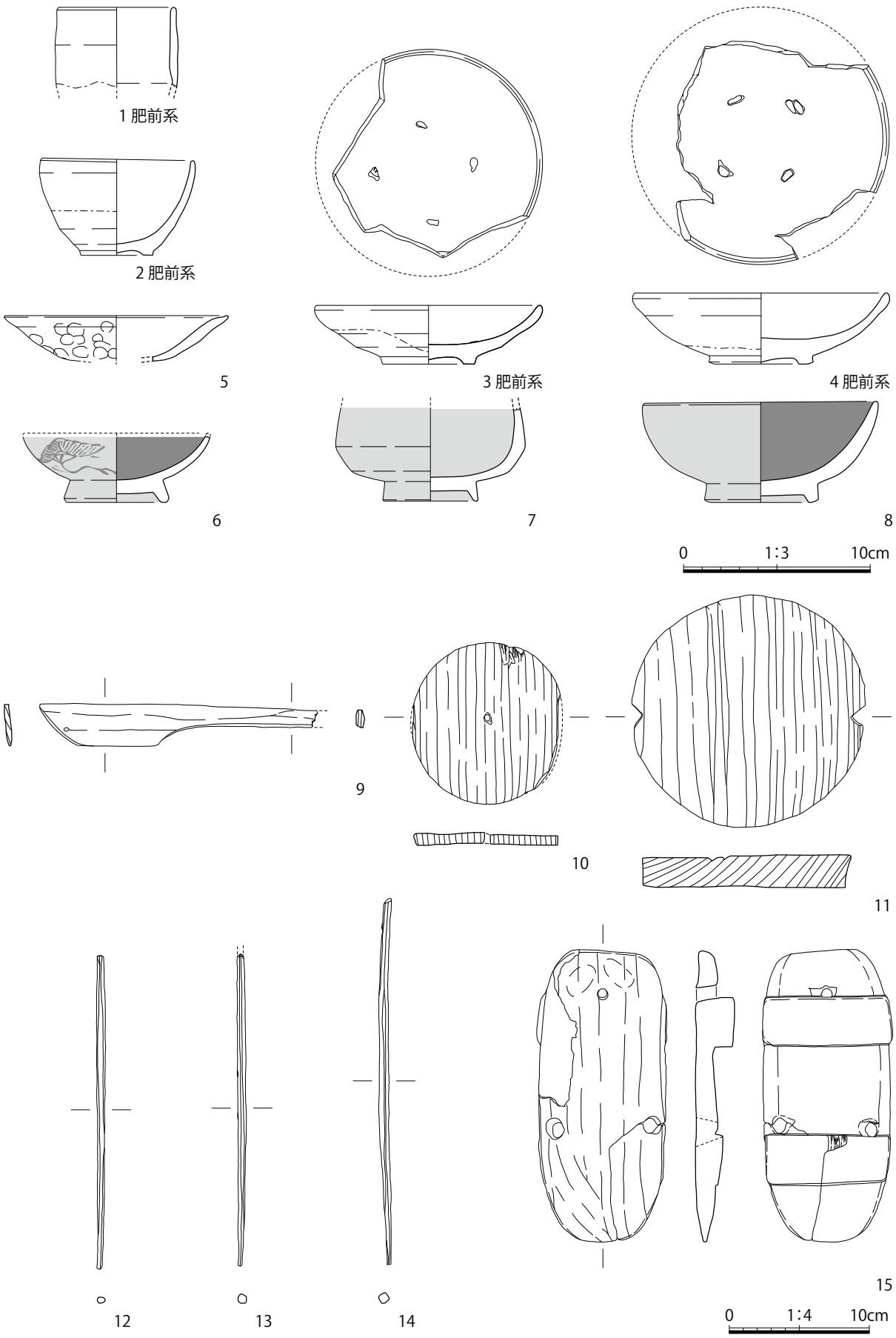
1　暗灰色砂質土(炭化物含む)
2　灰色砂
3　茶褐色粘土ブロックと灰色シルトの混合土
4　淡灰色有機質土
5　茶褐色有機物堆積層
6　黒色有機物堆積層
7　茶褐色有機物堆積層
8　明茶色有機質粘土
9　淡灰色砂質粘土
10　オリーブ灰色有機質土
11　暗灰色シルト質粘土
12　暗灰色シルト
13　暗オリーブ灰色粘土
14　暗灰色シルトとオリーブ灰色粘土の混合土
15　黒色有機質粘土
16　灰色粘質土(第2遺構面基盤層)
17　灰色シルト
18　茶褐色有機質粘土と灰色シルトの混合土
19　淡灰色シルト質粘土
20　灰色シルトと淡赤色粘土ブロックの混合土
21　灰色細砂と茶褐色有機質粘土の混合土(第3遺構面基盤層)
22　茶褐色有機質粘土(第4遺構面基盤層)
23　黒色有機物堆積層
24　淡茶色有機質粘土
25　青灰色シルト質細砂

第 51 図　SD04 平面図・断面図

SD04 出土遺物 (第 52 図)

ここでは SD04 の埋土から出土した遺物を掲載する。52-1 ～ 4 は国産陶器である。52-1 は肥前系陶器の筒形碗である。口縁部～胴部のみ残存し、内外面に灰釉を施す。九陶Ⅰ -2 期 (1594 ～ 1610 年代)。52-2 は肥前系陶器の小碗である。内外面に灰釉を施し、高台は露胎。九陶Ⅰ -2 期 (1594 ～ 1610 年代)。52-3 は肥前系陶器の皿で、内面に 4 箇所の胎土目痕が残る。内外面に灰釉を施し、高台は露胎。体部下方にケズリが顕著に見られる。九陶Ⅰ -2 期 (1594 ～ 1610 年代)。52-4 は肥前系陶器の皿で、内面に 4 箇所の胎土目痕が残る。内外面に灰釉を施し、高台は露胎。九陶Ⅰ -2 期 (1594 ～ 1610 年代)。52-5 は手づくね成形の京都系土師器皿で、外面に指頭圧痕をもつ。

52-6 ～ 15 は木製品である。52-6 は漆器椀である。塗色は外面が黒色、内面が赤色で、外面に松文の漆絵を施す。52-7 は漆器椀で、塗色は内外面ともに黒色である。52-8 は漆器椀で、塗色は外面が黒色、内面が赤色である。52-9 は箆である。箆部を弧状に加工し、先端はやや薄くして刃状になる。52-10 は曲物容器の蓋である。中央に直径 5㎜の孔をもつ。52-11 は曲物容器の蓋である。側面の左右に三角形のケズリ加工をもつ。52-12 ～ 14 は白木の箸で、長さ 23 ～ 26㎝を測る。52-15 は丸型連歯下駄である。木取りは柾目、歯高は 2.8㎝を測る。前緒付近には足の指の痕跡が残る。

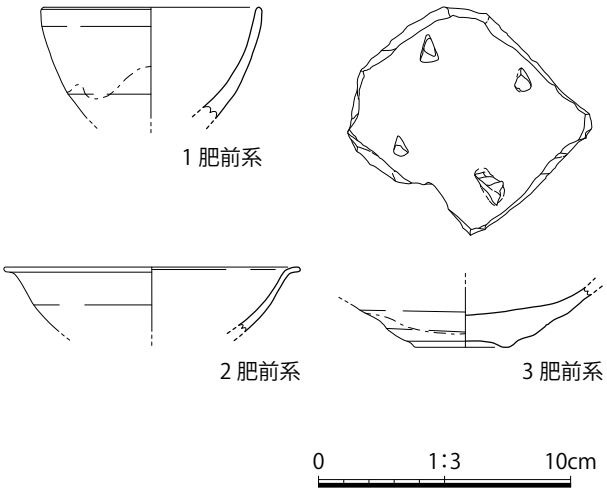


第 52 図　SD04 出土遺物

第 3 遺構面遺構外出土遺物 (第 53 図)

ここで掲載する遺物は、第 3 遺構面直上から出土したものを遺構外出土遺物として取り扱う。

53-1 ～ 3 は国産陶器である。53-1 は肥前系陶器の小碗である。口縁部～胴部のみ残存し、内外面に銅緑釉を施す。九陶Ⅰ -2 期 (1594 ～ 1610 年代)。53-2 は肥前系陶器の皿である。口縁部～体部上方のみ残存し、内外面に透明釉を施す。九陶Ⅰ -2 期 (1594 ～ 1610 年代)。53-3 は肥前系陶器の皿で、内面に 4 箇所の胎土目痕が残る。内外面に灰釉を施し、高台は露胎。九陶Ⅰ -2 期 (1594 ～ 1610 年代)。



第 53 図　第 3 遺構面遺構外出土遺物

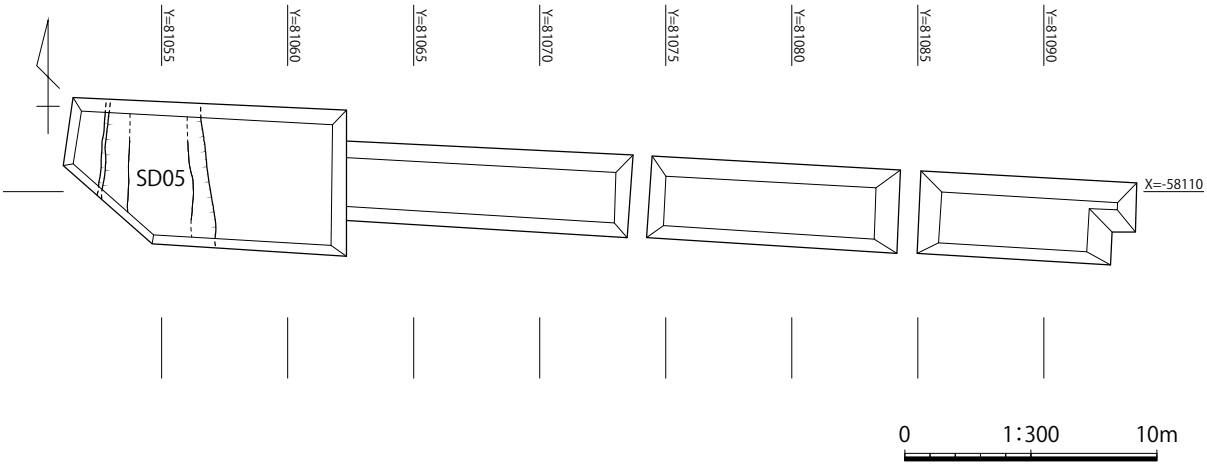
(4) 第 4 遺構面

i) 第 4 遺構面の概要 (第 54 図)

第 4 遺構面は、標高 0.45 m で検出した城下町形成以前の旧地表面である。遺構は、素掘りの大溝 SD05 を検出した。13-2a 区の西側で検出した SD05 は、城下町形成段階に掘削されたと考えられる素掘りの大溝で、土層断面から MJ5b 層と MJ6b 層を切り込んで掘削している状況が観察される。

SD05 が機能していた時期は、厳密には前述した第 3 遺構面の城下町初期造成が開始される直前あるいは造成開始とほぼ同時期に位置付けられるが、第 4 遺構面検出時に SD05 の遺構平面プランを確認したことから、この遺構面に含めている。

第 4 遺構面の基盤となる MJ5b 層は、下位の MJ6b 層上面に層厚 25㎝のほぼ均一の厚さで水平堆積しており、調査区内では平坦面を確認している。MJ5b 層は、上層から茶褐色有機質粘土 (ラミナ層)・黒色有機物層・淡茶色有機物層が堆積し、いずれも未分解の有機物層である (第 33 図第 17 ～ 19 層)。遺構面の時期は、旧地表面の形成土が堆積した時期の上限は不明だが、下限は第 3 遺構面の城下町初期造成土が盛られる前段階までを想定している。



第 54 図　第 4 遺構面平面図

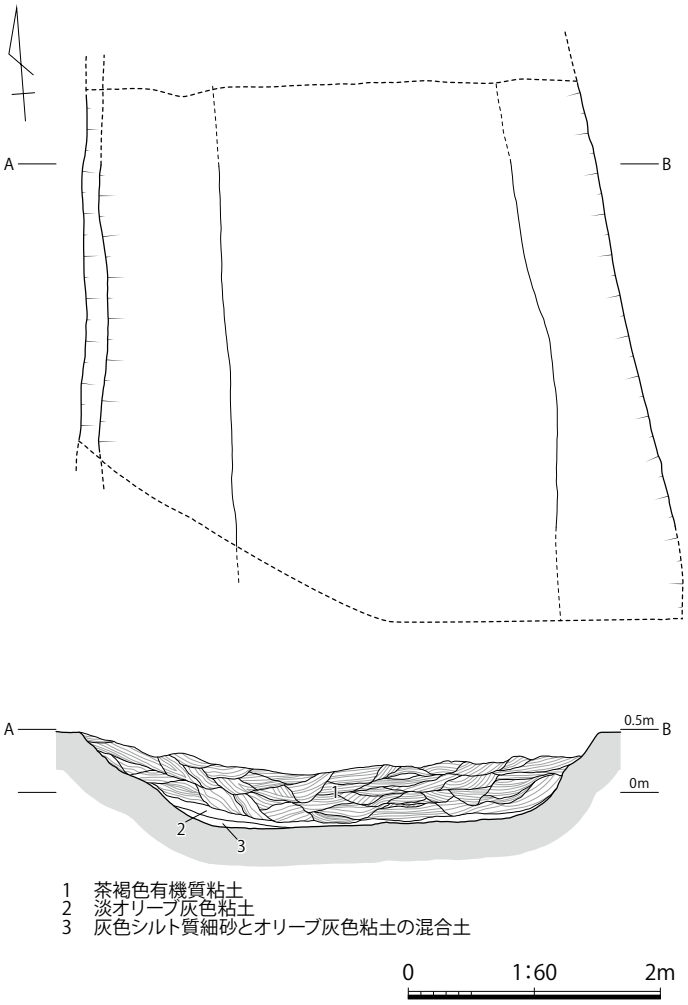
ii）第４遺構面の遺構と遺物

素掘りの大溝 SD05(第 55 図)

13-2a 区の西側で検出した南北方向に一直線に延びる素掘りの大溝である。検出面は大溝上端部で標高 0.48 m、溝底は標高 -0.54 mを測り、断面形は U 字状を呈する。規模は長さ 6.00 m、幅 4.20 m、深さ最大 0.75 mを測る。13-2a 区では調査当初から大溝の存在が想定されており、今回の調査では東西方向に延びる大溝は検出していないため SD05 との関連性は把握できないが、SD05 は調査区の南側の既存道路まで続く様相を示している。

大溝埋土は、茶褐色有機質粘土 (ラミナ層) が堆積し、下位の灰色～青灰色細砂が入らないように埋め戻されていた。これまでの調査で検出している大溝の埋土には、MJ5 層と MJ6 層の混合土を埋使用している地点が大半を占める中で、ラミナ層のみを使用して大溝を埋め戻すといった事例は本調査区が初見である。この土層は、第 4 遺構面の基盤である茶褐色有機質粘土 (MJ5b 層) の掘り上げ土で、土層断面観察時にラミナ層の重なりの分層を行っている。確認できた断面の範囲では、幅 25 ～ 50㎝、厚さ 10 ～ 15㎝を 1 単位とするラミナ層の塊を約 50 単位重ねて大溝埋土としていた。この 1 単位は、埋め戻しの際の作業単位と考えられる。大溝底部には淡オリーブ灰色粘土が薄く堆積し、短期間は水が流れていた (停滞していた) ことを示している。

SD05 を掘り直した痕跡や自然堆積層は見られず、廃絶時には溝の上端部まで人為的に一気に埋め戻している状況を確認した。SD05 から遺物は出土していない。



第 55 図　SD05 平面図・断面図

第４項　第 13 ブロックの立会調査

第13ブロックの立会調査対象となる主な調査原因には、電線共同溝埋設工事・歩道整備工事がある。

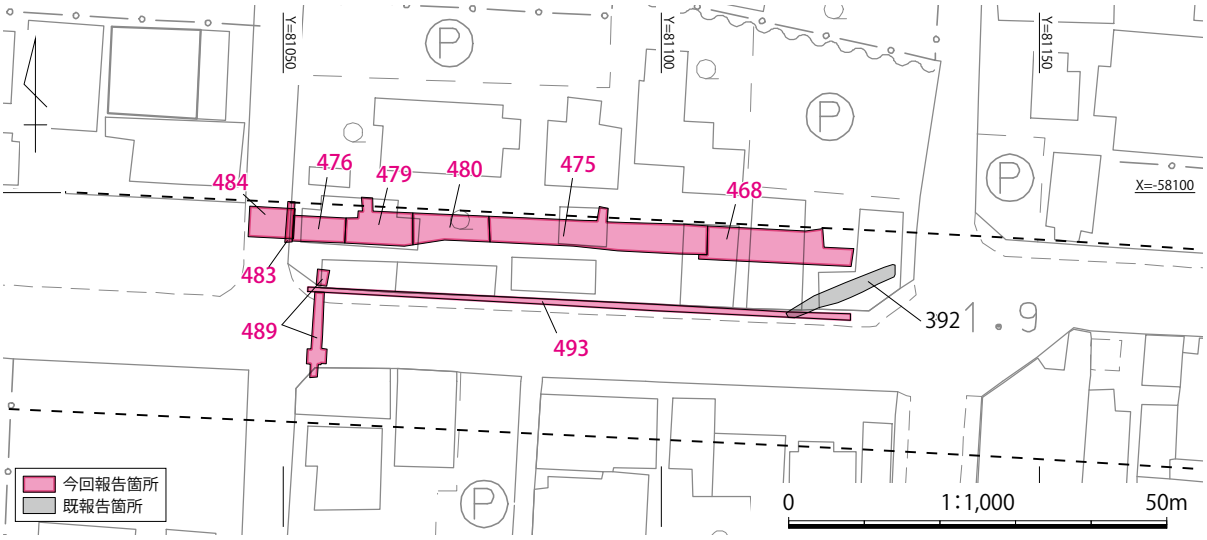
第 13 ブロックで平成 18 ～ 29 年度までに立会調査を実施した地点は 10 箇所である。そのうち平成 26 年度に立会調査を実施した 1 箇所 (MJR392) については『市 167』「城山 6」で報告済みであり、ここでは報告書刊行後に未報告となっていた平成 28 ～ 29 年度に立会調査を実施した 9 箇所を取り

扱う (第 56 図)。表 8 には、第 13 ブロックにおいて平成 28 ～ 29 年度に立会調査を実施した調査成果を一覧表にして示した。ここでは一覧表に示した 9 箇所のうち、城下町形成段階の主要な遺構と考えられる MJR475 で検出した南北方向の素掘りの大溝について触れておきたい。

MJR475 で検出した大溝は、本調査 13-2d 区の第 3 遺構面で検出した SD04 の北側に位置し、この大溝と繋がる一連の遺構である。規模は、長さ 3.80 m、幅推定 9.00 m、深さ最大 1.30 mを測る。大溝の平面プランでは、粘土層・砂層・有機物層の堆積が確認されているが、溝幅の特定まで至っていない。工事の進捗に併せて立会調査を実施しているため断片的ではあるが、土層断面の一部で大溝の溝肩西側の立ち上がりを確認した。大溝の掘り込みは MJ5b 層と MJ6b 層を切り込んで掘削している状況が観察される。

この大溝の検出により、第 13 ブロックの街区中央を東西に分断する南北方向の大規模な溝が存在することを想定できる成果が得られた。

写真 6　MJR362　大溝西肩土層断面 (南から)



※図中の番号は調査区 (MJR) を示す

第 56 図　第 13 ブロック立会調査地点位置図

表 8　第 13 ブロック立会調査箇所一覧 (平成 28 ～ 29 年度)

番号	調査区	地番	調査日	調査面積	掘削深度	検出遺構	出土遺物
1	MJR468	南田町 104-3 外	16.01.13 ～ 01.14	78.5㎡	1.50m	遺構なし	陶磁器
2	MJR475	南田町 104-3 外	16.06.06 ～ 06.10	108.0㎡	1.80m	大溝 (南北方向)	陶磁器
3	MJR476	南田町 108-1 外	16.07.03 ～ 07.05	22.9㎡	3.00m	廃棄土坑	木製品
4	MJR479	南田町 108-1 外	16.07.13 ～ 07.15	40.2㎡	2.30m	遺構なし	遺物なし
5	MJR480	南田町 108-1 外	16.07.20 ～ 07.21	36.4㎡	2.00m	廃棄土坑	遺物なし
6	MJR483	南田町 108-1 外	16.10.12	5.1㎡	0.60m	遺構なし	遺物なし
7	MJR484	市道南田南北線	16.10.20	24.2㎡	2.50m	遺構なし	遺物なし
8	MJR489	大手前線道路横断	17.04.20 ～ 04.21	21.8㎡	1.70m	遺構なし	遺物なし
9	MJR493	南田町 108-1 外	17.07.07	54.2㎡	0.50m	遺構なし	遺物なし

※ 1 ～ 7 は平成 28 年度、8・9 は平成 29 年度の立会調査

第５項　小結

前項までに発掘調査成果の概要を示し、13-2 区で検出した遺構・遺物について検討を加えた。本項ではまず、調査地が松江城下町絵図のどこに位置するのかを提示し、調査地周辺の様子を概観する。そして、調査地の遺構面の時期区分と変遷を整理し、併せて調査成果についてのまとめを行うことにしたい。

（1）松江城下町絵図に見る調査地とその周辺

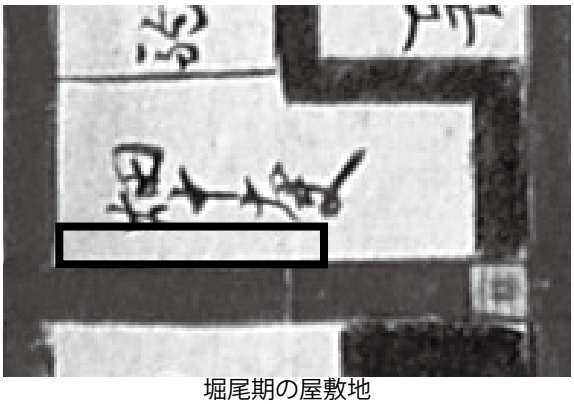
現存する江戸時代の松江城下町絵図から、17 世紀前半～ 19 世紀後半 (堀尾期・京極期・松平期) の松江城下町における屋敷地を知ることができる。ここでは屋敷地の変遷を知る上で資料とした絵図の詳細・屋敷地名義・禄高を各絵図の説明の中で記載する。なお、各絵図左側には調査地周辺部分に第 13 ブロックを示す黒枠で加筆したものを、右側にはその部分を拡大し、13-2 区推定箇所を示す黒枠を加筆して掲載した。

第 13 ブロック (南田町) は、江戸時代を通して中級～下級家臣の屋敷地が配置されていた街区となっていた。屋敷地は、この街区を東西にほぼ二分する形で屋敷割りがなされており、調査地である 13-2 区は、堀尾期絵図では 1 軒の屋敷地となっているが、京極期～松平期絵図では街区の西側にあたる 500 ～ 750 石の屋敷地に比定される。絵図に記載されている屋敷地名義の向きを根拠とした場合、屋敷地の表口 (玄関部分) は江戸時代を通して市道南田南北線に面した西側にあたり、調査地は屋敷地南側の側面部分に該当するものと考えられる。

以下では各時期の絵図 5 点を通して調査地周辺の様子を概観する。

①堀尾期絵図 (第 57 図)　堀尾氏が統治していた時期の絵図として「堀尾期松江城下町絵図」(絵図作成年代：1620 ～ 33 年、島根大学附属図書館所蔵) がある。第 13 ブロックが所在する街区には 9 軒の屋敷地が配置され、明瞭な界線で屋敷地を区画している。街区の中央には屋敷地の背割部分に南北方向の屈曲した堀が描かれている。13-2 区が比定する地点には「畑十太夫」の記載が見られ、堀尾期の段階から屋敷地となっていたことが分かる。畑十太夫は禄高 500 石である。

第 57 図　堀尾期松江城下町絵図



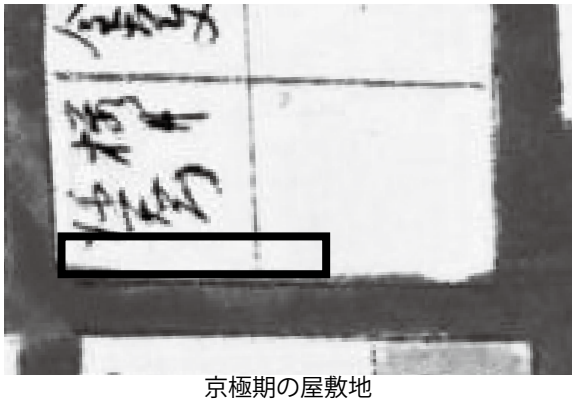
堀尾期の屋敷地

※絵図は上が北

②京極期絵図 (第 58 図)　京極氏が統治していた時期の絵図として「寛永年間松江城家敷町之図」(絵図作成年代：1634 ～ 37 年、丸亀市立資料館所蔵) がある。第 13 ブロックが所在する街区は、京極期絵図では 10 軒の屋敷地となり、堀尾期絵図に存在していた堀が描かれていない。13-2 区が比定する地点には「桜井弥一右衛門」の記載が見られ、堀尾期絵図では 1 軒の屋敷地となっていたが、

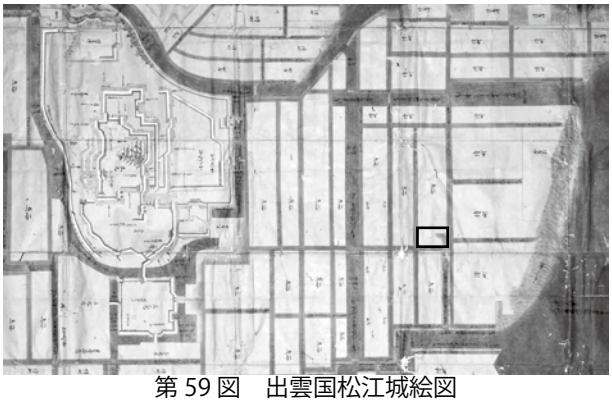
京極期絵図では東西 2 軒に分筆される。13-2 区は西側の屋敷地にあたるが、東側の屋敷地は界線のみが描かれており、人名の記載は見られない。桜井弥一右衛門は禄高 750 石である。

第 58 図　寛永年間松江城家敷町之図

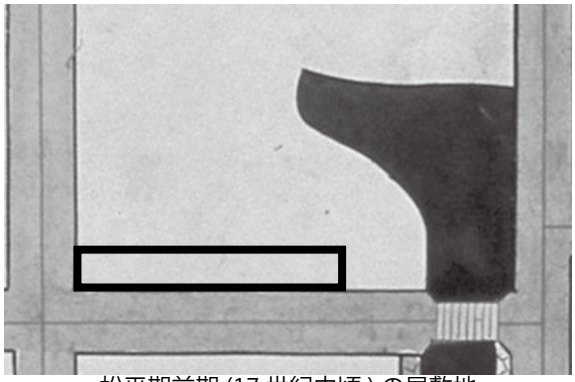


京極期の屋敷地

③松平期前期絵図 (第 59 図)　「出雲国松江城絵図」(絵図作成年代：1644 ～ 48 年、国立公文書館所蔵) は、松平氏が統治を開始した寛永 15(1638) 年に近く、17 世紀中頃の正保年間に幕府が諸藩に命じて作成させた絵図である。絵図には「侍町」の記載しか見られないが、13-2 区に武家屋敷が配置されていたことが分かる。街区の南東角付近には、再び堀が描かれている。



第 59 図　出雲国松江城絵図



松平期前期 (17 世紀中頃) の屋敷地

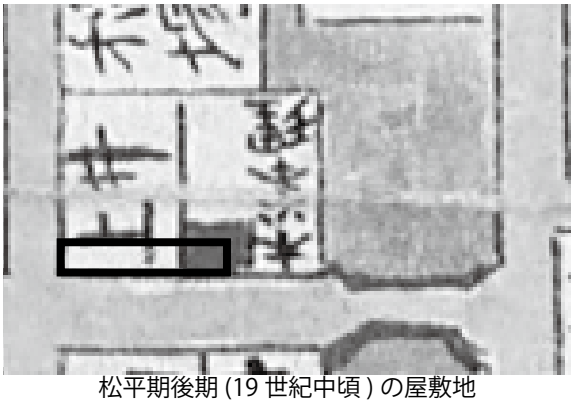
④松平期中期絵図 (第 60 図)　「松江城絵図」(絵図作成年代：1736 ～ 48 年、島根県立図書館所蔵) は、18 世紀中頃に作成された絵図である。第 13 ブロックが所在する街区は、絵図に描かれた屋敷割りが京極期絵図の 10 軒から変わっていない。1-3 区が比定する地点には「田村有栄」の記載が見られ、松平期前期絵図に描かれた堀が屈曲しながらさらに北側に延びており、堀尾期絵図に描かれている堀とほぼ同様の堀割を示す。田村有栄は禄高 100 石である。

第 60 図　松江城絵図

松平期中期 (18 世紀中頃) の屋敷地

⑤松平期後期絵図（第 61 図）「松平期松江城下町絵図」（絵図作成年代：1825 ～ 51 年、島根大学附属図書館所蔵）は、19 世紀中頃に作成された絵図である。13-2 区が比定する地点には「井上」の記載が見られ、屋敷割りと堀割は松平期中期から大きく変わらない。この屋敷地の東隣には、鎗の道場が設けられている。井上は禄高 100 石である。

第 61 図　松平期松江城下町絵図



松平期後期 (19 世紀中頃) の屋敷地

（2）遺構面の時期区分と変遷（第 62 図）

ここでは、年代が古い下層の遺構面から年代が新しい上層の遺構面の順に遺構面の時期区分と変遷を示すことで、調査成果のまとめを行う。

ｉ）遺構面の時期区分

主な盛土や整地層、遺構の状況などを併せると遺構面の変遷は四つの時期に区分される。

第 4 面：MJ5b 層上面が相当する第 4 遺構面である。城下町が形成される以前の時期で、実年代の手がかりはないが、これより上位の層序での出土遺物の状況から見て 17 世紀初頭までが下限となるものと考えられる。

第 3 面：MJ4 層上面が生活面となっていた時期に相当する第 3 遺構面である。城下町初期造成などを含む城下町建設当初の時期から始まり、17 世紀初頭～前半の城下町成立期にあたるものと考えられる。陶磁器は肥前系陶器が出土している。

第 2 面：MJ3 層上面が生活面となっていた時期に相当する第 2 遺構面である。MJ3 層は、上位と下位で土層堆積状況が異なるため、上位の灰色～暗灰色粘質土を主体とする嵩上げ造成による整地層を MJ3a 層、下位に堆積する砂層を MJ3b 層としている。

上位の MJ3a 層は 17 世紀前半～中頃までが含まれ、陶磁器は中国磁器・肥前系陶磁器が出土している。下位の MJ3b 層は洪水砂と考えられ、砂層中から須恵器片と瓷器系陶器が出土している。この砂層が堆積した時期は、第 3 遺構面の生活面が廃絶した段階以降～第 2 遺構面の整地層である MJ3a 層が堆積するまでの間に限定される。

第 1 面：MJ2 層上面が生活面となっていた時期に相当する第 1 遺構面である。嵩上げ造成による整地が行われ、17 世紀後半～ 18 世紀前半までが含まれる。陶磁器は肥前系陶磁器・須佐擂鉢が出土している。

第 1 遺構面より上位にあたる 18 世紀後半～ 19 世紀後半の遺構面については、近現代の撹乱によって消失しているため、本遺跡では検出できなかった。ただし、面としては捉えられなかったものの、

撹乱を免れた石積井戸・石組水路・土坑の中には、19 世紀後半を示す遺構が存在している。

以下では各時期の状況についてまとめていくことにする。

ii）遺構面の変遷

第 4 面：城下町形成以前

今回の発掘調査で検出した最も古い遺構面は、17 世紀初頭以前の MJ5b 層上面で、城下町形成以前の旧地表面に相当する第 4 遺構面である。検出した旧地表面は、標高 0.45 mで茶褐色有機質粘土を露呈した上面で、この土壌は未分解の植物遺体を含む有機物層である。有機物と粘土が互層状に堆積することから、水際あるいは水辺からやや離れた陸地であったことが想定される。

第 4 遺構面精査中に検出した素掘りの大溝 SD05 は、城下町の形成に際して最初に造作されたと考えられる遺構である。検出位置は市道南田南北線の東側部分にあたり、南北方向の現道と並行する位置関係である。主軸は座標軸北から 4 度ほど東を向き､道路軸と同じ傾きを示している。この大溝は、道路と屋敷地を区画するための明瞭な界線となるもので、区画境大溝に位置付けられる。また、調査区内では大溝南端の終結部分を確認していないという点から、城下町形成段階の南田町の道幅は現在の道幅よりも狭かったことが想定される。

特筆されるのは、SD05 の埋め戻し手法である。これまでに城山北公園線沿線の発掘調査で検出している区画境大溝の埋土には、MJ5 層と MJ6 層を撹拌した土壌を使用して埋め戻されている場合が大半を占める状況である。今回の調査で検出した SD05 の埋土には、茶褐色有機質粘土 (ラミナ層) が堆積し、下位の灰色～青灰色細砂が入らないように埋め戻されており、外堀 (米子川) から西側の殿町や母衣町では見られない埋め戻し手法であった。この埋土は、第 4 遺構面の基盤である茶褐色有機質粘土 (MJ5b 層) の掘り上げ土で、幅 25 ～ 50㎝、厚さ 10 ～ 15㎝を 1 単位とするラミナ層の塊を重層的に積み重ねて大溝埋土としていた。確認した 1 単位は、埋め戻しの際の作業単位と考えられ、現在の感覚で大型スコップ 1 杯分程度に相当する。このような手法は、埋め戻し作業の過程で、地盤の沈下防止を想定した土壌の選択をしていた可能性を示すものと理解している。

第 3 面：17 世紀初頭～前半

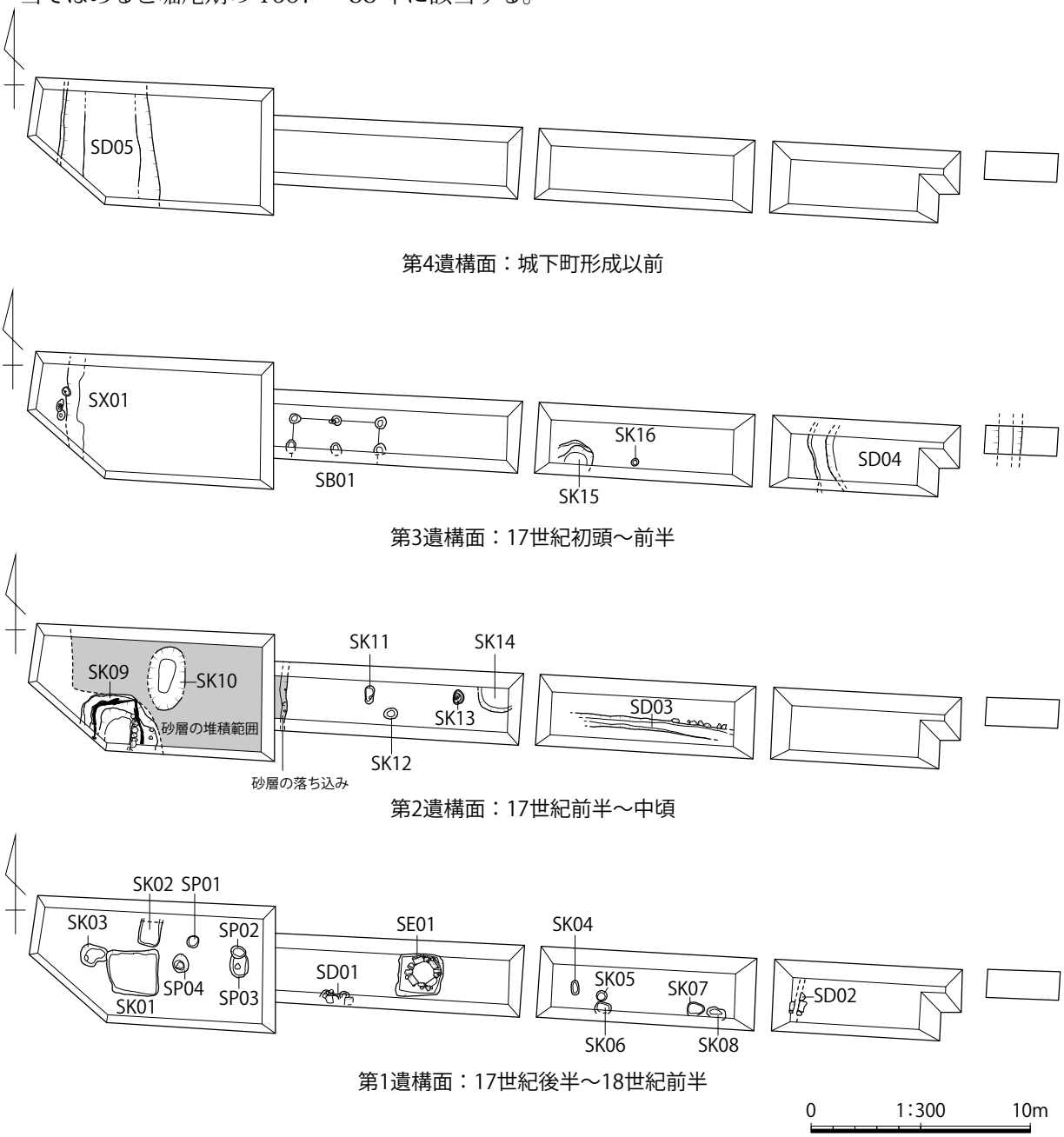
城下町初期造成段階の遺構面として確認できたのは、MJ4 層上面の第 3 遺構面である。MJ4 層上面で検出した遺構は、出土遺物から 17 世紀初頭～前半に存在したものと考えられる。

検出した SX01 は、MJ4 層を土盛りした痕跡である。この土盛りについては、屋敷地に伴う土羽やここを道路面としていた可能性が想定される。SB01 は、屋敷地側面の道路側に近接する位置にあたることから、簡易的な長屋や倉庫等の建物を想定し、屋敷地側面の建物配置を示すものと考えられる。SK15・16 は、円形を呈する土坑で、いずれも掘り込みが浅い。埋土から遺物は出土せず、性格不明土坑である。SD04 は、これまでの城山北公園線沿線の発掘調査で確認した大溝の中でも最大規模の部類に入るものである。この大溝 SD04 の評価について、現時点で想定される点を以下にまとめておきたい。

現在までに実施した城山北公園線沿線の発掘調査成果から、城下町初期造成面からは素掘りの大溝の検出が報告されている。この大溝は、屋敷地と屋敷地の境界から検出される「屋敷境大溝」、道路

と屋敷地の境界から検出される「区画境大溝」の２つに大別している。今回の調査で検出した SD04 は前者の「屋敷境大溝」に分類されるが、これまでに確認した屋敷境大溝の溝幅は約 2.00 ～ 6.00 mであるのに対し、SD04 の溝幅は 9.80 mを測ることから、現時点で最大規模の溝と考えられる。SD04 は検出した位置関係から屋敷地の裏手側を区画する背割溝にあたるものと想定され、背割溝は屋敷地側面の屋敷境溝よりも規模が大きいということがこれまでの調査成果から知られている。

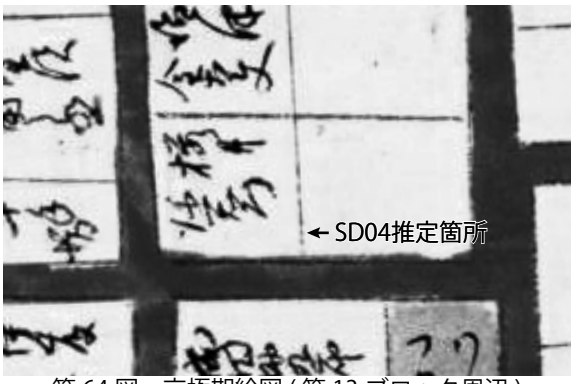
SD04 は城下町初期造成面直上が機能面であり、最終的には人為的に埋め戻されていた。出土遺物から検討すると、機能段階の決め手となる遺物はないが、埋め戻された廃絶段階は出土遺物から 17 世紀前半の肥前系磁器を伴わない肥前系陶器の胎土目段階のものが主体となっていた時期と考えられる。SD04 の埋土から肥前系陶器の砂目段階のものは出土していない。松江城下町遺跡の時期区分に当てはめると堀尾期の 1607 ～ 33 年に該当する。



第 62 図　13-2 区遺構変遷図

次に、松江城下町絵図から検討してみたい。堀尾期絵図の作成年代は 1620 ～ 33 年とされており、SD04 が 1620 年以前の城下町初期造成段階に掘削して一定期間機能した後に埋め戻されたものであれば、大溝は絵図に描かれることはなかったということが考えられる。そして、もうひとつの可能性として、堀尾期絵図で第 13 ブロックが該当する箇所には屋敷境が描かれていない 1 つの屋敷地となっており、SD04 は堀尾期のものではない可能性が指摘される (第 63 図)。続く京極期の統治期間は 1634 ～ 37 年と短いが、京極期絵図には東西に分筆された 2 つの屋敷地が描かれており、SD04 の検出位置と絵図中央に描かれている南北方向の屋敷境ラインがほぼ一致している (第 64 図)。屋敷境＝大溝であることを前提として堀尾期絵図と京極期絵図の対比を根拠とした場合、SD04 は京極氏の家臣団が当地に屋敷を拝領した段階に掘削された大溝と捉えることもできる。

第 63 図　堀尾期絵図 (第 13 ブロック周辺)



第 64 図　京極期絵図 (第 13 ブロック周辺)

これらを整理して、SD04 の評価を以下の①～④に提示しておきたい。

①出土遺物を根拠とすると、肥前系陶器の胎土目段階のものが主体となっていた時期に掘削して一定期間機能した後に埋め戻された可能性がある。砂目段階のものが出現する時期に大溝は存在しない。

②京極期絵図を根拠とした場合、この時期に掘削された屋敷境大溝を特定した初の事例となる。

③堀尾期の生活面を京極期の段階で新たに造成を施さず、堀尾期と同じ面を京極期でも生活面として利用していた可能性がある。この場合、大溝断面で確認した 2 時期の掘削は、第 1 段階は堀尾期における掘削、第 2 段階は京極期における大溝の掘り直し痕跡と捉えることができる。

④堀尾期絵図では屋敷地の背割部分に南北方向の屈曲した堀が描かれているが、京極期絵図ではその堀が埋められている。この堀に代わるものとして、当地の屋敷境にあたる位置に通常よりも大きな幅で大溝が掘削された可能性がある。

第 2 面：17 世紀前半～中頃

MJ3 層上面の第 2 遺構面の遺構は、石積土坑 SK09 や土坑 SK14 に含まれる遺物から 17 世紀前半～中頃に存在したものと考えられる。第 2 遺構面は、上位と下位で土層堆積状況が異なるため、上位の灰色～暗灰色粘質土を主体とする嵩上げ造成による整地層を MJ3a 層、下位に堆積する灰色～暗灰色砂層を MJ3b 層としている。上位の MJ3a 層の整地層を露呈した面で遺構を検出したことから、この上面を生活面と捉えている。

検出した SD03 は、検出位置から屋敷地内における排水用の溝と考えられるが、溝の片側にだけに石列を伴うことから、屋敷地内の建物と空閑地の区画境となっていたことも想定される。SK09 は、

機能段階には竹囲いを伴う石積の地下室あるいは井戸として利用されていたが、最終的には廃棄土坑として利用されたものである。SK10 ～ 14 は、楕円形や円形を呈する土坑で、埋土に陶磁器の小片を含むことから廃棄土坑と捉えている。

第 2 遺構面の下位に堆積する砂層 (MJ3b 層) は、調査地周辺に堆積していた砂層が洪水の影響を受けて当地へ向かって堆積した可能性が考えられる。砂層中から須恵器の小片が出土していることは、他所から砂層が運び込まれていたことを示すものであるが、その供給源や本遺跡の限られた範囲だけに砂層が堆積した直接的な原因については検討の余地を残す結果となっている。

第 1 面：17 世紀後半～ 18 世紀前半

MJ2 層上面の第 1 遺構面は、山土造成土による整地層上に形成された遺構面で、土坑 SK01 や遺構面に含まれる遺物から 17 世紀後半～ 18 世紀前半に存在したものと考えられる。

検出した SD02 は、溝の両端に石組を伴うもので、屋敷内における排水用の溝と捉えている。SK01 ～ 03 は、方形や楕円形を呈する土坑で、埋土に陶磁器片を含むことから廃棄土坑と考えられる。SE01・SD01・SK04 ～ 08・SP01 ～ 04 は、第 1 遺構面に伴わない上層から掘り込まれた近現代の遺構の底部を検出している可能性がある。

上記のように、今回の調査では城下町初期造成段階の素掘りの大溝、17 世紀初頭～前半の建物跡・屋敷境、17 世紀前半～中頃の溝・石積土坑、17 世紀後半～ 18 世紀前半の溝・廃棄土坑といった遺構を検出した。断片的ではあるが、これらは屋敷地の側面部分の構造を復元していく上での手がかりになるであろう。

ⅲ）出土遺物の様相

13-2 区における出土遺物は、遺構面において陶磁器・土師器皿・木製品・瓦が出土した。遺物組成について、前述した遺構面に追従する形で以下にまとめておきたい。

第 4 面：城下町形成以前に該当する遺物は本遺跡では出土していない。

第 3 面：17 世紀初頭～前半は、中国磁器と肥前系陶器が主体となる時期である。肥前系陶器の出土状況から見る限り胎土目段階のもので占められ、17 世紀前半の砂目段階のものは含まない。この状況から本遺跡では、17 世紀初頭に近い時期の遺物組成を示しているものと考える。土師器皿は手づくね成形の京都系のみで、底部に糸切り痕をもつ在地系は出土していない。

第 2 面：17 世紀前半～中頃は、肥前系磁器の出現によって大きな変化が見られる時期である。本遺跡では、中国磁器の漳州窯系の青花碗、17 世紀前半の肥前系陶器の砂目皿や溝縁皿、17 世紀中頃の肥前系磁器の染付皿や青磁皿などが出土している。土師器皿は京都系と在地系が出土し、京都系の占める割合が優勢である。

第 1 面：17 世紀後半～ 18 世紀前半は、17 世紀後半の肥前系陶器が減少して肥前系磁器が増加する時期から始まり、18 世紀前半から肥前系磁器に京信系陶器などが加わる時期である。本遺跡では、中国磁器が出土せず、17 世紀後半の肥前系陶器の呉器手碗や刷毛目碗、17 世紀後半～ 18 世紀前半の肥前系磁器の陶胎染付碗や須佐 (山口) の擂鉢などが出土している。土師器皿は京都系が出土せず、在地系で占められている。

第３節　第 14 ブロック (14-1 区)　松江城下町遺跡 (南田町 101-21 外)

第 14 ブロックは、市道南田南北線から市道北田大橋線に挟まれた城山北公園線の南側部分、南田町地内の東西約 82 m×南北約 8 m区間である。ここでは第 14 ブロックのうち、平成 25 年度に発掘調査を実施した松江城下町遺跡 (南田町 101-21 外) の調査成果を報告する。

調査地周辺は、調査開始以前には城山北公園線沿いの民家や店舗が建ち並んでいた場所となっていた。第 14 ブロックでの本発掘調査は、今回報告する 1 箇所で実施されており、本調査区の呼称は便宜的に 14-1 区としている。それ以外の箇所については、すべて立会調査で対応しており、第 14 ブロックではこれまでに 14 箇所の立会調査を実施している。調査区と遺跡名の関係および掲載報告書は以下の表 9 に示した。

14-1 区では、壁面に安全勾配 45°の傾斜を残しながら発掘調査を実施した。また、土層堆積状況を把握するために表土～撹乱層を除去した後、調査区北側および東側に土層観察用の壁面を残して全体の掘り下げを行った。

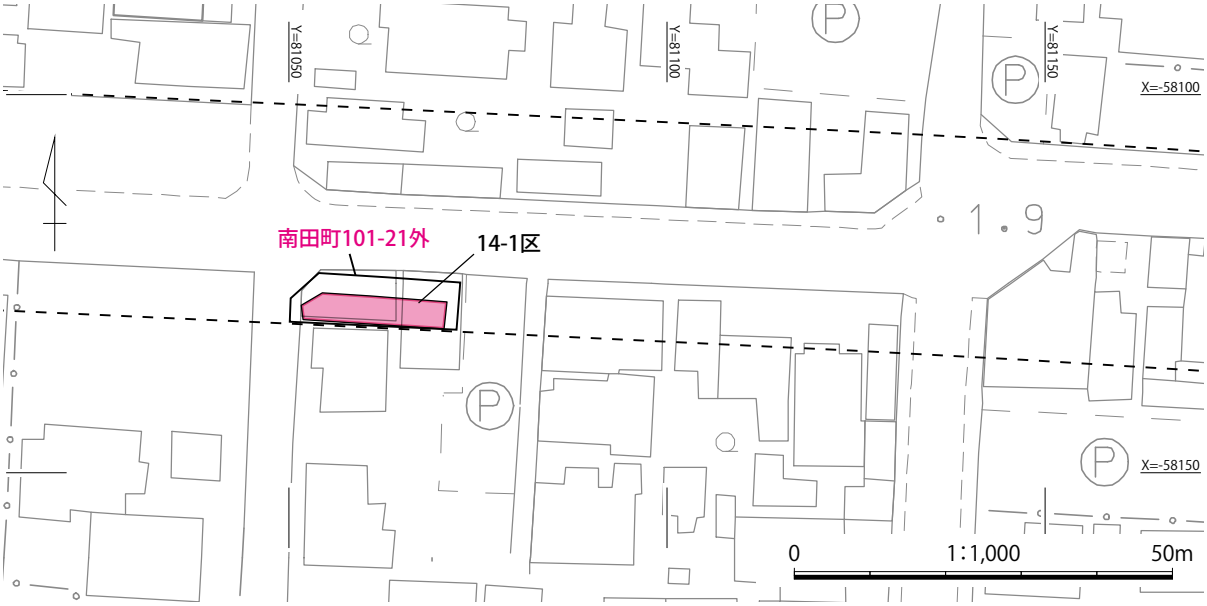
表 9　第 14 ブロック本発掘調査箇所

ブロック名	調査区名	遺跡名	掲載報告書
第 14 ブロック	14-1 区	松江城下町遺跡（南田町 101-21 外）	『市 185』「城山 8」

第１項　調査区の位置 (第 65 図)

発掘調査対象地である 14-1 区は、松江城大手前から東へ約 700 mの地点に位置する。調査範囲は東西約 18.2 m×南北約 3.7 m、調査面積 67.5㎡の調査区を設定した。

第 14 ブロックを現存する堀尾期・京極期・松平期の各絵図と照合すると、堀尾期～松平期中期には街区に屋敷地が 1 軒、松平期後期には街区の東西に屋敷地が 2 軒存在していた場所に該当する。14-1 区は街区の東側にあたり、江戸時代を通して 300 ～ 500 石の家臣の屋敷地に比定される。



第 65 図　第 14 ブロック本調査区配置図

第２項　遺構面と層序 (第 66 図)

調査区の遺構検出と土層堆積状況の観察を行った結果、4 つの遺構面を確認した。遺構面は、上層から主に現地表面～撹乱層・造成土 (盛土)・旧地表面・自然堆積層に分け、その中から生活面と考えられる整地層や遺構の機能面を把握した。

なお、調査時に遺構の重なりと遺構面の把握について十分な検討がなされておらず、本報告作成段階で改めて検討を行った。その結果、検出した土坑の中には、調査時に土坑底部まで完掘せずに遺構面別に 2 つの遺構として報告されているものが含まれていた。出土遺物を検討したところ、これらは同一遺構と考えられることから、ひとつの遺構として扱っている。また、調査では調査区南壁の崩落により、遺構面検出は第 1 遺構面～第 3 遺構面までは実施しているが、下位の第 4 遺構面に相当する旧地表面 (MJ5b 層上面) の平面検出まで至っていない。そのため旧地表面の検出は北壁の一部で深掘りを行い、土層断面を確認するに留まっている。

本調査地は、現代の建物基礎や撹乱がおよぶ場所以外は近世の土層が良好に残されている。現地表は標高 1.45 m で、最深部で現地表下約 2.10 m (標高 -0.65 m) までの土層堆積を確認した。第 66 図の土層図は、14-1 区の北側に設定した北壁土層 (A-B 間) を掲載している。なお、基本的な層序は第 1 章第 2 節第 3 項で示した松江城下町遺跡基本土層と共通するものであり、遺構面で区分した土層の呼称についてはこれに準じて対応する土層名を付した。以下､各遺構面の土層堆積状況について、上層から下層の順に説明する。

MJ0・1 層：現地表面～撹乱層　標高 1.45 m、層厚 50㎝

MJ0 層は既存建物の基礎を含む撹乱層である。MJ1 層は砂質土～粘質土を主体とする近現代の盛土層だが下層の江戸時代の造成土まで撹乱層が入る。そのため本調査地では、MJ0 ～ 1 層までを撹乱層とした。この土層中から 19 世紀後半～近現代の陶磁器類が出土している。

MJ2 層：第 1 遺構面　標高 0.90 ～ 1.00 m、層厚 10 ～ 20㎝

緑灰色粘質土の山土を主体とする嵩上げ造成による整地層である。この遺構面から 18 世紀後半～19 世紀前半の陶磁器類が出土している。

MJ3a 層：第 2 遺構面　標高 0.80 m、層厚 20㎝

暗灰色砂質土を主体とする嵩上げ造成による整地層である。この遺構面から 17 世紀前半～後半の陶磁器類が出土している。

MJ3b 層：標高 0.50 ～ 0.60 m、層厚 50㎝

第 2 遺構面の下位に堆積する土層で、灰色～暗灰色砂層を主体とする。MJ3b 層は砂層が互層状に堆積し、調査区の西側で確認した砂層である。この砂層は、14-1 区から城山北公園線を挟んで北側に位置する､第 13 ブロック 13-2a 区の第 2 遺構面で検出した砂層と連続して堆積した可能性がある。

MJ4 層：第 3 遺構面　標高 0.50 ～ 0.60 m、層厚 50㎝

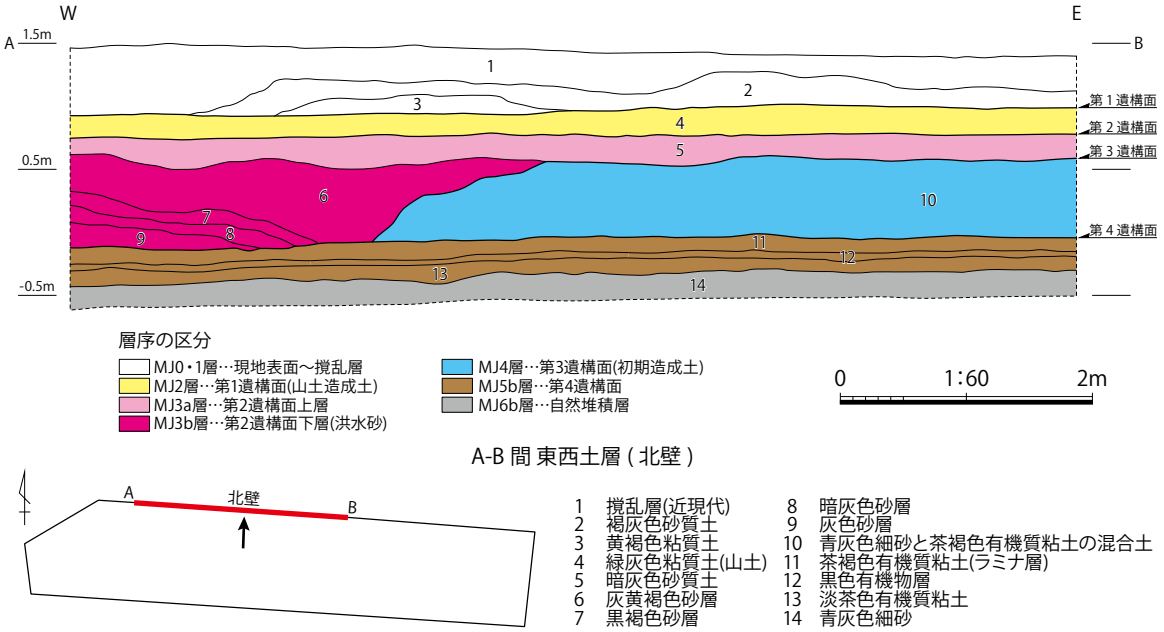
城下町形成以前の旧地表面の上に盛土された城下町初期造成段階の整地層である。MJ4 層よりも下位にある MJ5b 層の茶褐色有機質粘土と MJ6b 層の青灰色細砂の混合土を主体とする。この遺構面から陶磁器類は出土していない。

MJ5b 層：第 4 遺構面　標高 0 m、層厚 30㎝

城下町形成以前の旧地表面の堆積層で、本調査地では茶褐色有機質粘土の堆積を確認した。この土層は水平堆積のラミナ層が確認でき、下位には黒色有機物層と淡茶色有機物層が堆積する。いずれも未分解の有機物層であり、水際あるいは水辺からやや離れた陸地であったことが想定される。

MJ6b 層：自然堆積層　標高 -0.30 m

青灰色細砂を主体とする堆積層で、松江市街地北部の丘陵から末次砂州の北の水域に水が流れていた時代に堆積した土層である。



第 66 図　14-1 区土層図

第 3 項　調査の結果

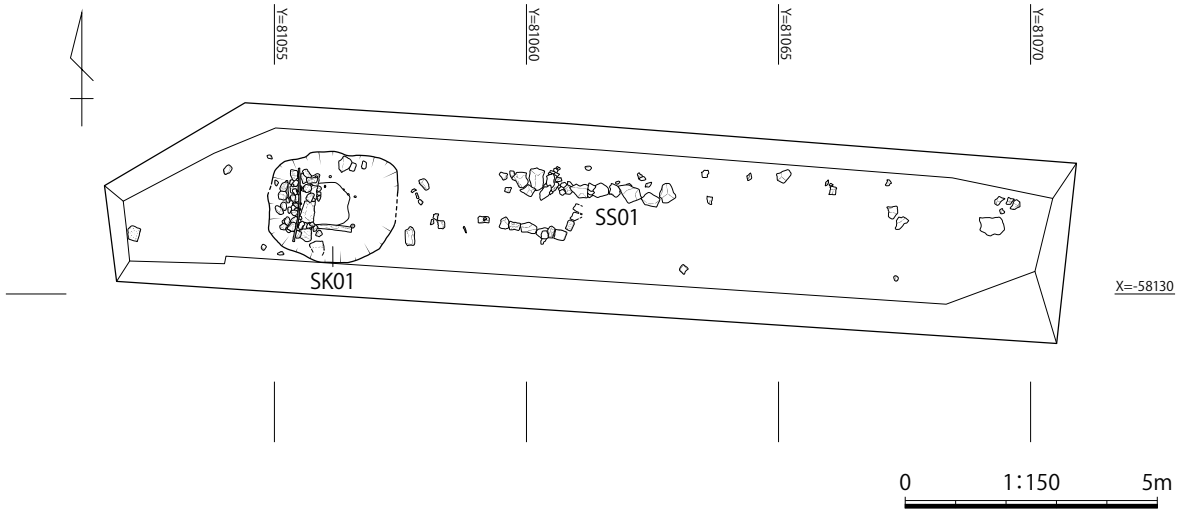
ここでは検出した遺構面の概要や遺構と遺物について、年代が新しい上層の遺構面から年代が古い下層の遺構面の順に示す。本項に掲載した遺構面の変遷と遺物の様相については、本節末に設けた小結の中にまとめて記述した。

(1) 第 1 遺構面

i) 第 1 遺構面の概要 (第 67 図)

第 1 遺構面は、標高 0.90 ～ 1.00 m で検出した遺構面である。遺構は、石列 SS01、土坑 SK01 を検出した。遺構面は、現地表面 (標高 1.45 m) 以下に堆積する層厚 50㎝の撹乱層を除去した段階で遺構を検出した任意の遺構面である。

第 1 遺構面の基盤となる MJ2 層は、緑灰色粘質土の山土を主体とする嵩上げ造成による整地層である (第 66 図第 4 層)。層厚は 10 ～ 20㎝を測り、山土造成土を露呈した面で遺構を検出したことから、これを第 1 遺構面とした。遺構面の時期は、出土遺物の年代から 18 世紀後半～ 19 世紀前半を想定している。



第 67 図　第 1 遺構面平面図

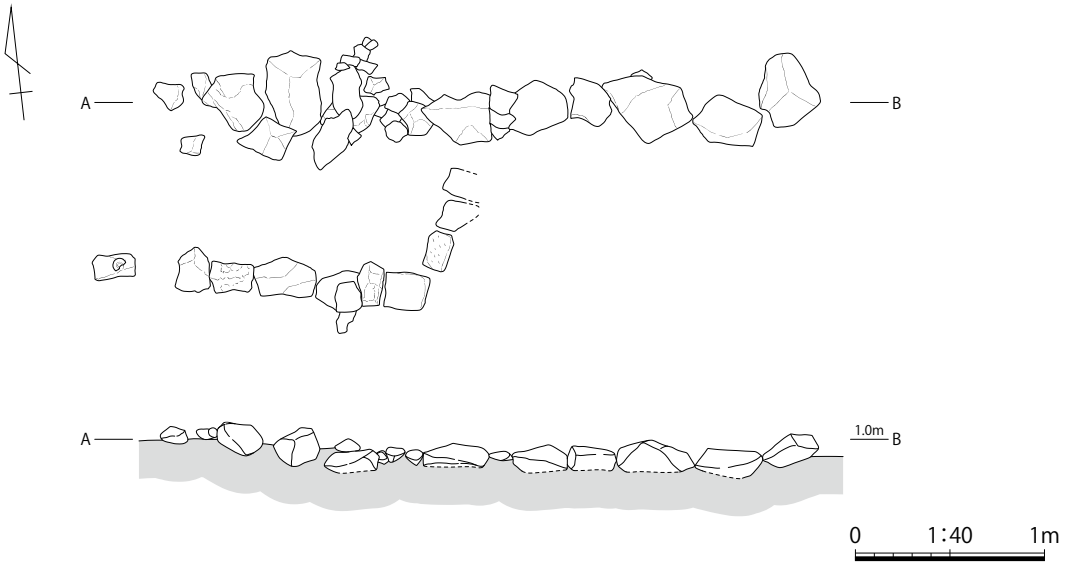
ii）第 1 遺構面の遺構と遺物

石列 SS01(第 68 図)

調査区の中央部で検出した石列で、北側の石列は東西方向に直線的に配列され、南側の石列はＬ字状に配列されている。

北側の石列の規模は長さ 3.50 m、幅 0.40 mを測る。石列の天端は標高 1.00 ～ 1.10 m、主軸方位はＥ－ 4°－Ｓである。石列の石材には大海崎石が使用され、長軸 40㎝の石材が据えられている。石列は面が揃えられておらず、規則性は見られなかった。南側の石列の規模は長さ 1.80 m、幅 0.20 mを測り、東角で北側へ向かってＬ字状に折れ曲がる。石列の石材には大海崎石・島石・来待石が使用されている。

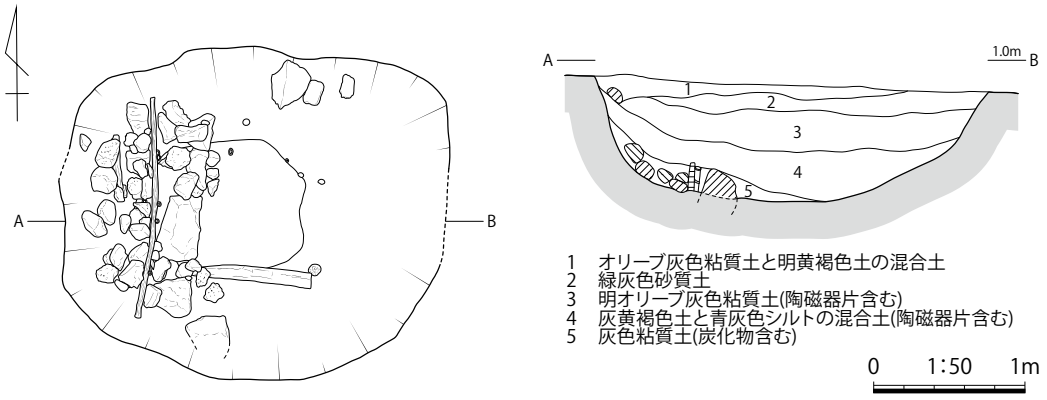
SS01 の性格は、建物に伴う礎石や地覆石である可能性は低く、その用途は明確ではない。SS01 から遺物は出土していない。



第 68 図　SS01 平面図・断面図

土坑 SK01(第 69 図)

調査区の西側で検出した廃棄土坑である。検出面は標高 0.90 mで、平面形は楕円形を呈する。規模は上縁長軸が 2.50 m、短軸が 2.20 m、深さ 0.78 mを測る。土坑底部の西側には、直径 10 ～ 20 ㎝程度の礫が敷き詰められており、礫敷きと考えられた。この礫敷きの中央には、長さ 80 ～ 150㎝、幅 20㎝、厚さ 3㎝の木板が竹杭とともに L 字状に固定されており、土留め板が施されているものと捉えている。土坑埋土は 5 層に分層でき、下位の明オリーブ灰色粘質土 (第 3 層) と灰黄褐色土と青灰色シルトの混合土 (第 4 層) から陶磁器や土師器皿などが出土している。



第 69 図　SK01 平面図・断面図

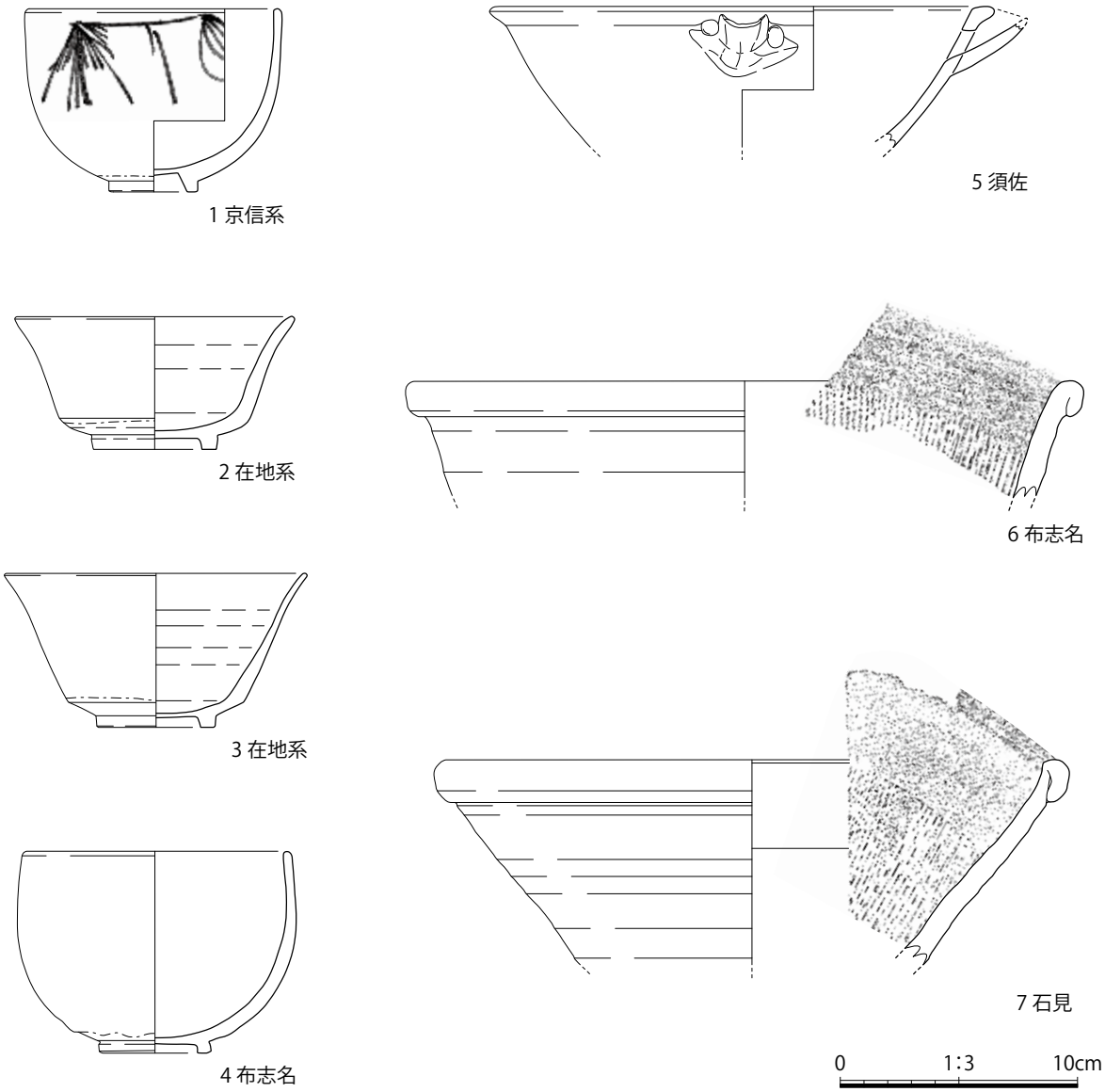
SK01 出土遺物 (第 70・71 図)

ここでは SK01 の埋土から出土した遺物を掲載する。70-1 ～ 71-1 は国産陶器である。70-1 は京信系陶器の碗である。胴部外面に呉須絵で注連縄文を描き、透明釉を施す。高台は露胎。18 世紀後半。70-2 は在地系陶器の碗である。口縁部をやや外反させ、内外面に白濁釉を施す。高台は露胎。19 世紀前半。70-3 は在地系陶器の碗である。器壁は薄く、口縁部をやや外反させる。内外面に透明釉を施し、高台は露胎。19 世紀前半。70-4 は在地系陶器 (布志名) の碗である。いわゆる「ボテボテ茶碗」で内外面に白濁釉を施し、高台は露胎。19 世紀前半。70-5 は須佐 (山口) の片口である。片口の両脇にボタン状の粘土を貼り付け、内外面に緑釉を施す。18 世紀後半。70-6 は在地系陶器 (布志名) の擂鉢である。高台は欠損しているが、口縁端部を折り返して玉縁状におさめる。スリ目単位は 10 本。18 世紀後半～ 19 世紀前半。70-7 は在地系陶器 (石見) の擂鉢である。高台は欠損しているが、口縁端部を折り返して玉縁状におさめる。スリ目単位は 12 本。18 世紀後半～ 19 世紀前半。71-1 は須佐 (山口) の擂鉢である。高台は欠損しているが、口縁は断面長方形で口縁上端に面を持ち、口縁上端を外側に引き出す。スリ目は 1 単位が幅広で、やや弧を描き気味に掻き上げる。19 世紀前半のもので、佐伯氏分類Ⅱ群 B 類に該当する。

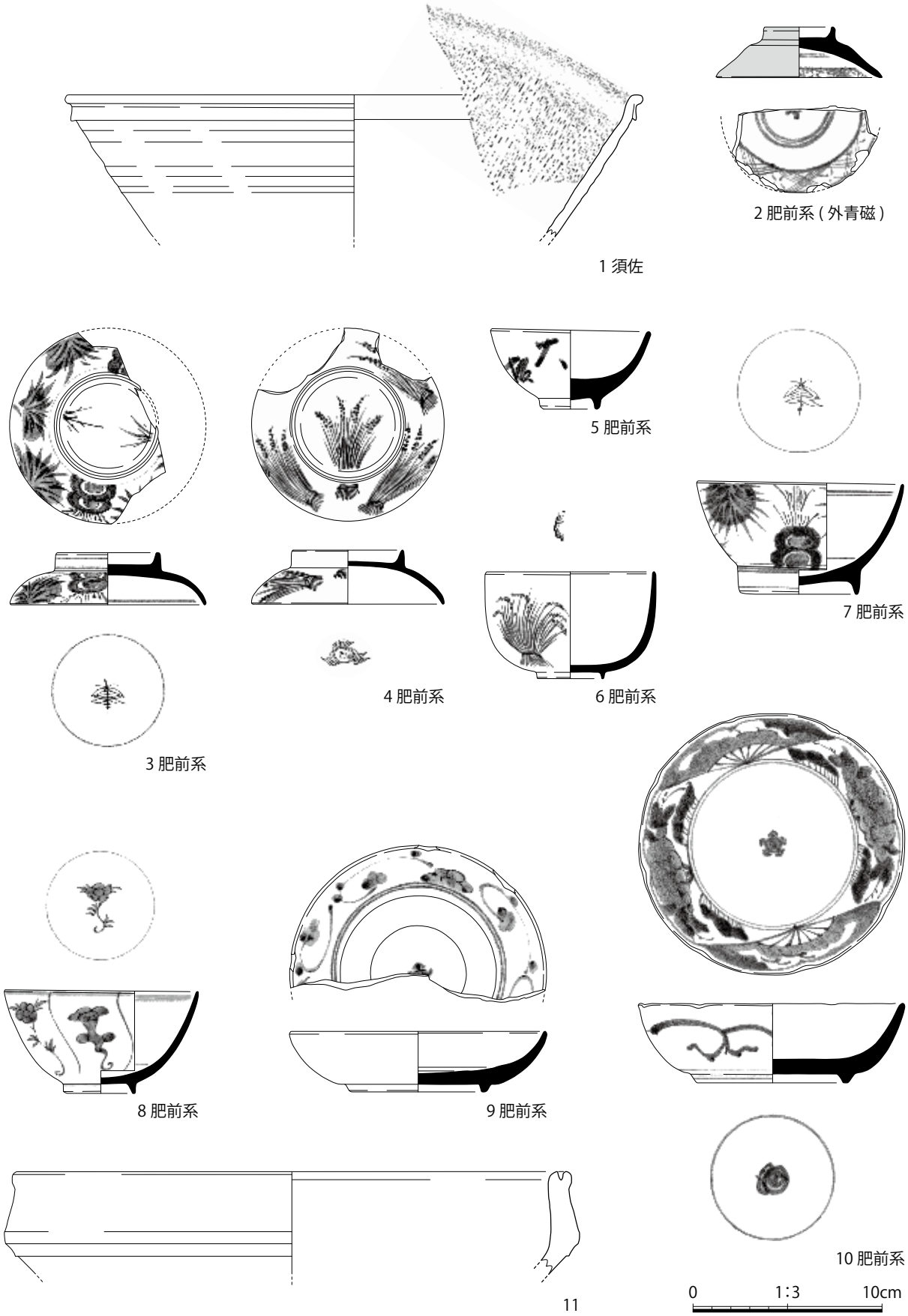
71-2 ～ 10 は国産磁器である。71-2 は肥前系磁器の蓋である。外青磁の蓋で、内面に四方襷と二重圏線を描き、見込みに五弁花の印判を施す。九陶Ⅳ期 (1760 ～ 1780 年代)。71-3 は肥前系磁器の蓋である。外面に竹笹文と太湖石文、内面見込みに昆虫文を描く。71-7 の広東碗とセットになるものである。九陶Ⅴ期 (1780 ～ 1840 年代)。71-4 は肥前系磁器の蓋である。外面に稲束文、内面見

込みに雀文を描く。九陶Ⅴ期 (1780 ～ 1860 年代)。71-5 は肥前系磁器の紅猪口である。高台から腰部に丸味をもって立ち上がり、口縁部に向かって開く。胴部外面に染付で「大坂　田□屋□」の銘文が描かれる。九陶Ⅴ期 (1820 ～ 1860 年代)。71-6 は肥前系磁器の丸碗である。胴部外面に稲束文、内面見込みに十字花文を描く。九陶Ⅴ期 (1780 ～ 1860 年代)。71-7 は肥前系磁器の広東碗である。胴部外面に竹笹文と太湖石文、内面見込みに昆虫文を描く。71-3 の蓋とセットになるものである。九陶Ⅴ期 (1780 ～ 1840 年代)。71-8 は肥前系磁器の碗である。浅半球状で、胴部外面と内面見込みに仙芝祝寿文を描く。九陶Ⅴ期 (1820 ～ 1860 年代)。71-9 は肥前系磁器の皿である。内面は蛇ノ目釉剥ぎで、口縁部周辺に花唐草文を描き、見込みに五弁花の印判を施す。九陶Ⅴ期 (1780 ～ 1810 年代)。71-10 は肥前系磁器の皿である。外面に唐草文、内面口縁部周辺に牡丹文と扇文を描き、見込みに五弁花の印判を施す。高台内に「渦福」の銘をもつ。九陶Ⅳ期 (1730 ～ 1780 年代)。

71-11 は土師器の焙烙である。耳の穿孔は 1 箇所で、貫通していない。18 世紀後半を示し、難波氏分類 D 類 b2 に該当する。



第 70 図　SK01 出土遺物 (1)



第 71 図　SK01 出土遺物 (2)

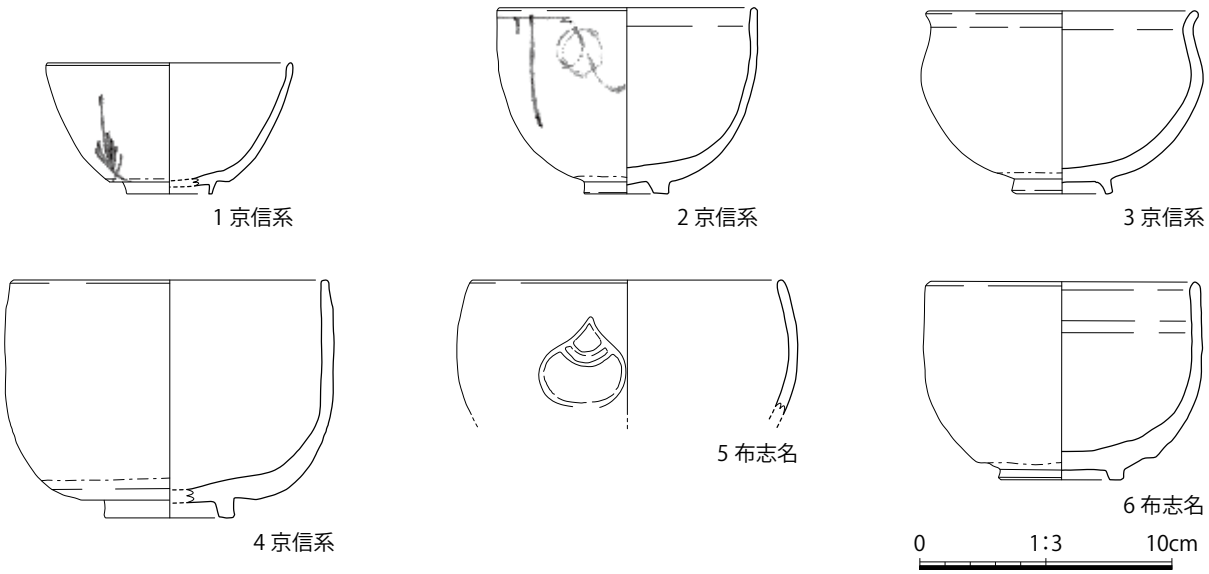
第 1 遺構面遺構外出土遺物 (第 72・73 図)

ここで掲載する遺物は、第 1 遺構面直上から出土したものを遺構外出土遺物として取り扱う。

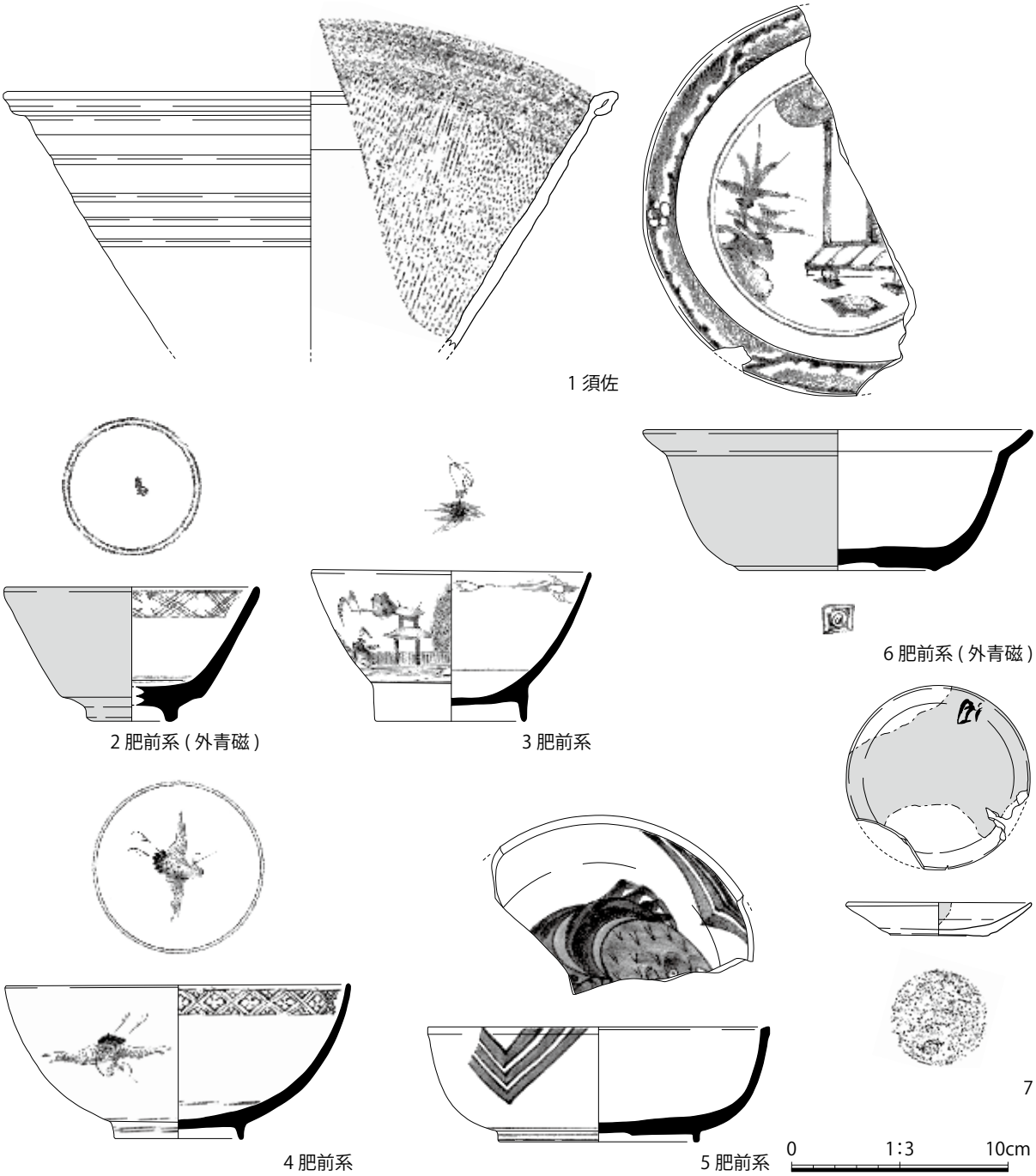
72-1 ～ 73-1 は国産陶器である。72-1 は京信系陶器の碗である。胴部外面に呉須絵で小杉文を描き、透明釉を施す。高台は露胎。18 世紀後半。72-2 は京信系陶器の碗である。胴部外面に呉須絵で注連縄文を描き、透明釉を施す。高台は露胎。18 世紀後半。72-3 は京信系陶器の碗である。内外面に貫入が入り、透明釉を施す。高台は露胎。19 世紀前半。72-4 は京信系陶器の碗である。高台から胴部上方にかけて直立気味に立ち上がり、透明釉を施す。高台は露胎。18 世紀後半。72-5 は在地系陶器 (布志名) の碗である。内外面に青地釉を施し、胴部外面に擬宝珠文の陰刻をもつ。高台は露胎。19 世紀前半。72-6 は在地系陶器 (布志名) の碗である。いわゆる「ボテボテ茶碗」で内外面に淡い青地釉を施し、高台は露胎。19 世紀前半。73-1 は須佐 (山口) の擂鉢である。高台は欠損しているが、口縁を外側に開いたまま折り返し、口縁端部を小さく尖り気味とする。スリ目は 1 単位が幅広で、やや弧を描き気味に掻き上げるように施し、スリ目上端は口縁下まで施される。18 世紀後半～ 19 世紀前半のもので、佐伯氏分類Ⅲ群 A 類に該当する。

73-2 ～ 6 は国産磁器である。73-2 は肥前系磁器の碗である。外青磁の碗で、口縁部内面に四方襷、見込みに二重圏線と五弁花を描く。九陶Ⅳ期 (1760 ～ 1780 年代)。73-3 は肥前系磁器の広東碗である。胴部外面に楼閣山水文、口縁部内面に花文と流水文、見込みに鷺文を描く。九陶Ⅴ期 (1780 ～ 1840 年代)。73-4 は肥前系磁器の半球碗である。胴部外面に鳥文、口縁部内面に四方襷文、見込みに二重圏線と鳥文を描く。九陶Ⅴ期 (1780 ～ 1860 年代)。73-5 は肥前系磁器の皿である。蛇ノ目凹形高台の皿で、口縁部内外面に三重の三角文、見込みに海老文を描く。九陶Ⅴ期 (1780 ～ 1860 年代)。73-6 は肥前系磁器の鉢である。外青磁の蛇ノ目凹形高台の鉢で、高台内に「渦福」の銘をもつ。見込みに屋敷庭の風景文を描く。九陶Ⅴ期 (1780 ～ 1860 年代)。

73-7 はロクロ成形の在地系土師器皿で、底部に糸切り痕をもつ灯明皿である。口縁部内面に墨書で「田」が描かれる。



第 72 図　第 1 遺構面遺構外出土遺物 (1)



第 73 図　第 1 遺構面遺構外出土遺物 (2)

(2) 第 2 遺構面

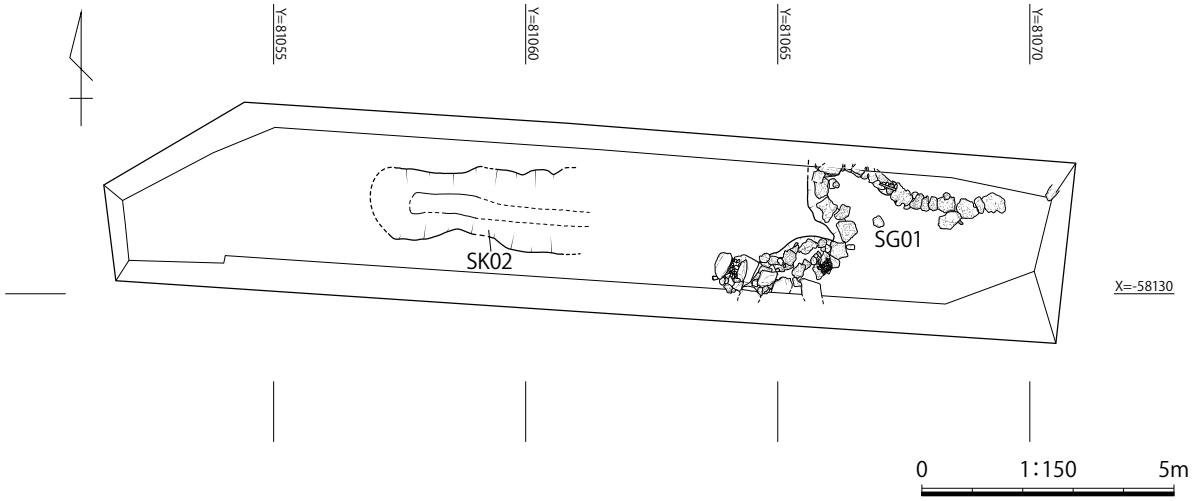
i) 第 2 遺構面の概要 (第 74 図)

第 2 遺構面は、標高 0.80 m で検出した遺構面である。遺構は、池 SG01、土坑 SK02 を検出した。

第 2 遺構面の基盤となる MJ3 層は、上位と下位で土層堆積状況が異なるため、上位の暗灰色砂質土を主体とする嵩上げ造成による整地層を MJ3a 層、下位に堆積する砂層を MJ3b 層とし、概ね 5 層に細分した (第 66 図第 5 ～ 9 層)。MJ3a 層の層厚は 20㎝を測り、最上位の整地層を露呈した面で遺構を検出したことから、これを第 2 遺構面とした。

MJ3a 層は調査区内のほぼ全域で確認したが、MJ3b 層は調査区の西側の限られた範囲で確認した

砂層である。この砂層は、本遺跡から城山北公園線を挟んで北側に位置する、第 13 ブロック 13-2a 区の第 2 遺構面で検出した砂層と連続して堆積していた可能性がある。遺構面の時期は、出土遺物の年代から 17 世紀前半～後半を想定している。



第 74 図　第 2 遺構面平面図

ii）第 2 遺構面の遺構と遺物

池 SG01(第 75 図)

調査区の東側で検出した縁石を伴う池である。調査時の段階での検出面は標高 0.30 m前後とやや低い位置で検出しているが、改めて検討したところ調査区北壁の土層断面から、標高 0.80 mの第 2 遺構面の整地層から掘り込まれているものと判断した。

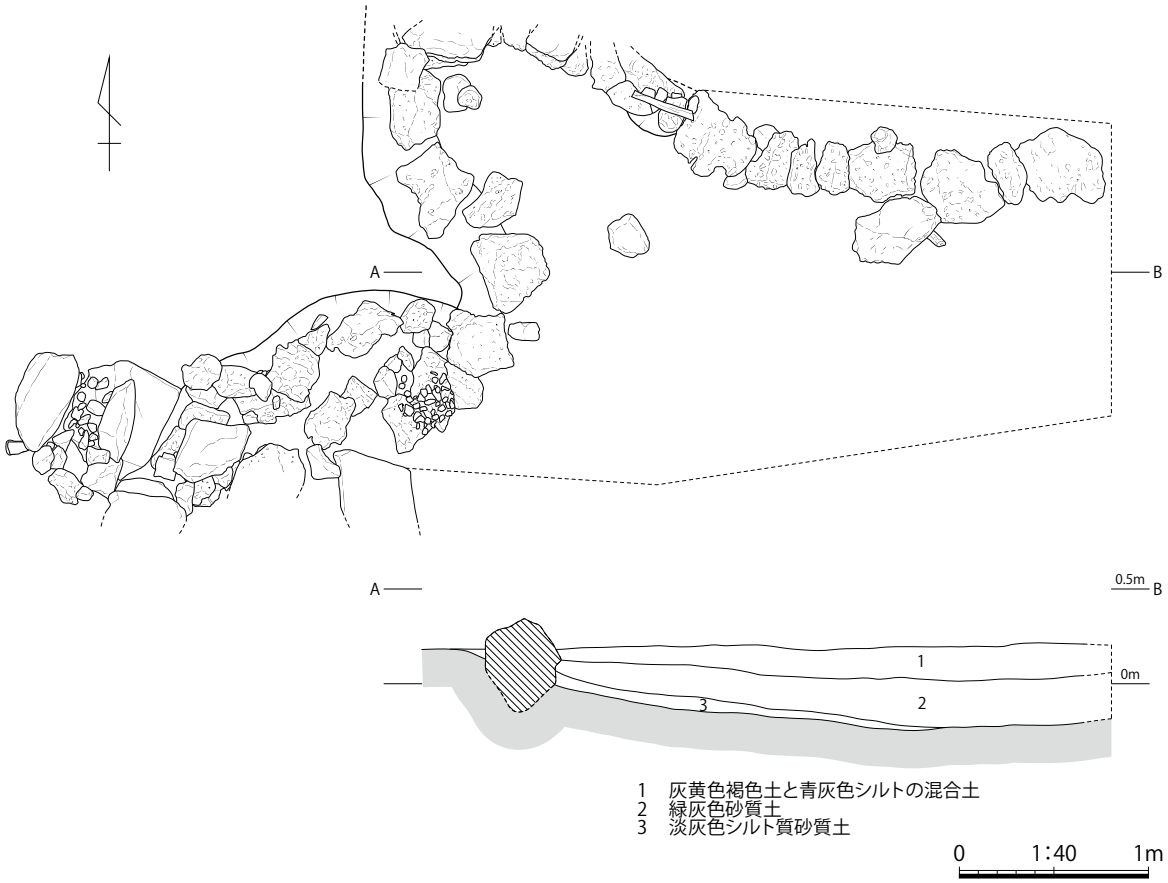
平面形は歪んだ瓢箪形を呈するものと考えられ、規模は東西幅 5.00 m、南北幅 2.50 m、深さ 0.45 mを測る。池の底面は標高 -0.25 ～ 0 mで、西側から東側へ向かって傾斜している。底面では貼石等は検出しておらず、素掘りの掘り方に縁石を伴う池と捉えている。

池の縁石は、標高 0.38 mで天端を検出し、長軸 30 ～ 50㎝の石が 1 段並べられていた。石材にはすべて島石が使用されている。この縁石は、掘り込み面から想定して、2 段積みであった可能性が考えられる。また、池の南西側の一部では、長軸 50㎝の大海崎石を階段状に 4 段積み上げていた。この階段状の石積は池の昇降口としていたものと捉えている。

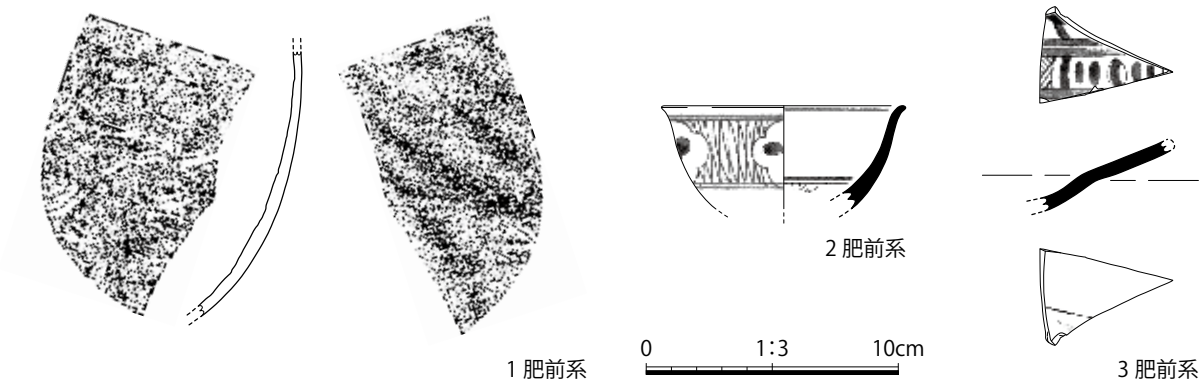
埋土は 3 層に分層でき、いずれもシルト質～砂質土で水成堆積層の可能性が考えられる。下位の淡灰色シルト質砂質土 (第 3 層) から陶磁器が出土している。SG01 の性格は、屋敷地側面の空閑地に位置する、庭園の一部として存在していた池と考えられる。

SG01 出土遺物 (第 76 図)

ここでは SG01 の埋土から出土した遺物を掲載する。76-1 ～ 3 は国産陶磁器である。76-1 は肥前系陶器の瓶である。内面に同心円状のタタキ痕があり、タタキの後にナデ消している。外面に鉄釉を施す。九陶Ⅲ期 (1650 ～ 1690 年代)。76-2 は肥前系磁器の碗である。胴部外面に花文と網目文を描く。九陶Ⅲ期 (1650 ～ 1690 年代)。76-3 は肥前系磁器の皿である。口縁部周辺の小片のみ残存するが、芙蓉手の皿と考えられる。九陶Ⅲ期 (1650 ～ 1670 年代)。



第 75 図　SG01 平面図・断面図



第 76 図　SG01 出土遺物

土坑 SK02(第 77 図)

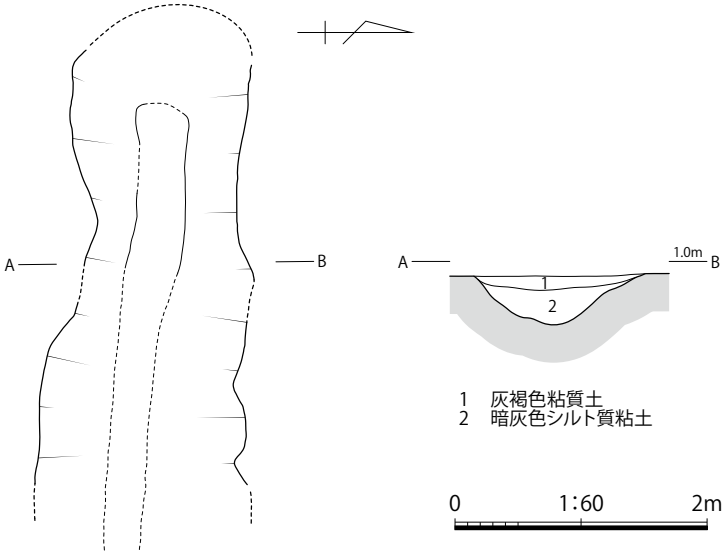
調査区の中央部～西側で検出した土坑である。検出面は標高 0.80 m で、平面形は長楕円形を呈する。規模は上縁長軸が 4.00 m、短軸が 1.40 m、深さ 0.35 m を測る。

土坑埋土は 2 層に分層でき、下位の暗灰色シルト質粘土 (第 2 層) から陶器が 1 点出土している。

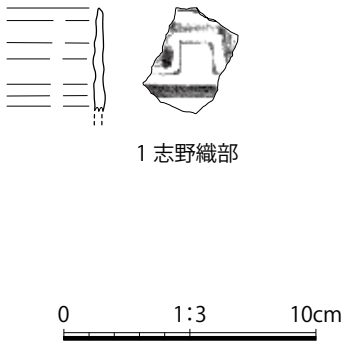
SK02 の性格は、廃棄土坑である可能性は低く、その用途は明確ではない。

SK02 出土遺物 (第 78 図)

ここでは SK02 の埋土から出土した遺物を掲載する。78-1 は志野織部の筒形向付で、口縁部周辺の小片のみ残存する。口縁端部と外面に線文を描く。17 世紀初頭。



第 77 図　SK02 平面図・断面図



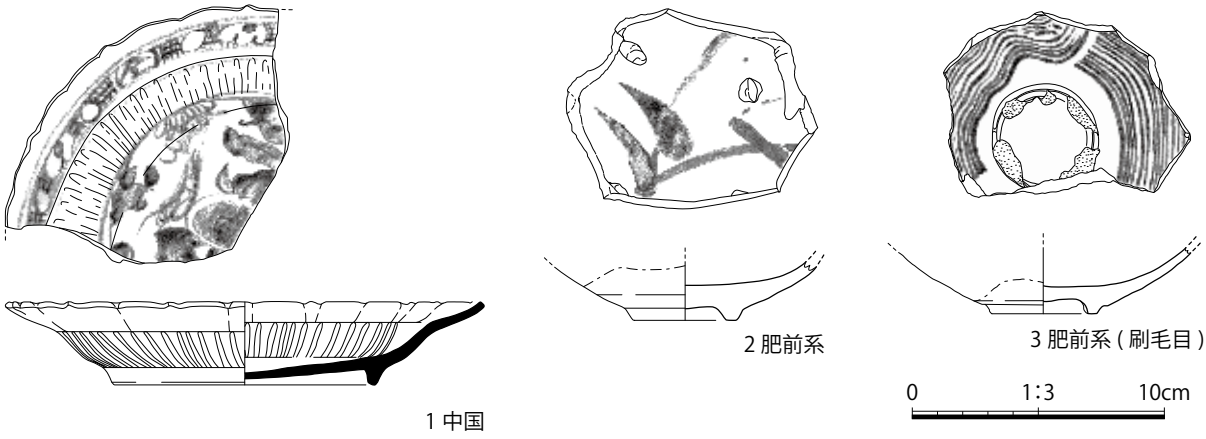
第 78 図　SK02 出土遺物

第 2 遺構面遺構外出土遺物 (第 79・80 図)

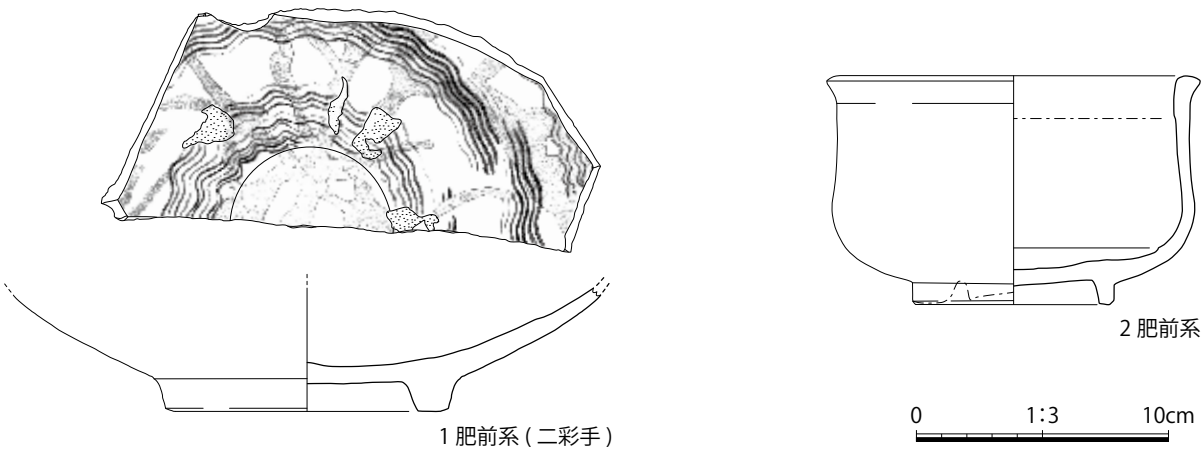
ここで掲載する遺物は、第 2 遺構面直上から出土したものを遺構外出土遺物として取り扱う。

79-1 は中国磁器で、漳州窯系の青花皿である。型打成形の輪花皿で、体部内外面に鎬文の陰刻を施す。口縁部周辺の内外面と見込みに草花文を描く。畳付は無釉。17 世紀前半のもので、森氏分類青花皿 F 群に該当する。

79-2 ～ 80-2 は国産陶器である。79-2 は肥前系陶器の皿である。内面に鉄絵で草文を描き、見込みに 4 箇所の胎土目痕が残る。内外面に灰釉を施し、高台は露胎。九陶Ⅰ -2 期 (1594 ～ 1610 年代)。79-3 は肥前系陶器の刷毛目皿である。体部内面に白土を掛けて刷毛目文とし、見込みに 4 箇所の砂目痕が残る。内外面に灰釉を施し、高台は露胎。九陶Ⅱ期 (1610 ～ 1630 年代)。80-1 は肥前系陶器の平鉢である。二彩手のもので、内面に白化粧を施した後に櫛描で波状文を描き、その上に緑褐釉を施す。見込みに 4 箇所の砂目痕が残り、高台周辺は無釉。九陶Ⅲ期 (1650 ～ 1690 年代)。80-2 は肥前系陶器の火入である。口縁部内面～胴部外面に灰釉を施し、高台内は無釉。九陶Ⅲ期 (1650 ～ 1690 年代)。



第 79 図　第 2 遺構面遺構外出土遺物 (1)



第 80 図　第 2 遺構面遺構外出土遺物 (2)

(3) 第 3 遺構面

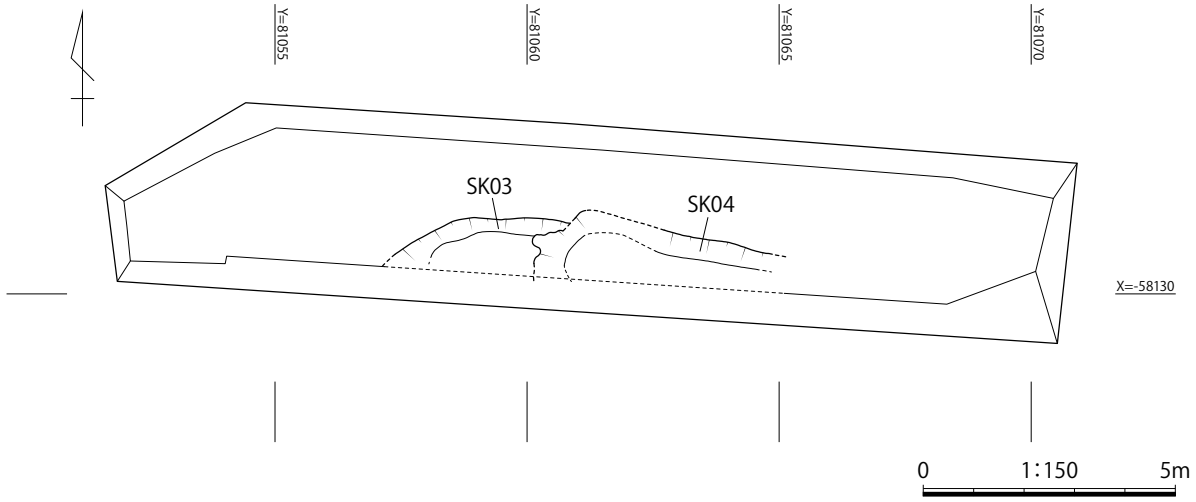
i) 第 3 遺構面の概要 (第 81 図)

第 3 遺構面は、標高 0.50 ～ 0.60 mで検出した遺構面である。遺構は、土坑 SK03･04 を検出した。

第 3 遺構面の基盤となる MJ4 層は、青灰色細砂と茶褐色有機質粘土の混合土を主体とする城下町初期造成段階の整地層である (第 66 図第 10 層)。層厚は 50㎝を測り、整地層を露呈した面で遺構を検出したことから、これを第 3 遺構面とした。

第 3 遺構面は、城下町造成以前の旧地表面 (MJ5b 層) に盛土を施して造成された城下町形成時あるいは城下町形成直後の最初の遺構面と考えられる。遺構面の時期は、遺物が出土していないため実年代の手がかりはないが、土層断面の層序から城下町初期造成段階の時期であることに齟齬はないことから、17 世紀初頭～前半を想定している。

なお、本遺跡は発掘調査開始当初から、道路と屋敷地の境界にあたる東西方向の区画境大溝の検出が予想されていた地点にあたる。今回の調査では区画境大溝は検出していないが、本調査終了後に第 14 ブロックで立会調査を実施したところ、本遺跡と調査区が重複する MJR365 の東側では区画境大溝を検出している。この調査成果から､本遺跡内に区画境大溝の存在を想定させる結果となっている。



第 81 図　第 3 遺構面平面図

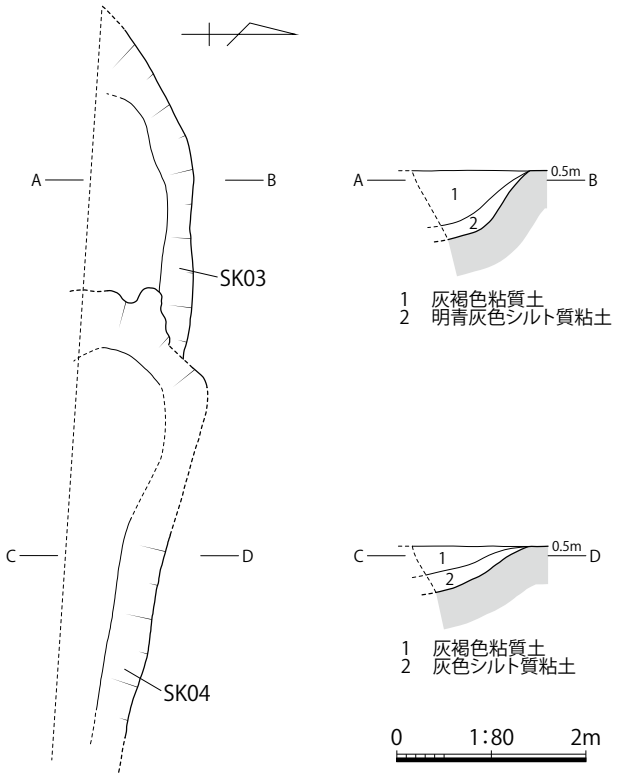
ii）第３遺構面の遺構と遺物

土坑 SK03・04(第 82 図)

調査区の中央部で検出した土坑である。検出面は標高 0.60 ｍで、平面形は長楕円形を呈する。検出した２つの土坑は切り合っており、先後関係はSK03(古)･SK04(新) と考えられる。SK03 の規模は上縁長軸が 3.70 ｍ､短軸が 1.08 ｍ、深さ 0.72 ｍを測る。SK04 の規模は上縁長軸が 5.00 ｍ、短軸が 1.36 ｍ、深さ 0.48 ｍを測る。

土坑埋土は２層に分層でき、上層から灰褐色粘質土 (第１層)、明青灰色～灰色シルト質粘土 (第２層) が堆積する。

SK03・04 の性格は、遺物が出土していないことから廃棄土坑である可能性は低い。また、区画境大溝も検出されていないことから、このような遺物を含まない土坑は造成土の採掘を目的とした土取穴の可能性が考えられる。



第 82 図　SK03・04 平面図・断面図

(4) 第４遺構面

第４遺構面の概要

第４遺構面は、標高０ｍで検出した城下町形成以前の旧地表面である。今回の調査では、調査区南壁の崩落により、第４遺構面に相当する旧地表面 (MJ5b 層上面) の平面検出まで至っていない。旧地表面は北壁の一部で深掘りを行い、土層断面を確認するに留まっている。

第４遺構面の基盤となる MJ5b 層は、下位の MJ6b 層上面に層厚 30㎝のほぼ均一の厚さで水平堆積している。MJ5b 層は、上層から茶褐色有機質粘土 (ラミナ層)・黒色有機物層・淡茶色有機物層が堆積し、いずれも未分解の有機物層である (第 66 図第 11 ～ 13 層)。

本遺跡で確認した旧地表面の検出標高は０ｍであるのに対し、本遺跡から城山北公園線を挟んで北側に位置する、第 13 ブロック 13-2 区の第４遺構面で確認した旧地表面の検出標高は 0.45ｍを測る。南北約 15 ｍの距離で、その比高差は 45㎝生じている。これまでの城山北公園線沿線の発掘調査成果から、旧地表面の検出標高を東西軸で見ると、松江城に近い殿町～南田町までの約 1㎞区間で、西から東へ向かって徐々に傾斜していることが明らかとなっている。南田町における２つの遺跡を対比した場合ではあるが、北から南へ向かって旧地表面が傾斜している可能性が考えられる。

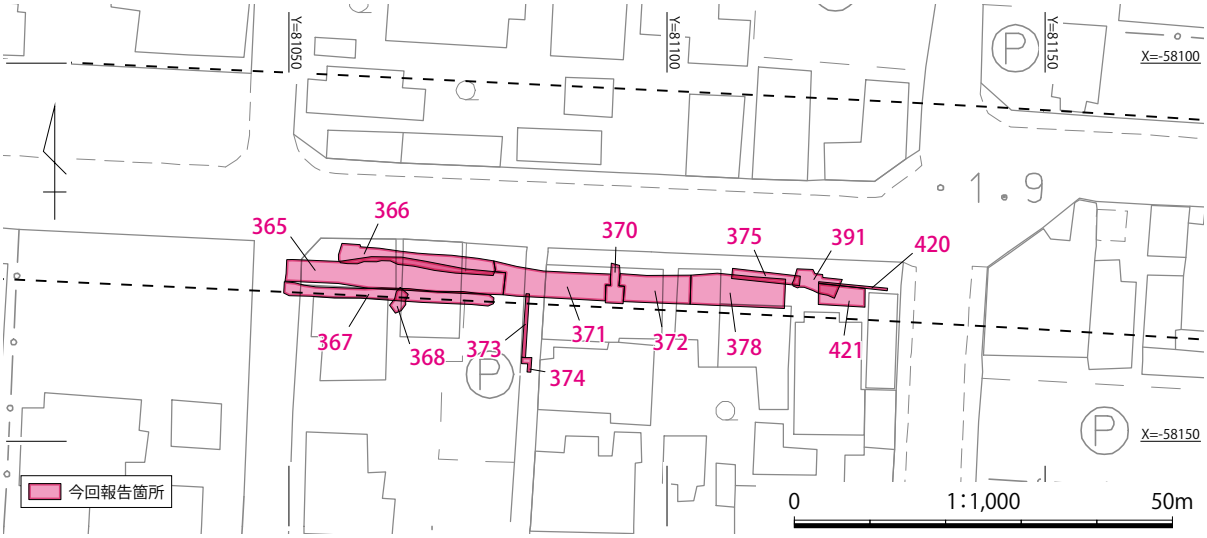
遺構面の時期は、旧地表面の形成土が堆積した時期の上限は不明だが、下限は第３遺構面の城下町初期造成土が盛られる前段階までを想定している。

第 4 項　第 14 ブロックの立会調査

第 14 ブロックの立会調査対象となる主な調査原因には、電線共同溝埋設工事・下水道移設工事・マンホール設置工事がある。

第 14 ブロックで平成 18 ～ 29 年度までに立会調査を実施した地点は 14 箇所あり、すべて平成 26 年度に実施している (第 83 図)。表 10 には、第 14 ブロックにおいて平成 26 年度に立会調査を実施した調査成果を一覧表にして示した。ここでは一覧表に示した 14 箇所のうち、城下町の成り立ちを考える上で重要な遺構と考えられる MJR378 で検出した入り堀について触れておきたい。

なお、MJR365 は第 14 ブロックで本調査を実施した 14-1 区と重複する位置にあたり、本調査範囲外となっていた MJR365 の東側では、城下町形成段階に位置付けられる東西方向の区画境大溝を検出している。大溝は溝の北側肩部の落ち込みを確認するに留まっているが、南田町の街区沿いでも大溝の広がりを確認することができた。



※図中の番号は調査区 (MJR) を示す

第 83 図　第 14 ブロック立会調査地点位置図

表 10　第 14 ブロック立会調査箇所一覧 (平成 26 年度)

番号	調査区	地番	調査日	調査面積	掘削深度	検出遺構	出土遺物
1	MJR365	南田町 101-21 外	14.04.05 ～ 04.11	138.3㎡	2.60m	石組水路・大溝 (東西方向)	遺物なし
2	MJR366	南田町 101-21 外	14.04.25 ～ 04.28	42.0㎡	1.10m	木枠遺構	陶磁器
3	MJR367	南田町 101-21 外	14.05.07	39.5㎡	0.70m	石組水路 (東西方向)	遺物なし
4	MJR368	南田町 101-21 外	14.05.09	4.6㎡	1.40m	遺構なし	遺物なし
5	MJR370	南田町 101-20 外	14.05.15 ～ 05.17	8.9㎡	2.00m	遺構なし	遺物なし
6	MJR371	南田町 101-20 外	14.05.19 ～ 05.22	51.3㎡	1.90m	遺構なし	遺物なし
7	MJR372	南田町 101-20 外	14.05.22 ～ 05.23	33.5㎡	1.80m	石積井戸	遺物なし
8	MJR373	南田町 101 外	14.06.06	4.0㎡	0.70m	遺構なし	遺物なし
9	MJR374	南田町 101 外	14.06.08	1.6㎡	0.90m	遺構なし	遺物なし
10	MJR375	南田町 103-1 外	14.06.23	11.7㎡	1.10m	遺構なし	遺物なし
11	MJR378	南田町 103-1 外	14.06.26 ～ 06.27	46.5㎡	2.10m	堀 (南北方向)	陶磁器・宝篋印塔
12	MJR391	南田町 103 外	14.06.26 ～ 06.28	14.3㎡	1.20m	遺構なし	遺物なし
13	MJR420	南田町 103 外	14.09.10	18.8㎡	1.30m	石組水路 (東西方向)	遺物なし
14	MJR421	南田町 103 外	14.09.18 ～ 09.22	16.2㎡	2.40m	遺構なし	遺物なし

立会調査 MJR378(第 84 ～ 86 図)

調査地点は、第 14 ブロックの東側に位置する南田町 103-1 外地内で、電線共同溝埋設工事に伴う掘削作業に併せて立会調査を実施した。調査範囲は東西 11.6 m×南北 4.0 mの調査面積 46.5㎡で、掘削深度は現地表面標高 1.60 mから工事床面標高 -0.55 mまでの 2.10 mである。

立会調査の結果、南北方向の入り堀 (船入川) の堆積層を検出し、京極期絵図に描かれている堀幅を想定できる成果が得られた。以下では、年代が古い下層から年代が新しい上層の状況を堀尾期・京極期・松平期・近代の順で、絵図を含めた入り堀の変遷をまとめておきたい。

堀尾期の状況

第 14 ブロックの旧地表面は標高 0 mで検出しているが、MJR378 では旧地表面そのものが検出されていない。このことは、MJR378 よりもさらに西側へ広い入り堀があり、堀底は旧地表面以下まで掘り込まれていた可能性が考えられる。堀尾期の段階では入り堀の中にあたることが想定される。

京極期の状況

京極期絵図には入り堀の幅と深さが記載されており、これによると MJR378 付近は幅 10 間 (18.18 m)、深さ三尺 (0.90 m) であったことが分かる (第 85 図)。第 14 ブロックの東角に残る現在の暗渠を基点とした場合、この基点から西側へ 18.18 m地点が MJR378 の東端付近に該当する。土層堆積状況から入り堀と屋敷地の境界は捉えられなかったが、土層断面第 6 層 (第 86 図) の出土遺物は肥前系磁器を含まない 17 世紀前半を示すことから、京極期の堀底に堆積した土層を検出している可能性が考えられる。第 87 図に掲載した宝篋印塔 (87-1) は、この土層付近から出土している。

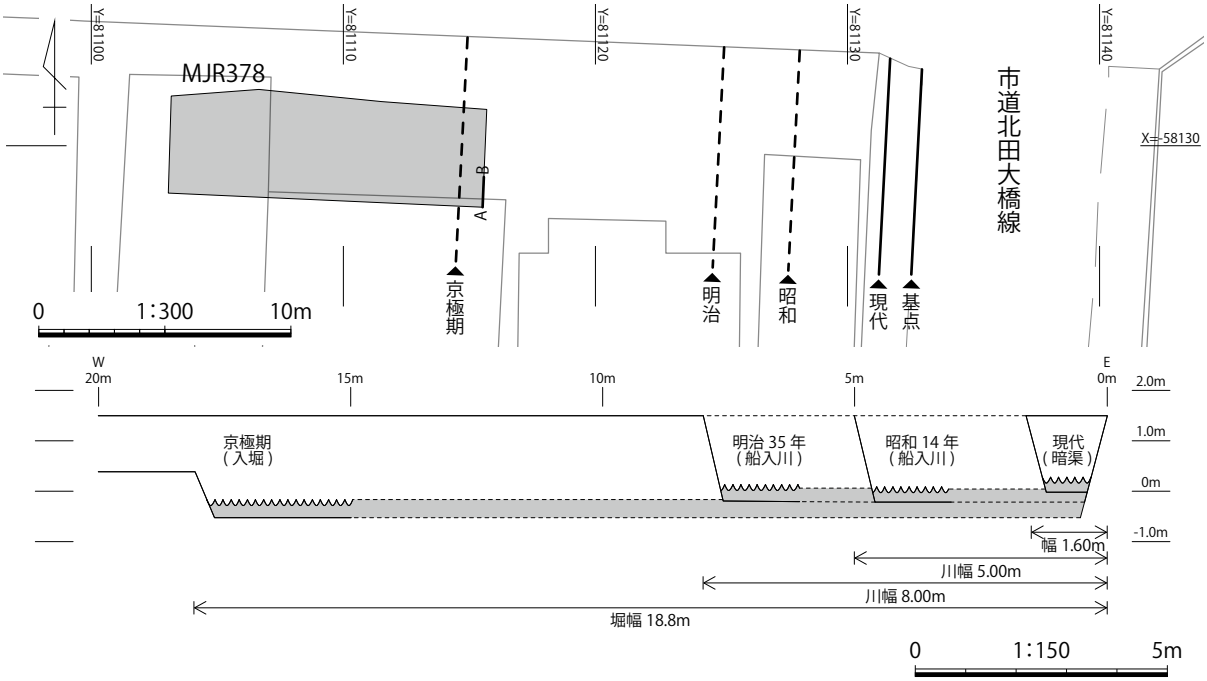
松平期の状況

土層断面第 5 層から肥前系磁器を含む松平期以降の遺物が出土している。第 5 層上面は標高 0.22 mで検出しており、付近の調査区で検出している松平期の遺構面よりもかなり低い位置にあたる。検出標高が低いことから、松平期前半の時期に堀底に溜まった砂層と遺物を検出している可能性が考えられる。松平期前期の絵図では、入り堀の東西両岸に石垣が描かれており、石垣の敷設によって護岸をより強固なものに改変していたことが分かる。立会調査では、堀石垣は見つかっていないが、後世に川幅を狭めていることや、近現代の撹乱によって石垣が消失している可能性がある。

近代の状況

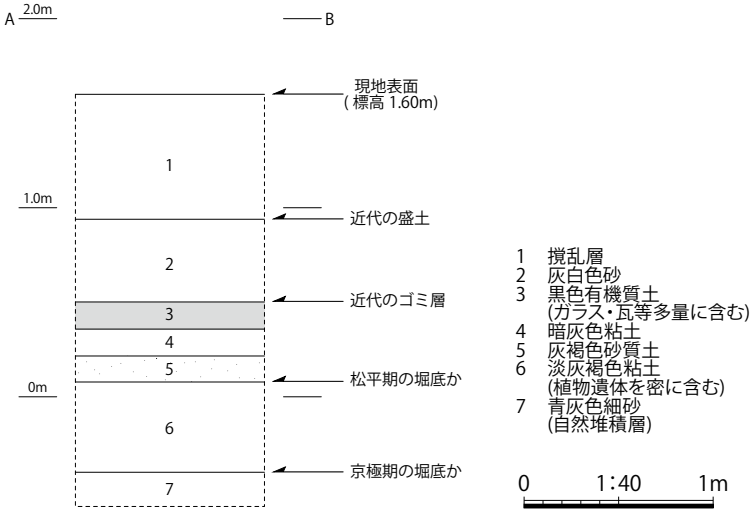
現地表面以下の標高 0.38 mまでは土層断面第 1 層の撹乱層と第 2・3 層の近代の盛土が堆積する。入り堀は、近代以降には「船入川」と呼ばれていたようである。明治 35 年の地図よると川幅が四間一尺 (8.00 m) になることから、江戸時代の入り堀に比べて狭くなっていることが分かる。昭和 14 年の鎗場橋改架工事図面によるとさらに 5.00 mまで川幅が狭められる。現在の船入川は、コンクリートで蓋がされており、幅 1.60 mの暗渠となっている。

上記のように、立会調査範囲内では屋敷地の造成土と考えられる整地層は確認しておらず、土層断面から入り堀の中の堆積層を検出したものと捉えている。絵図の記載が事実であれば、堀尾期～京極期には川幅が広い素掘りの堀であったが、松平期にはこの堀に護岸が整備される。そして、近代から現代までの間に入り堀は埋め立てられ、川幅は徐々に狭められたということが考えられる。



第 84 図　MJR378 調査区配置図・堀変遷図

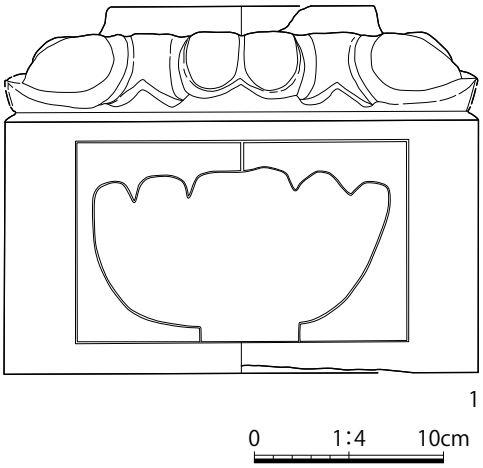
第 85 図　京極期絵図 (南田町周辺)



第 86 図　MJR378 土層断面柱状図

MJR378 出土遺物 (第 87 図)

MJR378 の立会調査では、土層断面第 5 層から 17 世紀後半～ 18 世紀前半の陶磁器、第 6 層から 17 世紀初頭～前半の陶磁器が出土したが、いずれも小片で図示できるものではなかった。ここでは、第 6 層付近から出土した宝篋印塔を掲載する。87-1 は宝篋印塔の基礎部分である。高さ 19.5㎝で、上部に複弁の反花座を設ける。下部は一辺 25.3㎝で、3 面に格狭間を彫る。石材は福井県高浜町から産出される安山岩質凝灰岩の「日引石」と推定され、形状の特徴から 15 世紀前半～中頃のものと考えられる。



第 87 図　MJR378 出土遺物

第５項　小結

前項までに発掘調査成果の概要を示し、14-1 区で検出した遺構・遺物について検討を加えた。本項ではまず、調査地が松江城下町絵図のどこに位置するのかを提示し、調査地周辺の様子を概観する。そして、調査地の遺構面の時期区分と変遷を整理し、併せて調査成果についてのまとめを行うことにしたい。

（1）松江城下町絵図に見る調査地とその周辺

現存する江戸時代の松江城下町絵図から、17 世紀前半～ 19 世紀後半 (堀尾期・京極期・松平期) の松江城下町における屋敷地を知ることができる。ここでは屋敷地の変遷を知る上で資料とした絵図の詳細・屋敷地名義・禄高を各絵図の説明の中で記載する。なお、各絵図左側には調査地周辺部分に第 14 ブロックを示す黒枠で加筆したものを、右側にはその部分を拡大し、14-1 区推定箇所を示す黒枠を加筆して掲載した。

第 14 ブロック (南田町) は、江戸時代を通して中級～下級家臣の屋敷地が配置されていた街区となっており、街区の東側に存在していた堀を屋敷地の背割とする形で屋敷割りがなされている。調査地である 14-1 区は、堀尾期～松平期中期絵図では 1 軒の屋敷地となっているが、松平期後期絵図では東西にほぼ二分する形で屋敷割りがなされており、その西側の屋敷地にあたる。絵図に記載されている屋敷地名義の向きを根拠とした場合、屋敷地の表口 (玄関部分) は江戸時代を通して市道南田南北線に面した西側にあたり、調査地は屋敷地北側の側面部分に該当するものと考えられる。

以下では各時期の絵図 5 点を通して調査地周辺の様子を概観する。

①堀尾期絵図 (第 88 図)　堀尾氏が統治していた時期の絵図として「堀尾期松江城下町絵図」(絵図作成年代：1620 ～ 33 年、島根大学附属図書館所蔵) がある。第 14 ブロックが所在する街区には 6 軒の屋敷地が配置され、明瞭な界線で屋敷地を区画している。街区の東側には屋敷地の背割部分に南北方向の堀が描かれている。14-1 区が比定する地点には「藤江弥八郎」の記載が見られ、堀尾期の段階から屋敷地となっていたことが分かる。藤江弥八郎は禄高 500 石である。

第 88 図　堀尾期松江城下町絵図

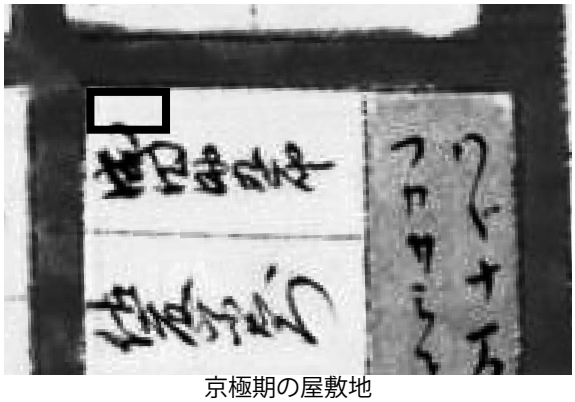
堀尾期の屋敷地

※絵図は上が北

②京極期絵図 (第 89 図)　京極氏が統治していた時期の絵図として「寛永年間松江城家敷町之図」(絵図作成年代：1634 ～ 37 年、丸亀市立資料館所蔵) がある。第 14 ブロックが所在する街区は、堀尾期絵図と同様に 6 軒の屋敷地が配置されている。14-1 区が比定する地点には「成田助九郎」の記載が見られ、1 軒の屋敷地となっている。京極期絵図には、屋敷地の背割にあたる堀の幅と深さが記載

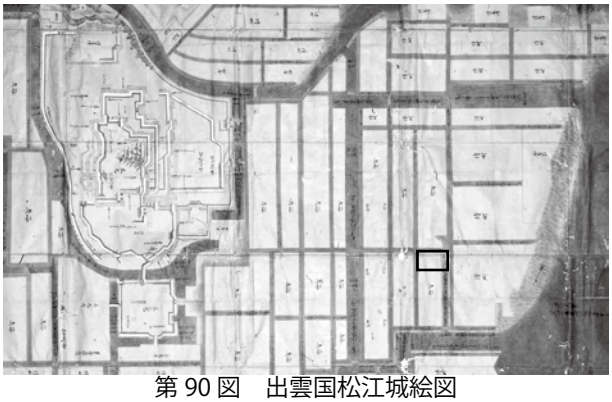
されており、幅 10 間 (18.18 m)、深さ三尺 (0.90 m) の堀であったことが分かる。成田助九郎は禄高 300 石である。

第 89 図　寛永年間松江城家敷町之図

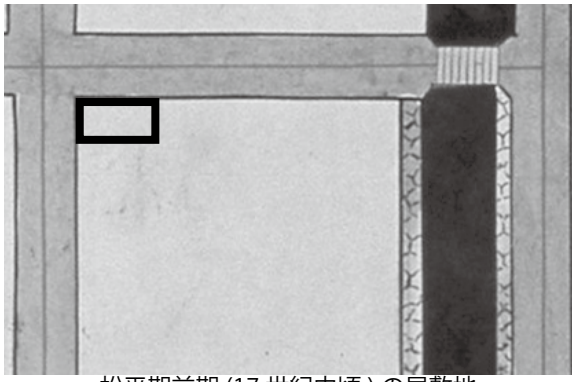


京極期の屋敷地

③松平期前期絵図 (第 90 図)　「出雲国松江城絵図」(絵図作成年代：1644 ～ 48 年、国立公文書館所蔵) は、松平氏が統治を開始した寛永 15(1638) 年に近く、17 世紀中頃の正保年間に幕府が諸藩に命じて作成させた絵図である。絵図には「侍町」の記載しか見られないが、14-1 区に武家屋敷が配置されていたことが分かる。屋敷地の背割にあたる堀の両岸には石垣が描かれている。



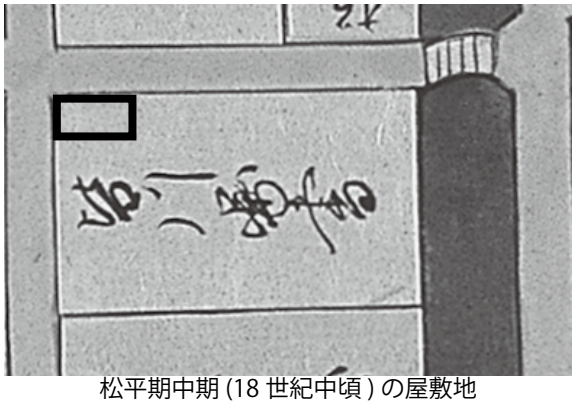
第 90 図　出雲国松江城絵図



松平期前期 (17 世紀中頃) の屋敷地

④松平期中期絵図 (第 91 図)　「松江城絵図」(絵図作成年代：1736 ～ 48 年、島根県立図書館所蔵) は、18 世紀中頃に作成された絵図である。第 14 ブロックが所在する街区は、絵図に描かれた屋敷割りが京極期絵図の 6 軒から変わっていない。14-1 区が比定する地点には「皆川図書」の記載が見られる。松平期前期絵図に描かれた堀が屈曲しながらさらに北側に延びており、堀尾期絵図に描かれている堀とほぼ同様の堀割を示す。皆川図書は禄高 150 石である。

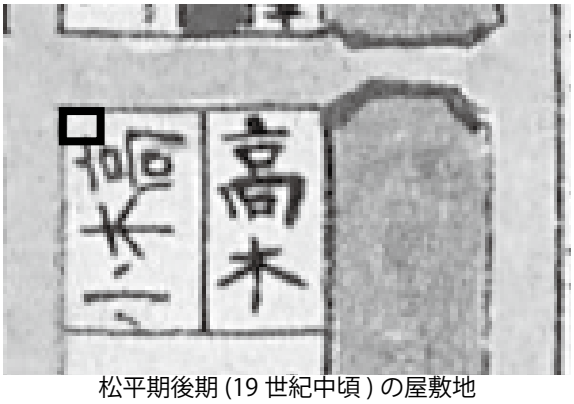
第 91 図　松江城絵図



松平期中期 (18 世紀中頃) の屋敷地

⑤松平期後期絵図（第 92 図）「松平期松江城下町絵図」（絵図作成年代：1825 ～ 51 年、島根大学附属図書館所蔵）は、19 世紀中頃に作成された絵図である。14-1 区が比定する地点には「高木」の記載が見られ、松平期中期絵図では 1 軒の屋敷地となっていたが、松平期後期絵図では東西 2 軒に分筆された屋敷地になり、その西側の屋敷地にあたる。高木は禄高 20 人扶持である。

第 92 図　松平期松江城下町絵図



松平期後期（19 世紀中頃）の屋敷地

（2）遺構面の時期区分と変遷（第 93 図）

ここでは、年代が古い下層の遺構面から年代が新しい上層の遺構面の順に遺構面の時期区分と変遷を示すことで、調査成果のまとめを行う。

ｉ）遺構面の時期区分

主な盛土や整地層、遺構の状況などを併せると遺構面の変遷は四つの時期に区分される。

第 4 面：MJ5b 層上面が相当する第 4 遺構面である。今回の調査では、第 4 遺構面に相当する旧地表面の平面検出まで至っておらず、土層断面で検出標高と層厚を確認するに留まっている。南田町周辺の調査成果から、この旧地表面は城下町が形成される以前の時期で、17 世紀初頭までが下限と考えて齟齬はないものと捉えている。

第 3 面：MJ4 層上面が生活面となっていた時期に相当する第 3 遺構面である。城下町初期造成などを含む城下町建設当初の時期から始まり、17 世紀初頭～前半の城下町成立期にあたるものと考えられる。今回の調査で陶磁器は出土していない。

第 2 面：MJ3 層上面が生活面となっていた時期に相当する第 2 遺構面である。MJ3 層は、上位と下位で土層堆積状況が異なるため、上位の暗灰色砂質土を主体とする嵩上げ造成による整地層を MJ3a 層、下位に堆積する砂層を MJ3b 層としている。

上位の MJ3a 層は 17 世紀前半～後半までが含まれ、陶磁器は中国磁器・志野織部・肥前系陶磁器が出土している。下位の MJ3b 層は砂層で、本遺跡から城山北公園線を挟んで北側の第 13 ブロック 13-2a 区の第 2 遺構面で検出した砂層と連続して堆積した可能性がある。

第 1 面：MJ2 層上面が生活面となっていた時期に相当する第 1 遺構面である。嵩上げ造成による整地が行われ、18 世紀後半～ 19 世紀前半までが含まれる。陶磁器は肥前系陶磁器・京信系陶器・在地系陶器・須佐擂鉢が出土している。SK01 から出土した陶磁器は、この時期の遺物組成を示す上で重要な一括資料として位置付けられる。

以下では各時期の状況についてまとめていくことにする。

ii）遺構面の変遷

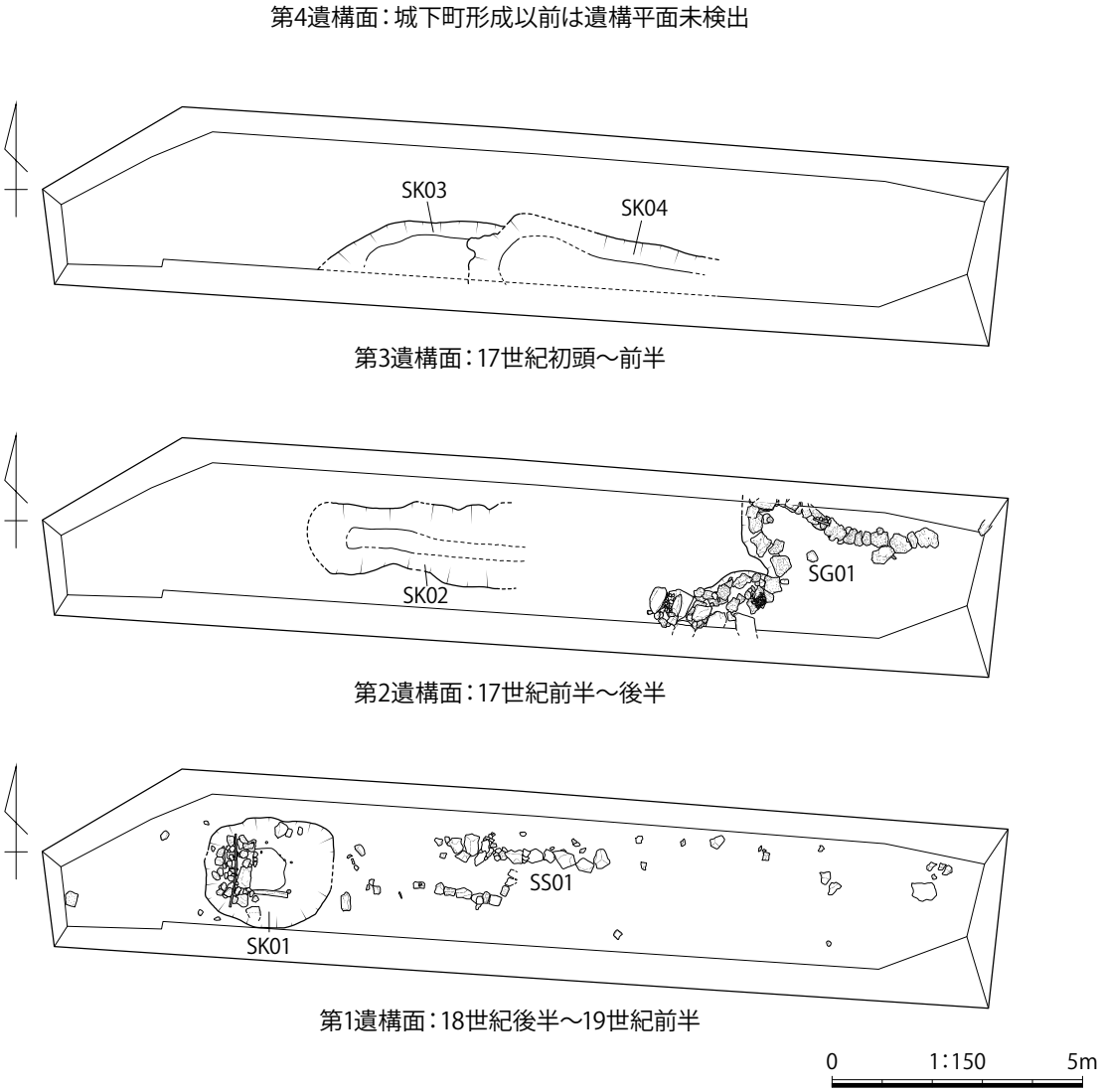
第 4 面：城下町形成以前

今回の発掘調査で検出した最も古い遺構面は、17 世紀初頭以前の MJ5b 層上面で、城下町形成以前の旧地表面に相当する第 4 遺構面である。本遺跡では土層断面での確認に留まっているが、調査区内では標高 0mでほぼ水平に堆積している状況を確認した。検出した旧地表面は、茶褐色有機質粘土 (ラミナ層) の上面で、この土壌は未分解の植物遺体を含む有機物層である。有機物と粘土が互層状に堆積することから、水際あるいは水辺からやや離れた陸地であったことが想定される。

第 3 面：17 世紀初頭～前半

城下町初期造成段階の遺構面として検出したのは、MJ4 層上面の第 3 遺構面である。MJ4 層上面で検出した遺構は、遺物が出土していないため実年代の手がかりはないが、土層断面の層序から城下町初期造成段階の時期であることに齟齬はなく、17 世紀初頭～前半に存在したものと考えられる。

検出した SK03・04 は、遺物が出土していないことから廃棄土坑である可能性は低い。このような遺物を含まない土坑は、造成土の採掘を目的とした土取穴の可能性が考えられる。



第 93 図　14-1 区遺構変遷図

第 2 面：17 世紀前半～後半

MJ3 層上面の第 2 遺構面の遺構は、池 SG01 や遺構面に含まれる遺物から 17 世紀前半～後半に存在したものと考えられる。第 2 遺構面は、上位と下位で土層堆積状況が異なるため、上位の暗灰色砂質土を主体とする整地層を MJ3a 層、下位に堆積する砂層を MJ3b 層としている。上位の MJ3a 層の整地層を露呈した面で遺構を検出したことから、この上面を生活面と捉えている。

検出した SG01 は、屋敷地の北側側面の空閑地に位置し、庭園の一部として存在していた池と考えられる。SK02 は、長楕円形を呈する土坑だが廃棄土坑である可能性は低く、その用途は明確ではない。第 2 遺構面の下位に堆積する砂層 (MJ3b 層) は、本遺跡から城山北公園線を挟んで北側に位置する第 13 ブロック 13-2a 区の第 2 遺構面で検出した砂層と連続して堆積した可能性がある。この砂層が堆積した時期は、第 3 遺構面の生活面が廃絶した段階以降～第 2 遺構面の整地層である MJ3a 層が堆積するまでの間に限定される。

第 1 面：18 世紀後半～ 19 世紀前半

MJ2 層上面の第 1 遺構面は、山土造成土による整地層上に形成された遺構面で、土坑 SK01 や遺構面に含まれる遺物から 18 世紀後半～ 19 世紀前半に存在したものと考えられる。

検出した SS01 は、建物に伴う礎石や地覆石である可能性は低く、その用途は明確ではない。SK01 は、楕円形を呈する土坑で、埋土に陶磁器片を含むことから廃棄土坑と考えられる。

上記のように、今回の調査では 17 世紀前半～後半の池や土坑、18 世紀後半～ 19 世紀前半の廃棄土坑といった遺構を検出した。断片的ではあるが、これらは屋敷地の側面部分の構造を復元していく上での手がかりになるであろう。

ⅲ）出土遺物の様相

14-1 区における出土遺物は、遺構面において陶磁器・土師器皿が出土した。遺物組成について、前述した遺構面に追従する形で以下にまとめておきたい。

第 4 面：城下町形成以前に該当する遺物は本遺跡では出土していない。

第 3 面：この時期に該当する遺物は本遺跡では出土していない。ただし、第 2 遺構面に含めている志野織部 (78-1) や肥前系陶器の胎土目皿 (79-2) については、この時期の可能性がある。

第 2 面：17 世紀前半は、肥前系磁器の出現によって大きな変化が見られ、17 世紀後半には肥前系陶器が減少して肥前系磁器が増加する時期である。本遺跡では、17 世紀前半の中国磁器の漳州窯系の青花皿や肥前系陶器の砂目皿 (刷毛目・二彩手)、17 世紀後半の肥前系磁器の碗皿類が出土している。土師器皿は京都系と在地系が出土し、京都系の占める割合が優勢である。

第 1 面：18 世紀後半～ 19 世紀前半は、肥前系磁器に京信系陶器や在地系陶器などが加わる時期である。本遺跡では、この時期の遺物組成を示す SK01 の出土遺物を挙げておきたい。SK01 から出土した陶磁器で特徴的なのは、陶器では京信系＋在地系 (布志名･石見）＋須佐がセットで出土しており、肥前系磁器では蛇ノ目釉剥ぎ皿＋外青磁碗＋広東碗がセットで出土している。これらは松江城下町遺跡における 18 世紀後半～ 19 世紀前半の陶磁器の様相を示す良好な一括資料と評価できる。土師器皿は京都系が出土せず、在地系で占められている。

第 4 節　第 16 ブロック (16-5 区)　松江城下町遺跡 (南田町 130-6 外)

第 16 ブロックは、市道北田大橋線から田町川に挟まれた城山北公園線の南側部分、南田町地内の東西約 230 m×南北約 18 m区間である。ここでは第 16 ブロックのうち、平成 24 年度に発掘調査を実施した松江城下町遺跡 (南田町 130-6 外) の調査成果を報告する。

調査地周辺は、調査開始以前には城山北公園線沿いの民家や店舗が建ち並んでいた場所となっていた。本調査区の南側にあたる民家や店舗の裏手では、16 ブロックを東西に横断する形で本発掘調査終了後に立会調査が行われており、本発掘調査は民家や店舗の建物解体後に実施している。

発掘調査の経過は、第 16 ブロックではこれまでに 4 箇所の本発掘調査と 24 箇所の立会調査を実施しており、本調査区の呼称は便宜的に 16-1 区～ 16-4 区としている。16-1 区・16-2 区は平成 25 年度に刊行した『市 157』「城山 4」に、16-3 区・16-4 区は平成 26 年度に刊行した『市 163』「城山 5」においてそれぞれの調査成果が報告されている。今回報告する調査区は、第 16 ブロックでは 5 箇所目の 16-5 区となり、調査区と遺跡名の関係および掲載報告書は以下の表 11 に示した。

16-5 区では、壁面に安全勾配 45°の傾斜を残しながら発掘調査を実施した。また、土層堆積状況を把握するために表土～撹乱層を除去した後、調査区北側および東側に土層観察用の壁面を残して全体の掘り下げを行った。

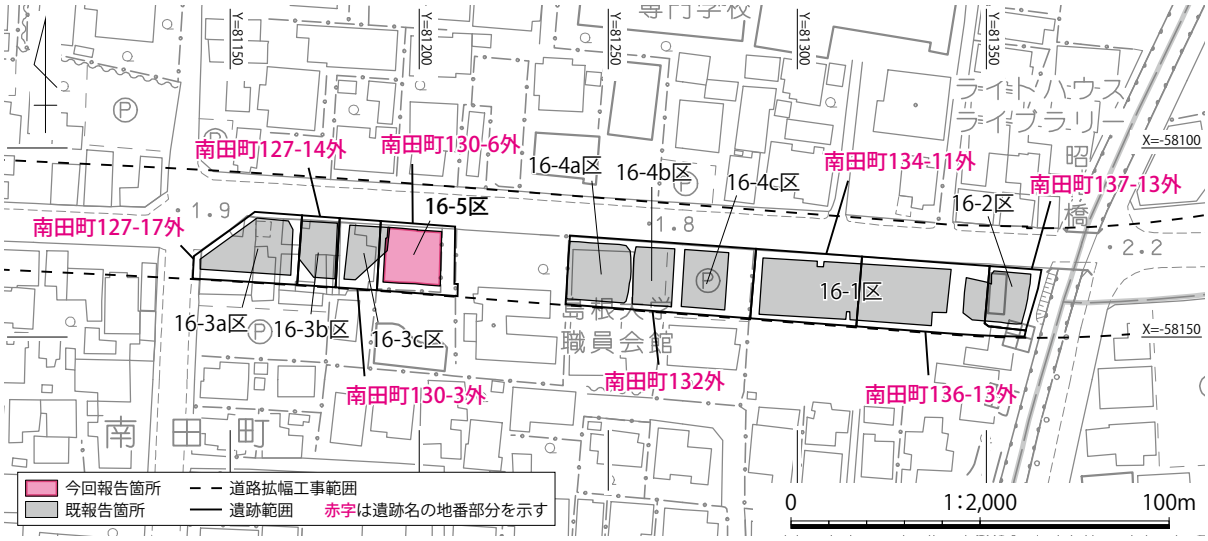
表 11　第 16 ブロック本発掘調査箇所

<table>
<tr><th>ブロック名</th><th colspan="2">調査区名</th><th>遺跡名</th><th>掲載報告書</th></tr>
<tr><td rowspan="10">第 16 ブロック</td><td colspan="2">16-1 区</td><td>松江城下町遺跡（南田町 134-11 外・136-13 外）</td><td rowspan="2">『市 157』「城山 4」</td></tr>
<tr><td colspan="2">16-2 区</td><td>松江城下町遺跡（南田町 137-13 外）</td></tr>
<tr><td rowspan="3">16-3 区</td><td>16-3a 区</td><td>松江城下町遺跡（南田町 127-17 外）</td><td rowspan="6">『市 163』「城山 5」</td></tr>
<tr><td>16-3b 区</td><td>松江城下町遺跡（南田町 127-14 外）</td></tr>
<tr><td>16-3c 区</td><td>松江城下町遺跡（南田町 130-3 外）</td></tr>
<tr><td rowspan="3">16-4 区</td><td>16-4a 区</td><td>松江城下町遺跡（南田町 132 外）1 区</td></tr>
<tr><td>16-4b 区</td><td>松江城下町遺跡（南田町 132 外）2 区</td></tr>
<tr><td>16-4c 区</td><td>松江城下町遺跡（南田町 132 外）3 区</td></tr>
<tr><td colspan="2">16-5 区</td><td>松江城下町遺跡（南田町 130-6 外）</td><td>『市 185』「城山 8」</td></tr>
</table>

第 1 項　調査区の位置 (第 94 図)

発掘調査対象地である 16-5 区は、松江城大手前から東へ約 800 mの地点に位置する。調査範囲は東西約 15.0 m×南北約 14.3 m、調査面積 214.4㎡の調査区を設定した。

第 16 ブロックを現存する堀尾期・京極期・松平期の各絵図と照合すると、堀尾期～京極期には街区の西端に 1 軒の屋敷地が描かれているが、それより東側は空白地となっている。松平期には筆頭家老である大橋茂右衛門[23]の広大な屋敷地となる。屋敷地の裏手にあたる北側 (城山北公園線側) の一画には、大橋家の直臣が住まう与力屋敷[24]が東西に 8 軒配置されていた。16-5 区は、この与力屋敷が展開する一画のうち、西端の屋敷地に比定される。



第 94 図　第 16 ブロック本調査区配置図

第２項　遺構面と層序 (第 95 図)

調査区の遺構検出と土層堆積状況の観察を行った結果、4 つの遺構面を確認した。遺構面は、上層から主に現地表面～撹乱層・造成土 (盛土)・旧地表面・自然堆積層に分け、その中から生活面と考えられる整地層や遺構の機能面を把握した。

本調査地は、現地表面以下に近現代の撹乱層が厚く堆積するが、撹乱がおよぶ場所以外は近世の土層が良好に残されている。現地表は標高 1.50 m で、最深部で現地表下約 1.70 m (標高 -0.20 m) までの土層堆積を確認した。第 95 図の土層図は、16-5 区の中央部に設定した東壁土層 (A-B 間) を掲載している。なお、基本的な層序は第 1 章第 2 節第 3 項で示した松江城下町遺跡基本土層と共通するものであり、遺構面で区分した土層の呼称についてはこれに準じて対応する土層名を付した。以下、各遺構面の土層堆積状況について、上層から下層の順に説明する。

MJ0・1 層：現地表面～撹乱層　標高 1.50 m、層厚 70㎝

MJ0 層は既存建物の基礎を含む撹乱層である。MJ1 層は褐色～黄灰色砂質土を主体とする近現代の盛土層だが下層の江戸時代の造成土まで撹乱層が入る。そのため本調査地では、MJ0 ～ 1 層までを撹乱層とした。この土層中から 19 世紀後半～近現代の陶磁器類が出土している。

MJ2 層：第 1 遺構面　標高 0.90 m、層厚 20㎝

暗黄色粘土ブロックの山土を主体とする嵩上げ造成による整地層である。この遺構面から 18 世紀前半～ 19 世紀前半の陶磁器類が出土している。

MJ3 層：第 2 遺構面　標高 0.70 m、層厚 10㎝

灰色粘質土を主体とする嵩上げ造成による整地層である。この遺構面から 17 世紀中頃～後半の陶磁器類が出土している。

MJ4 層：第 3 遺構面　標高 0.60 m、層厚 40㎝

城下町形成以前の旧地表面の上に盛土された城下町初期造成段階の整地層である。MJ4 層よりも

下位にある MJ5b 層の茶褐色有機質粘土と MJ6b 層の青灰色細砂の混合土を主体とする。この遺構面から 17 世紀初頭の陶磁器類が出土している。

MJ5b 層：第 4 遺構面　標高 0.20 m、層厚 30㎝

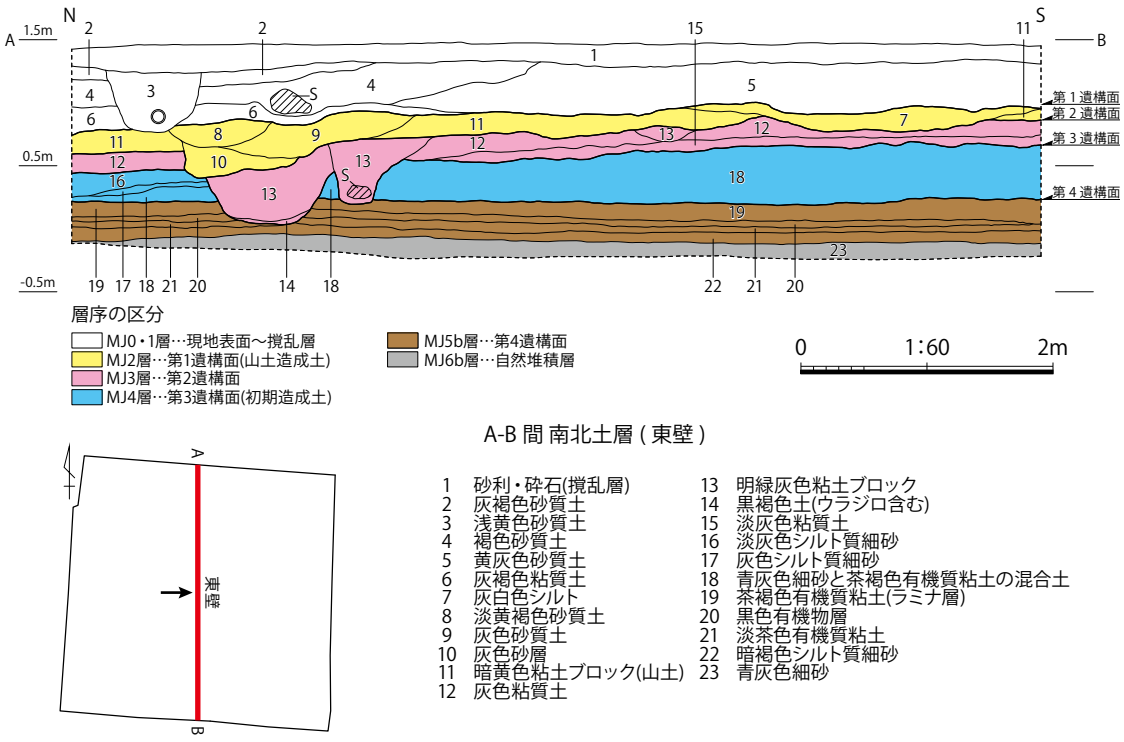
城下町形成以前の旧地表面の堆積層で、本調査地では茶褐色有機質粘土の堆積を確認した。この土層は水平堆積のラミナ層が確認でき、下位には黒色有機物層と淡茶色有機物層が堆積する。いずれも未分解の有機物層であり、水際あるいは水辺からやや離れた陸地であったことが想定される。

MJ6b 層：自然堆積層　標高 -0.10 m

青灰色細砂を主体とする堆積層で、松江市街地北部の丘陵から末次砂州の北の水域に水が流れていた時代に堆積した土層である。

上記のように、本調査地では現地表面以下に堆積する撹乱層を除去した段階で遺構を検出した任意の遺構面を第 1 遺構面としている。なお、これまでに第 16 ブロックで実施している与力屋敷の調査成果では、MJ4 層 (第 3 遺構面) の直上にあたる遺構面で堀尾期～京極期に位置付けられる畠跡の検出が報告されているが、今回の調査では検出していない。本調査地の東隣にあたる 16-6 区 (本章第 5 節) から 16-1 区までの範囲では畠跡を検出していることから、本調査地は空閑地となっていたことが想定される。

また、畠跡を検出した遺構面の直上には、松平期の与力屋敷が展開する遺構面が検出されている。この遺構面では、掘立柱建物跡や礎石建物跡の検出が報告されているが、今回の調査では明確な建物跡は検出していない。これらは、同じ与力屋敷ではあるものの、屋敷地内における土地利用状況は、個々の屋敷地によって様相が異なるということを示している可能性がある。



第 95 図　16-5 区土層図

第３項　調査の結果

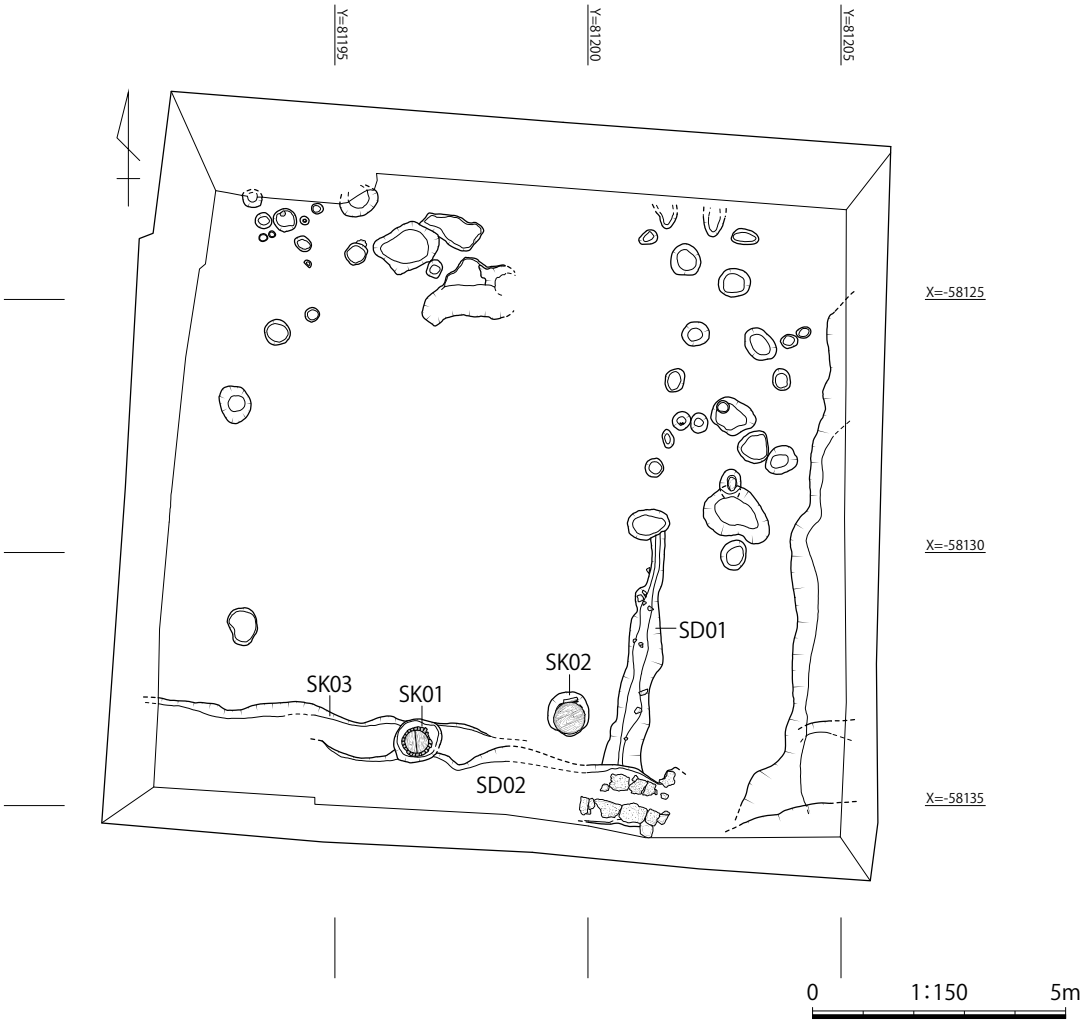
ここでは検出した遺構面の概要や遺構と遺物について、年代が新しい上層の遺構面から年代が古い下層の遺構面の順に示す。本項に掲載した遺構面の変遷と遺物の様相については、本節末に設けた小結の中にまとめて記述した。

（1）第１遺構面

ｉ）第１遺構面の概要 (第 96 図)

第 1 遺構面は、標高 0.90 m で検出した遺構面である。遺構は、溝 SD01・02、埋桶土坑 SK01・02、土坑 SK03、その他の柱穴・土坑群を検出した。遺構面は、現地表面 (標高 1.50 m) 以下に堆積する層厚 70㎝の撹乱層を除去した段階で遺構を検出した任意の遺構面である。そのため、検出した遺構には江戸時代の古い時期を示すものや近代の新しい時期を示すものがあり、様々な時期の遺物が含まれていた。これらは遺構面に伴わない遺構と判断している。

第 1 遺構面の基盤となる MJ2 層は、暗黄色粘土ブロックの山土を主体とする嵩上げ造成による整地層である (第 95 図第 7 ～ 11 層)。層厚は 20㎝を測り、山土造成土を露呈した面で遺構を検出したことから、これを第 1 遺構面とした。遺構面の時期は、出土遺物の年代から 18 世紀前半～ 19 世紀前半を想定している。



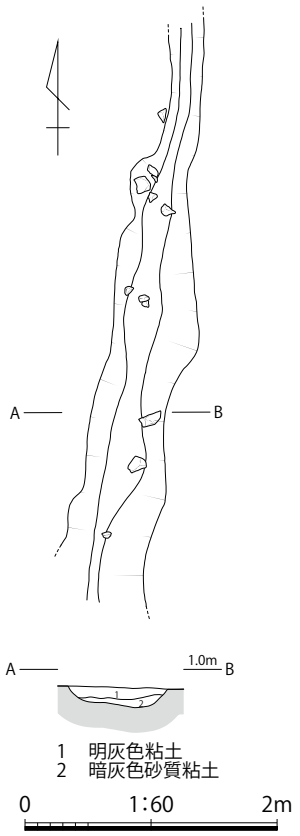
第 96 図　第 1 遺構面平面図

ii）第 1 遺構面の遺構と遺物

溝 SD01(第 97 図)

調査区の南東側で検出した南北溝で、規模は長さ 4.80 m、幅 0.60 m、深さ 0.15 mを測る。溝の上端は標高 0.85 m、主軸方位は N － 4°－ E である。溝底部は標高 0.60 ～ 0.70 mで、排水方向は北から南へ向かう。SD01 は素掘り溝の状態で確認したが、溝中に長軸 10 ～ 20㎝を測る石が点在することから、石組を伴う溝であった可能性も考えられる。

溝埋土は上層から明灰色粘土 (第 1 層)、暗灰色砂質粘土 (第 2 層) が堆積する。SD01 の性格は、屋敷地内における排水用の溝と考えられるが、SD01 付近には厳密に建物跡と確定できる遺構は検出しておらず、建物に付属する雨落ち溝なのか、あるいは単独で機能していた溝なのかは定かではない。また、SD01 と後述する SD02 の 2 つの溝は切り合っており、先後関係は SD01(古)・SD02(新) と考えられる。これらは同一遺構面で検出しているが、屋敷地内における溝の改変と理解している。SD01 から遺物は出土していない。



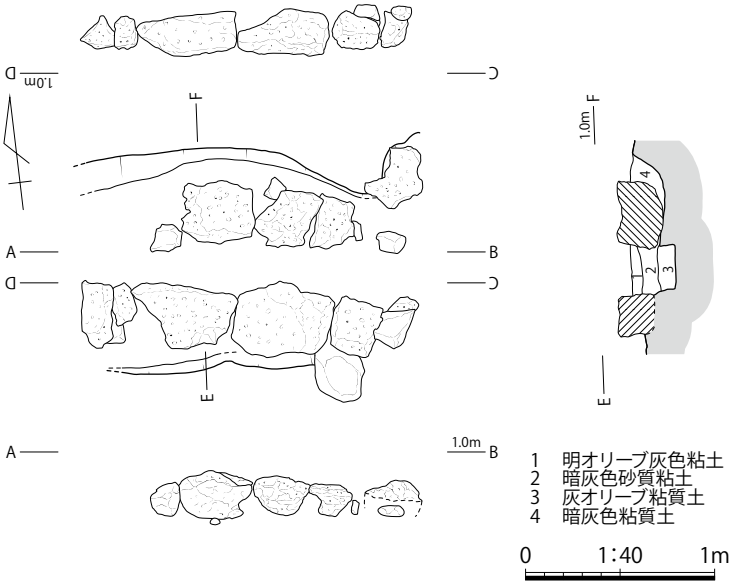
第 97 図　SD01 平面図・断面図

溝 SD02(第 98 図)

調査区の南側で検出した石組を伴う東西溝で、規模は長さ 7.50 m、幅 1.20 m、深さ 0.25 mを測る。溝の西側は消失しているが、東側の一部では石組を検出している。石組の天端は標高 0.90 m、主軸方位は E － 4°－ S である。溝底部は標高 0.58 ～ 0.65 mで、排水方向は西から東へ向かう。

溝埋土は上層から明オリーブ灰色粘土 (第 1 層)、暗灰色砂質粘土 (第 2 層)、灰オリーブ粘質土 (第 3 層) が堆積する。石組は 1 段で溝の両端に据え置かれ、溝の内側に対して面をもつ。中央部～西側の石組は、上層の撹乱により消失している。石材にはいずれも長軸 30 ～ 50㎝を測る島石が使用されている。

SD02 の性格は、屋敷地内における排水用の溝と考えられるが、SD02 付近には厳密に建物跡と確定できる遺構は検出しておらず、建物に付属する溝なのか、あるいは単独で機能していた溝なのかは定かではない。SD02 から遺物は出土していない。



第 98 図　SD02 平面図・断面図 (部分)

埋桶土坑 SK01・02(第 99 図)

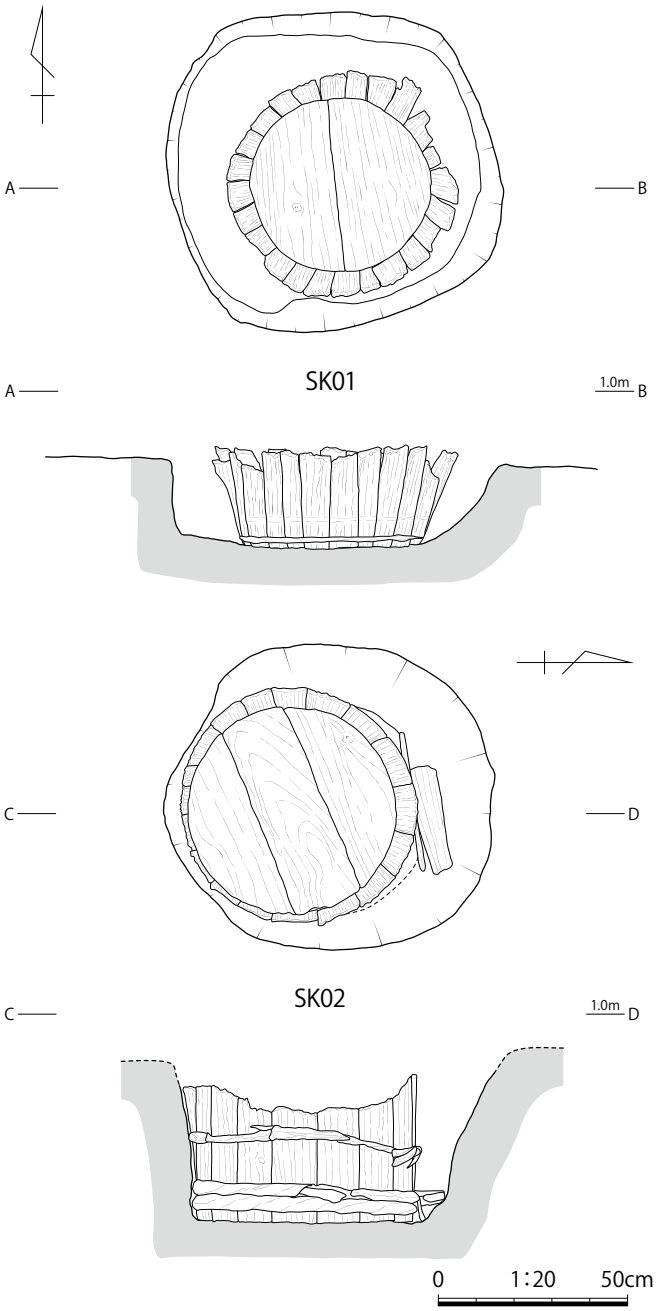
調査区の南側で検出した埋桶土坑で、土坑の上端は標高 0.70 ～ 0.90 mである。

SK01 の掘り方は円形で、規模は直径 0.85 m、深さ 0.20 mを測る。埋桶は、直径 65 ㎝、深さ 25㎝を測る木桶である。外面に竹製のタガを上下に 2 段巻いて固定している。桶埋土は灰色粘質土の単層で、埋土中から陶器が 1 点出土している。

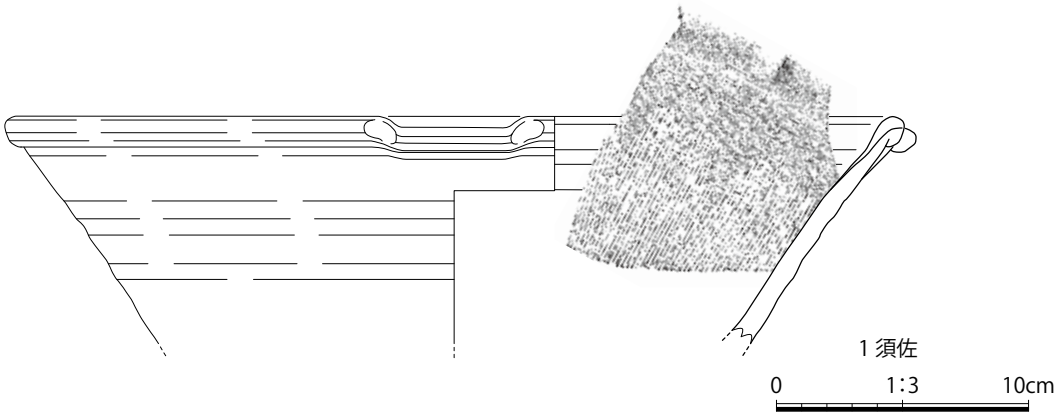
SK02 は、SK01 から東側に 3.00 m離れた場所で検出した。SK02 の掘り方は円形で、規模は直径 0.85 m、深さ 0.44 mを測る。埋桶は、直径 63㎝、深さ 40㎝を測る木桶である。外面に竹製のタガを上に 1 段、下に 2 段巻いて固定している。埋土中から遺物は出土していない。この 2 つの埋桶は近接した位置で検出していることから、遺構の性格は便槽遺構の可能性が考えられる。

SK01 出土遺物 (第 100 図)

ここでは SK01 の埋土から出土した遺物を掲載する。100-1 は須佐 (山口) の擂鉢である。高台は欠損しているが、胴部から口縁部にかけて逆ハの字状に開き、口縁端部をやや尖り気味に丸くおさめる。18 世紀中頃～後半のもので、佐伯氏分類Ⅰ群 E 類に該当する。



第 99 図　SK01・02 平面図・断面図

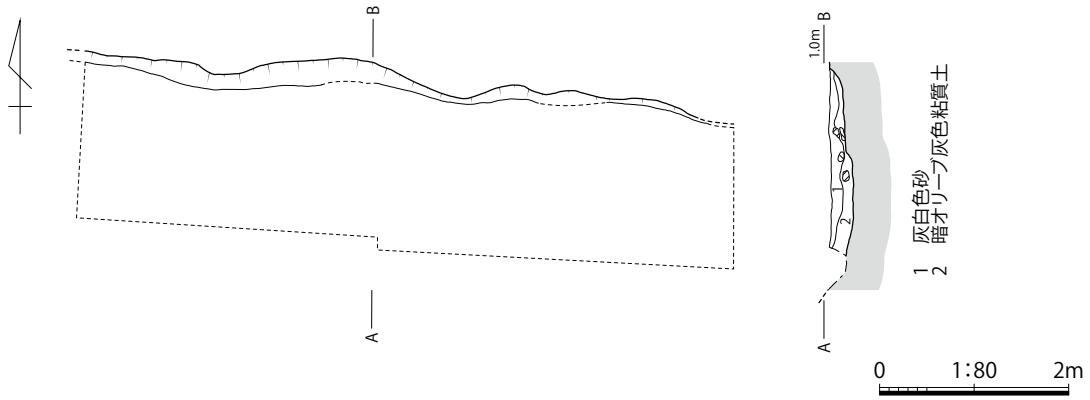


第 100 図　SK01 出土遺物

土坑 SK03(第 101 図)

調査区の南側で検出した廃棄土坑である。検出面は標高 0.95 mで、平面形は長楕円形と考えられるが、東西の両端は調査区外まで延びる。規模は上縁長軸が 7.00 m、短軸が 2.00 m、深さ 0.28 m を測る。

土坑埋土は 2 層に分層でき、上層から灰白色砂 (第 1 層)、暗オリーブ灰色粘質土 (第 2 層) が堆積する。下位の暗オリーブ灰色粘質土には、直径 10 ～ 20㎝程度の円礫が入り、この土層から陶磁器や土師器皿などが出土している。

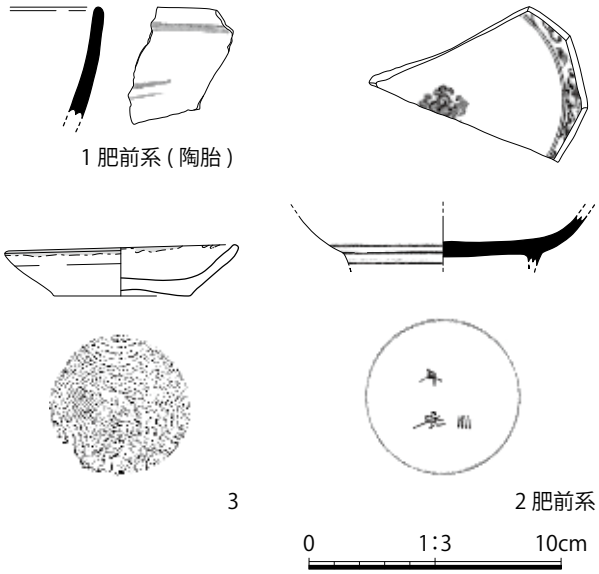


第 101 図　SK03 平面図・断面図

SK03 出土遺物 (第 102 図)

ここでは SK03 の埋土から出土した遺物を掲載する。102-1・2 は国産磁器である。102-1 は肥前系磁器の陶胎染付碗である。九陶Ⅳ期 (1690 ～ 1780 年代)。102-2 は肥前系磁器の皿である。ハリ支えの皿で体部内面に唐草文を描き、見込みに五弁花の印判を施す。高台内に「□□年製」の銘をもつ。九陶Ⅳ期 (1700 ～ 1740 年代)。

102-3 はロクロ成形の在地系土師器皿で、底部に糸切り痕をもつ灯明皿である。掲載した遺物以外にも 18 世紀前半の陶磁器が出土しているが、いずれも小片で図示できるものではなかった。



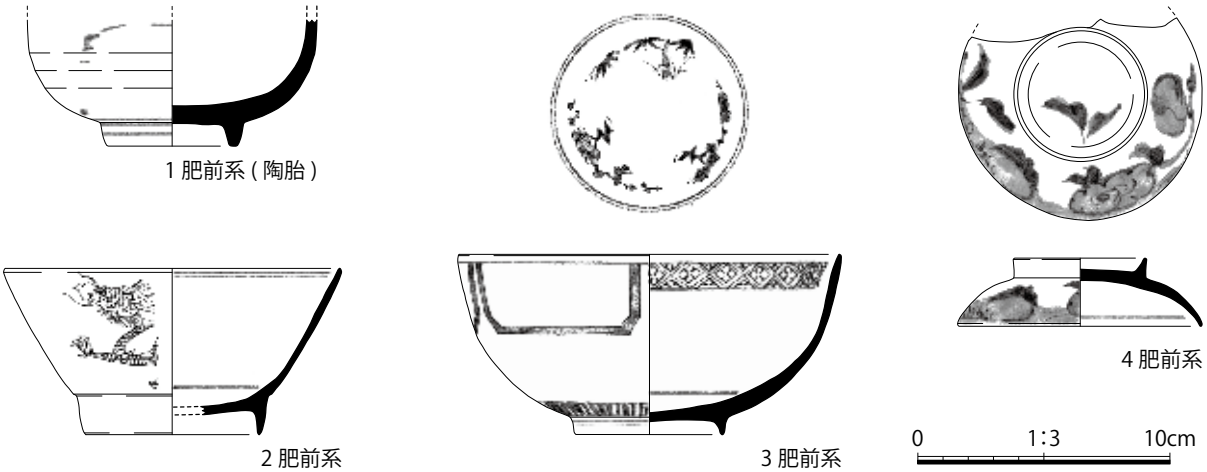
第 102 図　SK03 出土遺物

第 1 遺構面遺構外出土遺物 (第 103 図)

ここで掲載する遺物は、第 1 遺構面直上から出土したものを遺構外出土遺物として取り扱う。

103-1 ～ 4 は国産磁器である。103-1 は肥前系磁器の陶胎染付碗である。九陶Ⅳ期 (1690 ～ 1780 年代)。103-2 は肥前系磁器の広東碗である。胴部外面に龍文を描く。九陶Ⅴ期 (1780 ～ 1810 年代)。103-3 は肥前系磁器の半球碗である。胴部外面底部に連弁文、口縁部内面に四方襷文、見込みに二重圏線と環状の松竹梅文を描く。九陶Ⅴ期 (1780 ～ 1860 年代)。103-4 は肥前系磁器の蓋である。外

面に草花文を描く。九陶Ⅴ期 (1780 ～ 1860 年代)。

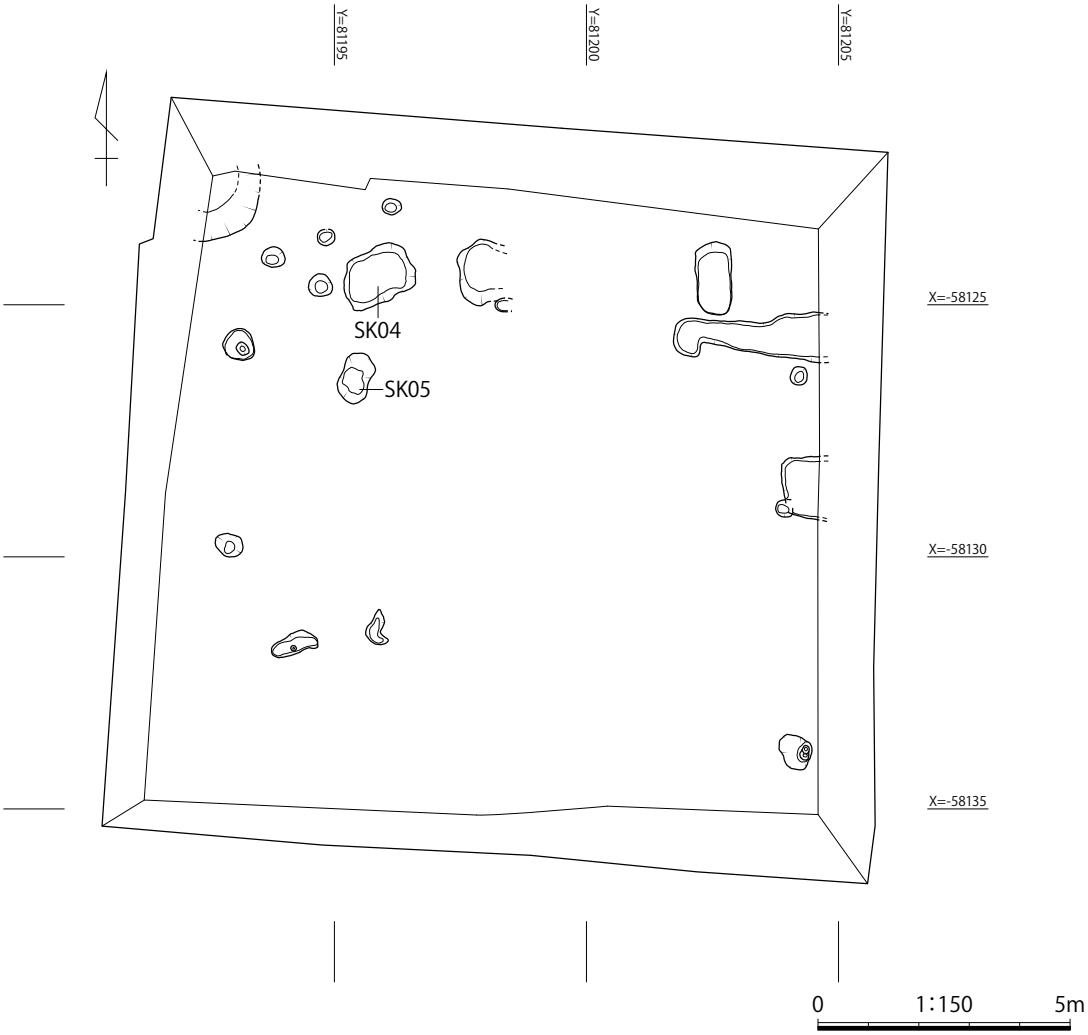


第 103 図　第 1 遺構面遺構外出土遺物

(2) 第 2 遺構面

i) 第 2 遺構面の概要 (第 104 図)

第 2 遺構面は、標高 0.70 m で検出した遺構面である。遺構は、土坑 SK04・05、その他の柱穴・土坑群を検出した。検出した柱穴には規則性がなく、この遺構面よりも上層から掘り込まれた柱穴の



第 104 図　第 2 遺構面平面図

底部を検出したものが含まれている可能性がある。

第 2 遺構面の基盤となる MJ3 層は、灰色粘質土を主体とする嵩上げ造成による整地層である (第 95 図第 12 ～ 15 層)。層厚は 10㎝を測り、最上位の整地層を露呈した面で遺構を検出したことから、これを第 2 遺構面とした。遺構面の時期は、出土遺物の年代から 17 世紀中頃～後半を想定している。

ii ）第 2 遺構面の遺構と遺物

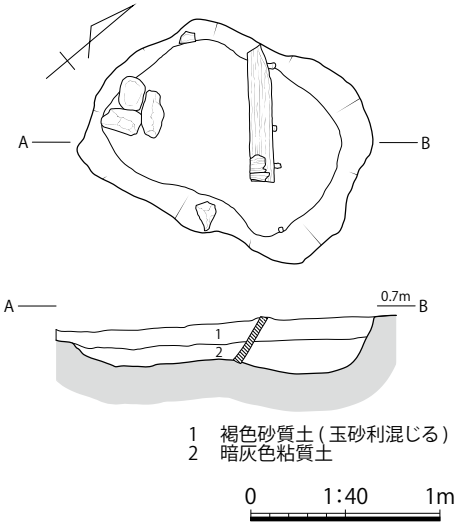
土坑 SK04(第 105 図)

調査区の北西側で検出した廃棄土坑である。検出面は標高 0.65 m で、平面形は歪んだ楕円形を呈する。規模は上縁長軸が 1.40 m、短軸が 1.10 m、深さ 0.30 m を測る。

土坑周縁部の内側には直径 30㎝を測る礫を 4 個検出しているが、これらは土坑の埋め戻し際に廃棄されたものと捉えている。

土坑の中央部には、長さ 70㎝、幅 30㎝、厚さ 3㎝の木板が木杭とともに検出されていることから、この土坑は木枠を伴う土坑の可能性が考えられる。

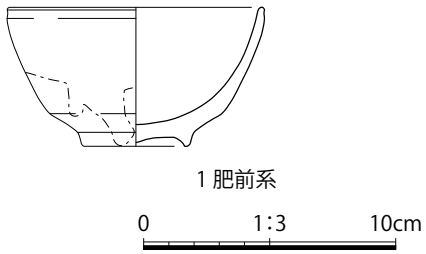
土坑埋土は 2 層に分層でき、下位の暗灰色粘質土 (第 2 層) から陶磁器が出土している。



第 105 図　SK04 平面図・断面図

SK04 出土遺物 (第 106 図)

ここでは SK04 の埋土から出土した遺物を掲載する。106-1 は国産陶器で、肥前系陶器の碗である。内外面に緑灰釉を施し、高台は露胎。九陶Ⅱ期 (1610 ～ 1650 年代)。



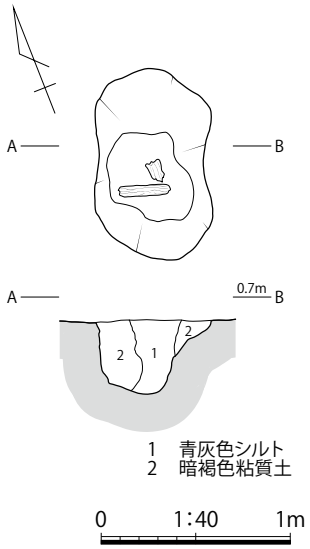
第 106 図　SK04 出土遺物

土坑 SK05(第 107 図)

調査区の北西側で検出した土坑である。検出面は標高 0.60 m で、平面形は歪んだ楕円形を呈する。規模は上縁長軸が 1.00 m、短軸が 0.55 m、深さ 0.38 m を測る。

土坑の中央部には、直径 5㎝、長さ 30㎝の木杭が検出されていることから、この土坑は柱穴の可能性も考えられる。

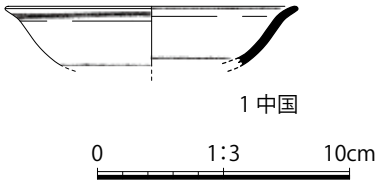
土坑埋土は 2 層に分層でき、暗灰色粘質土 (第 2 層) から陶磁器が出土している。



第 107 図　SK05 平面図・断面図

SK05 出土遺物 (第 108 図)

ここでは SK05 の埋土から出土した遺物を掲載する。108-1 は中国磁器で、漳州窯系の青花皿である。端反の小皿で、体部外面上下と内面上下に圏線を描く。内外面ともに施釉する。17 世紀初頭のもので、森氏分類青花皿 K2 に該当する。



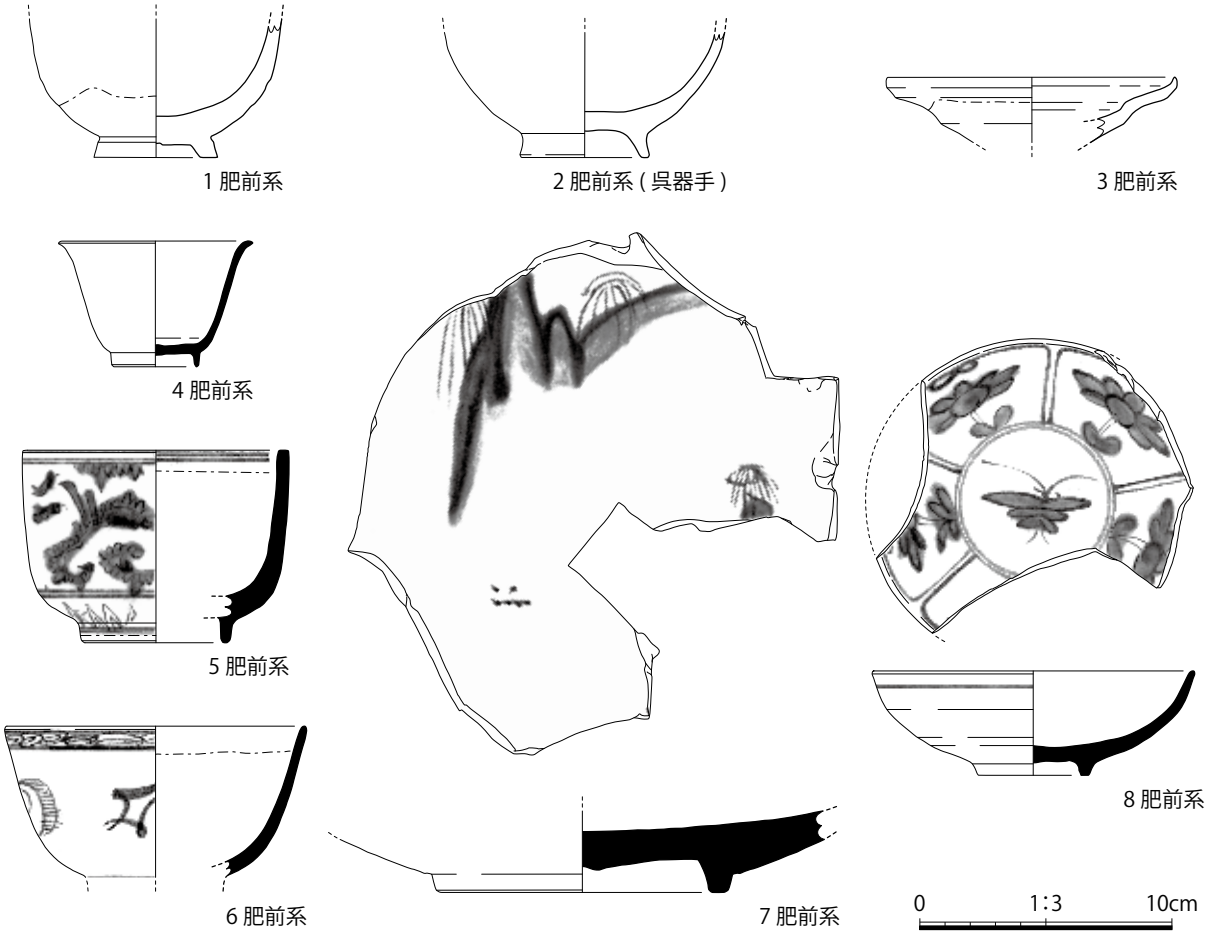
第 108 図　SK05 出土遺物

第 2 遺構面遺構外出土遺物 (第 109 図)

ここで掲載する遺物は、第 2 遺構面直上から出土したものを遺構外出土遺物として取り扱う。

109-1 ～ 3 は国産陶器である。109-1 は肥前系陶器の碗である。内外面に灰釉を施し、高台は露胎。九陶Ⅱ期 (1610 ～ 1650 年代)。109-2 は肥前系陶器の呉器手碗である。撥形に開く高台から上方に向けて緩やかに胴部が延び、畳付は無釉。九陶Ⅲ期 (1650 ～ 1690 年代)。109-3 は肥前系陶器の皿である。体部中央に段をもち、内外面に灰釉を施す。口縁端部をやや直立させる。九陶Ⅱ期 (1610 ～ 1650 年代)。

109-4 ～ 8 は国産磁器である。109-4 は肥前系磁器の小坏である。白磁の小坏で、端反の口縁部をもつ。畳付は無釉。九陶Ⅲ期 (1650 ～ 1680 年代)。109-5 は肥前系磁器の筒形碗である。口縁端部を平坦におさめ、口銹を施す。胴部外面に花文と高台脇に鋸歯状連弁文を描く。九陶Ⅱ -2 期



第 109 図　第 2 遺構面遺構外出土遺物

(1630 ～ 1650 年代)。109-6 は肥前系磁器の碗である。口縁部外面に渦文を描く。九陶Ⅲ期 (1650 ～ 1690 年代)。109-7 は肥前系磁器の大皿である。内面に風景文を描く。畳付は無釉で、高台内に砂粒が付着する。九陶Ⅱ -2 期 (1630 ～ 1650 年代)。109-8 は肥前系磁器の皿である。芙蓉手の皿で、見込みに蝶文を描く。九陶Ⅲ期 (1650 ～ 1690 年代)。

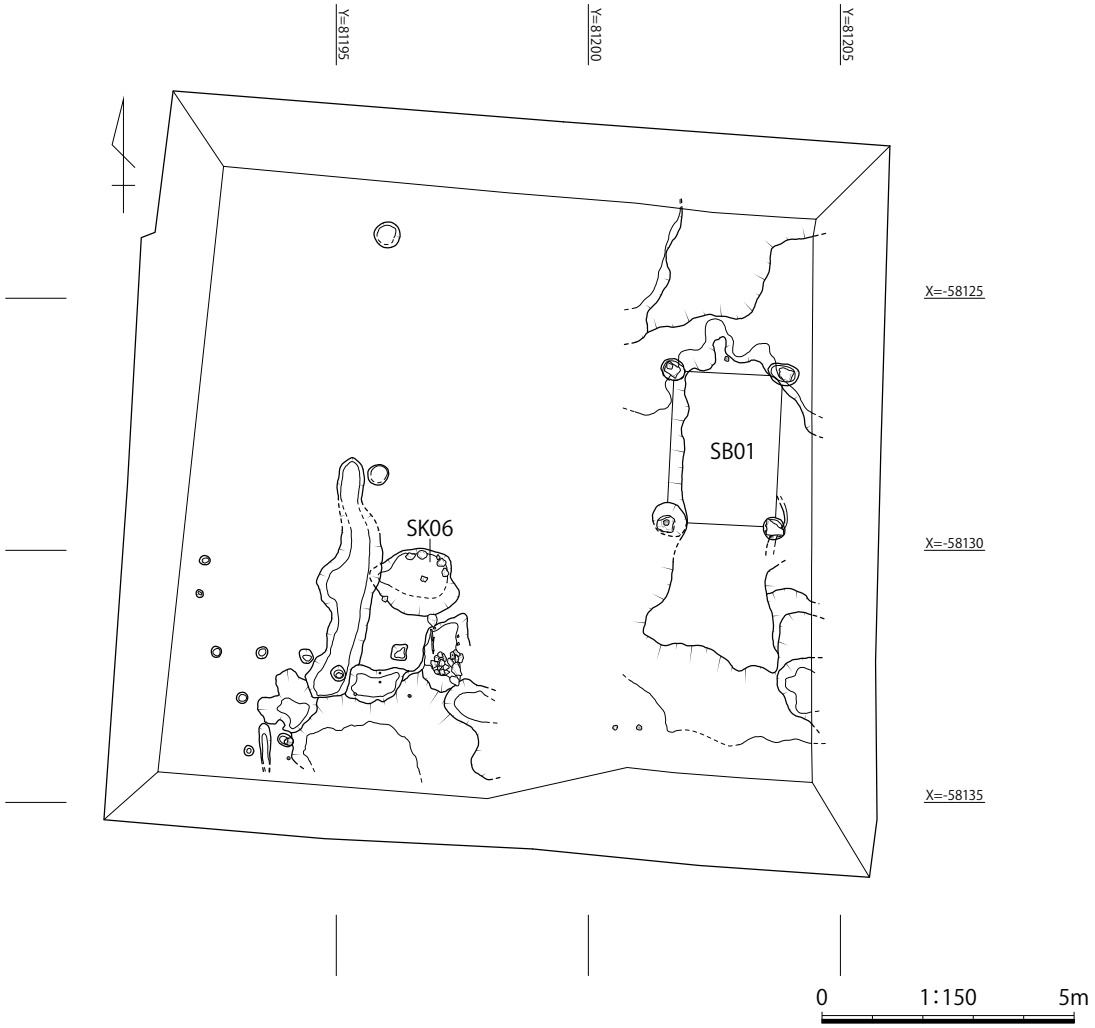
(3) 第 3 遺構面

i) 第 3 遺構面の概要 (第 110 図)

第 3 遺構面は、標高 0.60 m で検出した遺構面である。遺構は、掘立柱建物跡 SB01、土坑 SK06 を検出した。SB01 は、調査時の段階では後述する第 4 遺構面の精査中に見つかった遺構だが、改めて検討した結果、第 3 遺構面に伴う遺構であることが判明したため、ここに含めている。

第 3 遺構面の基盤となる MJ4 層は、青灰色細砂と茶褐色有機質粘土の混合土を主体とする城下町初期造成段階の整地層である (第 95 図第 16 ～ 18 層)。層厚は 40㎝を測り、整地層を露呈した面で遺構を検出したことから、これを第 3 遺構面とした。

第 3 遺構面は、城下町造成以前の旧地表面 (MJ5b 層) に盛土を施して造成された城下町形成時あるいは城下町形成直後の最初の遺構面と考えられる。遺構面の時期は、出土遺物の年代から 17 世紀初頭～前半を想定している。



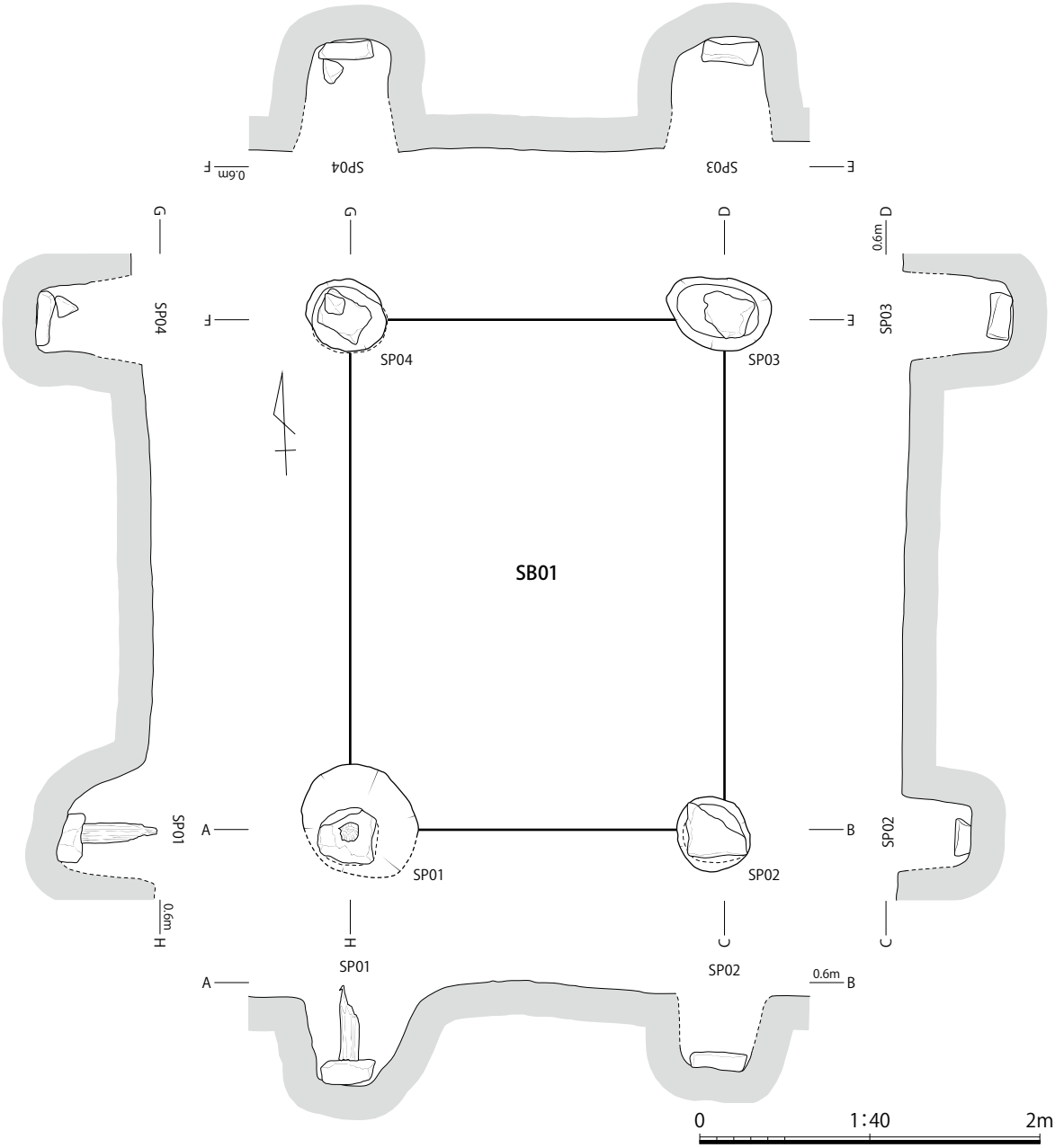
第 110 図　第 3 遺構面平面図

ii）第３遺構面の遺構と遺物

掘立柱建物跡 SB01（第 111 図）

調査区の東側で検出した掘立柱建物跡である。検出面は標高 0.50 ～ 0.55 mで、建物の主軸方位はＮ－ 4°－Ｅである。規模は東西 1 間×南北 1 間半の構造で、東西 2.00 m、南北 3.00 mを測る。柱間寸法は現地測量での 1 間＝ 2.00 m (6 尺 6 寸) を基準としている。

建物を構成する柱穴は 4 穴 (SP01 ～ 04) 検出した。いずれも直径 40 ～ 60㎝の円形を呈し、深さ 40 ～ 60㎝を測る。柱穴の底部には、長軸 30㎝、厚さ 10㎝を測る大海崎石の礎盤石を伴う。この礎盤石は、平坦面が上面 (柱材との接地面) となるように置かれ、SP01 には礎盤石の上に直径 10㎝、長さ 42㎝の柱材が残っていた。SB01 の性格は、建物としては小規模で屋敷地の住居とは考え難いことから、城下町初期造成に伴う簡易的な建物を想定している。

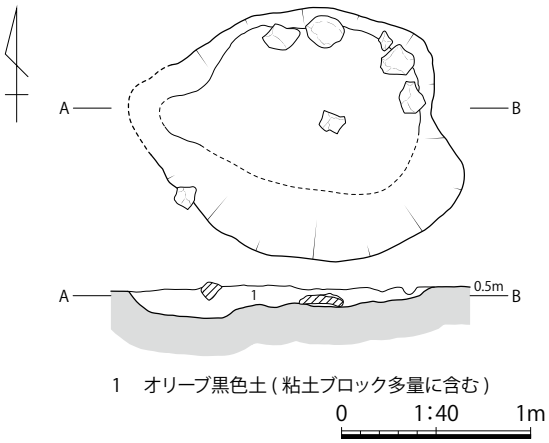


第 111 図　SB01 平面図・断面図

土坑 SK06(第 112 図)

調査区の中央部で検出した廃棄土坑である。検出面は標高 0.55 mで、平面形は歪んだ円形を呈する。規模は上縁長軸が 1.60 m、短軸が 1.30 m、深さ 0.16 mを測る。土坑周縁部の内側には直径 20㎝を測る円礫を 6 個検出しているが、これらは土坑の埋め戻し際に廃棄されたものと捉えている。

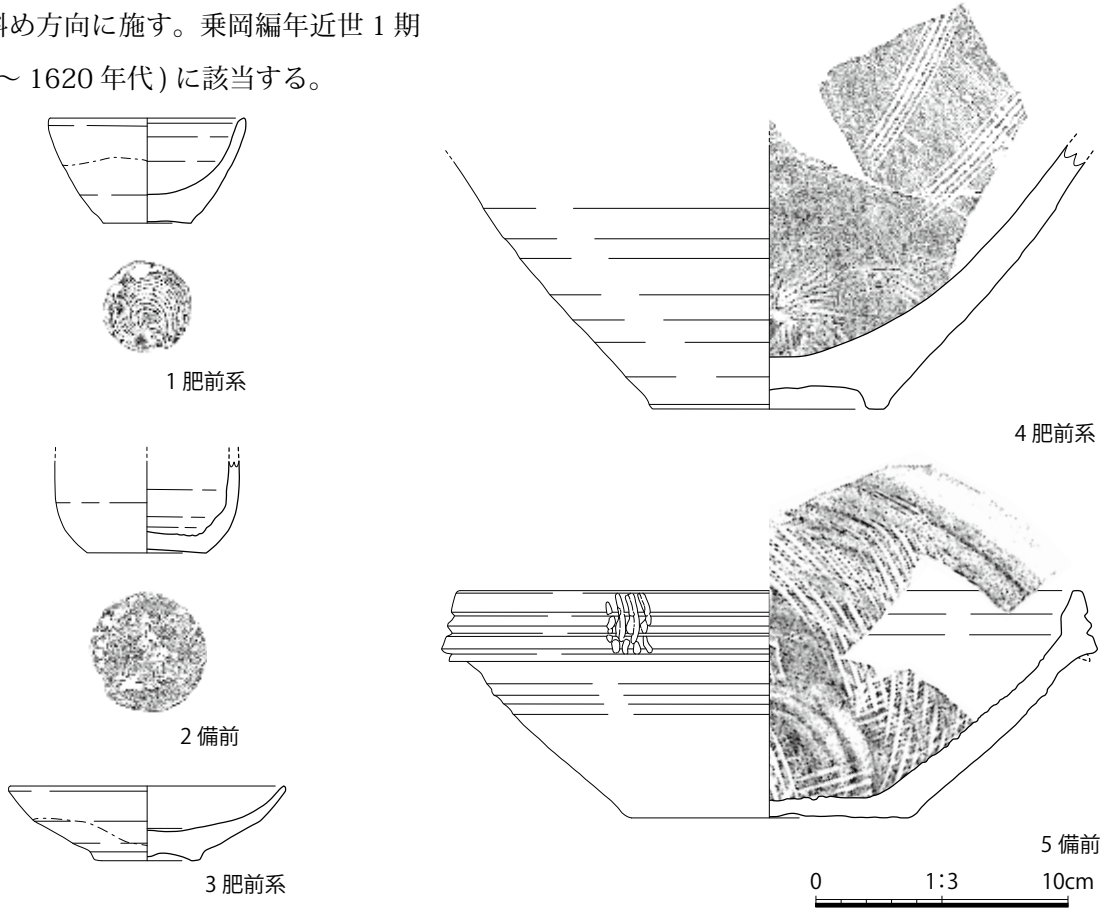
土坑埋土はオリーブ黒色土の単層で、埋土中から陶器が出土している。



第 112 図　SK06 平面図・断面図

SK06 出土遺物 (第 113 図)

ここでは SK06 の埋土から出土した遺物を掲載する。113-1 ～ 5 は国産陶器である。113-1 は肥前系陶器の小坏である。内外面に灰釉を施し、胴部下方～高台は露胎。底部に糸切り痕をもつ。九陶Ⅰ -2 期 (1594 ～ 1610 年代)。113-2 は備前の徳利である。底部のみ残存し、外面は淡赤褐色を呈する。底部に窯印の印刻をもつ。17 世紀初頭のものか。113-3 は肥前系陶器の皿である。胎土目皿で内外面に緑灰釉を施し、高台は露胎。九陶Ⅰ -2 期 (1594 ～ 1610 年代)。113-4 は肥前系の擂鉢である。スリ目は 1 単位 5 本で、1 単位ごとの間隔が広い。碁笥底状の底部をもつ胎土目段階の擂鉢と考えられる。九陶Ⅰ期 (1600 ～ 1610 年代)。113-5 は備前の擂鉢である。スリ目は放射状直線に加えて、斜め方向に施す。乗岡編年近世 1 期 a(1600 ～ 1620 年代) に該当する。



第 113 図　SK06 出土遺物

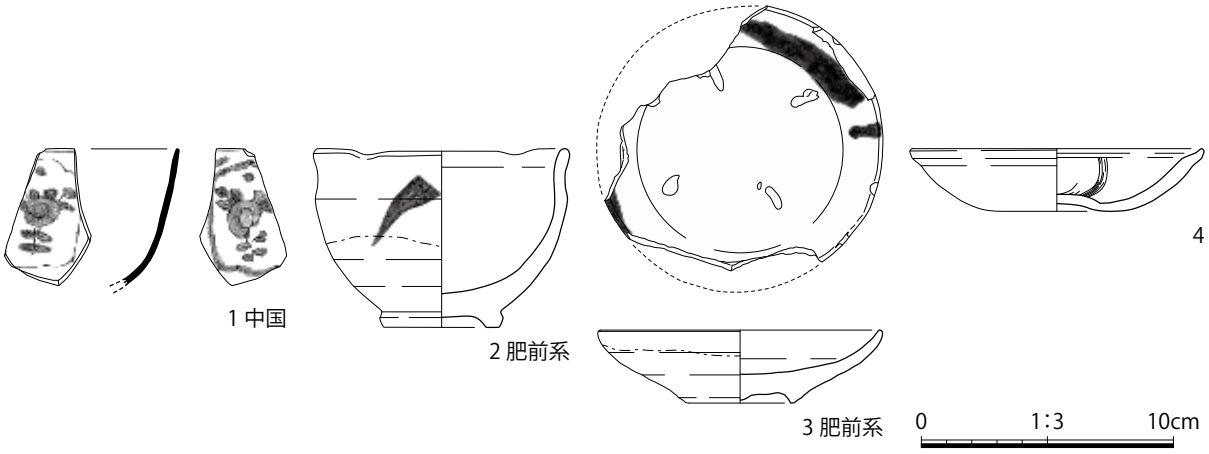
第 3 遺構面遺構外出土遺物 (第 114 図)

ここで掲載する遺物は、第 3 遺構面直上から出土したものを遺構外出土遺物として取り扱う。

114-1 は中国磁器で、景徳鎮系の青花碗である。芙蓉手の碗で、胴部外面の区画内に草花文描く。16 世紀末～ 17 世紀初頭のもので、森氏分類青花碗 G 群粗製に該当する。

114-2 ～ 3 は国産陶器である。114-2 は肥前系陶器の碗である。胴部外面に鉄絵を施し、器形は天目碗の名残りをもつ。内外面に灰釉を施し、高台は露胎。九陶Ⅰ -2 期 (1594 ～ 1610 年代)。114-3 は肥前系陶器の皿である。内面口縁部周辺に鉄絵を描き、見込みに 4 箇所の胎土目痕が残る。内外面に透明釉を施し、体部下方～高台は露胎。九陶Ⅰ -2 期 (1594 ～ 1610 年代)。

114-4 は手づくね成形の京都系土師器皿である。内面に「の」字状のナデ上げ調整が見られる。



第 114 図　第 3 遺構面遺構外出土遺物

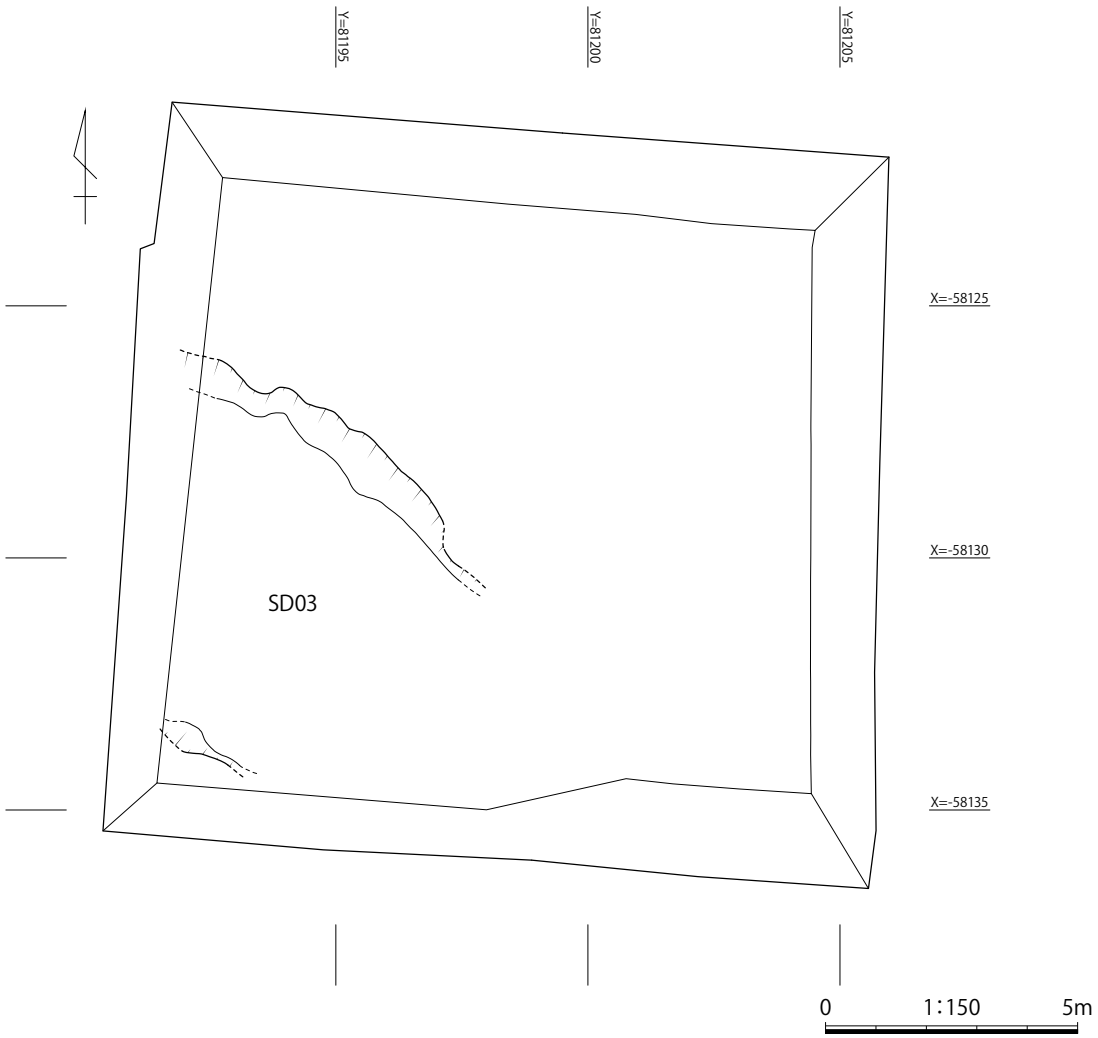
(4) 第 4 遺構面

第 4 遺構面の概要 (第 115 図)

第 4 遺構面は、標高 0.20 m で検出した城下町形成以前の旧地表面である。本遺跡の旧地表面は西から東に向かって緩やかに傾斜している。遺構は、調査区の西側で溝状遺構 SD03 を検出した。SD03 は北西から南東方向に向かって延びる溝状の落ち込みで、規模は長さ 7.50 m以上、幅 7.30 m、深さ 0.15 mを測る。この溝状の落ち込みは自然流路の可能性があるが、深さが浅いことから旧地表面の凹凸を検出している可能性も考えられる。また、第 4 遺構面以後に施される城下町初期造成土の盛土による荷重痕の可能性もあり、限定的ではない。

第 4 遺構面の基盤となる MJ5b 層は、下位の MJ6b 層上面に層厚 30㎝のほぼ均一の厚さで堆積している。MJ5b 層は、上層から茶褐色有機質粘土 (ラミナ層)・黒色有機物層・淡茶色有機物層が堆積し、いずれも未分解の有機物層である (第 95 図第 19 ～ 22 層)。この土壌の科学分析を行ったところ、畠の耕作土として使用された痕跡はなく、自然に堆積した土壌であるという分析結果が得られた。これまでの調査成果から、第 16 ブロックにおける旧地表面の形成土は、土壌が未分解でラミナ状に堆積する MJ5b 層がほぼ全域で確認されている。

遺構面の時期は、旧地表面の形成土が堆積した時期の上限は不明だが、下限は第 3 遺構面の城下町初期造成土が盛られる前段階までを想定している。



第 115 図　第 4 遺構面平面図

第 4 項　第 16 ブロックの立会調査

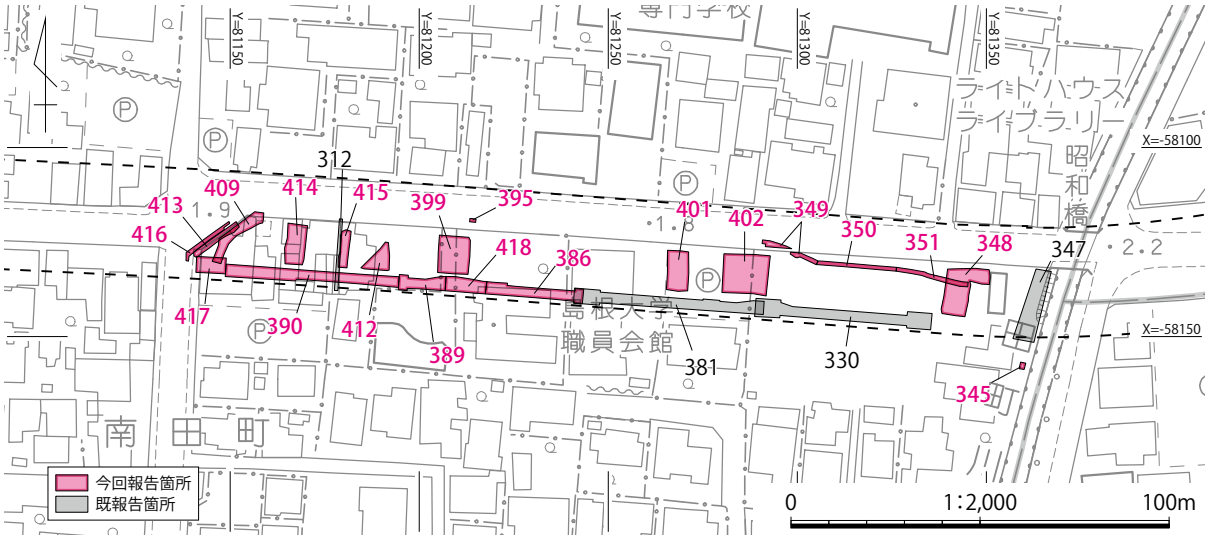
第 16 ブロックの立会調査対象となる主な調査原因には、電線共同溝埋設工事・NTT 管路掘削工事・下水道移設工事・土壌入れ替え工事がある。

第 16 ブロックで平成 18 ～ 29 年度までに立会調査を実施した地点は 24 箇所である。そのうち平成 24 ～ 26 年度に立会調査を実施した 4 箇所 (MJR312・330・347・381) については『市 157』「城山 4」と『市 163』「城山 5」で報告済みであり、ここでは報告書刊行後に未報告となっていた平成 25 ～ 26 年度に立会調査を実施した 9 箇所を取り扱う (第 116 図)。表 12 には、第 16 ブロックにおいて平成 25 ～ 26 年度に立会調査を実施した調査成果を一覧表にして示した。ここでは一覧表に示した 20 箇所のうち、城下町形成以後の主要な遺構と考えられる MJR402 で検出した畠跡について触れておきたい。

MJR402 は、本調査を実施した 16-4c 区と 16-1 区の間に位置し、本調査時には近隣住民の進入路となっていた。未調査地として残っていたため、工事の進捗に併せて立会調査で対応した場所である。

検出した畠跡は、標高 0.20 ～ 0.30 m で南北方向に延びる畠の畝を 4 条検出した。畝 1 条の規模は、

平均して長さ 8.00 m、幅 1.30 mを測り、平坦地に形成される。畝立てされた作土部分は、畝下から畝頂部まで高さ 20 ～ 25㎝を測る。この畠跡は、16-4c 区と 16-1 区で検出した畠跡 SN01 と連続する遺構であることが判明し、堀尾期～京極期絵図では空白地となっていた場所が畠地となっていたことを示す成果が得られた。また、壁面での確認に留まったが、畠面直上の遺構面では松平期の与力屋敷の掘立柱建物跡と考えられる柱穴を検出している。



※図中の番号は調査区 (MJR) を示す

第 116 図　第 16 ブロック立会調査地点位置図

表 12　第 16 ブロック立会調査箇所一覧 (平成 25 ～ 26 年度)

番号	調査区	地番	調査日	調査面積	掘削深度	検出遺構	出土遺物
1	MJR345	南田町 137-13 外	13.05.28	1.5㎡	1.84m	遺構なし	遺物なし
2	MJR348	南田町 137-13 外	13.11.15 ～ 11.16	99.3㎡	1.18m	遺構なし	陶磁器
3	MJR349	南田町 134-11 外	13.12.10 ～ 12.12	16.2㎡	2.20m	遺構なし	遺物なし
4	MJR350	南田町 134-11 外	13.12.13 ～ 12.16	20.0㎡	1.92m	遺構なし	遺物なし
5	MJR351	南田町 136-13 外	14.01.16 ～ 01.17	21.0㎡	1.90m	礎石	陶磁器・瓦
6	MJR386	南田町 134-1 外	14.08.06	141.7㎡	1.50m	遺構なし	遺物なし
7	MJR389	南田町 136-6 外	14.09.01	153.7㎡	1.50m	遺構なし	遺物なし
8	MJR390	南田町 130-3 外	14.10.27 ～ 10.29	130.9㎡	1.50m	遺構なし	遺物なし
9	MJR395	大手前線道路内	14.12.07	1.44㎡	1.16m	遺構なし	遺物なし
10	MJR399	南田町 130-6 外	15.01.28	81.7㎡	1.00m	遺構なし	遺物なし
11	MJR401	南田町 132 外	15.02.03 ～ 02.04	59.3㎡	1.00m	礎石・柱穴	陶磁器・銭貨
12	MJR402	南田町 132 外	15.02.04 ～ 02.05	124.6㎡	0.90m	畠跡・柱穴	陶磁器
13	MJR409	南田町 127-17 外	15.02.19 ～ 02.21	39.7㎡	1.70m	遺構なし	遺物なし
14	MJR412	南田町 130-6 外	15.03.02	31.5㎡	1.20m	土坑	遺物なし
15	MJR413	南田町 127-17 外	15.03.03	22.5㎡	1.30m	遺構なし	遺物なし
16	MJR414	南田町 127-17 外	15.03.03	54.4㎡	1.30m	遺構なし	遺物なし
17	MJR415	南田町 130-3 外	15.03.04	24.1㎡	0.90m	柱穴・杭列	遺物なし
18	MJR416	南田町 127-17 外	15.03.10	14.7㎡	0.30m	遺構なし	遺物なし
19	MJR417	南田町 127-17 外	14.09.04	32.8㎡	1.50m	大溝 (南北方向)	遺物なし
20	MJR418	南田町 134-1 外	14.09.05	30.0㎡	1.50m	遺構なし	遺物なし

※ 1 ～ 5 は平成 25 年度、6 ～ 20 は平成 26 年度の立会調査

第 5 項　小結

前項までに発掘調査成果の概要を示し、16-5 区で検出した遺構・遺物について検討を加えた。本項ではまず、調査地が松江城下町絵図のどこに位置するのかを提示し、調査地周辺の様子を概観する。そして、調査地の遺構面の時期区分と変遷を整理し、併せて調査成果についてのまとめを行うことにしたい。

(1) 松江城下町絵図に見る調査地とその周辺

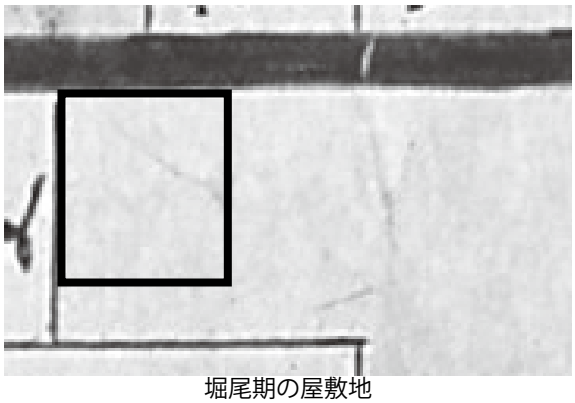
現存する江戸時代の松江城下町絵図から、17 世紀前半～ 19 世紀後半 (堀尾期・京極期・松平期) の松江城下町における屋敷地の変遷を知ることができる。ここでは屋敷地の変遷を知る上で資料とした絵図の詳細・屋敷地名義を各絵図の説明の中で記載する。なお、各絵図左側には調査地周辺部分に第 16 ブロックを示す黒枠で加筆したものを、右側にはその部分を拡大し、16-5 区推定箇所を示す黒枠を加筆して掲載した。

第 16 ブロック (南田町) は、江戸時代を通して中級～下級家臣の屋敷地や大橋家の与力屋敷が配置されていた街区となっていた。調査地である 16-5 区は、堀尾期～京極期絵図では道路に囲まれた区画の中の空白地となっているが、松平期中期絵図では大橋茂右衛門の広大な屋敷地となり、その北側の一画には大橋家の直臣が住まう与力屋敷が東西に 8 軒配置される。この与力屋敷うち、西端の屋敷地が 16-5 区に該当する。松平期中期以降の絵図に記載される屋敷地名義の向きを根拠とした場合、屋敷地の表口 (玄関部分) は江戸時代を通して城山北公園線に面した北側にあたる。

以下では各時期の絵図 5 点を通して調査地周辺の様子を概観する。

①堀尾期絵図 (第 117 図)　堀尾氏が統治していた時期の絵図として「堀尾期松江城下町絵図」(絵図作成年代：1620 ～ 33 年、島根大学附属図書館所蔵) がある。第 16 ブロックが所在する街区には西側に 2 軒の屋敷地が配置され、明瞭な界線で屋敷地を区画している。街区の中央部～東側には屋敷地名義の記載は見られず、境界線すら引かれていない。16-5 区が比定する地点は空白地となっているが、城下町として計画的に整備された街区の中であることは間違いない。

第 117 図　堀尾期松江城下町絵図



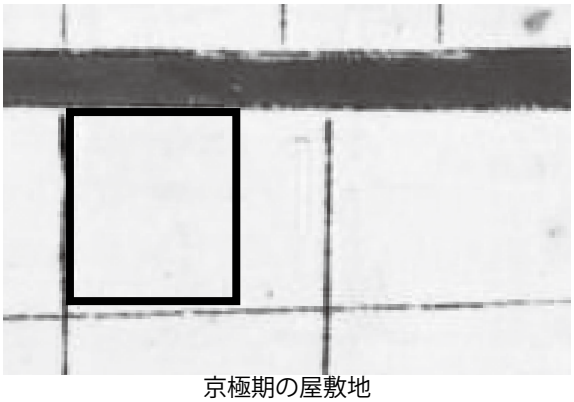
堀尾期の屋敷地

※絵図は上が北

②京極期絵図 (第 118 図)　京極氏が統治していた時期の絵図として「寛永年間松江城家敷町之図」(絵図作成年代：1634 ～ 37 年、丸亀市立資料館所蔵) がある。この絵図の南田町の中央部に描かれている入堀から東側は、屋敷地を区画する境界線は引かれているものの屋敷地名義は記されておらず、全域が空白地となっている。第 16 ブロックが所在する街区には、堀尾期絵図では西側に 2 軒の屋敷

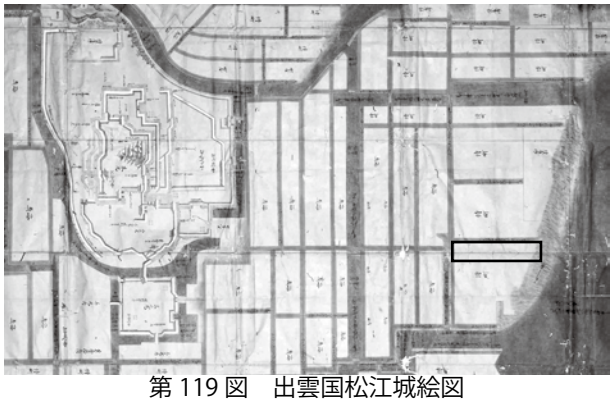
地名義が記載されていたが、京極絵図ではその記載が見られない。16-5 区が比定する地点は、西側に境界線が見られる以外は堀尾期絵図と同様に空白地のままである。

第 118 図　寛永年間松江城家敷町之図

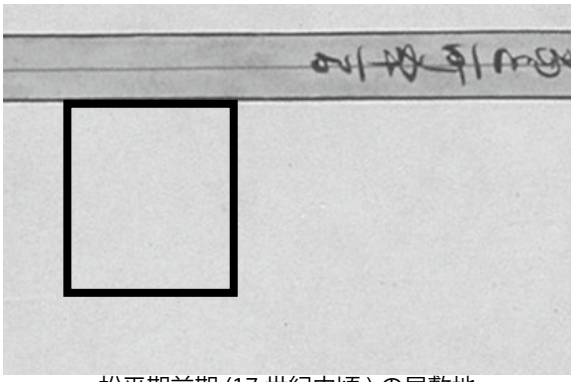


京極期の屋敷地

③松平期前期絵図 (第 119 図) 「出雲国松江城絵図」(絵図作成年代：1644 ～ 48 年、国立公文書館所蔵) は、松平氏が統治を開始した寛永 15(1638) 年に近く、17 世紀中頃の正保年間に幕府が諸藩に命じて作成させた絵図である。絵図には「侍町」の記載しか見られないが、文献ではこの時期に大橋家の屋敷地となっている[25]。



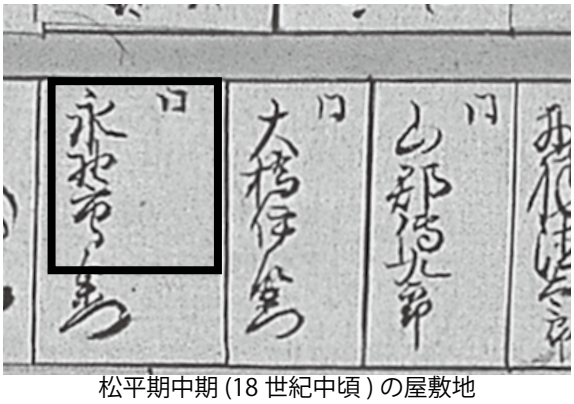
第 119 図　出雲国松江城絵図



松平期前期 (17 世紀中頃) の屋敷地

④松平期中期絵図 (第 120 図) 「松江城絵図」(絵図作成年代:1736 ～ 48 年、島根県立図書館所蔵) は、18 世紀中頃に作成された絵図である。第 16 ブロックが所在する街区は、城山北公園線に面した南側に武家屋敷が 1 軒、大橋家の与力屋敷が 8 軒建ち並んでいる。与力の屋敷地名義が記載されている絵図は、現段階ではこの絵図が最も古い。16-5 区が比定する地点には「永野市郎右衛門」の記載が見られ、8 軒の与力屋敷のうち西端の屋敷地に該当する。

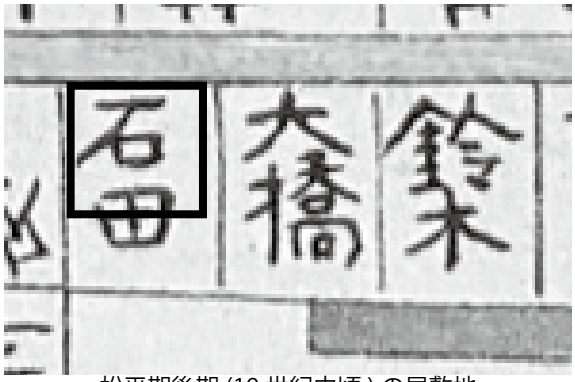
第 120 図　松江城絵図



松平期中期 (18 世紀中頃) の屋敷地

⑤松平期後期絵図 (第 121 図) 「松平期松江城下町絵図」(絵図作成年代：1825 ～ 51 年、島根大学附属図書館所蔵) は、19 世紀中頃に作成された絵図である。この絵図に記載されている与力屋敷の裏手には、小規模な堀が描かれている。16-5 区が比定する地点には「石田」の記載が見られ、文献から「石田作右衛門」の屋敷地に該当するものと考えられる。

第 121 図　松平期松江城下町絵図



松平期後期 (19 世紀中頃) の屋敷地

(2) 遺構面の時期区分と変遷 (第 122 図)

ここでは、年代が古い下層の遺構面から年代が新しい上層の遺構面の順に遺構面の時期区分と変遷を示すことで、調査成果のまとめを行う。

i) 遺構面の時期区分

主な盛土や整地層、遺構の状況などを併せると遺構面の変遷は四つの時期に区分される。

第 4 面：MJ5b 層上面が相当する第 4 遺構面である。本遺跡で検出した旧地表面は、茶褐色有機質粘土 (ラミナ層) を露呈した上面で、この土壌は未分解の植物遺体を含む有機物層である。有機物と粘土が互層状に堆積することから、水際あるいは水面下での堆積を窺わせる。城下町が形成される以前の時期に堆積した土壌で、実年代の手がかりはないが、これより上位の層序での出土遺物の状況から見て 17 世紀初頭までが下限となるものと考えられる。

第 3 面：MJ4 層上面が生活面となっていた時期に相当する第 3 遺構面である。城下町初期造成などを含む城下町建設当初の時期から始まり、17 世紀初頭～前半の城下町成立期にあたるものと考えられる。陶磁器は中国磁器・肥前系陶器・備前擂鉢が出土しており、いずれも 17 世紀初頭の古い時期を示すものである。肥前系陶器の出土状況から見る限り胎土目段階のもので占められ、17 世紀前半の砂目段階のものは含まない時期に相当する。

第 2 面：MJ3 層上面が生活面となっていた時期に相当する第 2 遺構面である。嵩上げ造成による整地が行われ、17 世紀中頃～後半までが含まれる。陶磁器は中国磁器・肥前系陶磁器が出土している。出土した陶磁器の中には被熱した痕跡が見られるものを含むことから、火災処理の段階で廃棄されたものが造成土中に混入した可能性がある。

第 1 面：MJ2 層上面が生活面となっていた時期に相当する第 1 遺構面である。嵩上げ造成による整地が行われ、18 世紀前半～ 19 世紀前半までが含まれる。陶磁器は肥前系磁器･京信系陶器･在地系陶器・須佐擂鉢が出土している。

以下では各時期の状況についてまとめていくことにする。

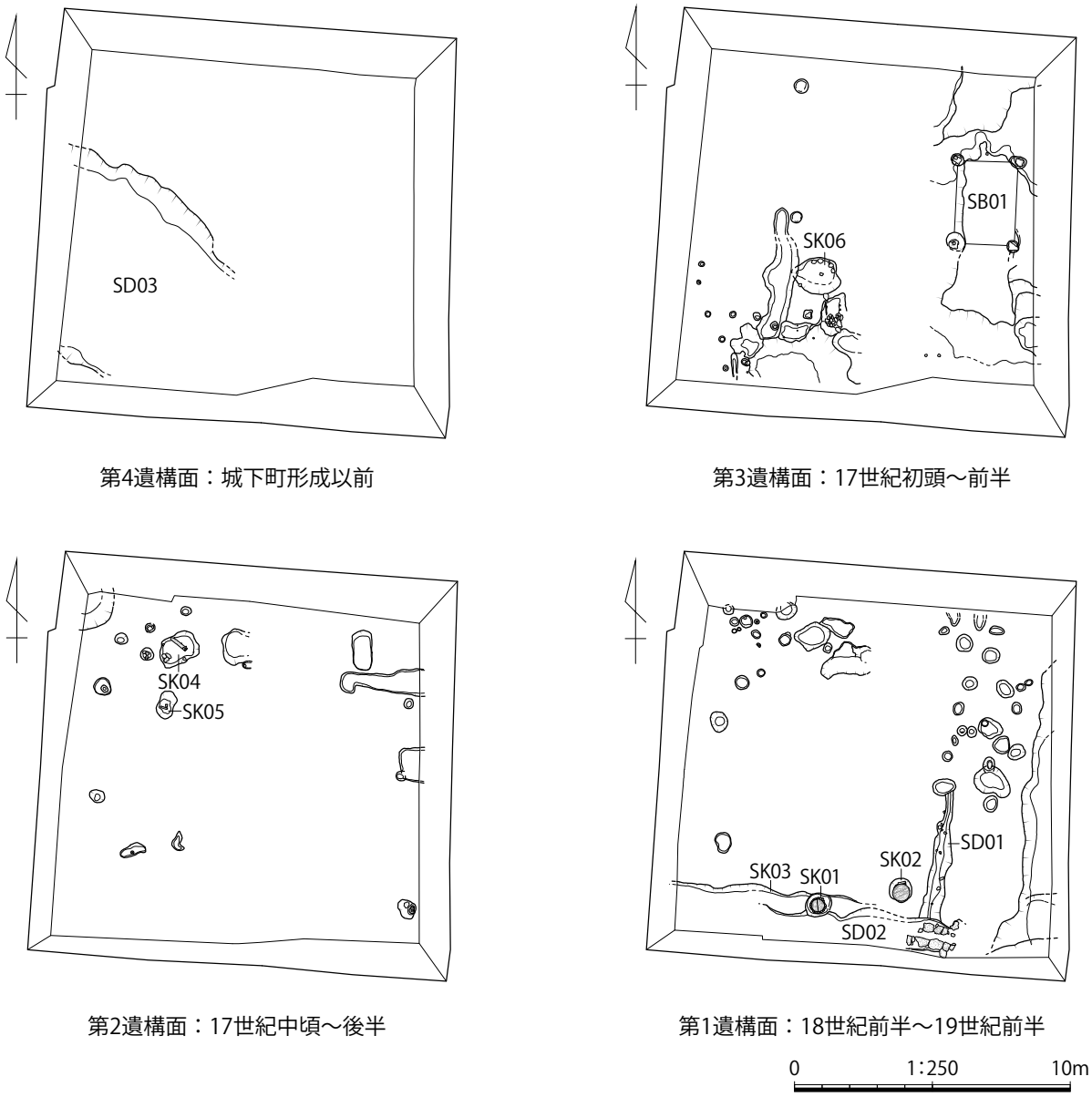
ii）遺構面の変遷

第４面：城下町形成以前

今回の発掘調査で検出した最も古い遺構面は、17 世紀初頭以前の MJ5b 層上面で、城下町形成以前の旧地表面に相当する第４遺構面である。検出した旧地表面は、標高 0.20 m で茶褐色有機質粘土 (ラミナ層) を露呈した上面で、この土壌は未分解の植物遺体を含む有機物層である。有機物と粘土が互層状に堆積することから、水際あるいは水辺からやや離れた陸地であったことが想定される。

城下町形成以前の南田町周辺は低湿地であったと考えられており、沼沢地や湖沼などの湿原植物が繁茂する湿地に集積した未分解の植物遺体の堆積物が見られることは、当地周辺が低湿地であったことを示すひとつの証拠として捉えることができる。

本遺跡の旧地表面は、西から東に向かって緩やかに傾斜している。検出した SD03 は、北西から南東方向に向かって延びる溝状の落ち込みで、旧地表面の凹凸を検出している可能性が考えられる。



第4遺構面：城下町形成以前

第3遺構面：17世紀初頭～前半

第2遺構面：17世紀中頃～後半

第1遺構面：18世紀前半～19世紀前半

第 122 図　16-5 区遺構変遷図

第 3 面：17 世紀初頭～前半

城下町初期造成段階の遺構面として確認できたのは、MJ4 層上面の第 3 遺構面である。MJ4 層は、城下町形成以前の旧地表面の上に盛土された最初の整地層であり、堀尾氏が松江城築城に着手して城下町建設を行った段階を想定している。この上面で検出した遺構は、17 世紀初頭～前半に存在したものと考えられる。

検出した SB01 は、1 間× 1 間半の掘立柱建物である。建物としては小規模で、屋敷地の住居とは考え難いことから、城下町初期造成に伴う簡易的な建物を想定している。SK06 は、歪んだ円形を呈する土坑で、埋土に陶器片を含むことから廃棄土坑と考えられる。

ここでは第 3 面の時期に該当する堀尾期絵図を根拠として、本遺跡における土地利用の形態を考察しておきたい。堀尾期絵図には、武家屋敷として配置されている場所に屋敷地と屋敷地を区画するための明瞭な境界線が描かれ、区割りされた屋敷地には藩士の名前が記載されている。本遺跡が推定される場所には藩士の名前の記載はなく、境界線すら描かれていない空白地にあたる。ただ、道路に囲まれた区画に位置し、城下町として整備された街区の中であることは間違いない。

本遺跡では、この時期は生活痕跡が希薄で、初期造成当初から建物が建ち並ぶような景観ではなかったことが考えられる。ただし、簡易的な建物や杭列があることから生活が営まれていたことは明白である。本遺跡周辺では、居住地として利用されていた証拠に、陶磁器だけではなく漆器椀や下駄などの木製品、庖丁や鎌などの金属製品が出土している[26]。

第 2 面：17 世紀中頃～後半

MJ3 層上面の第 2 遺構面は、灰色粘質土を主体とする整地層上に形成された遺構面で、遺構面に含まれる遺物から 17 世紀中頃～後半に存在したものと考えられる。

検出した SK04 は、歪んだ楕円形を呈する土坑で、埋土に陶器片を含むことから廃棄土坑と考えられる。SK05 は、土坑としているが埋土の状況から柱穴の可能性が考えられる。これらの遺構以外にも柱穴･土坑群があるが、検出した柱穴には規則性がなく、調査区内に散漫的に存在している。また、遺構内から出土した遺物は 17 世紀前半を示すが、遺構面から出土した遺構外出土遺物として扱ったものは 17 世紀中頃～後半を示している。調査時に下層の遺構を検出している可能性があるものの、面的な精査を行った段階で出土した遺物の年代から、17 世紀後半が下限となるものと考えている。

これまでの本遺跡周辺の調査成果から、前述した第 3 面以降の 17 世紀前半～後半の遺構面では、堀尾期～京極期の畠面の段階、その次は松平期 (1638 年以降～) の与力屋敷が配置される段階 (掘立柱建物あるいは礎石建物) という変遷を辿ることが明らかとなっている[27]。今回の調査では、畠面を確認していないことから、16-5 区から東側の範囲が畠地として利用されていたものと想定される。建物跡について明確な遺構は確認していないが、検出した柱穴群は底部に礎盤石をもつものもあり、掘立柱建物に伴う柱穴と捉えることもできることから建物が存在していた可能性は高い。礎石建物は柱穴が地中深くまで残る掘立柱建物と違って、当時の地表面が削平されると礎石が消失してしまう。また、削平されなくても礎石が動かされることもあり、建設当時の状態のまま復元できる礎石建物は少なく、与力屋敷の当該期の建物は後世の削平によって礎石が消失している可能性が考えられる。

第１面：18 世紀前半～ 19 世紀前半

MJ2 層上面の第 1 遺構面は、山土造成土による整地層上に形成された遺構面で、土坑 SK01・03 や遺構面に含まれる遺物から 18 世紀前半～ 19 世紀前半に存在したものと考えられる。

検出した SD01・02 は、屋敷地内における排水用の溝と考えられる。SD01 と SD02 の 2 つの溝は切り合っており、先後関係は SD01(古)・SD02(新) である。これらは同一遺構面で検出しているが、屋敷地内における溝の改変と理解している。SK01・02 は、埋桶土坑である。この埋桶土坑は、本遺跡から東側に位置する 16-4b 区でも検出しており、便槽遺構 (トイレ遺構) と報告されている[28]。今回の調査で検出した 2 つの埋桶は、16-4 区で検出した埋桶土坑と規模や遺構配置が類似していることから、同様の性格をもつ便槽遺構と想定される。SK03 は、長楕円形を呈する土坑で、埋土に陶磁器片を含むことから廃棄土坑と考えられる。

上記のように、今回の調査では 17 世紀初頭～前半の掘立柱建物や土坑、17 世紀中頃～後半の廃棄土坑、18 世紀前半～ 19 世紀前半の溝や埋桶土坑といった遺構を検出した。断片的ではあるが、これらは屋敷地の構造を復元していく上での手がかりになるであろう。

ⅲ）出土遺物の様相

16-5 区における出土遺物は、遺構面において陶磁器・土師器皿が出土した。遺物組成について、前述した遺構面に追従する形で以下にまとめておきたい。

第４面：城下町形成以前に該当する遺物は本遺跡では出土していない。

第３面：17 世紀初頭～前半は、中国磁器と肥前系陶器が主体となる時期である。肥前系陶器の出土状況から見る限り胎土目段階のもので占められ、17 世紀前半の砂目段階のものは含まない。

SK06 や遺構面から出土した肥前系陶器は、生産地年代で九陶Ⅰ -2 期 (1594 ～ 1610 年代) を示すもので占められている。肥前系陶器では、胎土目段階の鉄絵を施す碗皿類が主体で、砂目段階の溝縁皿などは出土していない。この状況から本遺跡では、17 世紀初頭に近い時期の遺物組成を示しているものと考えられる。土師器皿は手づくね成形の京都系のみで、底部に糸切り痕をもつ在地系は出土していない。

第２面：17 世紀中頃～後半は、肥前系陶器が減少して肥前系磁器が増加する時期である。本遺跡では、17 世紀前半の中国磁器の漳州窯系の青花皿、17 世紀後半の肥前系陶器の呉器手碗や肥前系磁器の碗皿類などが出土している。遺構内から出土した遺物は 17 世紀前半を示すが、遺構面から出土した遺構外出土遺物として扱ったものは 17 世紀中頃～後半を示している。土師器皿は京都系と在地系が出土し、京都系の占める割合がやや優勢である。

第１面：18 世紀前半～ 19 世紀前半は、肥前系磁器に京信系陶器や在地系陶器などが加わる時期である。本遺跡では、18 世紀前半の肥前系磁器の陶胎染付碗が多く見られる時期が上限で、19 世紀前半の広東碗や見込みに環状の松竹梅文を入れた丸碗が多く見られる時期が下限と考えられる。18 世紀前半～ 19 世紀前半とかなりの幅があるが、当該期の第 1 遺構面は撹乱層を除去した段階で遺構を検出した任意の遺構面であるため、様々な時期の陶磁器を検出している可能性がある。土師器皿は京都系が出土せず、在地系で占められている。

第 5 節　第 16 ブロック (16-6 区)　松江城下町遺跡 (南田町 134-1 外)

第 16 ブロックは、市道北田大橋線から田町川に挟まれた城山北公園線の南側部分、南田町地内の東西約 230 m×南北約 18 m区間である。ここでは第 16 ブロックのうち、平成 25 ～ 26 年度に発掘調査を実施した松江城下町遺跡 (南田町 134-1 外) の調査成果を報告する。

調査地周辺は、調査開始以前には城山北公園線沿いの民家や店舗が建ち並んでいた場所となっていた。本調査区の南側にあたる民家や店舗の裏手では、16 ブロックを東西に横断する形で本発掘調査終了後に立会調査が行われており、本発掘調査は民家や店舗の建物解体後に実施している。

発掘調査の経過は、第 16 ブロックではこれまでに 5 箇所の本発掘調査と 24 箇所の立会調査を実施しており、本調査区の呼称は便宜的に 16-1 区～ 16-5 区としている。16-1 区・16-2 区は平成 25 年度に刊行した『市 157』「城山 4」に、16-3 区・16-4 区は平成 26 年度に刊行した『市 163』「城山 5」に、16-5 区は本章第 4 節においてそれぞれの調査成果が報告されている。今回報告する調査区は、本章第 4 節で報告した 16-5 区の東側に隣接する場所に位置し、第 16 ブロックでは 6 箇所目の 16-6 区となる。第 16 ブロックにおける本発掘調査については、16-6 区が最終の本調査区となっている。調査区と遺跡名の関係および掲載報告書は以下の表 13 に示した。

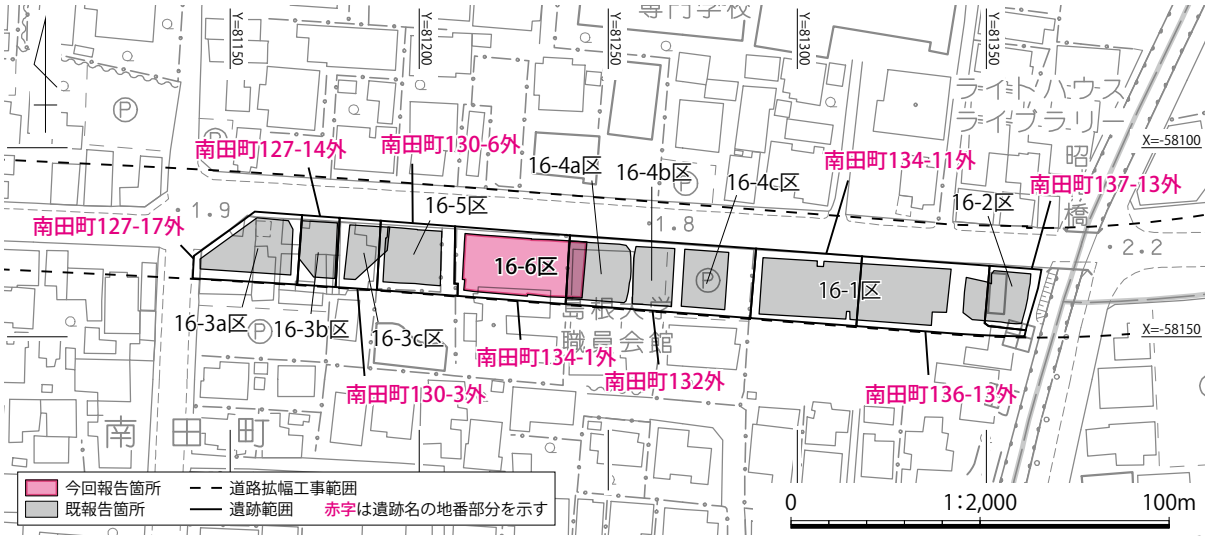
表 13　第 16 ブロック本発掘調査箇所

<table>
<tr><th>ブロック名</th><th colspan="2">調査区名</th><th>遺跡名</th><th>掲載報告書</th></tr>
<tr><td rowspan="12">第 16 ブロック</td><td colspan="2">16-1 区</td><td>松江城下町遺跡（南田町 134-11 外・136-13 外）</td><td rowspan="2">『市 157』「城山 4」</td></tr>
<tr><td colspan="2">16-2 区</td><td>松江城下町遺跡（南田町 137-13 外）</td></tr>
<tr><td rowspan="3">16-3 区</td><td>16-3a 区</td><td>松江城下町遺跡（南田町 127-17 外）</td><td rowspan="6">『市 163』「城山 5」</td></tr>
<tr><td>16-3b 区</td><td>松江城下町遺跡（南田町 127-14 外）</td></tr>
<tr><td>16-3c 区</td><td>松江城下町遺跡（南田町 130-3 外）</td></tr>
<tr><td rowspan="3">16-4 区</td><td>16-4a 区</td><td>松江城下町遺跡（南田町 132 外）1 区</td></tr>
<tr><td>16-4b 区</td><td>松江城下町遺跡（南田町 132 外）2 区</td></tr>
<tr><td>16-4c 区</td><td>松江城下町遺跡（南田町 132 外）3 区</td></tr>
<tr><td colspan="2">16-5 区</td><td>松江城下町遺跡（南田町 130-6 外）</td><td rowspan="2">『市 185』「城山 8」</td></tr>
<tr><td colspan="2">16-6 区</td><td>松江城下町遺跡 (南田町 134-1 外)</td></tr>
</table>

第 1 項　調査区の位置 (第 123 図)

発掘調査対象地である 16-6 区は、松江城大手前から東へ約 820 mの地点に位置する。調査範囲は東西約 32.0 m×南北約 15.0 m、調査面積 479.0㎡の調査区を設定した。

第 16 ブロックを現存する堀尾期・京極期・松平期の各絵図と照合すると、堀尾期～京極期には街区の西端に 1 軒の屋敷地が描かれているが、それより東側は空白地となっている。松平期には筆頭家老である大橋茂右衛門の広大な屋敷地となる。屋敷地の裏手にあたる北側 (城山北公園線側) の一画には、大橋家の直臣が住まう与力屋敷が東西に 8 軒配置されていた。16-6 区は、この与力屋敷が展開する一画のうち、西端から 2 軒目の屋敷地に比定される。



第 123 図　第 16 ブロック本調査区配置図

第２項　遺構面と層序 (第 124 図)

調査区の遺構検出と土層堆積状況の観察を行った結果、6 つの遺構面を確認した。遺構面は、上層から主に現地表面～撹乱層・造成土 (盛土)・旧地表面・自然堆積層に分け、その中から生活面と考えられる整地層や遺構の機能面を把握した。

本調査地は、現地表面以下に近現代の撹乱層が厚く堆積するが、撹乱がおよぶ場所以外は近世の土層が良好に残されている。現地表は標高 1.80 mで、最深部で現地表下約 2.30 m (標高 -0.50 m) までの土層堆積を確認した。第 124 図の土層図は、16-6 区の中央部に設定した東壁土層 (A-B 間) を掲載している。なお、基本的な層序は第 1 章第 2 節第 3 項で示した松江城下町遺跡基本土層と共通するものであり、遺構面で区分した土層の呼称についてはこれに準じて対応する土層名を付した。以下、各遺構面の土層堆積状況について、上層から下層の順に説明する。

MJ0 層：現地表面～撹乱層　標高 1.80 m、層厚 40㎝

黄灰色土～褐灰色砂質土を主体とする撹乱層である。この土層中から 19 世紀後半～近現代の陶磁器類が出土している。

MJ1 層：第 1 遺構面　標高 1.40 m、層厚 20㎝

明褐色砂質土を主体とする盛土層だが、上層からの撹乱層が入る。この遺構面では撹乱を免れた遺構を検出し、遺構面から 19 世紀前半～中頃の陶磁器類が出土している。

MJ2 層：第 2 遺構面　標高 1.20 m、層厚 10㎝

浅黄色粘質土の山土を主体とする嵩上げ造成による整地層だが、この面まで上層からの撹乱層が入る。第 2 遺構面でも撹乱を免れた遺構を検出し、遺構面から 18 世紀後半の陶磁器類が出土している。

MJ3a 層：第 3-1 遺構面　標高 1.00 m、層厚 10㎝

第 3 遺構面は、火災が契機と考えられる建物部分だけの造成と礎石建物の建て替えが行われており、同一遺構面の中で新旧が存在する。そのため、第 3 遺構面では造成を施して礎石建物の建て替えが

行われた新段階を「第 3-1 遺構面」、それ以前の礎石建物の建て替えを行う前の古段階を「第 3-2 遺構面」としている。MJ3a 層は第 3-1 遺構面とした礎石建物の建て替え後の整地層で、浅黄色～橙褐色粘質土の山土を主体とする。この遺構面から 17 世紀後半～ 18 世紀中頃の陶磁器類が出土している。MJ3a 層の整地層中や礎石建物周辺で検出した土坑埋土には、火災による炭化層の堆積が見られる。

MJ3b 層：第 3-2 遺構面　標高 0.90 m、層厚 50㎝

MJ3b 層は第 3-2 遺構面とした礎石建物の建て替え前の整地層で、青灰色シルトを主体とする。この遺構面から 17 世紀前半～後半の陶磁器類が出土している。

MJ3c 層：第 4 遺構面　標高 0.40 m、層厚 10㎝

MJ3c 層は畠を形成する淡茶褐色有機質細礫粘土である。畠の畝と畝間の土壌分析結果から、耕作土であることが判明している。この遺構面から 17 世紀前半の陶磁器類が出土している。

MJ4 層：第 5 遺構面　標高 0.30 m、層厚 30㎝

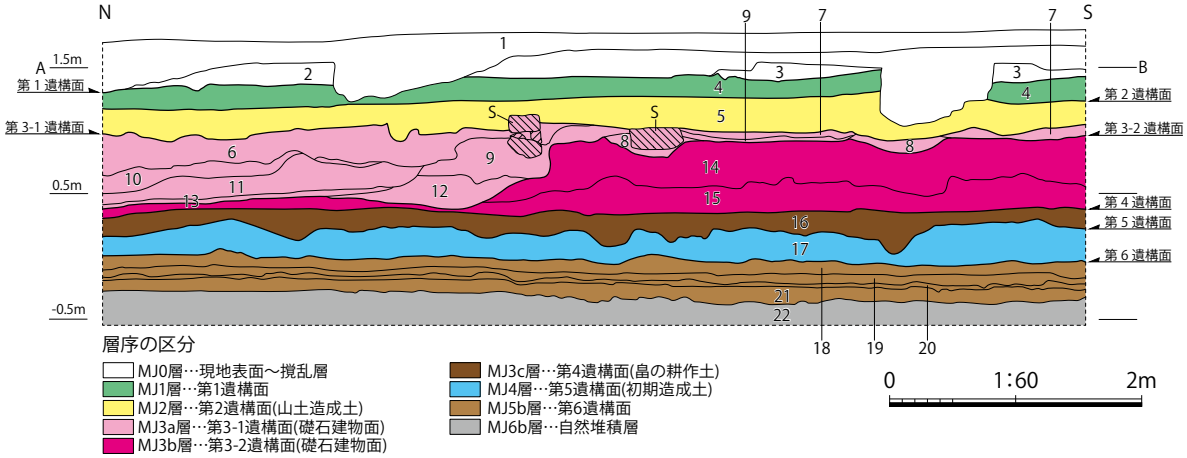
城下町形成以前の旧地表面の上に盛土された城下町初期造成段階の整地層である。MJ4 層よりも下位にある MJ5b 層の茶褐色有機質粘土と MJ6b 層の青灰色細砂の混合土を主体とする。この遺構面から 17 世紀初頭の陶磁器類が出土している。

MJ5b 層：第 6 遺構面　標高 0 m、層厚 30㎝

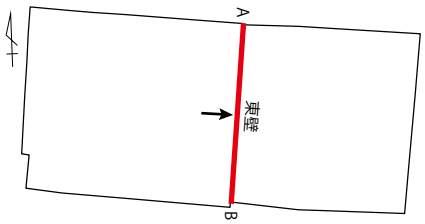
城下町形成以前の旧地表面の堆積層で、本調査地では茶褐色有機質粘土の堆積を確認した。この土層は水平堆積のラミナ層が確認でき、下位には黒色有機物層と淡茶色有機質粘土が堆積する。

MJ6b 層：自然堆積層　標高 -0.30 m

青灰色細砂を主体とする堆積層で、松江市街地北部の丘陵から末次砂州の北の水域に水が流れていた時代に堆積した土層である。



A-B 間 南北土層 (東壁)



1　黄灰色土(撹乱層)
2　褐灰色砂質土
3　褐色砂質土
4　明褐色砂質土
5　浅黄色粘質土(山土)
6　黄灰色砂質土(炭化物含む)
7　橙褐色粘質土(山土)
8　明緑灰色粘質土
9　緑灰色シルト
10　淡灰色砂質土
11　黄褐色粘土
12　青灰色シルト質粘土
13　灰色砂
14　明青灰色シルト
15　青灰色シルト(粘質強い)
16　淡茶褐色有機質礫粘土
17　青灰色細砂と茶褐色有機質粘土の混合土
18　茶褐色有機質粘土(ラミナ層)
19　黒色有機物層
20　淡茶色有機質粘土
21　暗褐色シルト質細砂
22　青灰色細砂

第 124 図　16-6 区土層図

第３項　調査の結果

ここでは検出した遺構面の概要や遺構と遺物について、年代が新しい上層の遺構面から年代が古い下層の遺構面の順に示す。本項に掲載した遺構面の変遷と遺物の様相については、本節末に設けた小結の中にまとめて記述した。

(1) 第 1 遺構面

ｉ）第 1 遺構面の概要 (第 125 図)

第 1 遺構面は、標高 1.40 ｍで検出した遺構面である。遺構は、鉄球埋納遺構 SP01、その他の土坑群を検出した。遺構面は、現地表面 (標高 1.80 ｍ) 以下に堆積する層厚 40㎝の撹乱層を除去した段階で遺構を検出した任意の遺構面である。この遺構面は、調査区のほぼ全域にわたって一様に近現代の撹乱を受けていた。一部に生活面が残っていることは否定できないが、撹乱を免れた遺構を検出していることから、厳密な意味での遺構面ではない可能性がある。

第 1 遺構面の基盤となる MJ1 層は、明褐色砂質土を主体とする盛土層である (第 124 図第 4 層)。層厚は 20㎝を測り、盛土層を露呈した面で遺構を検出したことから、これを第 1 遺構面とした。遺構面の時期は、出土遺物の年代から 19 世紀前半～中頃を想定している。

第 125 図　第 1 遺構面平面図

ii）第 1 遺構面の遺構と遺物

鉄球埋納遺構 SP01 (第 126 図)

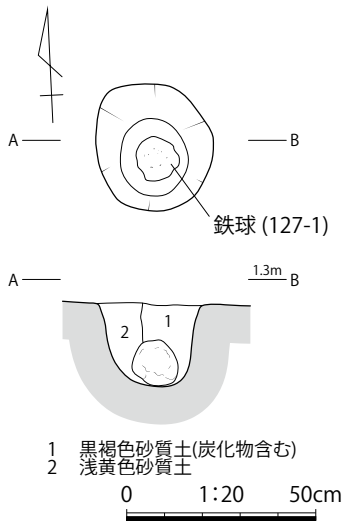
調査区の西側で検出した鉄球埋納遺構である。検出面は標高 1.23 ｍで、平面形は円形を呈する。規模は上縁長軸が 0.34 ｍ、短軸が 0.30 ｍ、深さ 0.22 ｍを測る。

ピット埋土は、炭化物を多く含む黒褐色砂質土 (第 1 層) と浅黄色砂質土 (第 2 層) の 2 層に分層できる。埋土中から陶磁器類は出土していないが、掘り方底面の中央部で直径 8.6㎝を測る鉄球が出

土した。松江城下町遺跡の発掘調査では、これまでに鉄球を使用した祈祷具や地鎮遺構を確認しており、これらは概ね 19 世紀中頃～後半 (幕末～明治初頭) の遺構面から検出している。SP01 から出土した鉄球も屋敷地内における地鎮儀礼に関わる遺物と考えられ、松江城下町遺跡での鉄球の出土は今回の事例が 5 例目である (松江城下町遺跡の鉄球出土例については本節末の小結に記載)。

SP01 出土遺物 (第 127 図)

127-1 は地鎮具と考えられる鉄球で、直径 8.6㎝、重さ 2.16㎏を測る。鉄球の下半には鉄錆と炭化した木片が付着する。

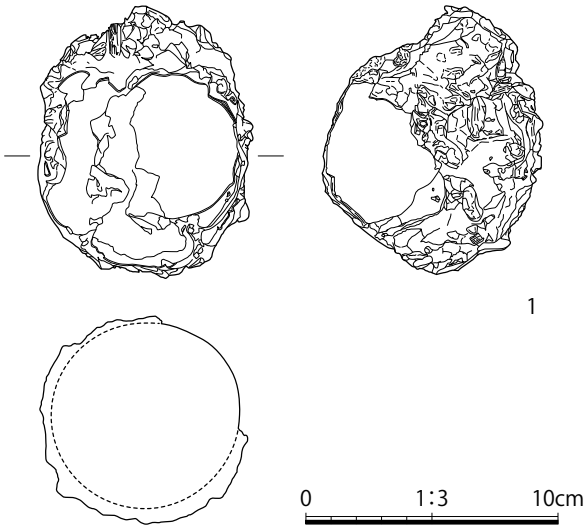


第 126 図　SP01 平面図・断面図

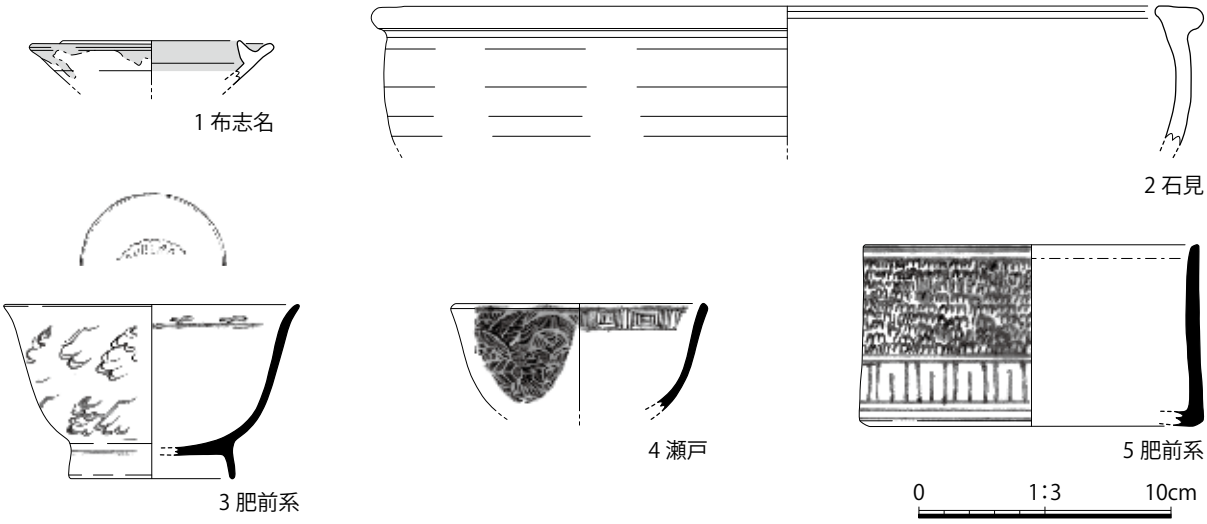
第 1 遺構面遺構外出土遺物 (第 128 図)

ここで掲載する遺物は、第 1 遺構面直上から出土したものを遺構外出土遺物として取り扱う。

128-1 ～ 5 は国産陶磁器である。128-1 は在地系陶器 (布志名) の灯明受皿である。19 世紀前半。128-2 は在地系陶器 (石見) の捏鉢である。口縁端部を平坦におさめ、内外面に長石釉を施す。19 世紀前半。128-3 は肥前系磁器の端反碗である。胴部外面に雲龍文、口縁部内面に波・輪花文、見込みに花文を描く。九陶Ⅴ期 (1820 ～ 1860 年代)。128-4 は瀬戸磁器の碗である。型紙摺りで外面に草花文、手描きで口縁部内面に雷文帯を描く。明治 20 年代か。128-5 は肥前系磁器の蓋付鉢である。胴部外面にみじん唐草文と連弁文を描き、口縁端部に口銹を施す。九陶Ⅴ期 (1820 ～ 1860 年代)。



第 127 図　SP01 出土遺物



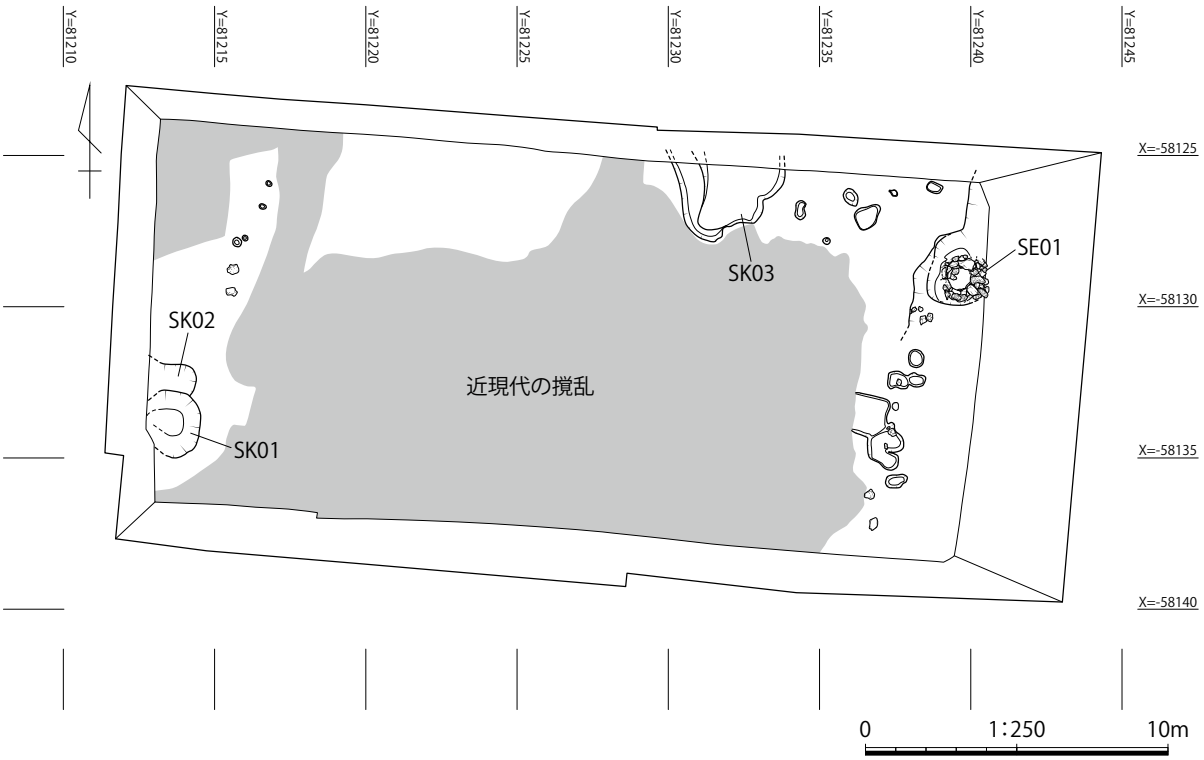
第 128 図　第 1 遺構面遺構外出土遺物

（2）第２遺構面

ｉ）第２遺構面の概要 (第 129 図)

第２遺構面は、標高 1.20 mで検出した遺構面である。遺構は、石積井戸 SE01、土坑 SK01 ～ 03、その他の土坑群を検出した。この遺構面は、第１遺構面と同様に調査区のほぼ全域にわたって一様に近現代の撹乱を受けていた。第１遺構面を掘り下げた段階で、部分的に撹乱を免れた場所で遺構を検出していることから、これを第２遺構面とした。

第２遺構面の基盤となる MJ2 層は、浅黄色粘質土を主体とする嵩上げ造成による整地層である (第 124 図第５層)。層厚は 10㎝を測り、整地層を露呈した面で遺構を検出した。遺構面の時期は、出土遺物の年代から 18 世紀後半を想定している。



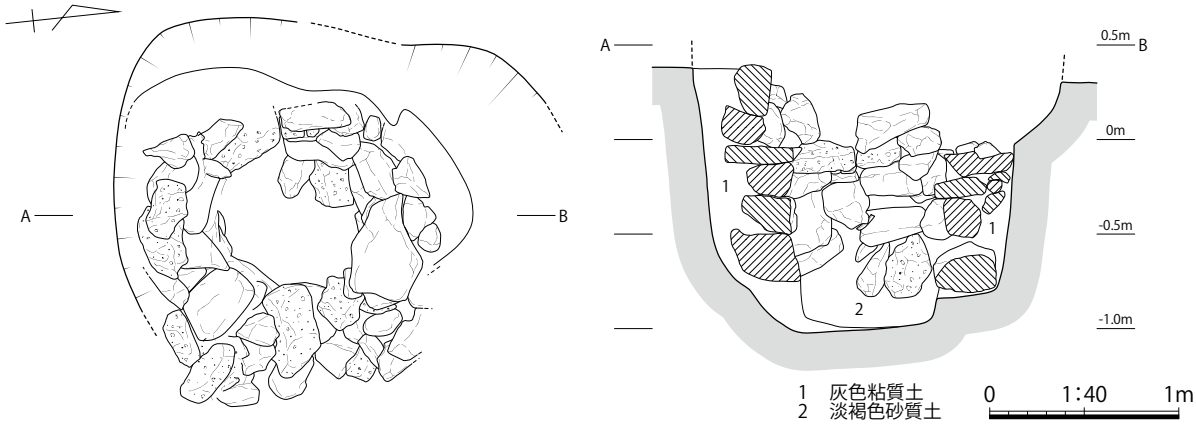
第 129 図　第２遺構面平面図

ii）第２遺構面の遺構と遺物

石積井戸 SE01(第 130 図)

調査区の北東端で検出した石積井戸である。検出面は標高 0.40 mと低い位置だが、井戸の掘り方上部と井戸側の石積上部は上層からの撹乱によって消失しているものと考えられることから、第２遺構面に含めている。

井戸の掘り方は東西 2.10 m、南北 2.30 m、深さ 1.40 mを測る。井戸側は標高 0.43 mで石積天端を検出し、直径 1.50 m、深さ 1.40 mを測る円形の石積を確認した。石材は島石と川原石を混在して使用している。石積井戸の埋土は淡褐色砂質土 (第２層) で、掘り方から遺物は出土していないが、埋土中から陶磁器類の小片と平瓦が出土しており、これらは井戸を埋めた際の廃棄段階のものである。SE01 は第２遺構面に含めたが、出土遺物から第２遺構面よりも上層から掘り込まれた 18 世紀後半～ 19 世紀前半の遺構の可能性も考えられる。

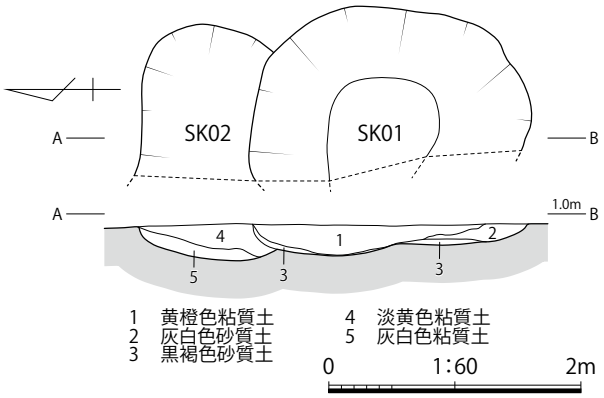


第 130 図　SE01 平面図・断面図

土坑 SK01・02(第 131 図)

調査区の南西端で検出した土坑である。検出面は標高 0.95 mで、平面形は楕円形と考えられる。規模は上縁長軸が 1.00 ～ 2.20 m、短軸が 1.30 m、深さ 0.25 ～ 0.30 mを測る。SK01 は SK02 と一部切り合っており、先後関係は SK02(古)・SK01(新) である。

土坑埋土は 5 層に分層でき、上層から黄橙色粘質土 (第 1 層)、灰白色砂質土 (第 2 層)、黒褐色砂質土 (第 3 層)、淡黄色粘質土 (第 4 層)、灰白色粘質土 (第 5 層) が堆積する。SK01・02 から遺物は出土していない。



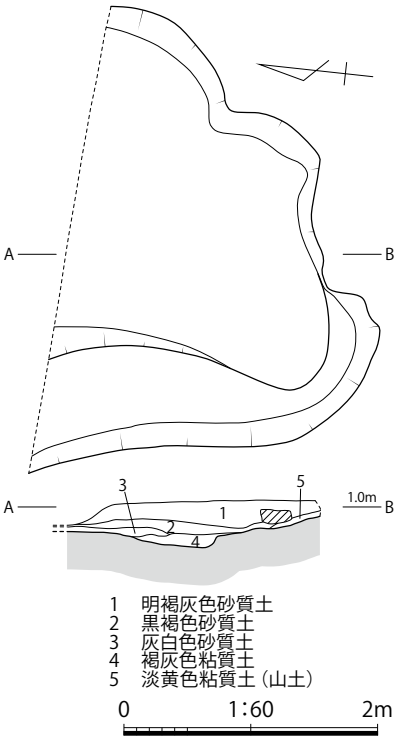
第 131 図　SK01・02 平面図・断面図

土坑 SK03(第 132 図)

調査区中央の北側で検出した廃棄土坑である。検出面は標高 1.10 mで、平面形は歪んだ円形と考えられるが、北端は調査区外まで延びる。規模は上縁長軸が 3.50 m、短軸が 2.00 m、深さ 0.35 mを測る。

土坑埋土は 5 層に分層でき、上層から明褐灰色砂質土 (第 1 層)、黒褐色砂質土 (第 2 層)、灰白色砂質土 (第 3 層)、褐灰色粘質土 (第 4 層)、淡黄色粘質土 (第 5 層) が堆積する。第 3・4 層には炭化物が混ざり、この土層から陶磁器・土師器皿が出土している。

SK03 は部分的に撹乱を免れた場所で検出した廃棄土坑で、出土した陶磁器には日用雑器が多く含まれることから、付近に居住施設があった可能性は高いものと捉えている。



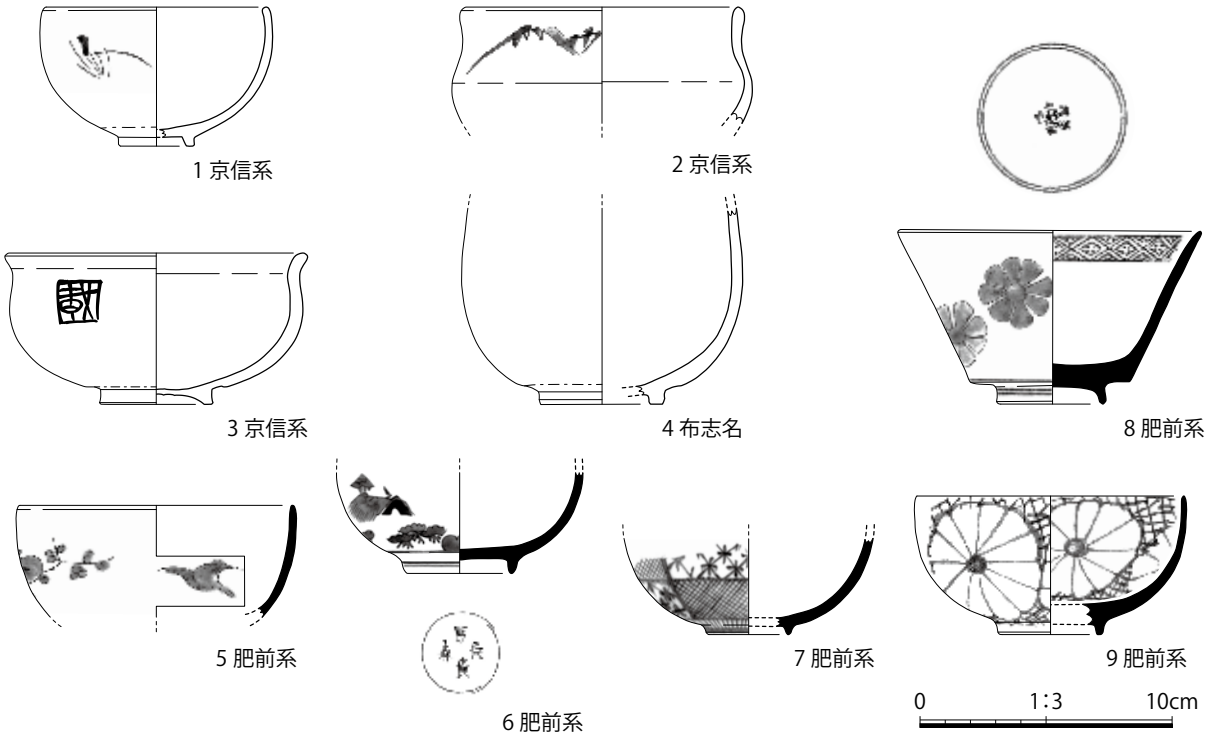
第 132 図　SK03 平面図・断面図

SK03 出土遺物 (第 133・134 図)

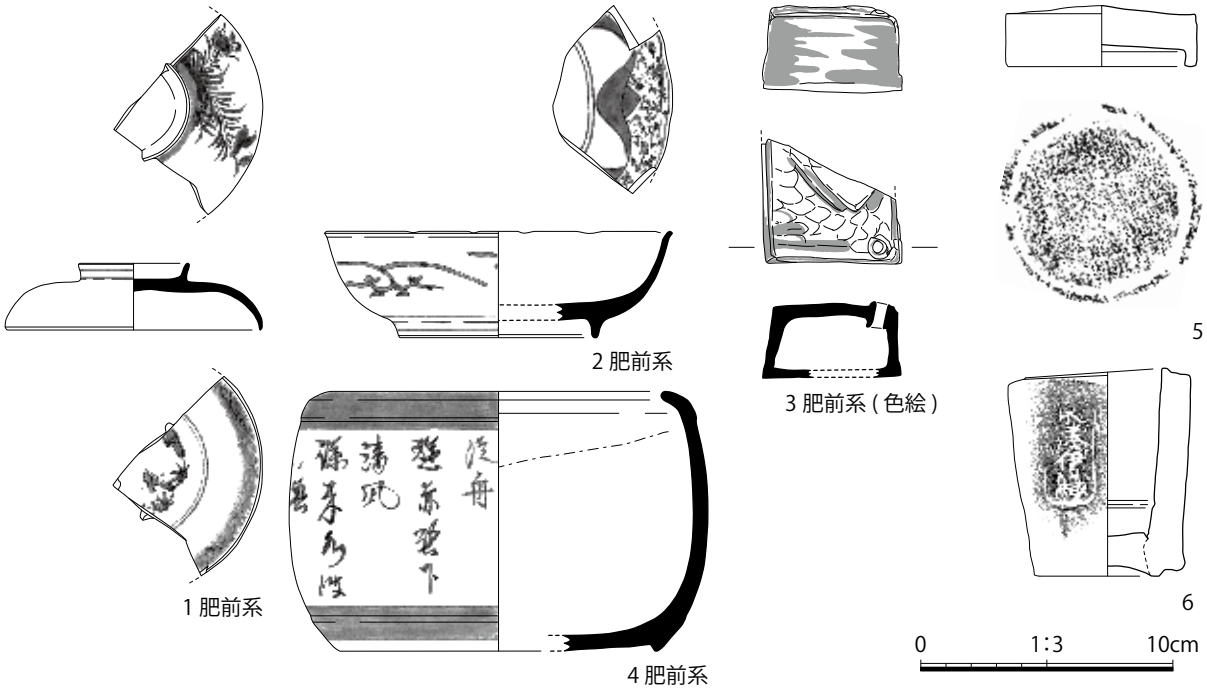
ここでは SK03 の埋土から出土した遺物を掲載する。133-1 ～ 4 は国産陶器である。133-1 ～ 3 は京信系陶器の碗である。133-1・2 は胴部外面に呉須絵で草花文を描き、高台は露胎。133-3 は内外面に長石釉を施し、貫入が入る。上絵付のもので、胴部外面に朱で款を入れる。いずれも 18 世紀後半。133-4 は在地系陶器 (布志名) の碗である。いわゆる「ボテボテ茶碗」で内外面に青地釉を施し、高台は露胎。18 世紀後半～ 19 世紀前半。

133-5 ～ 134-4 は国産磁器である。133-5 は肥前系磁器の碗である。胴部外面に花鳥文を描く。九陶Ⅳ期 (1750 ～ 1780 年代)。133-6 は肥前系磁器の碗である。胴部外面に風景文を描き、高台内に「冨貴長春」の銘を銭形に記す。九陶Ⅳ期 (1750 ～ 1780 年代)。133-7 は肥前系磁器の碗である。胴部外面に斜め格子文と市松文を描く。九陶Ⅳ期 (1770 ～ 1790 年代)。133-8 は肥前系磁器の碗である。朝顔形の碗で、胴部外面に花卉文、口縁部内面に四方襷文、見込みに手描きの五弁花を描く。九陶Ⅳ期 (1760 ～ 1780 年代)。133-9 は肥前系磁器の碗である。内外面に氷裂文と菊花散らし文を描く。九陶Ⅴ期 (1780 ～ 1810 年代)。134-1 は肥前系磁器の蓋である。外面に草花文、口縁部内面に四方襷文、見込みに環状の松竹梅文を描く。九陶Ⅴ期 (1780 ～ 1810 年代)。134-2 は肥前系磁器の皿である。型打成形の皿で、体部外面に蔓唐草文、内面に花唐草文を描く。九陶Ⅴ期 (1780 ～ 1810 年代)。134-3 は肥前系磁器の色絵の水滴である。型押成形で方形を呈する。九陶Ⅳ期 (1690 ～ 1780 年代)。134-4 は肥前系磁器の火入である。胴部外面に字文で「前赤壁賦」の漢詩を描く。九陶Ⅳ期 (1750 ～ 1780 年代)。

134-5・6 は焼塩壺の蓋と身である。134-6 は胴部外面に「泉湊伊織」の陰刻印を持つ規格品で、板造り成形のものである。18 世紀後半のもので、渡邊氏分類 C-a 類に該当する。



第 133 図　SK03 出土遺物 (1)

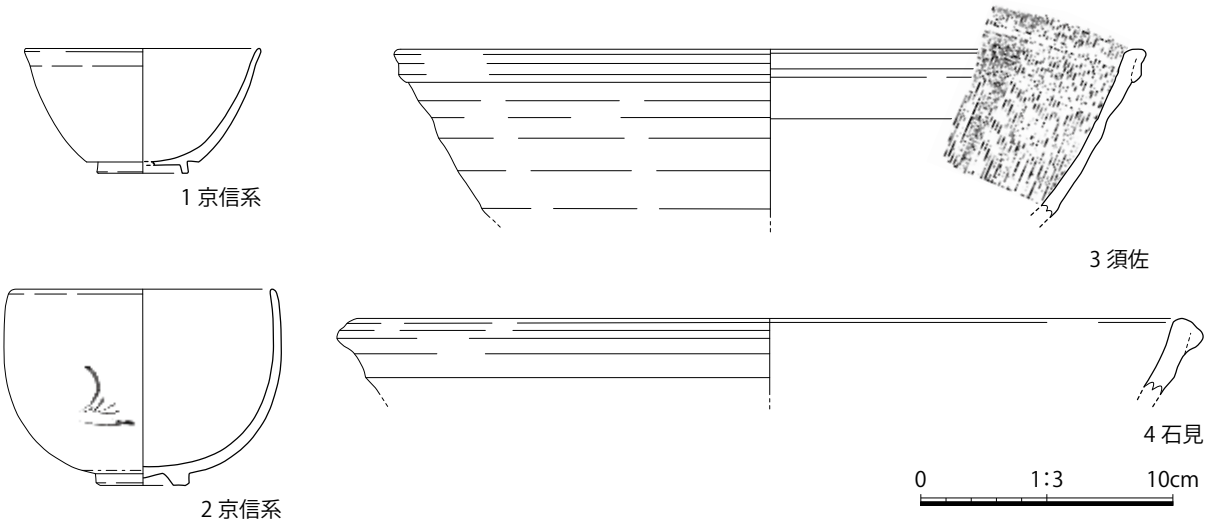


第 134 図　SK03 出土遺物 (2)

第 2 遺構面遺構外出土遺物 (第 135 図)

ここで掲載する遺物は、第 2 遺構面直上から出土したものを遺構外出土遺物として取り扱う。

135-1 ～ 4 は国産陶器である。135-1 は京信系陶器の小杉碗である。内外面に透明釉を施し、高台は露胎。18 世紀後半。135-2 は京信系陶器の碗である。胴部外面に呉須絵で注連縄文を描き、透明釉を施す。高台は露胎。18 世紀後半。135-3 は須佐 (山口) の擂鉢である。高台は欠損しているが、胴部から口縁部にかけて逆ハの字状に開き、スリ目上端は口縁部脇まで施される。18 世紀中頃～後半のもので、佐伯氏分類 I 群 D 類に該当する。135-4 は在地系陶器 (石見) の擂鉢である。高台は欠損しているが、口縁端部を折り返して玉縁状におさめる。内外面に赤茶色の来待釉を施す。18 世紀後半～ 19 世紀前半。



第 135 図　第 2 遺構面遺構外出土遺物

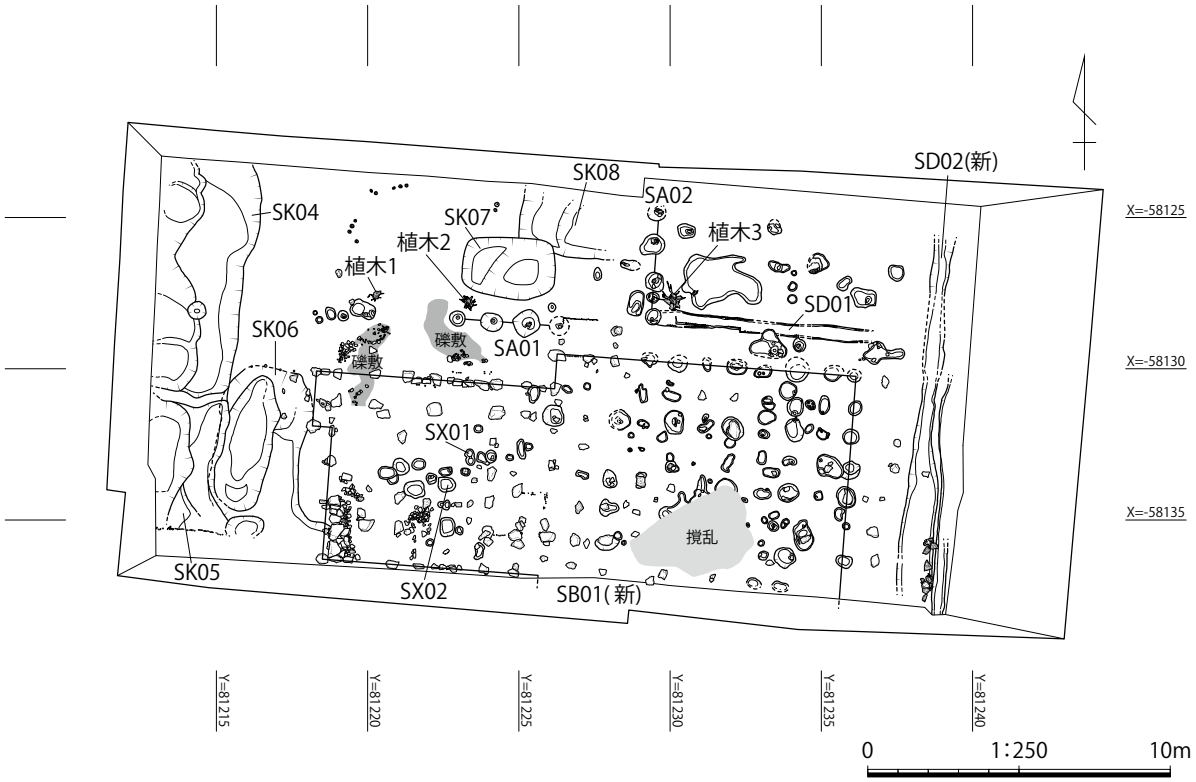
（3）第 3-1 遺構面

ｉ）第 3-1 遺構面の概要 (第 136 図)

第３遺構面は、火災が契機と考えられる建物部分だけの造成と礎石建物の建て替えが行われており、同一遺構面の中で新旧が存在する。そのため、第３遺構面では礎石建物の新段階と古段階の二つの遺構面として区分を行い、造成を施して礎石建物の建て替えが行われた後の新段階を「第 3-1 遺構面」、それ以前の礎石建物の建て替えを行う前の古段階を「第 3-2 遺構面」としている。ここでは第３遺構面のうち、上層で検出した第 3-1 遺構面の詳細を報告する。

第 3-1 遺構面は、標高 1.00 ｍで検出した遺構面である。遺構は、礎石建物跡 SB01(新)、曲物埋納遺構 SX01・02、溝 SD01・02(新)、柵 SA01・02、土坑 SK04 ～ 08 を検出した。SB01 と SD02 については遺構の新旧があり、第 3-1 遺構面では新段階の状況を図示したものである。第 3-1 遺構面における SB01(新) は建て替えが行われた後のもので、建物礎石を西側へ拡張している状況を確認した。また、SD02(新) は屋敷境溝と考えられる素掘り溝で、第 3-1 遺構面では一部で石組を検出している。後述する第 3-2 遺構面から第 3-1 遺構面のまで間に、素掘り溝から石組への変化があるものの、屋敷境の位置は変わらずにそのまま踏襲されているものと捉えている。

第 3-1 遺構面の基盤となる MJ3a 層は、礎石建物の建て替え後の整地層で、浅黄色～橙褐色粘質土の山土を主体とする嵩上げ造成による整地層である (第 124 図第 6 ～ 13 層)。層厚は 10㎝を測り、最上位の整地層を露呈した面で遺構を検出したことから、これを第 3-1 遺構面とした。遺構面の時期は、出土遺物の年代から 17 世紀後半～ 18 世紀中頃を想定している。また、MJ3a 層の整地層中や礎石建物周辺で検出した土坑埋土には、火災による炭化層の堆積が見られる。



第 136 図　第 3-1 遺構面平面図

ii）第 3-1 遺構面の遺構と遺物

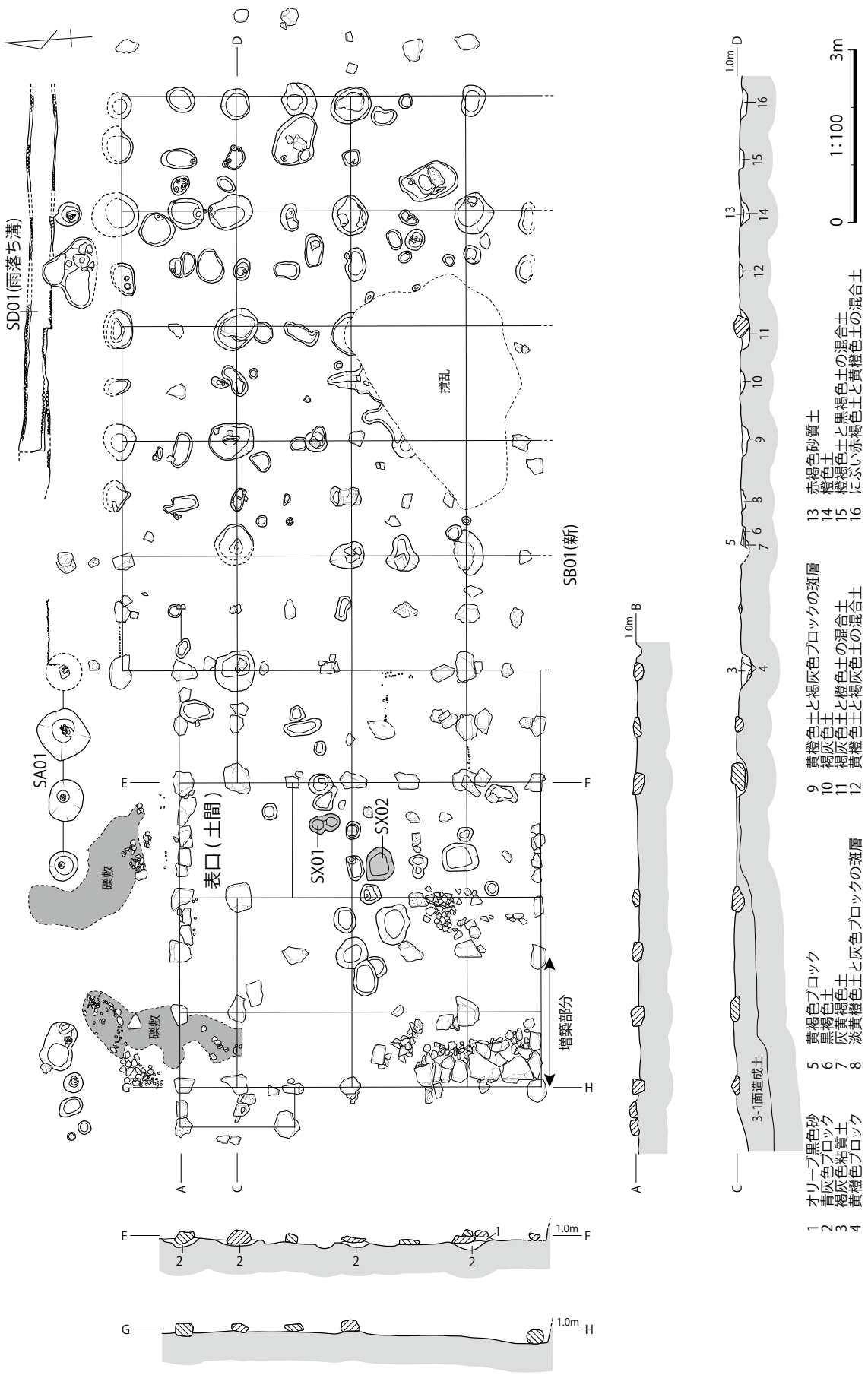
礎石建物跡 SB01(新)(第 137 図)

調査区の中央部で検出した建て替え後の礎石建物跡である。この礎石建物跡は、松平期の大橋家の直臣が住まう与力屋敷に比定される。この時期の松江城下町絵図[29]から、屋敷地の表口の向きは城山北公園線に面した北側であることが想定される。SB01(新) は、後述する第 3-2 遺構面の段階に構築された SB01(古) の礎石を利用しながら建て替えを行っている。また、建物範囲周辺の屋敷地の造成は、SB01(古) の西側および北側に山土を使用して大規模な嵩上げ造成を施している。SB01(新) が位置する建物範囲内では厚さ約 5㎝の盛土が見られ、嵩上げ造成の際に礎石の高さが足りない部分には新たに礎石を置き直している状況を確認した。建物範囲内の造成土は有機物を含む黒灰色粘質土であるのに対し、建物範囲外では浅黄色～橙褐色粘質土の山土が検出されていることから、建物範囲内は火災処理の後に施された盛土と捉えることができる。

SB01(新) の検出面は標高 0.95 ～ 1.00 mで、平面形は東西方向の長方形を呈する。建物の主軸方位は N － 4°－ E で、規模は東西桁行 9 間で全長 18.00 m、南北梁行 3 間以上で全長 6.00 m以上を測る。柱間寸法は現地測量での 1 間＝ 2.00 m (6 尺 6 寸) を基準としている。第 3-2 遺構面で検出した SB01(古) の規模は東西桁行 7 間半で全長 15.00 mを測るが、その後の建て替えによる増築部分は西側へ 1 間半 (3.00 m) 程度拡張して、最終的に SB01(新) の段階では東西桁行 9 間 (18.00 m) の建物となる。礎石は長軸 30 ～ 50㎝、厚さ 15 ～ 25㎝の大海崎石・島石・川原石を混在して用い、半間刻みに置かれる。礎石と礎石の間に置かれた石は長軸 15 ～ 20㎝程度のやや小ぶりな石で、束石の可能性が考えられる。SB01(新) の西半では礎石の遺存状態が良好であったが、東半では礎石が抜き取られた後の掘り方のみを数多く検出している。礎石はいずれも根石を伴わない単独のものである。礎石の天端検出標高は 1.00 ～ 1.10 mで、一部の礎石では上面が赤変しているものや黒みがかるものが見られることから、火災に遭っていたことを示すものと捉えている。

建物の空間配置は、北側から表口 (土間) と下屋 (廂)、上屋の配置を想定している。表口は、SB01(新) の西半の北側にあたる東西 1 間 (2.00 m) ×南北 1 間 (2.00 m) の範囲で、この部分には厚さ 10㎝の粘質土が堆積していた。粘質土は硬く締まり、現地調査では三和土（たたき）(敲き土) と指摘されている[30]。この三和土は土間の床に使われる土で、表口部分は土間空間であったことが想定される。また、表口の北辺 (第 137 図中 A-B 間) では差し渡し 30㎝の石を石列状に置いていることから、ここを入口としていた可能性が高いものと考えられる。表口の北側では 2 箇所の礫敷と五葉松の植栽痕 (植木 1・2) を検出しており、表口周辺のアプローチと捉えている。

居住空間は、東西 8 間 (16.00 m) ×南北 3 間以上 (6.00 m以上) の上屋の範囲で、一部では竹木舞の痕跡を検出していることから、木舞壁で仕切られた空間が配置されていたものと想定している。SB01(新) の東半の北側には半間 (1.00 m) の張り出し部分があり、下屋あるいは廂が配置されていた可能性が考えられる。表口 (土間) の南側に位置する居住空間の床下と考えられる場所からは、曲物埋納遺構 SX01・02 が見つかっており、これらは建物の建て替えの際に行われた「地鎮め」に関わる遺構と捉えている。

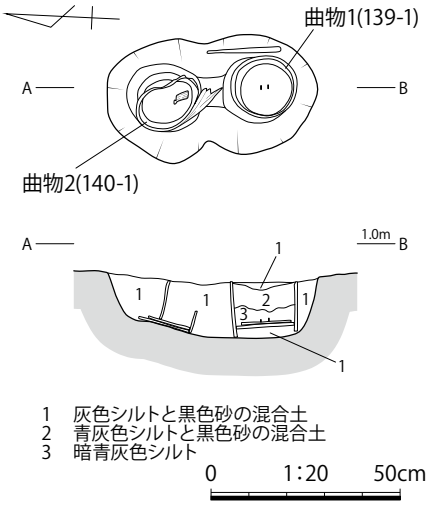


第 137 図　SB01(新) 平面図・断面図

曲物埋納遺構 SX01(第 138 図)

調査区の中央部からやや西側で検出した曲物埋納遺構である。検出面は標高 0.92 mで、平面形は 2 つの円形が重なった長楕円形を呈する。規模は上縁長軸が 0.56 m、短軸が 0.32 m、深さ 0.30 mを測る土坑である。

土坑埋土は灰色シルトと黒色砂の混合土 (第 1 層) の単層で、掘り方底面には、曲物が南北方向に 2 個並べて置かれた状態で出土した (曲物 1・2)。曲物は蓋付のもので、検出時には上層の土圧により底板と密着した状態で出土した。曲物内部の内容物は残っていないが、底板に鉄釘片と有機物が付着していた。



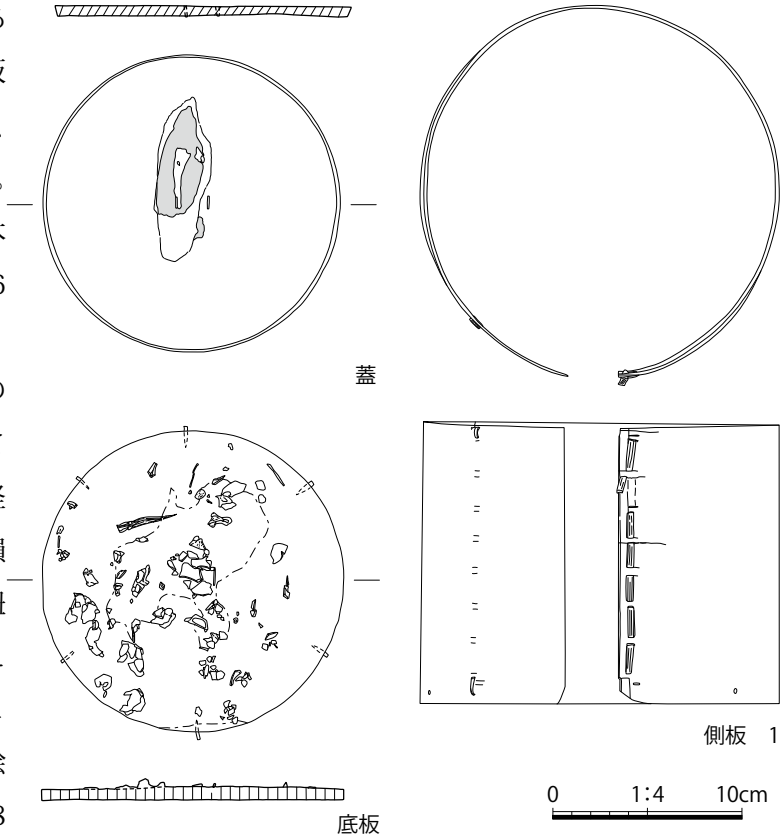
第 138 図　SX01 平面図・断面図

検出した SX01 の位置は、SB01(新) の表口 (土間) の南側にあたる、居住空間の床下と想定される場所である。SB01(新) は火災に遭った後に建て替えられた礎石建物と考えられることから、現時点では SX01 は建物の建て替えの際に行われた地鎮儀礼に関わる遺構と捉えており、曲物は地鎮めに伴う祈祷具と考えている。(31)

SX01 出土遺物 (第 139・140 図)

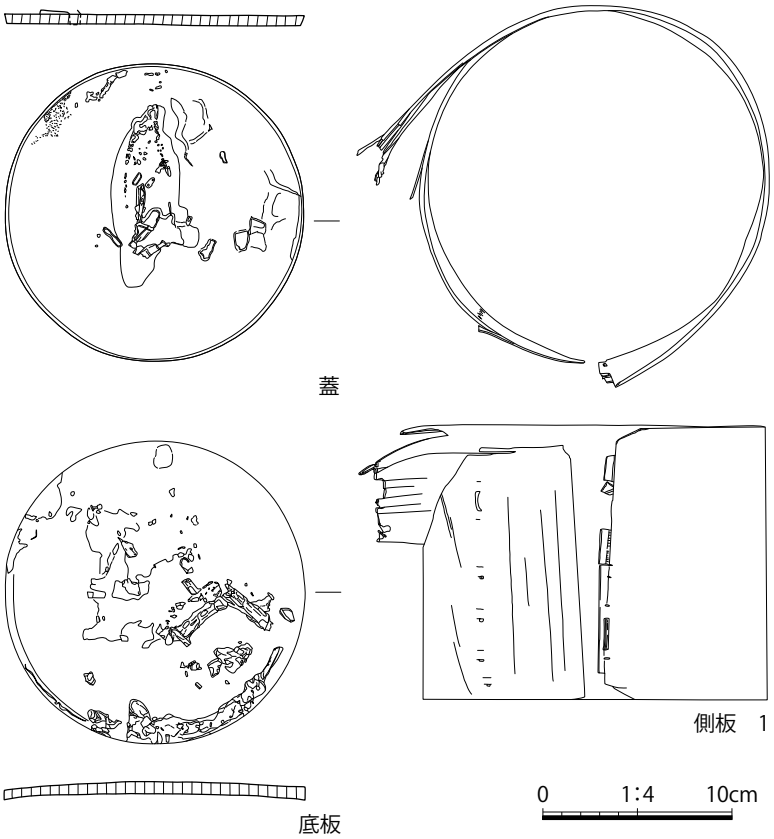
SX01 から出土した曲物容器である。139-1 は側板を一重で綴じたものである。側板は直径 19.0 ㎝、高さ 14.9㎝、厚さ 0.2㎝を測り、復元径は 16.3㎝である。側板は幅 0.4㎝の樹皮紐で 8 段綴じる。外面に墨書や塗料は見られない。蓋は直径 15.9㎝、厚さ 0.6㎝を測る。蓋の中央のつまみ部分には 2 箇所の樹皮紐を通すための穿孔があり、内側に鉄釘片が付着する。底板は直径 15.9㎝、厚さ 0.6㎝を測り、内側に鉄釘片と有機物が付着する。底板には直径 0.2㎝、長さ 1.2㎝木釘が残っており、側板と底板を 6 箇所の木釘で接合するものである。

140-1 は側板を一重で綴じたものである。側板は直径 18.0㎝、高さ 14.5㎝、厚さ 0.2㎝を測り、復元径は 16.3㎝である。側板は一部欠損しているが、幅 0.2㎝の細い樹皮紐で 5 段以上綴じていたものと考えられる。赤外線写真を撮影したところ、外面の全周に鳥と果樹の墨書絵画が描かれていた。蓋は直径 15.8 ㎝、厚さ 0.6㎝を測る。蓋のつまみ



第 139 図　SX01 出土遺物 (曲物 1)

部分は中央から片側に寄り、２箇所の穿孔に幅 0.5㎝の桜の樹皮紐が通される。底板は直径 15.8㎝、厚さ 0.6㎝を測り、内側に３本の鉄釘と有機物が付着する。



第 140 図　SX01 出土遺物 (曲物 2)

曲物埋納遺構 SX02(第 141 図)

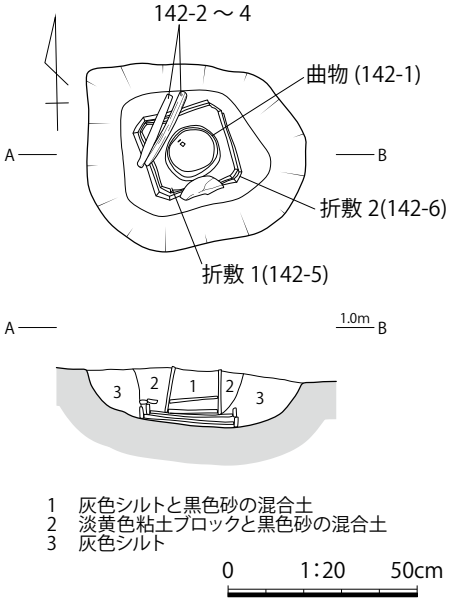
調査区の中央部からやや西側で検出した曲物埋納遺構である。前述した SX01 から南西に 1.00 m 離れた場所に位置する。検出面は標高 0.90 mで、平面形は楕円形を呈する。規模は上縁長軸が 0.58 m、短軸が 0.46 m、深さ 0.30 mを測る土坑である。掘り方底面には、折敷が上下に２枚重ねられ、その上に曲物と３本の箸状竹製品が置かれた状態で出土した。SX02 の性格は、SX01 と一連のものと考えられ、建物の建て替えの際に行われた地鎮儀礼に関わる遺構と捉えており、出土遺物は地鎮めに伴う祈祷具と考えている。

SX02 出土遺物 (第 142 図)

SX02 から出土した曲物容器・箸状竹製品・折敷である。142-1 は曲物容器で、側板を一重で綴じたものである。側板は直径 14.5㎝、高さ 11.2㎝、厚さ 0.2㎝を測り、幅 0.4㎝の樹皮紐で 10 段綴じる。蓋は直径 14.1㎝、厚さ 0.6㎝を測る。底板は直径 14.1㎝、厚さ 0.6㎝を測り、曲物内部の内容物は残っていないが内側に有機物が付着する。底板には直径 0.2㎝、長さ 1.0㎝木釘が残っており、側板と底板を５箇所の木釘で接合する。

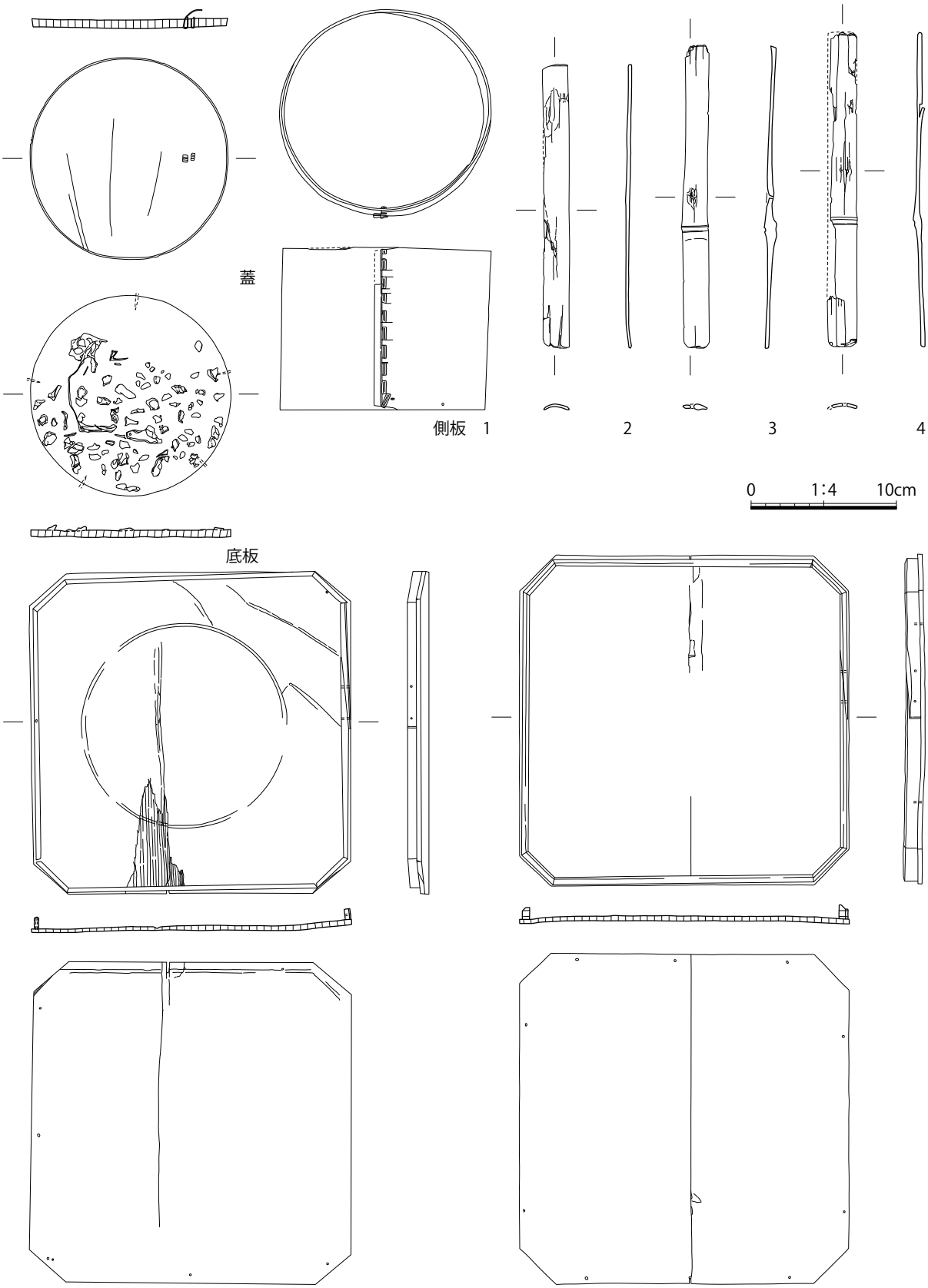
142-2 ～ 4 は箸状竹製品である。長さ 19.6 ～ 21.7㎝、幅 2.0㎝、厚さ 0.3㎝の割竹で、竹の片側端部に面取り加工を施す。用途は不明だが、折敷とセットで出土していることから、箸に見立てて埋納していた可能性が考えられる。

142-5・6 は隅切折敷で、上下に２枚重なった状態で出土した。142-5 は上側の折敷で、底板の内側に曲物容器の接地痕が残る。底板は直径 22.3㎝、厚さ 0.3㎝、側板の一辺は長さ 17.5㎝、幅 0.8㎝、厚さ 0.3㎝を測る。側板は底板の周縁に合わせ、木釘で接合している。142-6 は下側の折敷である。



第 141 図　SX02 平面図・断面図

底板は直径 22.8㎝、厚さ 0.3㎝、側板の一辺は直径 17.6㎝、幅 0.8㎝、厚さ 0.3㎝を測る。側板は底板の周縁に合わせ、木釘で接合している。142-5・6 は、ほぼ同一サイズの隅切折敷である。

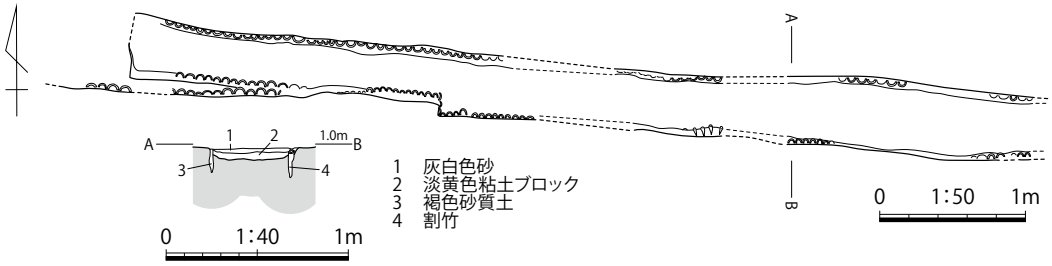


第 142 図　SX02 出土遺物 (曲物・折敷)

溝 SD01(第 143 図)

調査区の東側で検出した東西溝である。規模は長さ 6.70 m、幅 0.40 m、深さ 0.10 mを測る。溝の上端は標高 0.98 m、主軸方位はＥ－ 4°－ Ｓである。溝底部は標高 0.85 ～ 0.90 mで、排水方向は西から東へ向かう。溝の両端には長さ 16 ～ 20㎝、幅 5 ～ 8㎝の割竹が波板状に打ち込まれており、溝への土砂の流入を防ぐために構築された土留めとして機能していたことが考えられる。

SB01(新)の東半の北側に位置する張り出し部分では、下屋あるいは廂を想定しており、SD01 はこの張り出し部分から北側へ 1.50 m離れた場所に位置する東西方向の雨落ち溝と考えられる。



第 143 図　SD01 平面図・断面図

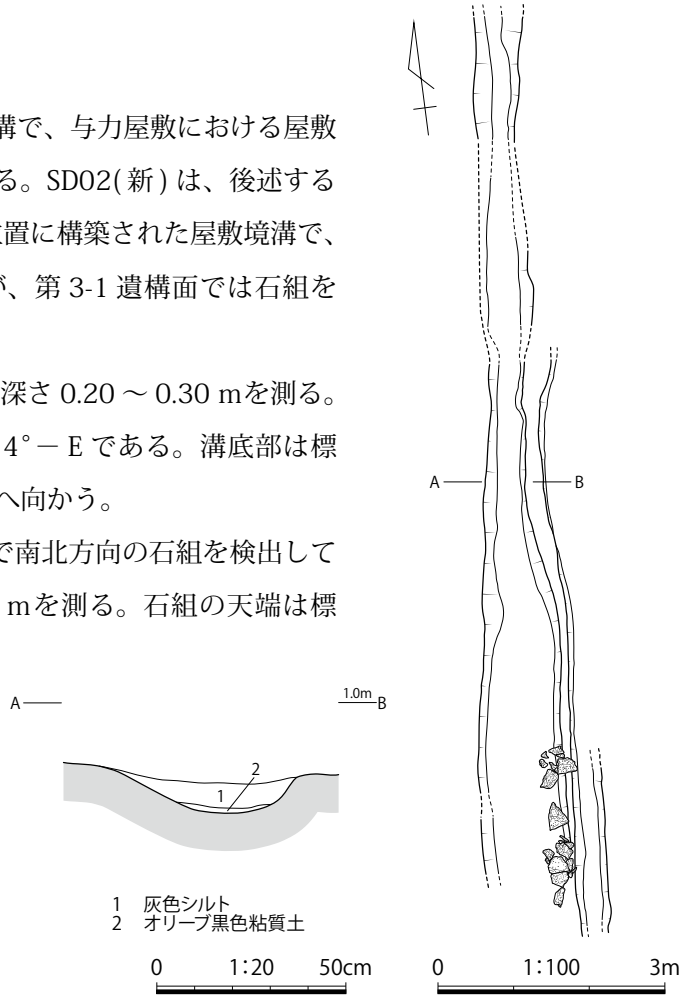
溝 SD02(新)(第 144 図)

調査区の東端で検出した石組を伴う南北溝で、与力屋敷における屋敷地と屋敷地の境界に位置する屋敷境溝である。SD02(新)は、後述する第3-2 遺構面で検出したSD02(古)と同じ位置に構築された屋敷境溝で、第 3-2 遺構面では素掘り溝であったものが、第 3-1 遺構面では石組を伴う素掘り溝に変化している状況が窺える。

規模は長さ 12.20 m、幅 0.50 ～ 1.20 m、深さ 0.20 ～ 0.30 mを測る。溝の上端は標高 0.85 m、主軸方位はＮ－ 4°－ Ｅである。溝底部は標高 0.75 ～ 0.90 mで、排水方向は南から北へ向かう。

SD02(新)の南側の一部では、溝肩東側で南北方向の石組を検出している。石組の規模は長さ 2.20 m、幅 0.40 mを測る。石組の天端は標高 0.90 mで、積み込みは 1 段である。石材には島石が使用され、長軸 30㎝前後の石材が据えられる。

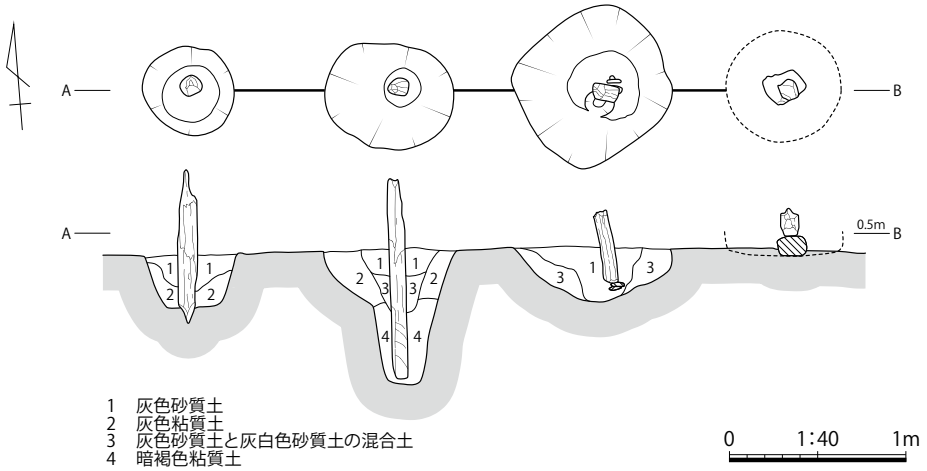
溝埋土は上層から灰色シルト(第 1 層)、オリーブ黒色粘質土(第 2 層)が堆積する。SD02(新)を掘り直した痕跡は見られず、SD02(古)の段階から機能していた溝を踏襲していたことが考えられる。



第 144 図　SD02(新)平面図・断面図

柵 SA01(第 145 図)

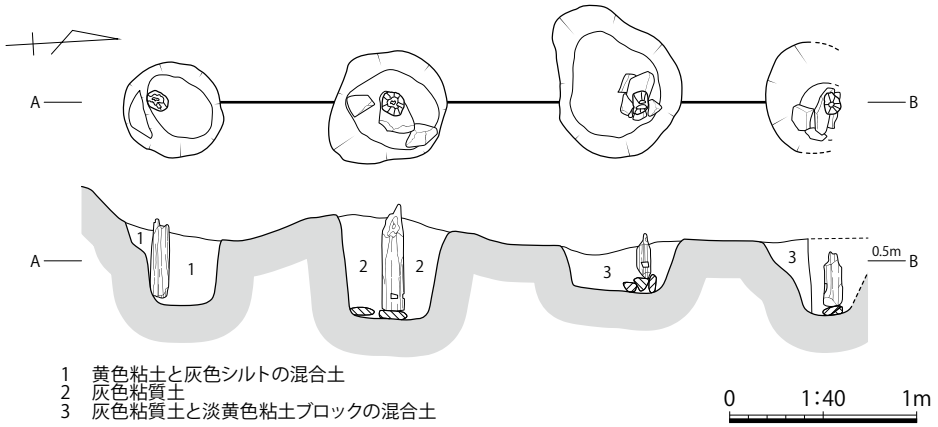
調査区の中央で検出した杭列である。杭列は掘り方を伴い、東西方向で 4.00 m間に直線的に並ぶ。検出面は標高0.40 mで、掘り方の平面形は円形を呈する。規模は直径0.50～0.90 m、深さ 0.30～0.80 mを測り、主軸方位は E － 4°－ S である。木杭を単独で打ち込むものと木杭の底部に根石を伴うものを検出している。木杭は直径 8 ～ 12㎝、長さ 40 ～ 110㎝で、単独の木杭は先端を尖らせ、根石を伴う木杭は先端を平坦に加工している。木杭は掘り方の中心に位置し、埋土は木杭が倒れないように突き固められている。SA01 の検出位置は、SB01(新) の表口部分から北側へ 2.00 m離れた場所にあたり、SB01(新) に付属する柵などの遮蔽施設と考えられる。



第 145 図　SA01 平面図・断面図

柵 SA02(第 146 図)

調査区の中央で検出した杭列である。杭列は掘り方を伴い、南北方向で 3.80 m間に直線的に並ぶ。検出面は標高0.70 mで、掘り方の平面形は円形を呈する。規模は直径0.50～0.70 m、深さ 0.20～0.50 mを測り、主軸方位は N － 4°－ E である。SA02 では木杭の底部に根石を伴うものを検出し、木杭は直径 8 ～ 12㎝、長さ 25 ～ 55㎝で、先端を平坦に加工している。埋土は木杭が倒れないように突き固められている。SA02 は SA01 と一連の遺構と捉えられ、SB01(新) の北側に位置する植栽などを配置する空間と表口周辺のアプローチを区別するための遮蔽施設と考えられる。

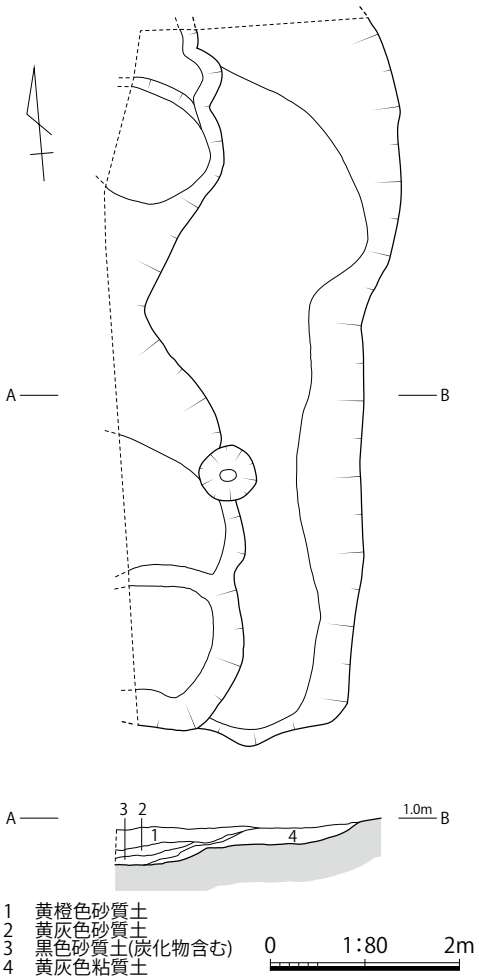


第 146 図　SA02 平面図・断面図

土坑 SK04(第 147 図)

調査区の北西端で検出した廃棄土坑である。検出面は標高 1.00 mで、平面形は長楕円形と考えられるが、北端と西端は調査区外まで延びる。規模は上縁長軸が 7.60 m、短軸が 2.60 m、深さ 0.40 mを測る。

土坑埋土は 4 層に分層でき、上層から黄橙色砂質土 (第 1 層)、黄灰色砂質土 (第 2 層)、黒色砂質土 (第 3 層)、黄灰色粘質土 (第 4 層) が堆積する。第 3 層の黒色砂質土には炭化物が混ざり、この土層から陶磁器・土師器皿・木製品・瓦が出土している。



第 147 図　SK04 平面図・断面図

SK04 出土遺物 (第 148・149 図)

ここでは SK04 の埋土から出土した遺物を掲載する。148-1 は中国磁器で、景徳鎮系の青花碗である。端反形の小碗で、胴部外面に草花文を描く。畳付は釉剥ぎで、高台内に「大明嘉靖年製」の銘をもつ。17 世紀前半のもので、森氏分類青花碗 B3 群に該当する。

148-2 ～ 6 は国産陶器である。148-2・3 は肥前系陶器の碗である。京焼風陶器の碗で、胴部外面に山水文を描く。高台は露胎で、148-2 は高台内に「山住原」の押印がある。いずれも九陶Ⅲ期 (1650 ～ 1690 年代)。148-4 は肥前系陶器の呉器手碗である。撥形に開く高台から上方に向けて緩やかに胴部が延び、畳付は無釉。九陶Ⅲ期 (1650 ～ 1690 年代)。148-5 は信楽の四耳壺である。胎土に長石粒を含み、外面に鉄釉を施す。18 世紀前半。148-6 は肥前系陶器の鉢である。内外面に灰釉を施し、胴部下方～高台は露胎。高台は抉り高台。九陶Ⅲ期 (1650 ～ 1690 年代)。

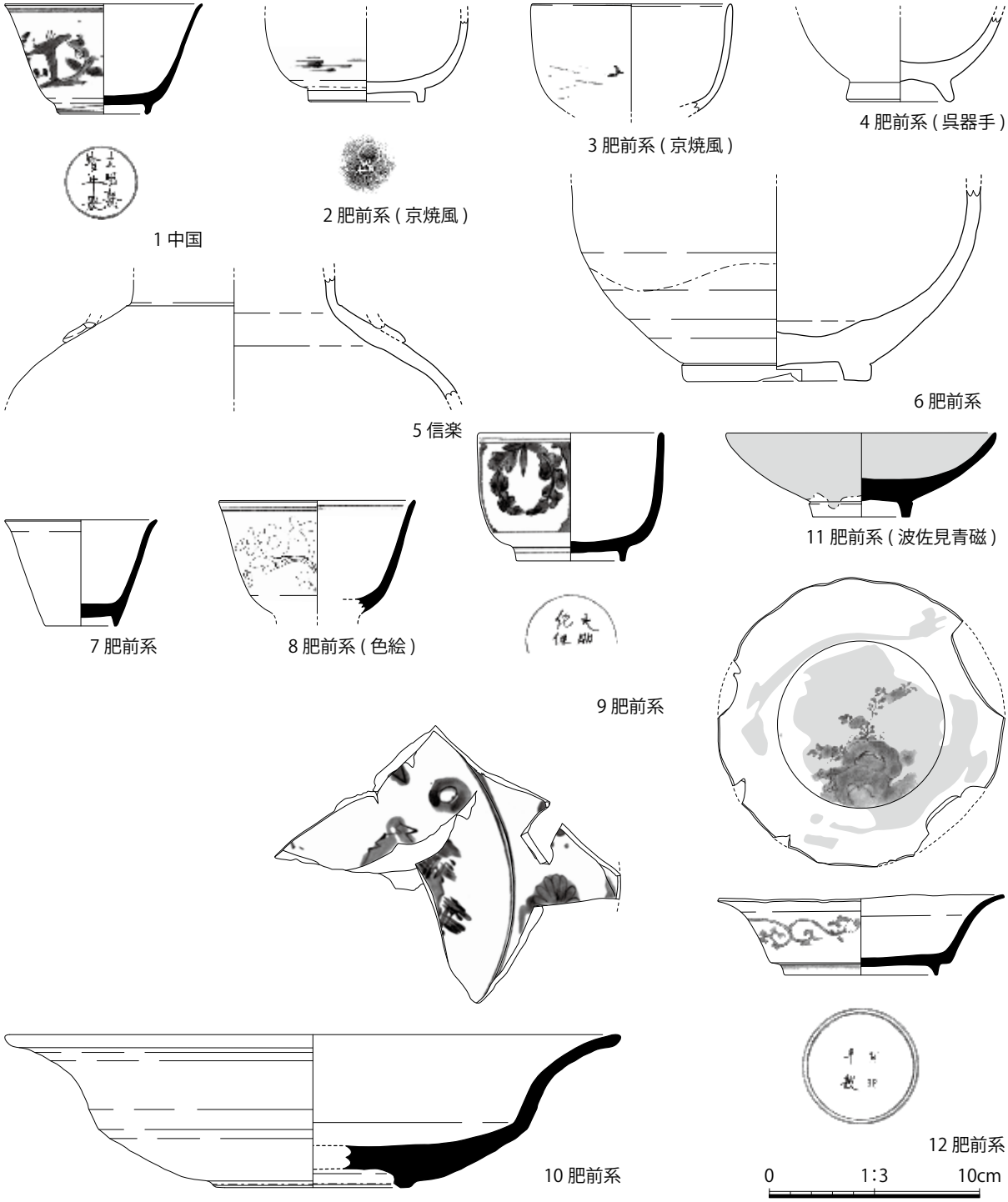
148-7 ～ 149-2 は国産磁器である。148-7 は肥前系磁器の端反形の小坏である。九陶Ⅲ期 (1660 ～ 1680 年代)。148-8 は肥前系磁器の色絵碗である。色絵は被熱により全体的に色飛びが見られるが、胴部外面に赤・緑・黒で草花文を描く。九陶Ⅱ～Ⅲ期 (1650 年代前後)。148-9 は肥前系磁器の筒丸碗である。胴部外面に窓絵で区画した藤花文を描く。高台内に「大明□化年□」の銘をもつ。九陶Ⅲ期 (1660 ～ 1680 年代)。148-10 は肥前系磁器の大皿である。口縁部を大きく外傾させ、内面に菊花重ね文、見込みに山水文を描く。畳付は無釉。九陶Ⅱ -2 期 (1630 ～ 1640 年代)。148-11 は肥前系磁器の皿である。波佐見の青磁皿で、高台は露胎。九陶Ⅳ期 (1650 ～ 1680 年代)。148-12 は肥前系磁器の皿である。体部外面に花唐草文、見込みに草花・岩文を描く。高台内に「宣明年製」の銘をもつ。内面に紅が付着することから、紅皿として使用されたものである。九陶Ⅲ期 (1670 ～ 1680 年代)。149-1 は肥前系磁器の蓋付鉢の蓋である。外面に型紙摺りで菊唐草文を描き、断面に漆継ぎの痕跡をもつ。九陶Ⅲ期 (1670 ～ 1700 年代)。149-2 は肥前系磁器の仏飯器である。坏部外面に葡

菊文を描く。底部は無釉。九陶Ⅲ期 (1650 ～ 1680 年代)。

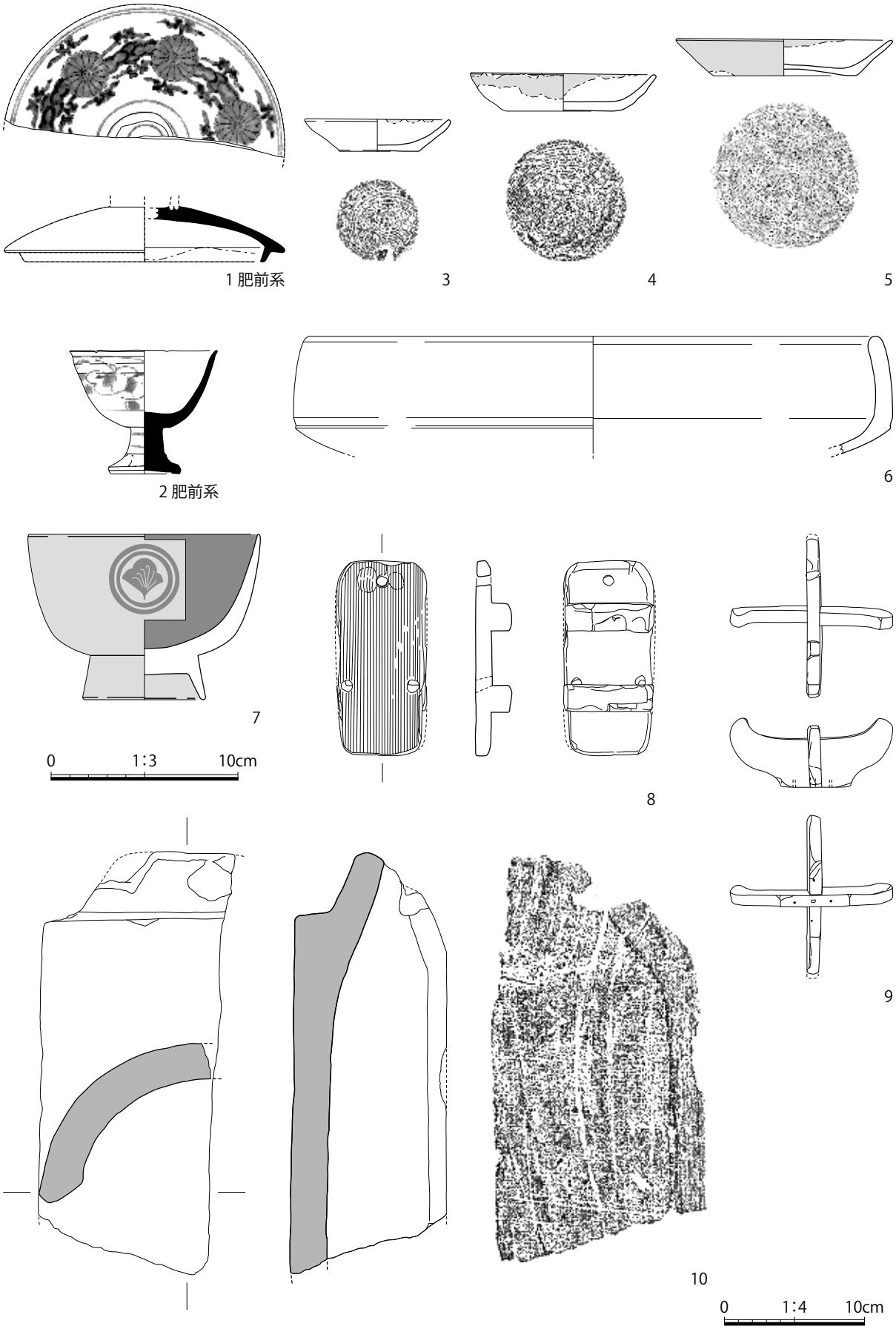
149-3 ～ 5 はロクロ成形の在地系土師器皿で、底部に糸切り痕をもつ。149-6 は土師器の焙烙である。外面を板状のもので成形した後、ナデ調整を施す。18 世紀前半のもので、難波氏分類 D 類に該当する。

149-7 ～ 9 は木製品である。149-7 は漆器椀である。塗色は外面が黒色、内面が赤色で、外面に銀杏文の漆絵を施す。149-8 は角型連歯下駄である。木取りは柾目、歯高は 1.4㎝を測る。前緒付近には足の指の痕跡が残り、子供用の下駄と考えられる。149-9 は灯明皿の器台である。

149-10 は玉縁式丸瓦である。凹面にコビキ B と布目痕を見せる。



第 148 図　SK04 出土遺物 (1)



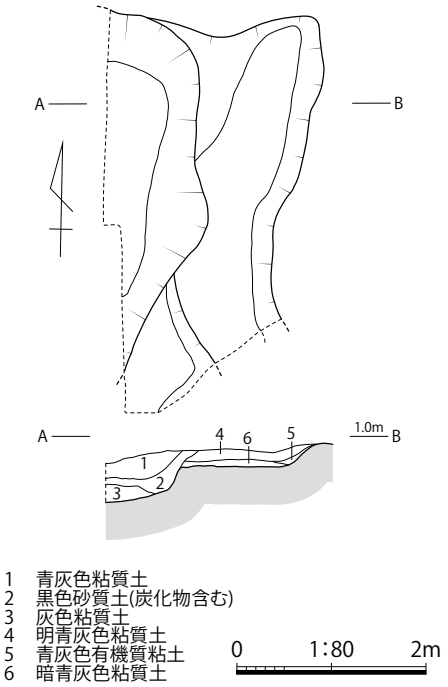
第 149 図　SK04 出土遺物 (2)

土坑 SK05(第 150 図)

調査区の南西端で検出した廃棄土坑である。検出面は標高 0.96 mで、平面形は長楕円形と考えられるが、南端と西端は調査区外まで延びる。規模は上縁長軸が 4.20 m、短軸が 2..00 m、深さ 0.48 mを測る。

土坑埋土は 6 層に分層でき、上層から青灰色粘質土 (第 1 層)、黒色砂質土 (第 2 層)、灰色粘質土 (第 3 層)、明青灰色粘質土 (第 4 層)、青灰色有機質粘土 (第 5 層)、暗青灰色粘質土 (第 6 層) が堆積する。第 2 層の黒色砂質土には炭化物が混ざり、この土層から陶磁器・土師器皿が出土している。

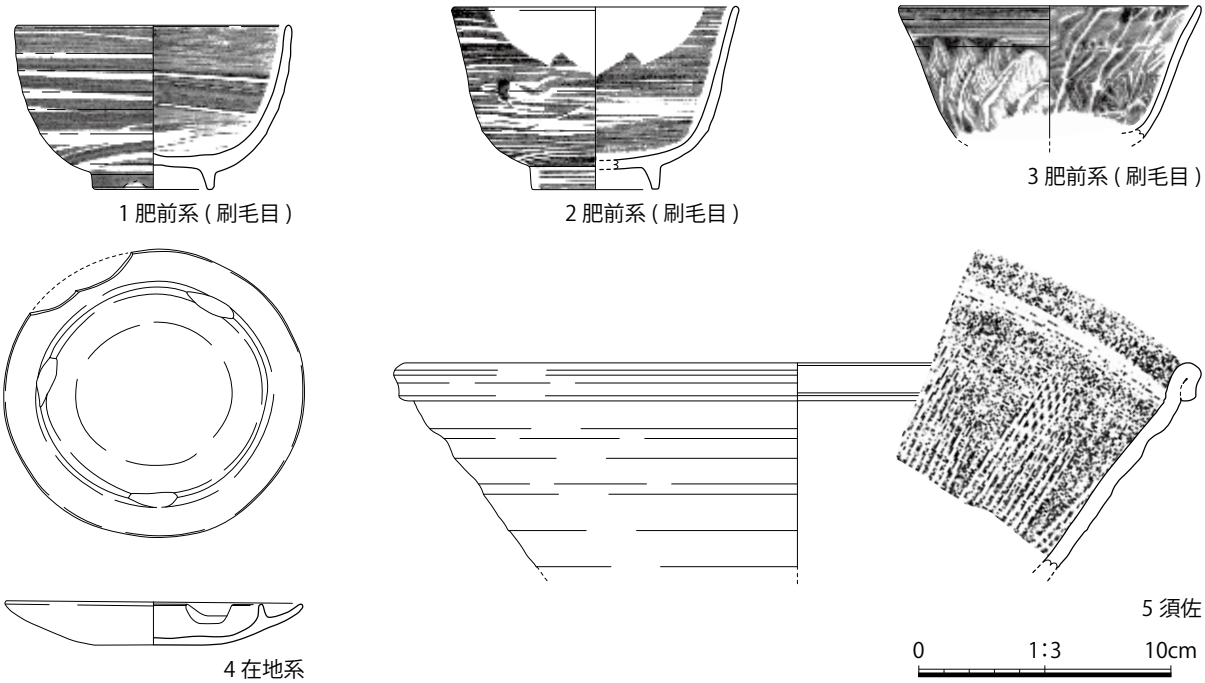
SK05 は前述した SK04 の南隣に位置する土坑で、埋土から出土した遺物の時期は 17 世紀後半～ 18 世紀中頃のものが主体となっている。SK04・05 は一連の遺構となる可能性があり、検出した位置関係から屋敷地内における南北方向に延びる屋敷境と切り合っている可能性も考えられる。



第 150 図　SK05 平面図・断面図

SK05 出土遺物 (第 151・152 図)

ここでは SK05 の埋土から出土した遺物を掲載する。151-1 ～ 5 は国産陶器である。151-1 ～ 3 は肥前系陶器の刷毛目碗である。151-1・2 は内外面に白化粧土を掛けて刷毛目塗りを施したもので、畳付は無釉。151-2 は胴部中央に窪みをもつ。いずれも九陶Ⅲ期 (1650 ～ 1690 年代)。151-3 は暗灰色の胎土の素地に白土で刷毛目文を描く。151-1・2 よりも後のもので九陶Ⅳ期 (1700 ～ 1750 年代)。151-4 は在地系陶器の灯明受皿である。内外面に銹釉を施し、受部に 3 箇所の抉りをもつ。18

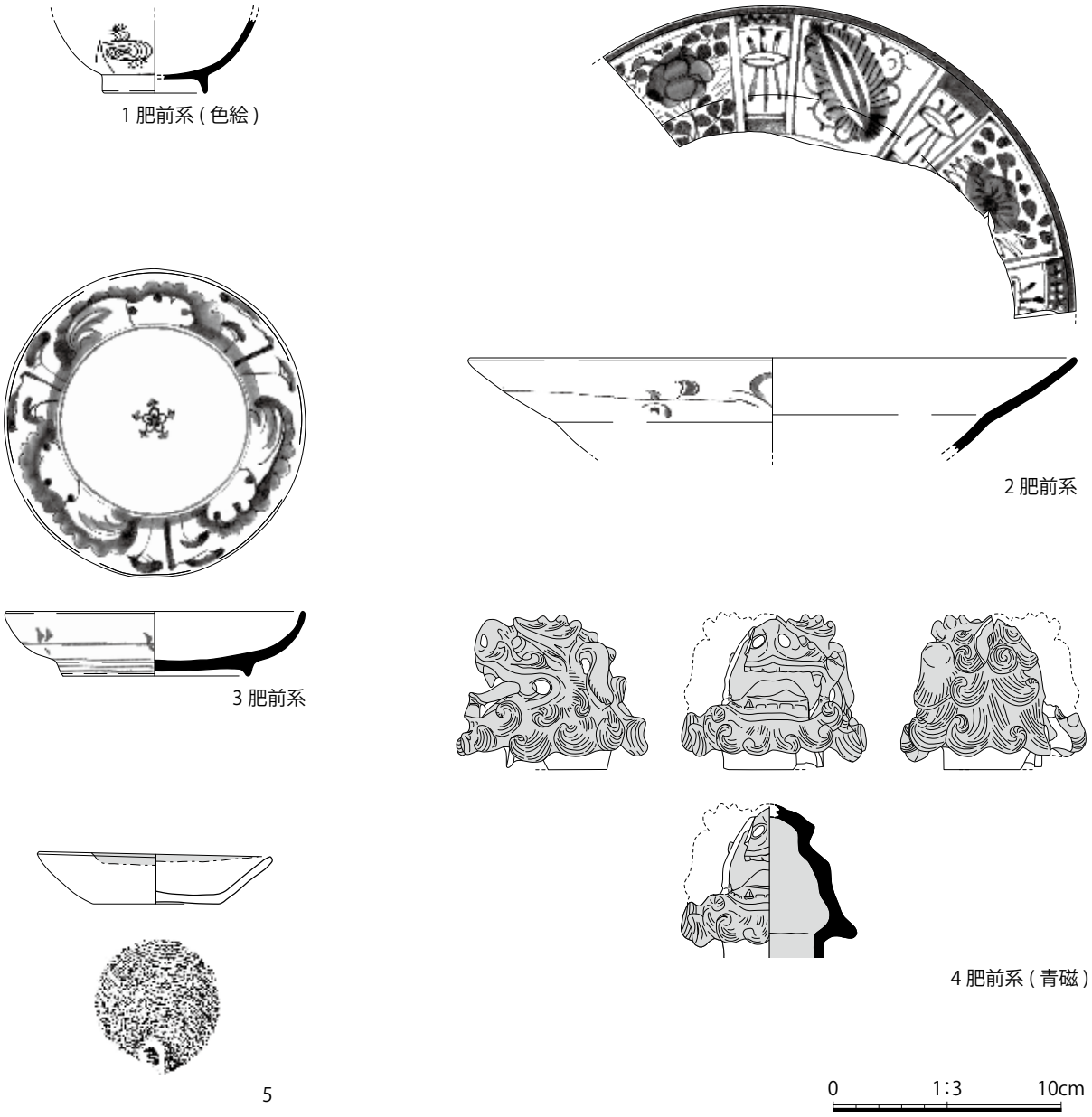


第 151 図　SK05 出土遺物 (1)

世紀前半か。151-5 は須佐 (山口) の擂鉢である。直線的に延びる胴部を上半で外反させ、口縁部をやや内傾気味に小さく折り返す。17 世紀末～ 18 世紀前半のもので、佐伯氏分類Ⅰ群Ｃ類に該当する。

152-1 ～ 4 は国産磁器である。152-1 は肥前系磁器の色絵碗である。色絵は被熱により全体的に色飛びが見られるが、胴部外面に渦文を描く。九陶Ⅱ～Ⅲ期 (1650 年代前後)。152-2 は肥前系磁器の大皿である。芙蓉手の皿で、窓絵に花卉宝文を描く。焼成不良のため、全体的に白みがかっている。断面に漆継ぎの痕跡をもつ。九陶Ⅲ期 (1660 ～ 1680 年代)。152-3 は肥前系磁器の皿である。外面に蔓草文、内面口縁部周辺に雪輪文を描き、見込みに五弁花の印判を施す。九陶Ⅲ～Ⅳ期 (1680 ～ 1700 年代)。152-4 は肥前系磁器の香炉の蓋である。獅子をモチーフとしたもので、内外面に青磁釉を施す。18 世紀前半のもので、鍋島焼の可能性が指摘されている。[32]

152-5 はロクロ成形の在地系土師器皿で、底部に糸切り痕をもつ灯明皿である。



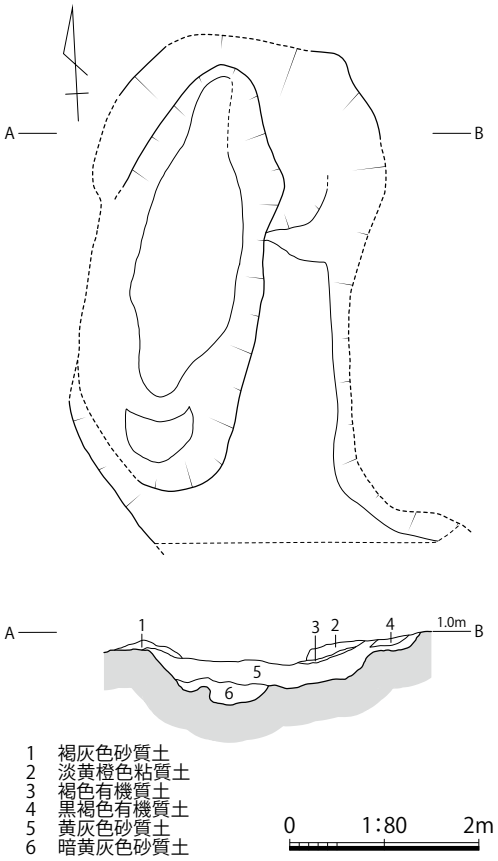
第 152 図　SK05 出土遺物 (2)

土坑 SK06(第 153 図)

調査区の西側で検出した廃棄土坑である。検出面は標高 0.96 mで、平面形は長楕円形と考えられるが、南端は調査区外まで延びる。規模は上縁長軸が 5.30 m、短軸が 2.80 m、深さ 0.60 mを測る。SK06 の西側肩部は、SK05 と一部切り合っている。

土坑埋土は6層に分層でき、上層から褐灰色砂質土(第 1 層)、淡黄橙色粘質土 (第 2 層)、褐色有機質土 (第 3 層)、黒褐色有機質土 (第 4 層)、黄灰色砂質土 (第 5 層)、暗黄灰色砂質土 (第 6 層) が堆積する。第 3・4 層はいずれも炭を含む有機質土で、火災による炭化層の堆積と考えられる。土坑埋土の下位に堆積する第 5・6 層から、陶磁器・土師器皿・木製品が出土している。

なお、SK06 の埋土から出土した遺物の時期は 17 世紀後半～ 18 世紀前半のものが主体となっている。出土した陶磁器の碗皿類には、外面の釉薬が熔解しているものや、色絵の色飛びが見られるものが含まれており、これらは火災によって被熱されたものと理解している。被熱の痕跡をもつ陶磁器の年代から、1710 ～ 1720 年代の間に火災が起こり、その後の火災処理のために SK06 に一括廃棄された資料の可能性が考えられる。



第 153 図　SK06 平面図・断面図

SK06 出土遺物 (第 154 ～ 157 図)

ここでは SK06 の埋土から出土した遺物を掲載する。154-1・2 は中国磁器である。154-1 は景徳鎮系の青花小坏である。端反形の小坏で、口縁部外面に鋸歯文、胴部外面に蓮弁文、見込みに捻牡丹文を描く。畳付は無釉で、高台内に「大明成化年製」の銘をもつ。1620 ～ 1640 年代のもので、森氏分類小坏 I 類に該当する。154-2 は景徳鎮系の青花碗である。胴部外面に花鳥文を描く。畳付は無釉で、高台内に「大明成化年製」の銘をもつ。1620 ～ 1640 年代のもので、森氏分類青花碗 G 群に該当する。

154-3 ～ 5 は国産陶器である。154-3 は肥前系陶器の呉器手碗である。撥形に開く高台から上方に向けて緩やかに胴部が延び、畳付は無釉。九陶Ⅲ期 (1650 ～ 1690 年代)。154-4 は肥前系陶器の刷毛目碗である。胴部外面に白化粧土を掛けて刷毛目塗りを施したもので、畳付は無釉。九陶Ⅳ期 (1700 ～ 1750 年代)。154-5 は須佐 (山口) の擂鉢である。やや内湾気味の胴部と口縁部直前で直立させて折り返す口縁をもつ。口縁部の折り返しは明瞭な窪みが見られる。17 世紀後半～ 18 世紀前半のもので、佐伯氏分類 I 群 A 類に該当する。

154-6 ～ 156-6 は国産磁器である。154-6 は肥前系磁器の端反形の小坏である。胴部外面に山水文を描く。九陶Ⅲ期 (1650 ～ 1680 年代)。154-7 は肥前系磁器の白磁の小坏である。小坏としているが、

紅猪口の可能性も考えられる。九陶Ⅲ期 (1650 ～ 1660 年代)。154-8 は肥前系磁器の端反形の小坏である。九陶Ⅲ期 (1650 ～ 1680 年代)。154-9 は肥前系磁器の端反形の小坏である。胴部外面に草花文を描く。九陶Ⅳ期 (1680 ～ 1740 年代)。

155-1 は肥前系磁器の碗である。初期伊万里の碗で、胴部内面に窓絵で花卉文、見込みに蝶文を描く。高台内に籾殻が付着し、畳付は無釉。全体的に光沢が無く、被熱されたものか。九陶Ⅱ -1 ～ 2 期 (1620 ～ 1640 年代)。155-2 は肥前系磁器の碗である。胴部外面に寿字文と藤花文を描く。高台内に砂粒が付着し、畳付は無釉。九陶Ⅲ期 (1650 ～ 1660 年代)。155-3 は肥前系磁器の大碗である。白磁の碗で内外面に貫入が入り、色絵素地の可能性がある。高台の断面は三角形で、畳付は無釉。一部に被熱された痕跡が見られる。九陶Ⅲ期 (1650 ～ 1690 年代)。155-4 は肥前系磁器の碗である。胴部外面に菊唐草文、見込みに二重丸に花文を描く。高台内に「大明成化年製」の銘をもつ。この碗は SK06 から 3 個体以上出土しており、いずれも外面の釉薬が熔解していることから、重ねて収納していたものが火災によって被熱されたものと理解している。九陶Ⅲ～Ⅳ期 (1680 ～ 1710 年代) のもので、1710 ～ 1720 年代の被災資料の可能性が考えられる。155-5 は肥前系磁器の端反形の猪口である。胴部外面に花唐草文、見込みに手描きで五弁花を描く。高台内に「大明成化年製」の銘をもつ。九陶Ⅲ～Ⅳ期 (1680 ～ 1710 年代)。155-6 は肥前系磁器の色絵碗である。胴部外面の高台脇に蓮弁文、見込みに環状の花文を描く。高台内に二重方形枠と「渦福」の銘をもつ。一部に被熱された痕跡が見られ、色絵素地の未完成品と考えられる。九陶Ⅳ期 (1690 ～ 1730 年代)。155-7 は肥前系磁器の陶胎染付碗である。胴部外面に草文を描く。九陶Ⅳ期 (1690 ～ 1750 年代)。155-8 は肥前系磁器の陶胎染付碗である。胴部外面に蔓草文を描き、畳付は無釉。九陶Ⅳ期 (1690 ～ 1750 年代)。155-9 は肥前系磁器の碗である。胴部外面に草花文を描く。高台内に二重方形枠と「渦福」の銘をもつ。九陶Ⅳ期 (1710 ～ 1740 年代)。155-10 は肥前系磁器の碗である。胴部外面に二重網目文、内面に網目文、見込みに菊花文を描く。九陶Ⅳ期 (1710 ～ 1750 年代)。155-11・12 は肥前系磁器の蓋付碗のセットである。蓋と碗の外面に菊花文と氷裂文を描く。小広東碗の時期と並行する九陶Ⅳ期 (1770 ～ 1780 年代)。

155-13 は肥前系磁器の皿である。体部内面に草花文の陽刻を施し、見込みに唐草文を描く。全体的に被熱された痕跡が見られる。九陶Ⅲ期 (1650 ～ 1670 年代)。155-14 は肥前系磁器の皿である。体部内面に如意頭の唐草文、外面に蔓草文を描く。口縁端部に口銹を施し、ハリ支えによる焼成である。九陶Ⅲ～Ⅳ期 (1670 ～ 1700 年代)。155-15 は肥前系磁器の変形皿である。糸切り細工で山形に成形する。体部外面に花唐草文、内面に風景文を描く。九陶Ⅲ～Ⅳ期 (1670 ～ 1700 年代)。156-1 は肥前系磁器の色絵皿である。色絵は被熱により一部に色飛びが見られるが、体部外面に赤で宝文、内面に赤と緑で牡丹唐草文、高台脇と高台内に二重圏線を描く。九陶Ⅳ期 (1690 ～ 1730 年代)。156-2 は肥前系磁器の大皿である。青磁皿で、口縁部を平坦に折り曲げ、高台はフラットである。口縁部周辺の内面に櫛描文と雷文の陰刻、見込みに草花文の陰刻を施す。高台内は蛇ノ目釉剥ぎをして鉄銹を塗布している。九陶Ⅲ期 (1650 ～ 1660 年代)。156-3 は肥前系磁器の皿である。波佐見の青磁皿で、見込みに蛇ノ目釉剥ぎを施す。高台は露胎。九陶Ⅳ期 (1650 ～ 1680 年代)。156-4 は肥

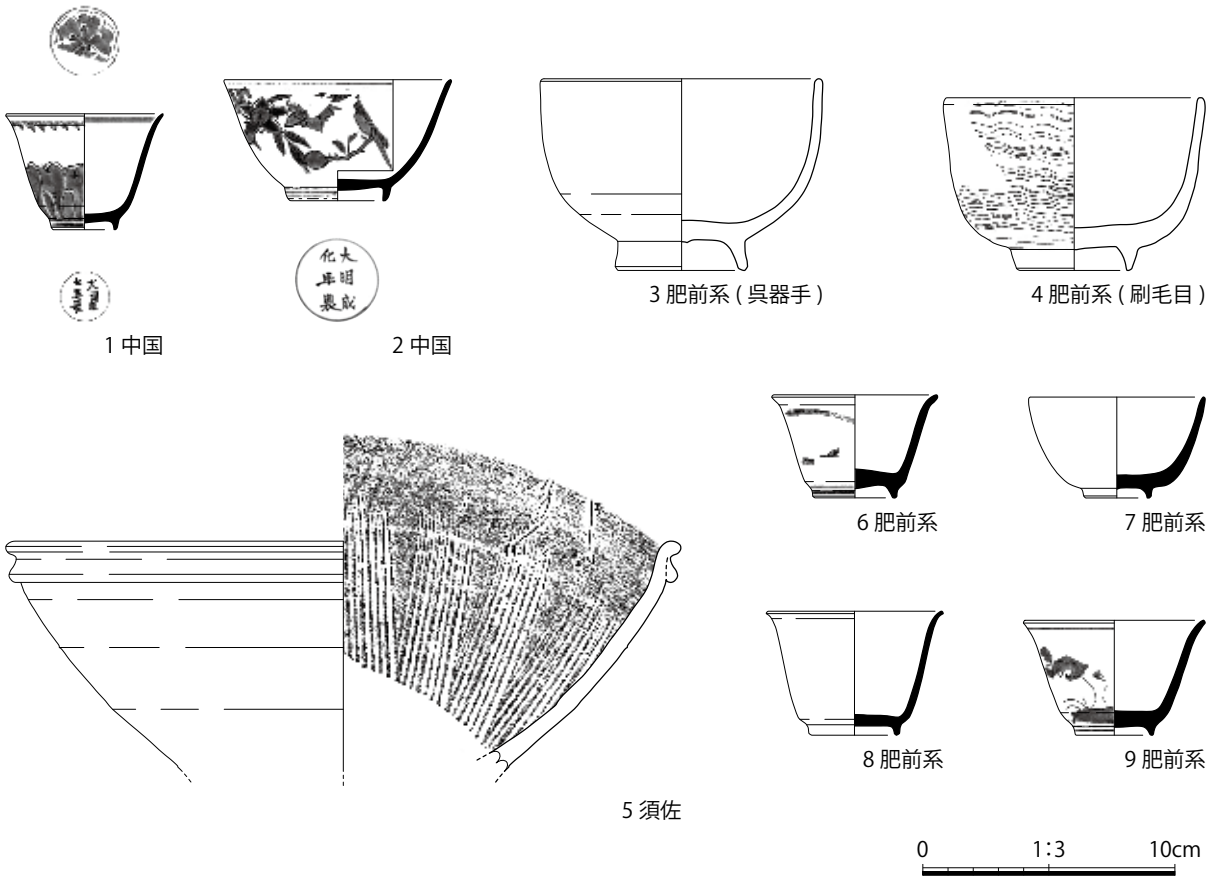
前系磁器の大皿である。青磁皿で、内面に雲文の陰刻を施す。高台内は蛇ノ目釉剥ぎをして鉄銹を塗布している。九陶Ⅲ期 (1650 ～ 1660 年代)。156-5 は肥前系磁器の瓶である。外面に青磁釉を施し、内面は無釉。九陶Ⅱ -2 期 (1630 ～ 1650 年代)。156-6 は肥前系磁器の色絵人形である。頭部のみ残存し、髪を黒と緑、唇を赤で塗色している。全体的に被熱された痕跡が見られる。九陶Ⅳ期 (1690 ～ 1750 年代)。

156-7・8 はロクロ成形の在地系土師器皿で、底部に糸切り痕をもつ灯明皿である。

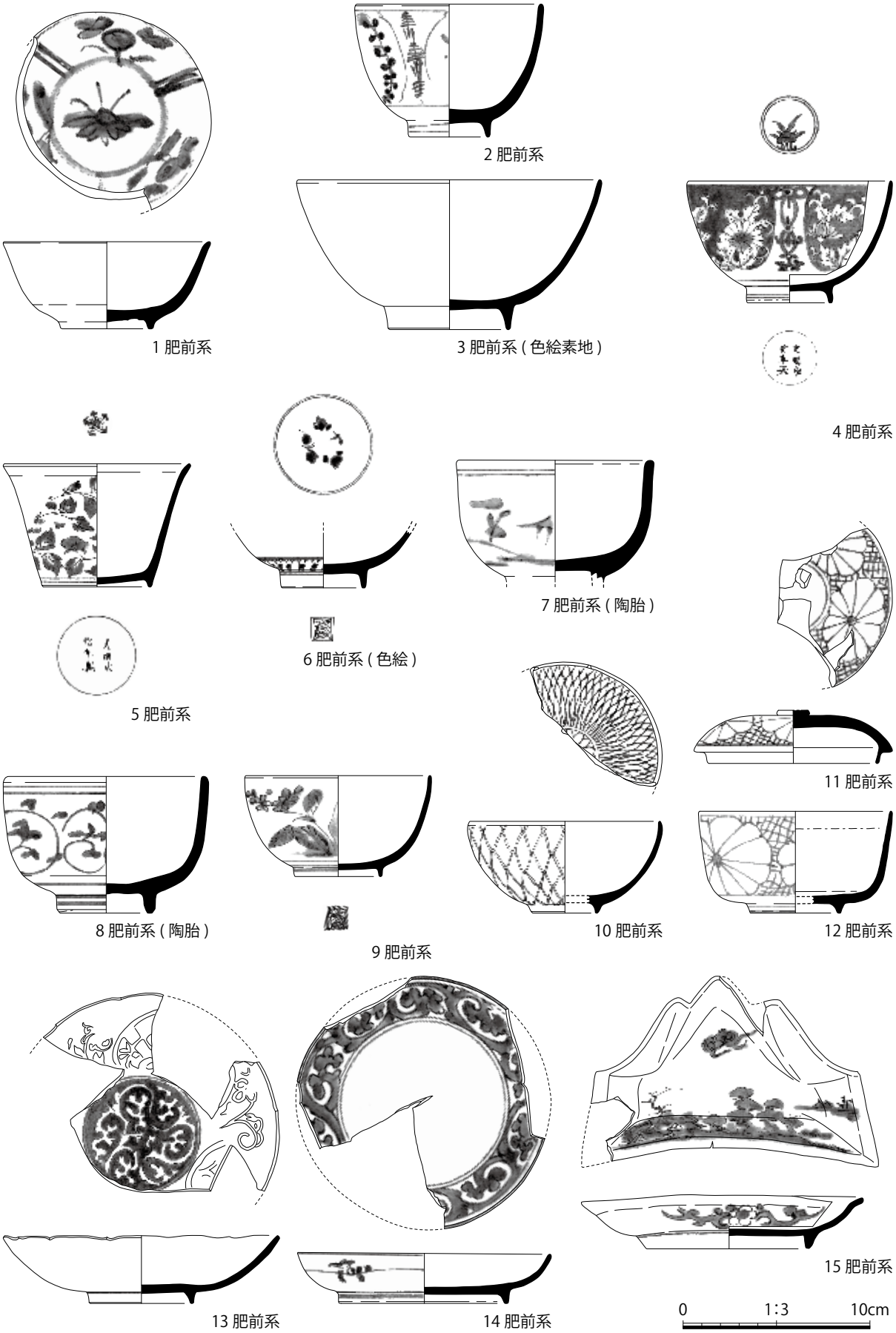
156-9 は瓦質土器の風炉である。ロクロ成形で外面にミガキ調整を施す。

156-10・11 は土師器の焙烙である。156-10 は内外面に回転ナデの調整痕をもつ。18 世紀初頭のもので、難波氏分類 D 類に該当する。156-11 は口縁端部にやや張り出した把手を貼り付け、耳の中央を縦方向に穿孔する。18 世紀前半のもので、難波氏分類 E 類に該当する。

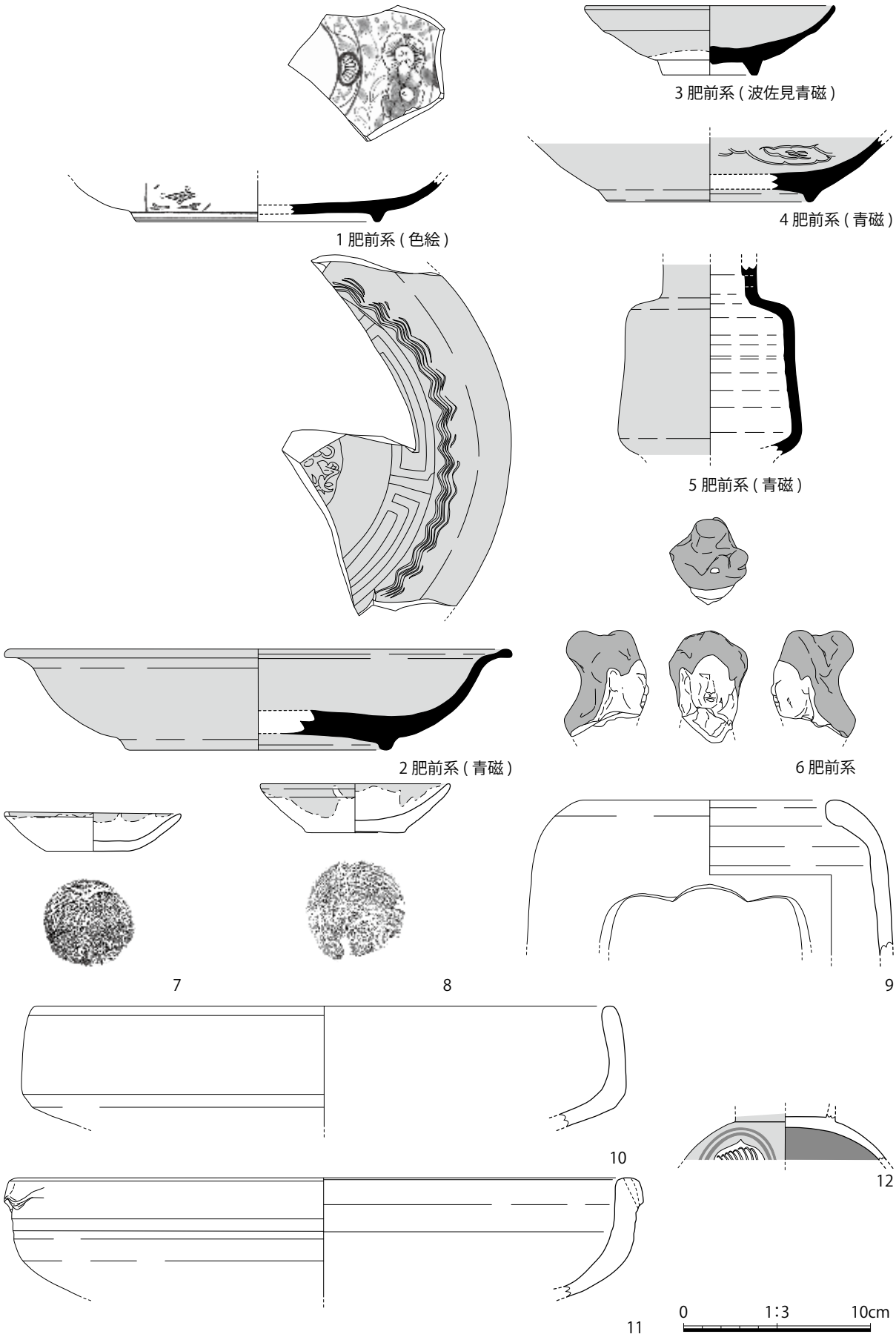
156-12 ～ 157-10 は木製品である。156-12 は漆器椀の蓋である。塗色は外面が黒色､内面が赤色で、外面に二重丸に宝珠の漆絵を施す。157-1 は曲物容器の底板である。底板の縁に段をもつようにケズリ加工が施されている。157-2 は曲物容器の蓋である。欠損しているが、上部に把手が付くもので、外面には黒漆が塗られている。157-3 ～ 6 は白木の箸で、長さ 24 ～ 26㎝を測る。157-7 ～ 10 は丸型差込下駄である。157-7・9 は歯部が欠損している。木取りは柾目、歯高は 8.3 ～ 8.8㎝を測る。前緒付近には足の指の痕跡が残る。157-9・10 には外面に黒漆が塗られている。



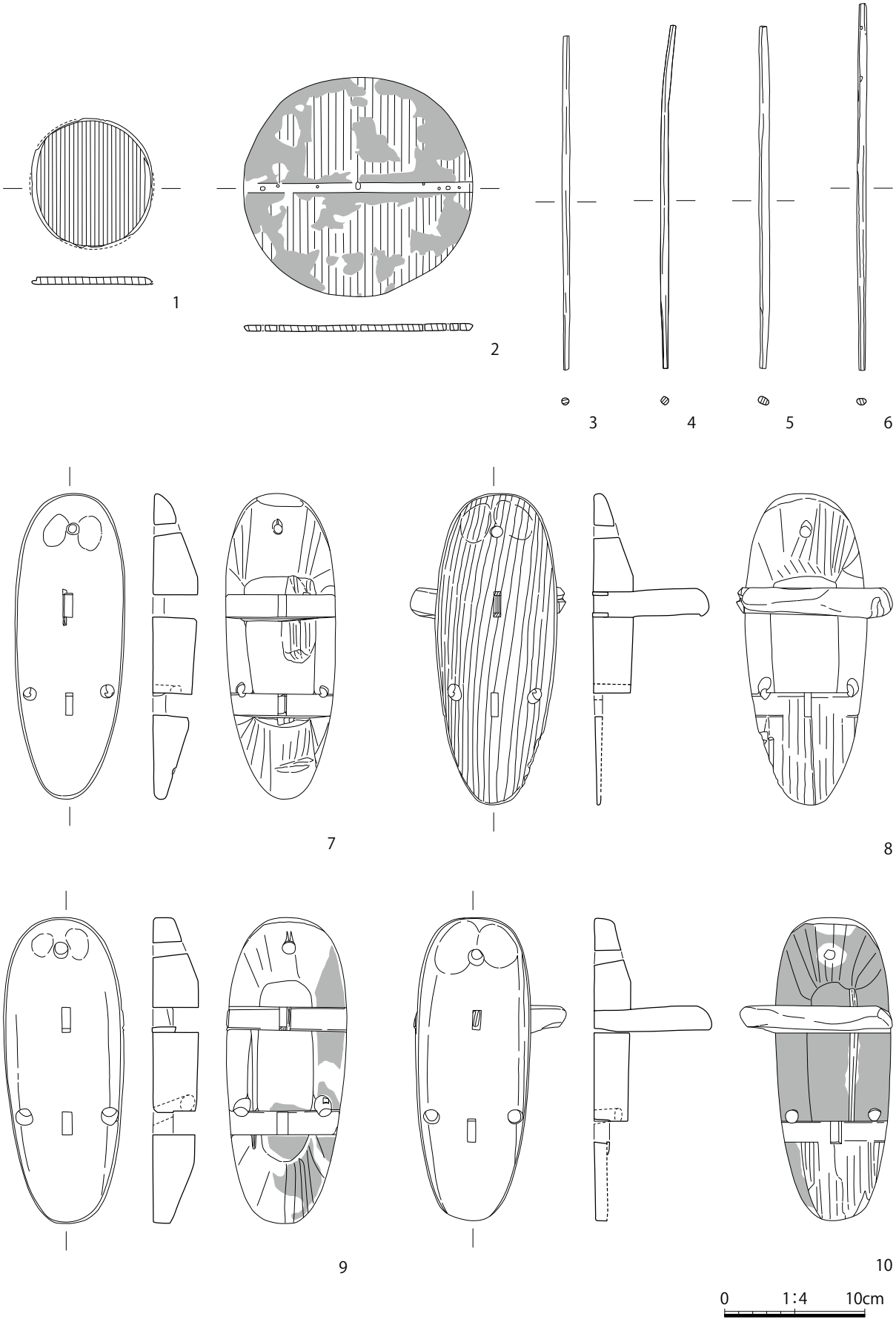
第 154 図　SK06 出土遺物 (1)



第 155 図　SK06 出土遺物 (2)



第 156 図　SK06 出土遺物 (3)

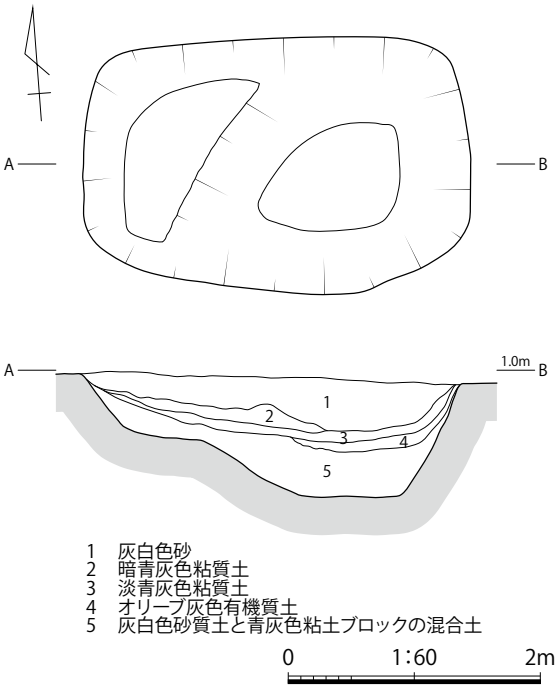


第 157 図　SK06 出土遺物 (4)

土坑 SK07(第 158 図)

調査区中央の北側で検出した廃棄土坑である。検出面は標高 0.98 m で、平面形は隅丸方形を呈する。規模は上縁長軸が 3.10 m、短軸が 2.00 m、深さ 0.92 m を測る。

土坑埋土は 5 層に分層でき、最下位に堆積する第 5 層の灰白色砂質土と青灰色粘土ブロックの混合土から、陶磁器・土師器皿・木製品が出土している。



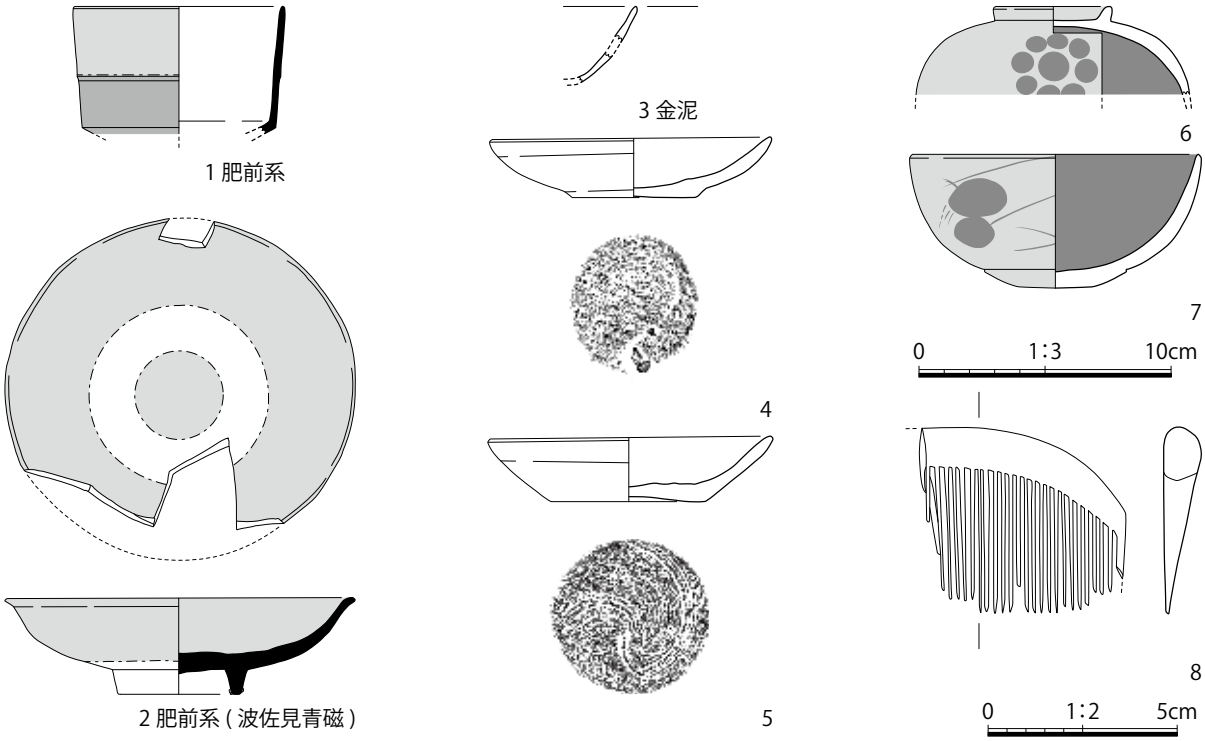
第 158 図　SK07 平面図・断面図

SK07 出土遺物 (第 159 図)

ここでは SK07 の埋土から出土した遺物を掲載する。159-1・2 は国産磁器である。159-1 は肥前系磁器の碗である。筒形の碗で、胴部外面上半に瑠璃釉、下半に鉄釉を施す。九陶Ⅱ -2 期 (1640 ～ 1650 年代)。159-2 は肥前系磁器の皿である。波佐見の青磁皿で、見込みに蛇ノ目釉剥ぎを施す。高台は露胎。九陶Ⅳ期 (1650 ～ 1680 年代)。

159-3 ～ 5 は土師器皿である。159-3 は内外面に金泥が施された土師器皿である。159-4・5 はロクロ成形の在地系土師器皿で、底部に糸切り痕をもつ。

159-6 ～ 8 は木製品である。159-6 は漆器椀の蓋である。塗色は外面が黒色、内面が赤色で、外面に九曜文の漆絵を施す。159-7 は漆器椀である。塗色は外面が黒色、内面が赤色で、外面に草文の漆絵を施す。高台部分に意図的なケズリ加工を施す。159-8 は一部欠損するが、白木の横櫛である。



第 159 図　SK07 出土遺物

土坑 SK08(第 160 図)

調査区中央の北側で検出した廃棄土坑である。検出面は標高 1.05 mで、平面形は長方形と考えられるが、北端は調査区外まで延びる。規模は上縁長軸が 2.70 m、短軸が 1.60 m、深さ 0.35 mを測る。SK08 は SK07 と一部切り合っており、先後関係は SK08(古)、SK07(新)である。

土坑埋土は 5 層に分層でき、最下位に堆積する第 5 層のオリーブ黒色砂と青灰色シルトの混合土から、陶磁器・土師器皿・木製品が出土している。

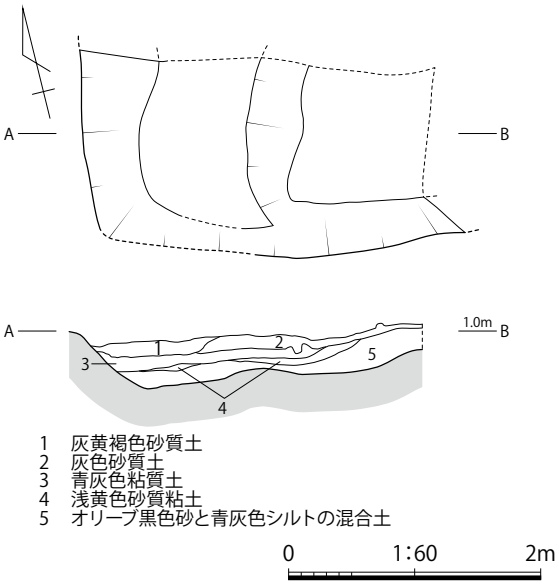
SK08 出土遺物 (第 161 図)

ここでは SK08 の埋土から出土した遺物を掲載する。161-1 は中国磁器である。景徳鎮系の青花皿で、体部外面に宝文、内面に牡丹文を描く。17 世紀初頭～前半のもので、森氏分類青花皿 E 群に該当する。

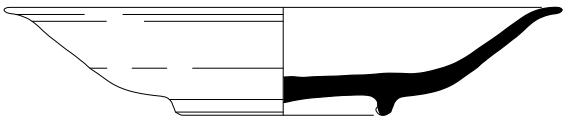
161-2 は国産磁器である。肥前系磁器の皿で、体部内面に兎文と山水文を描き、畳付は無釉。九陶Ⅱ-1 ～ 2 期 (1620 ～ 1640 年代)。

161-3 はロクロ成形の在地系土師器皿で、底部に糸切り痕をもつ。

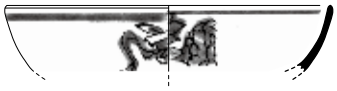
161-4 ～ 6 は木製品である。161-4・5 は白木の箸で、長さ 24 ～ 25㎝を測る。161-6 は角型差込下駄である。木取りは柾目、歯高は 3.7㎝を測る。



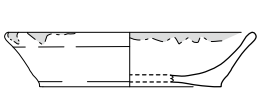
第 160 図　SK08 平面図・断面図



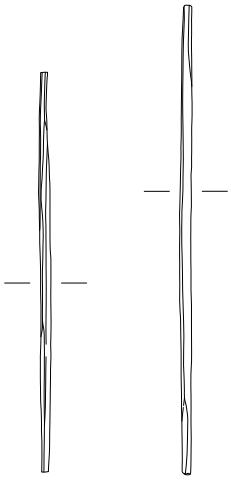
2 肥前系



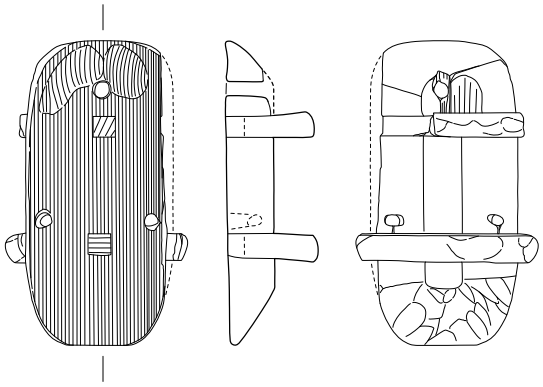
1 中国



3



4　5



6

0　1:3　10cm

0　1:4　10cm

第 161 図　SK08 出土遺物

第 3-1 遺構面遺構外出土遺物 (第 162・163 図)

ここで掲載する遺物は、第 3-1 遺構面直上から出土したものを遺構外出土遺物として取り扱う。

162-1・2 は中国磁器である。162-1 は景徳鎮系の青花碗である。端反形の碗で、胴部外面に圏線と草花文を描く。畳付は無釉で、高台内に「大明嘉靖年製」の銘をもつ。17 世紀初頭～前半のもので、森氏分類青花碗 B 群に該当する。162-2 は景徳鎮系の青花皿である。口縁部を菊花形に成形し、内面に鹿文を描く。17 世紀初頭～前半のもので、森氏分類青花皿 G1 群に該当する。

162-3 ～ 9 は国産陶器である。162-3 は肥前系陶器の刷毛目碗である。九陶Ⅳ期 (1690 ～ 1750 年代)。162-4 は肥前系陶器の碗である。九陶Ⅳ期 (1690 ～ 1780 年代)。162-5・6 は肥前系陶器の皿である。平形の皿で、内外面に銅緑釉を施し、見込みは蛇ノ目釉剥ぎ。高台は露胎。九陶Ⅳ期 (1690 ～ 1780 年代)。162-7・8 は須佐 (山口) の擂鉢である。口縁部直前でやや直立させて折り返す口縁をもつ。18 世紀前半のもので、佐伯氏分類 I 群 B 類に該当する。162-9 は備前の擂鉢である。口縁帯外面に 2 条の凹線をもつ。乗岡氏編年近世 2 期 a(1630 ～ 1650 年代) に該当する。

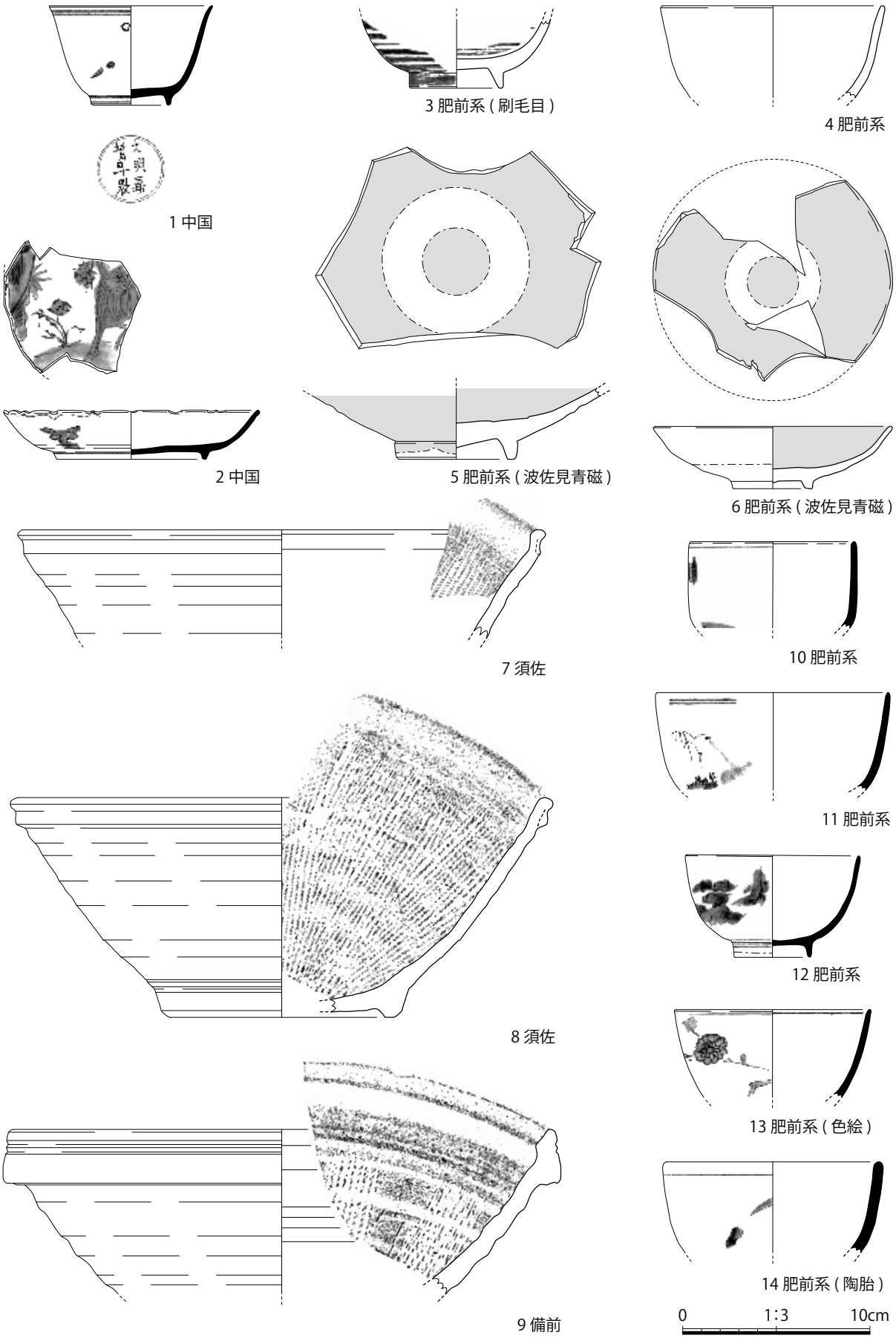
162-10 ～ 163-8 は国産磁器である。162-10 は肥前系磁器の碗である。筒丸形の碗で、胴部外面に風景文を描く。九陶Ⅲ期 (1650 ～ 1670 年代)。162-11 は肥前系磁器の碗である。丸碗で、胴部外面に風景文を描く。九陶Ⅲ期 (1700 ～ 1740 年代)。162-12 は肥前系磁器の碗である。丸碗で、胴部外面に山水文を描く。九陶Ⅳ期 (1700 ～ 1740 年代)。162-13 は肥前系磁器の色絵碗である。胴部外面に赤と緑で草花文を描く。九陶Ⅳ期 (1710 ～ 1740 年代)。162-14 は肥前系磁器の陶胎染付碗である。胴部外面に草文を描く。九陶Ⅳ期 (1690 ～ 1750 年代)。163-1 は肥前系磁器の香炉である。青磁の香炉で胴部外面に鎬文の陰刻を施す。1700 ～ 1780 年代。163-2 は肥前系磁器の合子の蓋である。外面に花唐草文を描く。九陶Ⅲ期 (1650 ～ 1700 年代)。163-3 は肥前系磁器の蓋付鉢の蓋である。外面に建物文を描く。九陶Ⅳ期 (1700 ～ 1780 年代)。

163-4 は肥前系磁器の皿である。青磁釉の折縁皿で、見込みに菊花文とその周囲に印花の陰刻を施す。高台は蛇ノ目高台。九陶Ⅲ期 (1650 年代)。163-5 は肥前系磁器の皿である。口縁部を菊花形に成形し、内面に草文を描く。畳付は無釉。九陶Ⅲ期 (1650 年代)。163-6 は肥前系磁器の皿である。外面に蔓草文、内面口縁部周辺に雪輪文を描き、見込みに五弁花の印判を施す。九陶Ⅲ～Ⅳ期 (1680 ～ 1700 年代)。163-7 は肥前系磁器の皿である。蛇ノ目凹形高台の皿で、体部内外面に唐草文、見込みに花文を描く。九陶Ⅳ期 (1730 ～ 1780 年代)。163-8 は肥前系磁器の皿である。外面に蔓草文、内面に花唐草文と笹文を描き、見込みに五弁花の印判を施す。高台内に「大明年製」の銘をもつ。九陶Ⅳ期 (1700 ～ 1730 年代)。

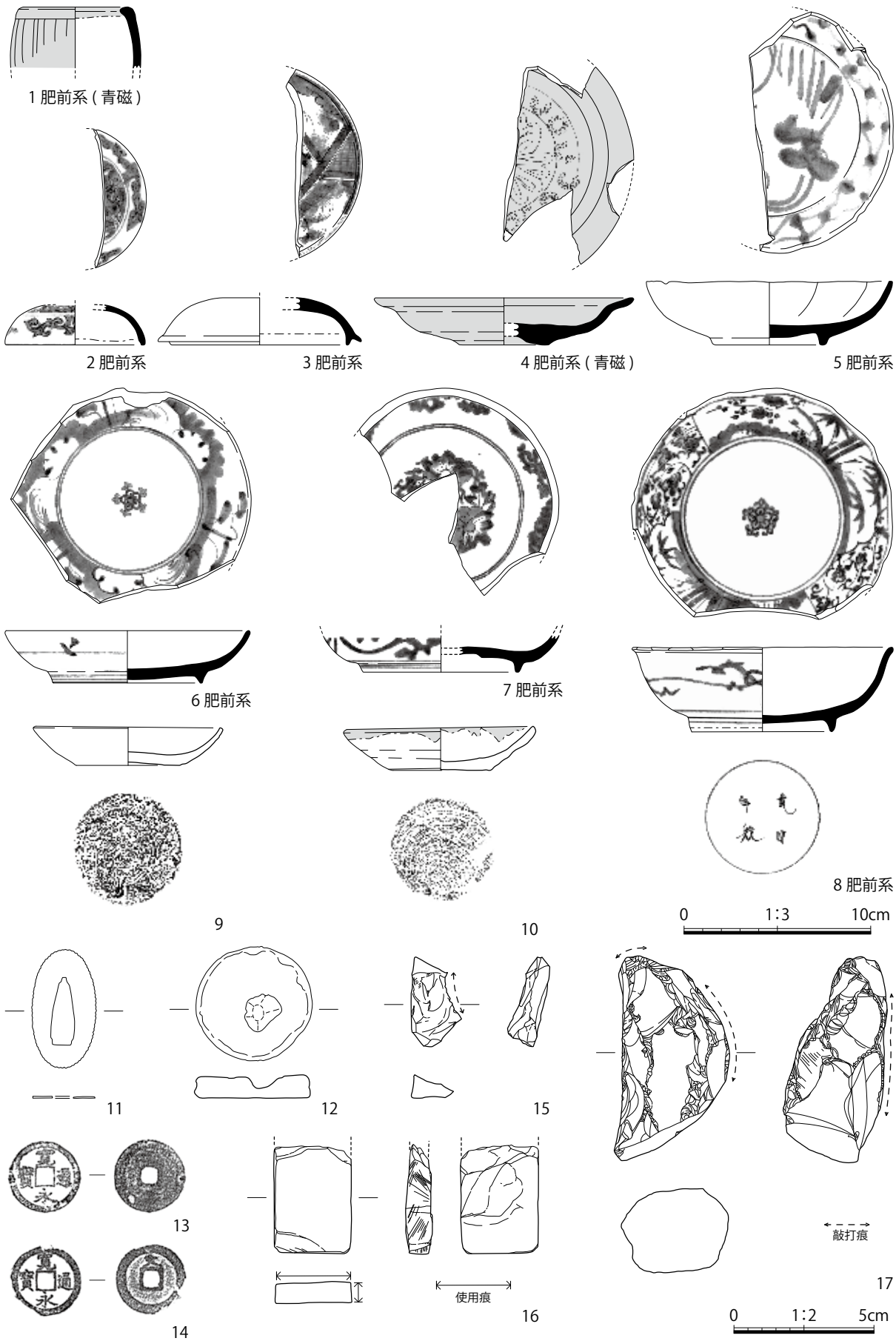
163-9・10 はロクロ成形の在地系土師器皿で、底部に糸切り痕をもつ灯明皿である。

163-11・12 は金属製品である。163-11 は切羽で、外縁部を鋸歯状に仕上げる。163-12 は中央付近に窪みをもつ円盤状の鉛だが、用途は不明である。163-13・14 は銭貨である。いずれも寛永通寶で、163-13 は古寛永、163-14 は背文に「文」をもつ新寛永 (文銭) である。

163-15 ～ 17 は石製品である。163-15 は褐色を呈する瑪瑙製の火打石である。163-16 は凝灰岩製の砥石である。163-17 は黒曜石製の火打石でエッジ部分に敲打痕があり、使用頻度は多い。



第 162 図　第 3-1 遺構面遺構外出土遺物 (1)



第 163 図　第 3-1 遺構面遺構外出土遺物 (2)

（4）第 3-2 遺構面

ｉ）第 3-2 遺構面の概要 (第 164 図)

第 3 遺構面は、火災が契機と考えられる建物部分だけの造成と礎石建物の建て替えが行われており、同一遺構面の中で新旧が存在する。そのため、第 3 遺構面では礎石建物の新段階と古段階の二つの遺構面として区分を行い、造成を施して礎石建物の建て替えが行われた新段階を「第 3-1 遺構面」、それ以前の礎石建物の建て替えを行う前の古段階を「第 3-2 遺構面」としている。ここでは第 3 遺構面のうち、下層で検出した第 3-2 遺構面の詳細を報告する。

第 3-2 遺構面は、標高 0.90 m で検出した遺構面である。遺構は、礎石建物跡 SB01(古)、掘立柱建物跡 SB02、地鎮遺構 SX03、溝 SD02(古) ～ 04、柵 SA03、土坑 SK09 を検出した。SB01 と SD02 については遺構の新旧があり、第 3-2 遺構面では古段階の状況を図示したものである。第 3-2 遺構面における SB01(古) は建て替えを行う前のもので、北西側に SB02 が付随する。SD02(古) ～ 04 は屋敷境と考えられる素掘り溝である。

第 3-2 遺構面の基盤となる MJ3b 層は、礎石建物の建て替え前の整地層で、青灰色シルトを主体とする嵩上げ造成による整地層である (第 124 図第 14・15 層)。層厚は 50㎝を測り、最上位の整地層を露呈した面で遺構を検出したことから、これを第 3-2 遺構面とした。

第 3-2 遺構面では、屋敷地の整地手法として「島状整地」が行われている。詳細は後述するが、第 16 ブロック地内の与力屋敷における発掘調査では、これまでに 2 箇所の屋敷地で島状整地を確認している[33]。遺構面の時期は、出土遺物の年代から 17 世紀前半～後半を想定している。また、礎石建物内や周辺で検出した土層には、火災による炭化層の堆積が見られる場所もある。

第 164 図　第 3-2 遺構面平面図

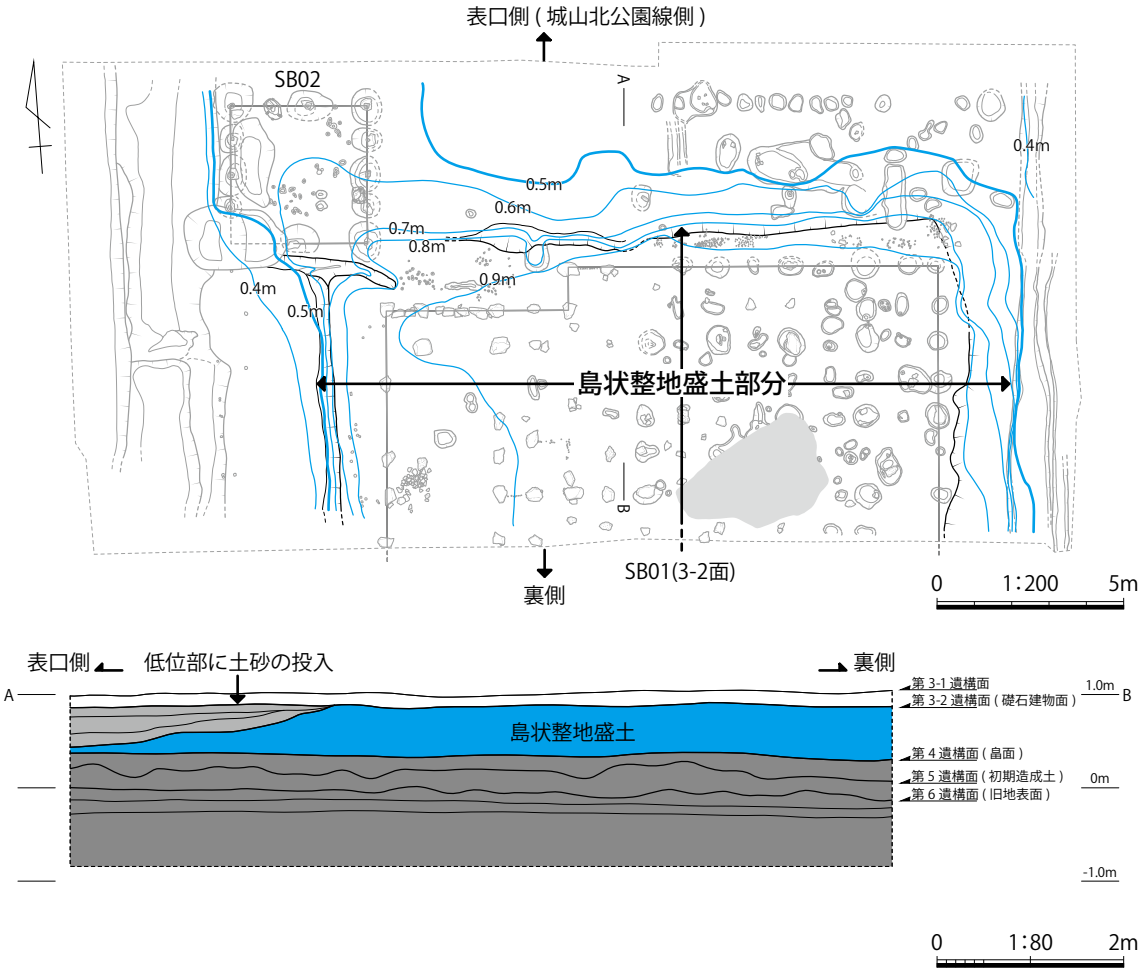
ii）第 3-2 遺構面の遺構と遺物

与力屋敷における建物構築時期の整地手法 (第 165 図)

第 16 ブロック地内の与力屋敷における屋敷地の造成は、屋敷地全体を一律に嵩上げするのではなく、まず建物予定地だけを先行して盛土を行い、その上面に建物を構築している。調査では初期段階の造成手法として「島状整地」が行われていることが明らかとなっている。これまでの与力屋敷の調査では、初期段階の建物として掘立柱建物が見つかっているが、今回の調査では礎石建物を検出している。建物の地下構造は異なるが、時期的な位置付けは松平期初頭の 1638 年以降に比定する。

島状整地とは、屋敷地の建物の周囲に土取穴や溝を掘削し、掘削の際に生じた残土で建物を構築する部分にマウンド状の高まりを持たせる。その後の段階で、高まり周囲の低位部に土砂を投入することにより、屋敷地の平坦化を行う整地手法のひとつである。この整地手法は、低湿地に形成された徳島城下町の調査で最初に確認されたもので、16 世紀後半以降の侍屋敷では通例的に見られる整地手法と報告されている[34]。

検出した島状整地に用いられている造成土は青灰色シルトを主体とし、層厚 50㎝を測る。整地手法は第 165 図に図示したとおり、造成初期段階では屋敷地の建物部分である東西 18.5 m×南北 8.5 m以上の範囲にマウンド状の高まり (島状整地盛土部分) を持たせて、建物の周囲は低く造成し、断



第 165 図　島状整地平面地形測量図・土層断面図

面は台形状を呈する。

島状整地の検出標高は、高まり部分上面が標高 0.90 m、低位部上面が標高 0.50 mを測り、その比高差は 40㎝である。その後の段階で、高まり周囲の低位部に土砂を投入することにより屋敷地の平坦化を行っているものと考えられるが、現地調査では高まり部分を露呈した段階まで掘り下げた面を第 3-2 遺構面としている。屋敷地の平坦化は、城山北公園線に面した SB01(古) の北側に良質なシルト質粘土と砂を互層状に堆積させ、土壌を固く敲き締めて版築状に整地されている。土層堆積状況から北側の表口付近ではあまり時間を置かず、建物を構築する段階には既に平坦化されていた可能性が考えられる。

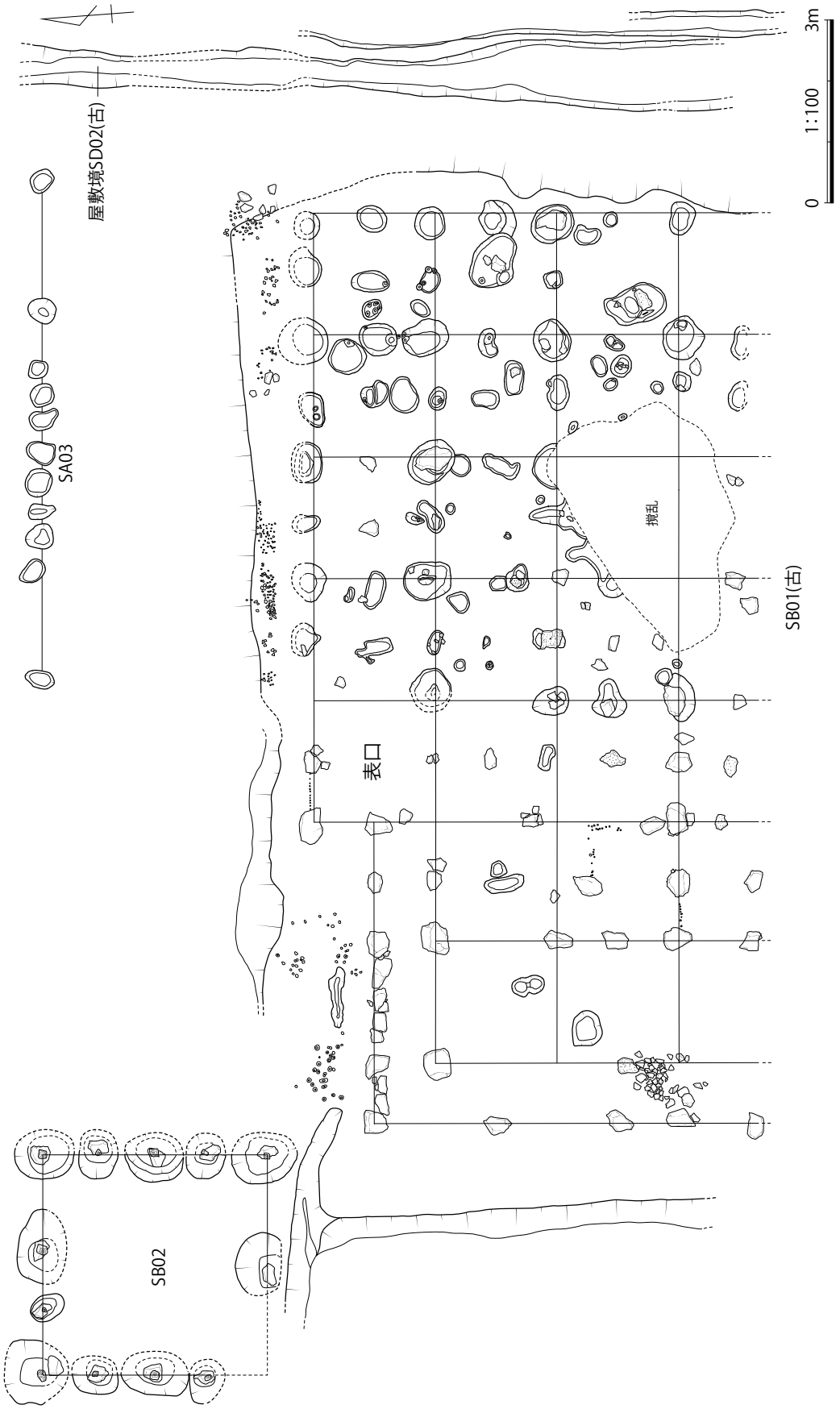
礎石建物跡 SB01(古)(第 166 図)

調査区の中央部で検出した建て替え前の礎石建物跡である。この礎石建物跡は、松平期の大橋家の直臣が住まう与力屋敷に比定される。屋敷地の表口の向きは城山北公園線に面した北側であることが想定される。屋敷地の造成は、SB01(古) の範囲で前述した島状整地を施している。建物範囲内の一部では炭化層の堆積が見られ、建物の周囲では火災処理の段階に廃棄されたものと思われる建築部材の木片を含む有機物層の堆積が見られることから、SB01(古) は一定期間機能した後に火災に遭っていたことが考えられる。

SB01(古) の検出面は標高 0.90 mで、平面形は東西方向の長方形を呈する。建物の主軸方位は N － 4°－ E で、規模は東西桁行 7 間半で全長 15.00 m、南北梁行 3 間以上で全長 6.00 m以上を測る。柱間寸法は現地測量での 1 間＝ 2.00 m (6 尺 6 寸) を基準としている。礎石は差し渡し 30 ～ 50 ㎝、厚さ 15 ～ 25㎝の大海崎石・島石・川原石を混在して用い、半間刻みに置かれる。SB01(古) では、礎石の大半は大海崎石で占められており、他の石材に比べて高い比率を示すことが特徴的である。礎石と礎石の間に置かれた石は 15 ～ 20㎝程度のやや小ぶりな石で、束石の可能性が考えられる。SB01(古) の西半では礎石の遺存状態が良好であったが、東半では礎石が抜き取られた後の掘り方のみを数多く検出している。礎石はいずれも根石を伴わない単独のものである。礎石の天端検出標高は 0.95 ～ 1.00 mで、一部の礎石では上面が赤変しているものや黒みがかるものが見られることから、火災に遭っていたことを示すものと捉えている。

建物の空間配置は、基本的に建て替え後の SB01(新) の段階で西側が拡張される以外は SB01(古) の段階から大きな変化は見られず、北側から表口と下屋 (廂)、上屋の配置を想定している。表口は、SB01(新) の段階よりも 1 間程東側に位置し、SB01(古) の中央部の北側にあたる東西 1 間 (2.00 m) ×南北 1 間 (2.00 m) の範囲を想定している。表口の北西側には島状整地が一部途切れる場所があり、礫敷や植栽痕が見られることから、表口周辺のアプローチと捉えている。

居住空間は、東西 7 間半 (15.00 m) ×南北 3 間以上 (6.00 m以上) の上屋の範囲で、一部では竹木舞の痕跡を検出していることから、木舞壁で仕切られた空間が配置されていたものと想定している。SB01(古) の西半の北側および西側の L 字状部分と東半の北側には半間 (1.00 m) の張り出し部分があり、下屋あるいは廂が配置されていた可能性が考えられる。



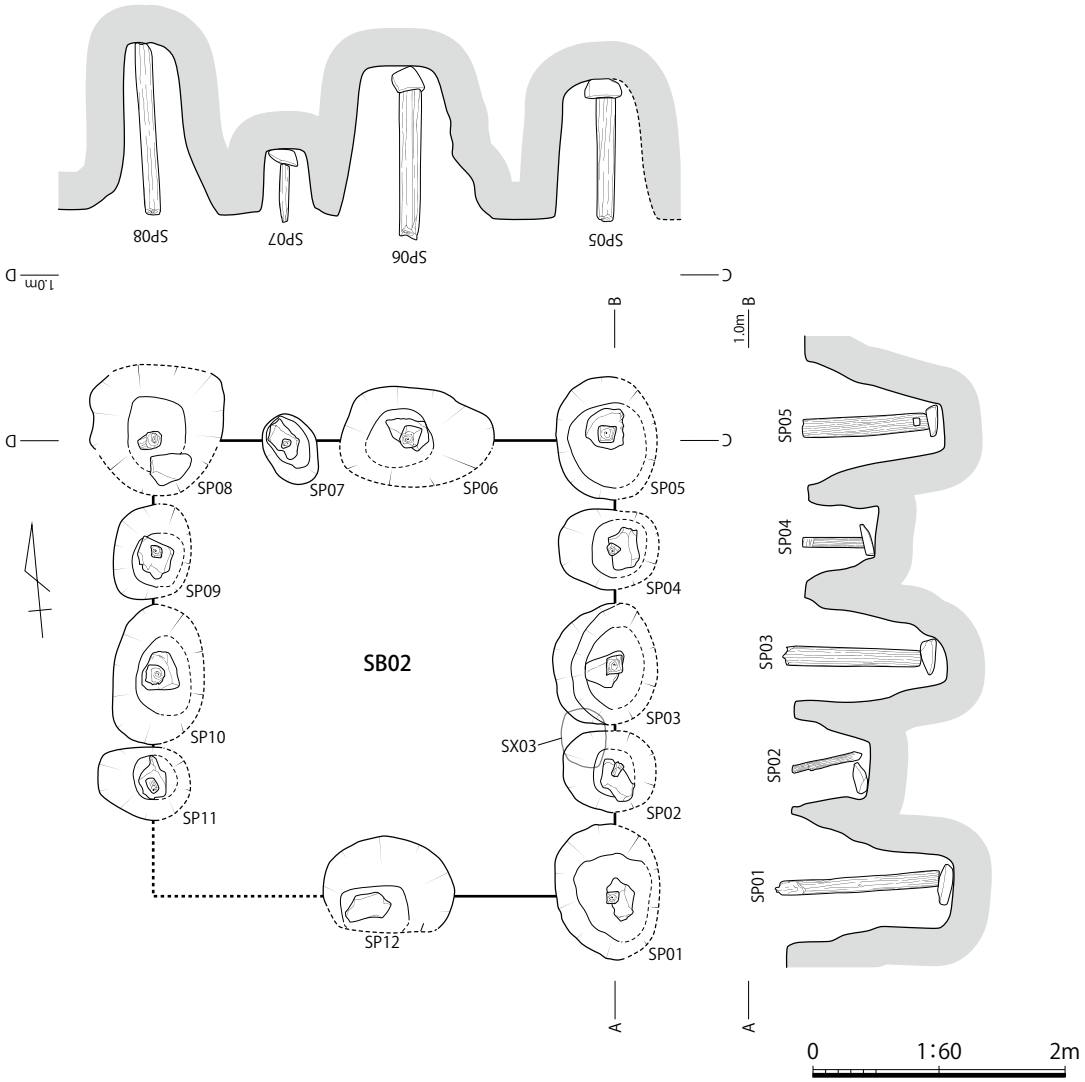
第 166 図　SB01(古) 平面図・断面図

掘立柱建物跡 SB02(第 167 図)

調査区の北西側で検出した掘立柱建物跡である。検出面は標高 0.60 ～ 0.70 mで、建物の主軸方位はＮ － 4°－ Ｅである。規模は東西２間×南北２間の構造で、東西 3.70 m、南北 3.70 mを測る。柱間寸法は現地測量での１間＝ 1.85 m (6 尺 1 寸) を基準としている。

建物を構成する柱穴は 12 穴 (SP01 ～ 12) 検出した。柱穴はいずれも直径 1.00 ～ 1.20 mの楕円形を呈し、深さ 1.20 ～ 1.40 mを測る。柱穴には柱材が残っており、一辺 15㎝、長さ 100 ～ 130㎝を測る角材が使用されている。また、柱穴間の半間にあたる部分には束柱を伴い、いずれも直径 50 ～ 60㎝の円形を呈し、深さ 50㎝を測る。束柱には直径 10㎝、長さ 50㎝を測る丸太材が使用されている。柱材の樹種同定を実施した結果、ほとんどが広葉樹でシイノキ属・サカキ・ハンノキ属・ヒサカキ・サクラ属などの多岐にわたる樹種が使用されていることが判明した。

柱穴の底部には、長軸 20 ～ 30㎝、厚さ 10㎝を測る大海崎石の礎盤石を伴う。この礎盤石は、平坦面が上面 (柱材との接地面) となるように置かれている。SB02 の性格は、建物としては小規模で屋敷地の住居とは考え難く、検出位置から SB01(古) に伴う建物 (倉庫など) を想定している。

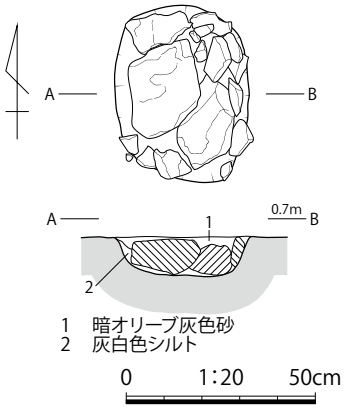


第 167 図　SB02 平面図・断面図

祭祀遺構 SX03(第 168 図)

SB02 の東側の柱穴 SP02・03 と重複する位置で検出し、祭祀遺構と考えられる礫石を伴う遺構である。検出面は標高 0.65 mで、平面形は楕円形を呈する。規模は上縁長軸が 0.47 m、短軸が 0.35 m、深さ 0.10 mを測る。

素掘りの浅い掘り込みで、掘り込み内には長軸 10 ～ 20㎝、厚さ 3 ～ 8㎝を測る薄い礫石が埋設されていた。陶磁器類や土師器皿などは出土していないが、この礫石下の土壌を洗浄したところ、ウリ科の植物種子と魚骨を検出した。SX03 は、SB02 を構築する際の祈祷に関連する遺構の可能性が考えられる。



第 168 図　SX03 平面図・断面図

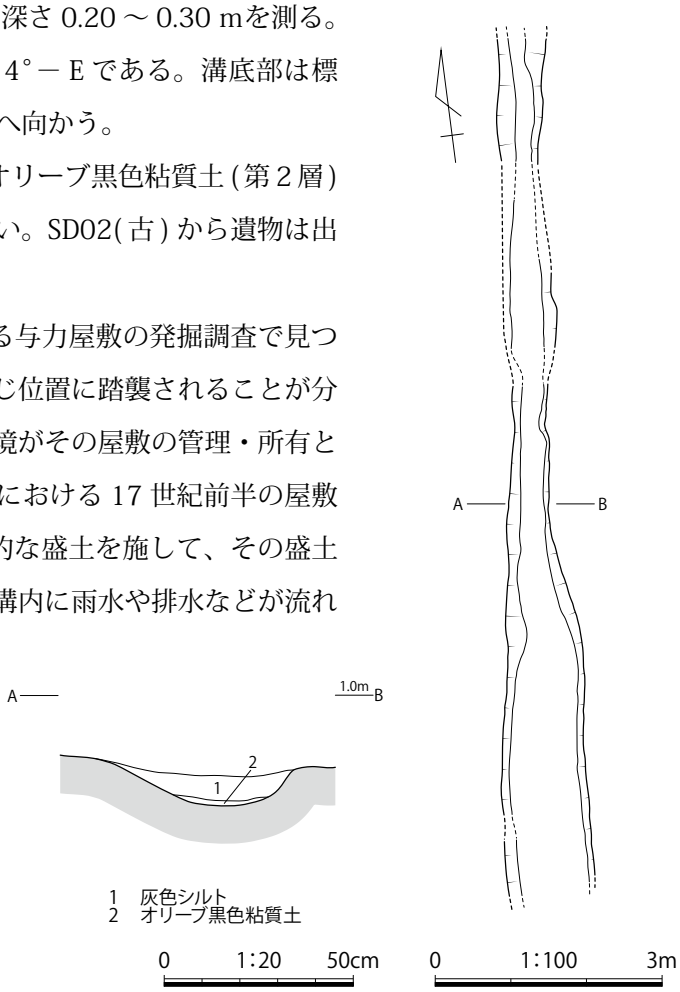
溝 SD02(古)(第 169 図)

調査区の東端で検出した南北溝で、与力屋敷における屋敷地と屋敷地の境界に位置する屋敷境溝である。SD02(古) は、前述した第 3-1 遺構面で検出した SD02(新) と同じ位置にあたり、石組を伴う以前の屋敷境溝は素掘り溝であったことが判明した。

規模は長さ 12.20 m、幅 0.50 ～ 1.20 m、深さ 0.20 ～ 0.30 mを測る。溝の上端は標高 0.85 m、主軸方位は N － 4° － E である。溝底部は標高 0.75 ～ 0.90 mで、排水方向は南から北へ向かう。

溝埋土は上層から灰色シルト (第 1 層)、オリーブ黒色粘質土 (第 2 層) が堆積し、溝の掘り直しの痕跡は見られない。SD02(古) から遺物は出土していない。

これまでに第 16 ブロック地内に所在する与力屋敷の発掘調査で見つかった屋敷境は、江戸時代を通してほぼ同じ位置に踏襲されることが分かっており、屋敷地の東端に位置する屋敷境がその屋敷の管理・所有となっていたことが判明している。与力屋敷における 17 世紀前半の屋敷境 (素掘り溝) は、片方の溝肩部分に人為的な盛土を施して、その盛土の頂部に木杭を打ち込み、杭列を構築して溝内に雨水や排水などが流れないように工夫されている。反対側の溝肩部分には杭列は認められず、屋敷境の管理・所有は片方の屋敷という見解に至っている。今回の調査で溝肩部分の杭列は検出していないが、これまでの調査成果から SD02(古) の管理・所有については、16-6 区に該当する屋敷地内に含まれるものと考えられる。



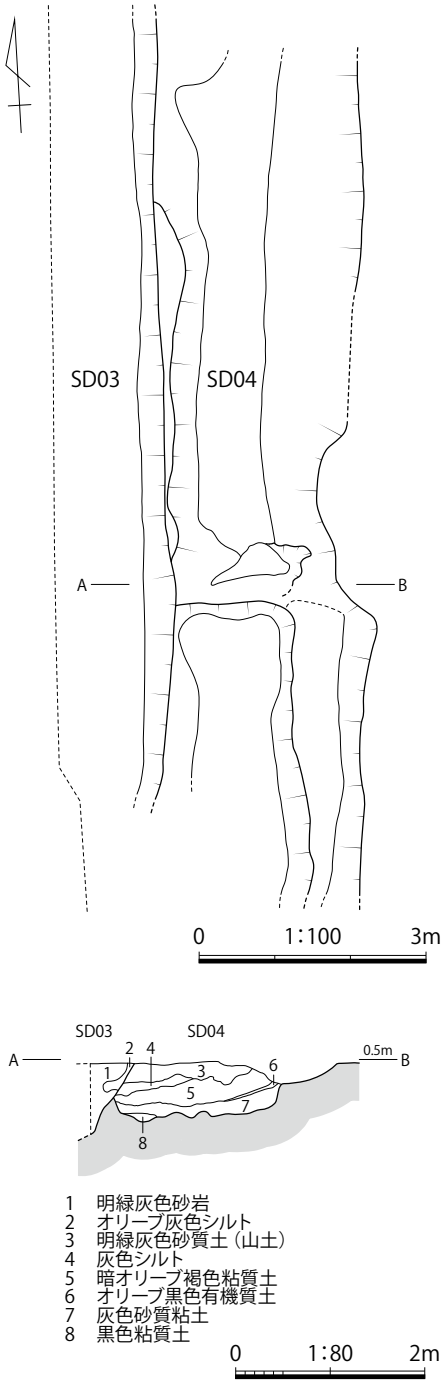
第 169 図　SD02(古) 平面図・断面図

溝 SD03・04(第 170 図)

調査区の西端で検出した南北溝で、与力屋敷における屋敷地と屋敷地の境界に位置する屋敷境溝である。SD04 は SD03 と一部切り合っており、先後関係は SD04(古)、SD03(新)である。

規模は、SD03 は長さ 10.50 m、幅 1.50 m、深さ 0.80 m を測る。溝の東端は検出しているが、西端は調査区外となるため、溝幅は 1.50 m以上になるものと考えられる。SD04 は長さ 12.20 m、幅 2.20 m、深さ 0.80 mを測る。溝の上端はいずれも標高 0.48 m、主軸方位は N － 4°－ E である。溝底部は標高 0 ～ -0.10 mで、排水方向は南から北へ向かう。

溝断面の土層堆積状況から、SD04 は一定期間機能した後に埋め戻され、新たに SD03 を掘り直している状況が観察される。SD03 から遺物は出土していないが、SD04 の埋土中から多量の陶磁器・土師器皿・木製品が出土しており、陶磁器の中には被熱された痕跡をもつものが含まれることから、これらは火災処理のために SD04 に一括廃棄された可能性が考えられる。



第 170 図　SD03・04 平面図・断面図

SD04 出土遺物(第 171 ～ 173 図)

ここでは SD04 の埋土から出土した遺物を掲載する。出土した陶磁器の碗皿類には、外面の釉薬が熔解しているものが含まれており、これらは火災によって被熱されたものと理解している。171-1・2 は中国磁器である。171-1 は景徳鎮系の青花小坏で、胴部外面に花文を描く。16 世紀末～ 17 世紀初頭のもので、森氏分類青花小坏Ⅰ類に該当する。171-2 は景徳鎮系の青花皿である。端反形の皿で、16 世紀末～ 17 世紀初頭のもので、森氏分類青花皿 B2 群に該当する。

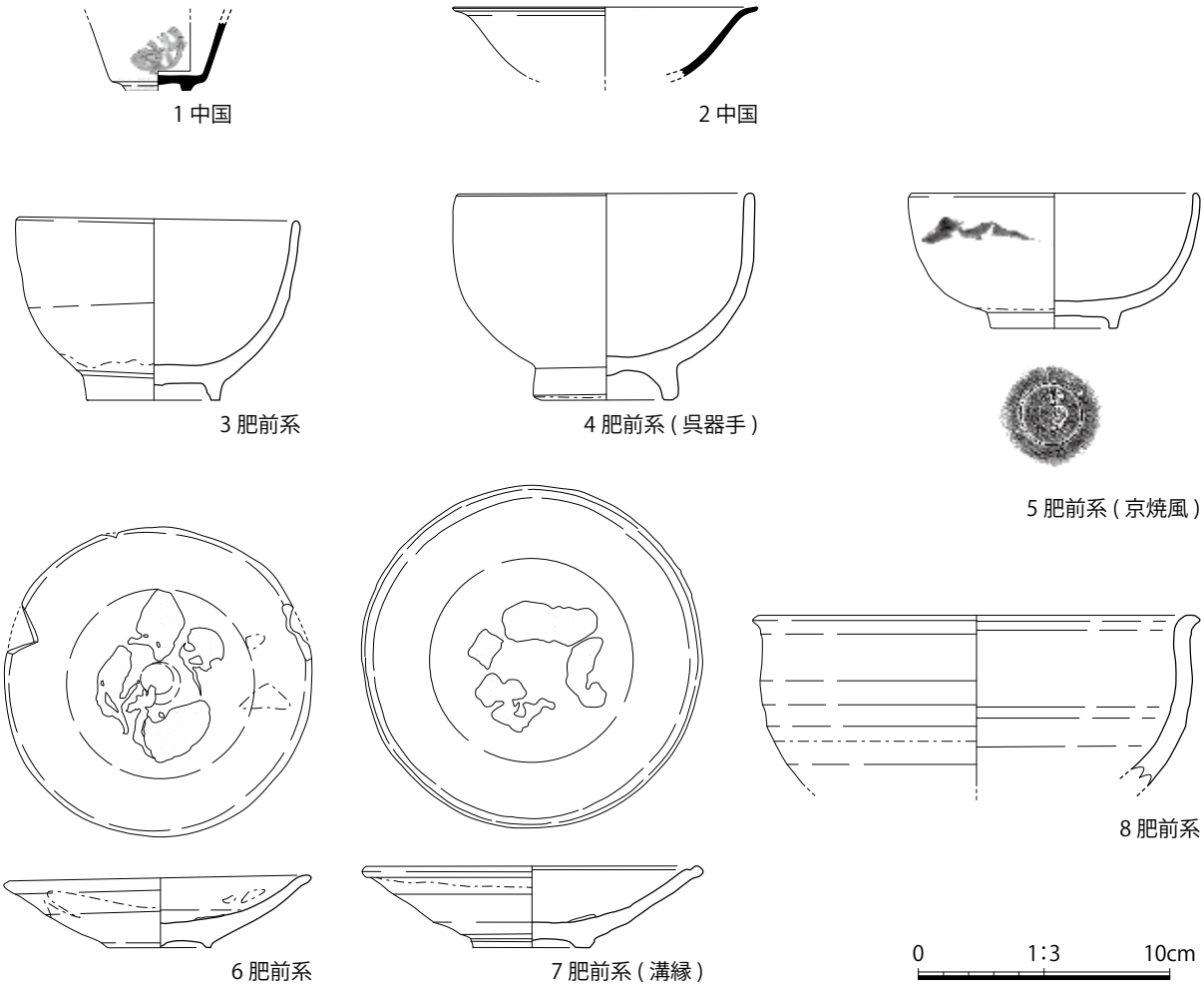
171-3 ～ 172-2 は国産陶器である。171-3 は肥前系陶器の碗である。内外面に灰釉を施すが全体的に被熱された痕跡が見られ、白みがかっている。高台は露胎。九陶Ⅲ期 (1650 ～ 1690 年代)。171-4 は肥前系陶器の呉器手碗である。撥形に開く高台から上方に向けて緩やかに胴部が延び、畳付は無釉。九陶Ⅲ期 (1650 ～ 1690 年代)。171-5 は肥前系陶器の碗である。京焼風陶器の碗で、胴部外面に山水文を描く。高台は露胎で、高台内に「清水」の押印がある。九陶Ⅲ期 (1650 ～ 1690 年代)。171-6 は肥前系陶器の皿である。見込みに 4 箇所の砂目痕が残る。内外面に灰釉を施し、高台は露胎。171-7 は肥前系陶器の溝縁皿である。いずれも九陶Ⅱ期 (1610 ～ 1650 年代)。171-8 は肥前系陶器の鉢である。内外面に灰釉を施し、胴部外面下半は無釉。九陶

Ⅰ期 (1600 ～ 1620 年代)。172-1 は肥前系陶器の鉢である。内面に鉄釉と銅緑釉を施す二彩手の鉢で、見込みに砂目痕が残る。九陶Ⅱ期 (1610 ～ 1650 年代)。172-2 は肥前系陶器の大皿である。内面に型紙摺りで白化粧土を施して花文と縞文を浮き立たせる。高台は露胎で抉り高台である。九陶Ⅱ期 (1610 ～ 1630 年代)。

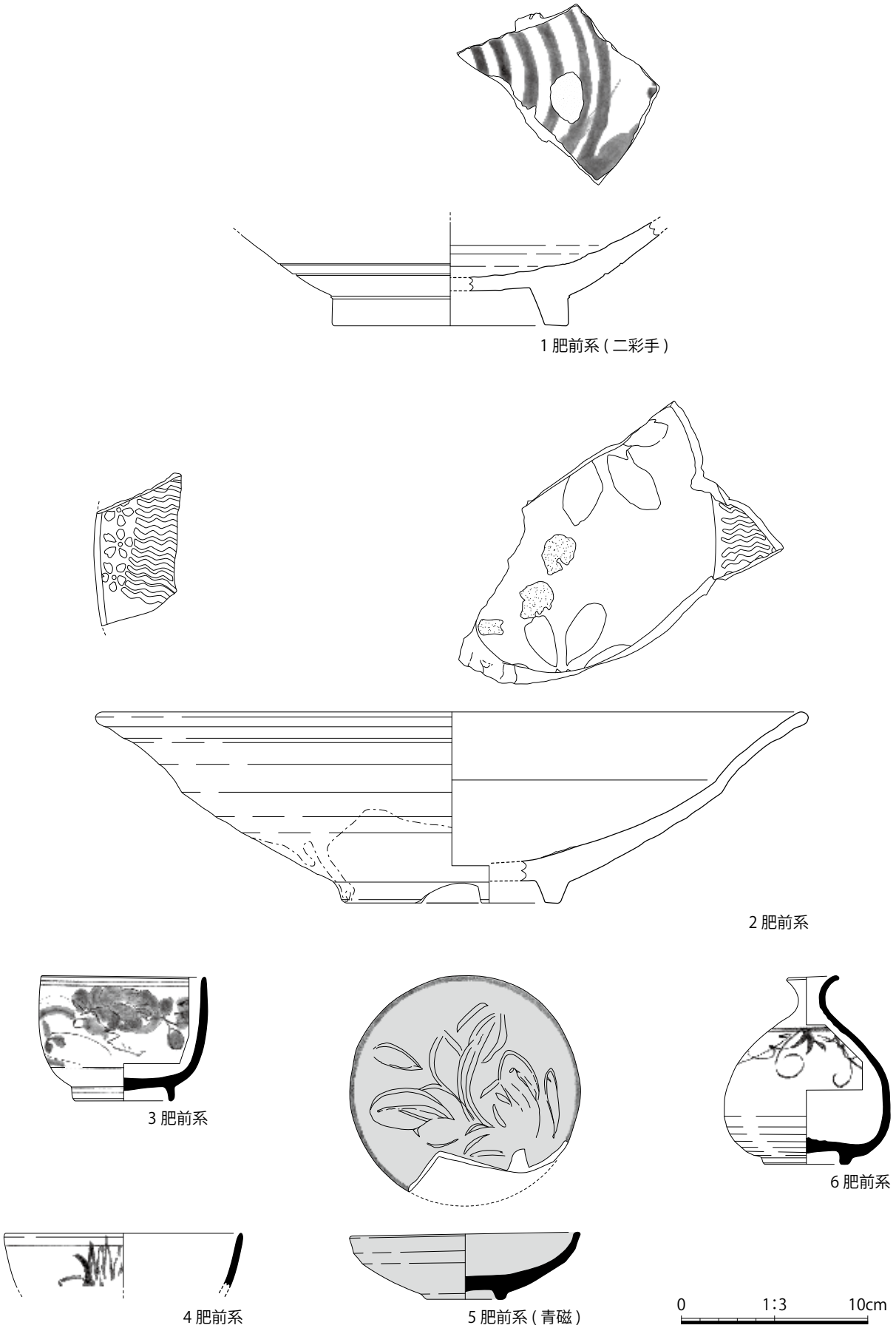
172-3 ～ 6 は国産磁器である。172-3 は肥前系磁器の碗である。筒丸形の碗で、胴部外面に花文を描く。九陶Ⅲ期 (1660 ～ 1670 年代)。172-4 は肥前系磁器の碗である。胴部外面に草文を描く。九陶Ⅱ -2 期 (1630 ～ 1650 年代)。172-5 は肥前系磁器の皿である。青磁皿で、口縁端部に口銹を施し、見込みに草文の陽刻を施す。九陶Ⅱ -2 期 (1640 ～ 1650 年代)。172-6 は肥前系磁器の油壺である。外面に蔓草文を描き、畳付は無釉で砂粒が付着する。九陶Ⅱ -2 期 (1630 ～ 1650 年代)。

173-1 ～ 4 はロクロ成形の在地系土師器皿で、底部に糸切り痕をもつ灯明皿である。

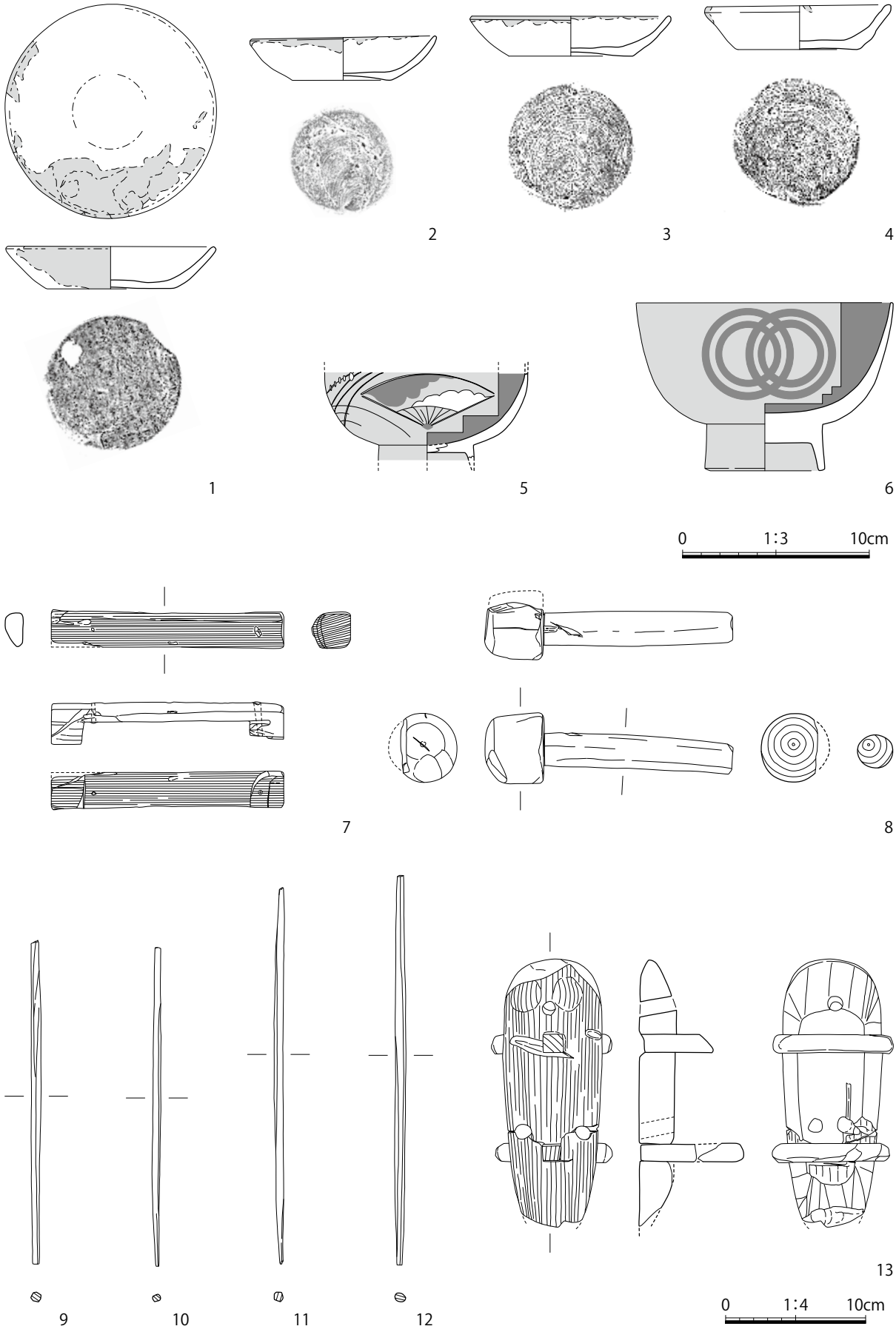
173-5 ～ 13 は木製品である。173-5 は漆器椀である。塗色は外面が黒色、内面が赤色で、外面に扇文の漆絵を施す。173-6 は漆器椀である。塗色は外面が黒色、内面が赤色で、外面に二重輪違文の漆絵を施す。173-7 は把手である。両端に 2 箇所の釘穴をもつ。173-8 は捏棒と考えられる棒状木製品である。173-9 ～ 12 は白木の箸で、長さ 23 ～ 27㎝を測る。173-13 は丸型差込下駄である。木取りは柾目、歯高は 6.5㎝を測る。前緒付近には足の指の痕跡が残る。



第 171 図　SD04 出土遺物 (1)



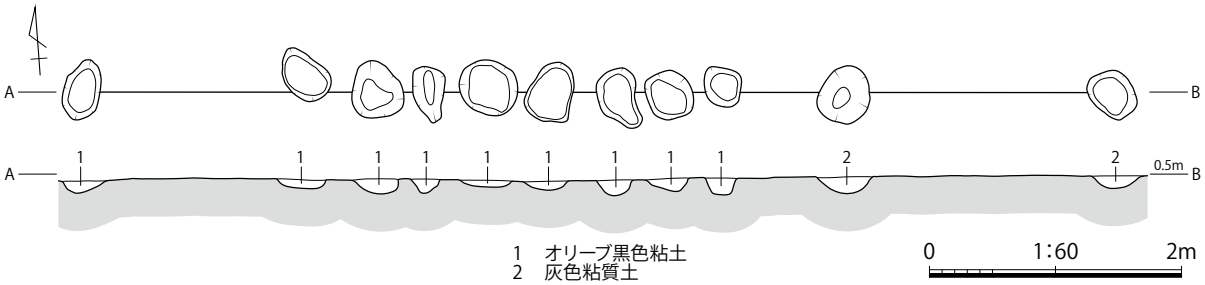
第 172 図　SD04 出土遺物 (2)



第 173 図　SD04 出土遺物 (3)

柵 SA03(第 174 図)

調査区の北東側で検出した柱穴列である。柱穴列は掘り方のみ検出し、東西方向で 8.50 m間に直線的に並ぶ。検出面は標高 0.50 mで、掘り方の平面形は円形を呈する。規模は直径 0.30 ～ 0.40 m、深さ 0.10 ～ 0.15 mを測り、主軸方位は E － 4°－ S である。SA03 は、SB01(古) の北側に位置する植栽などを配置する空間と表口周辺のアプローチを区別するための遮蔽施設と考えられる。

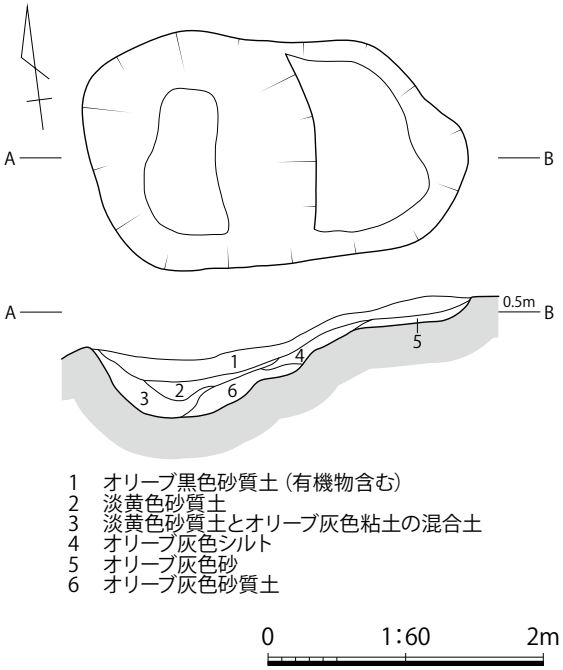


第 174 図　SA03 平面図・断面図

土坑 SK09(第 175 図)

調査区の西側で検出した廃棄土坑である。検出面は標高 0.60 mで、平面形は楕円形を呈する。規模は上縁長軸が 2.75 m、短軸が 1.65 m、深さ 0.40 mを測る。土坑の西半は上層からの遺構の掘り込みによって一部消失している。SK09 は SB02 の南西角と一部が切り合っており、先後関係は SB02(古)・SK09(新) である。

土坑埋土は 6 層に分層でき、最上位に堆積する第 1 層のオリーブ黒色砂質土から、陶磁器・木製品が出土している。

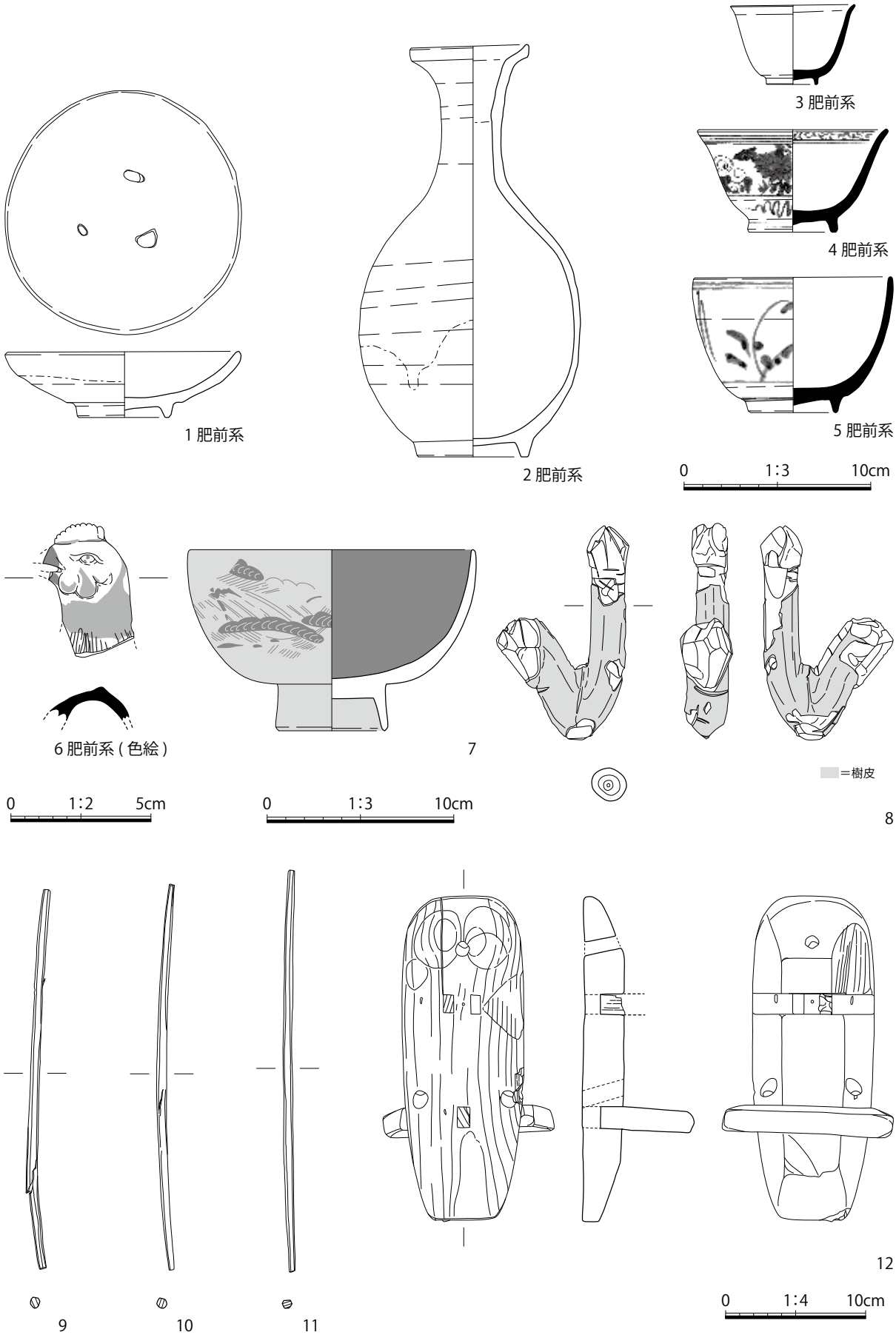


第 175 図　SK09 平面図・断面図

SK09 出土遺物 (第 176 図)

ここでは SK09 の埋土から出土した遺物を掲載する。176-1・2 は国産陶器である。176-1 は肥前系陶器の皿である。見込みに 3 箇所の胎土目痕が残る。内外面に灰釉を施し、体部下方～高台は露胎。九陶Ⅰ -2 期 (1594 ～ 1610 年代)。176-2 は肥前系陶器の瓶である。口縁部周辺から胴部上方にかけて銅緑釉、胴部下方に灰釉を施し、畳付は無釉。九陶Ⅲ期 (1650 ～ 1690 年代)。

176-3 ～ 6 は国産磁器である。176-3 は肥前系磁器の白磁小坏である。端反形で、畳付は無釉。九陶Ⅱ -2 期 (1640 ～ 1650 年代)。176-4 は肥前系磁器の碗である。端反形で、胴部外面に菊唐草文と波文、見込みに圏線と半菊文を描く。九陶Ⅱ -2 期 (1630 ～ 1650 年代)。176-5 は肥前系磁器の碗である。胴部外面に草文の窓絵を描く。九陶Ⅲ期 (1650 ～ 1660 年代)。176-6 は肥前系磁器の色絵の水滴である。型押で鶏形に成形する。九陶Ⅲ期 (1650 ～ 1660 年代)。



第 176 図　SK09 出土遺物

176-7 ～ 12 は木製品である。176-7 は漆器椀である。塗色は外面が黒色、内面が赤色で、外面に松笠文の漆絵を施す。176-8 は掛具である。囲炉裏などで使用する鉤と考えられ、外面に樹皮が残存する。176-9 ～ 11 は白木の箸で、長さ 24 ～ 25㎝を測る。176-12 は角型差込下駄である。木取りは柾目、歯高は 6.7㎝を測る。前緒付近には足の指の痕跡が残る。

第 3-2 遺構面遺構外出土遺物 (第 177 図)

ここで掲載する遺物は、第 3-2 遺構面直上から出土したものを遺構外出土遺物として取り扱う。

177-1 ～ 3 は国産陶器である。177-1 は肥前系陶器の碗である。京焼風陶器の碗で、内外面に透明釉を施す。九陶Ⅲ期 (1650 ～ 1690 年代)。177-2 は肥前系陶器の呉器手碗である。撥形に開く高台から上方に向けて緩やかに胴部が延び、畳付は無釉。九陶Ⅲ期 (1650 ～ 1690 年代)。177-3 は肥前系陶器の片口である。内外面に鉄釉を施すが、一部に被熱された痕跡が見られる。高台は露胎。九陶Ⅲ期 (1650 ～ 1690 年代)。

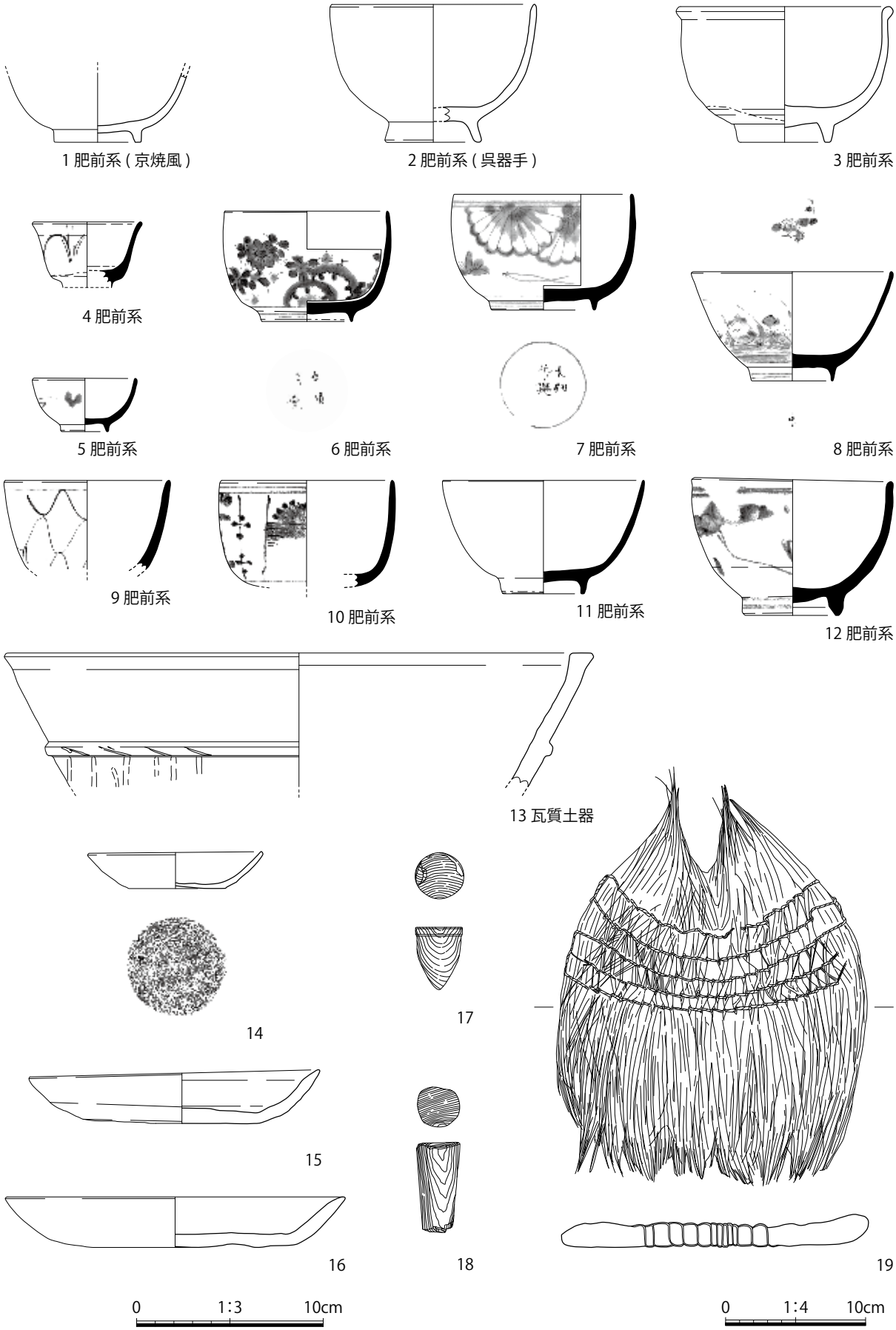
177-4 ～ 12 は国産磁器である。177-4 は肥前系磁器の小坏である。口縁端部をやや外傾させ、胴部外面に蘭文を描く。高台は無釉。九陶Ⅱ -2 期 (1630 ～ 1650 年代)。177-5 は肥前系磁器の小坏である。胴部外面に草花文を描く。畳付は無釉。九陶Ⅲ期 (1660 ～ 1690 年代)。

177-6 は肥前系磁器の碗である。筒丸形の碗で、胴部外面に雪輪文と花文を描く。畳付は無釉で、高台内に「大明年製」の銘をもつ。九陶Ⅲ期 (1650 ～ 1670 年代)。177-7 は肥前系磁器の碗である。筒丸形の碗で、胴部外面に半菊花重ね文と松葉文を描く。畳付は無釉で、高台内に「大明年製」の銘をもつ。九陶Ⅲ期 (1650 ～ 1670 年代)。177-8 は肥前系磁器の碗である。胴部外面に草花文、見込みに花文を描く。畳付は無釉で、高台内に「宣」の銘をもつ。九陶Ⅲ期 (1650 ～ 1680 年代)。177-9 は肥前系磁器の碗である。胴部外面に幅広の網目文を描く。九陶Ⅲ期 (1650 ～ 1670 年代)。177-10 は肥前系磁器の碗である。筒丸形の碗で、胴部外面に窓絵で草花文を描く。九陶Ⅲ期 (1650 ～ 1670 年代)。177-11 は肥前系磁器の碗である。白磁の碗で、器壁は薄造りである。畳付は無釉。九陶Ⅲ期 (1650 ～ 1660 年代)。177-12 は肥前系磁器の碗である。胴部外面に草花文を描く。畳付は無釉。九陶Ⅲ期 (1650 ～ 1660 年代)。

177-13 は瓦質土器である。内外面に回転ナデ調整を施す。木桶を模倣したプロポーションで、茶陶の水指として使用していたものか。

177-14 ～ 16 は土師器皿である。177-14 はロクロ成形の在地系土師器皿で、底部に糸切り痕をもつ。177-15・16 は手づくね成形の京都系土師器皿である。直径 15 ～ 18㎝を測る大ぶりな土師器皿で、胞衣皿として使用していた可能性が考えられる。

177-17 ～ 19 は木製品である。177-17 は独楽である。上端部～上部外面を面取りして段を持たせ、下半は先端が尖るようにケズリ加工を施す。177-18 は木栓である。全体的にケズリ調整を施し、下半に向かってやや細くケズリ込む。177-19 は箒の穂部である。棕櫚を用い、直径 2㎜前後の細い棕櫚縄を 5 段で交互に縫い込んで結束している。穂部は長さ 29.9㎝で幅は一定ではないが、結束部分では概ね 16 ～ 21㎝におさまる。



第 177 図　第 3-2 遺構面遺構外出土遺物

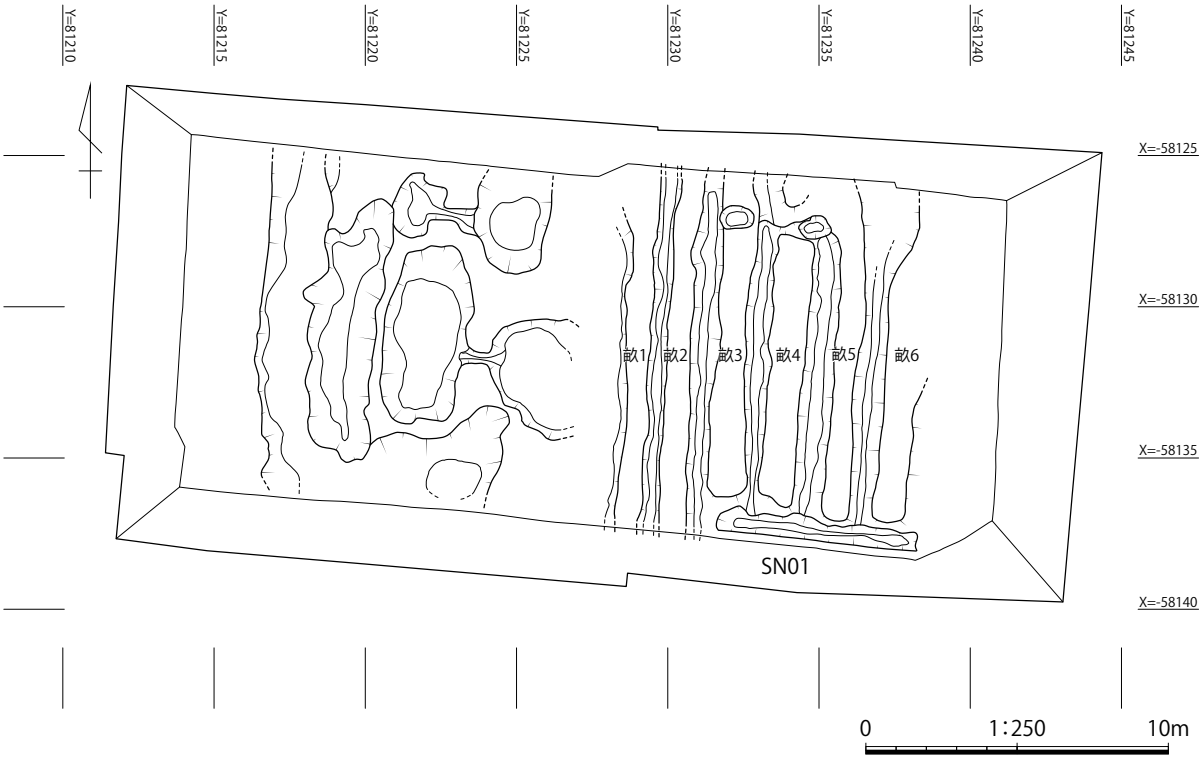
(5) 第 4 遺構面

ｉ）第 4 遺構面の概要 (第 178 図)

第 4 遺構面は、標高 0.40 mで検出した遺構面である。遺構は畠跡 SN01 を検出し、調査区の中央部～東側に広がる状況を確認している。SN01 では、南北方向に延びる畠の畝を 6 条検出した。今回の調査で見つかった畠跡は、平成 22 ～ 26 年度に第 16 ブロックで実施した発掘調査において検出されている畠跡と連続する遺構である。

松江城下町絵図を基に調査区を概観すると、第 4 遺構面の時期に比定する堀尾期・京極期絵図には第 16 ブロックの西側に地割の界線は記載されているが、それ以外の中央部～東側では屋敷地名義の記載は見られず、境界線すら引かれていない空白地となっている。第 16 ブロック地内のこれまでの発掘調査から、絵図の空白地は畠地として利用されていたことが明らかとなっている。

第 4 遺構面の基盤となる MJ3c 層は、畠を形成する淡茶褐色有機質細礫粘土である (第 124 図第 16 層)。層厚は 10㎝を測り、畠の畝と畝間の土壌分析結果から MJ3c 層は耕作土であることが判明している。遺物はこの耕作土から出土しており、中国磁器・国産陶器・土師器皿・金属製品・銭貨・瓦がある。陶磁器類については、畠の耕作により撹拌された影響を受けているためか細片のものが多く、その中から実測可能なものを抽出して掲載した。また、耕作土は層厚 10㎝の薄い堆積で土壌の撹拌によって下位の遺構面の陶磁器類が混入していることが考えられ、後述する第 5 遺構面の陶磁器類と接合関係にある個体も含んでいる。そのため、耕作土から出土した陶磁器類は第 4 遺構面だけに伴うものとして扱えず、第 5 遺構面に付随している可能性を否定できない。遺構面の時期は、出土した遺物の年代から 17 世紀前半を想定している。



第 178 図　第 4 遺構面平面図

ii）第 4 遺構面の遺構と遺物

畠跡 SN01（第 179 図）

SN01 は標高 0.40 mで検出した畠跡である。規模は東西 10.30 m×南北 12.20 mを測る約 126㎡の範囲で畝を検出し、調査区の中央部～東側へ広がっている状況を確認した。畠を形成する畝は、南北方向に延びる畝を 6 条検出している。

畝 1 条の規模は、平均して長さ 11.50 m、幅 1.40 mを測り、ほぼ平坦地に形成される。畝立てされた作土部分は、畝下から畝頂部まで高さ 10㎝を測る。耕作土の土層堆積は、上位から淡茶褐色有機質細礫粘土と黒褐色砂質粘土の 2 層で構成される。下位の黒褐色砂質粘土は、3㎜～ 2㎝程度の小礫を含む砂質粘土で、上層から浸透した水分を畝全体に浸透させて一定量に保つ役割や作物の根付きを良くするために施された堆積層と考えられ、作物の生育環境を整えていたことが窺える。

SN01 の西側ではそれぞれの大きさが異なる土坑を 6 基検出しており、一部の土坑で大小 2 つの土坑が細い溝で繋がっている状況を確認した。土坑 1 基の規模は、大きいもので上縁長軸が 6.20 m、短軸が 2.40 m、深さ 0.30 ～ 0.50 mを測る。検出した土坑群は東から西へ向かって傾斜しており、標高がやや高い位置にある東側の土坑に水が溜まれば、標高がやや低い位置にある西側の土坑へ水が溜まっていくといった棚田状に並ぶ土坑群である。この土坑群は畠の耕作に伴う水溜施設の可能性が想定される。

ここでは当地を畠地として利用していた時期が問題となる。後述する第 5 遺構面は、城下町造成以前の旧地表面に盛られた城下町初期造成土を基盤とする最初の遺構面であることから堀尾期としている。続く第 4 遺構面は、城下町初期造成土の上に砂質粘土や有機質細礫粘土を盛ることによって形成された畠地である。前述した第 3-2 遺構面は、松平期初頭の礎石建物が構築される遺構面である。

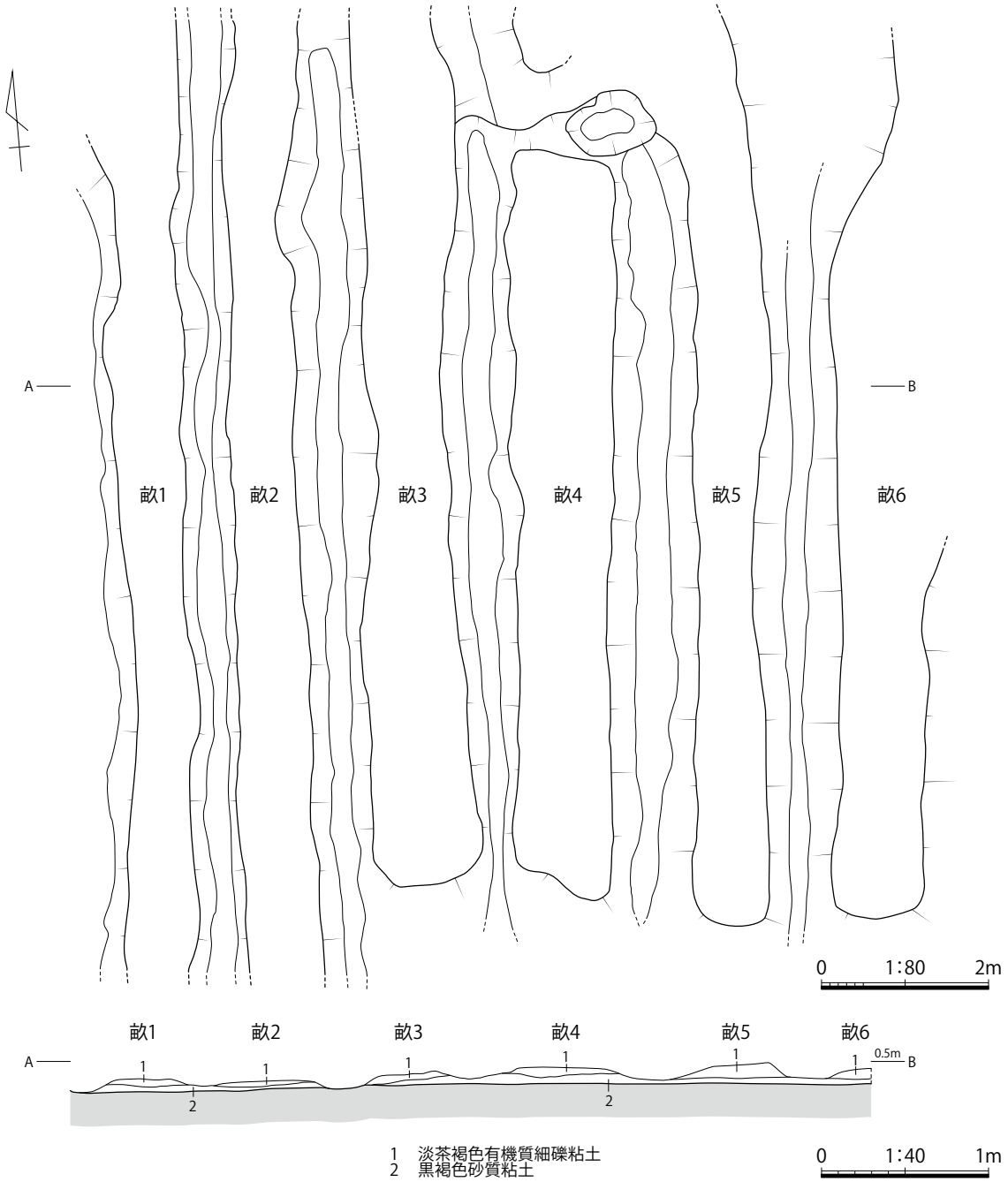
この状況から引き算を用いて畠地の時期を推定すると、上限は堀尾期～京極期、下限は松平期初頭となる。また、出土した陶磁器類の年代や組成は堀尾期・京極期の両時期に該当する。確実に京極期の畠地と断定はできないが、京極期には畠地として利用されていた可能性が高く、松平期初頭の礎石建物が構築される以前までは畠地となっていたものと想定している。

SN01 土壌分析

調査区の北壁で検出した畝の土壌分析を行ったところ、畝構成層上位から栽培関連植物としてソバ属・アズキ属などの畠作物由来と考えられる花粉化石を検出したほか、ウナギツカミ節 - サナエタデ節、アカザ科 - ヒユ科などの畠地雑草由来と考えられる花粉化石を検出した。分析結果から、畠ではソバ、アズキなどが栽培されていた環境であったと考えられる。

また、イネ科 (40 ミクロン以上) は 85％を示し、植物珪酸体分析ではイネ植物珪酸体が多量の検出量を示すほか、カヤツリグサ科、アリノトウグサ科などの水田雑草由来と考えられる花粉化石が検出されるなど、調査地での稲作を示唆する結果も得られている。

以上の結果から、畝構成層上位は湿地堆積物を母材とする土層を客土した後に耕作土とした可能性が指摘されている。畝構成層下位ではイネ科 (40 ミクロン未満) やカヤツリグサ科がイネ科 (40 ミクロン以上) を上回る出現率を示し、イネ植物珪酸体は検出されていないという状況である。



第 179 図　SN01 平面図・断面図

SN01 出土遺物 (第 180・181 図)

ここでは畠跡 SN01 の耕作土である第 179 図第 1・2 層から出土した遺物を掲載する。遺物は畠の耕作によって撹拌された影響を受けているためか細片のものが多く出土しており、その中から実測可能なものを抽出して掲載した。

180-1 は中国磁器である。漳州窯系の青花碗で、胴部外面に草文を描く。16 世紀末～ 17 世紀初頭のもので、森氏分類青花碗 F 群に該当する。180-2 は朝鮮白磁の碗である。硬質白磁の碗で、全釉の

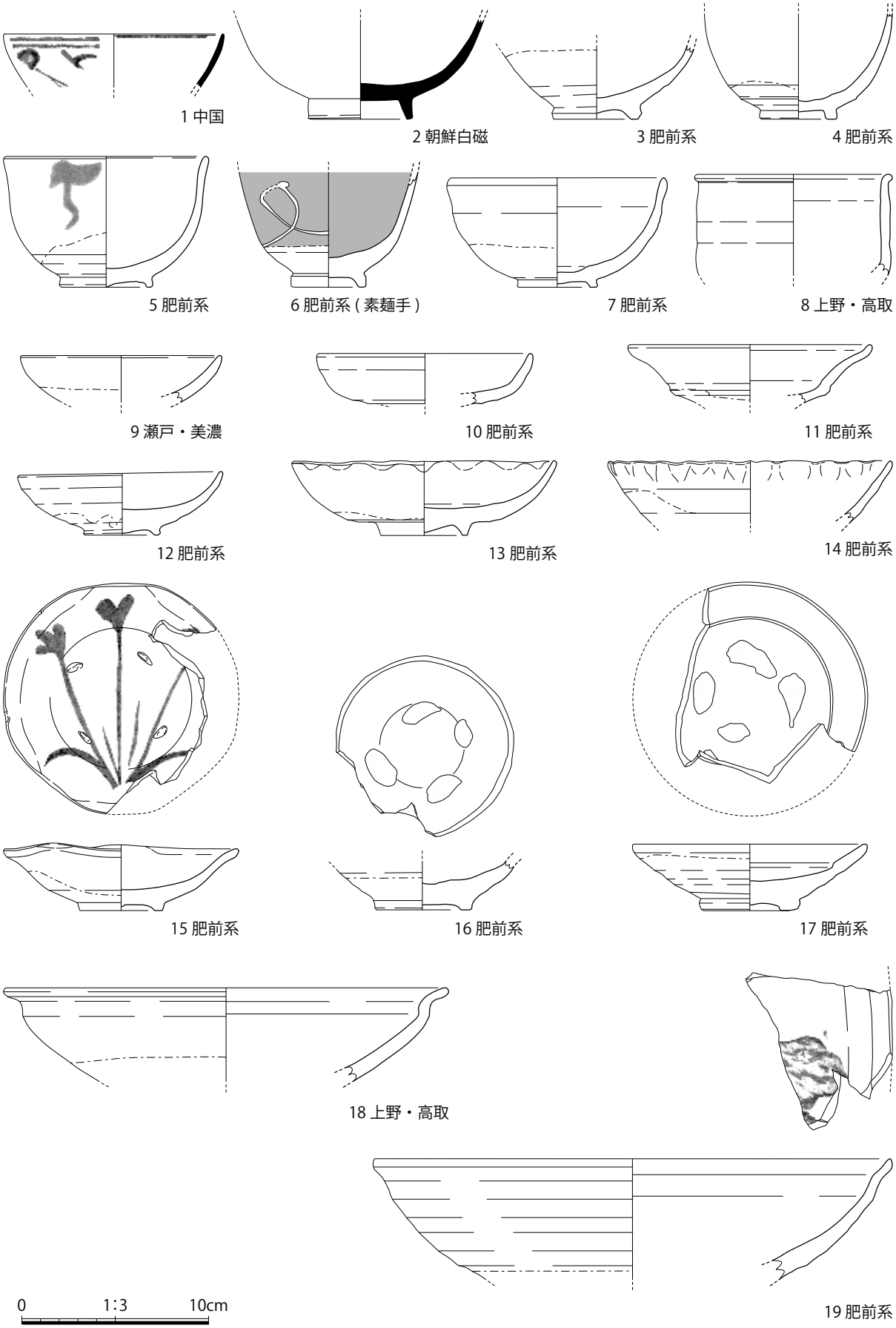
ものである。断面に漆継ぎの痕跡をもつ。16 世紀後半～ 17 世紀初頭。　180-3 ～ 181-1 は国産陶器である。180-3 は肥前系陶器の碗である。内外面に灰釉を施し、胴部下方～高台は露胎。九陶Ⅰ -2 期 (1594 ～ 1610 年代)。180-4 は肥前系陶器の碗である。内外面に透明釉を施し、高台は露胎でケズリ出しが顕著である。九陶Ⅰ -2 期 (1594 ～ 1610 年代)。180-5 は肥前系陶器の碗である。胴部外面に草文の鉄絵を施し、器形は天目碗の名残りをもつ。内外面に灰釉を施し、高台は露胎。九陶Ⅰ -2 期 (1594 ～ 1610 年代)。180-6 は肥前系陶器の碗である。内外面に黒釉を施し、胴部外面に白い長石質の釉薬で装飾したイッチン掛けの碗で、いわゆる「素麺手」の碗である。高台は露胎。九陶Ⅱ期 (1610 ～ 1650 年代)。180-7 は肥前系陶器の碗である。内外面に灰釉を施し、胴部下方～高台は露胎。九陶Ⅱ期 (1610 ～ 1650 年代)。180-8 は上野・高取 (福岡) の碗である。筒形の碗で、口縁端部を玉縁状におさめてやや外傾させる。内外面に灰釉を施す。17 世紀初頭。

180-9 は瀬戸・美濃陶器の丸皿である。内外面に長石釉を施す。17 世紀初頭。180-10 は肥前系陶器の丸皿である。内外面に藁灰釉を施し、高台から口縁部にかけて体部をやや直立させる。九陶Ⅰ -2 期 (1594 ～ 1610 年代)。180-11 は肥前系陶器の皿である。体部中央に段をもち、内外面に灰釉を施す。口縁端部をやや内側に折り曲げる。九陶Ⅰ -2 期 (1594 ～ 1610 年代)。180-12 は肥前系陶器の丸皿である。内外面に灰釉を施し、高台は露胎。外面に煤が付着していることから灯明皿として使用されたものか。九陶Ⅰ -2 期 (1594 ～ 1610 年代)。180-13・14 は肥前系陶器の皿である。なぶり口の口縁で、口縁部は緩やかに直立する。内外面に灰釉を施し、高台は露胎。九陶Ⅰ -2 期 (1594 ～ 1610 年代)。180-15 は肥前系陶器の皿である。内面に草花文の鉄絵を描き、見込みに 4 箇所の胎土目痕が残る。内外面に透明釉を施し、体部下方～高台は露胎。九陶Ⅰ -2 期 (1594 ～ 1610 年代)。180-16・17 は肥前系陶器の皿である。見込みに 4 箇所の砂目痕が残る。内外面に灰釉を施し、高台は露胎。九陶Ⅱ期 (1610 ～ 1650 年代)。180-18 は上野・高取 (福岡) の皿である。内外面に緑白釉を施す。口縁部に段をもたせ、口縁頂部を外傾させる。17 世紀前半。180-19 は肥前系陶器の大皿である。内面に鉄絵を描き、透明釉を施す。口縁端部をやや外傾させる。九陶Ⅰ -2 期 (1594 ～ 1610 年代)。181-1 は上野・高取 (福岡) の擂鉢である。口縁部を直立させて折り返す。17 世紀前半。

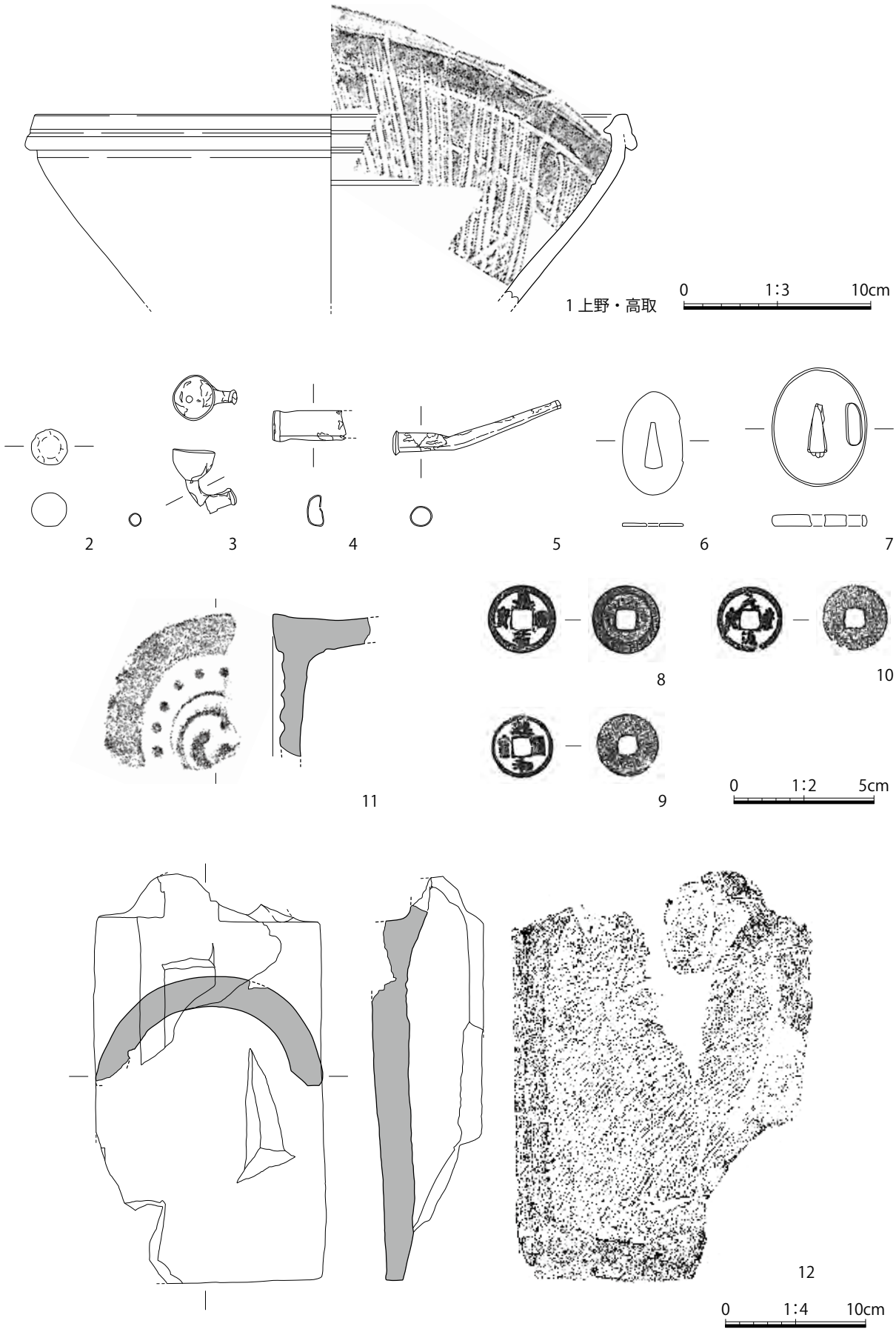
181-2 ～ 7 は金属製品である。181-2 は鉄砲玉である。直径 1.3㎝の鉛玉である。181-3 ～ 5 は煙管である。181-3 は火皿から首部に向かって細く短い雁首である。181-4・5 は羅宇側と口付側をやや肥厚させる吸口である。181-6 は切羽である。やや下膨れの楕円形を呈し、切り回し仕上げで一方の側面に小柄櫃用の刳り込みがある。181-7 は鉄鍔である。丸形を呈し、切り回し仕上げで一方の側面に小柄櫃を設ける。

181-8 ～ 10 は銭貨でいずれも模鋳銭の可能性がある。181-8 は北宋銭で、1056 年初鋳の嘉祐通寶である。181-9 は北宋銭で、1111 年初鋳の政和通寶である。181-10 は北宋銭で、1078 年初鋳の元豊通寶である。

181-11・12 は瓦である。181-11 は軒丸瓦である。圏線がない左巻きの三巴文とその外側に珠文が配される。松江城軒丸瓦分類 A-1 類に該当する。外面に被熱した痕跡が見られる。181-12 は玉縁式丸瓦である。凹面にコビキ A と布目痕を見せる。



第 180 図　SN01 出土遺物 (1)



第 181 図　SN01 出土遺物 (2)

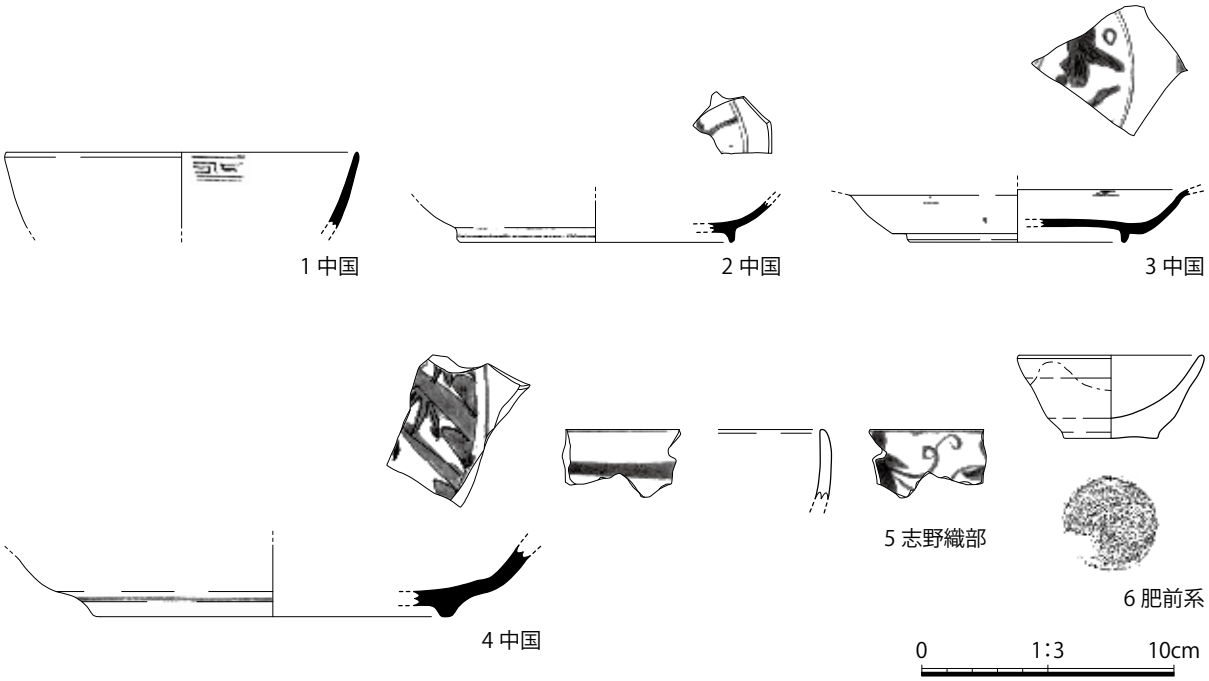
第４遺構面遺構外出土遺物 (第 182・183 図)

ここで掲載する遺物は、第４遺構面直上から出土したものを遺構外出土遺物として取り扱う。

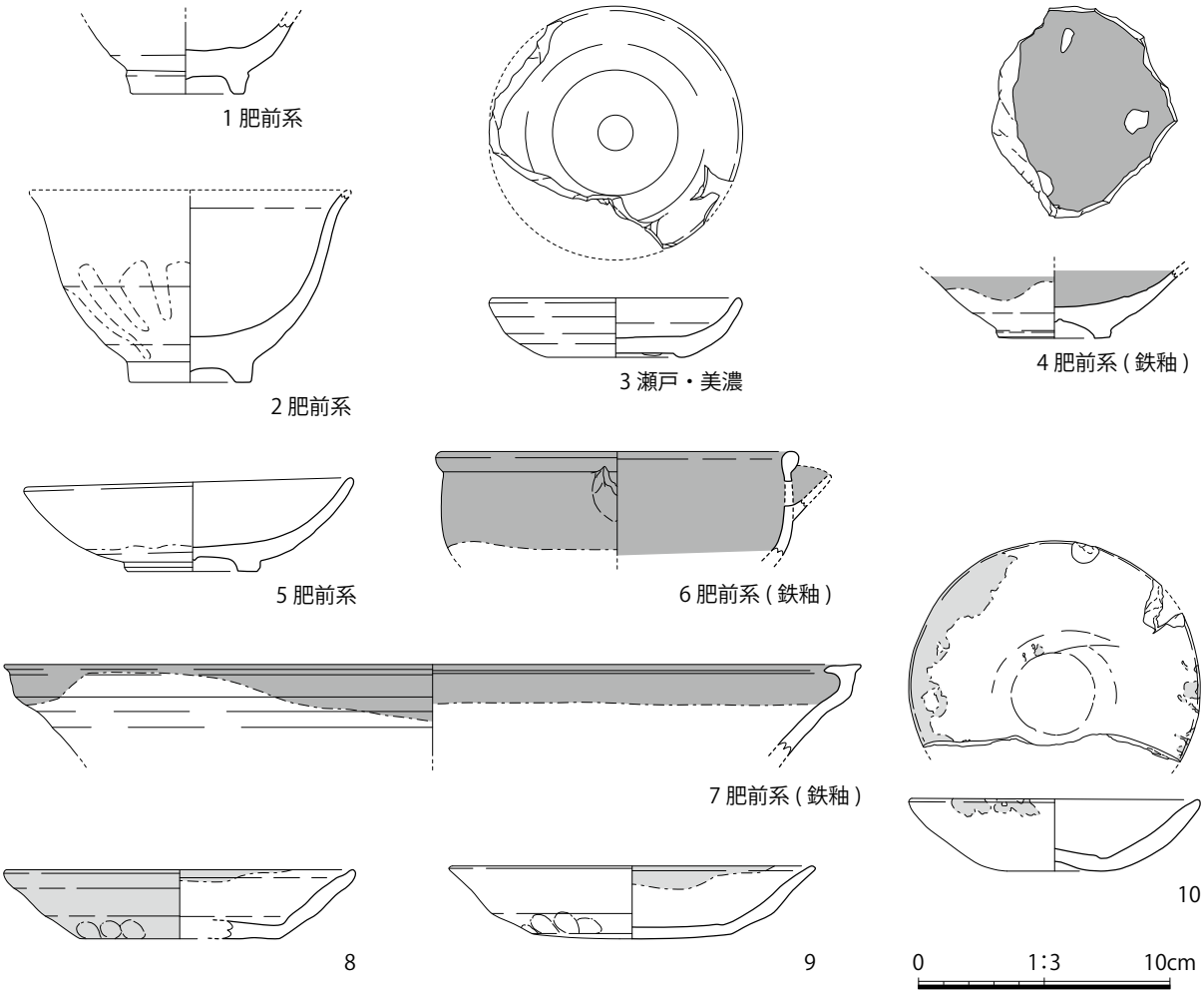
182-1 ～ 4 は中国磁器である。182-1 は景徳鎮系の青花碗である。直口碗で、口縁部内面に雷文帯を描く。17 世紀初頭のもので、森氏分類青花碗 G 群に該当する。182-2 は景徳鎮系の青花皿である。17 世紀初頭のもので、森氏分類青花皿 B2 群に該当する。182-3 は景徳鎮系の青花皿である。端反形の皿で、内面に草花文を描く。17 世紀初頭のもので、森氏分類青花皿 B2 群に該当する。182-4 は漳州窯系の青花皿である。内面に植物文を描き、高台内に砂粒が付着する。17 世紀初頭のもので、森氏分類青花皿 F 群粗製に該当する。

182-5 ～ 183-7 は国産陶器である。182-5 は志野織部の向付の小片である。17 世紀初頭。182-6 は肥前系陶器の小坏である。内外面に灰釉を施し、高台は露胎で底部に糸切り痕をもつ。九陶Ⅰ -2 期 (1594 ～ 1610 年代)。183-1 は肥前系陶器の碗である。内外面に灰釉を施し、高台は露胎。九陶Ⅱ期 (1610 ～ 1650 年代)。183-2 は肥前系陶器の碗である。内外面に灰釉を施し、高台は露胎。九陶Ⅰ -2 期 (1594 ～ 1610 年代)。183-3 は瀬戸・美濃陶器の内禿皿である。内外面に灰釉を施し、見込みは釉剥ぎ。底部は無釉。1590 ～ 1610 年代。183-4 は肥前系陶器の皿である。見込みに 3 箇所の胎土目痕が残る。内外面に鉄釉を施し、体部下方～高台は露胎。九陶Ⅰ -2 期 (1594 ～ 1610 年代)。183-5 は肥前系陶器の皿である。胎土目のグループの皿で、内外面に藁灰釉を施し、高台は露胎。九陶Ⅰ -2 期 (1594 ～ 1610 年代)。183-6 は肥前系陶器の片口である。内外面に鉄釉を施し、胴部下方は露胎。九陶Ⅰ期 (1590 ～ 1620 年代)。183-7 は肥前系の擂鉢である。口縁端部を平坦にして内側へ尖らせ、口縁部周辺のみに鉄釉を施す。九陶Ⅱ期 (1620 ～ 1630 年代)。

183-8 ～ 10 は土師器皿である。いずれも手づくね成形の京都系土師器皿で、外面に指頭圧痕をもつ灯明皿である。183-10 はいわゆる「へそ皿」で、内面に「の」字状のナデ上げ調整を施す。



第 182 図　第４遺構面遺構外出土遺物 (1)



第 183 図　第 4 遺構面遺構外出土遺物 (2)

(6) 第 5 遺構面

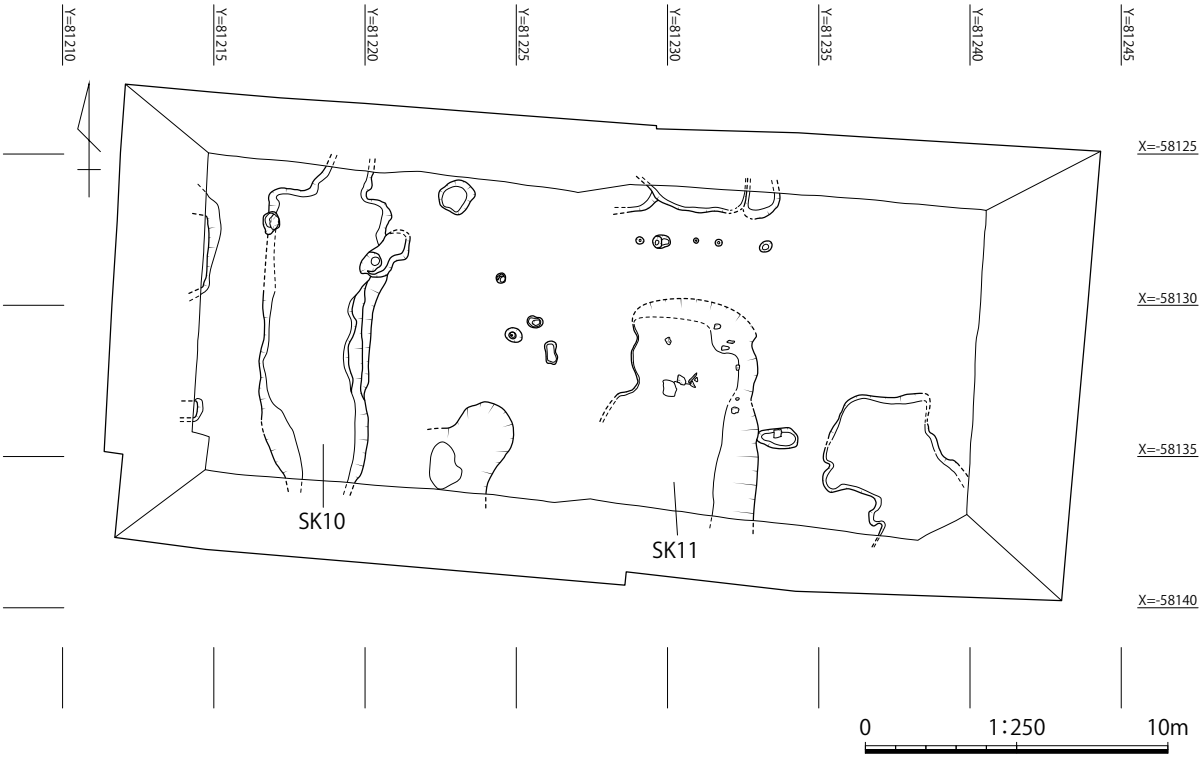
i) 第 5 遺構面の概要 (第 184 図)

第 5 遺構面は、標高 0.30 m で検出した遺構面である。遺構は、土坑 SK10・11 を検出した。

第 5 遺構面の基盤となる MJ4 層は、青灰色細砂と茶褐色有機質粘土の混合土を主体とする城下町初期造成段階の整地層である (第 124 図第 17 層)。層厚は 30㎝を測り、整地層を露呈した面で遺構を検出したことから、これを第 5 遺構面とした。

松江城下町絵図を基に調査区を概観すると、第 5 遺構面の時期に比定する堀尾期絵図には、第 16 ブロックの西端に屋敷地と藩士の名前が記載されているが、それ以外の場所については屋敷地名義はおろか境界線すら引かれていない空白地となっている。

第 5 遺構面は、城下町造成以前の旧地表面 (MJ5b 層) に盛土を施して造成された城下町形成時あるいは城下町形成直後の最初の遺構面と考えられるが、城下町の造成期間を明確に記した文献史料などの記録は残っておらず、正確な年代は分かっていない。幕府の承認のもと城とともに計画的に建設された城下町であり、松江城の築城が 1607(慶長 12) 年に着工、1611(慶長 16) 年頃に完成していたとするならば、城下町の造成もそれとほぼ同時期か、あまり間を置かずに行われたものであろう。遺構面の時期は、出土遺物の年代から 17 世紀初頭～前半を想定している。



第 184 図　第 5 遺構面平面図

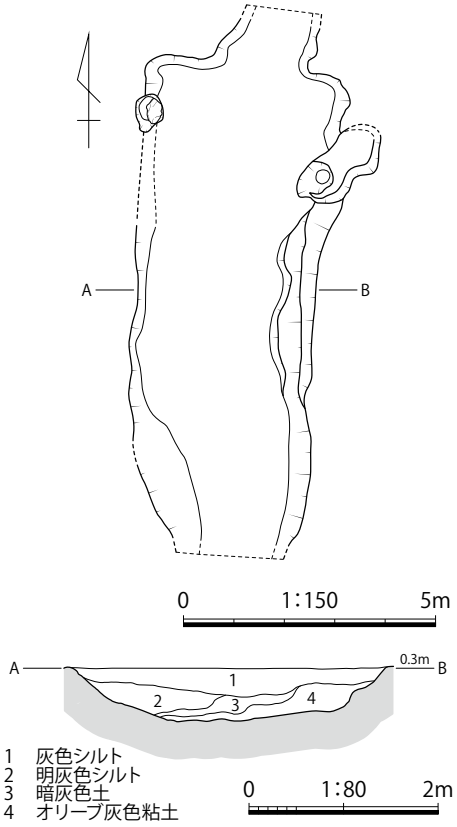
ii）第 5 遺構面の遺構と遺物

第 5 遺構面で検出した土坑は、平面的に見ると所々に窪みが存在するような形状で、いずれも浅い掘り込みをもつものであった。この状況から想定されるひとつの要因として、前述した第 4 遺構面の畠の耕作に伴う水溜施設などの造作により、第 5 遺構面の上面が削平されている可能性がある。本来の土坑の掘り込み面は、第 5 遺構面の検出面よりもやや上位に存在していたものと考えられる。

土坑 SK10(第 185 図)

調査区の西側で検出した大形土坑である。検出面は標高 0.32 mで、平面形は長楕円形と考えられるが、北端と南端は調査区外まで延びる。規模は上縁長軸が 10.80 m、短軸が 3.60 m、深さ 0.54 mを測る。

土坑埋土は 4 層に分層でき、上層から灰色シルト (第 1 層)、明灰色シルト (第 2 層)、暗灰色土 (第 3 層)、オリーブ灰色粘土 (第 4 層) が堆積する。第 3 層の暗灰色土には有機物が混ざり、この土層から陶器片が出土したが、細片のため図化できるものではなかった。

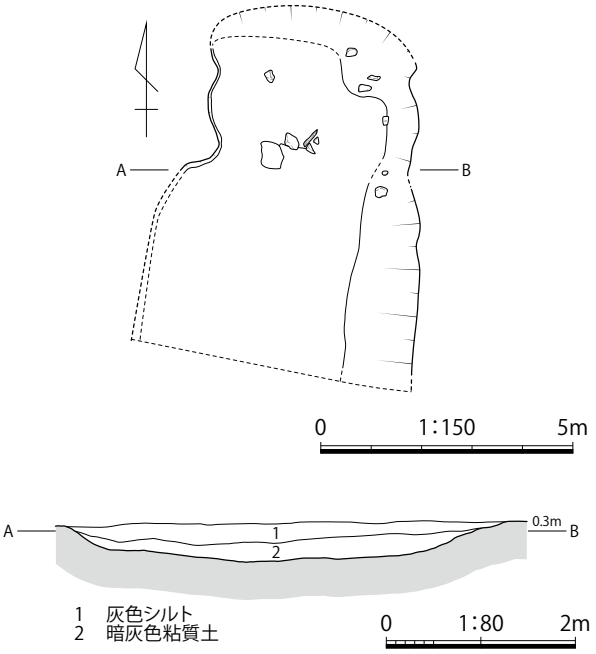


第 185 図　SK10 平面図・断面図

土坑 SK11(第 186 図)

調査区の中央で検出した廃棄土坑である。検出面は標高 0.38 mで、平面形は歪んだ楕円形を呈する。規模は上縁長軸が 7.20 m、短軸が 4.00 m、深さ 0.40 mを測る。

土坑埋土は 2 層に分層でき、下位に堆積する第 2 層の暗灰色粘質土から、陶磁器・瓦が出土している。



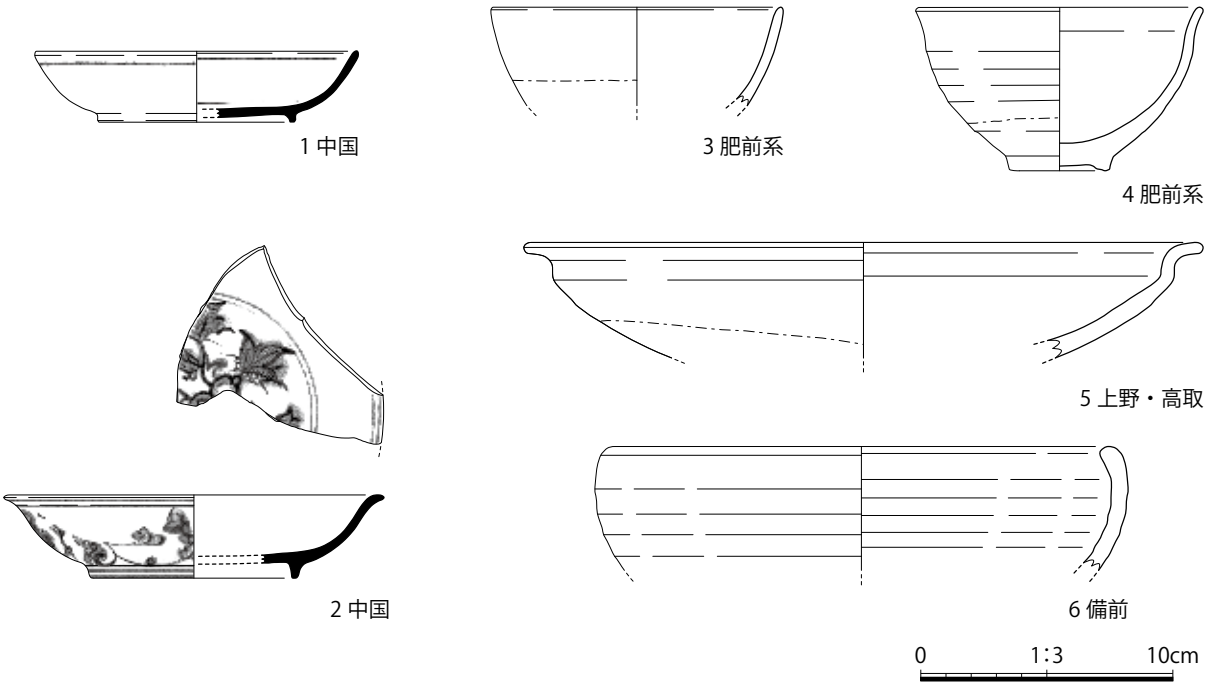
第 186 図　SK11 平面図・断面図

SK11 出土遺物 (第 187 図)

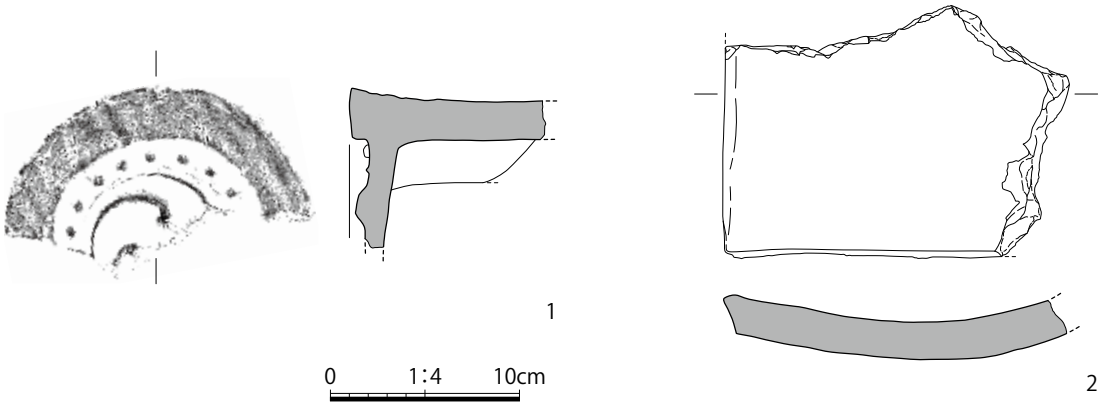
ここでは SK11 の埋土から出土した遺物を掲載する。187-1・2 は中国磁器である。187-1 は景徳鎮系の青花皿である。16 世紀末～ 17 世紀初頭のもので、森氏分類青花皿 E 群に該当する。187-2 は景徳鎮系の青花皿である。端反形で、内面に花卉唐草文を描く。16 世紀末～ 17 世紀初頭のもので、森氏分類青花皿 B1 群に該当する。

187-3 ～ 6 は国産陶器である。187-3 は肥前系陶器の碗である。内外面に灰釉を施す。九陶Ⅰ -2 期 (1594 ～ 1610 年代)。187-4 は肥前系陶器の碗である。天目形の碗で、内外面に灰釉を施す。九陶Ⅰ -2 期 (1594 ～ 1610 年代)。187-5 は上野・高取 (福岡) の大皿である。内外面に藁灰釉を施し、口縁部を鍔縁状におさめる。17 世紀初頭。187-6 は備前の鉢である。17 世紀初頭。

187-7・8 は瓦である。187-7 は軒丸瓦である。圏線がない左巻きの三巴文とその外側に珠文が配される。松江城軒丸瓦分類 A-3 類に該当する。187-8 は平瓦である。外面に被熱した痕跡が見られる。



第 187 図　SK11 出土遺物 (1)



第 188 図　SK11 出土遺物 (2)

第 5 遺構面遺構外出土遺物 (第 189 図)

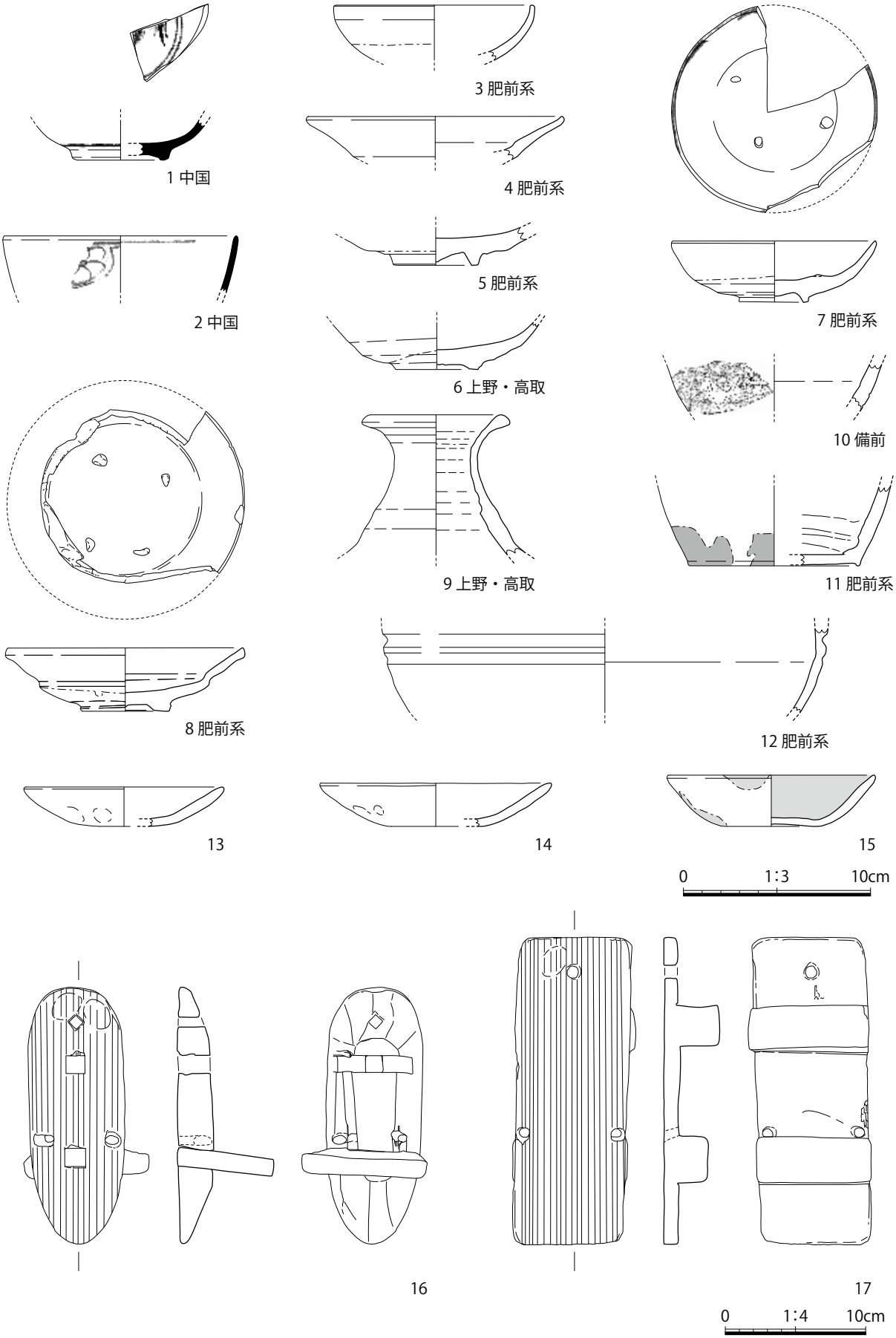
ここで掲載する遺物は、第 5 遺構面直上から出土したものを遺構外出土遺物として取り扱う。

189-1・2 は中国磁器である。189-1 は漳州窯系の青花碗である。見込みに植物文を描く。16 世紀末～ 17 世紀初頭のもので、森氏分類青花碗 B 群に該当する。189-2 は漳州窯系の青花碗である。直口碗で、胴部外面に花文を描く。16 世紀末～ 17 世紀初頭のもので、森氏分類青花碗 H 群に該当する。

189-3 ～ 12 は国産陶器である。189-3 は肥前系陶器の皿である。内外面に緑灰釉を施し、体部下方は露胎。九陶Ⅰ -2 期 (1594 ～ 1610 年代)。189-4 は肥前系陶器の皿である。体部中央に段をもつもので、内外面に透明釉を施す。九陶Ⅰ -2 期 (1594 ～ 1610 年代)。189-5 は肥前系陶器の皿である。胎土目のグループの皿で、内外面に灰釉を施し、高台は露胎で兜巾高台をもつ。九陶Ⅰ -2 期 (1594 ～ 1610 年代)。189-6 は上野・高取 (福岡) の皿である。内外面に藁灰釉を施し、高台は露胎。17 世紀初頭。189-7 は肥前系陶器の皿である。一部欠損するが、見込みに 3 箇所の胎土目痕が残る。内外面に灰釉を施し、口縁端部に鉄釉で口銹を施す。体部下方～高台は露胎。九陶Ⅰ -2 期 (1594 ～ 1610 年代)。189-8 は肥前系陶器の皿である。一部欠損するが、見込みに 4 箇所の胎土目痕が残る。体部中央に段をもつもので、内外面に透明釉を施す。体部下方～高台は露胎。九陶Ⅰ -2 期 (1594 ～ 1610 年代)。189-9 は上野・高取 (福岡) の瓶である。頸部のみ残存し、内面口縁部周辺～外面にかけて藁灰釉を施す。17 世紀初頭。189-10 は備前の徳利の小片である。外面に窯印と思われる線刻が見られる。189-11 は肥前系陶器の瓶である。底部のみ残存し、内面は無釉で外面に鉄釉と銅緑釉の掛け分けを施す。九陶Ⅰ期 (1580 ～ 1610 年代)。189-12 は肥前系陶器の壺甕類である。胴部外面に 2 条の段をもつもので、内面は無釉で外面に銹釉を施す。17 世紀初頭。

189-13 ～ 15 は土師器皿である。いずれも手づくね成形の京都系土師器皿で、外面に指頭圧痕をもつ。189-14・15 は内面に煤が付着することから灯明皿として使用されたものと考えられる。

189-16・17 は木製品である。189-16 は丸型差込下駄である。木取りは柾目、歯高は 5.9㎝を測る。前緒付近には足の指の痕跡が残る。189-17 は角型連歯下駄である。木取りは柾目、歯高は 3.0㎝を測る。前緒付近には足の指の痕跡が残る。



第 189 図　第 5 遺構面遺構外出土遺物

（7）第６遺構面

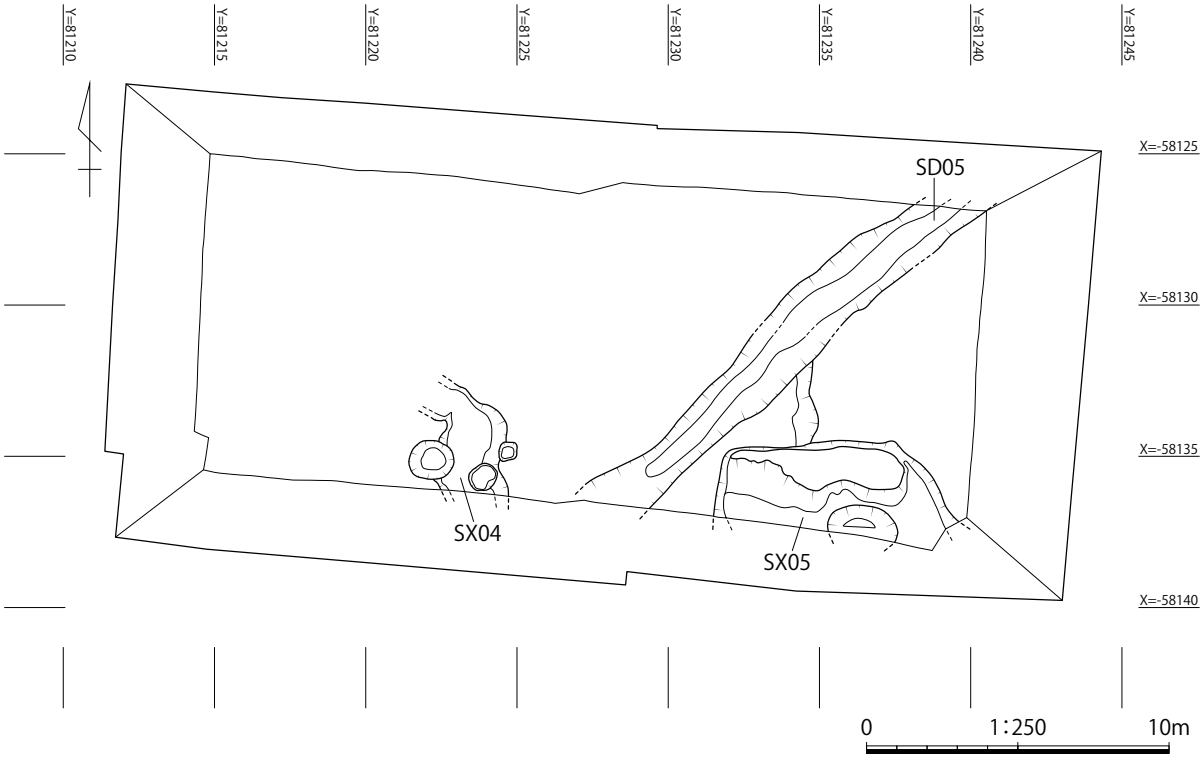
ｉ）第６遺構面の概要（第 190 図）

第６遺構面は、標高０ｍで検出した城下町形成以前の旧地表面である。本遺跡の旧地表面は西から東に向かって緩やかに傾斜している。遺構は、調査区の中央部～東側で溝状遺構 SD05、南側で性格不明遺構 SX04・05 を検出した。SD05 は北東から南西方向に向かって延びる溝状の落ち込みで、規模は長さ 14.60 m、幅 2.00 m、深さ 0.20 mを測る。この溝状の落ち込みは自然流路の可能性があるが、深さが浅いことから旧地表面の凹凸を検出している可能性も考えられる。また、第６遺構面以後に施される城下町初期造成土の盛土による荷重痕の可能性もある。SX04・05 の平面形は土坑状で、浅い掘り込みをもつ遺構である。前述した第５遺構面の段階に掘り込まれた土坑の底部を検出している可能性があり、遺物は出土していない。

第６遺構面の基盤となる MJ5b 層は、下位の MJ6b 層上面に層厚 30㎝のほぼ均一の厚さで堆積している。MJ5b 層は、上層から茶褐色有機質粘土（ラミナ層）・黒色有機物層・淡茶色有機質粘土・暗褐色シルト質細砂が堆積し、いずれも未分解の有機物層である（第 124 図第 18 ～ 21 層）。

これまでの調査成果から、第 16 ブロックにおける旧地表面の形成土は、土壌が未分解でラミナ状に堆積する MJ5b 層がほぼ全域で確認されている。16-6 区でもその状況は変わらず、旧地表面上面の一部ではコケ類の植物質が繁茂していた痕跡を検出している。

第６遺構面上面では鉄砲玉や漆器椀の小片が出土していることから、付近で人々の生活が営まれていた可能性を示すものと捉えられる。遺構面の時期は、旧地表面の形成土が堆積した時期の上限は不明だが、下限は第５遺構面の城下町初期造成土が盛られる前段階までを想定している。



第 190 図　第６遺構面平面図

第 4 項　小結

前項までに発掘調査成果の概要を示し、16-6 区で検出した遺構・遺物について検討を加えた。本項ではまず、調査地が松江城下町絵図のどこに位置するのかを提示し、調査地周辺の様子を概観する。そして、調査地の遺構面の時期区分と変遷を整理し、併せて調査成果についてのまとめを行うことにしたい。

(1) 松江城下町絵図に見る調査地とその周辺

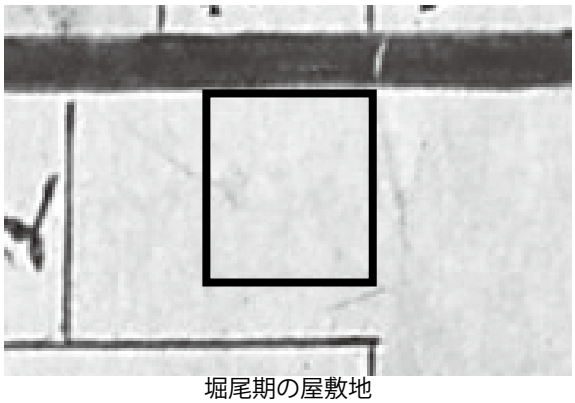
現存する江戸時代の松江城下町絵図から、17 世紀前半～ 19 世紀後半 (堀尾期・京極期・松平期) の松江城下町における屋敷地を知ることができる。ここでは屋敷地の変遷を知る上で資料とした絵図の詳細・屋敷地名義を各絵図の説明の中で記載する。なお、各絵図左側には調査地周辺部分に第 16 ブロックを示す黒枠で加筆したものを、右側にはその部分を拡大し、16-6 区推定箇所を示す黒枠を加筆して掲載した。

第 16 ブロック (南田町) は、江戸時代を通して中級～下級家臣の屋敷地や大橋家の与力屋敷が配置されていた街区となっていた。調査地である 16-6 区は、堀尾期～京極期絵図では道路に囲まれた区画の中の空白地となっているが、松平期中期絵図では大橋茂右衛門の広大な屋敷地となり、その北側の一画には大橋家の直臣が住まう与力屋敷が東西に 8 軒配置される。この与力屋敷うち、西端から 2 軒目の屋敷地が 16-6 区に該当する。松平期中期以降の絵図に記載される屋敷地名義の向きを根拠とした場合、屋敷地の表口 (玄関部分) は江戸時代を通して城山北公園線に面した北側にあたる。

以下では各時期の絵図 5 点を通して調査地周辺の様子を概観する。

①堀尾期絵図 (第 191 図)　堀尾氏が統治していた時期の絵図として「堀尾期松江城下町絵図」(絵図作成年代：1620 ～ 33 年、島根大学附属図書館所蔵) がある。第 16 ブロックが所在する街区には西側に 2 軒の屋敷地が配置され、明瞭な界線で屋敷地を区画している。街区の中央部～東側には屋敷地名義の記載は見られず、境界線すら引かれていない。16-6 区が比定する地点は空白地となっているが、城下町として計画的に整備された街区の中であることは間違いない。

第 191 図　堀尾期松江城下町絵図



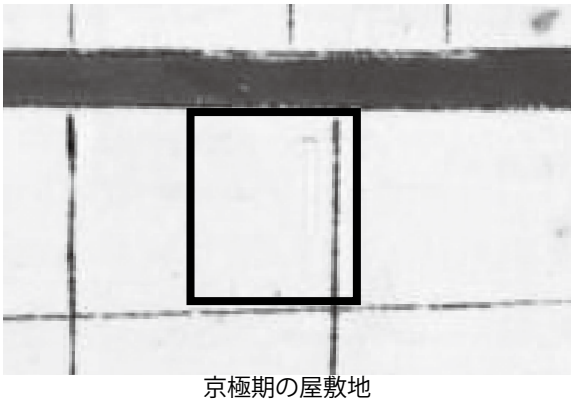
堀尾期の屋敷地

※絵図は上が北

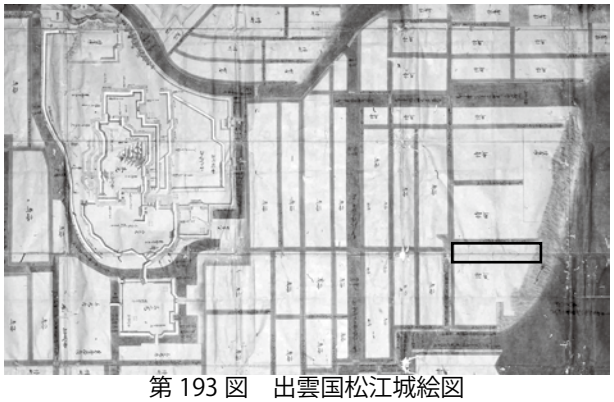
②京極期絵図 (第 192 図)　京極氏が統治していた時期の絵図として「寛永年間松江城家敷町之図」(絵図作成年代：1634 ～ 37 年、丸亀市立資料館所蔵) がある。この絵図の南田町の中央部に描かれている入堀から東側は、屋敷地を区画する境界線は引かれているものの屋敷地名義は記されておらず、全域が空白地となっている。第 16 ブロックが所在する街区には、堀尾期絵図では西側に 2 軒の屋敷

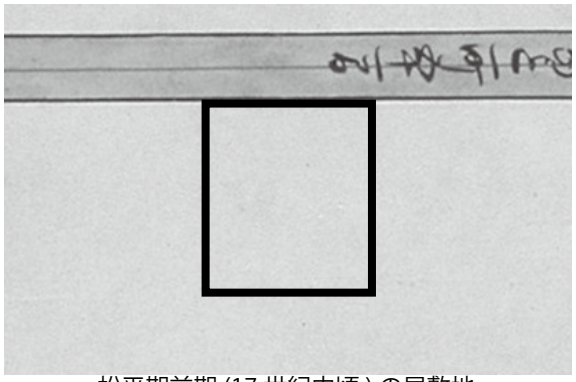
地名義が記載されていたが、京極絵図ではその記載が見られない。16-6 区が比定する地点は、東側に境界線が見られる以外は堀尾期絵図と同様に空白地のままである。

第 192 図　寛永年間松江城家敷町之図


京極期の屋敷地

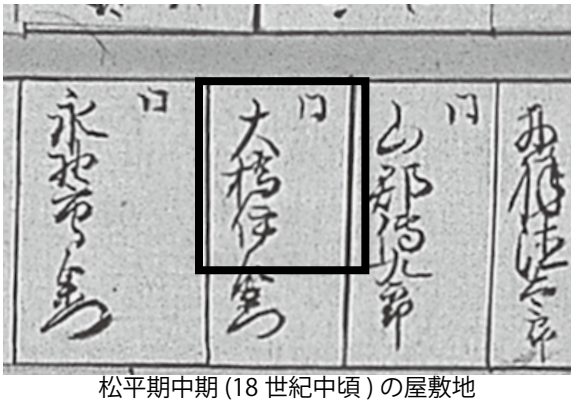
③松平期前期絵図 (第 193 図) 「出雲国松江城絵図」(絵図作成年代：1644 ～ 48 年、国立公文書館所蔵) は、松平氏が統治を開始した寛永 15(1638) 年に近く、17 世紀中頃の正保年間に幕府が諸藩に命じて作成させた絵図である。絵図には「侍町」の記載しか見られないが、文献ではこの時期に大橋家の屋敷地となっている。


第 193 図　出雲国松江城絵図


松平期前期 (17 世紀中頃) の屋敷地

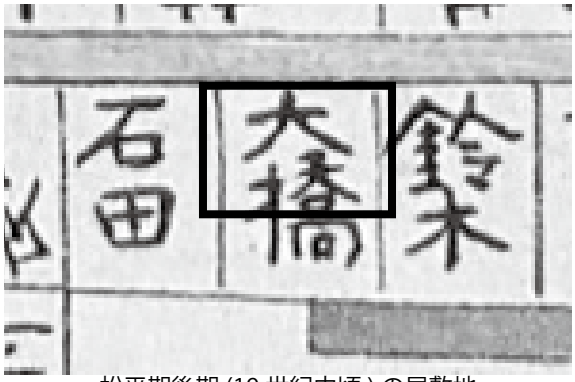
④松平期中期絵図 (第 194 図) 「松江城絵図」(絵図作成年代:1736 ～ 48 年、島根県立図書館所蔵) は、18 世紀中頃に作成された絵図である。第 16 ブロックが所在する街区は、城山北公園線に面した南側に武家屋敷が 1 軒、大橋家の与力屋敷が 8 軒建ち並んでいる。与力の屋敷地名義が記載されている絵図は、現段階ではこの絵図が最も古い。16-6 区が比定する地点には「大橋伊左衛門」の記載が見られ、8 軒の与力屋敷のうち西端から 2 軒目の屋敷地に該当する。

第 194 図　松江城絵図


松平期中期 (18 世紀中頃) の屋敷地

⑤松平期後期絵図 (第 195 図) 「松平期松江城下町絵図」(絵図作成年代：1825 ～ 51 年、島根大学附属図書館所蔵) は、19 世紀中頃に作成された絵図である。この絵図に記載されている与力屋敷の裏手には、小規模な堀が描かれている。16-5 区が比定する地点には「大橋」の記載が見られ、文献から「大橋伊左衛門」の屋敷地に該当するものと考えられる。

第 195 図　松平期松江城下町絵図



松平期後期 (19 世紀中頃) の屋敷地

(2) 遺構面の時期区分と変遷

ここでは、年代が古い下層の遺構面から年代が新しい上層の遺構面の順に遺構面の時期区分と変遷を示すことで、調査成果のまとめを行う。

i) 遺構面の時期区分

主な盛土や整地層、遺構の状況などを併せると遺構面の変遷は七つの時期に区分される。

第 6 面：MJ5b 層上面が相当する城下町形成以前の旧地表面を検出した第 6 遺構面である。本遺跡で検出した旧地表面は、茶褐色有機質粘土 (ラミナ層) を露呈した上面で、この土壌は未分解の植物遺体を含む有機物層である。城下町が形成される以前の時期に堆積した土壌で、実年代の手がかりはないが、これより上位の層序での出土遺物の状況から見て 17 世紀初頭までが下限となるものと考えられる。

第 5 面：MJ4 層上面が生活面となっていた時期に相当する第 5 遺構面である。城下町初期造成などを含む城下町建設当初の時期から始まり、17 世紀初頭～前半の城下町成立期にあたるものと考えられる。陶磁器は中国磁器・肥前系陶器・備前陶器が出土しており、いずれも 17 世紀初頭の古い時期を示すものである。

第 4 面：MJ3c 層が形成され、本遺跡では畠地として利用されていた時期に相当する第 4 遺構面である。この時期の上限は城下町成立期以後の堀尾期～京極期、下限は松平期初頭の与力屋敷が構築される以前までの 17 世紀前半を想定している。陶磁器は中国磁器・朝鮮白磁・瀬戸美濃陶器・肥前系陶器が出土している。

第 3-2 面：MJ3b 層上面が生活面となり、本遺跡では与力屋敷を配置して礎石建物が構築される時期に相当する第 3-2 遺構面である。第 3 遺構面では、火災が契機と考えられる造成と礎石建物の建て替えが行われており、礎石建物の建て替えが行われる前の段階がこの時期に該当する。屋敷地では島状整地による造成が行われ、17 世紀前半～後半までが含まれる。陶磁器は中国磁器・肥前系陶磁器が出土している。

第 3-1 面：MJ3a 層上面が生活面となり、火災が契機と考えられる造成と礎石建物の建て替えが行われた後の時期に相当する第 3-1 遺構面である。礎石建物は一部拡張され、屋敷地では山土を主体とする嵩上げ造成が行われ、17 世紀後半～ 18 世紀中頃までが含まれる。陶磁器は中国磁器・肥前系陶磁器・信楽陶器・備前擂鉢・在地系陶器・須佐擂鉢が出土している。

第 2 面：MJ2 層上面が生活面となっていた時期に相当する第 2 遺構面である。部分的に撹乱を免れた場所では嵩上げ造成による整地が行われていた状況が見られ、18 世紀後半が主体となる時期である。陶磁器は肥前系磁器・京信系陶器・在地系陶器が出土している。

第 1 面：MJ1 層上面が生活面となっていた時期に相当する第 1 遺構面である。部分的に撹乱を免れた場所では嵩上げ造成による整地が行われていた状況が見られ、19 世紀前半～中頃が主体となる時期である。陶磁器は肥前系磁器・瀬戸磁器・在地系陶器が出土している。

以下では各時期の状況についてまとめていくことにする。

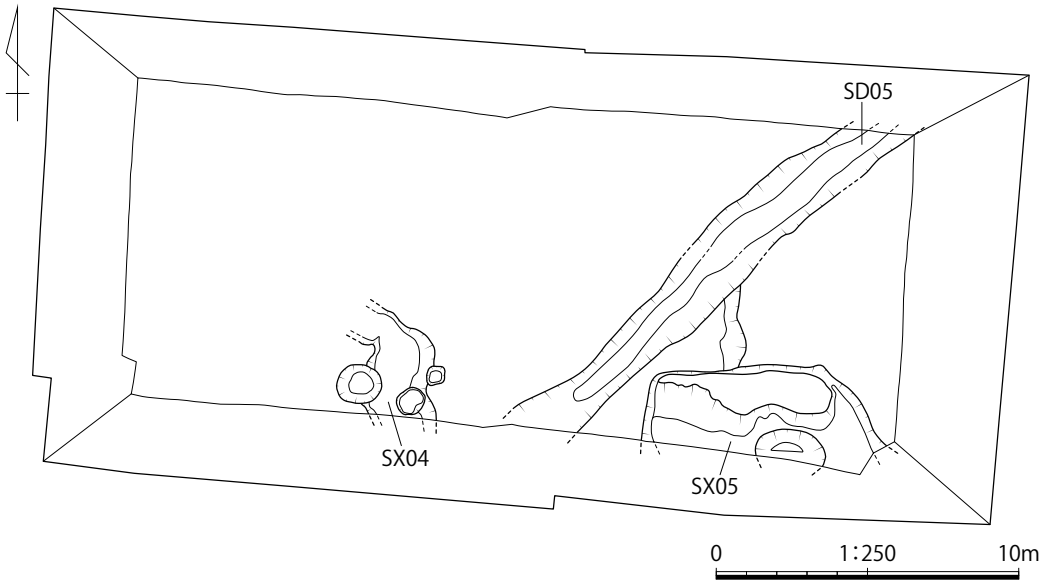
ii）遺構面の変遷

第 6 面：城下町形成以前 (第 196 図)

今回の発掘調査で検出した最も古い遺構面は、17 世紀初頭以前の MJ5b 層上面で、城下町形成以前の旧地表面に相当する第 6 遺構面である。検出した旧地表面は、標高 0 mで茶褐色有機質粘土 (ラミナ層) を露呈した上面で、この土壌は未分解の植物遺体を含む有機物層である。有機物と粘土が互層状に堆積することから、水際あるいは水辺からやや離れた陸地であったことが想定される。

城下町形成以前の南田町周辺は低湿地であったと考えられており、沼沢地や湖沼などの湿原植物が繁茂する湿地に集積した未分解の植物遺体の堆積物が見られることは、当地周辺が低湿地であったことを示すひとつの証拠として捉えることができる。

本遺跡の旧地表面は、西から東に向かって緩やかに傾斜している。検出した SD05 は、北東から南西方向に向かって延びる溝状の落ち込みで、旧地表面の凹凸を検出している可能性が考えられる。

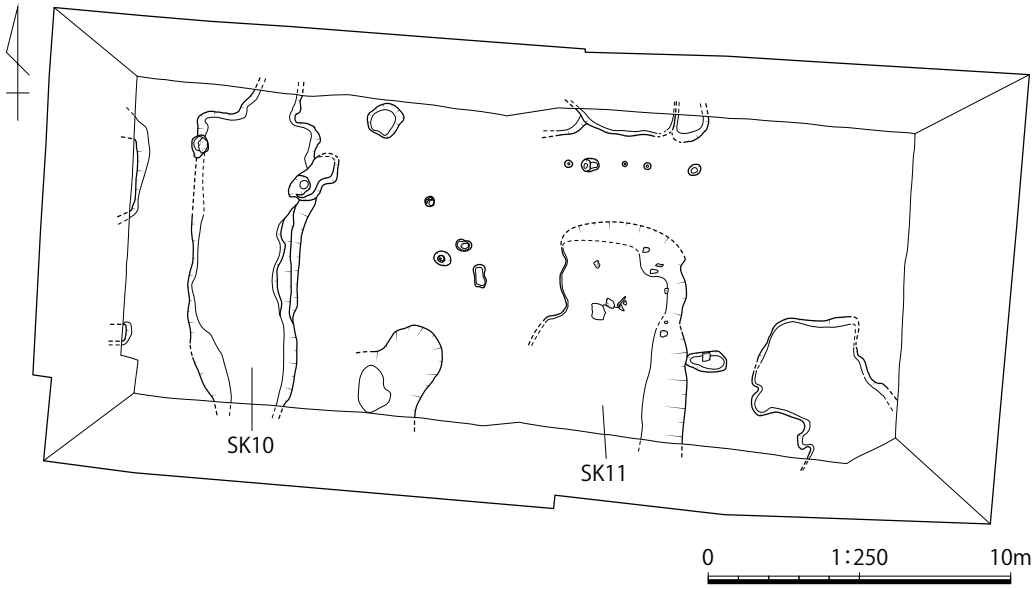


第 196 図　16-6 区遺構変遷図 (1)

第 5 面：17 世紀初頭～前半 (第 197 図)

城下町初期造成段階の遺構面として確認できたのは、MJ4 層上面の第 5 遺構面である。MJ4 層は、城下町形成以前の旧地表面の上に盛土された最初の整地層であり、堀尾氏が松江城築城に着手して城下町建設を行った段階を想定している。この上面で検出した遺構は、17 世紀初頭～前半に存在したものと考えられる。

検出した SK10・11 は、歪んだ長楕円形を呈する土坑で、SK11 の埋土には陶磁器片を含むことから廃棄土坑と考えられる。ここでは第 5 面の時期に該当する堀尾期絵図を根拠として、当該期の本遺跡における土地利用の形態を考察しておきたい。堀尾期絵図には、武家屋敷として配置されている場所に屋敷地と屋敷地を区画するための明瞭な境界線が描かれ、区割りされた屋敷地には藩士の名前が記載されている。本遺跡が推定される場所には藩士の名前の記載はなく、境界線すら描かれていない空白地にあたる。ただ、道路に囲まれた区画に位置し、城下町として整備された街区の中であることは間違いない。本遺跡では、この時期は生活痕跡が希薄で、初期造成当初から建物が建ち並ぶような景観ではなかったことが考えられる。ただし、検出した廃棄土坑や遺構面の出土遺物から、生活が営まれていたことは明白である。



第 197 図　16-6 区遺構変遷図 (2)

第 4 面：17 世紀前半

MJ3c 層上面の第 4 遺構面は、調査区の中央部～東側に広がる畠跡 SN01 を検出したことから、当地は畠地として利用されていたことが明らかとなった。土壌分析から SN01 ではソバやアズキなどが栽培されていた環境であったという結果が得られた。

SN01 が形成された時期の上限は城下町成立期以後の堀尾期 (17 世紀初頭以降) ～下限は松平期初頭の与力屋敷が構築される以前の京極期まで (1637 年) を想定している。遺構面に含まれる遺物から 17 世紀前半には畠の形成および機能していたものと考えているが、「SN01 出土遺物」としたものの中には第 5 遺構面の出土遺物と接合関係にある個体が含まれている。そのため、第 4 遺構面は以

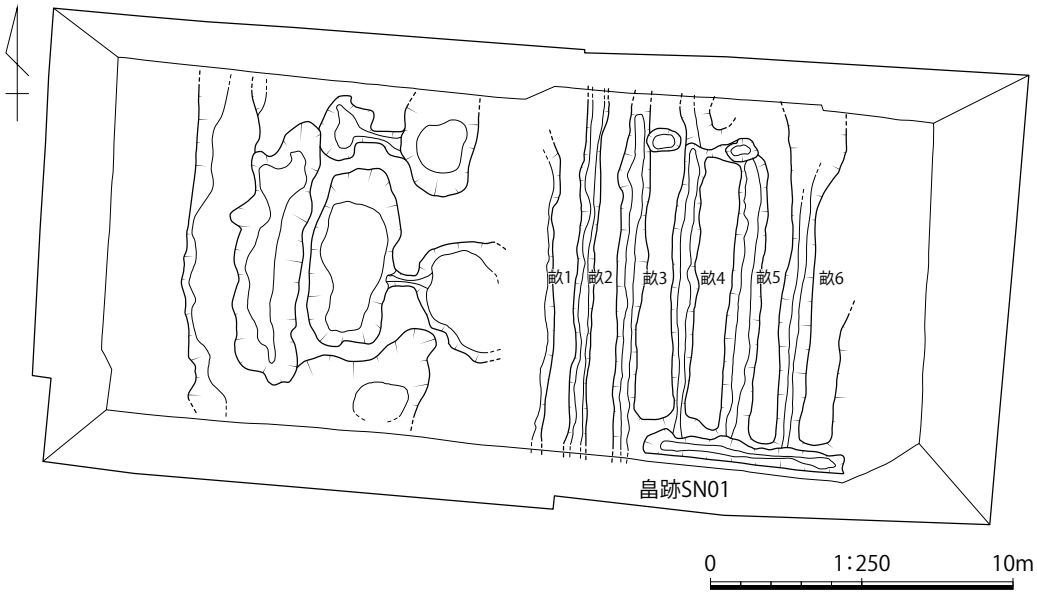
下の①～③の可能性を考えておきたい。

①第５遺構面を開墾して新たに畠地 (第４遺構面) として形成した。この場合、第５遺構面で検出した遺構は撹乱を受け、深い遺構の底部を検出したことになる。遺物は第５遺構面の遺物が撹拌されたものとなり、第４遺構面でもほぼ同じ遺物組成を示す。耕作によって撹拌されていることを積極的に捉えるのであれば、耕作土中から出土した遺物に細片が多いという事実とも符合する。

②第５遺構面を開墾して新たに畠地として形成した。この場合、①と同じく第５遺構面で検出した遺構は撹乱を受けたものとなる。遺物は陶磁器や瓦があり、瓦に被熱痕跡をもつことから火事場整理で当地に廃棄した。その後の耕作により遺物が撹拌され、畠地として形成された。

③第４遺構面を新たに畠地として形成するため、遺物を含む土壌を搬入した。つまり、出土遺物は当地のものではない。肥前系陶器の遺物組成は、第５遺構面では胎土目のみの組成となるが、第４遺構面では古い段階の砂目のものが入る。遺物には時期差があり、遺物の入った土壌を搬入していたことが想定される。この場合、耕作土の供給源をどこに求めるかという点が問題となる。土壌分析では調査地周辺の地下に広く分布する旧地表面土層 (MJ5b 層) を母材として耕作土に利用したとされる。これを根拠とするなら、当地に近接する地点を土壌の供給源とし、MJ5b 層と MJ4 層が撹拌された土壌を SN01 に搬入した可能性が高くなる。また、遺物は MJ4 層中 (第５遺構面) に混入していたものと捉えられる。

このように、第５遺構面を開墾した場合①・②と新たに土壌を搬入した場合③とで見解が変わってしまう結果となる。第５遺構面出土遺物と接合関係にある個体が含まれていることを根拠とすると、第５遺構面を開墾した場合①・②の可能性が高くなるが、厳密に畠地の機能時期を絞り込むことができない。「堀尾期に開墾して畠地とした」「京極期に開墾して畠地とした」「堀尾期に開墾して京極期まで畠地として利用した」ということが想定されることから、第４遺構面は堀尾～京極期の間に機能していた遺構面として幅をもって考えておきたい。



第 198 図　16-6 区遺構変遷図 (3)

第 3-2 面：17 世紀前半～後半

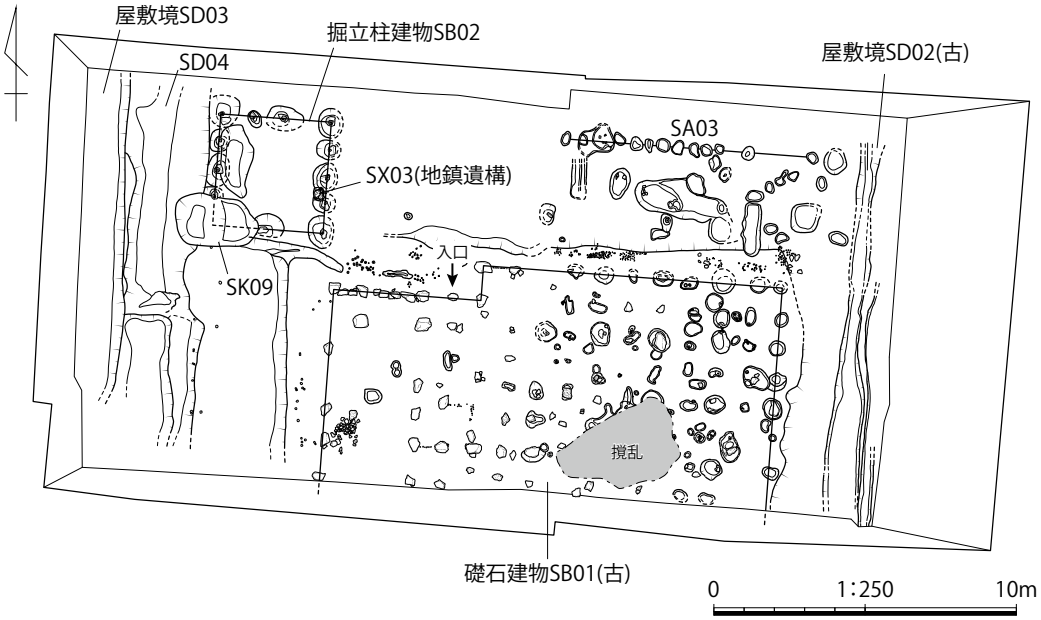
MJ3b 層上面の第 3-2 遺構面は、第 4 遺構面の畠を埋め立てた整地層上に形成された遺構面である。ここでは屋敷地の整地手法として「島状整地」を採用していることが明らかとなった。当地が大橋家の屋敷地として拝領される時期は、「松江藩列士録」から松平期以降 (1638 年～) であることが分かっており、与力屋敷の礎石建物が構築される時期はこれとほぼ同時期と理解している。

第 3 遺構面では、火災が契機と考えられる建物部分だけの造成と礎石建物の建て替えが行われており、礎石建物の建て替えが行われる前の古段階がこの時期に該当する。第 3-2 遺構面は、土坑 SK09・溝 SD04 や遺構面に含まれる遺物から 17 世紀前半～後半に存在したものと考えられる。

遺構は、礎石建物跡 SB01(古)、掘立柱建物跡 SB02、地鎮遺構 SX03、溝 SD02(古) ～ 04、柵 SA03、土坑 SK09 がある。屋敷地の規模は、調査成果から東西 24 m×南北 40 mが推定され、松江城絵図 (元文～延享年間) から南北長方形に展開する屋敷地の北側半分程度を調査したこととなる。屋敷地の間口は、屋敷境 SD01(古) ～ 03 までの間隔から東西 24 m (約 12 間) と復元できる。

建物の配置は、城山北公園線に面した北側が表口となる。調査区の中央部に東西桁行 7 間半×南北梁行 3 間以上の規模で礎石建物 SB01(古) があり、その北西側に東西桁行 2 間×南北梁行 2 間の掘立柱建物 SB02 を付設している点が特徴的である。建物＋付属施設のセットは、当該期の与力屋敷では通例的に検出される遺構となっている[35]。SB01(古) の建物範囲内の一部では炭化層の堆積が見られ、建物の周囲では火災処理の段階に廃棄された建築部材や有機物層の堆積が確認されていることから、SB01(古) は一定期間機能した後に火災に遭っていたことが想定される。SB02 と重複する位置で検出した地鎮遺構 SX03 は、SB02 を構築する際の地鎮めに関連する遺構の可能性がある。

屋敷境は、SD02(古)・03・04 がある。いずれも素掘り溝で、第 16 ブロックでのこれまでの調査成果から SD02(古) の管理・所有については、16-6 区に該当する屋敷地内に含まれるものと考えられる。SD04 から出土した遺物は、火災処理のために一括廃棄されたものと捉えられる資料である。



第 199 図　16-6 区遺構変遷図 (4)

第 3-1 面：17 世紀後半～ 18 世紀中頃

MJ3a 層上面の第 3-1 遺構面は、火災が契機と考えられる新たな造成と礎石建物の建て替えが行われた整地層上に形成された遺構面である。第 3 遺構面において礎石建物の建て替えおよび西側への拡張が行われた後の新段階がこの時期に該当する。第 3-1 遺構面は、土坑 SK04 ～ 08 や遺構面に含まれる遺物から 17 世紀後半～ 18 世紀中頃に存在したものと考えられる。

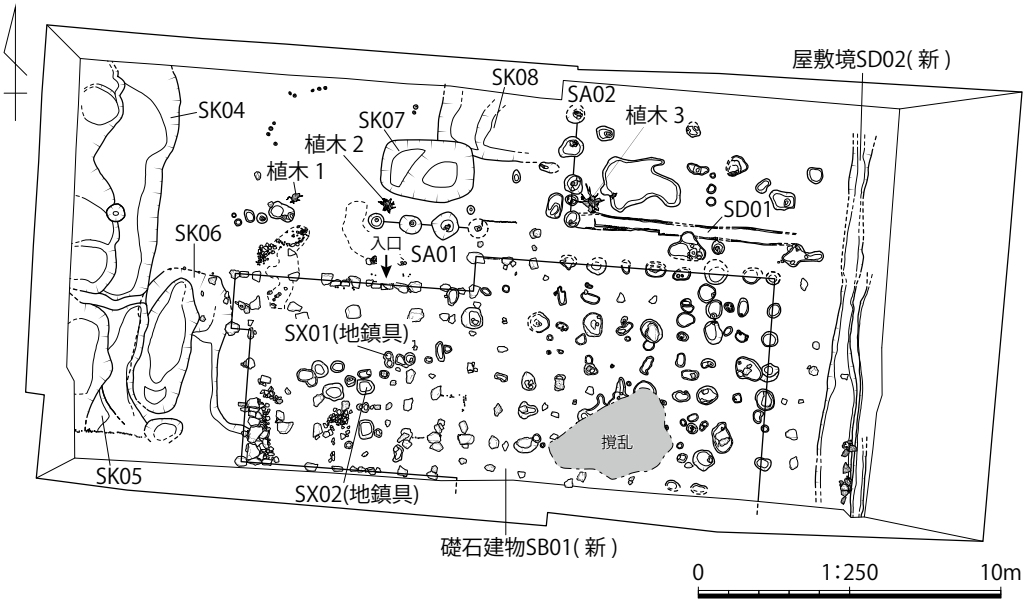
遺構は、礎石建物跡 SB01(新)、曲物埋納遺構 SX01・02、溝 SD01・02(新)、柵 SA01・02、土坑 SK04 ～ 08 がある。SB01(新) は、第 3-2 遺構面の段階に構築された SB01(古) の礎石を利用しながら建て替えを行っている。また、建物範囲周辺の屋敷地の造成は、建物の西側および北側に山土を使用して嵩上げ造成を施している。SB01(新) が位置する建物範囲内では厚さ約 5㎝の盛土が見られ、嵩上げ造成の際に礎石の高さが足りない部分には新たに礎石を置き直している。一部の礎石では上面が赤変しているものや黒みがかるものが見られることから、火災に遭っていたことを示すものである。建物範囲内の造成土は有機物を含む黒灰色粘質土であるのに対し、建物範囲外では浅黄色～橙褐色粘質土の山土が検出されていることから、建物範囲内は火災処理の後に施された盛土と捉えている。第 3-2 遺構面で検出した SB01(古) の規模は東西桁行 7 間半で全長 15.00 mを測るが、その後の建て替えによる増築部分は西側へ 1 間半 (3.00 m) 程度拡張して、第 3-1 遺構面の段階に構築した SB01(新) の規模は最終的に東西桁行 9 間 (18.00 m) となる。建物内部には、三和土が施される土間空間 (表口) や木舞壁で仕切られた空間が想定できる成果が得られている。

SX01・02 は、SB01(新) の表口 (土間) の南側にあたる居住空間の床下と想定される場所で出土した曲物埋納遺構である。SB01(新) は火災に遭った後に建て替えられた礎石建物と考えられることから、現時点では SX01・02 は建物の建て替えの際に行われた地鎮儀礼に関わる遺構と捉えており、曲物は地鎮めに伴う祈祷具と考えている。この曲物埋納遺構は、松江城下町遺跡における祭祀・地鎮遺構として他に類を見ない事例であり、今後の資料の増加に期待したい。

第 3-1 遺構面では、建物周辺の空間利用において細かい改変が行われている。SD01 は、溝の両側に割竹が波板状に打ち込まれており、溝への土砂の流入を防ぐために構築された土留めの機能を持つ雨落ち溝である。SD02(新) は、第 3-2 遺構面で検出した SD02(古) と同じ位置に構築された屋敷境溝で、当初は素掘り溝となっていたが、第 3-1 遺構面の時期には石組を伴う素掘り溝に変化している。SB01(新) の北側では礫敷と植栽痕 (植木) を検出しており、礫敷部分は表口周辺のアプローチと捉えている。SA01・02 は、仕切り塀または柵と捉えられ、建物の北側に位置する植栽などを配置する空間と表口周辺のアプローチを区別するための遮蔽施設と考えられる。

SB01(新) の西側と北側で検出した SK04 ～ 08 は、いずれも遺物を含む廃棄土坑である。これらの土坑には焼土や炭化物とともに、家屋の廃材・屋敷内で使用された家財道具などが大量に廃棄されており、火災処理が第 3-1 遺構面で行われていたことを示している。出土した土坑中から出土した陶磁器類の時期は 17 世紀後半～ 18 世紀前半のものが主体となっている。陶磁器類の中には、外面の釉薬が熔解しているものや色絵の色飛びが見られるものが含まれており、これらは火災によって被熱されたものと理解している。被熱痕跡をもつ陶磁器類の年代から、第 3-1 遺構面では 1710 ～ 1720

年代の間に火災に遭っていたことが推定される。この火災処理として、建物の周囲に土坑を掘削して一括廃棄を行い、新たに屋敷地の造成を施したものと考えられる。

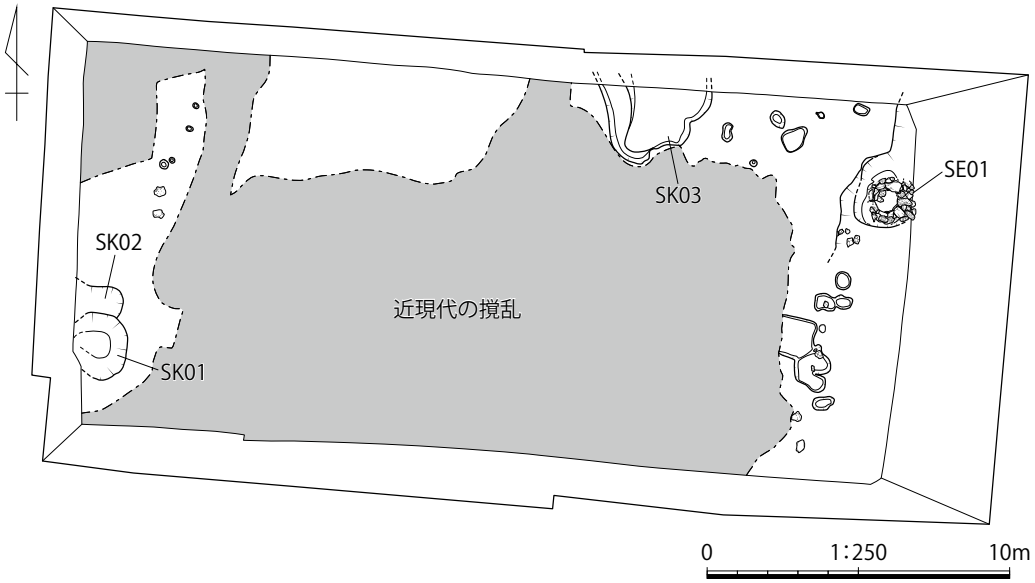


第 200 図　16-6 区遺構変遷図 (5)

第 2 面：18 世紀後半

MJ2 層上面の第 2 遺構面は、浅黄色粘質土による整地層上に形成された遺構面で、土坑 SK03 や遺構面に含まれる遺物から 18 世紀後半に存在したものと考えられる。

遺構は、石積井戸 SE01、土坑 SK01 ～ 03、その他の土坑群を検出した。第 2 遺構面は、調査区のほぼ全域にわたって一様に近現代の撹乱を受けていた。部分的に撹乱を免れた場所で遺構を検出していることから、この上面を第 2 遺構面の生活面と捉えている。第 2 遺構面では屋敷境溝は検出しておらず、土坑や石積井戸の検出位置から、屋敷地の東西間口が拡張されていた可能性が考えられる。

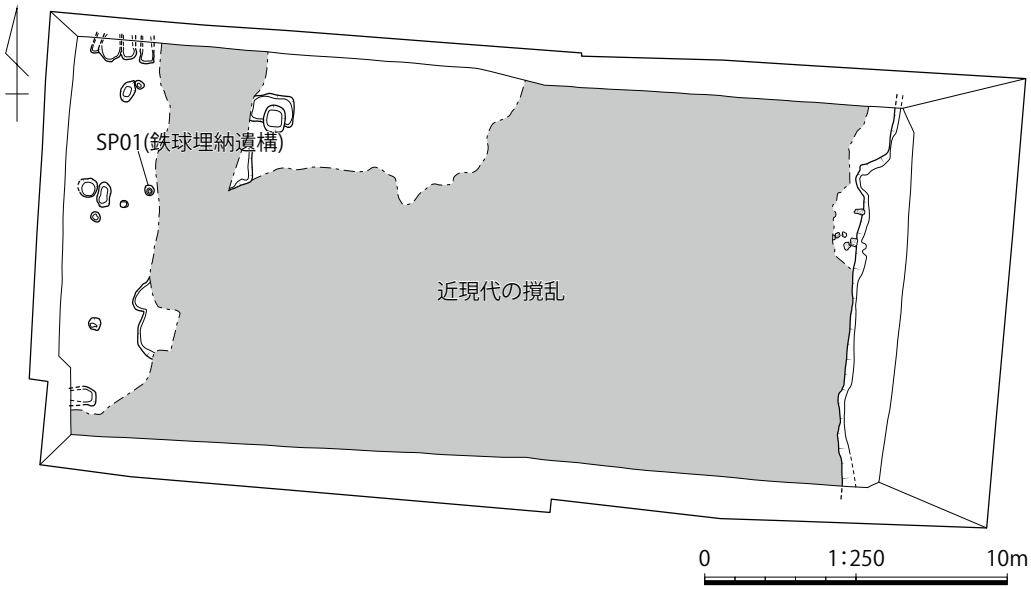


第 201 図　16-6 区遺構変遷図 (6)

第 1 面：19 世紀前半～中頃

MJ1 層上面の第 1 遺構面は、明褐色砂質土を主体とする盛土層上に形成された遺構面で、遺構面に含まれる遺物から 19 世紀前半～中頃に存在したものと考えられる。

遺構は、鉄球埋納遺構 SP01、その他の土坑群を検出した。第 1 遺構面は、調査区のほぼ全域にわたって一様に近現代の撹乱を受けていた。部分的に撹乱を免れた場所で遺構を検出していることから、この上面を第 1 遺構面の生活面と捉えている。



第 202 図　16-6 区遺構変遷図 (7)

松江城下町遺跡における鉄球の出土事例

松江城下町遺跡の発掘調査では、鉄球を使用した祈祷具や地鎮遺構を確認しており、これらは概ね 19 世紀中頃～後半 (幕末～明治初頭頃) の遺構面から検出している。地中に鉄球が納められている事例は、家屋の柱下 (大黒柱) や軒下などから出土する事例が報告されており、全国的には石川・滋賀・京都・和歌山・岡山・徳島・山口 (萩)・福岡での出土例があり、いずれも 19 世紀代に比定される。

松江市域では鉄球を使用した地鎮めの事例が多いものと考えられ、この時期には通例的に行われていた可能性がある。今回の調査で見つかった SP01 から出土した鉄球も屋敷地内における地鎮儀礼に関わる遺物と考えられ、松江城下町遺跡での鉄球の出土事例は 5 例目となる。以下の表 14 に、これまでに松江城下町遺跡で確認した鉄球の出土事例を提示しておく。

表 14　松江城下町遺跡における鉄球出土地点一覧

番号	遺跡名	点数	出土状況	出土地点・推定時期
1	松江城下町遺跡 (殿町 287)	1 点	遺構面	北屋敷地内・時期不明
2	松江城下町遺跡 (殿町 279)	1 点	在地系陶器甕内	南屋敷地内・19 世紀後半 (近代)
3	松江城下町遺跡 (殿町 279)	1 点	長方形祈祷具内	南屋敷地内・19 世紀後半
4	松江城下町遺跡 (母衣町 45-2 外)	1 点	祈祷具 (木箱) と共伴	MJR240・19 世紀後半
5	松江城下町遺跡 (南田町 134-1 外)	1 点	円形ピット内	与力屋敷地内・19 世紀中頃～後半

ⅲ）出土遺物の様相

16-6 区における出土遺物は、遺構面において陶磁器・土師器皿・金属製品・銭貨・石製品・木製品・瓦が出土した。遺物組成について、前述した遺構面に追従する形で以下にまとめておきたい。

第 6 面：城下町形成以前の旧地表面上面で鉄砲玉や漆器椀の小片が出土していることから付近で人々の生活が営まれていた可能性を示すものと考えられる。

第 5 面：17 世紀初頭～前半は中国磁器と肥前系陶器が主体で少量の備前陶器が出土する時期である。肥前系陶器の出土状況から見る限り胎土目段階のもので占められており、17 世紀前半の砂目段階のものは含まない。

SK11 や遺構面から出土した肥前系陶器は、生産地年代で九陶Ⅰ-2 期 (1594 ～ 1610 年代) を示すもので占められている。肥前系陶器では、胎土目段階の鉄絵を施す碗皿類が主体で、砂目段階の溝縁皿などは出土していない。この状況から本遺跡では、17 世紀初頭に近い時期の遺物組成を示しているものと考えられる。土師器皿は手づくね成形の京都系のみで、底部に糸切り痕をもつ在地系は出土していない。

第 4 面：17 世紀前半は、肥前系陶器が高い割合を占める状況は第 5 面と変わらず、中国磁器と肥前系陶器が主体で瀬戸・美濃陶器が出土している。肥前系陶器の出土状況は、胎土目段階のものと砂目段階のものが共伴して出土するようになる。第 4 面は畠の耕作地となっていた時期で、耕作土壌の撹拌によって下位の遺構面の陶磁器類が混入している可能性があり、第 5 面で出土した陶磁器類と接合関係にある個体も含んでいる。

第 4 面の中で特筆すべき遺物は、松江城下町遺跡では初出の朝鮮白磁である。出土した朝鮮白磁は 16 世紀後半～ 17 世紀初頭を示し、漆継ぎの痕跡をもつことから、修復しながら使用されていたことが考えられる資料である。土師器皿は手づくね成形の京都系のみで、底部に糸切り痕をもつ在地系は出土していない。

第 3-2 面：17 世紀前半～後半は、肥前系陶器が減少して肥前系磁器が増加する時期である。本遺跡では、17 世紀前半の中国磁器の景徳鎮系の青花碗皿類・肥前系陶器の砂目の二彩手皿や溝縁皿・肥前系磁器、17 世紀後半の肥前系陶器の呉器手碗や京焼風陶器が出土している。

特筆すべき事象は、中国磁器が数点ほどに減少して、この時期から肥前系磁器が入ってくることである。当地に与力屋敷を配置して礎石建物が構築される時期は 1638 年以降であることから、松江城下町における肥前系磁器の出現期は 1638 年以降ということが想定される。肥前系磁器は、生産地年代で九陶Ⅱ-2 期 (1630 ～ 1650 年代) の初期伊万里も含まれるが、九陶Ⅲ期 (1650 ～ 1690 年代) が中心となっている。土師器皿は京都系と在地系が出土している。京都系は直径 15 ～ 18㎝を測る大ぶりなもので、胞衣皿として使用していた可能性が考えられ、17 世紀後半には在地系の占める割合が優勢となる。

第 3-1 面：この時期は、17 世紀後半に肥前系陶器が減少して肥前系磁器が増加する時期から始まる。17 世紀後半は中国磁器の出土がほぼ認められず、肥前系陶磁器が充足される段階と考えられる。本遺跡では 1650 年代前後を示す肥前系磁器の色絵碗や色絵素地があり、肥前系陶器

は呉器手碗・京焼風陶器・刷毛目碗などが出土している。18 世紀前半は肥前系磁器が一定量出土する段階で、陶胎染付碗や蛇ノ目凹形高台の皿があり、有田の高級品も認められる。肥前系陶器は胎土が黒みがかる刷毛目碗や見込みに蛇ノ目釉剥ぎが施された銅緑釉の皿が出土している。なお、17 世紀後半にはに須佐擂鉢が入ってきており、それまでに備前擂鉢や肥前系擂鉢が中心の組成から､除々に主体が須佐擂鉢へ移り変わっていくことが想定される。

第 3-1 面の中で特筆すべき遺物は、土坑から出土した火災資料となる陶磁器類である。被熱痕跡をもつ陶磁器類の年代から、1710 ～ 1720 年代の間に火災に遭っていたことが推定される。土師器皿は京都系が出土せず、在地系で占められるようになる。

第 2 面：18 世紀後半は、肥前系磁器に京信系陶器や在地系陶器などが加わる時期である。肥前系磁器は、生産地年代で九陶Ⅳ期 (1750 ～ 1780 年代) を示すものが主体となっている。陶器では 18 世紀中頃以降の京信系陶器や須佐擂鉢が出土している。土師器皿は京都系が出土せず、在地系で占められている。

第 1 面：19 世紀前半～中頃は、肥前系磁器を主体とする組成から在地系陶器を中心とした組成に変化する時期である。本遺跡では、生産地年代で九陶Ⅴ期 (1820 ～ 1860 年代) を示す肥前系磁器の端反碗と共伴して在地系陶器の布志名焼や石見焼が出土している。

註

(17) 大海崎石は、松江市大海崎町周辺や和久羅山で産出される角閃石粗面安山岩である。
(18) 島石は、松江市八束町にある大根島周辺で産出される堅硬多孔質玄武岩である。
(19) 松江層は、地下 6 ～ 20 mにある新生代新第三紀中新世の地層であり、砂岩・泥岩・玄武岩・凝灰岩の互層からなる。松江層軟砂岩は、松江城二之丸の石垣下に位置する内堀で露呈している場所も見られる。
(20) 来待石は、松江市宍道町来待周辺で産出される凝灰質砂岩である。古くは古墳時代の石室などに利用され、江戸時代前半には灯篭・石仏・五輪塔などに使用されている。
(21) 西島太郎　2011「堀尾期松江城下町絵図の制作工程と伝来」『日本歴史　第 755 号』吉川弘文館から引用。
(22) 発掘調査現地にて、趙哲済氏 (大阪文化財研究所) の地質指導により御教示いただいた。
(23) 大橋茂右衛門は、松平期の筆頭家老である。松江城下の東端角地にあたる現在の南田町に広大な屋敷地を拝領し、6000 石うち与力 1000 石足軽 30 人で松平直政に召し抱えられている。
(24) ここでの「与力」とは、大橋茂右衛門が自身の費用をもって抱えていた大橋家直属の家臣のことである。
(25) 広島大学附属図書館所蔵『中国五県土地租税資料文庫』のうち「松江城下武家屋敷明細帳」による。
(26)『市 157』「城山 4」第 16 ブロック (東側) に掲載の松江城下町遺跡 (南田町 134-11 外) の第 1 遺構面の出土遺物。
(27) 第 16 ブロック地内の松江城下町遺跡 (南田町 132 外) と松江城下町遺跡 (南田町 134-11 外) の遺構面の変遷。
(28)『市 163』「城山 5」第 16 ブロックに掲載の松江城下町遺跡 (南田町 132 外) の第 5 遺構面の埋桶遺構。
(29) 島根県立図書館所蔵「松江城絵図」(元文～延享年間絵図)
(30) 発掘調査現地にて、足立正智氏 (松江市文化財保護審議員) の調査指導により御教示いただいた。
(31) 曲物埋納遺構を地鎮めに伴う祈祷具と考えた理由は、遺構検出地点が建物内に位置することを根拠としている。ただし、全国的には類例がなく、今後の資料の増加を待ちたい。
(32) 大橋康二氏 (佐賀県立九州陶磁文化館) の遺物鑑定により御教示いただいた。
(33) 第 16 ブロック地内で島状整地を確認した遺跡は､松江城下町遺跡 (南田町 132 外) と松江城下町遺跡 (南田町 134-11 外) の 2 箇所がある。いずれも 1638 年を上限とする与力屋敷の掘立柱建物が構築され機能していた遺構面に相当する。
(34) 勝浦康守氏 (徳島市教育委員会) の御教示による。徳島城下町は低湿地に形成された城下町であることを前提とする。徳島城下町の武家屋敷では島状整地が通例的に見られ、屋敷地の表と裏で異なる土砂の使い分けをされている。島状整地以後は、連続もしくは非連続に屋敷地周囲の整地が進むとされている。
(35) 第 16 ブロック地内の松江城下町遺跡 (南田町 132 外) と松江城下町遺跡 (南田町 134-11 外) では、この時期に相当する松平期の遺構面で、掘立柱建物の北西側に小規模で簡易な掘立柱建物を付属させている。今回の調査では、礎石建物の北西側に掘立柱建物を付属させているが、同時期の遺構面と捉えられることから建物＋付属施設のセットは通例的に検出される遺構と考えている。

第 1 ブロック（1-3 区） 陶磁器・土師器皿

遺物番号	遺構面	遺構名	種別	器種	器形	文様	装飾・釉薬	法量 (cm) 口径	底径	器高	生産地	九陶編年	生産地年代	備考
13-1	1面	SD01	磁器	碗	丸形	桐文	染付	(6.6)	4.0	5.2	肥前系	Ⅴ	1780 ～ 1810	畳付無釉。
13-2	1面	SD01	磁器	碗	広東形	岩波文	染付	―	(6.2)	(2.9)	肥前系	Ⅴ	1780 ～ 1810	底部のみ残存。
13-3	1面	SD01	磁器	碗	端反形	区画文	染付	―	(6.6)	(5.1)	肥前系	Ⅴ	1820 ～ 1860	胴部～底部のみ残存。
13-4	1面	SD01	磁器	皿	変形	蔓草文 みじん唐草文	染付	―	―	(2.0)	肥前系	Ⅴ	1780 ～ 1860	口縁部のみ残存。
18-1	2面	遺構外	陶器	皿	―	刷毛目文	刷毛目	(30.0)	―	(4.1)	肥前系	Ⅳ	1690 ～ 1780	口縁部のみ残存。
18-2	2面	遺構外	磁器	袋物	―	梅竹文	染付	―	―	(12.0)	肥前系	Ⅳ	1690 ～ 1780	胴部のみ残存。
18-3	2面	遺構外	土師器	皿	灯明皿	―	―	(11.4)	―	(2.2)	京都系	―	―	手づくね成形。外面に指頭圧痕。
18-4	2面	遺構外	土師器	皿	―	―	―	(12.2)	―	(2.3)	京都系	―	―	手づくね成形。外面に指頭圧痕。
18-5	2面	遺構外	土師器	皿	―	―	―	―	(6.2)	(1.3)	在地系	―	―	ロクロ成形。底部は回転糸切り。
18-6	2面	遺構外	土師器	皿	灯明皿	―	―	(13.5)	(8.0)	2.2	在地系	―	―	ロクロ成形。底部は回転糸切り。
21-1	3面	遺構外	磁器	皿	鍔縁形	青海波文	青花	―	―	(1.2)	中国 (漳州窯)	―	17C 初頭	口縁部のみ残存。
21-2	3面	遺構外	陶器	皿	―	―	灰釉	―	(8.2)	(3.7)	肥前系	Ⅰ-2	1594 ～ 1610	胎土目積みの窯詰め。 高台のみ残存。
21-3	3面	遺構外	陶器	擂鉢	―	―	―	(27.0)	―	(5.8)	備前	―	1600 ～ 1620	口縁部のみ残存。 乗岡氏編年近世 1 期 c 。

第 1 ブロック（1-3 区） 木製品

遺物番号	遺構面	遺構名	種類	名称部位	法量 (cm) 長さ（口径）	幅（底径）	高さ（器高）	厚さ	木取り	備考
17-1	2面	SE01	漆器	椀	―	6.6	(6.4)	―	―	内 : 赤色 / 外 : 黒色。高台見込みに鉞文の線刻。
18-7	2面	遺構外	―	羽子板状製品	30.7	8.4	―	1.5	板目	羽子板状の用途不明品。捏棒か。

第 1 ブロック（1-3 区） 瓦

遺物番号	遺構面	遺構名	種類	形状	胎土	装飾	法量 (cm) 大きさ (cm)	重量 (g)	備考
17-2	2面	SE01	軒丸瓦	―	灰色	珠文・巴文	外径 13.4/ 内径 9.7/ 厚さ 1.4	240	連珠三巴文。左巻。 松江城軒丸瓦分類 B-1 類。
17-3	2面	SE01	軒平瓦	―	灰色	三葉文	上弦幅 (14.2)/ 下弦幅 (14.6)/ 瓦当面厚さ 2.0	810	松江城軒平瓦分類下向三葉B-1類。
17-4	2面	SE01	丸瓦	玉縁式	灰色	―	長さ 27.4/ 幅 15.6/ 厚さ 1.9	1370	コビキ B 。布目痕。
18-8	2面	遺構外	丸瓦	玉縁式	灰色	―	長さ (14.5)/ 幅 (13.4)/ 厚さ 2.2	640	コビキ B 。布目痕。
18-9	2面	遺構外	平瓦	―	灰色	―	長さ (15.4)/ 幅 (14.5)/ 厚さ 1.8	520	凸面に離砂付着。

第 13 ブロック（13-2 区） 陶磁器・土師器皿

遺物番号	遺構面	遺構名	種別	器種	器形	文様	装飾・釉薬	法量 (cm) 口径	底径	器高	生産地	九陶編年	生産地年代	備考
36-1	1面	SE01	陶器	甕	―	波状文	―	(28.6)	(15.4)	43.3	在地系	―	19C 後半か	内面上方にケズリ、下方にタタキ。
39-1	1面	SK01	陶器	碗	呉器手	―	―	(11.5)	5.0	8.1	肥前系	Ⅲ	1650 ～ 1690	畳付無釉。
39-2	1面	SK01	磁器	皿	丸形	柳文	染付	(13.2)	5.1	3.25	肥前系	Ⅲ	1650 ～ 1690	畳付無釉。
40-1	1面	遺構外	陶器	碗	―	刷毛目	刷毛目	―	―	(3.3)	肥前系	Ⅲ	1650 ～ 1690	口縁部のみ残存。
40-2	1面	遺構外	陶器	火入	筒形	山水文	長石釉 鉄釉	(13.1)	(9.5)	(10.9)	肥前系	Ⅳ	1690 ～ 1780	釉薬掛け分け。 蛇ノ目高台で高台内は無釉。
40-3	1面	遺構外	陶器	擂鉢	―	―	―	(31.0)	―	(13.4)	須佐 (山口)	―	17C 後半～ 18C 前半	佐伯氏分類 I 群 A 類。
40-4	1面	遺構外	磁器 (陶胎)	碗	―	圏線	染付	(11.1)	―	5.8	肥前系	Ⅳ	1690 ～ 1780	口縁部～胴部のみ残存。
40-5	1面	遺構外	土師器	皿	灯明皿	―	―	8.6	5.1	1.4	在地系	―	―	ロクロ成形。底部は回転糸切り。
43-1	2面	SD03	磁器	碗	―	草花文	青花	(13.6)	4.8	5.2	中国 (漳州窯)	―	16C 末～ 17C 初頭	森氏分類青花碗 G 群粗製。 見込みと高台内は無釉。
45-1	2面	SK09	陶器	碗	呉器手	―	―	(9.4)	4.5	7.3	肥前系	Ⅲ	1650 ～ 1690	畳付無釉。
45-2	2面	SK09	磁器	碗	―	四つ目菱文 松文	色絵	(12.0)	(4.7)	6.3	肥前系	Ⅲ	1650 ～ 1690	被熱による色飛びあり。
45-3	2面	SK09	土師器	皿	灯明皿	―	―	(10.8)	(5.2)	2.5	在地系	―	―	ロクロ成形。底部は回転糸切り。
47-1	2面	SK14	磁器	皿	―	植物文	染付	―	12.9	(7.7)	肥前系	Ⅱ-2	1630 ～ 1650	畳付釉剥ぎ。高台内に砂付着。 漆継ぎの痕跡あり。
47-2	2面	SK14	磁器	皿	―	花弁文陰刻	青磁釉	―	(6.0)	(2.1)	肥前系	Ⅱ-2	1640	青磁皿。
47-3	2面	SK14	土師器	皿	灯明皿	―	―	11.3	6.7	2.1	在地系	―	―	ロクロ成形。底部は回転糸切り。 底部外面に墨書で「×」印。
47-4	2面	SK14	土師器	皿	灯明皿	―	―	10.9	5.4	2.6	在地系	―	―	ロクロ成形。底部は回転糸切り。
48-1	2面	砂層	陶器	皿	―	―	―	―	5.9	(3.0)	肥前系	Ⅱ	1610 ～ 1650	砂目積みの窯詰め。 目跡 4 箇所。被熱か。
48-2	2面	砂層	須恵器	甕	―	タタキ	―	―	―	(3.3)	―	―	―	内面に同心円状のタタキ。 外面に格子状のタタキ。
48-3	2面	砂層	須恵器	甕	―	タタキ	―	―	―	(3.2)	―	―	―	内面に同心円状のタタキ。 外面に格子状のタタキ。

遺物番号	遺構面	遺構名	種別	器種	器形	文様	装飾・釉薬	法量 (cm) 口径	底径	器高	生産地	九陶編年	生産地年代	備考
48-4	2面	砂層	陶器	壺甕類	—	—	—	—	—	(5.4)	—	—	16C 後半か	瓷器系陶器。内面に横方向のナデ痕跡と丸印の刻印。
52-1	3面	SD04	陶器	碗	筒形	—	灰釉	(6.4)	—	(4.3)	肥前系	Ⅰ-2	1594 ～ 1610	口縁部～胴部のみ残存。
52-2	3面	SD04	陶器	碗	丸形	—	灰釉	8.2	3.8	5.2	肥前系	Ⅰ-2	1594 ～ 1610	高台は露胎。兜巾高台。
52-3	3面	SD04	陶器	皿	—	—	灰釉	(11.9)	4.9	3.2	肥前系	Ⅰ-2	1594 ～ 1610	胎土目積みの窯詰め。目跡 4 箇所。高台は露胎。
52-4	3面	SD04	陶器	皿	—	—	灰釉	(13.5)	5.6	3.8	肥前系	Ⅰ-2	1594 ～ 1610	胎土目積みの窯詰め。目跡 4 箇所。高台は露胎。
52-5	3面	SD04	土師器	皿	灯明皿	—	—	(12.0)	—	(2.4)	京都系	—	—	手づくね成形。外面に指頭圧痕。
53-1	3面	遺構外	陶器	碗	丸形	—	銅緑釉	(8.6)	—	(4.4)	肥前系	Ⅰ-2	1594 ～ 1610	口縁部～胴部のみ残存。
53-2	3面	遺構外	陶器	皿	鍔縁形	—	透明釉	(11.8)	—	(2.5)	肥前系	Ⅰ-2	1594 ～ 1610	口縁部～体部上方のみ残存。
53-3	3面	遺構外	陶器	皿	—	—	灰釉	—	3.8	(2.4)	肥前系	Ⅰ-2	1594 ～ 1610	胎土目積みの窯詰め。目跡 4 箇所。高台は露胎。

第 13 ブロック（13-2 区） 木製品

遺物番号	遺構面	遺構名	種類	名称部位	法量 (cm) 長さ（口径）	幅（底径）	高さ（器高）	厚さ	木取り	備考
45-4	2面	SK09	漆器	椀蓋	摘み (5.0)	(9.6)	(6.4)	—	—	内 : 赤色 / 外 : 黒色。外面に丸に草文。
45-5	2面	SK09	箸	—	24.6	0.7	—	0.6	—	白木の箸。
45-6	2面	SK09	箸	—	26.5	0.7	—	0.4	—	白木の箸。
45-7	2面	SK09	箸	—	28.3	0.5	—	0.7	—	白木の箸。
45-8	2面	SK09	下駄	角型連歯下駄	23.8	12.7	9.1	—	柾目	歯高 8.2㎝。前緒付近に足の指の痕跡あり。
52-6	3面	SD04	漆器	椀	—	5.6	(3.5)	—	—	内 : 赤色 / 外 : 黒色。外面に松文と紅葉文。
52-7	3面	SD04	漆器	椀	—	5.0	(5.0)	—	—	内外 : 黒色。
52-8	3面	SD04	漆器	椀	12.5	5.1	5.4	—	—	内 : 赤色 / 外 : 黒色。
52-9	3面	SD04	箆	片刃	14.8	2.7	—	0.4	板目	切匙の可能性がある。
52-10	3面	SD04	曲物	蓋	8.7	—	—	0.7	柾目	中央に直径 5㎜の孔あり。
52-11	3面	SD04	曲物	蓋	12.4	—	—	1.7	柾目	側面の左右に三角形のケズリ加工あり。
52-12	3面	SD04	箸	—	22.9	0.5	—	0.4	—	白木の箸。
52-13	3面	SD04	箸	—	23.3	0.6	—	0.7	—	白木の箸。
52-14	3面	SD04	箸	—	26.1	0.7	—	0.7	—	白木の箸。
52-15	3面	SD04	下駄	丸型連歯下駄	20.8	9.2	2.8	—	柾目	歯高 1.5㎝。前緒付近に足の指の痕跡あり。

第 13 ブロック（13-2 区） 瓦

遺物番号	遺構面	遺構名	種類	形状	胎土	装飾	法量 (cm) 大きさ (cm)	重量 (g)	備考
36-2	1面	SE01	軒平瓦	—	灰色	橘文	上弦幅 (22.3)/ 下弦幅 22.3/ 瓦当面厚さ 5.2	1030	松江城軒平瓦分類橘 B 類Ⅰ。
36-3	1面	SE01	桟瓦	—	灰色	菊花文	長さ (25.3)/ 幅 (18.2)/ 厚さ 1.7	1040	左桟瓦。頭側に菊花文の刻印。

第 14 ブロック（14-1 区） 陶磁器・土師器皿

遺物番号	遺構面	遺構名	種別	器種	器形	文様	装飾・釉薬	法量 (cm) 口径	底径	器高	生産地	九陶編年	生産地年代	備考
70-1	1面	SK01	陶器	碗	丸形	注連縄文	透明釉	(10.5)	3.6	7.7	京信系	—	18C 後半	高台は露胎。呉須絵。
70-2	1面	SK01	陶器	碗	端反形	—	白濁釉	(11.8)	5.2	5.6	在地系	—	19C 前半	被熱か。高台は無釉。
70-3	1面	SK01	陶器	碗	端反形	—	透明釉	(12.8)	4.9	6.5	在地系	—	19C 前半	高台は無釉。
70-4	1面	SK01	陶器	碗	丸形	—	白濁釉	11.0	4.4	8.5	布志名	—	19C 前半	ボテボテ茶碗。
70-5	1面	SK01	陶器	片口	—	—	緑釉	(21.2)	—	(5.9)	須佐（山口）	—	18C 後半	片口の両脇にボタン状の粘土。
70-6	1面	SK01	陶器	擂鉢	—	—	飴釉	(27.8)	—	(4.8)	布志名	—	18C 後半～19C 前半	口縁部のみ残存。
70-7	1面	SK01	陶器	擂鉢	—	—	飴釉	(25.7)	—	(8.6)	石見	—	18C 後半～19C 前半	口縁端部を玉縁状におさめる。
71-1	1面	SK01	陶器	擂鉢	—	—	—	(30.4)	—	(7.5)	須佐（山口）	—	19C 前半	佐伯氏分類Ⅱ群 B 類。
71-2	1面	SK01	磁器	蓋	—	四方襷	外青磁	摘み (3.7)	(8.7)	2.7	肥前系	Ⅳ	1760 ～ 1780	内面に五弁花の印判。
71-3	1面	SK01	磁器	蓋	—	竹笹文 太湖石文	染付	摘み 5.5	(10.4)	2.8	肥前系	Ⅴ	1780 ～ 1840	71-7 とセット。内面見込みに昆虫文。
71-4	1面	SK01	磁器	蓋	—	稲束文	染付	摘み 6.0	10.1	2.9	肥前系	Ⅴ	1780 ～ 1860	内面に雀文。
71-5	1面	SK01	磁器	紅猪口	丸形	字文	染付	8.4	2.8	4.2	肥前系	Ⅴ	1780 ～ 1860	外面に「大阪　田□屋□」の銘文。
71-6	1面	SK01	磁器	碗	丸形	稲束文	染付	(8.9)	(3.5)	5.7	肥前系	Ⅴ	1780 ～ 1860	見込みに十字花文。
71-7	1面	SK01	磁器	碗	広東形	竹笹文 太湖石文	染付	10.9	6.2	6.0	肥前系	Ⅴ	1780 ～ 1840	71-3 とセット。見込みに昆虫文。

遺物番号	遺構面	遺構名	種別	器種	器形	文様	装飾・釉薬	法量 (cm) 口径	底径	器高	生産地	九陶編年	生産地年代	備考
71-8	1面	SK01	磁器	碗	半球形	仙芝祝寿文	染付	10.2	3.7	5.5	肥前系	Ⅴ	1820 ～ 1860	見込みに仙芝祝寿文。
71-9	1面	SK01	磁器	皿	丸形	花唐草文	染付	13.6	7.2	3.2	肥前系	Ⅴ	1780 ～ 1810	内面は蛇ノ目釉剥ぎ。見込みに五弁花の印判。
71-10	1面	SK01	磁器	皿	―	唐草文	染付	14.1	8.0	4.2	肥前系	Ⅳ	1730 ～ 1780	内面口縁部周辺に牡丹文と扇文、高台内に「渦福」の銘。
72-1	1面	遺構外	陶器	碗	杉形	小杉文	透明釉	(9.7)	(3.4)	5.2	京信系	―	18C 後半	高台は露胎。呉須絵。
72-2	1面	遺構外	陶器	碗	丸形	注連縄文	透明釉	(10.1)	3.3	7.4	京信系	―	18C 後半	高台は露胎。呉須絵。
72-3	1面	遺構外	陶器	碗	―	―	透明釉	(10.5)	3.5	7.3	京信系	―	19C 前半	内外面に貫入。高台は露胎。
72-4	1面	遺構外	陶器	碗	筒丸形	―	透明釉	(12.3)	(5.1)	9.5	京信系	―	18C 後半	高台は露胎。
72-5	1面	遺構外	陶器	碗	丸形	擬宝珠文	青地釉	(12.4)	―	(5.3)	布志名	―	19C 前半	外面に擬宝珠文の陰刻。高台は露胎。
72-6	1面	遺構外	陶器	碗	丸形	―	青地釉	(10.5)	4.8	7.9	布志名	―	19C 前半	高台は露胎。ボテボテ茶碗。
73-1	1面	遺構外	陶器	擂鉢	―	―	―	(28.4)	―	(11.9)	須佐（山口）	―	18C 後半～19C 前半	佐伯氏分類Ⅲ群 A 類。
73-2	1面	遺構外	磁器	碗	―	四方襷文	外青磁	(11.6)	(3.5)	6.2	肥前系	Ⅳ	1760 ～ 1780	見込みに五弁花。
73-3	1面	遺構外	磁器	碗	広東形	楼閣山水文	染付	12.8	6.9	7.0	肥前系	Ⅴ	1780 ～ 1840	口縁部内面に花文と流水文。見込みに鷺文。
73-4	1面	遺構外	磁器	碗	半球形	鳥文 四方襷文	染付	15.8	5.9	7.1	肥前系	Ⅴ	1780 ～ 1860	口縁部内面に四方襷文。見込みに鳥文。
73-5	1面	遺構外	磁器	皿	―	海老文 三角文	染付	(15.8)	(9.2)	5.3	肥前系	Ⅴ	1780 ～ 1860	蛇ノ目凹形高台。口縁部内外面に三重の三角文。
73-6	1面	遺構外	磁器	鉢	―	風景文	外青磁	(17.6)	(9.1)	6.5	肥前系	Ⅴ	1780 ～ 1860	蛇ノ目凹形高台。高台内に「渦福」の銘。
73-7	1面	遺構外	土師器	皿	灯明皿	―	―	8.4	4.5	1.5	在地系	―	―	ロクロ成形。底部は回転糸切り。口縁部内面に「田」の墨書。
76-1	2面	SG01	陶器	瓶	―	―	鉄釉	―	―	(10.5)	肥前系	Ⅲ	1650 ～ 1690	内面に同心円状のタタキを施し、ナデ消している。
76-2	2面	SG01	磁器	碗	端反形	花文 網目文	染付	(9.4)	―	(4.1)	肥前系	Ⅲ	1650 ～ 1690	口縁部～胴部のみ残存。
76-3	2面	SG01	磁器	皿	芙蓉手	窓絵	染付	―	―	(2.8)	肥前系	Ⅲ	1650 ～ 1670	口縁部周辺のみ残存。
78-1	2面	SK02	陶器	向付	筒形	線文	―	―	―	(4.1)	志野織部	―	17C 初頭	口縁部周辺のみ残存。
79-1	2面	遺構外	磁器	皿	輪花形	草花文	青花	(18.7)	(10.3)	3.3	中国（漳州窯系）	―	17C 前半	体部内外面に鎬文の陰刻。森氏分類青花皿 F 群。
79-2	2面	遺構外	陶器	皿	―	草文（鉄絵）	灰釉	―	4.0	(2.3)	肥前系	Ⅰ-2	1594 ～ 1610	胎土目積みの窯詰め。目跡 4 箇所。高台は露胎。
79-3	2面	遺構外	陶器	皿	―	刷毛目文	刷毛目	―	4.1	(2.6)	肥前系	Ⅱ	1610 ～ 1630	砂目積みの窯詰め。目跡 4 箇所。高台は露胎。
80-1	2面	遺構外	陶器	平鉢	二彩手	波状文	緑褐釉	―	(10.6)	(4.9)	肥前系	Ⅲ	1650 ～ 1690	砂目積みの窯詰め。目跡 4 箇所。高台周辺は無釉。
80-2	2面	遺構外	陶器	火入	―	―	灰釉	(13.6)	7.7	9.1	肥前系	Ⅲ	1650 ～ 1690	高台内は無釉。

第 14 ブロック（14-1 区） 土製品

遺物番号	遺構面	遺構名	種別	種類	形状	胎土	法量 (cm) 口径	底径	器高	生産地	備考
71-11	1面	SK01	土師器	焙烙	―	褐色	(29.2)	―	(5.4)	―	18C 後半。難波氏分類 D 類 b2。耳の穿孔は 1 箇所で貫通しない。

第 16 ブロック（16-5 区） 陶磁器・土師器皿

遺物番号	遺構面	遺構名	種別	器種	器形	文様	装飾・釉薬	法量 (cm) 口径	底径	器高	生産地	九陶編年	生産地年代	備考
100-1	1面	SK01	陶器	擂鉢	―	―	―	(35.8)	―	(9.0)	須佐（山口）	―	18C 中頃～後半	佐伯氏分類Ⅰ群 E 類。
102-1	1面	SK03	磁器（陶胎）	碗	―	圏線	染付	―	―	(4.5)	肥前系	Ⅳ	1690 ～ 1780	口縁部のみ残存。
102-2	1面	SK03	磁器	皿	丸形	唐草文	染付	―	―	(1.9)	肥前系	Ⅳ	1700 ～ 1740	見込みに五弁花のコンニャク印判。高台内に「□□年製」。
102-3	1面	SK03	土師器	皿	灯明皿	―	―	9.0	5.4	2.0	在地系	―	―	ロクロ成形。底部は回転糸切り。
103-1	1面	遺構外	磁器（陶胎）	碗	丸形	―	染付	―	5.1	(5.0)	肥前系	Ⅳ	1690 ～ 1780	胴部～底部のみ残存。
103-2	1面	遺構外	磁器	碗	広東形	龍文	染付	(13.3)	(6.9)	6.6	肥前系	Ⅴ	1780 ～ 1810	内面上下に圏線。
103-3	1面	遺構外	磁器	碗	半球形	連弁文	染付	(15.0)	5.8	7.2	肥前系	Ⅴ	1780 ～ 1860	口縁部内面に四方襷文。見込みに環状の松竹梅文。
103-4	1面	遺構外	磁器	蓋	―	草花文	染付	摘み 5.3	9.7	2.7	肥前系	Ⅴ	1780 ～ 1860	一部欠損。
106-1	2面	SK04	陶器	碗	丸形	―	緑灰釉	(10.2)	4.1	5.5	肥前系	Ⅱ	1610 ～ 1650	高台は露胎。
108-1	2面	SK05	磁器	皿	端反形	圏線	青花	(11.6)	―	(2.4)	中国（漳州窯系）	―	17C 初頭	森氏分類青花皿 K2。
109-1	2面	遺構外	陶器	碗	―	―	灰釉	―	4.9	(5.5)	肥前系	Ⅱ	1610 ～ 1650	高台は露胎。
109-2	2面	遺構外	陶器	碗	呉器手	―	―	―	(8.2)	(3.7)	肥前系	Ⅲ	1650 ～ 1690	畳付無釉。撥形の高台。
109-3	2面	遺構外	陶器	皿	丸形	―	灰釉	(11.4)	―	(2.6)	肥前系	Ⅱ	1610 ～ 1650	体部中央に段を持つ。
109-4	2面	遺構外	磁器	小坏	端反形	―	白磁	(7.7)	3.2	5.0	肥前系	Ⅲ	1650 ～ 1680	畳付無釉。
109-5	2面	遺構外	磁器	碗	筒形	花文	染付	(10.6)	(5.7)	7.7	肥前系	Ⅱ-2	1630 ～ 1650	口銹。高台脇に鋸歯状連弁文。
109-6	2面	遺構外	磁器	碗	―	渦文	染付	(12.0)	―	(6.0)	肥前系	Ⅲ	1650 ～ 1690	高台は欠損。
109-7	2面	遺構外	磁器	皿	―	風景文	染付	―	(11.2)	(3.3)	肥前系	Ⅱ-2	1630 ～ 1650	畳付無釉。高台内に砂付着。

遺物番号	遺構面	遺構名	種別	器種	器形	文様	装飾・釉薬	法量 (cm) 口径	底径	器高	生産地	九陶編年	生産地年代	備考
109-8	2面	遺構外	磁器	皿	芙蓉手	窓絵	染付	(12.2)	4.4	4.1	肥前系	Ⅲ	1650 ～ 1690	見込みに蝶文。
113-1	3面	SK06	陶器	小坏	―	―	灰釉	(7.7)	3.5	(4.2)	肥前系	Ⅰ-2	1594 ～ 1610	胴部下方から高台は露胎。底部に糸切り痕。
113-2	3面	SK06	陶器	徳利	―	―	―	―	4.8	(3.7)	備前	―	17C 初頭か	底部外面に窯印。
113-3	3面	SK06	陶器	皿	―	―	緑灰釉	(11.0)	(4.2)	3.0	肥前系	Ⅰ-2	1594 ～ 1610	胎土目積みの窯詰め。高台は露胎。兜巾高台。
113-4	3面	SK06	陶器	擂鉢	―	―	―	―	9.2	(10.5)	肥前系	Ⅰ	1600 ～ 1610	スリ目単位 5 本。碁笥底状の底部。
113-5	3面	SK06	陶器	擂鉢	―	―	―	(24.8)	(11.0)	9.0	備前	―	1600 ～ 1620	乗岡氏編年近世 1 期 a。
114-1	3面	遺構外	磁器	碗	芙蓉手	区画文	青花	―	―	5.4	中国 (景徳鎮系)	―	16C 末～ 17C 初頭	森氏分類青花碗 G 群粗製。胴部内外面の区画内に草花文。
114-2	3面	遺構外	陶器	碗	天目形	草文 (鉄絵)	灰釉	(10.2)	4.6	7.1	肥前系	Ⅰ-2	1594 ～ 1610	高台は露胎。
114-3	3面	遺構外	陶器	皿	丸形	鉄絵	灰釉	(11.3)	4.0	2.9	肥前系	Ⅰ-2	1594 ～ 1610	胎土目積みの窯詰め。目跡 4 箇所。高台は露胎。
114-4	3面	遺構外	土師器	皿	―	―	―	(11.5)	(5.0)	2.5	京都系	―	―	手づくね成形。

第 16 ブロック（16-6 区） 陶磁器・土師器皿

遺物番号	遺構面	遺構名	種別	器種	器形	文様	装飾・釉薬	法量 (cm) 口径	底径	器高	生産地	九陶編年	生産地年代	備考
128-1	1面	遺構外	陶器	灯明皿	―	―	飴釉	(7.1)	―	(1.8)	在地 (布志名)	―	19C 前半	灯明受皿として使用。
128-2	1面	遺構外	陶器	捏鉢	―	―	長石釉	(32.4)	―	(5.5)	在地 (石見)	―	19C 前半	口縁部のみ残存。
128-3	1面	遺構外	磁器	碗	端反形	雲龍文	染付	(11.6)	(6.4)	4.9	肥前系	Ⅴ	1820 ～ 1860	内面見込みに花文。
128-4	1面	遺構外	磁器	碗	丸形	草花文	型紙摺り	(9.8)	―	(4.2)	瀬戸	―	明治 20 年代	口縁部内面に雷文帯。
128-5	1面	遺構外	磁器	蓋付鉢	筒形	みじん唐草文	染付	(13.2)	(12.9)	7.2	肥前系	Ⅴ	1820 ～ 1860	口縁端部に口銹。
133-1	2面	SK03	陶器	碗	丸形	草花文	透明釉	(8.8)	(2.9)	5.5	京信系	―	18C 後半	高台は露胎。呉須絵。
133-2	2面	SK03	陶器	碗	腰折形	草花文	透明釉	(10.8)	―	(4.6)	京信系	―	18C 後半	口縁部～胴部のみ残存。
133-3	2面	SK03	陶器	碗	―	―	長石釉	(11.7)	4.4	6.0	京信系	―	18C 後半	上絵付のもの。胴部外面に朱で款を入れる。
133-4	2面	SK03	陶器	碗	丸形	―	青地釉	―	(4.9)	(7.8)	在地 (布志名)	―	18C 後半～ 19C 前半	ボテボテ茶碗。
133-5	2面	SK03	磁器	碗	半球形	花鳥文	染付	(10.9)	―	(4.4)	肥前系	Ⅳ	1750 ～ 1780	高台は欠損。
133-6	2面	SK03	磁器	碗	丸形	風景文	染付	―	(4.1)	(4.0)	肥前系	Ⅳ	1750 ～ 1780	高台内に「冨貴長春」の銘。
133-7	2面	SK03	磁器	碗	半球形	市松文	染付	―	(3.2)	(3.8)	肥前系	Ⅳ	1770 ～ 1790	胴部～高台のみ残存。
133-8	2面	SK03	磁器	碗	朝顔形	花卉文	染付	12.0	4.1	6.9	肥前系	Ⅳ	1760 ～ 1780	見込みに手描きの五弁花。
133-9	2面	SK03	磁器	碗	半球形	氷裂文	染付	(10.1)	(4.0)	5.5	肥前系	Ⅴ	1780 ～ 1810	外面に菊花散らし文。
134-1	2面	SK03	磁器	蓋	―	草花文	染付	(10.0)	―	2.6	肥前系	Ⅴ	1780 ～ 1810	口縁部内面に四方襷文。見込みに環状の松竹梅文。
134-2	2面	SK03	磁器	皿	―	花唐草文	染付	(13.6)	(7.8)	4.2	肥前系	Ⅴ	1780 ～ 1810	型打成形。
134-3	2面	SK03	磁器	水滴	方形	―	色絵	長さ (4.9)	幅 (5.5)	3.0	肥前系	Ⅳ	1690 ～ 1780	型押成形。赤の色絵で装飾。
134-4	2面	SK03	磁器	火入	―	字文	染付	(13.2)	(12.6)	10.3	肥前系	Ⅳ	1750 ～ 1780	字文に「前赤壁賦」の漢詩を描く。
135-1	2面	遺構外	陶器	碗	杉形	―	透明釉	(9.2)	(3.6)	4.9	京信系	―	18C 後半	高台は露胎。
135-2	2面	遺構外	陶器	碗	丸形	注連縄文	透明釉	(10.3)	3.4	7.8	京信系	―	18C 後半	高台は露胎。呉須絵。
135-3	2面	遺構外	陶器	擂鉢	―	―	―	(29.6)	―	(6.7)	須佐	―	18C 中頃～後半	佐伯氏分類Ⅰ群 D 類。
135-4	2面	遺構外	陶器	擂鉢	―	―	飴釉	(32.8)	―	(3.0)	在地 (石見)	―	18C 後半～ 19C 前半	口縁部のみ残存。
148-1	3-1面	SK04	磁器	碗	端反形	草花文	青花	(9.4)	4.2	5.3	中国 (景徳鎮系)	―	17C 前半	森氏分類青花碗 B3 群。
148-2	3-1面	SK04	陶器	碗	京焼風	山水文	透明釉	―	5.4	(4.0)	肥前系	Ⅲ	1650 ～ 1690	高台内に「山住原」の押印。
148-3	3-1面	SK04	陶器	碗	京焼風	山水文	透明釉	(9.5)	―	(5.1)	肥前系	Ⅲ	1650 ～ 1690	口縁部～胴部のみ残存。
148-4	3-1面	SK04	陶器	碗	呉器手	―	―	―	4.8	(4.0)	肥前系	Ⅲ	1650 ～ 1690	畳付無釉。撥形の高台。
148-5	3-1面	SK04	陶器	四耳壺	―	―	鉄釉	―	―	(5.9)	信楽	―	18C 前半	胎土に 1㎜程度の長石粒を含む。
148-6	3-1面	SK04	陶器	鉢	―	―	灰釉	―	8.9	(9.2)	肥前系	Ⅲ	1650 ～ 1690	高台は抉り高台。
148-7	3-1面	SK04	磁器	小坏	端反形	―	白磁	(7.2)	(3.4)	5.1	肥前系	Ⅲ	1660 ～ 1680	畳付無釉。
148-8	3-1面	SK04	磁器	碗	―	草花文	色絵	(9.2)	―	(5.4)	肥前系	Ⅱ～Ⅲ	1650 前後	被熱による色飛びが見られる。
148-9	3-1面	SK04	磁器	碗	筒丸形	藤花文	染付	(8.6)	(5.1)	6.1	肥前系	Ⅲ	1660 ～ 1680	高台内に「大明□化年□」の銘。
148-10	3-1面	SK04	磁器	皿	―	菊花重ね文 山水文	染付	(29.2)	(9.2)	7.3	肥前系	Ⅱ-2	1630 ～ 1640	畳付無釉。
148-11	3-1面	SK04	磁器	皿	丸形	―	青磁釉	(12.8)	4.6	4.0	肥前系	Ⅳ	1650 ～ 1680	波佐見青磁。高台は露胎。
148-12	3-1面	SK04	磁器	皿	菊花形	草岩文 花唐草文	染付	13.6	7.3	3.8	肥前系	Ⅲ	1670 ～ 1680	高台内に「宣明年製」の銘。内面に紅が付着。紅皿として使用。
149-1	3-1面	SK04	磁器	蓋	―	菊唐草文	染付	(12.3)	―	(2.9)	肥前系	Ⅲ	1670 ～ 1700	型紙摺り。漆継ぎの痕跡あり。

遺物番号	遺構面	遺構名	種別	器種	器形	文様	装飾・釉薬	法量 (cm) 口径	底径	器高	生産地	九陶編年	生産地年代	備考
149-2	3-1面	SK04	磁器	仏飯器	―	葡萄文	染付	7.8	3.7	6.6	肥前系	Ⅲ	1650 ～ 1680	底部無釉。
149-3	3-1面	SK04	土師器	皿	灯明皿	―	―	7.6	4.2	1.7	在地系	―	―	ロクロ成形。底部は回転糸切り。
149-4	3-1面	SK04	土師器	皿	灯明皿	―	―	9.9	5.8	2.1	在地系	―	―	ロクロ成形。底部は回転糸切り。
149-5	3-1面	SK04	土師器	皿	灯明皿	―	―	11.5	7.6	2.0	在地系	―	―	ロクロ成形。底部は回転糸切り。
151-1	3-1面	SK05	陶器	碗	丸形	刷毛目文	刷毛目	(10.8)	4.7	6.5	肥前系	Ⅲ	1650 ～ 1690	畳付無釉。
151-2	3-1面	SK05	陶器	碗	―	刷毛目文	刷毛目	(10.6)	(5.1)	7.3	肥前系	Ⅲ	1650 ～ 1690	畳付無釉。胴部中央に窪みをもつ。
151-3	3-1面	SK05	陶器	碗	端反形	刷毛目文	刷毛目	(11.8)	―	(5.3)	肥前系	Ⅳ	1700 ～ 1750	153-1・2 よりも後のもの。胎土は暗灰色。
151-4	3-1面	SK05	陶器	灯明皿	―	―	銹釉	11.2	4.5	1.7	在地系	―	18C 前半	灯明受皿として使用。
151-5	3-1面	SK05	陶器	擂鉢	―	―	―	(31.2)	―	(8.2)	須佐	―	17C 末～18C 前半	佐伯氏分類Ⅰ群 C 類。
152-1	3-1面	SK05	磁器	碗	丸形	渦文	色絵	―	(4.5)	(3.3)	肥前系	Ⅲ	1650 前後	被熱による色飛びが見られる。
152-2	3-1面	SK05	磁器	皿	芙蓉手	花卉宝文	染付	(26.6)	―	(4.1)	肥前系	Ⅲ	1660 ～ 1680	焼成不良。漆継ぎの痕跡あり。
152-3	3-1面	SK05	磁器	皿	丸形	蔓草文 雪輪文	染付	13.0	8.1	2.8	肥前系	Ⅲ～Ⅳ	1680 ～ 1700	見込みに五弁花の印判。
152-4	3-1面	SK05	磁器	香炉蓋	獅子	―	青磁釉	―	4.3	(6.8)	肥前系	―	18C 前半	鍋島の可能性あり。
152-5	3-1面	SK05	土師器	皿	灯明皿	―	―	10.1	5.5	2.3	在地系	―	―	ロクロ成形。底部は回転糸切り。
154-1	3-1面	SK06	磁器	小坏	端反形	連弁・鋸歯文 捻牡丹文	青花	(6.2)	2.5	4.6	中国(景徳鎮系)	―	1620～1640	高台内に「大明成化年製」の銘。森氏分類小坏Ⅰ類。
154-2	3-1面	SK06	磁器	碗	―	花鳥文	青花	(9.0)	3.8	4.8	中国(景徳鎮系)	―	1620～1640	畳付無釉。高台内に「大明成化年製」の銘。森氏分類青花碗 G 群。
154-3	3-1面	SK06	陶器	碗	呉器手	―	―	(11.0)	(5.0)	7.6	肥前系	Ⅲ	1650～1690	畳付無釉。撥形の高台。
154-4	3-1面	SK06	陶器	碗	丸形	刷毛目文	刷毛目	(10.2)	(4.4)	6.9	肥前系	Ⅳ	1700～1750	外面のみ刷毛目塗り。畳付無釉。
154-5	3-1面	SK06	陶器	擂鉢	―	―	―	(26.0)	―	(9.1)	須佐	―	17C 後半～18C 前半	佐伯氏分類Ⅰ群 A 類。
154-6	3-1面	SK06	磁器	小坏	端反形	山水文	染付	(6.5)	3.2	4.1	肥前系	Ⅲ	1650～1680	畳付無釉。
154-7	3-1面	SK06	磁器	小坏	丸形	―	白磁	7.0	2.6	4.0	肥前系	Ⅲ	1650～1660	紅猪口の可能性あり。
154-8	3-1面	SK06	磁器	小坏	端反形	―	白磁	(6.9)	3.4	4.9	肥前系	Ⅲ	1650～1680	全釉。
154-9	3-1面	SK06	磁器	小坏	端反形	草花文	染付	(7.1)	3.0	4.6	肥前系	Ⅳ	1680～1740	畳付釉剥ぎ。
155-1	3-1面	SK06	磁器	碗	丸形	花卉文 蝶文	染付	(11.0)	(4.8)	4.7	肥前系	Ⅱ-1か	1620～1640	初期伊万里。高台内に籾殻付着。被熱の痕跡あり。
155-2	3-1面	SK06	磁器	碗	丸形	寿字文 藤花文	染付	(10.0)	(4.2)	7.1	肥前系	Ⅲ	1650～1660	畳付無釉。高台内に砂粒付着。
155-3	3-1面	SK06	磁器	碗	半球形	―	貫入	16.2	6.4	8.0	肥前系	Ⅲ	1650～1690	色絵素地。被熱の痕跡あり。
155-4	3-1面	SK06	磁器	碗	丸形	菊唐草文 二重丸に花文	染付	(10.8)	4.6	6.5	肥前系	Ⅲ～Ⅳ	1680～1710	高台内に「大明成化年製」の銘。3 個体以上出土。被災資料。
155-5	3-1面	SK06	磁器	猪口	端反形	花唐草文	染付	(9.8)	5.8	6.6	肥前系	Ⅲ～Ⅳ	1680～1710	高台内に「大明成化年製」の銘。
155-6	3-1面	SK06	磁器	碗	―	連弁文	色絵	―	4.4	(3.0)	肥前系	Ⅳ	1690～1730	見込みに環状の花文。高台内に二重方形枠と「渦福」の銘。
155-7	3-1面	SK06	磁器	碗	丸形	草文	染付	(10.2)	―	(6.7)	肥前系	Ⅳ	1690～1750	陶胎染付碗。
155-8	3-1面	SK06	磁器	碗	丸形	蔓草文	染付	(10.6)	(4.9)	7.3	肥前系	Ⅳ	1690～1750	陶胎染付碗。
155-9	3-1面	SK06	磁器	碗	丸形	草花文	染付	9.8	4.6	5.4	肥前系	Ⅳ	1710～1740	畳付無釉。高台内に二重方形枠と「渦福」の銘。
155-10	3-1面	SK06	磁器	碗	半球形	二重網目文	染付	(10.2)	(3.5)	4.9	肥前系	Ⅳ	1710～1750	見込みに菊花文。
155-11	3-1面	SK06	磁器	蓋	―	菊花文 氷裂文	染付	(9.1)	―	(2.8)	肥前系	Ⅳ	1770～1780	155-12 とセット。
155-12	3-1面	SK06	磁器	蓋付碗	―	菊花文 氷裂文	染付	(10.2)	(4.9)	5.4	肥前系	Ⅳ	1770～1780	155-11 とセット。
155-13	3-1面	SK06	磁器	皿	―	草花文の陽刻	染付	(14.6)	5.4	3.6	肥前系	Ⅲ	1650～1670	見込みに唐草文。被熱の痕跡あり。
155-14	3-1面	SK06	磁器	皿	丸形	唐草文 蔓草文	染付	13.5	9.0	2.7	肥前系	Ⅲ～Ⅳ	1670～1700	ハリ支えによる焼成。口縁端部に口銹を施す。
155-15	3-1面	SK06	磁器	皿	山形	花唐草文 風景文	染付	(14.3)	(8.6)	2.6	肥前系	Ⅲ～Ⅳ	1670～1700	糸切細工で山形に成形。
156-1	3-1面	SK06	磁器	皿	―	牡丹唐草文 二重圏線	色絵	―	(13.0)	(2.2)	肥前系	Ⅳ	1690～1700	被熱による色飛びが見られる。
156-2	3-1面	SK06	磁器	皿	丸形	櫛描文・雷文・ 草花文の陰刻	青磁釉	(26.6)	(14.0)	5.4	肥前系	Ⅲ	1650～1660	高台内は蛇ノ目釉剥ぎをして鉄銹を塗布。
156-3	3-1面	SK06	磁器	皿	丸形	―	青磁釉	(13.2)	(5.0)	3.7	肥前系	Ⅳ	1650～1680	波佐見青磁。高台は露胎。
156-4	3-1面	SK06	磁器	皿	―	雲文の陰刻	青磁釉	―	(10.6)	(3.5)	肥前系	Ⅲ	1650～1660	高台内は蛇ノ目釉剥ぎをして鉄銹を塗布。
156-5	3-1面	SK06	磁器	瓶	―	―	青磁釉	―	―	(10.2)	肥前系	Ⅱ-2	1630～1650	胴部のみ残存。
156-6	3-1面	SK06	磁器	人形	頭部	―	色絵	―	幅2.8	4.0	肥前系	Ⅳ	1690～1750	被熱の痕跡あり。
156-7	3-1面	SK06	土師器	皿	灯明皿	―	―	9.3	4.4	2.1	在地系	―	―	ロクロ成形。底部は回転糸切り。
156-8	3-1面	SK06	土師器	皿	灯明皿	―	―	(10.3)	5.2	2.6	在地系	―	―	ロクロ成形。底部は回転糸切り。
159-1	3-1面	SK07	磁器	碗	筒形	―	瑠璃釉 鉄釉	(8.3)	―	(5.1)	肥前系	Ⅱ-2	1640～1650	外面上下で釉薬の掛け分け。
159-2	3-1面	SK07	磁器	皿	丸形	―	青磁釉	13.7	4.8	3.8	肥前系	Ⅳ	1650～1680	波佐見青磁。高台は露胎。

遺物番号	遺構面	遺構名	種別	器種	器形	文様	装飾・釉薬	法量 (cm) 口径	底径	器高	生産地	九陶編年	生産地年代	備考
159-3	3-1面	SK07	土師器	皿	—	—	金泥	—	—	(1.4)	—	—	—	内外面に金泥を塗布。
159-4	3-1面	SK07	土師器	皿	—	—	—	11.0	4.9	2.4	在地系	—	—	ロクロ成形。底部は回転糸切り。
159-5	3-1面	SK07	土師器	皿	—	—	—	11.1	6.1	2.6	在地系	—	—	ロクロ成形。底部は回転糸切り。
161-1	3-1面	SK08	磁器	皿	丸形	宝文 牡丹文	青花	(10.8)	—	(2.7)	中国 (景徳鎮系)	—	17C 初頭～ 前半	森氏分類青花皿 E 群。
161-2	3-1面	SK08	磁器	皿	鍔縁形	兎文 山水文	染付	(22.0)	(8.0)	4.3	肥前系	Ⅱ-2	1620 ～ 1640	初期伊万里。畳付無釉。
161-3	3-1面	SK08	土師器	皿	灯明皿	—	—	(9.6)	(7.2)	2.2	在地系	—	—	ロクロ成形。底部は静止糸切り。
162-1	3-1面	遺構外	磁器	碗	端反形	圏線 草花文	青花	(8.7)	4.0	5.3	中国 (景徳鎮系)	—	17C 初頭～ 前半	畳付無釉。高台内に「大明嘉靖年製」の銘。森氏分類青花碗 B 群。
162-2	3-1面	遺構外	磁器	皿	菊花形	鹿文	青花	(13.6)	(8.0)	2.6	中国 (景徳鎮系)	—	17C 初頭～ 前半	森氏分類青花皿 G1 群。
162-3	3-1面	遺構外	陶器	碗	—	刷毛目文	刷毛目	—	(4.8)	(3.7)	肥前系	Ⅳ	1690 ～ 1750	胴部～底部のみ残存。
162-4	3-1面	遺構外	陶器	碗	丸形	—	—	(11.8)	—	(4.9)	肥前系	Ⅳ	1690 ～ 1780	口縁部のみ残存。
162-5	3-1面	遺構外	陶器	皿	平形	—	銅緑釉	—	6.2	(3.8)	肥前系	Ⅳ	1690 ～ 1780	見込みは蛇ノ目釉剥ぎ。
162-6	3-1面	遺構外	陶器	皿	平形	—	銅緑釉	(12.6)	(4.7)	3.3	肥前系	Ⅳ	1690 ～ 1780	見込みは蛇ノ目釉剥ぎ。
162-7	3-1面	遺構外	陶器	擂鉢	—	—	—	(27.7)	—	(5.8)	須佐	—	18 世紀前半	佐伯氏分類 I 群 B 類。
162-8	3-1面	遺構外	陶器	擂鉢	—	—	—	(28.0)	(12.0)	11.7	須佐	—	18 世紀前半	佐伯氏分類 I 群 B 類。
162-9	3-1面	遺構外	陶器	擂鉢	—	—	—	(28.8)	—	(8.8)	備前	—	1630 ～ 1650	口縁部のみ残存。 乗岡氏編年近世 2 期 a。
162-10	3-1面	遺構外	磁器	碗	筒丸形	風景文	染付	(8.7)	—	(4.6)	肥前系	Ⅲ	1650 ～ 1670	口縁部～胴部のみ残存。
162-11	3-1面	遺構外	磁器	碗	丸形	風景文	染付	(12.3)	—	(5.2)	肥前系	Ⅲ	1700 ～ 1740	畳付無釉。
162-12	3-1面	遺構外	磁器	碗	丸形	山水文	染付	9.2	4.0	5.4	肥前系	Ⅳ	1700 ～ 1740	口縁部～胴部のみ残存。
162-13	3-1面	遺構外	磁器	碗	端反形	草花文	色絵	(10.4)	—	(4.7)	肥前系	Ⅳ	1710 ～ 1740	口縁部～胴部のみ残存。
162-14	3-1面	遺構外	磁器	碗	丸形	草文	染付	(11.4)	—	(4.8)	肥前系	Ⅳ	1690 ～ 1750	陶胎染付碗。
163-1	3-1面	遺構外	磁器	香炉	筒形	鎬文の陰刻	青磁釉	(5.8)	—	(3.5)	肥前系	—	1700 ～ 1780	口縁部～胴部のみ残存。
163-2	3-1面	遺構外	磁器	合子	丸形	花唐草文	染付	(7.4)	—	(1.8)	肥前系	Ⅲ	1650 ～ 1700	合子の蓋。
163-3	3-1面	遺構外	磁器	蓋付鉢	丸形	建物文	染付	(9.4)	—	(3.0)	肥前系	Ⅳ	1700 ～ 1780	蓋付鉢の蓋。
163-4	3-1面	遺構外	磁器	皿	折縁形	菊花文 印花の陰刻	青磁釉	(13.8)	(4.8)	2.5	肥前系	Ⅲ	1650	高台は蛇ノ目高台。
163-5	3-1面	遺構外	磁器	皿	菊花形	草文	染付	(13.2)	(6.0)	3.4	肥前系	Ⅲ	1650	畳付無釉。
163-6	3-1面	遺構外	磁器	皿	丸形	蔓草文 雪輪文	染付	(13.0)	8.0	2.8	肥前系	Ⅲ～Ⅳ	1680 ～ 1700	見込みに五弁花の印判。
163-7	3-1面	遺構外	磁器	皿	—	唐草文 花文	染付	—	8.3	(1.9)	肥前系	Ⅳ	1730 ～ 1780	蛇ノ目凹形高台。
163-8	3-1面	遺構外	磁器	皿	—	蔓草文 花唐草文	染付	14.0	7.5	4.5	肥前系	Ⅳ	1700 ～ 1730	見込みに五弁花の印判。 高台内に「大明年製」の銘。
163-9	3-1面	遺構外	土師器	皿	灯明皿	—	—	9.9	5.4	2.1	在地系	—	—	ロクロ成形。底部は回転糸切り。
163-10	3-1面	遺構外	土師器	皿	灯明皿	—	—	10.0	5.2	2.4	在地系	—	—	ロクロ成形。底部は回転糸切り。
171-1	3-2面	SD04	磁器	小坏	—	花文	青花	—	2.4	(2.8)	中国 (景徳鎮系)	—	16C 末～ 17C 初頭	森氏分類青花小坏 I 類。
171-2	3-2面	SD04	磁器	皿	端反形	圏線	青花	(12.0)	—	(2.8)	中国 (景徳鎮系)	—	16C 末～ 17C 初頭	森氏分類青花皿 B2 群。
171-3	3-2面	SD04	陶器	碗	丸形	—	灰釉	11.0	5.3	7.3	肥前系	Ⅲ	1650 ～ 1690	全体的に被熱の痕跡あり。
171-4	3-2面	SD04	陶器	碗	呉器手	—	—	11.6	5.3	8.2	肥前系	Ⅲ	1650 ～ 1690	畳付無釉。撥形の高台。
171-5	3-2面	SD04	陶器	碗	京焼風	山水文	透明釉	11.2	5.0	5.4	肥前系	Ⅲ	1650 ～ 1690	高台内に「清水」の押印。
171-6	3-2面	SD04	陶器	皿	—	—	—	12.2	4.1	2.9	肥前系	Ⅱ	1610 ～ 1650	砂目積みの窯詰め。 目跡 4 箇所。高台は露胎。
171-7	3-2面	SD04	陶器	皿	溝縁形	—	—	13.2	4.7	3.3	肥前系	Ⅱ	1610 ～ 1650	砂目積みの窯詰め。 目跡 4 箇所。高台は露胎。
171-8	3-2面	SD04	陶器	鉢	—	—	灰釉	(17.2)	—	(6.8)	肥前系	I	1600 ～ 1620	胴部外面下半は無釉。
172-1	3-2面	SD04	陶器	鉢	二彩手	—	鉄釉 銅緑釉	—	(12.5)	(5.5)	肥前系	Ⅱ	1610 ～ 1650	砂目積みの窯詰め。
172-2	3-2面	SD04	陶器	皿	—	花文 鎬文	白化粧	(37.4)	(11.4)	(10.3)	肥前系	Ⅱ	1610 ～ 1630	高台は露胎。抉り高台。
172-3	3-2面	SD04	磁器	碗	筒丸形	花文	染付	8.7	5.2	6.7	肥前系	Ⅲ	1660 ～ 1670	畳付無釉。
172-4	3-2面	SD04	磁器	碗	丸形	草文	染付	(12.6)	—	(2.9)	肥前系	Ⅱ-2	1630 ～ 1650	口縁部のみ残存。
172-5	3-2面	SD04	磁器	皿	丸形	草文の陽刻	青磁釉	12.0	4.0	3.6	肥前系	Ⅱ-2	1640 ～ 1650	口縁端部に口銹を施す。
172-6	3-2面	SD04	磁器	油壺	—	蔓草文	染付	2.6	4.5	10.1	肥前系	Ⅱ-2	1630 ～ 1650	畳付無釉で砂粒付着。
173-1	3-2面	SD04	土師器	皿	灯明皿	—	—	11.2	7.0	2.3	在地系	—	—	ロクロ成形。底部は回転糸切り。
173-2	3-2面	SD04	土師器	皿	灯明皿	—	—	10.0	5.2	2.4	在地系	—	—	ロクロ成形。底部は回転糸切り。
173-3	3-2面	SD04	土師器	皿	灯明皿	—	—	10.6	6.6	2.2	在地系	—	—	ロクロ成形。底部は回転糸切り。
173-4	3-2面	SD04	土師器	皿	灯明皿	—	—	9.8	6.4	2.4	在地系	—	—	ロクロ成形。底部は回転糸切り。

遺物番号	遺構面	遺構名	種別	器種	器形	文様	装飾・釉薬	法量 (cm) 口径	底径	器高	生産地	九陶編年	生産地年代	備考
176-1	3-2面	SK09	陶器	皿	丸形	―	灰釉	12.4	5.3	3.5	肥前系	Ⅰ-2	1594 ～ 1610	胎土目積みの窯詰め。目跡 3 箇所。高台は露胎。
176-2	3-2面	SK09	陶器	瓶	―	―	銅緑釉 灰釉	6.2	6.0	22.1	肥前系	Ⅲ	1650 ～ 1690	外面上下で釉薬の掛け分け。
176-3	3-2面	SK09	磁器	小坏	端反形	―	白磁	6.6	2.7	4.3	肥前系	Ⅱ-2	1640 ～ 1650	畳付無釉。
176-4	3-2面	SK09	磁器	碗	端反形	菊唐草文 波文	染付	10.0	4.6	5.5	肥前系	Ⅱ-2	1630 ～ 1650	見込みに圏線と半菊文。
176-5	3-2面	SK09	磁器	碗	丸形	草文	染付	10.7	4.6	7.2	肥前系	Ⅲ	1650 ～ 1660	畳付無釉。
176-6	3-2面	SK09	磁器	水滴	鶏形	―	色絵	―	―	(4.7)	肥前系	Ⅲ	1650 ～ 1660	型押成形。外面に赤と黒で塗色。
177-1	3-2面	遺構外	陶器	碗	京焼風	―	透明釉	―	(4.4)	(3.7)	肥前系	Ⅲ	1650 ～ 1690	胴部～底部のみ残存。
177-2	3-2面	遺構外	陶器	碗	呉器手	―	―	(10.8)	(5.0)	7.4	肥前系	Ⅲ	1650 ～ 1690	畳付無釉。撥形の高台。
177-3	3-2面	遺構外	陶器	片口	―	―	鉄釉	(11.3)	4.8	7.3	肥前系	Ⅲ	1650 ～ 1690	高台は露胎。被熱の痕跡あり。
177-4	3-2面	遺構外	磁器	小坏	端反形	蘭文	染付	(5.8)	―	(3.5)	肥前系	Ⅱ-2	1630 ～ 1650	高台は無釉。
177-5	3-2面	遺構外	磁器	小坏	丸形	草花文	染付	(5.4)	(2.5)	2.8	肥前系	Ⅲ	1660 ～ 1690	畳付無釉。
177-6	3-2面	遺構外	磁器	碗	筒丸形	雪輪文 花文	染付	8.7	4.8	5.9	肥前系	Ⅲ	1650 ～ 1670	高台内に「大明年製」の銘。
177-7	3-2面	遺構外	磁器	碗	筒丸形	半菊花重ね文 松葉文	染付	9.6	5.5	6.2	肥前系	Ⅲ	1650 ～ 1670	高台内に「大明年製」の銘。
177-8	3-2面	遺構外	磁器	碗	―	草花文	染付	10.6	4.3	5.8	肥前系	Ⅲ	1650 ～ 1680	見込みに花文。高台内に「宣」の銘。
177-9	3-2面	遺構外	磁器	碗	―	網目文	染付	(8.8)	―	(4.7)	肥前系	Ⅲ	1650 ～ 1670	口縁部～胴部のみ残存。
177-10	3-2面	遺構外	磁器	碗	筒丸形	草花文	染付	(9.2)	―	(5.7)	肥前系	Ⅲ	1650 ～ 1670	口縁部～胴部のみ残存。
177-11	3-2面	遺構外	磁器	碗	―	―	白磁	(10.8)	4.3	5.1	肥前系	Ⅲ	1650 ～ 1660	色絵素地の可能性あり。
177-12	3-2面	遺構外	磁器	碗	―	草花文	染付	10.5	5.7	7.4	肥前系	Ⅲ	1650 ～ 1660	畳付無釉。
177-14	3-2面	遺構外	土師器	皿	―	―	―	9.2	5.2	2.0	在地系	―	―	ロクロ成形。底部は回転糸切り。
177-15	3-2面	遺構外	土師器	皿	―	―	―	15.4	9.5	2.9	京都系	―	―	手づくね成形。外面に指頭圧痕。胞衣皿の可能性あり。
177-16	3-2面	遺構外	土師器	皿	―	―	―	18.2	(11.0)	2.8	京都系	―	―	手づくね成形。外面に指頭圧痕。胞衣皿の可能性あり。
180-1	4面	SN01	磁器	碗	―	草文	青花	(11.7)	―	(2.8)	中国 (漳州窯系)	―	16C 末～ 17C 初頭	口縁部のみ残存。森氏分類青花碗 F 群。
180-2	4面	SN01	磁器	碗	―	―	白磁	―	5.1	(5.3)	朝鮮	―	16C 後半～ 17C 初頭	硬質白磁。全釉。漆継ぎの痕跡あり。
180-3	4面	SN01	陶器	碗	―	―	灰釉	―	4.5	(4.0)	肥前系	Ⅰ-2	1594 ～ 1610	胴部下方から高台は露胎。
180-4	4面	SN01	陶器	碗	天目形	―	透明釉	―	(4.0)	(5.6)	肥前系	Ⅰ-2	1594 ～ 1610	高台は露胎。
180-5	4面	SN01	陶器	碗	天目形	草文 (鉄絵)	灰釉	(10.7)	(4.8)	7.0	肥前系	Ⅰ-2	1594 ～ 1610	天目碗の名残りをもつ。
180-6	4面	SN01	陶器	碗	素麺手	イッチン掛け	黒釉	―	3.8	(6.1)	肥前系	Ⅱ	1610 ～ 1650	高台は露胎。
180-7	4面	SN01	陶器	碗	―	―	灰釉	(11.4)	(4.2)	5.8	肥前系	Ⅱ	1610 ～ 1650	胴部下方から高台は露胎。
180-8	4面	SN01	陶器	碗	筒形	―	灰釉	(10.4)	―	(5.4)	福岡 (上野・高取)	―	17C 初頭	口縁端部を玉縁状におさめる。
180-9	4面	SN01	陶器	皿	丸形	―	長石釉	(10.9)	―	(2.5)	瀬戸・美濃	―	17C 初頭	口縁部～体部のみ残存。
180-10	4面	SN01	陶器	皿	丸形	―	藁灰釉	(11.3)	―	(2.7)	肥前系	Ⅰ-2	1594 ～ 1610	口縁部～体部のみ残存。
180-11	4面	SN01	陶器	皿	丸形	―	灰釉	(12.8)	―	(3.1)	肥前系	Ⅰ-2	1594 ～ 1610	体部中央に段をもつ。
180-12	4面	SN01	陶器	皿	丸形	―	灰釉	10.8	3.9	3.3	肥前系	Ⅰ-2	1594 ～ 1610	外面に煤付着。灯明皿として使用されたものか。
180-13	4面	SN01	陶器	皿	―	―	灰釉	(14.0)	(4.6)	4.0	肥前系	Ⅰ-2	1594 ～ 1610	なぶり口の口縁。
180-14	4面	SN01	陶器	皿	―	―	灰釉	(15.0)	―	(3.4)	肥前系	Ⅰ-2	1594 ～ 1610	なぶり口の口縁。
180-15	4面	SN01	陶器	皿	四方形	草花文	鉄絵 透明釉	12.4	4.4	3.6	肥前系	Ⅰ-2	1594 ～ 1610	胎土目積みの窯詰め。目跡 4 箇所。高台は露胎。
180-16	4面	SN01	陶器	皿	―	―	灰釉	―	5.6	(2.6)	肥前系	Ⅱ	1610 ～ 1650	砂目積みの窯詰め。目跡 4 箇所。高台は露胎。
180-17	4面	SN01	陶器	皿	―	―	灰釉	(12.8)	4.9	3.55	肥前系	Ⅱ	1610 ～ 1650	砂目積みの窯詰め。目跡 4 箇所。高台は露胎。
180-18	4面	SN01	陶器	皿	―	―	緑白釉	(23.6)	―	(5.0)	福岡 (上野・高取)	―	17C 前半	口縁部に段をもたせ、頂部を外傾させる。
180-19	4面	SN01	陶器	皿	―	鉄絵	透明釉	(27.6)	―	(6.4)	肥前系	Ⅰ-2	1594 ～ 1610	口縁部～体部のみ残存。
181-1	4面	SN01	陶器	擂鉢	―	―	―	(31.6)	―	(10.1)	福岡 (上野・高取)	―	17C 前半	底部は欠損。
182-1	4面	遺構外	磁器	碗	―	雷文帯	青花	(13.9)	―	(3.0)	中国 (景徳鎮系)	―	17C 初頭	口縁部のみ残存。森氏分類青花碗 G 群。
182-2	4面	遺構外	磁器	皿	―	―	青花	―	(10.8)	(1.6)	中国 (景徳鎮系)	―	17C 初頭	底部のみ残存。森氏分類青花皿 B2 群。
182-3	4面	遺構外	磁器	皿	端反形	草花文	青花	―	8.6	2.1	中国 (景徳鎮系)	―	17C 初頭	森氏分類青花皿 B2 群。
182-4	4面	遺構外	磁器	皿	―	植物文	青花	―	(14.0)	(2.9)	中国 (漳州窯系)	―	17C 初頭	底部のみ残存。森氏分類青花碗 F 群粗製。
182-5	4面	遺構外	陶器	向付	―	―	長石釉	―	―	(2.7)	志野織部	―	17C 初頭	口縁部のみ残存。
182-6	4面	遺構外	陶器	小坏	丸形	―	灰釉	(7.3)	3.6	3.3	肥前系	Ⅰ-2	1594 ～ 1610	高台は露胎。底部に糸切り痕。
183-1	4面	遺構外	陶器	碗	―	―	灰釉	―	4.4	2.8	肥前系	Ⅱ	1610 ～ 1650	高台は露胎。底部のみ残存。

遺物番号	遺構面	遺構名	種別	器種	器形	文様	装飾・釉薬	法量 (cm) 口径	底径	器高	生産地	九陶編年	生産地年代	備考
183-2	4面	遺構外	陶器	碗	端反形	―	灰釉	―	4.8	(7.5)	肥前系	Ⅰ-2	1594 ～ 1610	高台は露胎。口縁部は欠損。
183-3	4面	遺構外	陶器	皿	丸形	―	灰釉	(9.8)	5.4	2.4	瀬戸・美濃	―	1590 ～ 1610	内禿皿。見込みは釉剥ぎ。底部は無釉。
183-4	4面	遺構外	陶器	皿	―	―	鉄釉	―	4.4	(2.7)	肥前系	Ⅰ-2	1594 ～ 1610	高台は露胎。
183-5	4面	遺構外	陶器	皿	丸形	―	藁灰釉	(13.8)	6.2	3.8	肥前系	Ⅰ-2	1594 ～ 1610	高台は露胎。
183-6	4面	遺構外	陶器	片口	―	―	鉄釉	(14.0)	―	(4.1)	肥前系	Ⅰ	1590 ～ 1620	胴部下方は露胎。
183-7	4面	遺構外	陶器	擂鉢	―	―	鉄釉	(34.0)	―	(3.6)	肥前系	Ⅱ	1620 ～ 1630	口縁端部を平坦にして内側へ尖らせる。口縁部周辺のみに釉掛け。
183-8	4面	遺構外	土師器	皿	灯明皿	―	―	(13.8)	(7.8)	2.7	京都系	―	―	手づくね成形。外面に指頭圧痕。
183-9	4面	遺構外	土師器	皿	灯明皿	―	―	(12.3)	(8.0)	2.9	京都系	―	―	手づくね成形。外面に指頭圧痕。
183-10	4面	遺構外	土師器	皿	灯明皿	―	―	11.4	4.0	2.8	京都系	―	―	手づくね成形。内面に「の」字状のナデ上げ調整。
187-1	5面	SK11	磁器	皿	丸形	圏線	青花	(12.6)	―	(7.7)	中国(景徳鎮系)	―	16C 末～17C 初頭	森氏分類青花皿 E 群。
187-2	5面	SK11	磁器	皿	端反形	花卉唐草文	青花	(14.6)	(8.2)	3.3	中国(景徳鎮系)	―	16C 末～17C 初頭	森氏分類青花皿 B1 群。
187-3	5面	SK11	陶器	碗	―	―	灰釉	(11.4)	―	(3.9)	肥前系	Ⅰ-2	1594 ～ 1610	口縁部～胴部のみ残存。
187-4	5面	SK11	陶器	碗	天目形	―	灰釉	(11.2)	4.0	6.5	肥前系	Ⅰ-2	1594 ～ 1610	天目碗の名残りをもつ。
187-5	5面	SK11	陶器	皿	鍔縁形	―	藁灰釉	(26.4)	―	(4.6)	福岡(上野・高取)	―	17C 初頭	口縁部～体部のみ残存。
187-6	5面	SK11	陶器	鉢	―	―	―	(19.6)	―	(4.9)	備前	―	17C 初頭	口縁部～胴部のみ残存。口縁端部を丸くおさめる。
189-1	5面	遺構外	磁器	碗	―	植物文	青花	―	(4.6)	(2.1)	中国(漳州窯系)	―	16C 末～17C 初頭	森氏分類青花碗 B 群。
189-2	5面	遺構外	磁器	碗	丸形	花文	青花	(12.4)	―	(3.0)	中国(漳州窯系)	―	16C 末～17C 初頭	森氏分類青花碗 H 群。
189-3	5面	遺構外	陶器	皿	丸形	―	緑灰釉	(10.4)	―	(2.9)	肥前系	Ⅰ-2	1594 ～ 1610	口縁部～体部のみ残存。
189-4	5面	遺構外	陶器	皿	―	―	透明釉	(13.6)	―	(2.3)	肥前系	Ⅰ-2	1594 ～ 1610	体部中央に段をもつ。
189-5	5面	遺構外	陶器	皿	―	―	灰釉	―	(4.5)	(2.1)	肥前系	Ⅰ-2	1594 ～ 1610	胎土目積みの窯詰め。高台は露胎。兜巾高台。
189-6	5面	遺構外	陶器	皿	―	―	藁灰釉	―	(4.4)	(2.5)	福岡(上野・高取)	―	17C 初頭	底部のみ残存。高台は露胎。
189-7	5面	遺構外	陶器	皿	丸形	―	灰釉	10.8	3.7	3.7	肥前系	Ⅰ-2	1594 ～ 1610	胎土目積みの窯詰め。目跡 4 箇所か。口銹を施す。
189-8	5面	遺構外	陶器	皿	丸形	―	透明釉	(12.6)	4.7	3.4	肥前系	Ⅰ-2	1594 ～ 1610	砂目積みの窯詰め。目跡 4 箇所。高台は露胎。
189-9	5面	遺構外	陶器	瓶	―	―	藁灰釉	(7.0)	―	(7.5)	福岡(上野・高取)	―	17C 初頭	頸部のみ残存。
189-10	5面	遺構外	陶器	徳利	―	―	―	―	―	(2.5)	備前	―	17C 初頭か	窯印の線刻あり。
189-11	5面	遺構外	陶器	瓶	―	―	銅緑釉 鉄釉	―	(8.1)	(4.3)	肥前系	Ⅰ	1580 ～ 1610	外面上下で釉薬の掛け分け。
189-12	5面	遺構外	陶器	壺か	―	―	銹釉	―	―	(4.6)	肥前系	―	17C 初頭	胴部外面に 2 条の段。
189-13	5面	遺構外	土師器	皿	―	―	―	(10.5)	(3.6)	2.1	京都系	―	―	手づくね成形。外面に指頭圧痕。
189-14	5面	遺構外	土師器	皿	灯明皿	―	―	(12.3)	(5.0)	2.3	京都系	―	―	手づくね成形。外面に指頭圧痕。
189-15	5面	遺構外	土師器	皿	灯明皿	―	―	(11.0)	(5.2)	(2.8)	京都系	―	―	手づくね成形。外面に指頭圧痕。

第 16 ブロック（16-6 区） 銭貨

遺物番号	遺構面	遺構名	種類	直径 (mm)	孔径 (mm)	厚さ (mm)	質量 (g)	残存率 (%)	質量 / 直径	備考
163-13	3-1面	遺構外	寛永通寶	25.0	7.0	1.25	3.07	100	0.12	古寛永。
163-14	3-1面	遺構外	寛永通寶	25.0	7.0	1.26	3.13	90	0.13	新寛永。背文に「文」をもつ。
181-8	4面	SN01	嘉祐通寶	24.0	7.0	1.22	2.99	100	0.12	北宋銭 1056 年初鋳。模鋳銭か。
181-9	4面	SN01	政和通寶	22.0	7.0	1.22	1.69	100	0.08	北宋銭 1111 年初鋳。模鋳銭か。
181-10	4面	SN01	元豊通寶	23.0	7.0	1.23	2.04	100	0.09	北宋銭 1078 年初鋳。模鋳銭か。

第 16 ブロック（16-6 区） 金属製品

遺物番号	遺構面	遺構名	種類	形状	材質	法量 (cm) 大きさ (cm)	重量 (g)	備考
127-1	1面	SP01	鉄玉	球形	鉄	直径8.6	2160	鉄丸。地鎮具に使用。
163-11	3-1面	遺構外	切羽	楕円形	鉄	縦4.3/横2.3/厚さ0.05	3.13	外縁部を鋸歯状に仕上げる。
163-12	3-1面	遺構外	用途不明	円盤状	鉛	直径2.0/厚さ0.4	101.16	中央付近に窪みをもつ。
181-2	4面	SN01	鉄砲玉	球形	鉛	直径1.3/厚さ1.2	10.13	火縄銃の玉か。
181-3	4面	SN01	煙管(雁首)	―	真鍮	長さ(2.3)/高さ2.2/火皿径1.6	4.80	火皿から首部に向かって細く短い雁首。
181-4	4面	SN01	煙管(吸口)	―	真鍮	長さ(2.8)/小口1.0	1.32	羅宇側をやや肥厚させる。口付側は欠損。
181-5	4面	SN01	煙管(吸口)	―	真鍮	長さ6.2/小口1.0/口付0.3	2.02	羅宇側と口付側をやや肥厚させる。
181-6	4面	SN01	切羽	楕円形	鉄	縦3.2/横2.2/厚さ0.1	3.75	切り回し仕上げ。側面に小柄櫃用の刳り込みがある。
181-7	4面	SN01	鉄鍔	丸形	鉄	縦4.2/横3.4/厚さ0.4	32.15	切り回し仕上げ。小柄櫃を設ける。

第 16 ブロック（16-6 区） 土製品

遺物番号	遺構面	遺構名	種別	種類	形状	胎土	法量 (cm) 口径	法量 (cm) 底径	法量 (cm) 器高	生産地	備考
134-5	2面	SK03	焼塩壺	蓋	円形	橙褐色	7.4	7.2	2.4	大阪南部	内面に布目痕あり。
134-6	2面	SK03	焼塩壺	身	筒形	橙褐色	5.6	6.0	8.3	大阪南部	胴部外面に「泉湊伊織」の陰刻印。板造り成形。渡邊氏分類 C-a 類。
149-6	3-1面	SK04	土器	炮烙	―	褐色	(30.3)	―	(6.2)	―	18C 前半。難波氏分類 D 類。
156-9	3-1面	SK06	瓦質土器	風炉	鉢状	灰色	(13.6)	―	(8.3)	―	ロクロ成形で、外面はミガキ調整。
156-10	3-1面	SK06	土器	炮烙	―	褐色	(30.8)	―	(6.4)	―	18C 初頭。難波氏分類 D 類。
156-11	3-1面	SK06	土器	炮烙	―	橙褐色	(33.0)	―	(6.4)	―	18C 前半。難波氏分類 E 類。耳の穿孔は 1 箇所で貫通する。
177-13	3-2面	遺構外	瓦質土器	水指か	桶形	灰色	(31.4)	―	(7.2)	―	木桶を模倣。茶陶の水指として使用か。

第 16 ブロック（16-6 区） 石製品

遺物番号	遺構面	遺構名	種類	材質	法量 (cm) 大きさ (cm)	法量 (cm) 重量 (g)	生産地	備考
163-15	3-1面	遺構外	火打石	瑪瑙	長さ3.2/幅1.8/厚さ0.8	5.23	―	石のエッジ部分に敲打痕。使用頻度は少ない。
163-16	3-1面	遺構外	砥石	凝灰岩	長さ(3.35)/幅2.75/厚さ0.7	14.90	―	石の片面に使用痕が見られる。
163-17	3-1面	遺構外	火打石	黒曜石	長さ7.4/幅3.8/厚さ3.0	101.66	―	石のエッジ部分に敲打痕。使用頻度は多い。

第 16 ブロック（16-6 区） 木製品

遺物番号	遺構面	遺構名	種類	各称部位	法量 (cm) 長さ（口径）	法量 (cm) 幅（底径）	法量 (cm) 高さ（器高）	法量 (cm) 厚さ	木取り	備考
139-1	3-1面	SX01	曲物	蓋	直径15.9	―	―	0.6	柾目	曲物 1。中央つまみ部分に 2 箇所の孔あり。
139-1	3-1面	SX01	曲物	底板	直径15.9	―	―	0.6	柾目	曲物 1。内面に鉄釘片と有機物が付着。
139-1	3-1面	SX01	曲物	側板	直径16.3	―	14.9	0.2	―	曲物 1。側板を一重で綴じる。幅 0.4㎝の樹皮紐で 8 段綴じる。外面に墨書や塗料は見られない。
140-1	3-1面	SX01	曲物	蓋	直径15.8	―	―	0.6	柾目	曲物 2。片側つまみ部分の 2 箇所の孔に桜の樹皮紐を通す。
140-1	3-1面	SX01	曲物	底板	直径15.8	―	―	0.6	柾目	曲物 2。内面に 3 本の鉄釘と有機物が付着。
140-1	3-1面	SX01	曲物	側板	直径18.0	―	14.5	0.2	―	曲物 2。側板を一重で綴じる。幅 0.2㎝の樹皮紐で 5 段以上綴じる。外面の全周に鳥と果樹の墨書絵画が見られる。
142-1	3-1面	SX02	曲物	蓋	直径14.1	―	―	0.6	柾目	中央つまみ部分に 2 箇所の孔あり。
142-1	3-1面	SX02	曲物	底板	直径14.1	―	―	0.6	柾目	内面に有機物が付着。
142-1	3-1面	SX02	曲物	側板	直径14.5	―	11.2	0.2	―	側板を一重で綴じる。幅 0.4㎝の樹皮紐で 10 段綴じる。外面に墨書や塗料は見られない。
142-2	3-1面	SX02	竹	箸状竹製品	19.6	1.9	―	0.3	―	竹の片側端部に面取り加工を施す。
142-3	3-1面	SX02	竹	箸状竹製品	20.9	1.9	―	0.3	―	竹の片側端部に面取り加工を施す。
142-4	3-1面	SX02	竹	箸状竹製品	21.7	2.1	―	0.3	―	竹の片側端部に面取り加工を施す。
142-5	3-1面	SX02	折敷	―	22.3	17.5	0.8	0.3	柾目	上側の折敷。側板は木釘で接合。
142-6	3-1面	SX02	折敷	―	22.8	17.6	0.8	0.3	柾目	下側の折敷。側板は木釘で接合。
149-7	3-1面	SK04	漆器	椀	(12.2)	(6.6)	8.9	―	―	内 : 赤色 / 外 : 黒色。外面に銀杏文。
149-8	3-1面	SK04	下駄	角型連歯下駄	13.9	6.4	2.8	1.2	柾目	子供用の下駄。前緒付近に足の指の痕跡あり。
149-9	3-1面	SK04	器台	灯明器台	(11.2)	11.6	4.9	0.8	柾目	灯明皿を上部に乗せる。加工材を十文字に組み合わせる。
156-12	3-1面	SK06	漆器	蓋	―	―	(1.9)	―	―	内 : 赤色 / 外 : 黒色。外面に二重丸に宝珠文。
157-1	3-1面	SK06	曲物	底板	9.1	(8.5)	―	0.5	柾目	外縁部にケズリ加工を施す。
157-2	3-1面	SK06	曲物	蓋	15.3	16.4	(0.6)	0.5	柾目	上部に把手が付くもの。黒漆を塗布。
157-3	3-1面	SK06	箸	―	23.9	0.6	―	0.5	―	白木の箸。
157-4	3-1面	SK06	箸	―	24.5	0.6	―	0.6	―	白木の箸。
157-5	3-1面	SK06	箸	―	24.5	0.8	―	0.5	―	白木の箸。
157-6	3-1面	SK06	箸	―	26.2	0.7	―	0.5	―	白木の箸。
157-7	3-1面	SK06	下駄	丸型差込下駄	21.8	7.8	―	3.2	柾目	歯部欠損。前緒付近に足の指の痕跡あり。
157-8	3-1面	SK06	下駄	丸型差込下駄	22.2	11.1	8.3	2.9	柾目	歯高 7.5㎝。前緒付近に足の指の痕跡あり。
157-9	3-1面	SK06	下駄	丸型差込下駄	21.8	8.5	―	2.3	板目	歯部欠損。前緒付近に足の指の痕跡あり。
157-10	3-1面	SK06	下駄	丸型差込下駄	21.6	10.9	8.8	2.6	柾目	歯高 8.0㎝。前緒付近に足の指の痕跡あり。
159-6	3-1面	SK07	漆器	蓋	―	―	(3.2)	―	―	内 : 赤色 / 外 : 黒色。外面に九曜文。
159-7	3-1面	SK07	漆器	椀	(11.3)	2.6	5.3	―	―	内 : 赤色 / 外 : 黒色。外面に草文。高台を丸くケズリ出す。
159-8	3-1面	SK07	櫛	―	4.9	(5.5)	1.0	―	―	一部欠損。白木の横櫛。
161-4	3-1面	SK08	箸	―	25.7	0.6	―	0.6	―	白木の箸。

遺物番号	遺構面	遺構名	種類	各称部位	法量 (cm) 長さ（口径）	幅（底径）	高さ（器高）	厚さ	木取り	備考
161-5	3-1面	SK08	箸	―	24.8	0.6	―	0.5	―	白木の箸。
161-6	3-1面	SK08	下駄	角型差込下駄	16.1	9.7	4.9	2.5	柾目	子供用の下駄。前緒付近に足の指の痕跡あり。
173-5	3-2面	SD04	漆器	椀	―	―	(4.7)	―	―	内 : 赤色 / 外 : 黒色。外面に扇文。
173-6	3-2面	SD04	漆器	椀	(13.8)	(6.5)	9.0	―	―	内 : 赤色 / 外 : 黒色。外面に二重輪違文。
173-7	3-2面	SD04	把手	―	16.6	2.7	3.0	1.3	柾目	両端に 2 箇所の釘穴あり。曲物の蓋に付属か。
173-8	3-2面	SD04	捏棒	―	17.7	5.1	(4.2)	4.0 2.5	―	円柱状の先端に使用痕が見られる。
173-9	3-2面	SD04	箸	―	23.2	0.7	―	0.7	―	白木の箸。
173-10	3-2面	SD04	箸	―	22.8	0.6	―	0.5	―	白木の箸。
173-11	3-2面	SD04	箸	―	26.9	0.7	―	0.7	―	白木の箸。
173-12	3-2面	SD04	箸	―	27.9	0.8	―	0.6	―	白木の箸。
173-13	3-2面	SD04	下駄	丸型差込下駄	(19.2)	7.0	7.5	2.7	柾目	歯高 6.5㎝。前緒付近に足の指の痕跡あり。
176-7	3-2面	SK09	漆器	椀	(15.2)	(6.0)	9.7	―	―	内 : 赤色 / 外 : 黒色。外面に松笠文。
176-8	3-2面	SK09	掛具	囲炉裏の鉤	15.4	9.5	3.8	―	―	外面に樹皮が残存。
176-9	3-2面	SK09	箸	―	27.2	0.8	―	0.8	―	白木の箸。
176-10	3-2面	SK09	箸	―	27.6	0.7	―	0.7	―	白木の箸。
176-11	3-2面	SK09	箸	―	28.7	0.7	―	0.6	―	白木の箸。
176-12	3-2面	SK09	下駄	丸型差込下駄	23.2	12.3	8.0	3.0	柾目	歯高 6.7㎝。前緒付近に足の指の痕跡あり。
177-17	3-2面	遺構外	独楽	―	4.5	3.3	―	―	柾目	先端にケズリ加工を施す。
177-18	3-2面	遺構外	栓	―	6.4	3.0	―	―	柾目	木桶の栓か。全体的にケズリ調整を施す。
177-19	3-2面	遺構外	箒	穂部	29.9	21.2	―	1.8	―	棕櫚を用い、棕櫚縄で結束。
189-16	5面	遺構外	下駄	丸型差込下駄	23.3	9.0	6.9	2.6	柾目	歯高 5.8㎝。前緒付近に足の指の痕跡あり。
189-17	5面	遺構外	下駄	角型連歯下駄	21.9	8.6	4.0	1.7	柾目	歯高 2.8㎝。前緒付近に足の指の痕跡あり。

第 16 ブロック（16-6 区） 瓦

遺物番号	遺構面	遺構名	種類	形状	胎土	装飾	法量 (cm) 大きさ (cm)	重量 (g)	備考
149-10	3-1面	SK04	丸瓦	玉縁式	灰色	―	長さ(18.6)/幅(7.6)/厚さ1.8	470	コビキ B。布目痕。
181-11	4面	SN01	軒丸瓦	―	灰色	珠文・巴文	外径(16.0)/内径(10.8)/厚さ1.9	450	連珠三巴文。左巻。 松江城軒丸瓦分類 A-1 類。
181-12	4面	SN01	丸瓦	玉縁式	灰色	―	長さ(29.2)/幅16.3/厚さ2.2	1640	コビキ A。布目痕。
188-1	5面	SK11	軒丸瓦	―	灰色	珠文・巴文	外径(16.4)/内径(16.4)/厚さ(1.7)	650	連珠三巴文。左巻。 松江城軒丸瓦分類 A-3 類。
188-2	5面	SK11	平瓦	―	灰色	―	長さ(13.0)/幅(17.5)/厚さ2.0	710	外面に被熱の痕跡あり。

第 4 章　自然科学分析

松江城下町遺跡における動物資源利用

石丸恵利子 (広島大学総合博物館)

第 1 節　はじめに

松江城下町遺跡は松江平野中央部に位置する近世遺跡であり、城山北公園線都市計画街路事業に伴い、平成 23（2011）～ 27（2015）年度にかけて用地買収が完了した場所から順次発掘調査が行われた。調査では近世城下町の暮らしを物語る多くの遺構や遺物が検出され、動物遺存体も複数の調査地点で出土しており、地点ごとにその概要を報告している（石丸 2013・2014・2015 など）。

発掘調査は、内山下と呼ばれる上級・中級武士の屋敷地を配した外堀の内側と、その外側の下級武士の屋敷地や町屋と推定される場所の連続した範囲にわたり、近世城下町における動物資源利用の様相を知るうえで、また階級差による資源利用の相違を明らかにするうえでも貴重な興味深い調査資料である。また、内山下の範囲内では、松江歴史館 (殿町 287・279 外) やアルファステイツ建設地点（母衣町 100 外）においても発掘調査が行われ、多くの動物遺存体が出土している（石丸・江田 2011、古藤 2012）。今回は城山北公園線で出土した資料を中心として、松江歴史館などの出土資料とも比較しながら、松江城下町遺跡における動物資源利用の様相や屋敷地の違いによる特徴について考察してみたい。

第 2 節　動物遺存体の様相と特徴

城北北公園線の調査範囲は、第 1 ブロック～第 16 ブロックに分けられ、動物遺存体は第 1 ブロック・第 3 ブロックや第 6 ブロック～第 12 ブロックなどの複数地点で多くの資料が確認されている（第 203 図）。以下では、分類群ごとにその特徴を述べる。

第 203 図　松江城下町遺跡における動物遺存体出土地点

（1）貝類

貝類は、破片数にして最も多く確認されている。淡水産 3 種、汽水産 1 種、海産 14 種の計 18 種が出土している（表 15）。種数は海産貝類が最も多く、松江歴史館地点で確認されたものを含めると 18 種に及ぶ。内湾砂底に生息するハマグリやサルボウガイ、また外海に面する岩礁域や沿岸砂泥底域で獲得することができるサザエやテングニシなどが多く確認されている。淡水産の種数は少なく、タニシ類やイシガイ科の一種、カワニナがわずかに確認されているのみである。最も多いのはヤマトシジミで、城下町の南方に広がる宍道湖や中海で採集されたものと考えられる。外海の岩礁域や砂礫底などに生息する種が多く確認されていることから、中海や佐陀川 (佐陀川の開削は天明 7(1787) 年) を抜けて、日本海に面する地域からこれらの海産貝類が積極的に運ばれてきたことがうかがえる。

第 3 ブロック第 3 面 SX01（17 世紀前半～中頃）ではヤマトシジミが 145 点まとまって出土しており、殻長 20mm から 23.9mm のものが最も多く、24mm から 26.9mm のものがそれに次ぐ量確認された（第 204 図左上）。また 9 ブロック MJR106（17 世紀後半）からも計 81 点出土しており、24mm から 27.9mm のものを主体に 20mm から 23.9mm のものがそれに次いで多く利用されているのが分かる（第 204 図右上）。主たる大きさにやや差が認められるものの、20mm から 28mm 程度の大きさのものを獲得して利用していたことが分かる。

また、サルボウガイも第 3 ブロックや第 7・8 ブロックでまとまって出土している。第 3 ブロックの資料はやや大きな個体が多く、殻高 32mm から 35.9mm のものを主体に 23.6mm の小さなものから 54.2mm もある大きなものも確認することができる（第 204 図左下）。第 7・8 ブロックで出土したものは殻高 24mm から 31.9mm までのものが主体を占め、小さなものは 16.6mm、一番大きなもので 43.9mm のものが確認できる（第 204 図右下）。第 3 ブロックと第 7・8 ブロックは上級武士の屋敷が配置されていた場所にあたり、時期差を考慮する必要もあるが、第 3 ブロックでやや大型のサルボウガイが認められることは、第 3 ブロックの屋敷で特に大きなサルボウガイを選択して入手した可能性がある。

サザエもやや多く出土しており、第 3 ブロックや第 9・10 ブロックで多く出土している。第 3 ブロックでは 17 点確認され、殻長 100mm から 110mm のものが最も多く、小さなものは殻長 55.9mm、一番大きなもので 120.8mm のものが確認された。いずれも棘のある個体であった。第 9 ブロックでは破片を含めて 29 点出土しており、殻長 68 mmほどのものから 93mm のものが出土している。第 10 ブロックでは 8 点確認され、53.4mm の小型のものから 105mm の大きな個体も確認することができた。

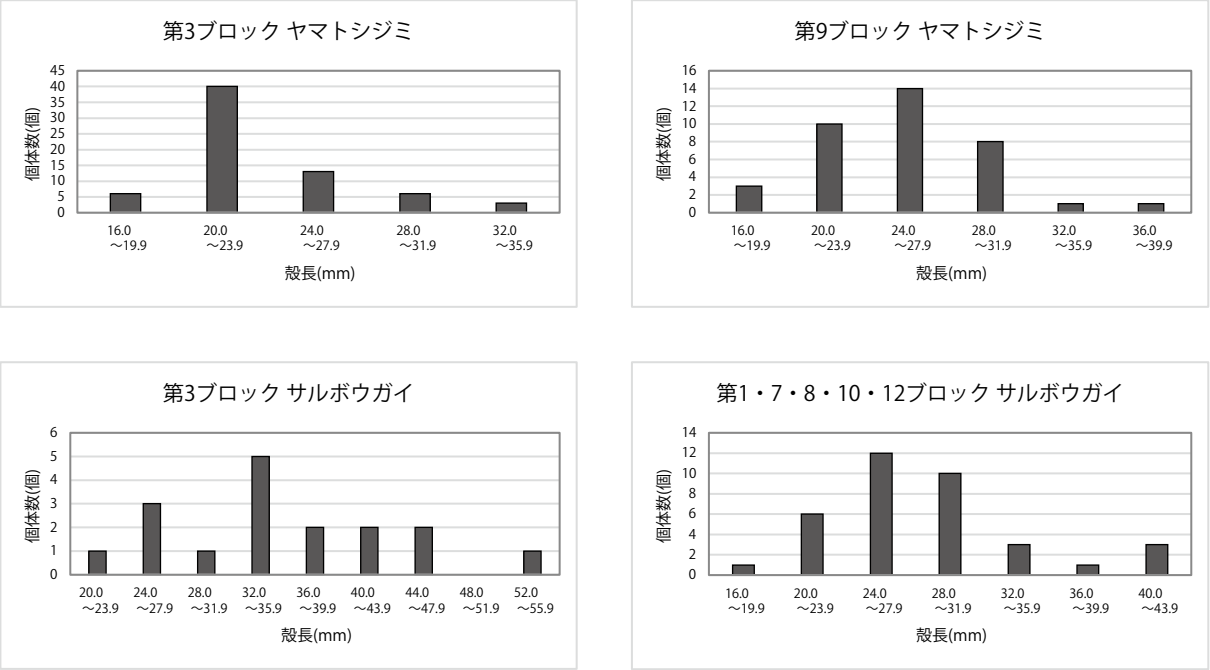
ハマグリは第 3 ブロックではやや少ないものの 13 点を確認し、計測可能な資料として殻長 58.7mm と 78.2mm、82.0mm の個体を確認することができた。そのほかに第 9・10 ブロックで 37 点出土しており、殻長 40mm 大のものから 90mm 大のものまでを確認することができた。そのほか、テングニシも第 3 ブロックや第 9・10 ブロックで一定量確認され、テングニシの蓋と思われるものも出土している。また。アワビ類も破片となったものが多いものの、各地点で利用されていたことが分かる。殻長 100mm を超えるような大きなものが複数含まれており、メガイアワビと考えられる

殻長 161mm の資料は特筆される。

そのほかの種としては、殻高約 80mm のイタヤガイや、イワガキもしくはマガキと考えられるイタボガキ科の一種も出土している。上記の種はいずれも近世城下町遺跡から多く出土する種であり、広島城跡、高松城跡、徳島城跡など多くの城下町遺跡で主要な海産資源のひとつであったと考えられる（石丸 2009・2016・2018）。なお、前述の瀬戸内の城下町遺跡では、アカニシの利用が認められることが多いが、松江城下町遺跡からはほとんど出土していない点も貝類利用の特徴として挙げられる。遠隔地から資源が運ばれる近世においても、立地によって貝類利用の様相が異なる状況がうかがえる。松江城下町ではヤマトシジミを主体にサルボウガイやサザエを多く利用し、ハマグリやテングニシ、アワビ類が一定量認められる状況が読み取れる。

表 15　貝類の種類と生息環境

生息域	淡水域	汽水域	内湾					外洋		
	河川・湖沼	河口・潮間域	干潟	シルト・泥底	砂底	岩礁	砂礫	沿岸砂底	沿岸砂泥底	岩礁
種類	マルタニシ？ イシガイ科 カワニナ	ヤマトシジミ	ウミニナ マガキ （アサリ）	（アカニシ）	ウミニナ ツメタガイ サルボウガイ ハマグリ （アサリ）	サザエ マガキ	イワガキ	（マガキガイ）	テングニシ イタヤガイ （バイ）	アワビ類 サザエ イガイ ムラサキインコ オオコシダカガンガラ （コシダカガンガラ）



第 204 図　松江城下町遺跡における貝類の大きさ組成

（2）魚類

魚類については、淡水魚のコイとフナ属、マダイやクロダイ属、スズキ属やボラ科などの 19 種を確認することができた（表 16）。宍道湖や中海などの汽水域から内湾においては、スズキやボラ、クロダイなどが漁獲できたと考えられ、マダイやハタ科、フグ科、コチ科、ヒラメなどの内湾から外洋

沿岸の中層から底生に生息する魚は、日本海に面する場所で獲得し、それらが松江城下町に運ばれてきたと考えられる。

最も多く出土したのはマダイもしくはマダイ亜科を含むタイ科で、第 1・3・5・9・10・16 ブロックの各地点で出土が確認できる。マダイなどのタイ科の骨は丈夫で残りやすいことも影響していると考えられるが、多くの近世遺跡で確認することができる主要な魚種であり、近世において最も好まれた魚種の一つだといえる。また、前頭骨や上後頭骨、歯骨、主上顎骨、擬鎖骨などの複数の部位に切創や切断などの解体・調理の痕跡を観察することができる。中世以降の遺跡から出土するマダイの前頭骨や上後頭骨には、頭部を左右に二分割にした、いわゆる兜割（内割り・梨割り）と呼ばれる調理の痕跡や三枚におろした痕跡が認められることが多いが、松江城下町の資料においては前頭骨や上後頭骨が明らかに左右に分割された痕跡を持つ資料は少なく、歯骨や擬鎖骨、主鰓蓋骨など複数の部位に切断の痕跡が多く認められる。これらのことから、マダイの頭部の左右分割に固執することなく、より細かく分割するような解体調理が行われた状況がうかがえる。

スズキ属もやや多く認められ、主鰓蓋骨や歯骨、前鰓蓋骨などの複数部位が第 1 ブロックや第 9 ブロックなどで出土している。切断や切創など、調理解体の際についたと考えられる解体痕が、歯骨や主鰓蓋骨などの複数資料に認められる。スズキも頭部と胴部を切り離す、あるいは内臓を取り出すなどの、刃物を使った解体調理が行われたことがうかがえる。また、コチ科、ヒラメ、エイ類、サメ類、ブリ属やマグロ属も少量ながら確認され、多様な魚類を利用したことが分かる。

表 16　魚類の種類と生息環境

水域	淡水域（内水面）	汽水域（感潮域）	内湾			湾口部	外洋	
生息層／底質			潮間帯	沿岸浅海帯	湾央部	沿岸		沖合
表層	コイ				アジ科			
	フナ属			サメ類				
							マグロ属・ブリ属	
中・底層		スズキ属・ボラ科・クロダイ属						
						マダイ・（タラ科）		
				フサカサゴ科・（ベラ科）		フサカサゴ科・（ベラ科）		
				ハタ科		ハタ科		
底生				エイ類・フグ科				
					コチ科・ヒラメ・アマダイ属			

（　）は松江歴史館で確認された種

（3）鳥類

鳥類は、全体量としては他種と比較して少ないが、キジ科、カモ科、サギ科が第 1･3･9･10 ブロックなどの広い範囲で出土している (表 17)。特に第 3 ブロックでの出土が顕著である。松江歴史館地点では、前述の種に加えてウ科やカイツブリ科も確認されている。キジ科にはキジもしくはヤマドリと考えられるものとニワトリが含まれている。カモ科においても、オナガガモやヒシクイの大きさに比定されるものなど複数の大きさが確認できるため、複数種が含まれていると考えられる。サギ科の一種やニワトリ、キジ科の一種と考えられる資料などには切創が観察でき、食用となったものであることがうかがえる。キジ科やサギ科、ウ科、カイツブリ科は留鳥であり、一年を通して獲得が可能であったと考えられるが、カモ科の多くは冬鳥として日本に飛来することから、冬季に猟が行われた可能性が示唆される。

（4）哺乳類

哺乳類は、全体量（破片数）としては貝類に次ぐ量が確認されているが、種類はイヌ、イノシシ類、ニホンジカ、ウシが主体であり、そのほかにネコ、タヌキ、キツネ、オットセイ、ネズミ類が少量確認されているのみである (表 17)。イヌは第 1･3･6 ブロックなどで頭蓋骨や下顎骨、上腕骨、大腿骨、肋骨などの全身の部位が出土している。出土した四肢骨で体高を山内（1958）に従って復元したところ、32.5cm から 49.6cm までの大きさを確認することができた。四肢骨端部が化骨済にも関わらず体高 32cm 程度のものが存在し、矮小犬であった可能性が高い。また、端部が未化骨の資料も多く、松江城下町において大小さまざまな犬が利用されていたことがうかがえる。また、アルファステイツ建設地点においては多くの遺構から複数個体が検出されるなど、特にイヌの出土が多い地点だといえる。埋葬と考えられる状態での検出は確認できていないが、江戸時代には西洋犬が多く渡来していたとされ、絵画にも愛玩犬が描かれるようになることから、狩猟犬やペットとして飼われていたものが含まれている可能性が示唆される。ただし、大腿骨や肋骨、寛骨などの複数資料に解体痕が観察され、人の食用となったものや鷹狩の餌となったものも含まれている可能性がある。

イノシシ類は、第 3・10 ブロックで確認された。イノシシかブタかを判断することは難しいためイノシシ類とした。第 3 ブロックでは SK02 で下顎骨や四肢骨などの各部位が確認され、メスの若獣 1 個体分がまとまって出土している。表面の摩滅が顕著であったが、橈骨 1 点で遠位部外側面に複数の切創を確認することができた。解体処理したのちにまとめて廃棄したものだと考えられる。また第 10 ブロック西側では、上顎骨や肩甲骨などが確認され、上顎犬歯の形態からオス個体であることが分かる。肩甲骨には切創が観察され、解体処理されたことがうかがえる。

ニホンジカの出土量は少なく、第 6 と第 9 ブロックで肩甲骨と中足骨、橈骨が確認されている。肩甲骨と中足骨には複数の切創が観察されている。松江歴史館地点では哺乳類の中でニホンジカが最も多く確認されており、屋敷地によってニホンジカとイノシシ類の出土比率は異なるものの、全体的にニホンジカやイノシシ類を積極的に利用した様子はうかがえない。

哺乳類利用で特筆される点として、牛角芯がまとまって出土している点があげられる。すべて第 9･10 ブロック西側の町屋に相当する場所からの出土である。それら角芯のすべてに切断痕あるいは刻み目などの加工痕が残されており、角鞘を利用したことを示していると考えられる。加工は一端あるいは両端部分が完全に切断されたものや、牛角の長軸に対して垂直方向に 4 重の刻み目が表面に残されたもの、長軸に対して平行の刻み目が付けられたもの、基部側に切創が残るものなど、角鞘を多様な形に加工したことがうかがえる。江戸時代の百科事典である『和漢三才図会』に、角鞘を切り開いて板状にしていたことが記されており、鼈甲の代用品として利用されていたことが指摘されている（寺島 1987、松井 1997、久保・松井 2001）。福島県河股城跡や堺環濠都市遺跡などの中世以降の遺跡で出土が認められる（山崎 2002、松井 1997）。また、肋骨や椎骨、肩甲骨、大腿骨なども確認され、それらの多くに解体痕や加工痕が認められる。同様な資料は櫛払いや秤の竿などの骨製品に加工されたことが指摘されており（久保・松井 2001）、松江城下町の町屋にはこれらの加工が行われた工房があったことが示唆される。出土した資料は牛角芯や加工痕のある四肢骨などに限定されるこ

とから、別の場所で解体処理されたのちに骨や角などの素材のみが持ち込まれたと考えられる。

さらに、1 点のみではあるがオットセイ（雌）の上腕骨が出土している点も注目される。解体痕が確認できるため、食用となった可能性が高い。また、ネコも第 3・9・10 ブロックなどで確認でき、城下町遺跡で出土することが多い種である（石丸 2009・2016 など）。解体痕は不明瞭であったためどのような利用が行われたのかは言及できないが、近世において人とのかかわりが深かった動物であるといえる。

表 17　鳥類・哺乳類・爬虫類の種類と生息環境

鳥類		哺乳類	
カイツブリ科	湖池沼など	ネズミ科	クマネズミ属
ウ科（カワウ）	河川、湖池沼、海岸	食肉目	イヌ タヌキ キツネ ネコ オットセイ
サギ科	河川、湖池沼、海岸、竹林など		
カモ科 ガン類 カモ類	淡水域、湿原、海岸など	偶蹄目	イノシシ ニホンジカ ウシ
キジ科 ニワトリ	山林、林、農耕地など	爬虫類	
		カメ目	スッポン

（5）その他

前述した動物種以外には、スッポンが第 3・9・10 ブロックで確認されている (表 17)。解体痕は観察できなかったが、食用となった可能性が高いといえる。松江歴史館地点からも出土しており、堂島蔵屋敷跡や高松城跡などの多くの近世遺跡で出土が確認されている（久保 1999、石丸 2018）。

第 3 節　武家屋敷と町屋 (米子町) の動物相の比較

城山北公園線は出土範囲が狭小な地点が多いため、各地点ごとの比較は難しいが、松江城下町絵図によると米子川の東岸は町屋が配置されていた場所で、この町屋 (米子町) の調査を行った第 9・10 ブロック西側の資料と、松江城に近い武家屋敷の調査を行った第 1・3 ブロック (殿町・母衣町) の資料を比較し、松江城下町における動物資源利用の様相を考察してみたい。なお、時期区分については不明瞭な部分が含まれるため、各ブロックの資料を一括して扱うこととする。

第 1・3 ブロックで最も多く出土した貝類はヤマトシジミで、サルボウガイ、サザエ、ハマグリがそれに次いで多く出土している。そのほかアワビ類、イタヤガイ、テングニシなど計 12 分類群を確認することができる。イガイ類やオオコシダカガンガラがわずかに認められる。一方、町屋では、ヤマトシジミが最も多く、サザエ、ハマグリ、アワビ類、サルボウガイがそれに次ぎ、計 11 分類群が出土している。第 1・3 ブロックと異なる種としては、ツメタガイ、タニシ類、イシガイ科が出土している。両地点では種数・組成ともに大きく異なっておらず、ヤマトシジミを中心にサザエやサルボウガイ、ハマグリを多く利用している状況がうかがえる。松江歴史館地点の屋敷地の大半が調査範囲となった南屋敷では、ヤマトシジミは時期的に多く確認されはするが、サルボウガイやサザエ、ハマグリ、アサビ類が多い特徴が認められた（石丸・江田 2011）。上記の種類にイガイ類やオオコシダカガンガラなどを含む点では、第 1・3 ブロックと共通した特徴を持つといえる。

魚類は、第 1・3 ブロックでマダイ亜科（タイ科を含む）が最も多く、エイ・サメ類、スズキ属がそれに続く計 7 分類群を確認することができた。一方、第 9・10 ブロックでは、マダイ亜科を主体

にスズキ属、コイ科、クロダイ属など少量ではあるが計 12 分類群が確認された。また、ブリ属やマグロ属、ハタ科、ヒラメ、コチ科など多様な魚類を利用している特徴を指摘することができる。松江歴史館地点において、屋敷地全体を調査した地点と廃棄土坑などが形成されたであろう屋敷奥部が調査されていない地点においては、出土動物の組成が大きく異なる結果が得られた（石丸・江田 2011）。そのため、城山北公園線においても調査範囲が狭小であることから屋敷地全体を把握することはできていないと考えられ、単純に比較することはできないが、城下町全体としては多様な魚種が利用されていたことが指摘できる。

鳥類は、第 1･3 ブロックでキジ科（ニワトリを含む）を主体にカモ科、サギ科が確認された。第 9･10 ブロックでは鳥類の出土は少なく、種不明資料もあるがカモ科とキジ科が確認された。貝類や魚類が多く確認されたのに対して、第 9・10 ブロックは鳥類の出土が少ないといえる。鳥類の捕獲利用が武家地の資源利用の特徴といえるのかもしれない。歴史館地点でも鳥類は多く、上記以外にカイツブリ科とウ科も確認されている。爬虫類のスッポンは両ブロックで確認することができる。

哺乳類は、第 1・3 ブロックではイヌが最も多く、イノシシ類がそれに次ぐ量で出土し、わずかにネコとオットセイが確認された。第 9・10 ブロックはウシが最も多く、ネコ、ニホンジカ、イノシシ類の順に確認され、わずかにイヌとタヌキ、ネズミ類も確認することができた。加工痕のある牛角芯や四肢骨などの大量出土から、町屋に骨製品の加工場があったことが分かる。第 1・3 ブロックでイヌが多い点も特徴的で、武士階層の鷹狩などによる鳥類獲得やイヌの食用、鷹の餌、あるいはペットとして飼われていた可能性など、町屋との相違が指摘できる。アルファステイツ地点でもイヌの出土が目立っており、形態の異なる複数種を確認することができている。これらのことからも屋敷地ごとに動物との関わりに差が認められることをうかがい知ることができる。一方、ネコは町屋で資料数は多いが、個体数としては第 1・3 ブロックと相違ないものと判断され、近世城下町遺跡で確認される特徴的な種のひとつである。

第 4 節　まとめ

以上のように、松江城下町遺跡における動物資源利用について、これまでの出土資料から考察した。資料は、屋敷地を中心とした廃棄土坑や溝などから出土したものが中心であり、調理解体後に廃棄されたものが多くを占めると考えられる。一方で、屋敷地の建物跡そのものが検出された場所や畠跡などでは動物遺存体の出土は顕著でないため、各地点での動物資源利用をすべて理解することは難しいが、武家屋敷と町屋での比較を行うことができたのは今回の大きな成果であったといえる。

貝類利用においては、階層に関わらずヤマトシジミが多く利用されていること、また松江城下町は汽水域に面するにもかかわらず、サザエやサルボウガイ、ハマグリ、アワビ類、テングニシ、イタヤガイなどの多様な海産貝類も利用していることが示された。魚類についてもマダイ亜科やスズキ属を主体に、エイ・サメ類やブリ属、マグロ属、コチ科、ハタ科などの多様な海産魚類が中心で、わずかにフナ属やコイ科も利用していたことが示された。鳥類については、外堀の内側に位置する武家屋敷での出土が顕著で、その外側の第 9・10 ブロック以東ではこれまでのところ全く検出されていない。

また、哺乳類はイヌの出土が目立ち、ネコやイノシシ類、ニホンジカも少量認められるなど、哺乳類の種数は縄文・弥生時代と比較して少なくなるのは、他の城下町遺跡の出土状況と同様であった。ただし、町屋 (米子町) では加工痕のある牛角芯や四肢骨が大量に出土し、骨製品や角鞘製品を加工した工房があったことが明らかとなったことは、松江城下町における町屋の生業活動を知るうえで重要な情報を得ることができた。牛角芯に残る加工の痕跡からは、得られる角鞘の形態を考慮した定形的な加工方法であったこと、またウシの四肢骨に認められる痕跡からも骨製品の定形的な加工方法によって素材を得ていたことを知ることができた。また、解体痕のあるオットセイが比較的上級の武士の屋敷地で出土したことも、階層や屋敷地での動物資源利用の個性を捉えるうえで興味深い。

本稿では、城山北公園線事業に伴う松江城下町遺跡の発掘調査によって得られた動物遺存体の考察によって、山陰地方に位置する近世城下町の暮らしや動物資源利用の一端を明らかにすることができたと考えられる。近世城下町の暮らしをより深く読み解くために、時期ごとの相違や他の出土遺物と関連付けながら考察すること、また瀬戸内や関西地域などの近世遺跡との比較などによって、近世の動物資源利用について今後も継続して追究していきたい。

参考文献

・石丸恵利子 2009「広島城下町の動物資源利用 － 広島城跡広島法務総合庁舎地点出土の動物遺存体 － 」『広島城跡法務総合庁舎地点 (広島市中区上八丁堀所在)』財団法人広島市文化財団発掘調査報告書第 16 集　財団法人広島市文化財団 1-48 頁
・石丸恵利子・江田真毅 2011「松江城下町遺跡（殿町 279 地番外）にみられる松江藩の家老屋敷における動物資源利用」『松江城下町遺跡（殿町 287 番地）（殿町 279 番地外）発掘調査報告書 － 松江歴史館整備事業に伴う発掘調査報告書 － 自然科学分析・写真図版編』松江市文化財調査報告書第 139 集　松江市教育委員会・財団法人松江市教育文化振興事業団 37-5 頁
・石丸恵利子 2013「松江城下町遺跡出土の動物遺存体」『城山北公園線都市計画街路事業に伴う松江城下町遺跡発掘調査報告書 2 松江城下町遺跡第 1 ブロック（西側）・第 3 ブロック・第 4 ブロック』松江市文化財調査報告第 154 集　松江市教育委員会・財団法人松江市教育文化振興事業団 209-216 頁
・石丸恵利子 2014「松江城下町遺跡（殿町・母衣町・米子町・南田町）出土の動物遺存体」『城山北公園線都市計画街路事業に伴う松江城下町遺跡発掘調査報告書 3 松江城下町遺跡第 1 ブロック（東側）・第 6 ～ 10 ブロック・第 12 ブロック』松江市文化財調査報告第 156 集　松江市教育委員会・公益財団法人松江市スポーツ振興財団 270-279 頁
・石丸恵利子 2015「松江城下町遺跡（母衣町 43-2 外）出土の動物遺存体」『城山北公園線都市計画街路事業に伴う松江城下町遺跡発掘調査報告書 7 松江城下町遺跡第 3 ブロック（母衣町 43-2 外）』松江市文化財調査報告第 171 集　松江市教育委員会・公益財団法人松江市スポーツ振興財団 48-50 頁
・石丸恵利子 2016「徳島城下町跡　徳島 1 丁目地点における貝類資源の利用」『徳島城下町跡徳島町 1 丁目地点 － 徳島地家簡裁庁舎敷地埋蔵文化財発掘調査報告書 － 第 2 分冊』徳島県埋蔵文化財センター調査報告書第 88 集　徳島県教育委員会・公益財団法人徳島県埋蔵文化財センター 650-659 頁
・石丸恵利子 2018「高松城跡（高松北警察署）出土の動物遺存体からみた上級武士の動物資源利用」『香川県警察高松北警察署建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　高松城跡』香川県教育委員会 133-169 頁
・久保和士 1999『動物と人間の考古学』真陽社
・久保和士・松井章 2001「さまざまな生産」『図解・日本の中世遺跡』東京大学出版会 122-125 頁
・寺島良安著　島田勇雄・竹島淳夫・樋口元巳訳注 1987『和漢三才図会』平凡社
・古藤博昭 2012『アルファステイツ母衣町Ⅱ新築工事に伴う松江城下町遺跡（母衣町 100 外）発掘調査報告書』松江市文化財調査報告第 149 集　松江市教育委員会・財団法人松江市教育文化振興事業団
・松井章 1997「堺環濠都市遺跡（SKT78 地点）出土の動物遺存体」『堺市文化財調査概要報告』第 61 冊 堺市教育委員会 31-38 頁
・山内忠平 1958「犬における骨長より体高の推定法」『鹿児島大学農学部学術報告 7』125-131 頁
・山崎京美 2002「河股城跡Ⅰ・Ⅱa 区出土動物遺存体の同定」『河股城跡発掘調査報告書 - 国道 114 号川俣バイパス工事関連発掘調査 -』第 4 分冊 川俣町文化財調査報告書第 19 集 福島県県北建設事務所・福島県伊達郡川俣町教育委員会 1-6 頁

第 5 章　総　括

城山北公園線都市計画街路事業に伴う松江城下町遺跡発掘調査報告書は本報告を含めて『城山 1 ～ 8』があり、『城山 8』が当該事業最終年度の報告となる。松江城下町遺跡は、17 世紀初頭～ 19 世紀後半を中心とした近世城下町の遺構と遺物を主な対象としている。ここでは、平成 18 年度から 29 年度にかけて実施した松江城下町遺跡の調査成果について遺構と遺物の再検討を行うことで「新たに分かった点」、「遺跡の評価を変更した点」、「今後の課題」についてまとめ、併せて指標遺跡として抽出した城下町遺跡を中心に考察を加えて総括としたい。

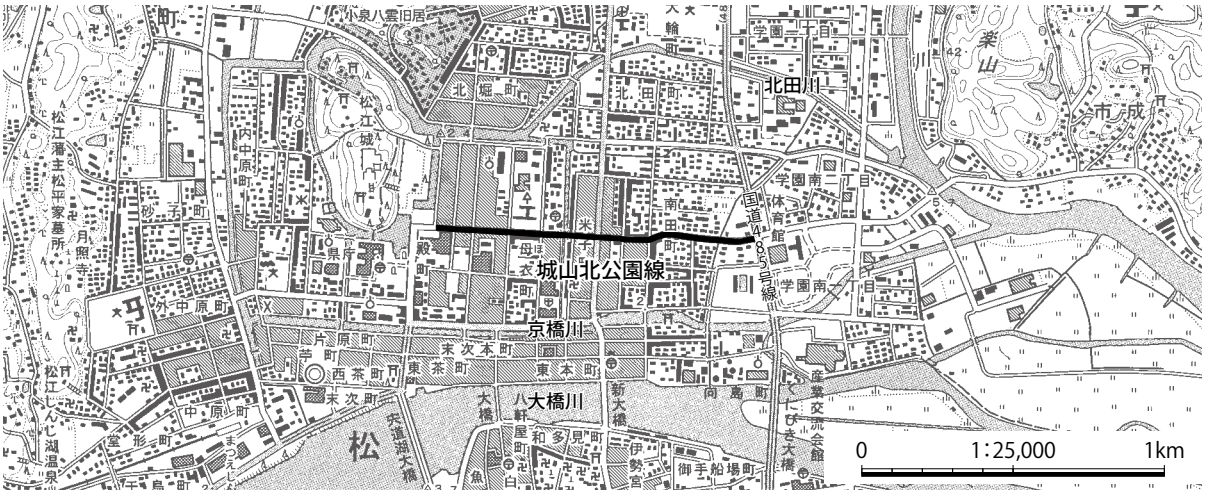
本章第 1 節では、城山北公園線の概要および発掘調査の経緯と経過について述べる。第 2 節では、本報告第 3 章の各遺跡における基本層序でも触れたが、松江城下町遺跡の地層について今後の調査において基準となる基本層序を提示するとともに、城山北公園線の土層堆積を東西軸で見た場合にどのような特徴を示すのか言及してみたい。第 3 節では、松江城下町遺跡の中で殿町・母衣町・南田町の 3 箇所から指標となる遺跡を 1 遺跡ずつ抽出し、その 3 遺跡を基に遺構と遺物の検討を行う。第 4 節では、遺物に重点を置いて松江城下町遺跡における陶磁器の消長についてまとめる。第 5 節では、遺構に重点を置いて松江城下町遺跡の変遷を示し、代表的な遺構をキーワードとして掲げた上で、古い時期の遺構順に時系列で概観していきたい。

第 1 節　はじめに

第 1 項　城山北公園線の概要

城山北公園線 (通称：大手前通り) は、松江城の南東に位置する大手前 (殿町) から東の南田町に向かう東西道路で、すでに 4 車線化されている宍道湖大橋と国道 485 号線 (通称：くにびき道路) を結ぶ松江市内循環線の一部として、東西を連結させる重要な幹線道路となっている。道路拡幅工事前の城山北公園線は 2 車線あるものの、歩道が狭小で右折レーンが確保されていないなど、幹線として十分な機能が保たれていなかった。

このため島根県では、島根県民会館 (殿町) から国道 485 号線 (学園南) までの東西 1,047 m区間



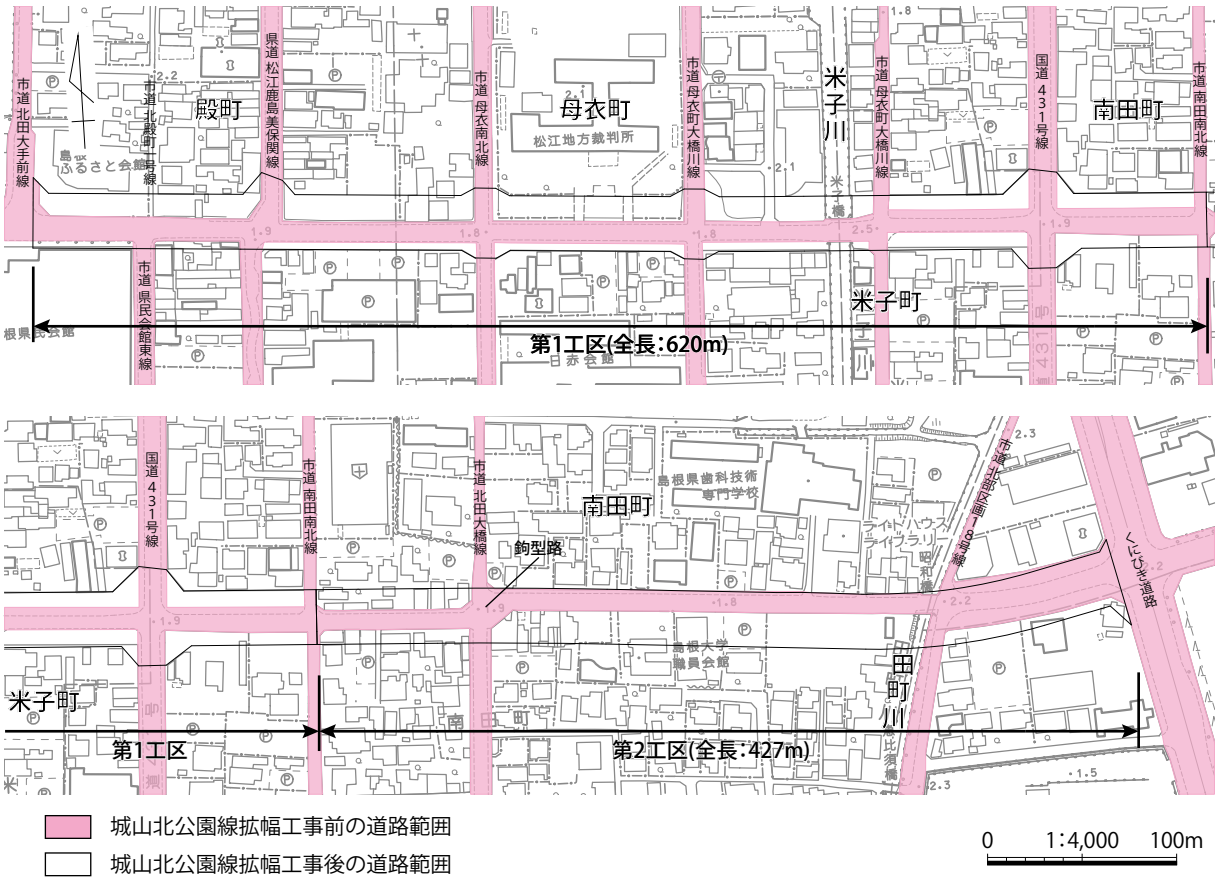
第 205 図　城山北公園線位置図

を「3.3.30 号　都市計画道路　城山北公園線」として、交通渋滞の緩和と歩行者の安全確保を目的とした 2 車線の車道の 4 車線化 (車道部：整備前車道幅員 8 ～ 10 m→整備後車道幅員 19 mへ拡幅) と両側の歩道 (歩道部片側：整備前歩道幅員 1.5 m→整備後歩道幅員 5 mへ拡幅) の道路幅員南北 29 mを整備する道路拡幅工事を行っている。

工事は、市道北田大手前線から市道南田南北線までの区間 (殿町・母衣町・米子町・南田町地内) を「第 1 工区」とし、市道南田南北線から国道 485 号線までの区間 (南田町・学園南地内) を「第 2 工区」として実施している。工事範囲について、第 1 工区は東西全長 620 m、城山北公園線北側への拡張は約 10 ～ 13 m・同線南側への拡張は約 4 ～ 7 mである。第 2 工区は東西全長 427 m、城山北公園線北側への拡張は約 10 ～ 13 m・同線南側への拡張は約 4 ～ 18 mである。

城山北公園線の軸線は東西方向で、南田町の市道北田大橋線の南北道路と城山北公園線が交わる交差点は鉤型路となっていた。工事前の城山北公園線は、南田町の鉤型路より西側は南寄りに位置し、東側は北寄りに位置していた。工事ではこの鉤型路を含めた 2 車線の車道を 4 車線化することによって、工事後には直線道路となっている (第 206・207 図)。

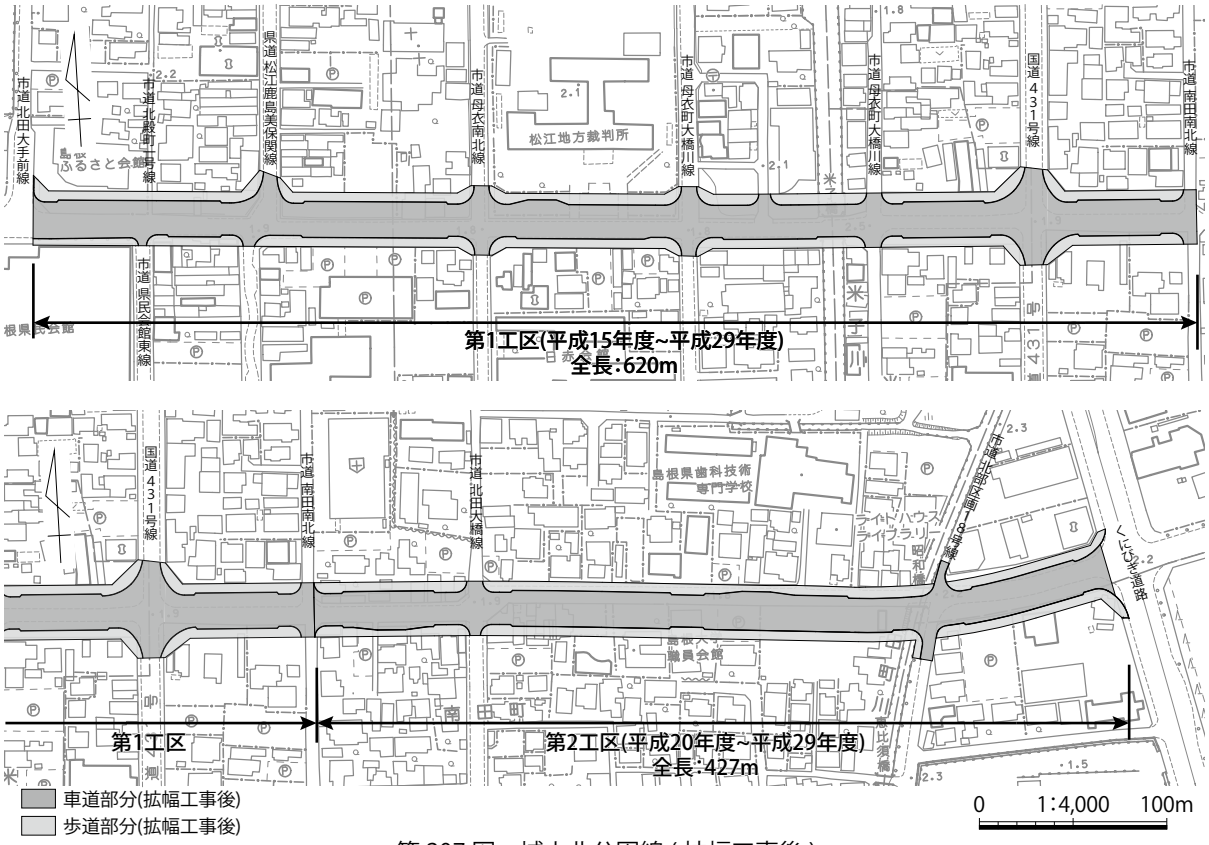
城山北公園線沿線は、17 世紀初頭の松江開府当初から武家屋敷・藩施設・町屋などが建ち並んでいた場所である。米子川 (外堀) から西側の殿町・母衣町は「内山下（うちさんげ）」と呼ばれ[36]、ここには家老など 1000 石以上の重臣や 500 石以上の上級家臣の屋敷が配置されていた。米子川の東岸には米子町があり、ここには南北方向の町屋が配置され、米子町から東側に位置する南田町には 500 石以下の中級・



第 206 図　城山北公園線 (拡幅工事前)

下級家臣の屋敷が配置されていた。

江戸時代において城山北公園線がどのように呼称され、城下の人々にどのような道路として認識されていたのか示すことができる文献史料は見つかっていない。ただし、松江城下町絵図から城山北公園線の立地を考えると、京橋川から北側は、米子川の東岸に面する米子町と北田川の北岸に面する北堀町を除いて、ほとんどが武家屋敷となっている。城山北公園線は、松江城大手前から東へ向かって重臣家臣団の屋敷地や藩施設が配置されていた殿町、上級家臣団の屋敷地が配置されていた母衣町、そして外堀となる米子川を越えた場所に町屋が配置されていた米子町、さらに東に中級・下級家臣団の屋敷地が配置されていた南田町から田町川の西岸まで、城下町を東西に横断する主要道路となっていたことは疑いないものと考えられる。



第 207 図　城山北公園線 (拡幅工事後)

写真 7　城山北公園線 (西から)　2011 年 9 月撮影

写真 8　城山北公園線 (西から)　2018 年 1 月撮影

第 2 項　城山北公園線の発掘調査の経緯と絵図・地図に見る街区構造

城山北公園線の道路拡幅範囲は近世城下町の範疇にあたり、松江市教育委員会では本工事に先立って用地買収の完了した地点から随時試掘調査を実施し、遺構や遺物が確認された地点については遺跡とした上で文化財調査 (本調査・立会調査) を行っている。

城山北公園線の軸線は東西方向で、第 1 項で前述したように南田町の鉤型路をまっすぐな直線道路としたため、城山北公園線西半 (第 1 工区) の殿町・母衣町・米子町では道路の北側で広い調査面積を確保することができ、東半 (第 2 工区) の南田町では道路の南側で広い調査面積を確保することができた。そのため、第 1 工区では道路から北側の屋敷地について、第 2 工区では道路から南側の屋敷地について広範囲の調査が可能となった。第 2 工区の田町川から国道 485 号線 (くにびき道路交差点) までの間は、松平期には城下町が拡大して屋敷地が配置されているが、これまでの調査で遺跡は確認されていない。この場所は昭和 6(1931) 年の松江市全図では「公設運動場」となっており、運動場の建設によって遺跡が消滅した可能性を考えている。また、道路拡幅予定地の全てが調査できたわけではなく、周辺建物への進入路や調査面積が狭小な場所については立会調査で対応している。

松江城下町遺跡の調査成果から、平面的 (水平位) に見ると同一遺構面で全体が一律に建て替え続けられたのではなく、各屋敷地において盛土造成を繰り返しながら重層的に遺構面が展開していることが明らかとなっている。また、断面的 (垂直位) に見ると城山北公園線沿線は建物が密集する中心市街地にあたり、上層は撹乱を受けて遺構面が消失している場所が多く、当然、上層の遺構面よりも下層の遺構面の方が良好な状態で残っている。これは松江城下町の特徴のひとつでもある水田や低湿地を埋め立てて形成された城下町であること、そして城下町形成以後も数回にわたって嵩上げ造成を繰り返しながら城下町が展開されてきたためであり、厚い造成土に覆われた古い時期の遺構面ほど残りが良い。

城山北公園線沿線は、現存する堀尾期～松平期の松江城下町絵図 5 点 (①～⑤) と近現代の地図 3 点 (⑥～⑧) から概観すると、松江城に近い西側から現在の殿町・母衣町・米子町・南田町を横断する東西方向の主要道路となっていたことが分かる (第 208 図)。

絵図を広域に見た場合、武家屋敷の街区構造は松江城の東側にある殿町・母衣町では南北道路が優先しており、それに間口を開いた屋敷地が多く配置されている。そのような中で、現在の城山北公園線となる東西道路沿線の殿町・母衣町の屋敷地を見ると、道路の北側に面する屋敷地は南に間口を開いた屋敷地が多く配置されていることが分かる。米子町の町屋や南田町でも南北道路が優先しており、それに間口を開いた屋敷地が多く配置されている。南北道路が優先する城下町にあって、南田町の鉤型路より東側の屋敷地は東西道路を優先に間口が開いており、城下町の中心部とは異なっている。また、この北にある北田町も東西道路を優先に間口が開く構造である。城下町の東側縁辺にあたるこの地域は土地も低く、北田町と南田町に東西方向の堀を通したために土地の形が東西に長くなっている。その土地を有効利用するために、東西方向の堀を基軸とする道路を敷設している可能性があり、南田町の入り堀を東に越えたところで、鉤型路として道路の食い違いが生じたとも考えられる[(37)]。北田町の北端や南田町の東端には土手が築かれ、城下町と低湿地 (沼沢地) を画している。

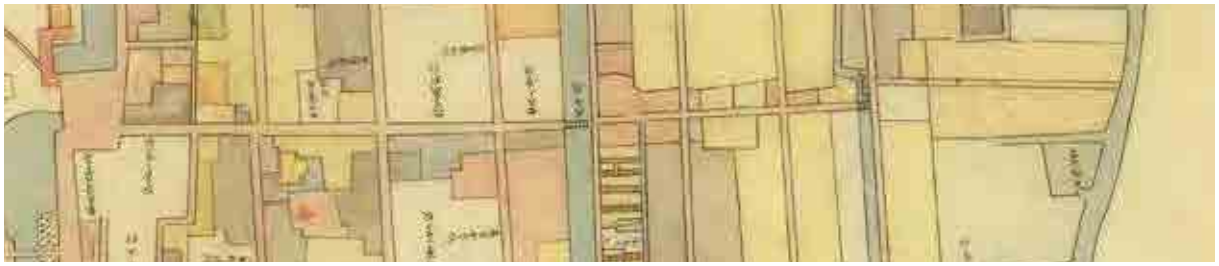
①堀尾期松江城下町絵図 (島根大学附属図書館所蔵)　[絵図作成年代 1620~33 年]：堀尾期

②寛永年間松江城家敷町之図 (香川県丸亀市立資料館所蔵)　[絵図作成年代 1634~37 年]：京極期

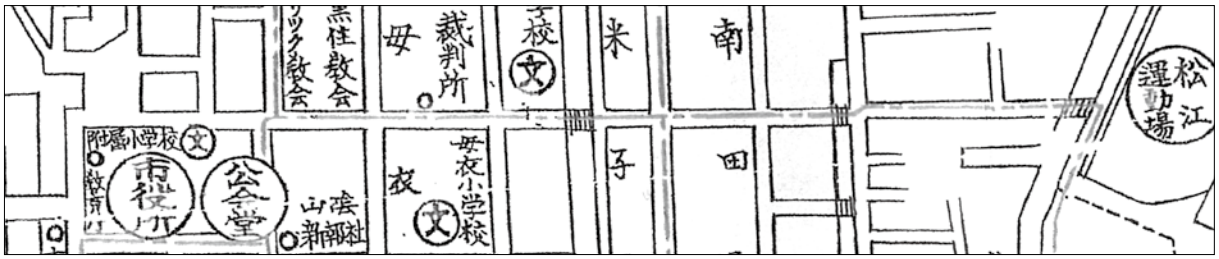
③出雲国松江城絵図 (国立公文書館所蔵)　[絵図作成年代 1644~48 年]：松平期前期

④松江城絵図 (島根県立図書館所蔵)　[絵図作成年代 1736~48 年]：松平期中期

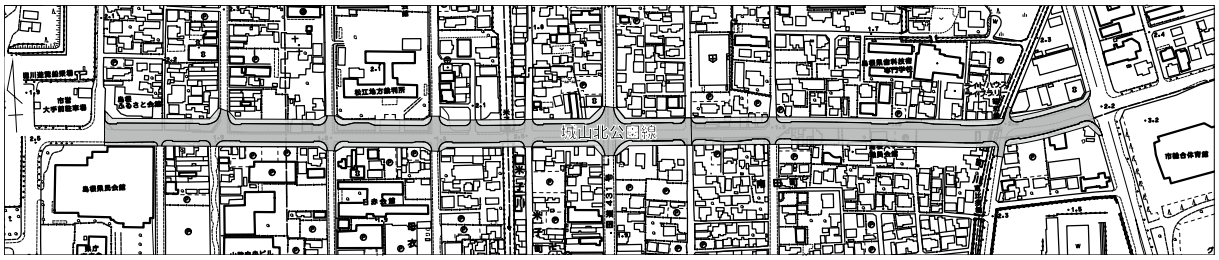
⑤松平期松江城下町絵図 (島根大学附属図書館所蔵)　[絵図作成年代 1825~51 年]：松平期後期



⑥松江市宅地等級概況図 (松江市所蔵)　[明治 44(1911) 年]



⑦松江市勢要覧附図松江市街図 (島根県立図書館所蔵)　[昭和 30(1955) 年]



⑧松江市都市計画図 [平成 23(2011) 年] に城山北公園線の道路拡幅範囲を加筆

第 208 図　絵図・地図に見る城山北公園線の変遷　　※絵図・地図は上が北

第２節　松江城下町遺跡の地層

第１項　松江城下町遺跡の基本層序

松江城下町遺跡の発掘調査対象地は、江戸時代に武家地や町屋となっていた場所に位置しており、下層では城下町形成以前に堆積したと考えられる自然堆積層が見られ、その上層には人為的な活動による土層の積み重なりを観察することができる。

松江城下町遺跡の基本層序は、平成 24 年度の松江城下町遺跡検討会において城下町の層序を把握する上で、上位からＣ層・Ｂ層・Ａ層・Ⅰ層・Ⅱ層・Ⅲ層の考え方が示され、これまでの発掘調査および刊行した報告書ではこの層序に当てはめて遺構面を概観していた。しかし、この提示は土層堆積状況を大枠で把握するための名称であり、これでは今後の調査で時期の細分が可能となった場合に、その都度修正が必要となる。また、遺構面の呼称について、これまでは下位の遺構面から順に第１遺構面・第２遺構面・第３遺構面…と報告したものがあるが、これでは今後の調査で新しい遺構面が見つかった場合や今まで以上に遺構面が増えた場合に、調査地の遺構面番号と新たに見つかった調査地の遺構面番号が同じではなくなるということが生じる。例を挙げると、殿町の調査地で３面の遺構面が見つかり、南田町の調査地で６面の遺構面が見つかったとする。この場合、殿町の第３遺構面と南田町の第３遺構面では、同じ第３遺構面でも時期が異なる遺構面となり、遺構面の時期を整合すると殿町の第３遺構面＝南田町の第５遺構面という不具合が生じることになる。

松江城下町遺跡では調査地によって遺構面数が異なることから、こうした不具合に対処するために、最初から地層名を冠した層序名称を付記し、年代が新しい上位から遺構面番号を付けるべきと考えた。各遺構面と対応する層序名称には「MJ(松江城下町の略号)＋土層番号」として上位から MJ1 層・MJ2 層・MJ3 層... と呼称し、基本層序の理解を助けるために今後はこの呼称に統一する (表 18)。

表 18　基本層序の呼称と層位間の整合性

これまでの基本層序の呼称	地質の特徴	層相	層位間の整合性	今回提示する基本層序の呼称	地質の特徴	層相
Ｃ層	撹乱層	近現代の撹乱層	＝	MJ ０層	撹乱層	近現代の撹乱層
Ｂ層	造成土	江戸時代の嵩上げ造成土	＝	MJ １層	盛土層	褐色～灰褐色砂質土
				MJ ２層	整地層	黄色～橙色粘質土 (山土)
				MJ ３層	整地層	砂質土～シルト～粘質土
Ａ層	初期造成土	Ⅰ＋Ⅱ＋Ⅲ層の混合土	＝	MJ ４層	初期造成土	MJ5 層と MJ6 層の混合土
Ⅰ層	旧地表面 (作土層)	黒褐色粘質土	＝	MJ ５a 層	旧地表面 (作土層)	黒褐色有機質粘土
		茶褐色有機質粘土		MJ ５b 層		茶褐色泥炭質粘土
Ⅱ層	自然堆積層	灰色細砂	＝	MJ ６a 層	自然堆積層	灰色細砂
Ⅲ層		青灰色細砂	＝	MJ ６b 層		青灰色細砂

今回の報告にあたって提示した基本土層は、これまでに報告されている各調査地点の土層図の中から指標となる遺跡を抽出し、改めて松江城下町遺跡の層序について再検討および再構築を行った成果をまとめたものである (第 209 図)。これまでの基本層序と今回提示した基本層序で大きく異なる点は、Ｂ層を MJ1 層～ MJ3 層の３つに細分したことである。本報告ではこの成果を踏まえ、土層の層相や出土する遺物の年代観などから同時期と推定できる土層を同じ層準の土層と判断して記述していく。以下に上層から下層の順で層序の概要を記す。

松江城下町は嵩上げ造成により現在の生活面の高さとなっており、現地表は松江城に近い殿町で標高約 2.00 m、松江城から東へ約 1㎞離れた南田町で標高約 1.50 mとなっている。

MJ0 層：近現代の撹乱層で、既存建物の基礎を含む (層厚は調査地点で異なる)。

MJ1 層：砂質土を主体とする盛土層で、遺構面から 19 世紀前半～後半の陶磁器類が出土する。調査地点にもよるが、上層の撹乱によって消失している場合や明治以降の盛土も含まれる。

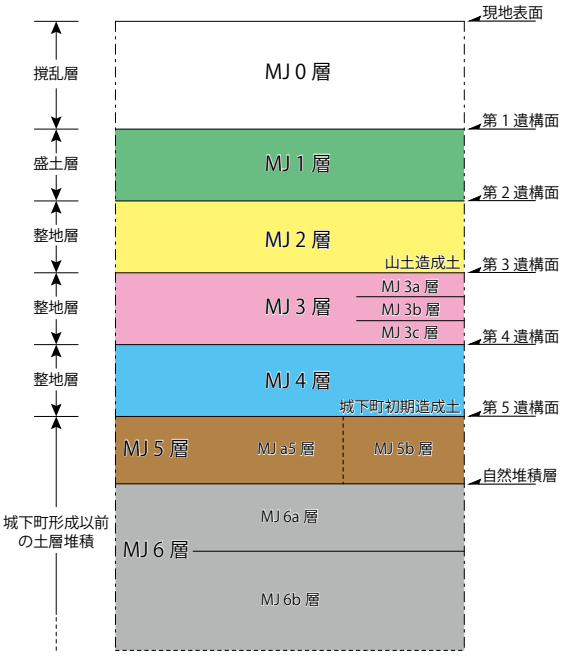
MJ2 層：山土を主体とする嵩上げ造成による整地層で、遺構面から 18 世紀前半～後半の陶磁器類が出土している。調査地点によって山土の他に砂層や有機物層などが堆積し、細分できる地点では、上位から MJ2a 層・MJ2b 層・MJ2c 層. . .　と細分する。

MJ3 層：砂質土～シルト～粘質土を主体とする嵩上げ造成による整地層で、遺構面から 17 世紀前半～後半の陶磁器類が出土している。一部の調査地点では畠の耕作土が堆積し、細分できる地点では、上位から MJ3a 層・MJ3b 層・MJ3c 層. . .　と細分する。

MJ4 層：有機質粘土～泥炭質粘土と細砂の混合土を主体とする城下町形成当初の整地層で、松江城下町遺跡の広範囲にわたって確認できる土層である。基本的に MJ4 層の下位にある MJ5 層と MJ6 層の掘り上げ土で構成され、遺構面から 17 世紀初頭～前半の陶磁器類が出土している。城下町形成以前の旧地表面上に盛られた松江城下町の初期造成土である。

MJ5 層：城下町形成以前の旧地表面の堆積層で、MJ6 層の上面にほぼ均一の厚さで水平堆積する有機質粘土～泥炭質粘土である。末次砂州の北の水域が流水のない滞水状態の時代に堆積した自然堆積層の腐食土で、土壌の分解が進んだ黒褐色を呈する有機質粘土を MJ5a 層、土壌が未分解で茶褐色を呈する泥炭質粘土を MJ5b 層とする。一部の調査地点では、水田耕作土として使用される場所や上面にコケ類が繁茂している状況を確認している。

MJ6 層：細砂を主体とする自然堆積層で、松江市街地北部の丘陵から末次砂州の北の水域に水が流れていた時代に堆積した土層である。灰色を呈する細砂を MJ6a 層、青灰色を呈する細砂を MJ6b 層とするが、この土層は色調の違いがあるだけで同じ細粒砂層である。



層序	細分	区分	地層の特徴	層相	層厚 (cm)	推定時期
MJ0 層	細分不可		撹乱層	撹乱	Av.40	近現代
MJ1 層	細分不可		盛土層	砂質土	Av.20	19 世紀前半～後半
MJ2 層	細分可能		整地層（山土）	粘質土	Av.30	18 世紀前半～後半
MJ3 層	細分可能		整地層	砂質土 シルト 粘質土	Av.30	17 世紀前半～後半
MJ4 層	単層		整地層（初期造成）	MJ5 層と MJ6 層の混合土	Av.30	17 世紀初頭～前半
MJ5 層	a 層		旧地表面（一部で作土層）	有機質粘土	Av.15	～ 17 世紀初頭
	b 層			泥炭質粘土		
MJ6 層	a 層		自然堆積層	灰色細砂	Av.20	—
	b 層			青灰色細砂	—	

第 209 図　松江城下町遺跡基本土層模式図

第２項　松江城下町遺跡の土層堆積状況

ここでは、松江城下町遺跡における土層堆積状況について城山北公園線沿線の調査成果を基に、城下町造成以前とその後の造成過程でどのような特徴を示すのか考察したい (第 210 図・表 19)。

松江城下町遺跡の土層堆積状況を示すにあたり、殿町から南田町までの間で代表的な遺跡を 14 地点抽出した。遺跡の抽出については、遺構面の区分がなされていること、そして土層の推移が明確に把握できることを前提とした。また、第 210 図の土層柱状図は各調査区の北壁土層断面を基に作成を行い、土層断面を示す上で主要と考えられる部分を抜粋して掲載している。

抽出した遺跡 14 地点を東西軸で並べて見た場合、表 19 に示したように、現地表面は MJ0 層上面で、検出標高は松江城に近い西端の地点① (殿町) では標高 2.00 m であるのに対し、東端の地点⑭ (南田町) では標高 1.50 m となっている。その比高差は東西約 900 m間で 0.50 m となる。また、旧地表面は MJ5 層上面で、検出標高は地点①で標高 0.70 m であるのに対し、地点⑭では標高 -0.20 m となっている。その比高差は東西約 900 m間で 0.90 m となる。現地表面と旧地表面を比較すると標高が西から東に向かって徐々に低くなっていくのは同じであるが、地点①～⑭間における現地表面と旧地表面の比高差には約 0.40 m の開きがあり、現地表面に比べて旧地表面のほうが東に向かって低くなる落差がやや大きいということが分かった。以下では、造成過程の中でどのように城下町が形成されていくのか、下層の MJ5 層から上層の順に追ってその状況を見ていきたい。

MJ5 層は、松江城下町遺跡の中で最も古い時期の遺構面を示す土層で、城下町形成以前に堆積していた旧地表面の形成土に相当する。東西約 900 m間で MJ5 層上面の検出標高の平均値は、標高 0.30 m前後を示す。検出標高の詳細は、殿町で標高 0.58 ～ 0.70 m と高く、母衣町で標高 0.26 ～ 0.50 m とやや低くなる。そして米子町から南田町にかけて標高 0.18 ～ 0.26m とほぼ平坦だが、南田町の東端付近で標高 0 m以下とさらに低くなっている。MJ5 層は、標高が高い殿町・母衣町周辺では土壌の分解が進んだ有機質粘土 (MJ5a 層) が堆積し、砂礫と粘土が均等に混じり合った状態を観察している。地点⑦では MJ5a 層を水田耕作土として使用していたことが判明している。一方、標高が低い南田町周辺では土壌に未分解の植物遺体を含む泥炭質粘土 (MJ5b 層) が堆積し、ラミナ状の堆積が認められる。地点⑬では MJ5b 層上面でコケ類が繁茂している状況を確認している。

MJ5a 層と MJ5b 層の検出地点から、城下町が形成される直前に陸地化していた場所と低湿地となっていた場所の境界を推定することができ、東西軸で見た土層堆積状況の検討結果を踏まえると、地点⑨と⑩の間 (米子町と南田町の境界付近) で堆積環境が異なっていたことが考えられる。

MJ4 層は、旧地表面である MJ5 層の直上に盛られていることを根拠に初期造成土として捉えている土層である。東西約 900 m間で MJ4 層上面の検出標高の平均値は、標高 0.60 m前後を示す。検出標高の詳細は、殿町で標高 0.83 ～ 1.06 m と高く、母衣町で標高 0.60 ～ 0.76 m とやや低くなる。そして米子町から南田町にかけて標高 0.52 ～ 0.62 m とほぼ平坦だが、南田町の東端付近でさらに低くなっている。これは MJ4 層直下の MJ5 層の土層堆積状況に起因するものと考えられ、第 210 図に示すように旧地形に沿った造成が行われていたことが看取できる。MJ4 層の層厚は、殿町から母衣町の地点①～⑦では約 30 ～ 45cm、米子町から南田町の地点⑧～⑭では約 20 ～ 35cm と、旧

地形が落ち込む地点⑬・⑭を除いて、MJ5 層の上に上級家臣の屋敷地と下級家臣の屋敷地で若干の差はあるが、同じような厚さでほぼ均一に造成されていることが分かる。以上を踏まえると城下町を形成するにあたり、初期造成段階には城下町全体の同一水平位の造成を目指したのではなく、旧地形の傾斜をそのまま踏襲しながら城下町建設を進めていたということが考えられる。

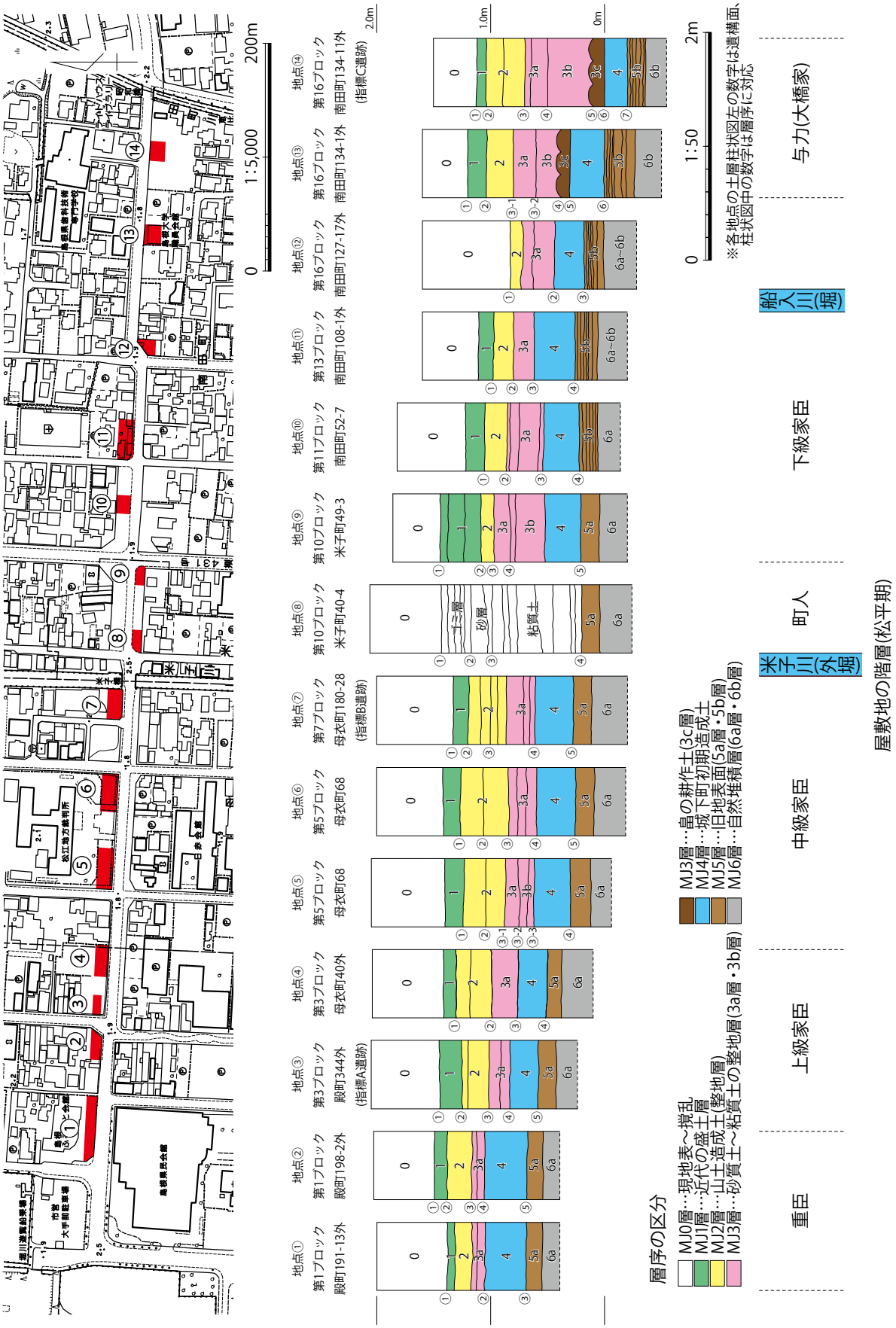
次に、城下町初期造成土として使用される MJ4 層の土壌の違いについて触れておきたい。MJ4 層は、基本的に MJ5 層と MJ6 層の混合土で構成され、この土壌は城下町形成当初に堀や素掘りの大溝 (区画境・屋敷境) を掘削した際に生じた残土をそのまま屋敷地の造成土として使用したものと考えている。地点②～⑦・⑨～⑭ではこの土壌が確認できるが、城下町を通して一様な土層ではなく、地点①では松江城内堀の掘削土と推定される松江層軟砂岩[38]を初期造成土として使用するなど、場所によって異なる造成土を使用している場合もある。また、地点⑧では MJ4 層の堆積が確認できず、旧地表面から上層には黒灰色砂質土・砂層・有機物堆積層 (ゴミ層) などが堆積していた。この場所は町屋 (米子町) であり、武家屋敷とは異なる土層堆積状況を示すことから、立地環境や階層の違いによって造成土の使用が異なっている可能性を考えておく必要がある。

MJ4 層の直上には MJ1 ～ 3 層が堆積し、これまで B 層として一括りにされていたものを今回の検討で 3 層に細分した。MJ3 層は、城下町初期造成土の MJ4 層の直上に堆積し、基本的に砂質土～シルト～粘質土を主体とする嵩上げ造成による整地層である。東西約 900 m間で MJ3 層上面の検出標高の平均値は、標高 0.90 m前後を示す。検出標高の詳細は、殿町で標高 1.02 ～ 1.18 mと高く、母衣町で標高 0.84 ～ 0.99 m、米子町から南田町にかけて標高 0.70 ～ 0.96 mとなっている。このことは、殿町～南田町の比高差がこの段階から徐々に解消され、城下町を東西軸で見た場合、造成面が平坦化されていくことが考えられる。MJ3 層は、一部の地点では畠の耕作土が堆積するなど、各地点で見られる土壌は様々であり、屋敷地ごとに造成土の使用が異なっている。この場合、層序の区別が可能な地点では上位から MJ3a 層・MJ3b 層・MJ3c 層. . . と細分して遺構面を捉えることができる。

MJ2 層は、MJ3 層の直上に堆積し、基本的に黄色～橙色粘質土の山土を主体とする嵩上げ造成による整地層である。東西約 900 m間で MJ2 層上面の検出標高の平均値は、標高 1.15 m前後を示す。検出標高の詳細は、殿町で標高 1.25 ～ 1.38 mと高く、母衣町で標高 1.20 ～ 1.30 m、米子町から南田町にかけて標高 0.83 ～ 1.08 mとなっている。現時点で山土の供給地は明確に提示できないが、この山土は城山北公園線沿線の松江城下町遺跡では共通して見られる土層と捉えて問題ないものと考えている。MJ2 層は、地点によって山土の他に砂層や有機物層 (ゴミ層) などが堆積している場所もあり、今後の調査の進展によってさらに細分が可能となるものと考えられる。

MJ1 層は、MJ2 層の直上に堆積し、褐色～灰褐色砂質土を主体とする盛土層である。東西約 900 m間で MJ1 層上面の検出標高の平均値は、標高 1.30 m前後を示す。調査地点にもよるが、上層の撹乱によって消失している場合や明治以降の盛土も含まれる。ただし、19 世紀前半～後半の江戸時代の生活面が残っている場所もあるため、これより上層に堆積する MJ0 層とは区別する必要がある。

MJ0 層は、MJ1 層の直上に堆積する近現代の撹乱層である。層厚は調査地点で異なっており、MJ1 層以下まで撹乱がおよんでいる場所もある。



第 210 図　城山北公園線東西土層横断図

表 19　城山北公園線沿線の遺構面検出標高一覧

遺跡地点	①殿町 191-13 外	②殿町 198-2 外	③殿町 344 外	④母衣町 40 外	⑤母衣町 68(西)	⑥母衣町 68(東)	⑦母衣町 180-28
MJ0 層上面	2.00 m	2.03 m	2.08 m	2.04 m	2.04 m	2.00 m	2.00 m
MJ1 層上面	1.38 m	1.50 m	1.44 m	1.41 m	1.40 m	1.42 m	1.33 m
MJ2 層上面	1.32 m	1.38 m	1.25 m	1.30 m	1.24 m	1.26 m	1.20 m
MJ3 層上面	1.18 m	1.17 m	1.02 m	0.99 m	0.88 m	0.84 m	0.86 m
MJ4 層上面	1.06 m	1.06 m	0.83 m	0.76 m	0.62 m	0.60 m	0.62 m
MJ5 層上面	0.70 m	0.68 m	0.58 m	0.50 m	0.30 m	0.26 m	0.28 m
MJ6 層上面	0.55 m	0.54 m	0.42 m	0.38 m	0.12 m	0.10 m	0.12 m
掲載報告書ブロック名	『市 154』「城山 2 」第 1 ブロック	『市 156』「城山 3」第 1 ブロック	『市 154』「城山 2 」第 3 ブロック	『市 154』「城山 2 」第 3 ブロック	『市 148』「城山 1」第 5 ブロック	『市 148』「城山 1」第 5 ブロック	『市 156』「城山 3」第 7 ブロック

遺跡地点	⑧米子町 40-4	⑨米子町 49-3	⑩南田町 52-7	⑪南田町 108-1 外	⑫南田町 127-17 外	⑬南田町 134-1 外	⑭南田町 134-11 外
MJ0 層上面	2.06 m	1.86 m	1.82 m	1.60 m	1.60 m	1.60 m	1.50 m
MJ1 層上面	―	1.44 m	1.22 m	1.11 m	―	1.20 m	1.12 m
MJ2 層上面	―	1.08 m	1.06 m	0.98 m	0.83 m	1.04 m	1.04 m
MJ3 層上面	―	0.96 m	0.86 m	0.80 m	0.74 m	0.80 m	0.70 m
MJ4 層上面	―	0.52 m	0.54 m	0.62 m	0.44 m	0.30 m	0.01 m
MJ5 層上面	0.20 m	0.20 m	0.20 m	0.26 m	0.18 m	0.01 m	-0.20 m
MJ6 層上面	0.04 m	0.04 m	0.06 m	0.06 m	0.01 m	-0.26 m	-0.36 m
掲載報告書ブロック名	『市 156』「城山 3」第 10 ブロック	『市 156』「城山 3」第 10 ブロック	『市 148』「城山 1」第 11 ブロック	本報告「城山 8」第 13 ブロック	『市 163』「城山 5」第 16 ブロック	本報告「城山 8」第 16 ブロック	『市 157』「城山 4」第 16 ブロック

第 3 節　指標遺跡における遺構と遺物の検討

第 1 項　指標遺跡の前提と抽出理由

城山北公園線の松江城下町遺跡には、調査地点によって遺構面の残りが良い遺跡と上層の撹乱などによって遺構面の残りが悪い遺跡がある。ここでは、重層的な遺構面の調査ができた 3 箇所の遺跡を抽出して指標遺跡とし、遺構面のすり合わせを行うとともに、遺構面の時期と環境復元および時期ごとの遺構と遺物を提示することで、松江城下町遺跡の特徴を検討してみたい。

指標遺跡の抽出にあたっては、遺構面ごとに調査が実施されており、複数の時期の遺構面を同時に検出していないこと、出土遺物が層位毎および遺構別に取り上げられていることを前提としている。この前提を基に、城山北公園線の殿町・母衣町・南田町から各 1 遺跡を抽出し、これを指標遺跡とした。

指標遺跡は、第 3 ブロックに所在する松江城下町遺跡 (殿町 344 外)[39]、第 7 ブロックに所在する松江城下町遺跡 (母衣町 180-28・29)[40]、第 16 ブロックに所在する松江城下町遺跡 (南田町 134-11 外)[41] の 3 遺跡である。なお、米子町については城山北公園線で唯一町屋の調査を実施した場所となるが、武家地とは土層堆積状況が異なっているため、ここでは扱っていない。

指標遺跡の呼称について本節では、松江城下町遺跡 (殿町 344 外) を「A 遺跡」、松江城下町遺跡 (母衣町 180-28・29) を「B 遺跡」、松江城下町遺跡 (南田町 134-11 外) を「C 遺跡」と呼称し、各遺跡の遺構面に対応する層序は、本章第 2 節で提示した基本土層に準じた呼称としている。

第 2 項　遺構の検討

(1) 遺構面の区分と検出遺構

ここでは、指標 3 遺跡の遺構面の区分と検出遺構について提示しておきたい。各遺跡で検出した遺構面数は、A 遺跡では 5 面、B 遺跡では 5 面、C 遺跡では 7 面の遺構面を確認している (第 211 図)。なお、いずれの遺跡も第 1 遺構面として検出した最も新しい時期の遺構面は、上層の撹乱層を取り除いた高さで設定した任意の遺構面であり、厳密には生活面ではない部分を遺構面としたものを含ん

でいる。遺構面として捉えているが、撹乱を免れた遺構や第 1 遺構面よりも上層から掘り込まれた近現代の遺構の底部を検出している可能性もある。

指標 3 遺跡の遺構面の区分は、これまでに刊行された報告書に準じている。報告では、上層から撹乱層・造成土 (盛土)・自然堆積層に分け、その中から生活面や遺構検出面が遺構面として認識されており、各遺構面の年代については遺構面直上や遺構内出土遺物の年代から年代決定が行われている。以下では、指標 3 遺跡について遺跡間の層序と検出遺構を基に、対応する遺構面の検討を行う。この検討にあたっては上層から下層の順に述べていき、その詳細は表 20 に示している。

A ～ C 遺跡の MJ0 層はいずれも撹乱層である。現地表面の標高や撹乱層の層厚は各遺跡で異なっており、B・C 遺跡の建物基礎が残っていた場所では MJ1 層の上半まで撹乱がおよんでいる。

A ～ C 遺跡の第 1 遺構面に堆積する MJ1 層は、基本的に砂質土を主体とする同一の盛土層である。層厚は 10 ～ 20㎝で、前述したように撹乱を免れた遺構を含む任意の遺構面である。遺構は、土坑や来待石製井戸を検出し、遺物は 19 世紀前半～後半の陶磁器が出土している。

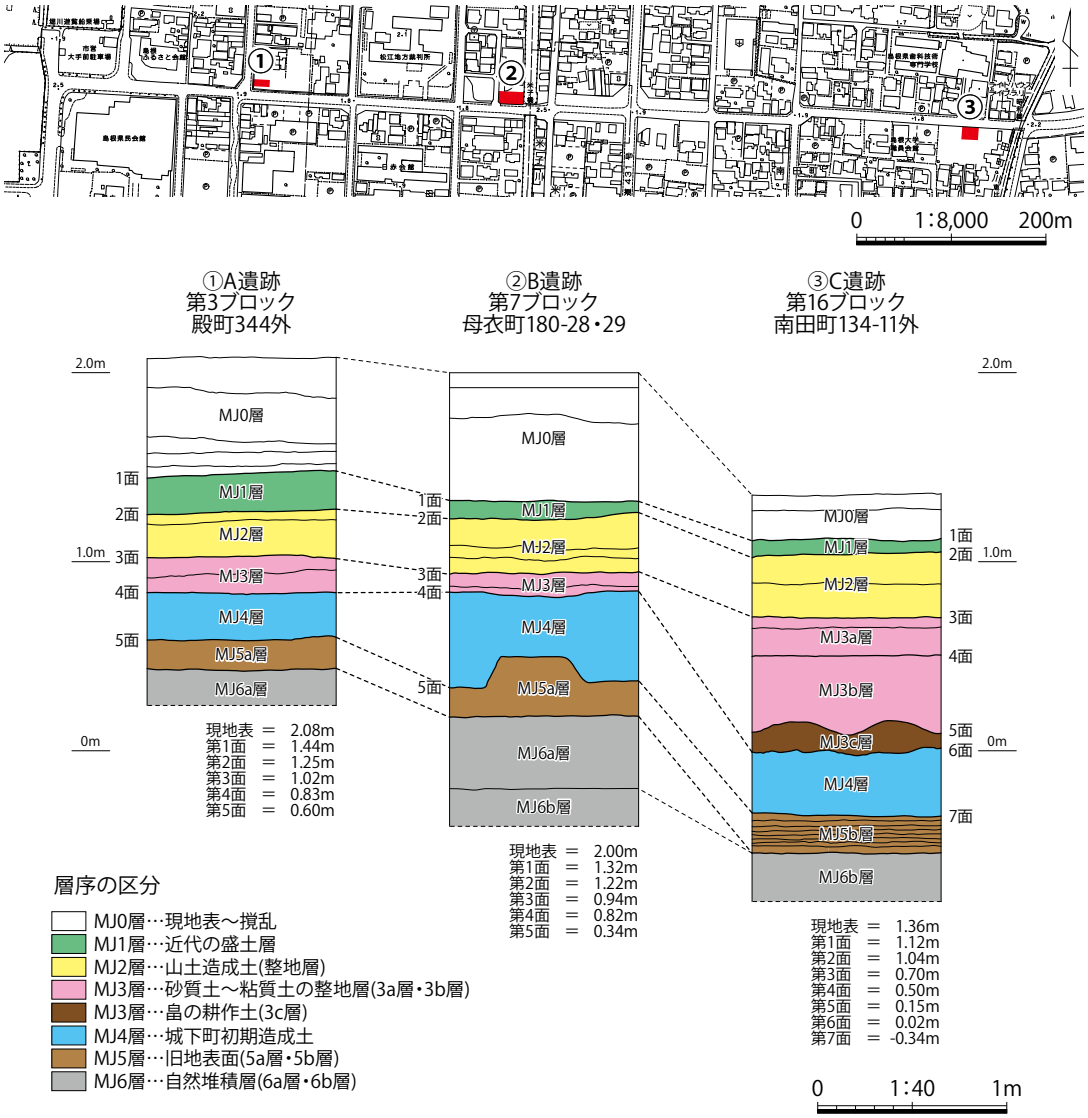
A ～ C 遺跡の第 2 遺構面に堆積する MJ2 層は、遺跡間の土色の違いはが認められるが、基本的に山土の粘土ブロックを含む粘質土を主体とする同一の整地層である。層厚は 20 ～ 30㎝で、A ～ C 遺跡の遺構面の検出標高を比べると多少の高低は生じるが、その比高差は東西 760 m間で約 20㎝となっており、城下町を東西軸で見た場合、この時期の造成面はほぼ平坦化されていたことが考えられる。遺構は土坑・溝・屋敷境 (石組) を検出し、遺物は 18 世紀前半～後半の陶磁器が出土している。

A ～ C 遺跡の第 3 遺構面に堆積する MJ3 層は、基本的にシルト～砂質土を主体とする同一の整地層である。層厚は 15 ～ 20㎝で、城下町を東西軸で見た場合、殿町～南田町の比高差が徐々に解消され、この時期から造成面は平坦化されていくことが想定される。遺構は、掘立建物跡・礎石建物跡・屋敷境・外堀石垣・土坑・溝を検出し、17 世紀前半～後半の陶磁器が出土している。この中で特殊なのが、C 遺跡の大橋家与力屋敷である。この遺跡では、MJ3 層の中に 3 つの遺構面 (第 3 ～ 5 遺構面) が存在しており、遺構面に対応する地層を上層から MJ3a・3b・3c 層に細分している。C 遺跡の第 3 遺構面に堆積する MJ3a 層は、礎石建物が構築されていた時期の整地層で、遺物は 17 世紀中頃～後半の陶磁器が出土している。第 4 遺構面に堆積する MJ3b 層は、掘立柱建物が構築されていた時期の整地層で、遺物は 17 世紀前半～中頃の陶磁器が出土している。第 5 遺構面に堆積する MJ3c 層は、大橋家与力屋敷が構築される以前に畠地として利用されていた時期の耕作土で、遺物は 17 世紀初頭～前半の陶磁器が出土している。

A・B 遺跡の第 4 遺構面と C 遺跡の第 6 遺構面に堆積する MJ4 層は、有機質粘土～泥炭質粘土と細砂の混合土を主体とする同一の整地層である。旧地表面の直上に盛られていることを根拠に城下町初期造成土としている。MJ4 層上面の検出標高は、西側の殿町が高く、東側の南田町にかけて低くなるといった、西高東低を示している。層厚は 30 ～ 40㎝でほぼ均一に造成されているが、この段階では造成面の平坦化を意識していたとは考え難く、西高東低を示す土層堆積状況を見る限りでは旧地形に沿った形で造成されていたものと捉えている。遺構は、素掘りの大溝・掘立建物跡・礎石建物跡・遮蔽施設・土坑を検出し、17 世紀初頭～前半の陶磁器が出土している。

A・B 遺跡の第 5 遺構面と C 遺跡の第 7 遺構面に堆積する MJ5 層は、城下町形成以前の旧地表面の形成土である。遺構は、B 遺跡で水田跡、C 遺跡でコケ類の繁茂を検出し、C 遺跡に隣接する遺跡の旧地表面から 15 世紀後半の中国白磁が出土していることを根拠に、現段階では 15 世紀後半が旧地表面が堆積した時期の上限で、これより上位の層序での出土遺物の状況から見て 17 世紀初頭までが下限となるものと考えている[(42)]。標高が高い A・B 遺跡では土壌の分解が進んだ MJ5a 層 (有機質粘土) が堆積し、B 遺跡ではこの MJ5a 層を水田耕作土に利用しており、この土壌で耕作面や畦畔が形成されていた。標高が低い C 遺跡では土壌に未分解の植物遺体を含む MJ5b 層 (泥炭質粘土) が堆積し、ラミナ状の堆積が認められる。C 遺跡では MJ5b 層上面の一部でコケ類が繁茂している状況を確認しており、周辺に湿潤な土地が広がっていたことが想定される。MJ5a 層と MJ5b 層は、土壌の分解・未分解の違いがあるが、城下町が形成される直前に陸地化していた場所と低湿地となっていた場所の境界を示すものと考えている。

以上の検討結果を踏まえ、次に遺跡間の層序を基に遺構面のすり合わせと各期の設定を行いたい。



第 211 図　指標遺跡の位置と遺構面の区分

表 20　指標遺跡の遺構面と検出遺構

① A 遺跡　第 1 ブロック　松江城下町遺跡 (殿町 344 外)					
遺構面	第 1 遺構面	第 2 遺構面	第 3 遺構面	第 4 遺構面	第 5 遺構面
対応層序	MJ1 層	MJ2 層	MJ3 層	MJ4 層	MJ5a 層
地層の特徴	盛土層	整地層 (山土)	整地層	整地層 (初期造成)	旧地表面 (城下町形成以前)
主な検出遺構	土坑 (瓦溜り) 井戸	土坑 溝	土坑 溝	素掘りの大溝 遮蔽施設 土坑	―
遺構面の時期	19 世紀前半～後半	18 世紀前半～後半	17 世紀中頃～後半	17 世紀初頭～前半	―

② B 遺跡　第 7 ブロック　松江城下町遺跡 (母衣町 180-28・29 外)					
遺構面	第 1 遺構面	第 2 遺構面	第 3 遺構面	第 4 遺構面	第 5 遺構面
対応層序	MJ1 層	MJ2 層	MJ3 層	MJ4 層	MJ5a 層
地層の特徴	盛土層	整地層 (山土)	整地層	整地層 (初期造成・島状整地)	水田耕作土 (城下町形成以前)
主な検出遺構	土坑 井戸	外堀石垣 土坑 溝	外堀石垣 掘立柱建物跡 土坑	素掘りの大溝 礎石建物跡 遮蔽施設	水田跡
遺構面の時期	19 世紀前半～後半	18 世紀前半～後半	17 世紀前半～中頃	17 世紀初頭	―

③ C 遺跡　第 16 ブロック　松江城下町遺跡 (南田町 134-11 外)							
遺構面	第 1 遺構面	第 2 遺構面	第 3 遺構面	第 4 遺構面	第 5 遺構面	第 6 遺構面	第 7 遺構面
対応層序	MJ1 層	MJ2 層	MJ3a 層	MJ3b 層	MJ3c 層	MJ4 層	MJ5b 層
地層の特徴	盛土層	整地層 (山土)	整地層	整地層 (島状整地)	畠の耕作土	整地層 (初期造成)	旧地表面 (城下町形成以前)
主な検出遺構	土坑	屋敷境 (石組) 土坑 溝	礎石建物跡 屋敷境 (素掘り溝) 土坑 溝	掘立柱建物跡 屋敷境 (素掘り溝) 土坑 溝	畠跡	掘立柱建物跡 土坑	コケ類の繁茂
遺構面の時期	19 世紀前半～後半	18 世紀前半～後半	17 世紀中頃～後半	17 世紀前半～中頃	17 世紀初頭～前半	17 世紀初頭	―

(2) 各期の設定

A ～ C 遺跡の遺跡間の層序と検出遺構について述べてきたが、今回の検討の中で遺構面の区分が明確なのは C 遺跡と考えられた。ここでは、C 遺跡を基準とし、それに A・B 遺跡の新旧が分かるものを付け加えて、各期の時期区分を表 21 に示しておきたい。なお、MJ0 層は撹乱層のため、この中には含めていない。時期区分の提示にあたっては、古い時期から順に Ⅰ ～Ⅶ期を設定している。

表 21　指標遺跡の時期区分の基準と遺跡間層序の対応関係

様相	時期区分	遺跡間層序の対応関係	地質の特徴	造成手法	A 遺跡	B 遺跡	C 遺跡
(古)	Ⅰ期	A 遺跡 -MJ5a 層＝ B 遺跡 -MJ5a 層＝ C 遺跡 -MJ5b 層	旧地表面・水田耕作土	―	第 5 面	第 5 面	第 7 面
↑	Ⅱ期	A 遺跡 -MJ4 層＝ B 遺跡 -MJ4 層＝ C 遺跡 -MJ4 層	初期造成土	盛土造成	第 4 面	第 4 面	第 6 面
	Ⅲ期	C 遺跡 -MJ3c 層	畠の耕作土	―	―	―	第 5 面
	Ⅳ期	B 遺跡 -MJ3 層＝ C 遺跡 -MJ3b 層	整地層	嵩上げ造成	―	第 3 面	第 4 面
	Ⅴ期	A 遺跡 -MJ3 層＝ C 遺跡 -MJ3a 層	整地層	嵩上げ造成	第 3 面	―	第 3 面
↓	Ⅵ期	A 遺跡 -MJ2 層＝ B 遺跡 -MJ2 層＝ C 遺跡 -MJ2 層	整地層 (山土)	嵩上げ造成	第 2 面	第 2 面	第 2 面
(新)	Ⅶ期	A 遺跡 -MJ1 層＝ B 遺跡 -MJ1 層＝ C 遺跡 -MJ1 層	盛土層	盛土造成	第 1 面	第 1 面	第 1 面

(3) 遺構面と検出遺構の対応関係

A ～ C 遺跡の指標遺跡を基にした遺構の検討作業の結果、各遺跡に共通して検出されている遺構とその遺跡でしか検出されていない遺構があることが分かった。表 22 には指標 3 遺跡の時期区分と検出遺構の対応関係を提示したが、以下ではこの表を基に、検出遺構から見た各期の特徴についてまと

めておきたい。

Ⅰ期は、MJ5 層を基盤とする松江城下町遺跡では最も古い時期の遺構面に相当する。B 遺跡では MJ5a 層を水田耕作土に利用し、この土壌で耕作面や畦畔を形成した水田跡を検出している。C 遺跡では MJ5b 層上面でコケ類が繁茂している状況を確認し、周辺に湿潤な土地が広がっていたことが想定される。Ⅰ期の時期は、A ～ C 遺跡の中では上限を示す手がかりはないが、これより上位の層序での出土遺物の状況から見て 17 世紀初頭までが下限となるものと想定し、検出した遺構は城下町形成以前の状況を示すものと考えている。

Ⅱ期は、MJ4 層を基盤とする城下町初期造成面に相当する。この MJ4 層は、A ～ C 遺跡では共通して見られ、松江城下町遺跡の広範囲にわたって確認できる土層と捉えている。この時期の特徴的な遺構は、A・B 遺跡で検出している道路と屋敷地を区画する区画境大溝である。B 遺跡では城山北公園線と並行する位置に東西方向の区画境大溝を検出している。この区画境大溝の北側では城下町初期造成時における造成手法として島状整地が実施され、整地層の上に礎石建物を構築して最初の生活面としている。A・C 遺跡では、掘立柱建物跡を検出しているが、いずれも小規模なもので簡易的な建物を想定している。また、A 遺跡では遮蔽施設と考えられる屋敷地の周囲を囲う塀の基礎部分を検出している。この基礎部分は石垣で構築され、区画境大溝の直上に位置することから、大溝を埋め戻した後に構築した塀に伴う石垣と捉えている。土坑や溝は、いずれも素掘りのものが主体となっている。Ⅱ期の時期は、遺構面直上や遺構内の出土遺物から 17 世紀初頭～前半を想定し、検出した遺構は城下町形成段階～形成直後の状況を示すものと考えている。

Ⅲ期は、C 遺跡の MJ3c 層を基盤とする畠跡を検出した遺構面に相当する。この時期に比定する堀尾期絵図を見ると、A・B 遺跡は屋敷地となっていた場所にあたり、掘立柱建物や礎石建物が構築されていたⅡ期の状況とほぼ変化がないものと捉えている。一方で C 遺跡周辺は空白地となっており、この空白地を畠地として利用していた時期があることが分かった。遺物の詳細については後述するが、C 遺跡では耕作土壌の撹拌によって下位の遺構面の遺物が混入している可能性があり、Ⅱ期で出土した遺物と接合関係にある個体も含んでいる。遺物組成ではⅡ期と比べて大きな変化が見られないことから、Ⅲ期の時期は幅をもって 17 世紀初頭～前半を想定している。なお、C 遺跡では畠面の次の段階に大橋家与力屋敷が構築されることが判明しており、その開始時期は寛永 15(1638) 年以降となっている[43]。これを根拠とすると、上限は不明だがⅢ期の下限は 1637 年までということが考えられる。

Ⅳ期は、B 遺跡の MJ3 層と C 遺跡の MJ3b 層を基盤とし、嵩上げ造成が施された遺構面に相当する。B 遺跡では外堀石垣を検出しているが、現時点で外堀石垣の構築時期を明確に示すことができる手がかりはないものの、この時期に機能していたことは間違いないことからⅣ期に含めている。その他に掘立柱建物跡を検出している。C 遺跡では 1638 年以降から大橋家与力屋敷が構築され、この時期の建物は掘立柱建物であることが分かった。B・C 遺跡で掘立柱建物跡が共通して見られることが特徴的である。また、C 遺跡では屋敷地と屋敷地の境界にあたる場所で屋敷境が検出されている。この屋敷境は素掘り溝で、溝の片側に杭列を伴うものである。土坑や溝は、この時期でも素掘りのものが主体となっている。Ⅳ期の時期は、遺構面直上や遺構内の出土遺物から 17 世紀前半～中頃を想定し、

検出した遺構は城下町の整備や発展過程の状況を示すものと考えている。

Ⅴ期は、A 遺跡の MJ3 層と C 遺跡の MJ3a 層を基盤とし、嵩上げ造成が施された遺構面に相当する。A 遺跡では素掘り土坑と溝を検出している。特徴的なのは溝で、この時期から素掘り溝に加えて石組溝が構築されることである。C 遺跡でもこれと同じ状況が見られ、建物の内部に石組溝を構築している。また、この時期の大橋家与力屋敷は、掘立柱建物から礎石建物に造り替わることが分かっている。Ⅴ期の時期は、遺構面直上や遺構内の出土遺物から 17 世紀中頃～後半を想定している。

Ⅵ期は、MJ2 層を基盤とし、嵩上げ造成が施された遺構面に相当する。A ～ C 遺跡でこの時期に共通して見られる遺構は、素掘り土坑である。C 遺跡で特徴的なのは屋敷境で、この時期から素掘り溝から石組の屋敷境溝に形態が変化している。B 屋敷では礎石建物を検出しており、この時期には掘立柱建物が減少し、礎石建物が主体となっていた可能性が考えられる。Ⅴ期の時期は、遺構面直上や遺構内の出土遺物から 18 世紀前半～後半を想定している。

Ⅶ期は、MJ1 層を基盤とし、盛土造成が施された遺構面に相当する。A ～ C 遺跡でこの時期に共通して見られる遺構は、Ⅵ期と同様に素掘り土坑である。B・C 遺跡では素掘り土坑の他に木枠土坑を検出している。A・B 遺跡では来待石製井戸を検出していることが特徴的である。Ⅴ期の時期は、遺構面直上や遺構内の出土遺物から 19 世紀前半～後半を想定している。

以上のように遺構を基に検討を行ってきたが、指標遺跡における検出遺構に共通する特徴として、屋敷地内の表口や側面に近い空閑部分では土坑が多く検出されていることが挙げられる。このことは、不用となったり使用不能となった陶磁器類や食物残滓などを廃棄する行為が頻繁に行われていたことを示している。この空閑部分では、遮蔽施設・土坑・溝・井戸がセットで見られ、屋敷地内の建物部分に目を向けると、建物跡・溝・遮蔽施設・屋敷境がセットで見られる遺構の構成となっている。現時点では松江城下町遺跡全体を通して同じ様相を示すとは断言できないが、各遺跡に見られる検出遺構の相違については、立地環境による制約・土地の利用状況・階層の違い・遺構の機能や廃絶年代の違い・屋敷地内の構造や施設の配置など、複合的な要素を含んでいることが考えられる。

表 22　指標遺跡の時期区分と検出遺構の対応関係

時期	遺跡	層序	遺構面	水田跡	畠跡	建物跡		遮蔽施設	外堀石垣	土坑		溝				井戸
						掘立柱	礎石			素掘り	木枠	区画境	屋敷境	素掘り	石組	
Ⅰ期（古）	A 遺跡	MJ5a 層	第 5 面													
	B 遺跡	MJ5a 層	第 5 面	●												
	C 遺跡	MJ5b 層	第 7 面													
Ⅱ期	A 遺跡	MJ4 層	第 4 面			●		●		●		●		●		
	B 遺跡	MJ4 層	第 4 面				●					●				
	C 遺跡	MJ4 層	第 6 面			●				●				●		
Ⅲ期	C 遺跡	MJ3c 層	第 5 面		●											
Ⅳ期	B 遺跡	MJ3 層	第 3 面			●			●							
	C 遺跡	MJ3b 層	第 4 面			●		●		●			●	●		
Ⅴ期	A 遺跡	MJ3 層	第 3 面							●				●	●	
	C 遺跡	MJ3a 層	第 3 面				●	●		●			●	●	●	
Ⅵ期	A 遺跡	MJ2 層	第 2 面							●				●		
	B 遺跡	MJ2 層	第 2 面				●		●	●				●		
	C 遺跡	MJ2 層	第 2 面							●			●		●	
Ⅶ期（新）	A 遺跡	MJ1 層	第 1 面					●		●					●	●
	B 遺跡	MJ1 層	第 1 面							●	●			●	●	●
	C 遺跡	MJ1 層	第 1 面					●		●	●			●		

第３項　遺物の検討

(1) 指標遺跡出土の陶磁器

ここでは、前項で行った遺構の検討結果を踏まえ、指標遺跡から出土した陶磁器の検討を行うことで、各時期に比定される陶磁器の特徴とセット関係について言及してみたい。陶磁器の抽出は、松江城下町遺跡で多く出土し、時期の分かる特徴的な陶磁器を抽出した。各期の時期区分は遺構の時期区分にならって古い時期から順にⅠ～Ⅶ期を設定し、各期の年代は遺構面直上や遺構内から出土した陶磁器の年代に拠っている。

指標遺跡における陶磁器の検討を行った成果として、遺構面層序と出土陶磁器の対応関係は表 23 に、A ～ C 遺跡の産地別陶磁器組成は表 24 ～ 26 に提示している。なお、A ～ C 遺跡のⅠ期については陶磁器の出土を確認していないため、表 24 ～ 26 に反映していないことをお断りしておく。

(2) 生産地別による陶磁器組成と各期の年代

陶磁器組成と各期の年代区分を設定するにあたって、その前提として陶磁器の生産地と消費地では時間差 (時期差) が存在しているし、産地別に見ても状況が異なっている。しかし、今回の検討で生産地と消費地の状況を概観したところ、若干の時間幅を有するが、近接して陶磁器の変化が生じた時期が存在していることが考えられた。ここでは、出土した陶磁器の大半を占める肥前系陶磁器 (九陶編年) を年代の目安として、これに松江城下町遺跡における指標遺跡から出土した陶磁器の変遷を加えて以下の時期区分を設定した。

Ⅰ期＝ 17 世紀初頭以前 (1600 年代以前)

Ⅱ期＝ 17 世紀初頭～前半 (1600 ～ 1630 年代)

Ⅲ期＝ 17 世紀前半 (1630 ～ 1637 年代)

Ⅳ期＝ 17 世紀前半～中頃 (1638 ～ 1650 年代)

Ⅴ期＝ 17 世紀中頃～後半 (1650 ～ 1690 年代)

Ⅵ期＝ 18 世紀前半～後半 (1700 ～ 1790 年代)

Ⅶ期＝ 19 世紀前半～後半 (1800 ～ 1860 年代)

この時期区分を基に、以下では各期の様相について説明していく。併せて、A ～ C 遺跡において陶磁器の出土が確認できたⅡ～Ⅶ期の産地別陶磁器の出土比率は、表 24 ～ 26 を参照していただきたい。

Ⅰ期：17 世紀初頭以前 (1600 年代以前)

A ～ C 遺跡の MJ5 層を基盤とする旧地表面に相当する時期である。この遺構面では陶磁器の出土は確認していないため、年代については C 遺跡の西側に隣接する松江城下町遺跡 (南田町 132 外) から出土した陶磁器の年代を補完する年代として当てはめておきたい。松江城下町遺跡 (南田町 132 外) では、旧地表面から 15 世紀後半の中国白磁が出土している。この出土遺物を根拠とした場合、現段階では 15 世紀後半が旧地表面が堆積した時期の上限となり、後述するⅡ期の陶磁器の出土状況から見て 17 世紀初頭までが下限となるものと考えることができる。

Ⅱ期：17 世紀初頭～前半 (1600 ～ 1630 年代)

A ～ C 遺跡の MJ4 層を基盤とする城下町初期造成面に相当する時期である。貿易陶磁器は、青磁

の出土が無く、白磁の皿が少数出土するが、ほとんどは青花で占められている。青花の碗皿類は景徳鎮系と漳州窯系のものが多く、精製のものが目立つ。

国産陶磁器は、肥前系陶器が大半を占める状況で、瀬戸・美濃、備前、上野・高取 (福岡)、萩 (山口) が少数出土する。肥前系陶器は、生産地年代で九陶Ⅰ -2 期 (1594 ～ 1610 年代) のものが主体である。碗は丸碗・天目碗・筒形碗があり、鉄釉や灰釉を施すものが多い。皿はすべて胎土目で、なぶり口の口縁をもつものを含む。砂目の出土は無い。碗皿類の高台は露胎で、鉄絵を施した絵唐津が目立つ。その他に、底部に貝目をもつタタキ成形の壺がある。この時期に肥前系磁器は出土していない。瀬戸・美濃陶器は天目碗・灰釉内禿皿・見込みに印花をもつ灰釉折縁ソギ皿・志野菊皿などが出土し、生産地年代で大窯Ⅳ期 (1590 ～ 1610 年代) のものが主体である。備前は徳利や擂鉢があり、乗岡編年近世 1c 期 (1598 ～ 1620 年代) のものが主体である。上野・高取 (福岡) は丸碗や筒形碗、萩 (山口) は丸皿や稜皿がある。

Ⅲ期：17 世紀前半 (1630 ～ 1637 年代)

C 遺跡の MJ3c 層を基盤とする畠跡を検出した遺構面に相当する時期である。貿易陶磁器はⅡ期と同様な状況で、ほとんどは青花で占められている。青花の碗皿類は景徳鎮系と漳州窯系のものが多く、精製のものが目立つ。

国産陶磁器は、肥前系陶器が大半を占める状況は変わらず、瀬戸・美濃、備前、上野・高取 (福岡)、萩 (山口) が少数出土する。肥前系陶器は生産地年代で九陶Ⅰ -2 期のものが主体だが、九陶Ⅱ期 (1610 ～ 1650 年代) のものが少数入る。碗は丸碗や筒形碗があり、全面施釉 (畳付無釉) するものが見られる。皿は胎土目が少数入るが、Ⅱ期と異なる点はこの時期から砂目が主体となることである。砂目皿の他に刷毛目皿や二彩手皿が出土するのが特徴的で、数点の溝縁皿が入る。この時期も肥前系磁器は出土していない。瀬戸・美濃陶器は灰釉内禿皿や灰釉折縁皿が出土している。生産地年代で大窯Ⅳ期後半 (1600 ～ 1610 年代) のものが主体である。備前は壺や擂鉢があり、引き続き乗岡編年近世 1c 期 (1598 ～ 1620 年代) のものが主体である。上野・高取 (福岡) は丸碗、萩 (山口) は丸碗や丸皿がある。

Ⅳ期：17 世紀前半～中頃 (1638 ～ 1650 年代)

B 遺跡の MJ3 層と C 遺跡の MJ3b 層を基盤とし、嵩上げ造成が施された遺構面に相当する時期である。この時期の貿易陶磁器は数点あるが、Ⅱ・Ⅲ期と比べて減少する。青磁と白磁の出土が無く、青花で占められている。青花の碗皿類は景徳鎮系と漳州窯系のもので、精製と粗製のものが共伴する。

国産陶磁器は、この時期から肥前系磁器の出現によって大きな変化が見られる。肥前系陶磁器が大半を占める状況は変わらないが、肥前系陶磁器の増加と呼応するように、瀬戸・美濃、備前、上野・高取 (福岡)、萩 (山口) の出土は減少していく。肥前系陶器は生産地年代で九陶Ⅱ期 (1610 ～ 1650 年代) のものが主体となる。碗は丸碗や筒形碗があり、皿は胎土目の出土が無くなり、砂目で占められるようになる。中でも、溝縁皿の増加が目立ち、肥前系磁器が出始めの頃に比定されるものが主体となる。肥前系磁器は生産地年代で九陶Ⅱ -1 期 (1610 ～ 1630 年代) の初期伊万里が数点出土するが、九陶Ⅱ -2 期 (1630 ～ 1650 年代) のものが主体となる。碗は高台無釉のものが多く、鉄釉や青磁釉を施すものが見られる。青磁釉の碗では、見込みに菊花文を入れたものがある。皿は 1630 年代後半

～ 1640 年代を中心に生産されたイゲ縁皿や型打成形の皿がある。備前は壺や擂鉢があり、乗岡編年近世 2a 期 (1620 ～ 1630 年前後) のものが含まれる。

Ⅴ期：17 世紀中頃～後半 (1650 ～ 1690 年代)

A 遺跡の MJ3 層と C 遺跡の MJ3a 層を基盤とし、嵩上げ造成が施された遺構面に相当する時期である。貿易陶磁器は、青花が極少数出土するが、Ⅱ～Ⅳ期のものが伝世している可能性が考えられる。青花の碗皿類は景徳鎮系と漳州窯系のもので、精製と粗製のものが共伴する。

国産陶磁器は、Ⅳ期の組成と大幅な変化はないものの、この時期の特徴として肥前系陶器の減少と肥前系磁器の増加が見られることが挙げられる。肥前系陶磁器が大半を占める状況は変わらず、瀬戸・美濃、備前、萩 (山口) の出土が見られなくなる。顕著なのが、この時期から備前擂鉢と入れ替わるように須佐擂鉢が入ってくることで、京信系陶器も少数入る。肥前系陶器は生産地年代で九陶Ⅱ期のものが減少し、九陶Ⅲ期 (1650 ～ 1690 年代) のものが主体となる。碗は呉器手碗や京焼風陶器が入る。皿は砂目で占められ、内野山窯産のものが目立つ。溝縁皿や鍔縁皿は引き続き出土し、この時期に特徴的な蛇ノ目釉剥ぎ皿が極少数見られる。肥前系磁器は生産地年代で九陶Ⅱ -2 期のものが減少し、九陶Ⅲ期 (1650 ～ 1690 年代) のものが主体となる。碗は丸みをもった網目文の碗や鉄釉と青磁釉の掛け分けを施した碗があり、色絵碗も少数見られる。皿は 1650 年代以降を中心に生産された日字鳳凰文皿や芙蓉手皿の他、波佐見青磁の皿がある。

Ⅵ期：18 世紀前半～後半 (1700 ～ 1790 年代)

MJ2 層を基盤とし、嵩上げ造成が施された遺構面に相当する時期である。この時期に貿易陶磁器は出土していない。

国産陶磁器は、肥前系陶器が減少していくが、代わりに京信系陶器や在地系陶器が多く入ってくるようになる。肥前系陶器は生産地年代で九陶Ⅳ期 (1690 ～ 1780 年代) のものが主体となる。皿は刷毛目皿や鉄釉と銅緑釉の掛け分けを施した皿があるが極少数である。肥前系磁器は生産地年代で九陶Ⅲ期 (1650 ～ 1690 年代) のものが減少し、九陶Ⅳ期 (1690 ～ 1780 年代) のものが主体となる。この時期に特徴的なのは外青磁や陶胎染付の碗が入ってくることである。また、波佐見の碗皿類も入ってきている。皿は高台内に銘をもつものや、見込みに五弁花のコンニャク印判を入れるものが多く出土している。この時期には須佐擂鉢が一定量出土するようになる。

Ⅶ期：19 世紀前半～後半 (1800 ～ 1860 年代)

MJ1 層を基盤とし、盛土造成が施された遺構面に相当する時期である。この時期に貿易陶磁器は出土していない。

国産陶磁器は、それまでに肥前系陶磁器を主体としていた組成から在地系を中心とした組成に変化する。肥前系陶器は出土していないが、肥前系磁器は生産地年代で九陶Ⅴ期 (1780 ～ 1860 年代) のものが主体となる。この時期に特徴的なのは広東碗・筒形碗・端反碗が入ってくることである。また、碗皿類には環状の松竹梅文を見込みに入れるものが多く出土している。在地系陶器は布志名焼や石見焼が増加し、碗皿類や鉢などがある。碗では地域色の高い布志名焼の「ボテボテ茶碗」が多く見られる。その他、この時期には瀬戸磁器 (新製焼) が入ってくることが特徴的である。

以上のように、指標遺跡の陶磁器組成と各期の年代区分について、出土した陶磁器を基に検討を行った。指標遺跡における出土陶磁器から見た近世の時系列的な始点はⅡ期の 1600 年代、終点はⅦ期の 1868 年の明治維新の頃と考えた。今回の陶磁器の検討では、Ⅱ～Ⅶ期においての特徴とそれを示すセット関係があることが分かり、以下にこれらをまとめておきたい。

Ⅱ期の特徴として、「中国磁器＋肥前系陶器の胎土目のグループ (絵唐津などを含む) ＋瀬戸・美濃＋備前＋α」のセット関係が挙げられる。このセットに福岡や萩が加わる遺跡もあるが、この時期に見られる陶磁器の特徴的な組み合わせとしておきたい。

Ⅲ期の特徴として、「中国磁器＋肥前系陶器の砂目のグループ (溝縁皿などを含む) ＋瀬戸・美濃＋備前＋α」のセット関係が挙げられ、この時期に見られる陶磁器の特徴的な組み合わせとしておきたい。なお、指標遺跡における肥前系陶器の胎土目から砂目へ移行する時期について検討を加えておくと、Ⅱ期の肥前系陶器はすべて胎土目で、砂目は出土していない。砂目が確認できるのは、Ⅲ期の 1630 年代前半以降からで、Ⅲ期の肥前磁器と共伴する時期の砂目には溝縁皿が多く見られる。この状況からⅡ期の胎土目と共伴する時期の砂目と、Ⅳ期の肥前磁器と共伴する時期の砂目は区別する必要があるが、指標遺跡ではⅢ期において胎土目が少数残るものの、主体となるのは砂目であり、胎土目から砂目へ移行する時期は 1630 年代前半頃にあると考えている。

Ⅳ期の特徴として、「中国磁器の減少と肥前系陶磁器の増加」が挙げられる。Ⅲ～Ⅳ期にかけて中国磁器の占める割合が減少することは、Ⅳ期における肥前系磁器の出現が画期となっていることが明瞭である。生産地での肥前系磁器の焼成開始年代は 1610 年代とされるが、消費地である松江での肥前磁器の出現は C 遺跡の調査成果を根拠として 1638 年以降と考えられる[(44)]。なお、この年代は安来市広瀬町の富田川河床遺跡での肥前系磁器の出現期とされる 1635 ～ 1644 年前後と比べても齟齬が無いものと理解している[(45)]。

Ⅴ期の特徴として、肥前系陶磁器の「呉器手碗＋京焼風陶器＋日字鳳凰文皿＋芙蓉手皿」のセット関係が挙げられる。このセットに京信系陶器や須佐擂鉢が加わる遺跡もあるが、この時期に見られる陶磁器の特徴的な組み合わせとしておきたい。

Ⅵ期の特徴として、肥前系磁器の「外青磁＋陶胎染付碗＋波佐見のくらわんか手」のセット関係が挙げられる。各遺跡での出土状況にもよるが、このセットが確認できる遺構面では生産地年代で 1750 ～ 1780 年代を当てはめ、この時期の遺構面であるといえよう。

Ⅶ期の特徴として、肥前系磁器の「広東碗＋端反碗」のセット関係が挙げられる。このセットは、生産地年代で 1810 ～ 1840 年代に見られる組み合わせであり、現時点ではこの年代を当てはめておきたい。また、この時期には瀬戸で磁器 (新製焼) 生産が開始され、各遺跡でも出土していることが特徴的である。

この他、実年代の分かる資料に A 遺跡 -MJ1 層 (第 1 遺構面) の廃棄土坑から出土した在地系陶器である布志名焼の片口があり、この片口の高台内には「天保八年　台所　小柳」と墨書されていた。このことは天保八 (1837) 年には布志名焼が流通していたことを示しており、布志名焼の流通年代を知る上で貴重な遺物といえる。

表 23　遺構面層序と出土陶磁器の対応関係

時期	遺跡 - 対応層序	遺構面	貿易陶磁器			国産陶器														国産磁器							
						肥前系陶器														肥前系磁器							
			中国青花（碗・皿）	中国青磁（碗・皿）	中国白磁（碗）	胎土目（皿）	砂目（皿）	溝縁皿	二彩手皿	砂目＋刷毛目（皿）	呉器手（碗）	京焼風陶器（碗）	蛇ノ目＋刷毛目（皿）	瀬戸・美濃（碗・皿・土瓶）	備前（徳利・壺・擂鉢）	福岡（碗・皿）	萩（碗・皿）	須佐（擂鉢・片口）	京信系（碗）	在地系（碗・皿・鉢）	染付（碗・皿）	色絵（碗）	外青磁（碗）	陶胎染付（碗）	広東碗	筒形碗	端反碗	瀬戸（碗）
Ⅰ期（古）	A 遺跡 -MJ5a 層	第 5 面																									
	B 遺跡 -MJ5a 層	第 5 面																									
	C 遺跡 -MJ5b 層	第 7 面																									
Ⅱ期	A 遺跡 -MJ4 層	第 4 面	●		●	●								●	●												
	B 遺跡 -MJ4 層	第 4 面	●		●	●								●	●												
	C 遺跡 -MJ4 層	第 6 面	●			●								●	●	●	●										
Ⅲ期	C 遺跡 -MJ3c 層	第 5 面	●	●	●	●	●	●	●	●				●	●	●	●										
Ⅳ期	B 遺跡 -MJ3 層	第 3 面	●				●	●						●		●					●						
	C 遺跡 -MJ3b 層	第 4 面	●				●	●	●						●	●	●				●						
Ⅴ期	A 遺跡 -MJ3 層	第 3 面					●	●			●	●						●			●						
	C 遺跡 -MJ3a 層	第 3 面	●				●	●			●	●						●	●		●	●					
Ⅵ期	A 遺跡 -MJ2 層	第 2 面																●	●	●	●		●	●			
	B 遺跡 -MJ2 層	第 2 面											●					●	●	●	●			●			
	C 遺跡 -MJ2 層	第 2 面											●	●			●	●	●	●	●		●	●			
Ⅶ期（新）	A 遺跡 -MJ1 層	第 1 面												●			●	●	●	●	●				●		●	●
	B 遺跡 -MJ1 層	第 1 面												●				●	●	●	●				●		●	●
	C 遺跡 -MJ1 層	第 1 面																●	●	●	●				●	●	●	●

表 24　A 遺跡　松江城下町遺跡 (殿町 344 外) 産地別陶磁器組成

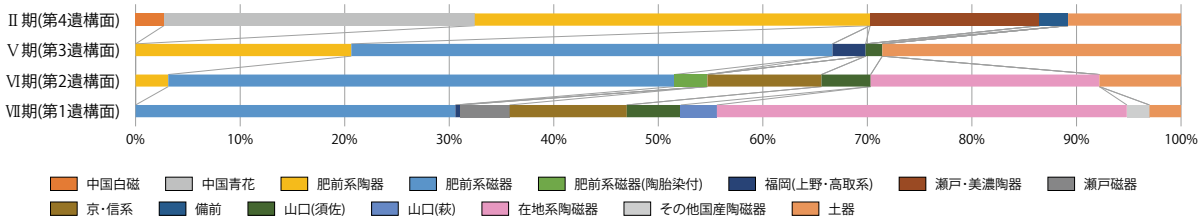


表 25　B 遺跡　松江城下町遺跡 (母衣町 180-28・29) 産地別陶磁器組成

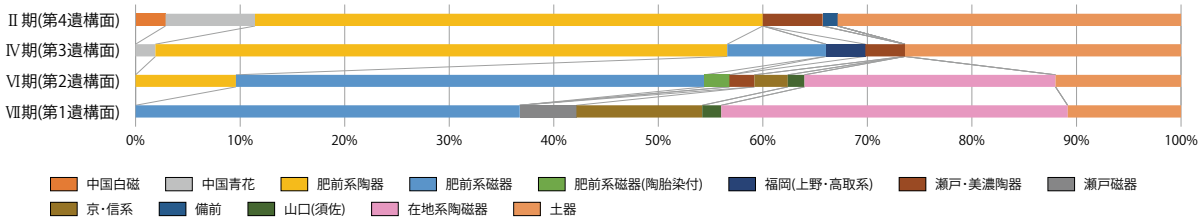
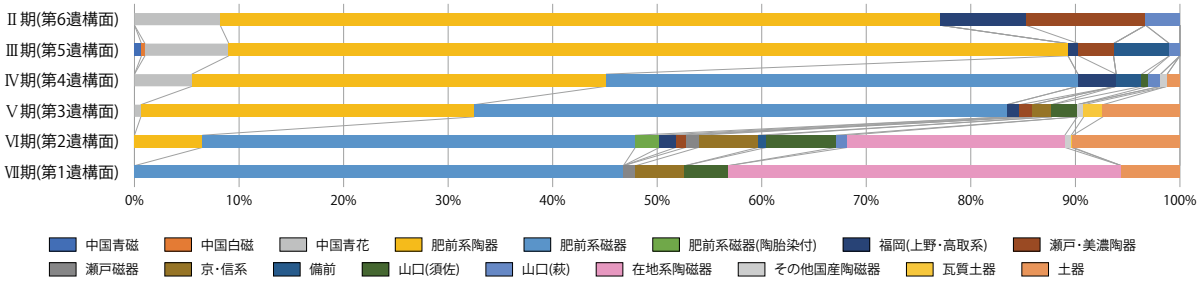


表 26　C 遺跡　松江城下町遺跡 (南田町 134-11 外) 産地別陶磁器組成



第 4 節　松江城下町遺跡の陶磁器の消長

これまでに松江城下町遺跡で出土した全体的な陶磁器を生産地別に見ると、貿易陶磁器は中国江西省の景徳鎮系と福建省南部の漳州窯系の中国磁器がほとんどを占め、浙江省の龍泉窯系のものが少量見られる。国産陶磁器では肥前系が圧倒的に多く、瀬戸・美濃、福岡 (上野・高取)、備前、京信系、萩、須佐、在地系などがこれに次ぐ。これらの状況から、松江城下町には九州地方や中国地方からの陶磁器が比較的多く流入していることが窺える (表 27)。

陶磁器組成の観点から 17 ～ 19 世紀の陶磁器の消長を見ていくと、松江城下町遺跡では 17 世紀初頭までには既に陶磁器組成の中心となっていたと思われる中国青花や瀬戸・美濃 (志野・織部) などのいわゆる桃山陶磁が徐々に減少し、肥前系陶器が中心となっていた時期から始まる。この時期の組成は、陶器は胎土目の肥前系陶器 (唐津) が主体で瀬戸・美濃、福岡 (上野・高取)、備前、萩が少量出土し、茶陶が多いことが際立つ。磁器は青花を主体とする景徳鎮系や漳州窯系の中国製品で占められている。

17 世紀前半～中頃には、それまで肥前系陶器が主体となっていた組成から急速に肥前系磁器 (伊万里・有田) が増加していく様子が見られ、貿易陶磁器である中国磁器から国産の肥前系磁器に移り変わっていく段階となる。この時期の肥前系磁器には、1637 年の窯場の整理統合による磁器生産体制の確立や 1644 年の明・清王朝交代の内乱により日本の中国磁器輸入が激減するという大きな画期があり、これ以降は日本国内の磁器の需要が大きく増加して国産の肥前系磁器が全国的に広まっていくこととなる。松江では 1638 年以降の松平期から肥前系磁器が入り、肥前系陶器は砂目の溝縁皿や二彩手皿、肥前系磁器は初期伊万里が数点出土するものの 1630 ～ 1650 年代の碗皿類が主体となる。一方で肥前系陶磁器の増加とは対照的に、瀬戸・美濃、萩、福岡 (上野・高取) は減少していく。

17 世紀後半には、肥前系陶磁器を中心にまとまった出土量が確認でき、肥前系陶器は呉器手碗や京焼風陶器などが見られる。肥前系磁器は 1650 年代に盛んに生産された日字鳳凰文皿や波佐見の青磁皿などが出土している。また、この時期には備前擂鉢と入れ替わるように須佐擂鉢が入ってくる。

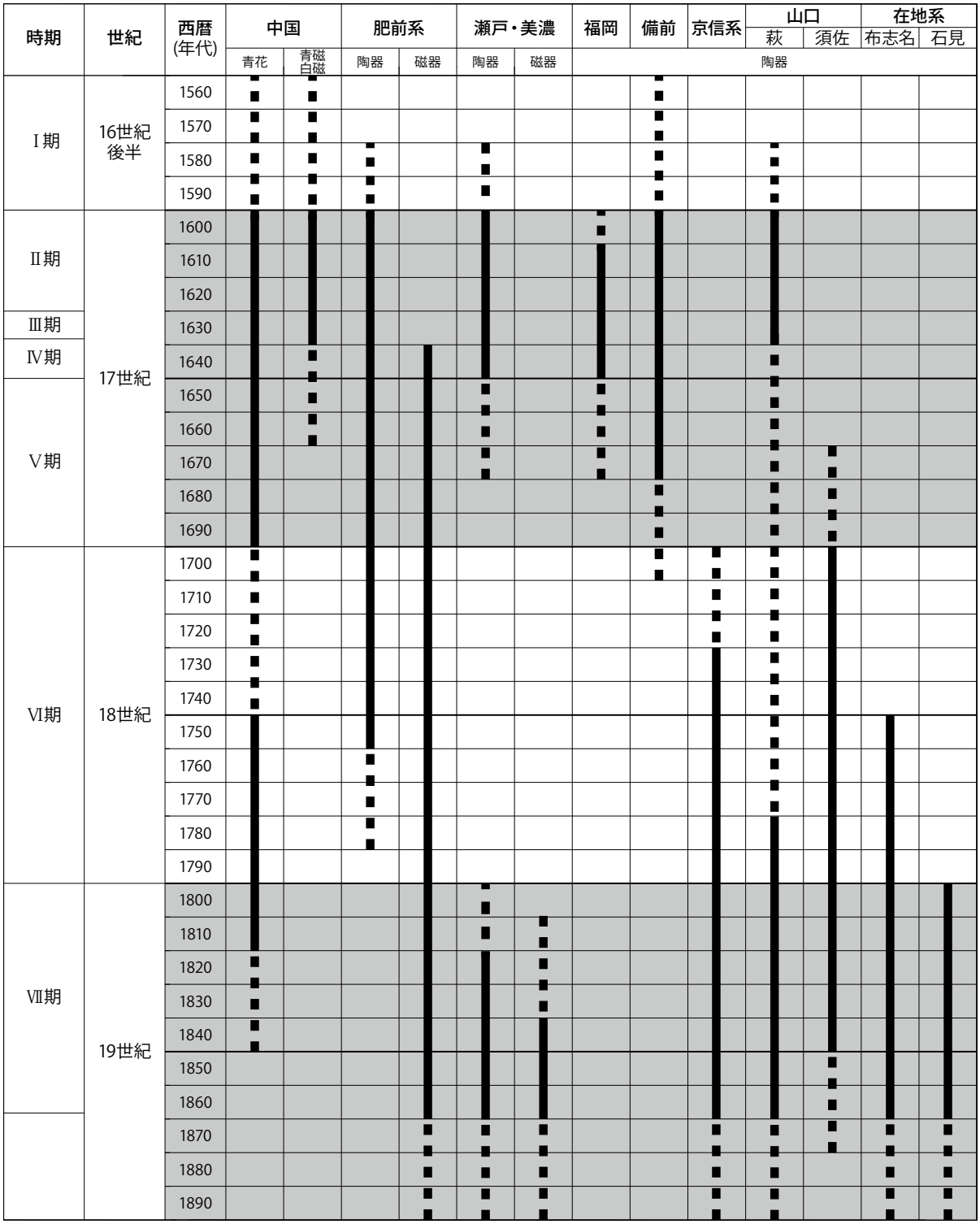
18 世紀には、肥前系陶器が減少していくが、代わりに京信系や在地系陶器が増加していく。肥前系磁器は一定量出土するが、この時期に特徴的な陶胎染付・外青磁・くらわんか手の出土は比較的少ない。器種は瓶や鉢類などでバリエーションが増加する。貿易陶磁器は極少数にまで減少するが、18 世紀後半以降には煎茶器・蓮華・薬瓶などの特定の器種についての出土が確認できる。

19 世紀には、それまで肥前系陶磁器を主体としていた組成から在地系を中心とした組成に変化する。松江では久村焼と意東焼の磁器窯を藩営とし、1833 年に肥前系磁器をはじめとする陶磁器の輸入を禁止するなどして、藩内で陶磁器を管理しようとする。その後、磁器操業は軌道に乗れず、久村焼は 1836 年、意東焼は 1844 年にそれぞれ廃窯となる。陶器は在地系の布志名焼や石見焼が増加し、碗皿類や鉢などがある。碗では地域色の高い布志名焼の「ボテボテ茶碗」が多く見られる。その他、この時期には瀬戸・美濃陶器の土瓶や鉢、瀬戸磁器 (新製焼) などが少量出土する。

以上のように松江城下町遺跡における 17 ～ 19 世紀の陶磁器の消長を概観したが、その中で最も特徴的な点は、17 世紀初頭が松江城下町の開始時期ということである。松江城下町は陶磁器の消費

地であることを前提に、その消長を大枠でまとめると、17 世紀初頭の桃山陶磁が徐々に減少して肥前系陶器の胎土目が主体となる時期から始まり、1630 年前後には肥前系陶器の砂目が主体となる時期へ移行する。1638 年以降から肥前系磁器が入り、その後は肥前系陶磁器が中心となるが、17 世紀中頃以降には肥前系陶器が減少して肥前系磁器が急速に増加していく。18 世紀には肥前系陶磁器に京信系や在地系陶器などが加わり、19 世紀には肥前系陶磁器が減少して在地系陶器が主体となる時期へ移行するという変遷を辿る。

表 27　松江城下町遺跡における陶磁器の消長 (産地別)



第 5 節　松江城下町遺跡の変遷

松江城下町遺跡の発掘調査では、多岐にわたる様々な遺構が検出されている。本節では、これまでに城山北公園線沿線の調査で検出した遺構に重点を置いて、代表的な遺構をキーワードとして掲げ、古い時期の遺構から順に時系列で概観して松江城下町遺跡の変遷を辿っていきたい。

以下では、城下町が成立する前の状況を示す「城下町形成以前」、城下町の形成過程と屋敷地の初期造成の状況を示す「城下町の形成と造成開始」、以後の城下町が展開していく状況を示す「城下町の施設と屋敷地の遺構」、城下町が解体されていく状況を示す「近世から近代へ」の項目に分けてまとめてみたい。各項目で扱った遺構の詳細は、これまでに報告した「城山 1 ～ 8」に掲載したものも含むため、これとリンクする遺構については報告書の巻次・シリーズ番号とブロック名を表記する。

第 1 項　城下町形成以前

松江は宍道湖と中海を繋ぐ水上交通の要衝で、戦国時代の初めには既に白潟の地に町場が形成されていた。松江城下町の成立は、17 世紀初頭の堀尾氏による松江城築城に始まり、その直前に展開していた末次・中町・白潟の港湾集落 (町場) を取り込むように城下町が形成されている。

城下町形成以前の周辺一帯には低湿地が広がっていたとされ、発掘調査ではこの時期の地層から水田跡やヨシやガマの地下茎を含む湿地の堆積層が見つかっている。このことから、村 (名) の周辺域に広がる水田や湿地帯を埋め立てて城下町の造成が行われていたことが分かってきた。

（1）低湿地の堆積層　第 1 ～ 16 ブロック

城下町形成以前の旧地表面 (MJ5 層) には、黒褐色有機質粘土～茶褐色泥炭質粘土が堆積している。旧地表面は、現在の地表面と同様に西側が高く、東側が低い。

標高が高い殿町・母衣町周辺では土壌の分解が進んだ黒褐色有機質粘土 (MJ5a 層) が堆積し、砂礫と粘土が均等に混じり合った状態を観察している。一方、標高が低い南田町周辺では土壌に未分解の植物遺体を含む茶褐色泥炭質粘土 (MJ5b 層) が堆積し、ラミナ状の堆積が認められる。また、16 ブロックの MJ5b 層上面の一部では、コケ類が繁茂している状況が確認できる場所もある。

（2）水田跡　『市 156』「城山 3」第 7 ブロック

第 7 ブロック (母衣町) では、城下町形成以前の旧地表面から水田の一部を検出した。水田跡には黒褐色有機質粘土 (MJ5a 層) を基盤とした畦と耕作面が遺存していた。耕作面は標高 0.30 m、耕作土は層厚 15㎝で、稲作を示唆するイネ科の他、ソバやセリなどの花粉化石が検出されている。また、耕作面には長さ約 22 ～ 23㎝の人の足跡が多数残っていた。

この水田跡の検出により、調査地周辺に田地が広がっていたという環境復元が可能となり、松江城下町は水田や低湿地を埋め立てて造成されたことを裏付けられる成果が得られた。

写真 9　水田跡と耕作面に残る足跡 (第 7 ブロック)

第２項　城下町の形成と造成開始

松江城下町の形成にあたり、まず初めに城下の区画割と地盤の排水のために「素掘りの大溝」の掘削を行っている。松江城下町には堀尾期・京極期・松平期の絵図が多く残っており、こうした絵図との比較から、大溝は道路と屋敷地や屋敷地と屋敷地の境界部分に掘られていたことが分かってきた。

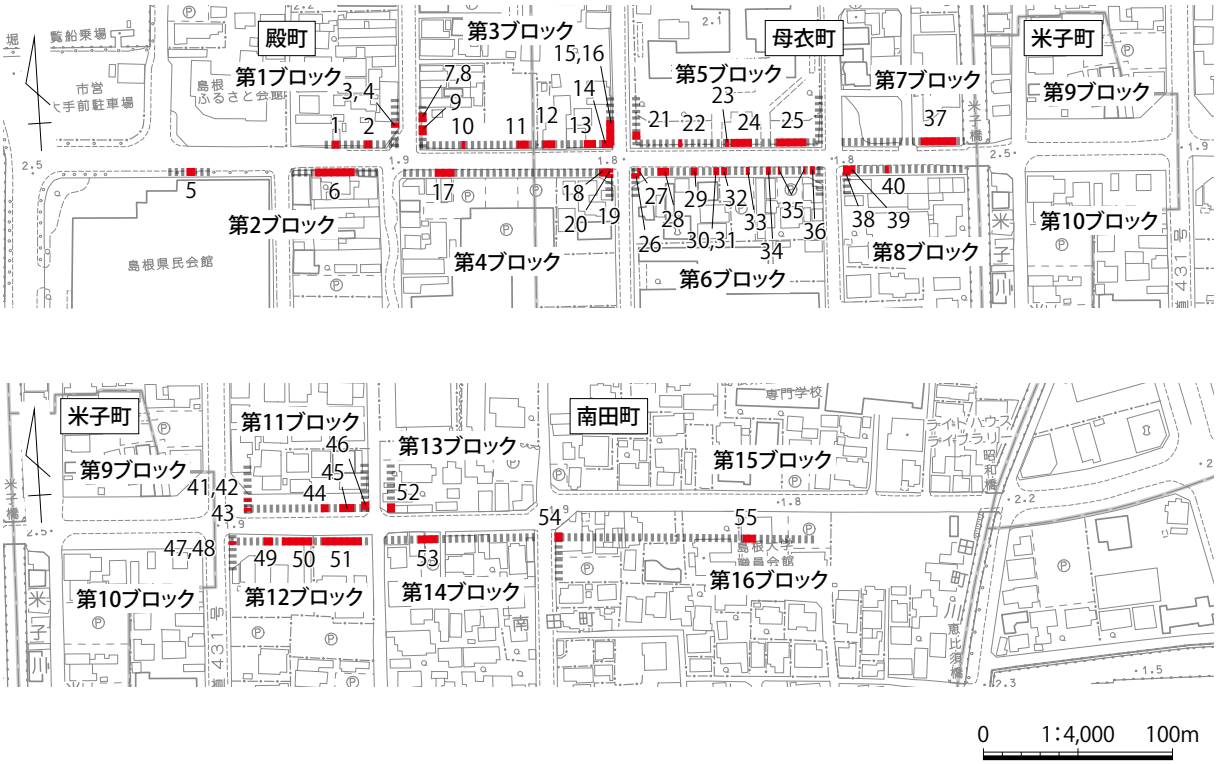
城下町形成段階の最初の造成土は、大溝を掘削した際に生じた残土などを主に利用して屋敷地に盛られ、この上で最初の生活が営まれたが、屋敷地内の造成にあたっては屋敷地全体を一律に嵩上げするのではなく、建物予定地だけを先行して土盛りしていることが分かってきた。これは「島状整地」と呼ばれている低湿地に形成された徳島城下町で確認された整地手法のひとつで、松江城下町でも同様の手法が用いられていることが調査によって明らかとなってきた。

この他、松江城に近い殿町では、大規模な鍛冶関連遺構や製材屑を含んだ廃棄土坑を検出している。これらは、松江城の築城や城下町建設に関連した鍛冶や製材を行っていた場所であったことが想定されている。また、城下町の外郭となる場所では土手や堀状遺構を検出している。このような形成過程を踏まえながら松江城下町が成立していくこととなる。

（1）素掘りの大溝

ｉ）区画境　第１～８・11～14・16 ブロック

城山北公園線沿線の発掘調査では、17 世紀初頭の城下町形成段階に掘削された素掘りの大溝を検出している。ここでは、これまでの調査成果から大溝の位置・規模・形態をまとめ、その機能目的と存続期間について考察を加えておきたい。城山北公園線沿線で検出した素掘りの大溝は、第 212 図に示した 55 地点で確認しており、これらの検出位置や規模等の詳細は表 28 に示した。



第 212 図　城山北公園線沿線における素掘りの大溝 (区画境大溝) 検出地点

まず、松江城下町遺跡で検出した素掘りの大溝は、前提として道路と屋敷地を区画する「区画境大溝」と、屋敷地と屋敷地を区画する「屋敷境大溝」の 2 種類に大別することができる。いずれも 17 世紀初頭の城下町形成段階に掘削されたものと考えられるが、その存続期間と廃絶時の埋め戻し状況に相違点が見られる。

区画境大溝は、城下町の区画割をなす東西・南北道路の両端に並行する形でほぼ直線的に掘削され、街区の縁辺部を縁取るような位置で検出している。規模は幅 3.00 ～ 5.00 m前後、深さ 1.00 ～ 2.00 mを測り、断面形は逆台形・U字状・浅鉢状と様々な形態を示している。検出位置は道路と屋敷地の境界部分にあたる石組水路の直下で大溝の掘り込み肩部（道路側）を確認し、この石組水路から屋敷側へ向かって溝幅をとっている。

大溝の掘削について記載された文献史料は残されておらず、その開始時期や廃絶時期は定かではない。発掘調査では城下町造成以前の旧地表面上面 (MJ5 層) から大溝の掘り込みを検出し、第 7 ブロック (母衣町) では水田跡の上面から切り込んで掘削されている状況を確認している。城下町初期造成土の MJ4 層は、これより下位に堆積する MJ5 層と MJ6 層の混合土で、その土壌採掘にあたっては大溝の掘削時に生じた残土をそのまま屋敷地の造成土として使用している。この状況から、大溝の掘削は屋敷地の造成土の採掘を実施すると同時に造成地盤の乾燥を促し、地盤をより強固なものにするための地業の一環とも捉えることができる。掘削後に溝として機能していた時期があったことは、溝底部付近に堆積する粘質土から窺える。この粘質土は流水ラミナ層（流水を示す互層）が観察できる地点があり、短期間は水が停滞していた時期があることを示している。しかし、その堆積は薄く、埋土から出土する遺物は 16 世紀末～ 17 世紀前半の中国青花や瀬戸美濃陶器（志野）の小片、漆器椀や下駄などの木製品が数点出土するに留まっている。

大溝が機能していた時期の掘り直しや補修の痕跡は見られず、長期間にわたって維持管理されていた状況は確認していない。大溝の廃絶時には、溝上端部まで人為的に一気に埋め戻されている。また、第 3 ブロック (殿町・母衣町) では、大溝の直上に盛土造成を施して堀尾期の長屋門が構築されるという事例があり、屋敷地での生活が整った時期には大溝は廃絶して埋められていたことが分かった。この時期には、道路に面する大溝肩部直上に長屋門の土台を兼ねた石組水路を構築して、屋敷地の排水機能を担わせていたものと考えられる。

城山北公園線沿線で見つかった区画境大溝は、調査開始当初には検出位置から雨や洪水時の浸水に対応する排水のための道路側溝としての機能が考えられていた。しかし、調査の蓄積により、街区の地割を明確にするための界線や屋敷地造成土の採掘を実施すると同時に造成地盤の乾燥を促すための地業の一環など、複合的な役割を担っていたことが考えられるようになった。

大溝の存続期間は、17 世紀初頭に城下町を形成するにあたり、城下町の区画割と屋敷地の造成を行っていた段階に掘削して機能させ、造成完了後には一気に埋め戻して廃絶するといった、短期間で過渡的な時期に限定されることが想定される。近世城下町の形成過程として、武家地となる街区の縁辺部に大規模な素掘りの大溝を掘削して直ぐに埋め戻すといった類例は、現時点で他の城下町では確認されておらず、松江城下町遺跡における特徴的な遺構と評価できる。

表 28　素掘りの大溝 (区画境大溝) 検出地点一覧表

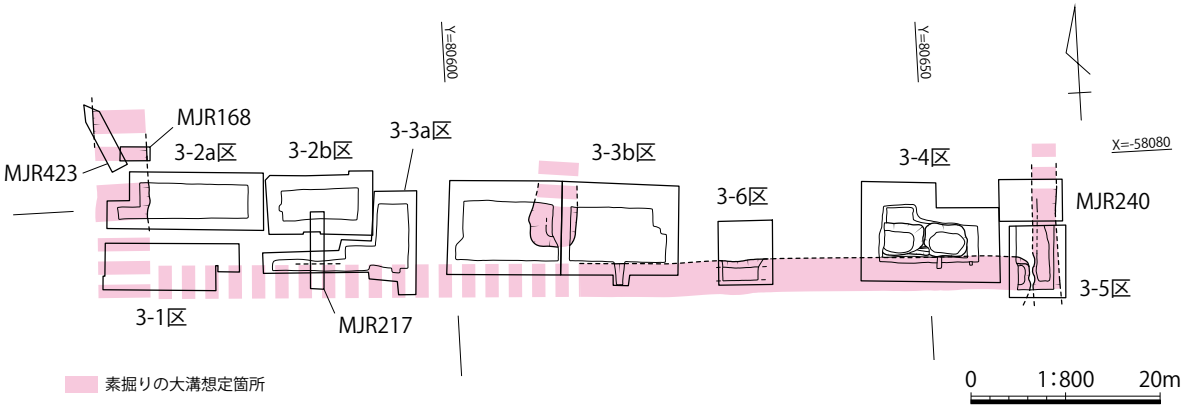
番号	調査年度	調査区	遺構名	検出位置	大溝検出部分と確認範囲	方向	溝幅（上端）	底幅	深さ	断面形
1	H29	1-3 区	SD03	第 1 ブロック東側	大溝北側肩部の落ち込みから南方へ	東西	南北 2.0 m以上	-	1.3 m	-
2	H24	1-2 区	SD03	第 1 ブロック東側	大溝北側肩部の落ち込みから南方へ	東西	南北 2.0 m以上	-	1.1 m	逆台形
3	H23	1-2 区	SD02	第 1 ブロック東端	大溝西側肩部の落ち込みから東方へ	南北	東西 3.0 m以上	1.4 m以上	1.9 m	逆台形
4	H24	MJR274	大溝	第 1 ブロック東端	大溝東側肩部の落ち込みから西方へ	南北	東西 3.0 m以上	1.4 m以上	1.9 m	逆台形
5	H27	MJR457	大溝	第 2 ブロック西側	大溝南側肩部の落ち込みから北方へ	東西	南北 0.6 m以上	-	0.4 m以上	U 字形
6	H27	MJR447	大溝	第 2 ブロック東側	大溝北側肩部の落ち込みから南方へ	東西	南北 1.3 m以上	-	0.4 m以上	-
7	H26	MJR423	SD02	第 3 ブロック西端	大溝西側肩部の落ち込みから東方へ	南北	東西 1.0 m以上	-	0.6 m以上	-
8	H20	MJR168	大溝	第 3 ブロック西端	大溝東側肩部の落ち込みから西方へ	南北	東西 2.2 m以上	-	-	-
9	H22	3-2 区	SD02	第 3 ブロック西端	大溝東側肩部の落ち込みから西方へ	南北	東西 3.0 m以上	0.7 m以上	-	逆台形
10	H22	MJR217	大溝	第 3 ブロック西側	大溝北側肩部の落ち込みから南方へ	東西	南北 3.0 m以上	-	-	-
11	H21	3-3 区	SD02	第 3 ブロック中央	大溝北側肩部の落ち込みから南方へ	東西	南北 2.3 m以上	-	1.0 m以上	-
12	H27	3-6 区	SD01	第 3 ブロック東側	大溝北側肩部の落ち込みから南方へ	東西	南北 2.6 m以上	1.6 m以上	0.9 m以上	U 字状
13	H24	3-4 区	SD01	第 3 ブロック東側	大溝北側肩部の落ち込みから南方へ	東西	南北 1.0 m以上	-	0.6 m以上	-
14	H23	3-5 区	SD02	第 3 ブロック東角	大溝北側肩部の落ち込みから南方へ	東西	南北 3.5 m以上	1.8 m以上	0.7 m以上	U 字状
15	H23	3-5 区	SD01	第 3 ブロック東角	大溝両側肩部（東西）を検出	南北	東西 2.9 m	1.4 m	1.2 m	U 字状
16	H23	MJR240	大溝	第 3 ブロック東端	大溝両側肩部（東西）を検出	南北	東西 3.0 m	1.4 m	1.2 m	U 字状
17	H23	MJR241	大溝	第 4 ブロック西側	大溝北側肩部の落ち込みから南方へ	東西	南北 1.4 m以上	-	-	-
18	H21	MJR196	大溝	第 4 ブロック東端	大溝北側肩部の落ち込みから南方へ	東西	南北 3.3 m以上	2.2 m以上	0.8 m以上	U 字状
19	H21	MJR196	大溝	第 4 ブロック東端	大溝東側肩部の落ち込みから西方へ	南北	東西 2.3 m以上	1.8 m以上	0.6 m以上	浅鉢状
20	H23	MJR249	大溝	第 4 ブロック東端	大溝東側肩部の落ち込みを確認	南北	-	-	-	-
21	H20	5-1 区	大溝	第 5 ブロック西側	大溝東側肩部の落ち込みから西方へ	南北	東西 2.0 m以上	-	0.3 m以上	-
22	H23	MJR263	SD263	第 5 ブロック西側	大溝南側肩部の落ち込みから北方へ	東西	南北 2.2 m以上	0.8 m以上		浅鉢状
23	H23	MJR264	SD264	第 5 ブロック西側	大溝南側肩部の落ち込みから北方へ	東西	南北 1.2 m以上	-	-	-
24	H20	5-2 区	SD03	第 5 ブロック中央	大溝北側肩部の落ち込みから南方へ	東西	南北 0.5 m以上	-	-	-
25	H19	5-3 区	SD01	第 5 ブロック東側	大溝北側肩部の落ち込みから南方へ	東西	南北 0.8 m以上	-	0.5 m以上	-
26	H21	MJR200	SD200	第 6 ブロック西側	大溝西側肩部の落ち込みから東方へ	南北	東西 1.5 m以上	-	-	-
27	H22	MJR247	SD247	第 6 ブロック西側	大溝北側肩部の落ち込みを確認	東西	-	-	-	-
28	H21	MJR175	大溝	第 6 ブロック西側	大溝北側肩部の落ち込みから南方へ	東西	南北 2.1 m以上	-	0.6 m以上	U 字状
29	H18	MJR32	SD32	第 6 ブロック中央	大溝北側肩部の落ち込みを確認	東西	-	-	-	-
30	H21	MJR176	大溝	第 6 ブロック中央	大溝北側肩部の落ち込みから南方へ	東西	南北 0.7 m以上	-	0.5 m以上	U 状
31	H18	MJR41	大溝	第 6 ブロック中央	大溝北側肩部の落ち込みから南方へ	東西	東西 3.9 m以上	-	-	-
32	H21	MJR191	大溝	第 6 ブロック中央	大溝北側肩部の落ち込みから南方へ	東西	南北 1.2 m以上	-	-	-
33	H17	MJR13	SD13	第 6 ブロック中央	大溝南側肩部の落ち込みを確認	東西	-	-	-	-
34	H21	MJR198	大溝	第 6 ブロック東側	大溝北側肩部の落ち込みから南方へ	東西	南北 1.6 m以上	-	0.4 m以上	U 字状
35	H21	MJR206	大溝	第 6 ブロック東側	大溝南側肩部の落ち込みを確認	東西	-	-	-	-
36	H21	MJR177	大溝	第 6 ブロック東側	大溝北側肩部の落ち込みから南方へ	東西	南北 2.3 m以上	-	0.6 m以上	U 字状
37	H23	7-1 区	SD02	第 7 ブロック中央	大溝北側肩部の落ち込みから南方へ	東西	南北 2.2 m以上	-	1.1 m以上	U 字状
38	H21	MJR197	大溝	第 8 ブロック西端	大溝西側肩部の落ち込みから東方へ	南北	東西 2.0 m以上	-	0.8 m以上	U 字状
39	H21	MJR197	大溝	第 8 ブロック西端	大溝北側肩部の落ち込みから南方へ	東西	南北 3.8 m以上	1.0 m以上	0.8 m以上	U 字状
40	H21	MJR340	大溝	第 8 ブロック中央	大溝北側肩部の落ち込みから南方へ	東西	南北 3.8 m以上	2.0 m以上	-	-
41	H20	MJR116	SX12	第 11 ブロック西端	大溝底部のシダ敷きの広がりを確認	南北	東西 4.7 m以上	-	-	-
42	H20	MJR119	SX10	第 11 ブロック西端	大溝底部のシダ敷きの広がりを確認	南北	東西 4.9 m以上	-	-	-
43	H21	11-1 区	SX07	第 11 ブロック西端	大溝両側肩部（南北）を検出	南北	東西 2.5 m	-	-	-
44	H18	11-2 区	SX05	第 11 ブロック中央	大溝底部のシダ敷きの広がりを確認	東西	南北 1.0 m以上	-	-	-
45	H19	11-3 区	SX03	第 11 ブロック東端	大溝底部のシダ敷きの広がりを確認	東西	南北 0.5 m以上	-	-	-
46	H19	11-3 区	SD04	第 11 ブロック東端	大溝西側肩部の落ち込みから東方へ	南北	東西 2.0 m以上	-	-	-
47	H22	MJR223	SD223	第 12 ブロック西側	大溝西側肩部の落ち込みを確認	南北	-	-	-	-
48	H22	MJR228	SD228	第 12 ブロック西側	大溝東側肩部の落ち込みから西方へ	南北	東西 4.5 m以上	-	-	-
49	H22	MJR221	SD221	第 12 ブロック西側	大溝北側肩部の落ち込みから南方へ	東西	南北 4.0 m以上	0.4 m以上	1.9 m	U 字状
50	H28	MJR482	大溝	第 12 ブロック中央	大溝北側肩部の落ち込みから南方へ	東西	南北 0.5 m以上	-	0.6 m以上	-
51	H22	12-1 区	SD01	第 12 ブロック東側	大溝北側肩部の落ち込みから南方へ	東西	南北 1.4 m以上	-	0.7 m以上	-
52	H28	13-2 区	SD01	第 13 ブロック西端	大溝両側肩部（東西）を検出	南北	東西 4.2 m	2.5 m	0.7 m以上	U 字状
53	H26	MJR365	大溝	第 14 ブロック中央	大溝北側肩部の落ち込みから南方へ	東西	南北 2.5 m以上	-	-	-
54	H26	MJR417	大溝	第 16 ブロック西側	大溝両側肩部（東西）を検出	南北	東西 3.0 m	0.6 m	0.4 m以上	U 字状
55	H26	MJR381	大溝	第 16 ブロック中央	大溝北側肩部の落ち込みから南方へ	東西	南北 2.0 m以上	-	-	-

屋敷地と区画境大溝の位置関係

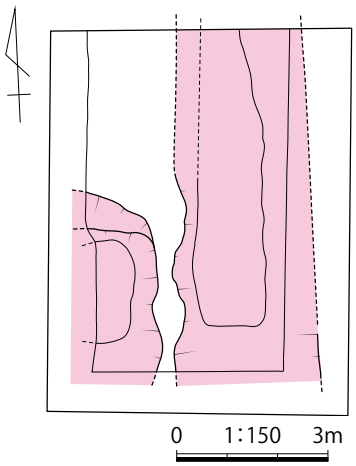
ここでは、屋敷地と区画境大溝の位置関係から、その特徴について言及してみたい。区画境大溝の検出位置を示すにあたり、第 3 ブロック (殿町・母衣町) をピックアップして掲載した (第 213 図)。

第 3 ブロックで検出した区画境大溝は、城山北公園線の東西道路と街区両端の南北道路に並行する形でほぼ直線的に掘削されている。区画境大溝の規模は、幅 4.00 m前後、深さ 1.50 m前後を測り、断面形は逆台形やU字状を呈する。堀尾期絵図を見ると、屋敷地の表口や側面にあたる場所に位置していることが分かる。区画境大溝自体は、屋敷地が形成される以前に掘削されたものと考えられることから、その用途として街区の区画割を意識していたことが想定される。

ここで注視したいのが、第 3 ブロックの東端に該当する 3-5 区である。この場所は、南北方向と東西方向の大溝が交わる屋敷の角地となるが、大溝の底部は繋がっていないことが判明している。大溝の上端部は検出しておらず不明だが、大溝は区画された屋敷地内において連続せず、一方向に単独で掘削されていたことが考えられる。また、3-3b 区の中央では南北方向の大溝が検出されているが、これは屋敷境大溝と捉えており、この場所でも屋敷境大溝と区画境大溝は繋がっていない。このように区画境大溝は、南北方向と東西方向の大溝が繋がって街区を取り囲むのではなく、角に近い位置で途切れている。このため、大溝は水を流すことを目的としたものではなく、地表面の乾燥を目的としていた溝である可能性が考えられる。



素掘りの大溝検出地点(第3ブロック)



素掘りの大溝交差部分(3-5区)

屋敷地と素掘りの大溝の位置関係(堀尾期松江城下町絵図)

第 213 図　区画境大溝検出地点 (第 3 ブロック)

ii）屋敷境　『市 157』「城山 4」第 16 ブロック

発掘調査では、屋敷地と屋敷地を区画する屋敷境を検出している。ここでは、第 16 ブロック (南田町) で検出した大橋家与力屋敷の屋敷境の特徴と変遷について検討してみたい。

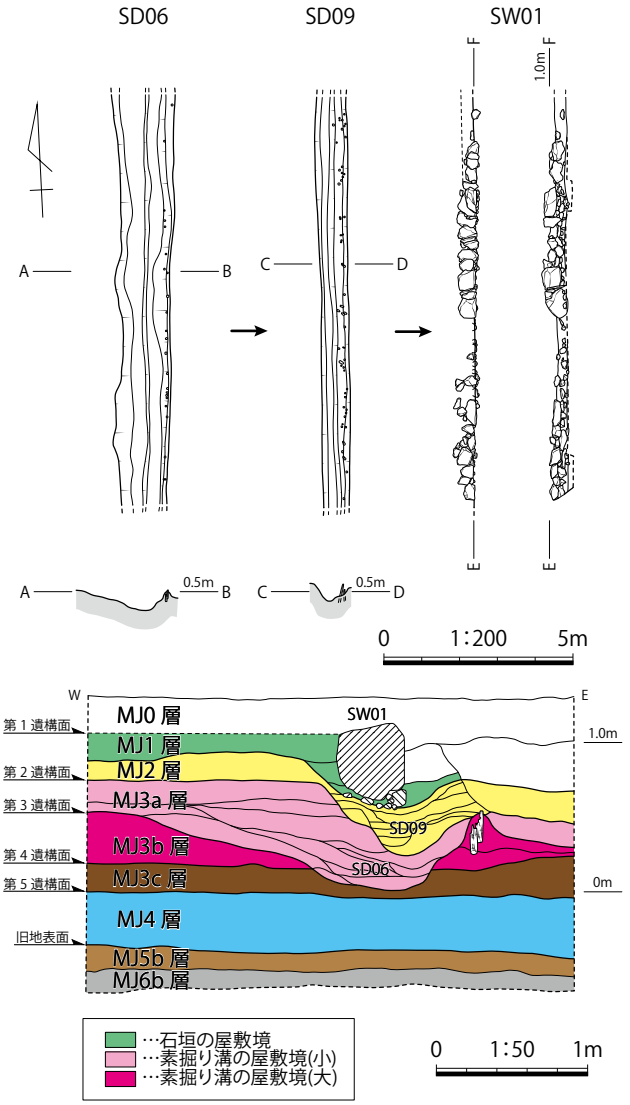
松江城下町遺跡では、松江歴史館 (殿町 287・279 外) や松江地方裁判所 (母衣町 68) の発掘調査で検出した屋敷境大溝の場合、自然堆積により徐々に溝幅が狭くなっていき、掘り直しの痕跡や補修の痕跡があるなど長期にわたって維持管理された状況が見られる。屋敷境の位置は嵩上げ造成後もほぼ踏襲され、一部の屋敷地では素掘り溝から石組の屋敷境に造り替わっていく。

第 16 ブロックで検出した大橋家与力屋敷の屋敷境は、東西に隣り合う屋敷地の境界に位置し、ここでも江戸時代を通して素掘り溝から石組の屋敷境に造り替わることが分かっている。屋敷境の位置は、各遺構面を通してほぼ動いておらず、同じ位置で踏襲されている (第 214 図)。

17 世紀前半～中頃の屋敷境 (SD06) の規模は、幅 1.50 m、深さ 0.50 mを測る素掘り溝で、その東肩に沿って杭列を設けている。この溝の東肩に沿って打たれている杭列は間隔が一定ではないが、隣地との境界を明瞭に示す遮蔽施設の基礎部分の可能性が考えられる。この場所は、西が高く東に低くなる地形であることから、西側敷地の雨水が東側敷地に流れ込まないようにするための施設と捉えている。17 世紀中頃～後半の屋敷境 (SD09) も素掘り溝で、幅 0.90 m、深さ 0.38 mと規模の縮小が見られるが、基本的な構造は SD06 と同じである。18 世紀前半以降にはそれまでの素掘り溝の屋敷境が人為的に埋め戻される。以後の屋敷境は石組水路 (SW01) が構築され、この状況は 19 世紀中頃まで続く。

屋敷境の規模は異なるが、松江歴史館や松江地方裁判所の屋敷境でも、溝とその片側に塀などの遮蔽施設が存在している。全国的な城下町の例を見ると、屋敷境の施設は溝しか見つからない場合が多いが、本来は溝の屋敷側に土塁や塀を備えて屋敷地を取り囲んでいた。屋敷境の古い時期の溝は素掘りである場合が多く、溝の壁面が壊れないように両側に木杭や板を立てて補強することがある。そして 17 世紀末になると、木杭や板が石材へと変化していく。

大橋家与力屋敷で検出した屋敷境の溝も時期とともに変化して、頑丈なものに造り替わっていく変遷を示している。



第 214 図　屋敷境溝の変遷

（2）屋敷地の造成と島状整地　『市 156』「城山 3」第 7 ブロック・『市 163』「城山 5」第 16 ブロック

城下町形成以前の旧地表面は、軟弱な黒褐色有機質粘土 (MJ5a 層) ～茶褐色泥炭質粘土 (MJ5b 層) で、第 1 項で述べたように当時の周辺一帯は、湿潤な土地や田地として利用されていたことが分かっている。このような環境において城下町建設を行うにあたり、まず地盤の嵩上げと水抜きが必要であったと考えられる。そこで城下町建設の一環として、屋敷地造成土の確保と同時に造成地盤の乾燥を促すために素掘りの大溝が掘削されている。

城下町の造成については「松江城および城下町建設にあたり、城のある城山 (亀田山) の北にあった宇賀山 (丘陵) を削り、堀にして、その開削土 (山土) で低湿地の中原や田町を埋めた」との伝承がある。しかし、発掘調査で実際にこの山土が造成土として確認されるのは、現時点では重臣や上級家臣などの屋敷となっていた殿町・母衣町の限られた屋敷地のみである。城下町の広範囲にわたって確認できる城下町初期造成土の MJ4 層は、これより下位に堆積する MJ5 層 (黒褐色有機質粘土～茶褐色泥炭質粘土) と MJ6 層 (灰色～青灰色細砂) の混合土で、街区や屋敷地を囲む大溝の掘削による残土や屋敷境の縁辺部で検出される土取穴から採掘したものと考えられる。この残土や採土は屋敷地に盛られ、この上で最初の生活が営まれた。

屋敷地の造成については、屋敷地全体を一律に嵩上げするのではなく、まず建物予定地だけが先行して盛土されていることが分かってきた。これは、低湿地に形成された徳島城下町の調査で最初に確認された整地手法で「島状整地」と呼ばれている。島状整地とは、屋敷の周囲に土取穴や溝を掘削し、その土で造成初期段階に屋敷地の建物を構築する部分にマウンド状の高まりを持たせる。その後、高まり周囲の土取穴や低位部に土砂を投入することにより、屋敷地の平坦化を行う整地手法のひとつである。徳島城下町では、16 世紀後半以降の侍屋敷において通例的に見られる手法と報告されている。

松江城下町遺跡では、17 世紀初頭 (堀尾期) の城下町形成段階から島状整地を採用している。発掘調査で確認した採土方法の事例として、松江地方裁判所 (母衣町 68) の発掘調査では屋敷境を掘削した際に生じた残土および屋敷境の縁辺部に大きな土取穴を掘削して土砂を採取している状況が見られ、第 7 ブロック (母衣町) では大溝の掘削による残土を初期造成土として利用していることが分かった。いずれも建物予定地に平均して 30 ～ 40㎝の層厚で盛土造成が施されている。

また、第 16 ブロック (南田町) では当地に大橋家与力屋敷が建てられる 17 世紀前半 (松平期初頭) の整地手法として、島状整地が採用されている状況を確認した。松平期初頭の与力屋敷は掘立柱建物または礎石建物で、島状整地を行った範囲に建てられており、松平期においても堀尾期と同じように島状整地を採用していることが分かった。

このことは、島状整地が 17 世紀初頭に限られた整地手法ではなく、低湿地を抱えた土地における地盤の嵩上げ手法であり、また、徳島と松江のように地域を越えて流布していた整地手法であった可能性が考えられる。

写真 10　17 世紀初頭の島状整地 (第 7 ブロック)

（3）外郭の敷設

近世城下町遺跡において堀や溝は普遍性の高いもので、かつて陸地部との間に存在した川や水路は城下町形成以後も残され、城郭や城下町を画しており、堀区画の役割を果たしている。

松江城下町遺跡では城下町形成段階の堀状遺構として、南田町の入り堀があった場所で堀底に仕切障壁を設けることで防御機能を高めた「障子堀」が見つかり、そこからさらに東側の田町川の西岸で「土手」が見つかっている。こうした堀や土手を整備して城下町の外側 (外郭) を囲うことで、城下の防御を図るとともにひとつの町として発展していく。

ⅰ）障子堀　『市 167』「城山 6」第 13 ブロック

第 13 ブロック (南田町) の東側には、江戸時代を通して入り堀が存在していた。この入り堀は南田町のほぼ中央に位置する京橋川から北に向かう堀で、堀尾期～松平期の城下町絵図では城山北公園線を越えてさらに北に延びている。

検出した堀は最も下の地層で見つかり、出土した陶磁器などから 17 世紀初頭の堀尾期の堀と推定されている。堀底では方形の土坑を 3 基検出し、これは「障子堀」と呼ばれる堀施設の一部であることが分かった。障子堀とは、堀底に土手状の高まりを造って仕切障壁とし、堀に進入した敵兵の動きを妨げるようにしたものである。17 世紀初頭は、豊臣家と天下統一を目指す徳川家との関係において緊迫した時期であり、戦乱の勃発を予感させる時期でもあった。そうした時代背景から、堀尾氏は自らの城郭の防御を固めていたことが想定される。

写真 11　障子堀 (第 13 ブロック)

ⅱ）土手　『市 157』「城山 4」第 16 ブロック

第 16 ブロック (南田町) の東端にあたる現在の田町川の西岸では、17 世紀初頭の土手の一部を検出した。土手の規模は、上端幅 2.00 m、下端幅 4.30 m、高さ 0.74 mを測り、断面形は台形を呈する。

土手の構築は、旧地表面 (MJ5 層) の上にマツ・タケ・ウツギ・シダなどの枝や葉を敷き詰め、その上に旧地表面以下の自然堆積層 (MJ6 層) を土盛りしていた。この技法は「敷葉工法」と呼ばれるもので、盛土の滑りや崩れを防ぐ古代以来の技法である。中国・朝鮮など東アジアにも多く、弥生時代から存在しているが古代になって増加し、福岡県の水城跡、大阪府の狭山池の堤で見つかっている。この土手の西側には幅 2.20 m、深さ 0.35 m の溝があり、土手に伴う排水溝と推定される。

検出した土手は、堀尾期絵図に描かれている土手の位置と一致しており、城下町の東端には土手が築かれ、城下町と湿地帯を画していたことが発掘調査からも裏付けられる成果が得られた。

写真 12　城下町東端の土手 (第 16 ブロック)

第３項　城下町の施設と屋敷地の遺構

松江城下町遺跡で検出される遺構は、建物跡・周辺施設・溝状遺構・堀状遺構・廃棄土坑・祭祀遺構などがあり、その内容は多岐にわたる。城山北公園線沿線は建物が密集する中心市街地にあたり、城山北公園線西半 (第 1 工区) の殿町・母衣町・米子町では道路の北側で広い調査面積が、東半 (第 2 工区) の南田町では道路の南側で広い調査面積が確保できたが、その調査区を城下町絵図と照合すると、絵図に描かれている広大な屋敷地の表口や側面に位置していることが分かる。広い調査面積が確保できた調査区では屋敷地内の建物跡などが検出される場合もあるが、その多数は調査面積が狭小な調査区である。発掘調査では、屋敷地の表口や側面に伴う遺構を検出している場合が多く、屋敷地の全容が把握できた調査区は現時点では少数である。

ここでは、城下町形成以後の遺構面から検出される遺構を取り扱い、松江城下町遺跡において特徴的な遺構を提示することで城下町が整備・発展していく状況を見ていきたい。なお、これまでの調査成果から、屋敷地の表口や側面で通例的に見られる遺構を主に抽出して掲載している。

(1) 建物跡　『市 185』「城山 8」第 16 ブロック

当時の建物の上屋は残っていないが、発掘調査では礎石や柱などの建物基礎が見つかっている。この建物の痕跡や造成土の違いなどを手がかりに、建物の規模・構造・造り替えの有無などを復元している。第 16 ブロック (南田町) では広い調査面積が確保することができ、ここでは大橋家与力屋敷の建物跡を検出した。大橋家与力屋敷は、絵図や文献から松平期になってから屋敷地として利用されていることが分かっており、検出した建物跡は 1638 年を上限とするもので、当該期の遺物組成や整地手法を考える上で貴重な成果が得られた。

写真 13　与力屋敷の礎石建物跡 (第 16 ブロック)

大橋家与力屋敷では、掘立柱建物と礎石建物があり、屋敷地によって構築される建物が異なることが明らかとなっている。

(2) 地下室（ちかむろ）　『市 148』「城山 1」第 5 ブロック

発掘調査では、屋敷絵図には記されていない遺構が検出されることが多い。その中のひとつに、地下を利用して空間を設け、各種の目的に利用した地下室が見つかることがある。この地下室の検出位置は、近世遺跡では大半が屋敷地内の建物外の空閑部分に設けられていたことが推定されている[46]。

第 5 ブロック (母衣町) では 19 世紀前半の遺構面から、建物外の空閑部分にあたる位置で四方を石組で囲った地下室を検出し、底石には 1㎝程度の礫が敷かれていた。石組の底面には桶が埋設されており、屋敷地内の防火用水や生活用水などの水溜としての機能が想定される遺構である。

写真 14　地下室 (第 5 ブロック)

（3）長屋門跡　『市 171』「城山 7」第 3 ブロック

武家屋敷の表口にあたる部分の発掘調査では、長屋門跡が見つかっている。長屋門とは、門の扉口の両側に部屋が連なる長屋を建て、そこに家臣 (使用人) を住まわせていた武家屋敷の門形式のひとつで、階層や禄高によってその形式が定められていた[47]。屋敷地の道路に面した場所には長屋門などの表門や土塀があり、側面や裏手には板塀や生垣などを設けて街区の中にある屋敷地を区画していた。

第 3 ブロック (母衣町) では屋敷地内の表口にあたる部分で、17 世紀前半の長屋門の石垣を検出した。長屋門は、城山北公園線に沿った東西方向を主軸とし、規模は南北幅 4.00 m、高さ 0.80 m を測る。石垣は 2 ～ 3 段積み上げられ、大小様々な自然石と割石をバランス良く配置している。石材は安山岩と玄武岩の 2 種類が使用されていた。発掘調査では土塀の基礎部分や竹垣が検出される場所もあり、こうした遮蔽施設を構築して屋敷地の周囲を囲んでいたことが想定される。

写真 15　長屋門跡 (第 3 ブロック)

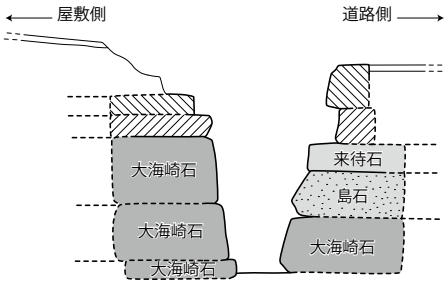
（4）石組水路　『市 156』「城山 3」第 5・6・8 ブロック

既存の水路側溝の蓋を撤去すると、その下には江戸時代の石組水路が残っている。この石組水路は、城山北公園線の発掘調査では、道路沿いに設定したほとんどの調査区で検出している。

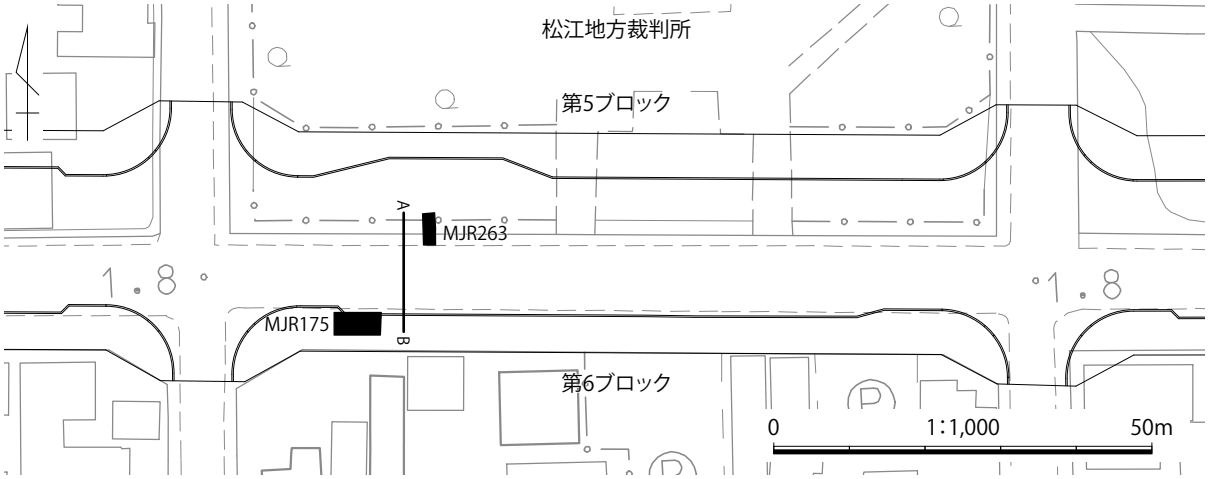
道路と屋敷地の境界部分に位置する石組水路は、平均して幅 70㎝前後を測り、屋敷側と道路側では石の組み方が異なっている。道路から見える屋敷側の石組には大海崎石が主に使用され、石の表面にノミ工具による加工痕をもつなど、丁寧に仕上げられた石材が多く見られる。これと対となる道路側の石組には大海崎石の他に島石や来待石が雑然と積まれ、数回積み直されている状況が見られる。石の組み方の違いについては、石組水路の構築に時期差が生じているものと捉えており、特に道路側の石組は、度重なる洪水に対処するために嵩上げされながら現在の道路高まで積み上げられたものと想定され、道路面を嵩上げする時期によって異なる石材を使用していることが考えられる (第 215 図)。

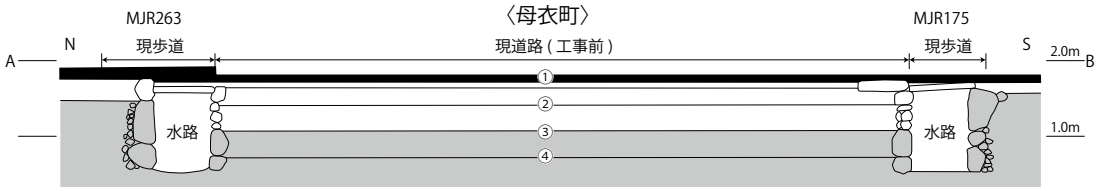
写真 16　石組水路 (第 8 ブロック)

第 5・6 ブロック (母衣町) の立会調査成果から、城山北公園線の両側にある石組水路の位置を基に江戸時代の母衣町の道路幅が 9.20 m と推定されており、また、道路の硬化面の検出標高から、江戸時代から現在までの間に道路面が 3 回嵩上げされていることが想定される。なお、石組水路の断面から、石組水路の直下にある区画境大溝は屋敷側に向かって溝幅をとっていることが判明している (第 216 図)。



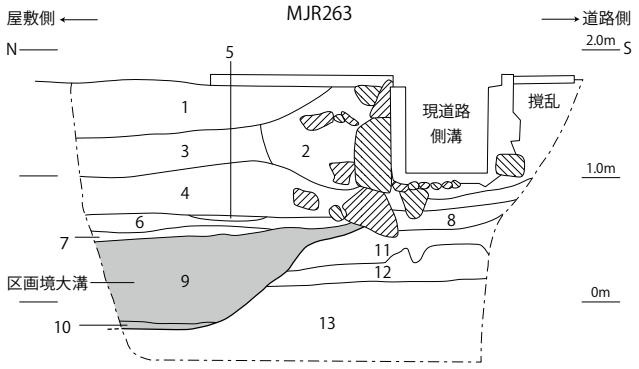
第 215 図　石組水路断面模式図

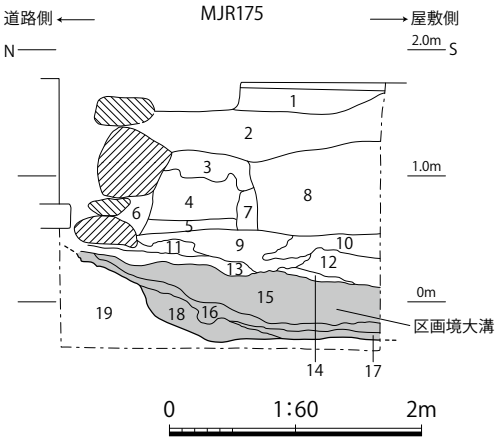




母衣町の道路面標高・道路幅・水路幅

道路面	時期	道路と推定される硬化面の検出標高	道路幅	水路幅
①	現代	1.82m	9.2m	0.7m
②	近代	1.40m	9.2m	0.7m
④	江戸1	1.10m	9.2m	0.7m
⑤	江戸2	0.72m	9.2m	0.7m





1　黄褐色土
2　暗黄褐色土(灰色粘質土混じり)
3　黄褐色土(灰色粘質土混じり)
4　暗灰褐色土
5　灰色粗砂
6　黒色土と暗灰褐色土の混合土
7　灰褐色土
8　灰褐色粘土
9　暗灰色土と灰色シルトの混合土
10　暗褐色粘質土
11　黒褐色土灰色細砂の混合土
12　黒褐色粘質土
13　灰色細砂

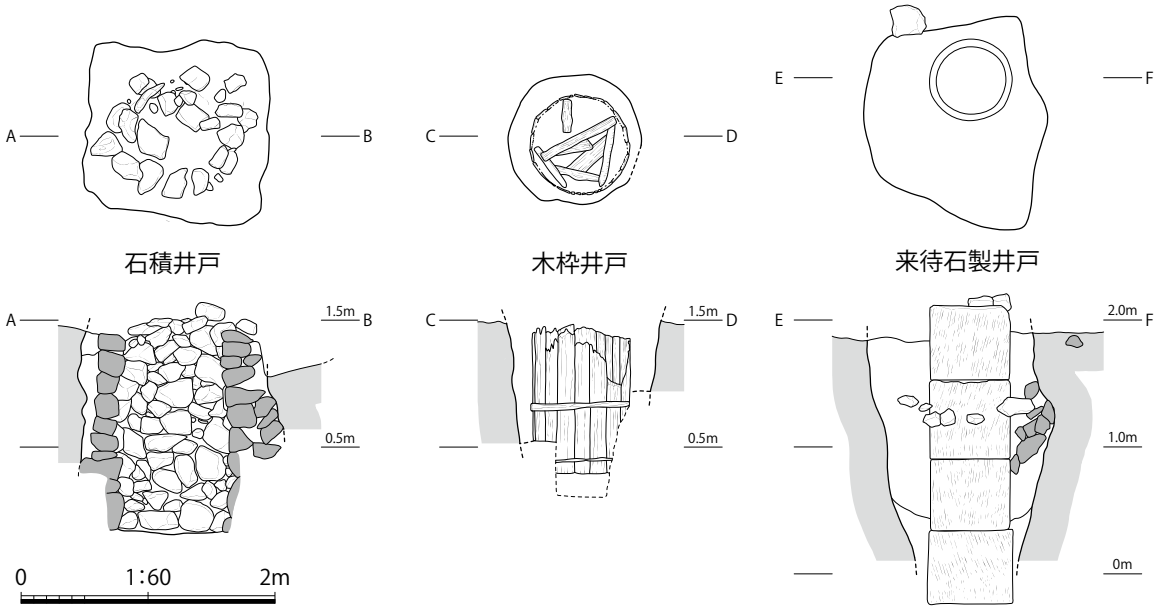
1　砂利
2　黒褐色土
3　黄褐色粘質土
4　灰オリーブ粘質土
5　黄灰色砂質土
6　暗茶褐色土
7　灰色粘質土
8　灰色土
9　灰白色粘質土
10　暗灰色土
11　黒褐色粘質土
12　9に黒褐色粘質土が混じる
13　12と同じ
14　灰白色粘質土
15　黒褐色粘質土
16　灰色砂質土
17　灰色砂質土(ブロック含む)
18　黄灰色粘質土(ブロック含む)
19　灰色細砂

第 216 図　石組水路と道路面 (第 5・6 ブロック)

(5) 井戸　第 1・3・5・7・13・16 ブロック

屋敷地内の空閑部分にあたる部分の発掘調査では、井戸が見つかっている。松江城下町遺跡で検出される井戸は、大きく分けて掘井戸と上水井戸に分類できる。掘井戸は、井戸を検出した地表面から湧水層までほぼ円筒状に掘られている。上水井戸は、井戸として利用する地中に埋設された桶や木枠の井戸側に木樋や竹樋を連結して流下するもので、状況に応じて方向を変えたり、分水を行うものである。現時点では、井戸側を持たない素掘りの井戸は確認していない。

松江城下町遺跡では掘井戸が多く検出されており、上水井戸は第 1 ブロック (殿町) で確認するに留まる。掘井戸には石積井戸・木枠井戸・来待石製井戸があり、その他に地上に出る井筒は来待石製で地中は木枠で構築されている井戸も見つかっている (第 217 図)。井戸が検出される付近では、別の井戸が検出されることもあり、水脈 (湧水層) の場所を把握していたことが考えられる。石積井戸と木枠井戸は概ね 18 世紀後半、来待石製井戸は概ね 19 世紀前半～近代の遺構面で多く検出している。



第 217 図　井戸の種類

(6) 廃棄土坑　第 1 ～ 16 ブロック

松江城下町遺跡で検出している遺構の中で最も多いのが土坑である。土坑には、素掘り土坑・木枠土坑・石積土坑などがあり、その規模は大小様々である。これらの土坑は、屋敷地内の空閑部分で多く検出され、不用となったり使用不能となった陶磁器類や食物残滓などを廃棄する行為が頻繁に行われていたことを示している。

この他に転用廃棄土坑があり、本来別の目的で構築された後、その構築物が廃棄土坑として転用されている遺構も見つかっている。土坑から出土する遺物は、時間軸や時期幅が限定される場合が多く、遺物の編年研究では重要な資料となり得る。

写真 17　廃棄土坑 (第 16 ブロック)

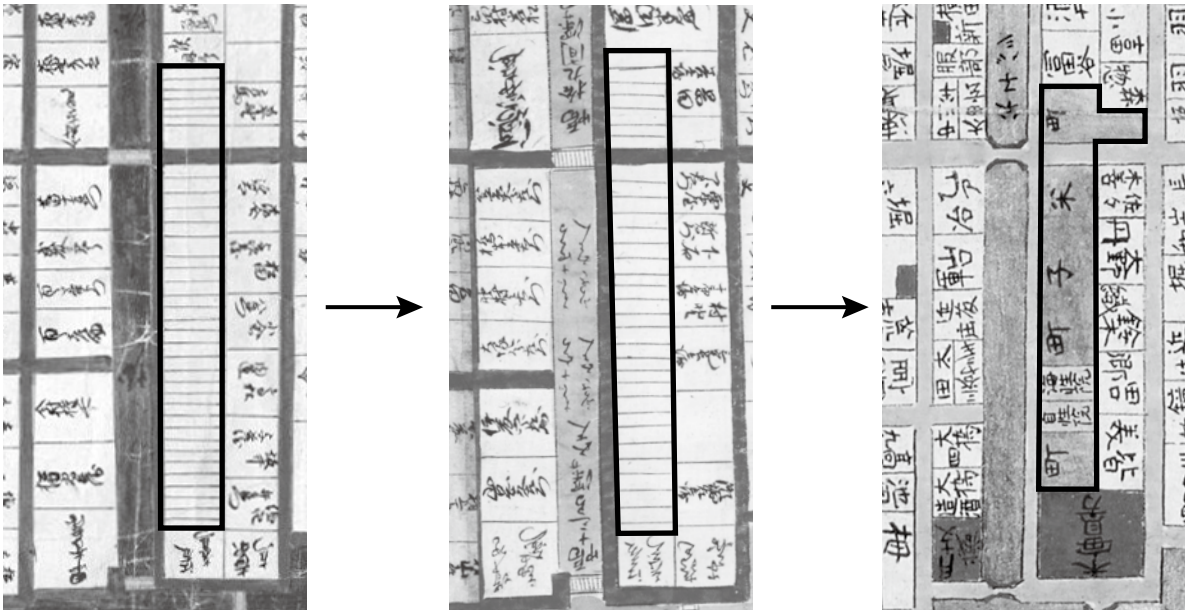
（7）町屋 (米子町) の遺物　『市 156』「城山 3」第 10 ブロック

米子川の東岸には、江戸時代初頭から現在に至るまで、「米子町」と呼ばれる一画が存在する。この町の呼称は、江戸時代初頭に「伯耆国米子」(現：鳥取県米子市) 出身の職人たちが当地に移住してきたことに由来するという伝承が残っている (第 218 図)。

第 10 ブロック (米子町) で行われた発掘調査では、陶磁器類の他に武家屋敷とは異なった多種多様な職種の生産に関わる遺物が出土している。これらを列記すると、漆塗りの道具となる容器や大工道具では墨壺・曲尺（かねじゃく）・ぶんまわし (コンパス)・釘・錐・砥石などがある。金工品では煙管・小柄・切羽・鏥（はばき）・笠鞐（かさこはぜ）(鎧の肩紐の留め金具) などがあり、鍛冶に関わる鉄滓や鞴（ふいご）の羽口も出土している。鋳造に関わる小型の坩堝（るつぼ）もあり、銅・亜鉛・錫・銀などの金属元素が検出されている。また、細工品の原材料として加工痕をもつ獣骨 (大腿骨や脛骨) や牛の角芯が多数出土している。牛の角芯は、角鞘を切り開いてエナメル部分を剥ぎ取り、これを加工して偽鼈甲を作るために角鞘を取った後の廃材である。アワビの貝殻も多数出土し、螺鈿（らでん）細工の原材料としていた可能性がある (第 219 図)。

これらから、米子町には塗師・大工・鋳物師（いもじ）・鍛冶屋・骨細工職人と多種多様な職人がいたことが分かる。この中に鋳物師がいるが、大規模な鋳造を行う鋳物師は火を扱うことから都市の中から排除される傾向があるものの、坩堝から検出された金属から判断すると、米子町にいた鋳物師は刀装具等に使う小型の製品を主に生産していた可能性が考えられる。同じく火を扱う鍛冶屋は、鋳物師のように都市から排除されることは少ない[48]。

こうした出土遺物を見ると、武士階層の需要に応えられる様々な職種があることが分かる。外堀の外側に配置されている米子町の町屋には、武士の生活に必要な道具を生産する職人が多数居住していたことが窺え、武家屋敷の中に配置された町屋の特徴を見出すことができる。

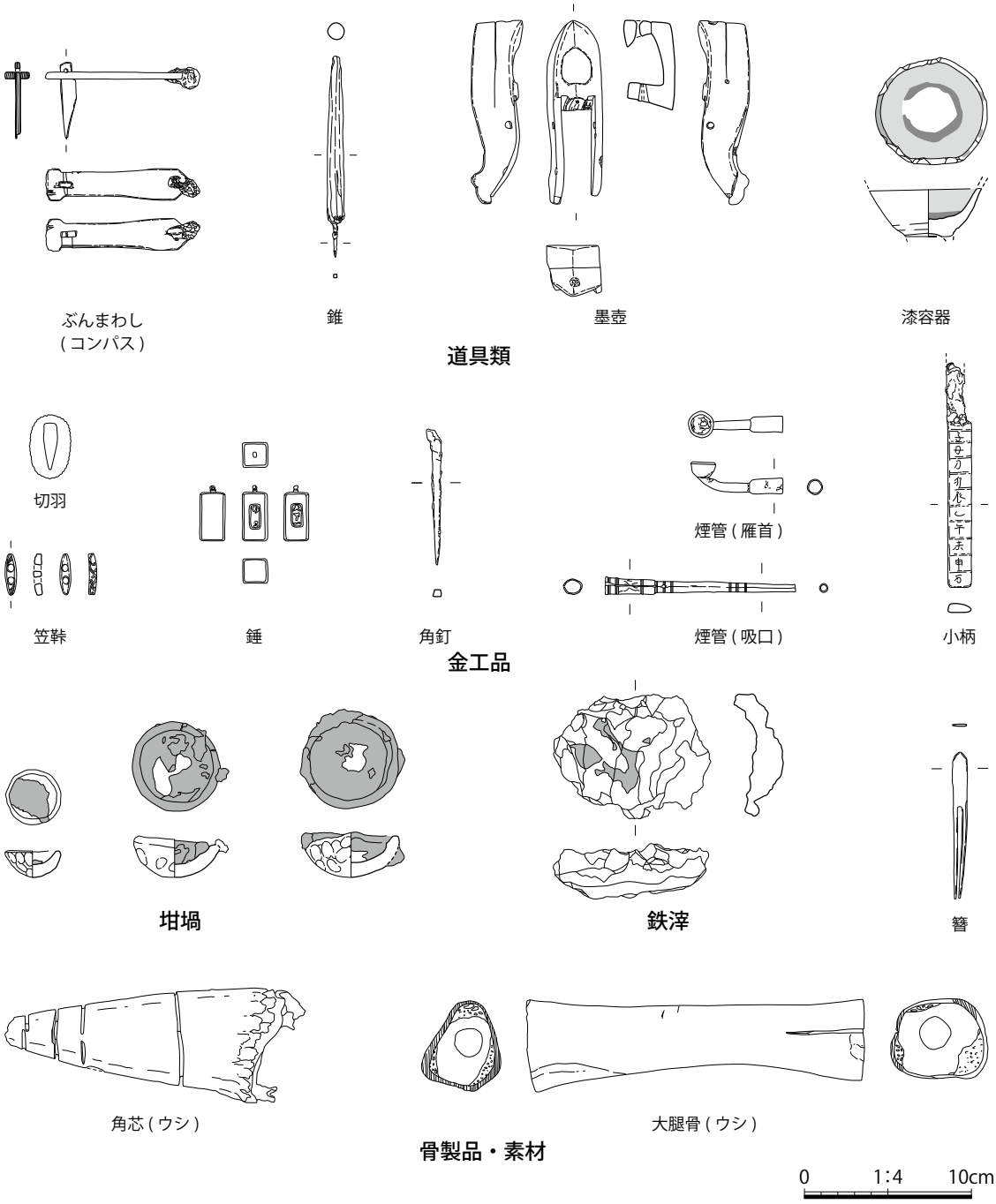


堀尾期　　京極期　　松平期後期

第 218 図　町屋 (米子町) の変遷

写真 18　大工道具

写真 19　細工品の原材料



第 219 図　町屋 (米子町) の出土遺物

第 4 項　近世から近代へ

幕末の一括廃棄土坑　『市 154』「城山 2」第 3 ブロック・『市 156』「城山 3」第 12 ブロック

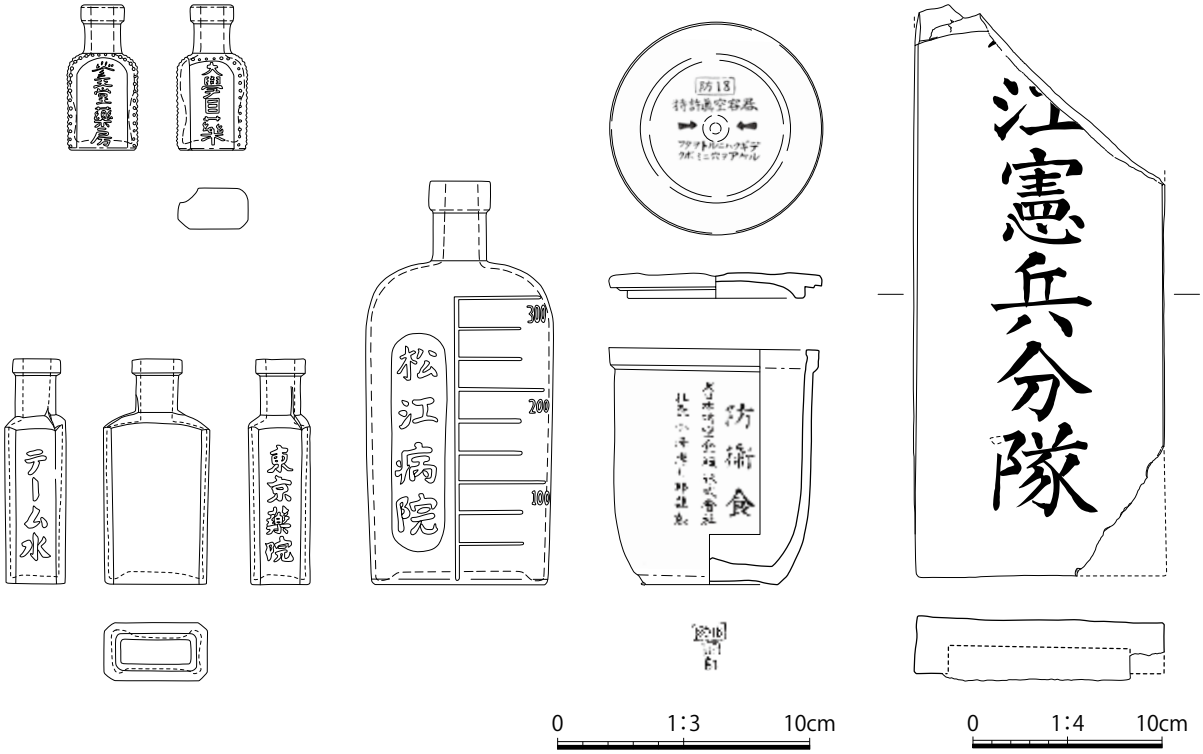
明治時代の廃藩置県によって城下町の武家屋敷は取り壊され、その廃材や瓦の多くは屋敷地内の空閑部分に大きなゴミ穴を掘るなどして一括処分されていた。江戸時代の広大な屋敷地はそのまま公共施設として利用されたり、短冊状に細かく分筆されて庶民の住まいへと変化していく。

城山北公園線沿線は大通りに面している利便性によるためか公共施設として利用された場所が多く、近代の遺物も多数出土している。殿町の松江憲兵分隊跡地では磁器製の「松江憲兵分隊」の表札が出土し、母衣町の松江裁判所では磁器製の「防衛食容器」が出土している。防衛食容器は戦時中に缶詰の代用品として流通していたもので、非常食として保管されていた可能性がある。その他に飲料・調味料・薬品・化粧品など、日用品として使用されるガラス瓶や容器も出土している (第 220 図)。

大量に出土した廃材や瓦は屋敷地の建物が解体されたことを物語っており、出土遺物から近代の人々の生活が窺える。城下町が解体された以後も町は拡大を遂げながら現代まで連綿と続いていく。

写真 20　建物解体に伴う瓦の一括廃棄 (第 3 ブロック)

写真 21　転用廃棄土坑 (第 12 ブロック)



第 220 図　近代の遺物

第 6 節　結語

平成 18(2006) ～ 29(2017) 年度にわたって継続的に実施されてきた城山北公園線都市計画街路事業に伴う発掘調査では、調査の積み重ねにより「新たな松江の城下町像」を描くことができる知見が得られ、見つかった遺構と遺物は近世松江城下町の変遷を示す手がかりとなる情報をもたらしている。

この調査では、建物が建ち並ぶ中心市街地において殿町・母衣町・米子町・南田町を東西に横断する形で広大な調査面積が確保できたこともあり、地下に埋もれている城下町の姿を目の前に現してくれた。それぞれの町の中にある武家屋敷の姿は、武士階級の中においても階層が存在していることを示しており、江戸時代の身分制度を如実に物語るものであった。

以下では、これまでに城山北公園線沿線で行われた松江城下町遺跡の発掘調査で得られた成果を要約し、今後の課題について触れることでまとめとしたい。

第 1 項　松江城下町遺跡の実態と特徴

松江城下町遺跡の時期区分と年代

ここではまず、現時点で考えられる松江城下町遺跡における時期区分と年代について、各期の様相と環境復元を加えて以下に提示しておきたい。なお、ここで提示する時期区分と年代は、本章第 3 節で提示したⅠ～Ⅶ期の区分を基にしているが、これとは区別するために近世 1 ～ 6 期の区分に設定したものである (表 29)。併せて、これまでに刊行した松江城下町遺跡発掘調査報告書との兼ね合いから、松江の時期区分 (堀尾期・京極期・松平期前期～後期) を含めて提示したが、これは松江城下町遺跡の年代を捉えるための補完的な区分として理解していただきたい。

表 29　指標遺跡と松江城下町遺跡の時期区分および遺構面年代の対応関係

様相	時期区分	指標遺跡の遺構面年代	対応関係	時期区分	松江城下町遺跡の遺構面年代	松江の時期区分
(古) ↑	Ⅰ期	17 世紀初頭以前 (1600 年代以前)	＝	近世 1 期	17 世紀初頭以前 (1600 年代以前)	城下町形成以前
	Ⅱ期	17 世紀初頭～前半 (1600 ～ 1630 年代)	＝	近世 2 期	17 世紀初頭～前半 (1607 ～ 1633 年代)	堀尾期
	Ⅲ期	17 世紀前半 (1630 ～ 1637 年代)	＝	近世 3 期	17 世紀前半 (1634 ～ 1637 年代)	京極期
	Ⅳ期	17 世紀前半～中頃 (1638 ～ 1650 年代)	＝	近世 4 期	17 世紀前半～後半 (1638 ～ 1690 年代)	松平期前期
	Ⅴ期	17 世紀中頃～後半 (1650 ～ 1690 年代)				
	Ⅵ期	18 世紀前半～後半 (1700 ～ 1790 年代)	＝	近世 5 期	18 世紀前半～後半 (1700 ～ 1790 年代)	松平期中期
↓ (新)	Ⅶ期	19 世紀前半～後半 (1800 ～ 1860 年代)	＝	近世 6 期	19 世紀前半～後半 (1800 ～ 1860 年代)	松平期後期

近世 1 期：17 世紀初頭以前 (城下町形成以前)

松江城下町遺跡の中で確認できる最も古い時期の遺構面で、城下町形成以前に堆積していた旧地表面が該当する。この遺構面に対応する層序は MJ5 層である。遺構は、水田跡や旧地表面上面にコケ類が繁茂している状況を確認している。城下町形成以前の周辺一帯には低湿地が広がっていたとされ、発掘調査ではこの周辺域に広がる水田や湿地帯を埋め立てて城下町の造成が行われたということが明らかとなっている。

近世２期：17 世紀初頭～前半 (城下町形成～成立段階：堀尾期)

近世 1 期の旧地表面直上に盛られた城下町初期造成土の上面で検出される遺構面が該当し、城下町形成～成立段階に相当する。この遺構面に対応する層序は MJ4 層である。松江の時期区分では堀尾期 (1607 ～ 1633 年代) の遺構面として捉えている。

城下町の形成にあたり、まず最初に「素掘りの大溝」の掘削を行っていることが松江城下町遺跡の特徴のひとつとして挙げられる。この素掘りの大溝は、現在の東西・南北道路の両端に並行する形でほぼ直線的に掘削され、街区の縁辺部を縁取るような位置で検出している。その性格は、街区の地割を明確にするための界線や屋敷地造成土の採掘を実施すると同時に造成地盤の乾燥を促すための地業の一環など、複合的な役割を担っていたことが考えられ、その広がりが最初の城下町の範囲を示しているものと捉えている。素掘りの大溝は、道路と屋敷地を区画する「区画境大溝」と屋敷地と屋敷地を区画する「屋敷境大溝」の 2 種類に大別でき、いずれも 17 世紀初頭の城下町形成段階に掘削されたものと考えられるが、その存続期間と廃絶時の埋め戻し状況に相違点が見られる。区画境大溝は、城下町初期造成の完了後には一気に埋め戻して廃絶するといった、短期間で過渡的な時期に限定されることが想定される。一方で屋敷境大溝は、自然堆積により徐々に溝幅が狭くなっていき、掘り直しや補修の痕跡があるなど、長期間にわたって維持管理された状況が見られる。屋敷境の位置は嵩上げ造成後もほぼ踏襲され、素掘り溝から石組の屋敷境溝に造り替わっていくことが分かった。

城下町の造成は、上級家臣と下級家臣の屋敷地で若干の差はあるが、同じような厚さでほぼ均一に造成されている。城下町を形成するにあたっては旧地形を念頭に置き、それに基づいた町づくりを視野に入れて城下町建設を進めていたことが考えられる。初期造成土の獲得は、素掘りの大溝やその周辺に大きな土坑 (土取穴) を掘削し、掘削の際に生じた残土を屋敷地の造成土として利用している。この造成土の上で最初の生活が営まれているが、屋敷地内の造成にあたっては屋敷地内全体を一律に嵩上げするのではなく、建物予定地だけを先行して盛土していることが分かってきた。これは「島状整地」と呼ばれる整地手法のひとつで、この手法を用いて屋敷地の造成が行われている。

この時期に構築される建物や付属施設の地下構造は掘立柱が主体となっている。武士階層の中で制限があったと思われるが、長屋門など屋敷地内の主要箇所には石垣が構築されている場所もある。この時期の溝や土坑は石垣 (石組) を伴わない素掘りのものが多く検出されることが特徴的である。また、城下町の外郭となる遺構として、南田町の入り堀では堀の底部に「障子堀」と呼ばれる構造をもつ堀状遺構を検出し、城下町の東端にあたる場所では土手が検出されている。こうした堀や土手を整備して城下町の外側 (外郭) を囲うことで、城下町形成当初～成立段階には実戦を想定した城下町の防御を固めていたことが想定される。

近世３期：17 世紀前半 (城下町成立以後：京極期)

近世２期以降の城下町成立以後の段階に相当する。松江の時期区分では京極期 (1634 ～ 1637 年代) の遺構面として捉えている。ただし、この時期の遺構面を特定することは難しく、京極期の段階に屋敷地の嵩上げ造成による新たな生活面が形成されたのかも分かっていないため、対応する層序は現時点で提示できない。京極氏の統治期間はわずか 3 年余りと短く、この時期の遺物組成は肥前系陶器

に砂目のグループが入ってくること以外は近世 2 期の組成と大きく変わらないため、遺物から京極期の遺構を抽出することも難しいのが現状である。また、絵図を根拠とした場合に堀尾期絵図と京極期絵図を比較すると屋敷地割にほぼ変化が見られないことから、この時期の造成は、堀尾期の生活面を京極期の段階で新たに造成を施さず、堀尾期と同じ面を京極期でも生活面として利用していた可能性が十分に考えられる。このことは、他の松江城下町遺跡でも共通する課題となっている。

城山北公園線沿線の松江城下町遺跡では、南田町で畠地として利用されている場所が存在するが、畠地を開墾した時期は明確ではない。また、屋敷地内で検出される屋敷境溝が消失する時期や障子堀を検出した入り堀が消失する時期を京極期と考えることもできるが、この時期の遺構面として明確に捉えることができた遺跡はまだ見つかっていない。現時点で松江城下町遺跡の中で唯一、京極期の遺構として特定できたのは、松江歴史館 (殿町 287・279 外) の北屋敷第 3 遺構面で家臣の名前入り木簡が出土した廃棄土坑 SK23(佐々土坑) の検出例のみである。

近世 4 期：17 世紀前半～後半 (松平期前期)

近世 3 期以降に嵩上げ造成による新たな生活面が形成された遺構面が該当する。この遺構面に対応する層序は MJ3 層である。松江の時期区分では松平期前期 (1638 ～ 1690 年代) の遺構面として捉えている。検出される遺構には建物跡・周辺施設・溝状遺構・廃棄土坑・祭祀遺構などがあり、その内容は多岐にわたる。

この時期の様相を示す城山北公園線沿線の松江城下町遺跡は、南田町の大橋家与力屋敷が挙げられ、絵図や文献から松平期になってから大橋家の広大な屋敷地として利用されていることが分かっている。大橋家与力屋敷の建物跡は、1638 年を上限とするもので掘立柱建物と礎石建物があり、屋敷地によって構築される建物が異なることが明らかとなっている。また、この時期の整地手法として、島状整地が採用されている状況を確認した。建物は島状整地を行った範囲に建てられており、松平期においても堀尾期と同じ整地手法を採用していることが分かった。このことは、島状整地が 17 世紀初頭に限られた整地手法ではなく、低湿地を抱えた土地における地盤の嵩上げ手法であり、松江城下町遺跡では時期を問わない通例的な整地手法となっていたことが考えられる。

この時期に構築される建物や付属施設の地下構造は掘立柱と礎石が主体となっており、17 世紀中頃以降から礎石が多く検出されることが特徴的である。溝や土坑は素掘りのものが多い中で、石垣 (石組) を伴うものも少数検出されるようになる。また、この時期に比定される出雲国松江城絵図 (正保年間) を見ると、京橋川の両岸と南田町の入り堀に石垣の護岸を敷設するなどして城下町を整備していることが分かる[49]。このように、城下町の施設や屋敷地内の空間利用が変化していく状況から、それまでの堀尾～京極期に踏襲されていた城下町の施設や屋敷地利用の姿は、新たに松平期の家臣団が独自性をもって形態の変化が進められていたことが考えられる。そして、17 世紀初頭に堀尾氏が建設した城下町を保ちつつ、この時期から堀尾・京極氏から城下町を引き継いだ松平氏が、城下町を改変していく志向をもっていたことが窺える。

近世 5 期：18 世紀前半～後半 (松平期中期)

近世 4 期以降に嵩上げ造成による新たな生活面が形成された遺構面が該当する。この遺構面に対

応する層序は MJ2 層で、調査地点によって山土の他に砂層や有機物層などが堆積する場所もある。松江の時期区分では松平期中期 (1700 ～ 1790 年代) の遺構面として捉えている。

この時期に構築される建物や付属施設の地下構造は掘立柱が減少し、礎石が主体となっている。共通して多く見られる遺構は、素掘り土坑と石積土坑である。特徴的なのは屋敷境で、それまでの素掘り溝の屋敷境から石組の屋敷境に形態が変化することである。また、検出例は少ないが、18 世紀後半には屋敷地内に石積井戸と木枠井戸が構築されるようになる。屋敷地利用の姿は、この時期にはさらに活発になり、松江城下町遺跡では建物礎石・石積土坑・石組水路などに使用される石材からもそれが窺える。屋敷地で使用される石材は、17 世紀前半～中頃までは大海崎石が主体となっていたが、17 世紀後半から大海崎石に加えて島石が使用されるようになる。18 世紀なるとには大海崎石の減少が見られ、島石と川原石の使用が顕著に見られる。

近世６期：19 世紀前半～後半 (松平期後期)

近世 5 期以降に盛土造成による新たな生活面が形成された遺構面が該当する。この遺構面に対応する層序は MJ1 層である。松江の時期区分では松平期後期 (1800 ～ 1860 年代) の遺構面として捉えている。ただし、最も新しいこの時期の遺構面は、上層の撹乱層を取り除いた高さで設定した任意の遺構面であり、厳密には生活面ではない部分を遺構面としたものを含んでいる。

この時期に構築される建物や付属施設の地下構造は礎石が主体となっている。共通して多く見られる遺構は、素掘り土坑である。特徴的なのは大形廃棄土坑と転用廃棄土坑である。大形廃棄土坑は、明治時代の廃藩置県によって城下町の武家屋敷が取り壊された時に生じた廃材などを処分した土坑で、大量の瓦や陶磁器が出土している。転用廃棄土坑は、本来別の目的で構築された後、その構築物が廃棄土坑として転用されたものである。屋敷地内の空閑部分に、このような大規模なゴミ穴を掘るなどして一括処分されていた痕跡は、主に 19 世紀後半の遺構面で確認することができる。屋敷地で使用される石材は、19 世紀には島石の使用が増加し、これに加えて来待石の使用が見られるようになる。

第 2 項　松江城下町の建設と造成の特徴

城下町が平坦な平野部に建設される場合、城下町形成以前にはその近隣に海や川に面した港町が存在していた場合が多くある。これはその港町から遠隔地との水運を介した流通機能と、領国内の周辺地域へ繋がる道路が存在していたことに着目していたことによる。堀尾氏はそうした既存の流通拠点を城下町に取り込むことを行っており、松江を選んだ理由のひとつとして、中世から存在していた末次・中町・白潟の港湾集落の存在が大きかったことが考えられる。

松江城下町は宍道湖に面する流通に適した場所であるが、城下町形成以前には城が築かれる亀田山の周辺に低湿地が広がっており、近世初頭になっても深田や湿地帯が残っていた。松江を選択した堀尾氏は、狭隘な富田城下町を離れて宍道湖の周囲に広がる松江平野に移転するが、広い城下町空間を確保するためには、大規模な土木事業を施して低湿地を生活可能な土地へと造成する必要があった。

この時期の大名は、豊臣段階から城郭普請の手伝いや戦時における様々な土木事業に従事する機会

の中で、飛躍的にその技術が高まったと推定できる。松江城下町の建設を牽引した堀尾氏も、豊臣の家臣であった時期から様々な土木事業を手掛けており、松江城下町のような低湿地の開発も経験済みであったのだろう。こうした土木事業は松江城下町だけのことではなく、江戸や大坂をはじめとする多くの城下町で行われており、近世城下町の大きな特徴といえる。土木事業は、古来より国内各地の集落や都市で行われてきているが、中世末から近世初頭にかけての時期が最も活発であったと考えられる。その中で城下町建設は、都市の永続とそこに暮らす人々の平和な生活を導くために、それまでに獲得・蓄積してきた様々な土木技術を駆使した事業と理解できる。低湿地に築かれた城下町は自然環境を克服してきた歴史をもち、長期間にわたって都市としてあり続けた町では、盛土が幾層にも堆積している。松江城下町では初期造成以後も２～３回にわたって嵩上げ造成が施され、屋敷地の整地手法として島状整地を採用していることが明らかとなっている。松江城下町における島状整地は初期造成段階の 17 世紀初頭に限らず、これ以降にも見られる時期を問わない通例的な整地手法となっていたことが特徴的である。

松江城下町は成立以来、現在に至るまでそこに暮らす人々の生活に沿う形で拡大し、変容している。江戸時代の松江城下町の様子を伝える文献には、大雨や河川の氾濫等による洪水に幾度も見舞われていたことや、火災や地震などの災害に遭っていたことを示す記述が残されている。これらにその都度対処しながら復興を遂げてきたことによって松江城下町は継続してきたのである。規格性の高い松江城下町の町割りは、17 世紀初頭に堀尾氏が城下町を建設する際に設計されたもので、基本的な街区構造は江戸時代を通して大きな変化は見られず、現代までその姿をとどめている。

発掘調査では、堀尾氏が城下町を建設して以降、京極氏・松平氏と続いて幕末までの間、藩主の交代、あるいは度重なる災害などによって城下町の整備や改変を行い、少しずつ拡大していく様子を明らかにしてきた。そこから見えてきた松江城下町の基本的な構造と視覚的な姿は、江戸時代を通じて緩やかに変化を見せながらも、城下町はその変遷を伝えてきて今に残してくれたようである。

第３項　松江城下町遺跡の評価と今後の課題

以上、松江城下町遺跡の時期区分と年代に加えてその特徴について整理してきた。松江城下町遺跡は、17 世紀初頭～ 19 世紀後半までの間に様々な変化を見せながら、嵩上げ造成を繰り返して長期間にわたって城下町が継続していたことが判明した。今回提示した時期区分と年代は、あくまで現時点における松江城下町遺跡の遺構と遺物を位置付けるためのものであり、今後の調査の進展によっては資料の追加や補正が必要となる。以下では、松江城下町遺跡をめぐるいくつかの問題点の中から、今回の検討で新たに分かった点と遺跡の評価を変更した点を要約し、最後に今後の課題について触れることでまとめとしたい。

①新たに分かった点

［遺構］城下町の造成について、これまでに実施した城山北公園線沿線の発掘調査報告では、城下町を東西軸で断面的 (垂直位) に見た場合、自然堆積層が示す地形は西高東低といわれていた。今回、城山北公園線沿線における 14 地点の松江城下町遺跡の地層について MJ0 ～ 6 層に分類して比較検

討を行った (本章第 2 節)。この結果、初期造成土である MJ4 層は下位の自然堆積層である MJ5・6 層の傾斜をそのまま踏襲しており、城山北公園線の西から東へ向かって雛壇状の造成が行われていたようだ。これは母衣町の米子川 (外堀) や南田町の入り堀などの堀区画を利用するとともに、初期造成完了後の城下町の排水を考慮した結果と捉えることができる。

初期造成以後の造成土は MJ3 層が該当し、この時期の造成面は平坦化を指向していたように見える。城下町の街区や屋敷地の各所には石垣の護岸を伴う堀や石組水路が整備されており、このことは城下町の排水を集約する機能が備わったことを示唆しているのではないだろうか。さらに、これ以後に施された MJ2 層の造成面は凹凸面が顕在化しており、このことは城下町全体が一律に嵩上げ造成されたのではなく、各屋敷地単位での嵩上げ造成が行われた結果を示している可能性がある。現在の地表面は城山北公園線の東西約 900 m間で 50㎝の高低差しかなく、ほぼ平坦面となっている。

［遺物］佐賀県立九州陶磁文化館の大橋康二名誉顧問を招聘して陶磁器検討会を開催したことにより、松江城下町遺跡で出土する陶磁器の特徴が見えてきたものもある。この検討会では、これまで肥前系陶器として一括りにしていたものの中に、上野・高取系 (福岡) の陶器が含まれていることが分かった。時期は 17 世紀初頭～中頃に限られており、当該期の陶磁器の流通経路を考える上で重要な知見を得ることができた。また、在地系陶器としている布志名焼について、これまでは幕末～明治時代の陶器として一括りにされることが多かったが、18 世紀中頃～後半には松江城下町において流通していることが判明した。その開窯は 1750 年代といわれており、これを裏付ける結果となった。

②遺跡の評価を変更した点

今回の松江城下町遺跡の地層の検討では、これまでの調査で B 層として認識していたものを MJ1 ～ 3 層に細分したことが大きな変更点となっている (本章第 2 節)。これまで幕末～近代の遺構面については現代の撹乱で消失しているものと考えられていた (第 210 図地点⑫の土層堆積状況と考えられていた)。ところが、部分的ではあるが城山北公園線沿線のほぼ全ての遺跡で幕末の遺構面が遺存していることを確認した。この遺構面の特定により、当該期の陶磁器組成を提示することが可能となった（本章第 3 節第 3 項)。

また、今回の検討では近代の盛土層 (MJ1 層) を確認できたことも大きな成果である。そして、山土造成土 (MJ2 層) については、造成が施される時期は異なるが松江歴史館 (殿町 287・279 外) の北屋敷第 4 遺構面の初期造成土として使用されている山土 (黄褐色土) と土質が類似したものであり、その供給地が注目される。

③今後の課題

［遺構］本章第 5 節第 2 項で区画境大溝 (素掘りの大溝) の考察を行った。この区画境大溝については底部に自然堆積層が薄く堆積するのみで、残りは人為的に一気に埋め戻されている。単に排水のための溝と考えるにはその存続期間が短く、近年では土取りのための遺構とする見解もある。今回は考察することはできなかったが、今後は大溝の底部の標高を確認していくことで「底部に一定の傾斜があり、規格的に掘られたものであれば大溝」、「底部が凸凹となり、溝として機能をなさないのであれば土取穴」ということが見えてくる可能性があることから、今後の調査に期待したい。

そして、建物の上屋構造については詳細な検討をしていないのが実状である。城山北公園線の松江城下町遺跡では調査範囲が狭小な場所が多く、建物跡の検出例が少ないことも要因のひとつではあるが、柱穴や礎石の配置は上屋構造と密接な関わりをもつことから、今後の検討課題としたい。

また、城山北公園線の調査では屋敷地内の表口や側面に近い部分を主に調査対象としている遺跡が多いため、屋敷地内の建物部分や裏手にあたる場所の状況は、まだ解決を見ない遺跡が多数存在している。屋敷地内の状況は各屋敷地において独自性をもって形態が変化していくことが想定されることから、その中で共通して見られる遺構や遺構面を把握することが重要となろう。今後、藩施設・町人地･寺社地の調査が進展した場合には､これまでに蓄積した武家地の資料と併せて比較することによって、土地利用の状況や階層性の実態について解明されていくことが望まれる。

［遺物］遺物については今回の整理・検討作業の結果、陶磁器組成の中でいくつかの課題が見えてきた。松江城下町遺跡で出土する貿易陶磁器と国産陶磁器の組成は、大阪・兵庫・岡山・広島・徳島などの西日本各地における近世城下町の陶磁器組成と比べて、大枠で捉えた動向は類似している。しかし、細分した組成の中では動向に変化が見られる。その要因として、大都市遺跡と地方都市遺跡での需要と消費の関係、あるいは流通経路の違いによる供給の時期差が生じていることが考えられる。

特に陶磁器の変遷や共伴関係については、層位的に出土した陶磁器の変化を明らかにするため、地層に実年代を比定するなどの詳細な検討を要する。17 世紀初頭～ 19 世紀後半までを対象とした「松江城下町遺跡における陶磁器編年」の確立は焦眉の急を要する課題となっており、時期区分を細分するためには一括資料から抽出された資料だけを見て判断することは困難であり、組成を含めた検討が不可欠な作業となる。さらに目を転じてみると、近世の社会階層と陶磁器の受容層の関係や陶磁器の流通ルートの背景は各消費地遺跡で異なっていることが考えられるため、松江城下町ではどのような状況を示すのか広域的な視点で検討を行うことで地域性や特徴が見出せるのではないだろうか。

また、19 世紀前半～後半に見られる肥前系磁器や瀬戸磁器 (新製焼) の中には、当然在地産の磁器である意東焼が含まれていると考えるべきだが、この時期の肥前系磁器と比べてその作陶手法や器形が似通っていることから判別が難しく、今回は肥前系磁器として一括りとした。意東焼の創業は天保年間 (1830 ～ 1844) 年に限られることから、産地を特定することで遺構面の評価にも影響する可能性があり、その分類を今後の課題としておく。なお、陶磁器の消長を提示するために整理作業を進めていく中で、土師器皿 (京都系・在地系)・焙烙・焼塩壺の検討を行ったが、ページの都合上割愛した。今後、機会があればこれらの成果についても紹介していきたい。

以上、松江城下町遺跡の評価や課題を簡潔に述べてきたが、城山北公園線都市計画街路事業に伴う発掘調査では、城下町形成以前の状況・城下町建設当初の状況・城下町成立以後の建物の建て替えや嵩上げ造成がなされていたことなど、文献史料には残っていない当時の姿を明らかにしてきた。

こうした成果は発掘調査だけで明らかになってきたものではなく、地質学や科学分析などの自然科学分野や、文献史学や建築史学などの人文科学分野による調査・研究によって得られた成果によるところも大きい。今後は松江城下町遺跡を様々な分野の視点から見直し、そして共同研究を継続的に進めることで新たな理解へと繋がり、より豊かな松江の城下町像が描けるものと確信する。

註

(36) 内山下は、一般に「城郭内」の意味で使われている。松江城下町では殿町・母衣町・内中原町が該当する。
(37) 城山北公園線における鉤型路は、殿町の南北道路と南田町の東西道路の 2 箇所がある。南田町の東西方向の鉤型路について、この道路の食い違いは、東西方向の堀を基軸とした道路の敷設に起因されるものと考えた。
(38) 註 19 と同じ (P174)。
(39) 松江城下町遺跡 (殿町 344 外) の発掘調査成果の詳細は、『市 154』「城山 2」第 3 ブロックを参照。
(40) 松江城下町遺跡 (母衣町 180-28・29) の発掘調査成果の詳細は、『市 156』「城山 3」第 7 ブロックを参照。
(41) 松江城下町遺跡 (南田町 134-11 外) の発掘調査成果の詳細は、『市 157』「城山 4」第 16 ブロック (東側) を参照。
(42)15 世紀後半の中国白磁皿は、松江城下町遺跡 (南田町 132 外) の旧地表面中から出土している。遺物の詳細については、『市 163』「城山 5」第 16 ブロックに掲載。
(43) 当地に大橋茂右衛門の屋敷地が配置される時期は、絵図や文献から 1638 年以降の松平期からということが分かっており、この年代を根拠としている。堀尾期絵図では、大橋家の屋敷地となる以前には空白地となっていた場所で、発掘調査成果から畠地として利用されていたことが判明した。
(44) 大橋家与力屋敷では、第 3 遺構面の掘立柱建物を構築して機能していた時期に比定され、この遺構面の陶磁器組成を見ると 1638 年以降から肥前系磁器が入ってきている。現段階では、これを肥前系磁器が入る時期の年代根拠としている。
(45) 村上勇　1986「寛永 21 年銘木札を伴う陶磁」『貿易陶磁研究　№6』日本貿易陶磁研究会
(46) 松江城下町遺跡では、地下室の内部に石段を備えているものもあり、地下式の穴蔵と考えられている。地下室は、全国各地の近世城下町遺跡で見つかっており、建物の床下に構築されている場合もある。
(47) 三浦正幸　2009「第 4 章　城下町編」『日本の城　歴史・建築・土木・城下町』東京美術 155-163 頁から引用。
(48) 森毅　1993「豊臣期から江戸期にかけての船場の考古学調査」『ヒストリア　第 139 号』大阪歴史学会
(49) 西島太郎　2010『松江市ふるさと文庫 8　京極忠高の出雲国・松江』松江市教育委員会 71-85 頁から引用。

参考文献

研究資料・個人論文等

大手前通りを調べる会　2004『大手前通りの歴史を調べる会調査結果報告書』
関西近世考古学研究会　2010『関西近世考古学研究 18 －消費地からみた国産陶磁器の出現と展開－』
関西近世考古学研究会　2014『関西近世考古学研究 22 －中近世都市の堀状遺構について－』
関西近世考古学研究会　2016『関西近世考古学研究 24 －歴史資料としての近世貿易陶磁－』
山陰考古学研究会　2014『山陰の近世城郭と城下町～遺跡調査と遺物組成から～』第 42 回山陰考古学研究集会資料集
松江市鹿島歴史民俗資料館　2007『松江城下を掘る』特別展図録
松江市史編集委員会　2014『松江市史　史料編 11　絵図・地図』
松尾信裕　2005「近世大坂の発掘調査と地域史研究」『日本歴史　第 690 号』吉川弘文館
松尾信裕　2017「近世初頭の都市における町人地の形態と内部構造」『国立歴史民俗博物館研究報告　第 204 集』
森毅　1992「十六・十七世紀における陶磁器の様相とその流通」『ヒストリア　第 149 号』大阪歴史学会

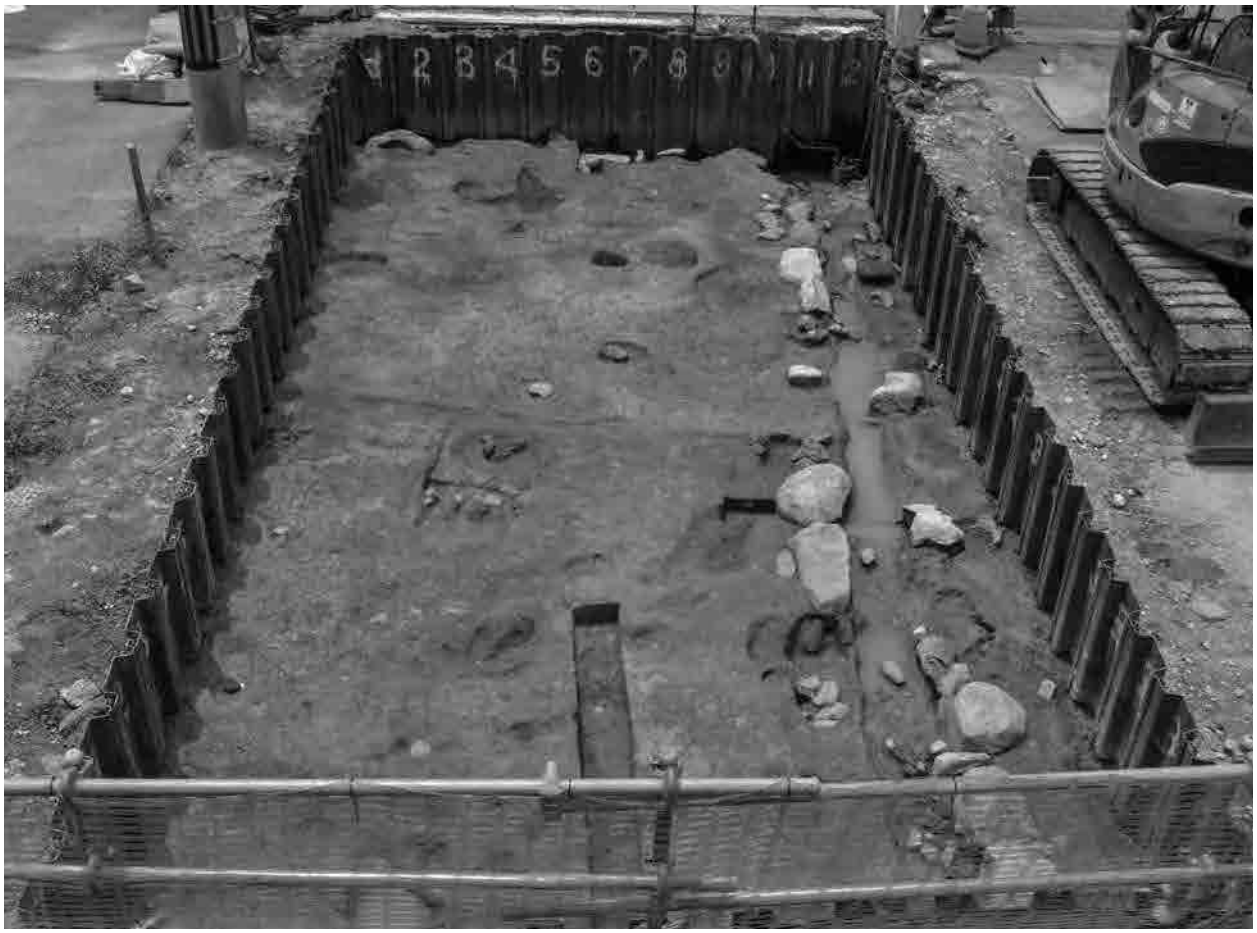
発掘調査報告書

落合昭久ほか　2011『松江歴史館整備事業に伴う松江城下町遺跡（殿町 287 番地）（殿町 279 番地外）発掘調査報告書』松江市文化財調査報告書第 139 集　松江市教育委員会・松江市教育文化振興事業団
小山泰生　2013『松江赤十字病院別棟建設に伴う松江城下町遺跡（母衣町 127-2・128・198-1）発掘調査報告書』松江市文化財調査報告書第 153 集　松江市教育委員会・松江市教育文化振興事業団
小山泰生　2014『城山北公園線都市計画街路事業に伴う松江城下町遺跡発掘調査報告書 4 』松江市文化財調査報告書第 157 集　松江市教育委員会・松江市スポーツ振興財団
小山泰生ほか　2015『城山北公園線都市計画街路事業に伴う松江城下町遺跡発掘調査報告書 5』松江市文化財調査報告書第 163 集　松江市教育委員会・松江市スポーツ振興財団
小山泰生　2015『城山北公園線都市計画街路事業に伴う松江城下町遺跡発掘調査報告書 7』松江市文化財調査報告書第 171 集　松江市教育委員会・松江市スポーツ振興財団
島根県教育委員会　1984『冨田川－飯梨川河川改修に伴う富田川河床遺跡発掘調査報告 (4) －』
園山薫　2013『城山北公園線都市計画街路事業に伴う松江城下町遺跡発掘調査報告書２』松江市文化財調査報告書第 154 集　松江市教育委員会・松江市教育文化振興事業団
園山薫ほか　2014『城山北公園線都市計画街路事業に伴う松江城下町遺跡発掘調査報告書３』松江市文化財調査報告書第 156 集　松江市教育委員会・松江市スポーツ振興財団
徳永桃代ほか　2015『城山北公園線都市計画街路事業に伴う松江城下町遺跡発掘調査報告書 6』松江市文化財調査報告書第 167 集　松江市教育委員会・松江市スポーツ振興財団
柚原恒平　2012『城山北公園線都市計画街路事業に伴う松江城下町遺跡発掘調査報告書１』松江市文化財調査報告書第 148 集　松江市教育委員会・松江市教育文化振興事業団

写　真　図　版

※遺物実測図との対応は図中に示した。(例：図版 31　13-1 は第 13 図 1 を表す)

1　調査地遠景(南東から)



2　第1遺構面　完掘後(北から)

図版2　第1ブロック(1-3区)②

1　第2遺構面　完掘後(北から)

2　木枠井戸SE01　検出状況(南西から)

3　SE01　段下げ状況(南東から)

4　SE01　断面(北から)

5　SE01　掘り方埋土(北東から)

1　第3遺構面　完掘後(北から)

2　石列SS01(北から)

3　SS01　塀基礎部分(西から)

4　素掘りの大溝SD02　断面(北西から)

図版4　第13ブロック(13-2区)①

1　調査地調査前全景(南西から)

2　13-2区基本土層断面(南西から)

1　第1遺構面　完掘後(北東から)13-2a区

2　石積井戸SE01(南西から)

3　溝SD02(北から)

4　土坑SK01　完掘状況(南西から)

5　山土造成土中出土遺物(第40図-2)

図版6　第13ブロック(13-2区)③

1　第2遺構面　完掘後(北東から)13-2a区

2　溝SD03(北東から)

1　石積土坑SK09　完掘状況(西から)

2　SK09上部の竹囲い検出状況(北東から)

3　土坑SK14　完掘状況(東から)

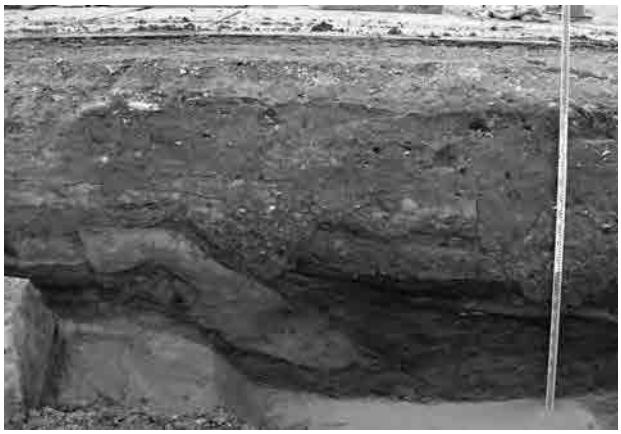
4　第2遺構面下位の砂層の落ち込み(南から)

図版8　第13ブロック(13-2区)⑤

1　第3遺構面　完掘後(北東から)13-2a区

2　SX01土盛りの痕跡(北から)

3　建物跡SB01(北西から)



4　素掘りの大溝SD04　西側断面(南から)

5　SD04　東側断面(南から)

1　第4遺構面　完掘後(北東から)13-2a区

2　素掘りの大溝SD05　完掘状況(北東から)

3　SD05　埋土断面(南東から)

4　大溝埋め戻しの作業単位(南から)

図版10　第14ブロック(14-1区)①

1　調査地調査前全景(西から)

2　14-1区基本土層断面(南東から)

1　第1遺構面　完掘後(南西から)

2　石列SS01(西から)

3　土坑SK01　掘り下げ状況(南から)

4　SK01　完掘状況(南東から)

図版12　第14ブロック(14-1区)③

1　第2遺構面　完掘後(南西から)

2　SG01　昇降部分(南から)

3　池SG01　完掘状況(南から)

4　土坑SK02　完掘状況(南東から)

5　砂層堆積状況(南から)

1　第3遺構面　完掘後(東から)

2　土坑SK03　完掘状況(北から)

3　土坑SK04　完掘状況(西から)

4　第4遺構面～自然堆積層　断面(西から)

図版14　第16ブロック(16-5区)①

1　調査地調査前全景(南から)

2　16-5区基本土層断面(西から)

1　第1遺構面　完掘後(南東から)西区

2　溝SD01・02(南から)

3　埋桶土坑SK01(東から)

4　埋桶土坑SK02(東から)

5　土坑SK03　完掘状況(西から)

図版16　第16ブロック(16-5区)③

1　第2遺構面　完掘後(南東から)西区

2　土坑SK04　完掘状況(北東から)

3　土坑SK05　完掘状況(北から)

4　柱穴(柱・根石)

5　柱穴(柱の抜き取り痕)

1　第3遺構面　完掘後(南東から)西区

2　掘立柱建物跡SB01(北から)

図版18　第16ブロック(16-5区)⑤

1　柱穴SP01(西から)

2　柱穴SP03(礎盤石)

3　柱穴SP04(礎盤石)

4　土坑SK06　完掘状況(南から)

5　第4遺構面　完掘後(南東から)西区

1　調査地調査前全景(西から)

2　16-6区基本土層断面(南西から)

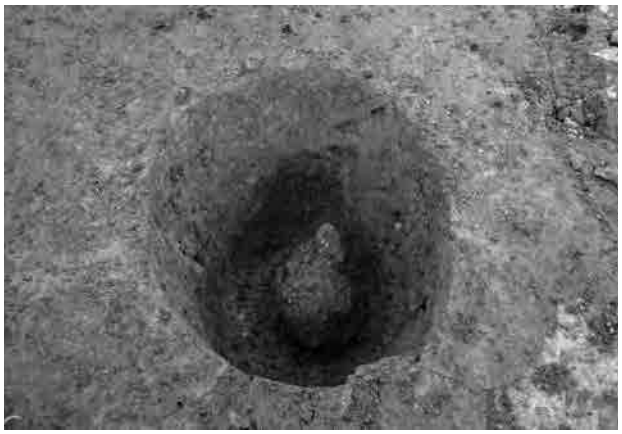
図版20　第16ブロック(16-6区)②

1　島状盛土部分の土層断面(西から)

2　屋敷境SD03・04付近北壁土層断面(南から)

3　第1遺構面　完掘後(北西から)西区

4　鉄球埋納遺構SP01　半截(南から)



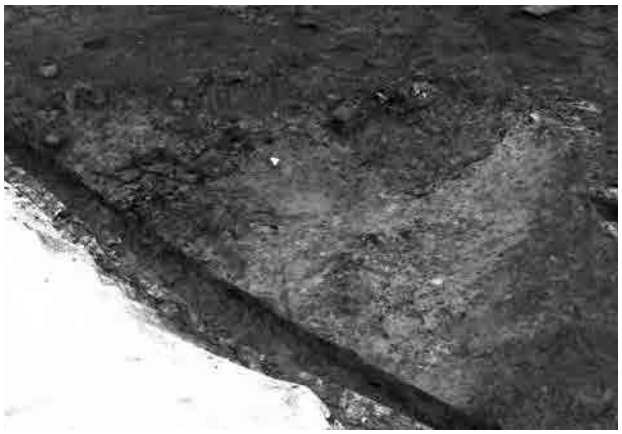
5　SP01鉄球出土状況

1　第2遺構面　完掘後(北西から)西区

2　石積井戸SE01(北から)

3　土坑SK01　完掘状況(西から)

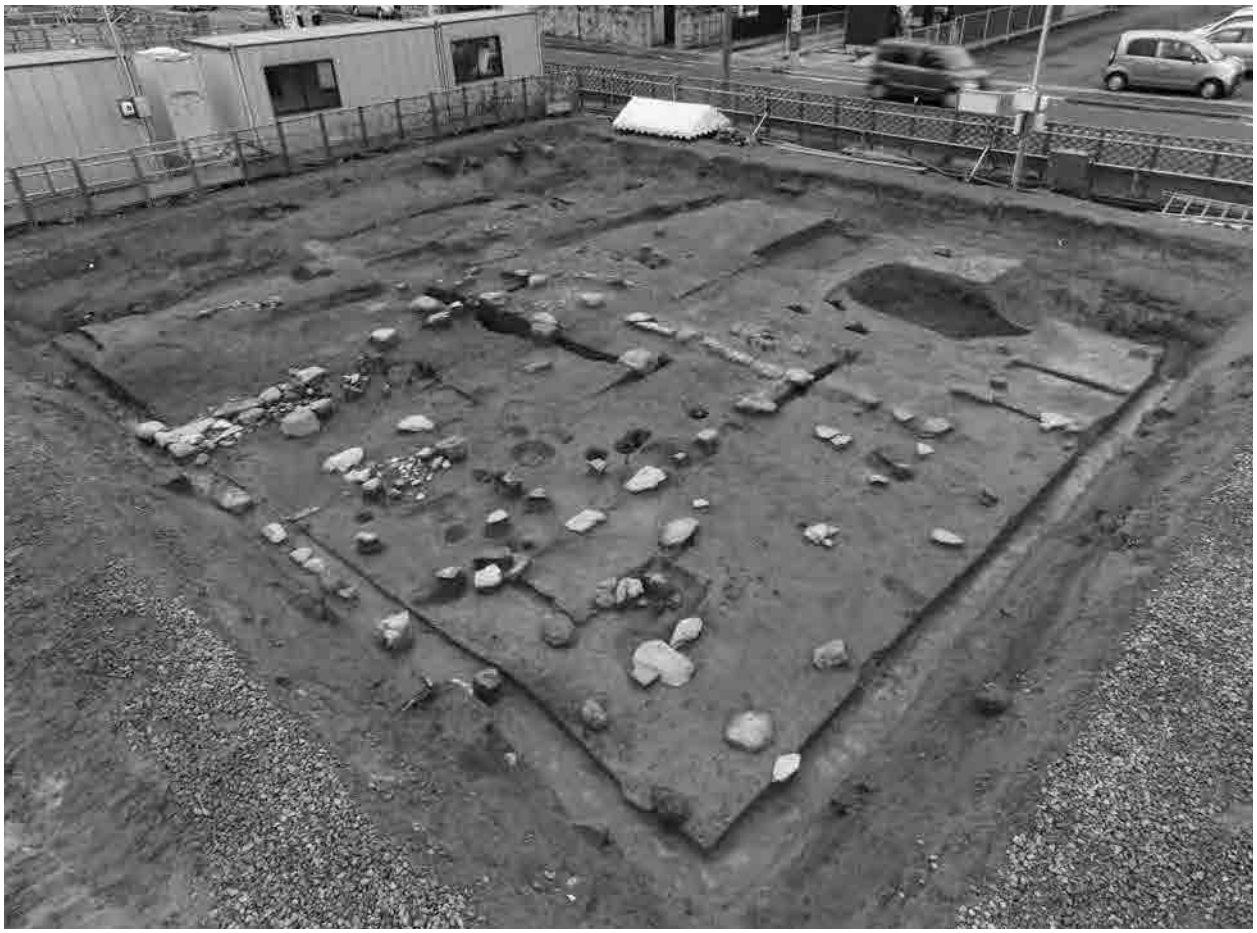
4　土坑SK02　完掘状況(西から)



5　土坑SK03　完掘状況(北西から)

図版22　第16ブロック(16-6区)④

1　第3-1遺構面　検出状況(南東から)西区



2　第3-1遺構面　完掘後(南東から)西区

1　礎石建物跡SB01(新)　建て替え後(南から)

2　炭化層に含まれる建築部材(東から)

3　表口部分の三和土断面(西から)

4　表口周辺の礫敷と石列(北西から)

5　竹木舞　検出状況(南東から)

図版24　第16ブロック(16-6区)⑥

1　曲物埋納遺構SX01(西から)(右:第139図-1、左:第140図-1)

2　曲物埋納遺構SX02(北から)(第142図-1～6)

1　溝SD01(東から)

2　溝SD02(新)　石組検出状況(南から)

3　土坑SK04　完掘状況(南西から)

4　土坑SK05　完掘状況(南から)

5　土坑SK06　完掘状況(南東から)

6　土坑SK07・08　完掘状況(東から)

図版26　第16ブロック(16-6区)⑧

1　第3-2遺構面　完掘後(南西から)西区:右側の高まり部分が島状整地

2　第3-2遺構面　完掘後(南西から)東区

1　礎石建物跡SB01(古)　建て替え前(南から)

2　SB01(古)(北から)

図版28　第16ブロック(16-6区)⑩

1　掘立柱建物跡SB02(北から)

2　柱穴SP05(東から)

3　祭祀遺構SX03(西から)

4　第3-2遺構面造成土中の葦敷(北から)

5　溝SD02(古)(南から)

6　溝SD03・04(北から)

1　第4遺構面　完掘後(南東から)東区:畠跡SN01

2　第4遺構面　完掘後(南東から)西区

図版30　第16ブロック(16-6区)⑫

1　第5遺構面　完掘後(北東から)西区

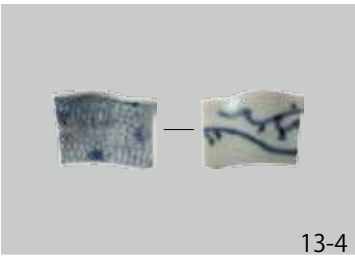
2　第6遺構面　完掘後(北東から)西区

第1ブロック(1-3区)　図版31

13-1

13-2

13-3


13-4

第1遺構面 SD01 出土遺物

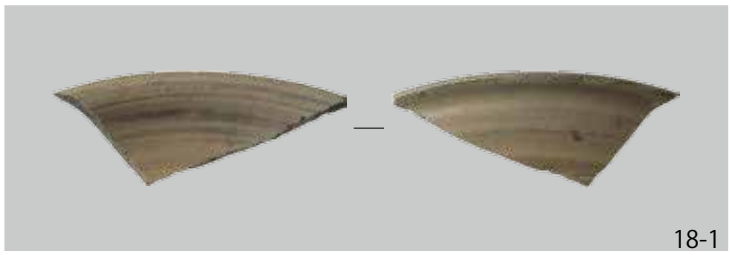
17-1

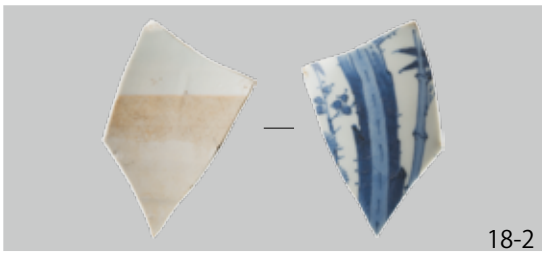
17-2

17-3

17-4

第2遺構面 SE01 出土遺物


18-1


18-2

18-3

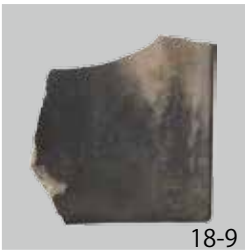
18-4

18-5

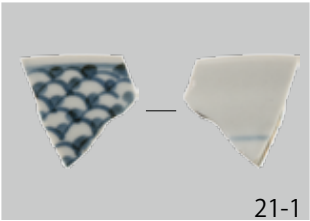
18-6

18-7

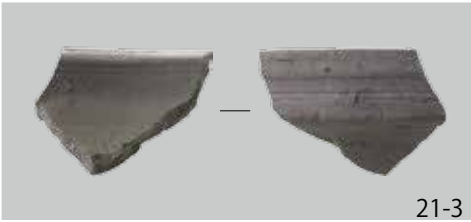
18-8


18-9

第2遺構面 遺構外出土遺物


21-1

21-2


21-3

第3遺構面 遺構外出土遺物

図版32　第13ブロック(13-2区)

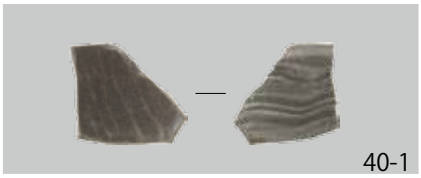
第13ブロック(13-2区)

36-1

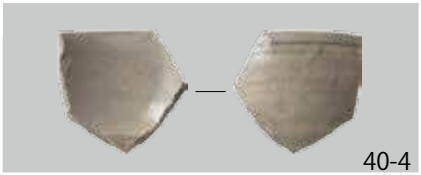
36-2

36-3

第1遺構面 SE01出土遺物


40-1

40-3

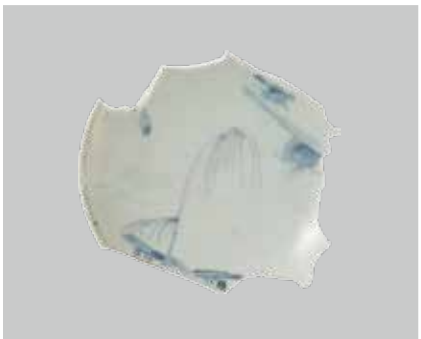

40-4

40-2

40-5

第1遺構面 遺構外出土遺物

39-1

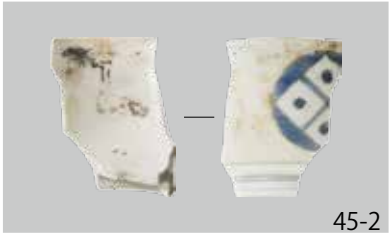

39-2

第1遺構面 SK01出土遺物

43-1

第2遺構面 SD03出土遺物

45-1


45-2

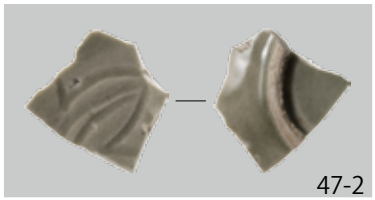
45-3

45-4

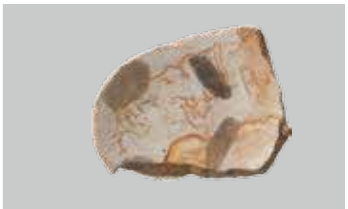
45-5　45-6　45-7

45-8

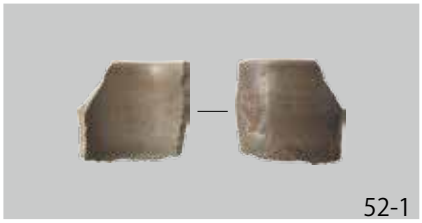
第2遺構面 SK09出土遺物

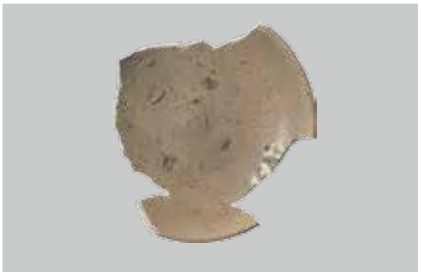


第2遺構面 SK14出土遺物



砂層出土遺物

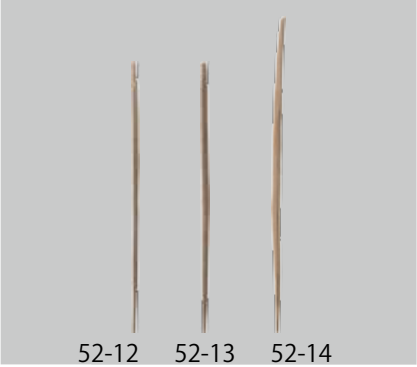




第3遺構面 SD04出土遺物(1)

図版34　第13ブロック(13-2区)・第14ブロック(14-1区)

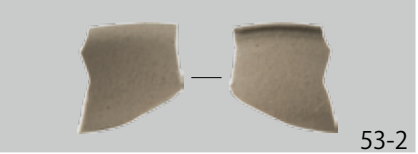
52-11


52-12　52-13　52-14

52-15

第3遺構面 SD04出土遺物(2)

53-1


53-2

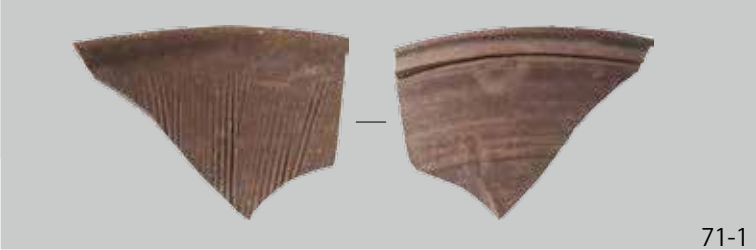
53-3

第3遺構面 遺構外出土遺物

第14ブロック(14-1区)

70-6

70-7


71-1

70-2

70-3

70-5

70-1

70-4

71-2

71-3

71-4

71-5

第1遺構面 SK01出土遺物(1)

71-6

71-7

71-9

71-10

71-8

71-11

第1遺構面 SK01 出土遺物(2)

72-1

72-2

72-3

72-4

72-5

72-6

73-1

73-2

73-3

第1遺構面 遺構外出土遺物(1)

図版36　第14ブロック(14-1区)

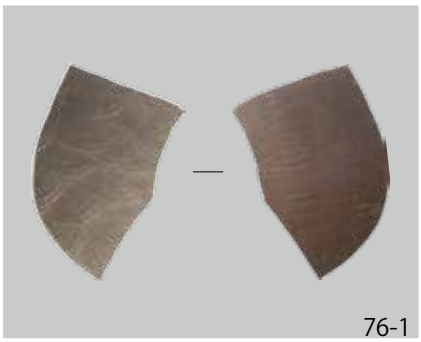
73-4

73-6

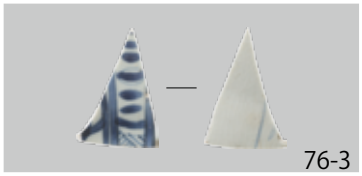
73-5

73-7

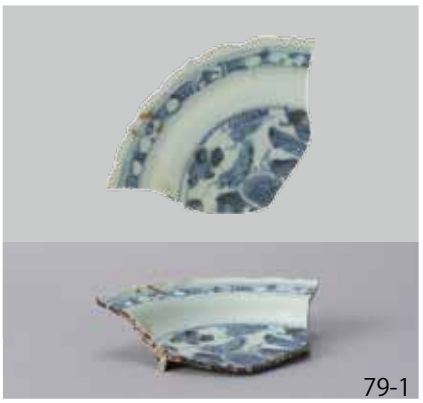
第1遺構面 遺構外出土遺物(2)

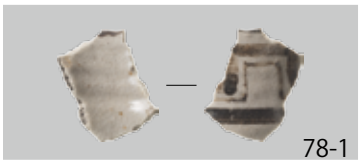

76-1

76-2


76-3

第2遺構面 SG01出土遺物


79-1


78-1

第2遺構面 SK02出土遺物

79-2

79-3

80-1

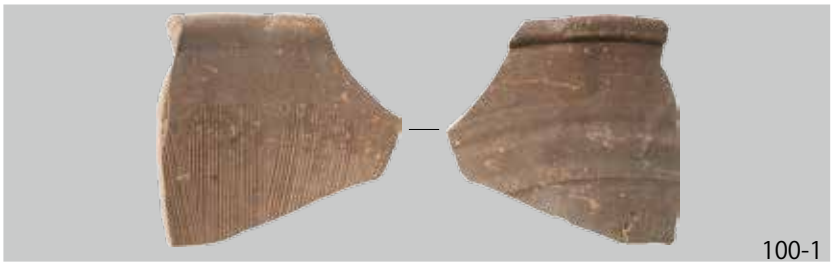
80-2

第2遺構面 遺構外出土遺物

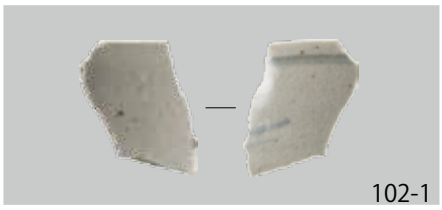
87-1

MJR378出土遺物

第16ブロック(16-5区)


100-1

第1遺構面 SK01出土遺物


102-1

102-2

102-3

第1遺構面 SK03出土遺物

106-1

第2遺構面 SK04出土遺物

108-1

第2遺構面 SK05出土遺物

103-1

103-2

103-3

103-4

第1遺構面 遺構外出土遺物

109-1

109-2

109-3

109-4

109-5

109-6

109-8

109-7

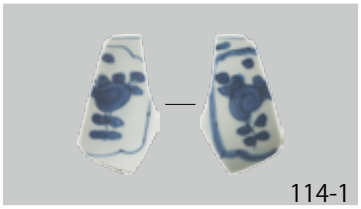
第2遺構面 遺構外出土遺物

図版38　第16ブロック(16-5区)・第16ブロック(16-6区)

113-1

113-2

113-4


114-1

113-3

113-5

第3遺構面 SK06出土遺物

114-3

114-2

114-4

第3遺構面 遺構外出土遺物

第16ブロック(16-6区)

127-1

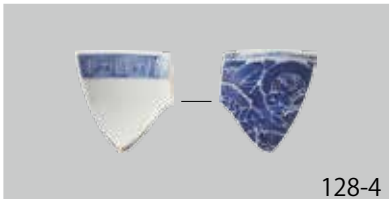
第1遺構面 SP01出土遺物

128-5

128-1

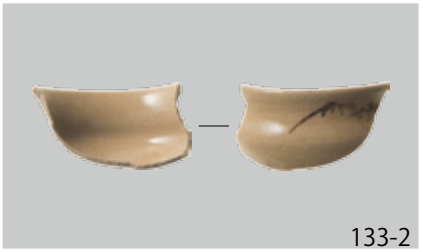
128-3

128-2


128-4

第1遺構面 遺構外出土遺物

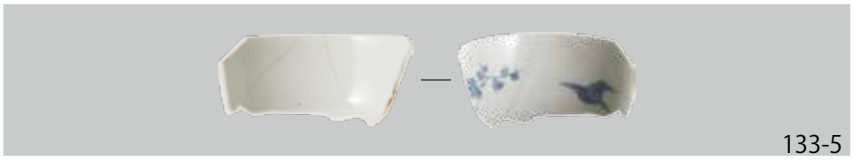
133-1


133-2

133-3

第2遺構面 SK03出土遺物(1)

133-4

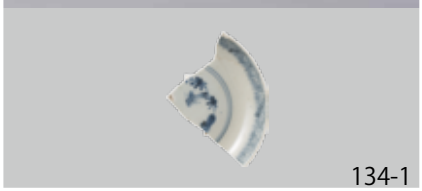

133-5

133-8

133-7

133-6

133-9


134-1

134-2

134-3

134-4

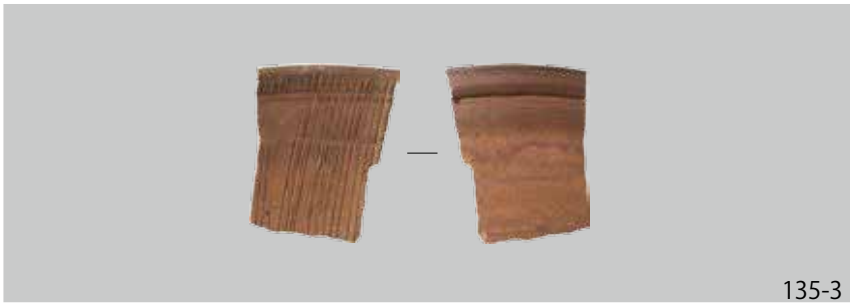
134-5

134-6

第2遺構面 SK03出土遺物(2)

135-1

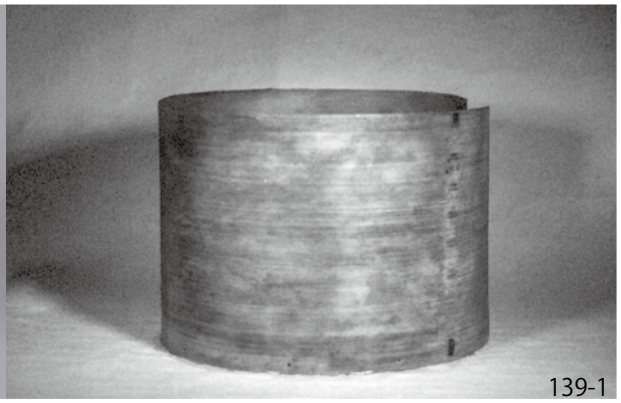
135-2


135-3

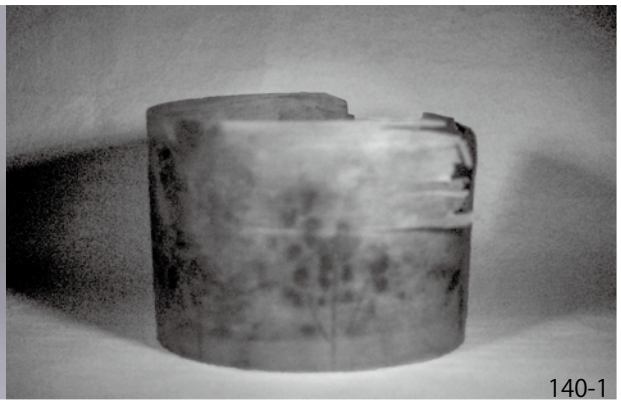
135-4

第2遺構面 遺構外出土遺物

図版40　第16ブロック(16-6区)



139-1



140-1

第3-1遺構面 SX01出土遺物

142-1

142-2　142-3　142-4

142-5

142-6

第3-1遺構面 SX02出土遺物

148-1

148-2

148-3

148-4

148-5

148-6

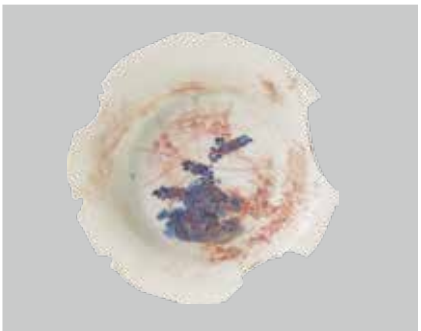
148-7

148-8

148-9

148-10

148-11



149-1

149-2

149-3

149-4

148-12

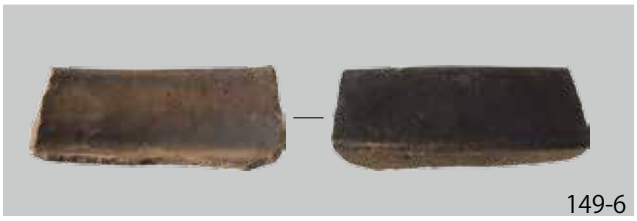
第3-1遺構面 SK04出土遺物(1)

図版42　第16ブロック(16-6区)

149-5

149-7

149-9


149-6

149-8

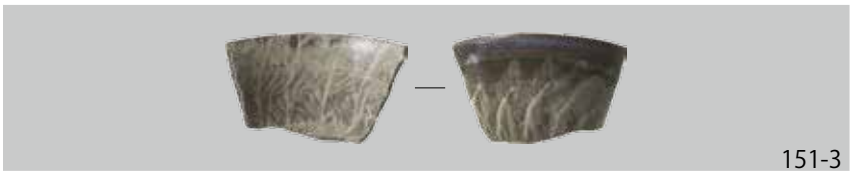
149-10

第3-1遺構面 SK04出土遺物(2)

151-1

151-2

151-4


151-3

151-5

152-3

152-1

152-2

第3-1遺構面 SK05出土遺物(1)

第3-1遺構面 SK05出土遺物(2)

第3-1遺構面 SK06出土遺物(1)

図版44　第16ブロック(16-6区)

155-5

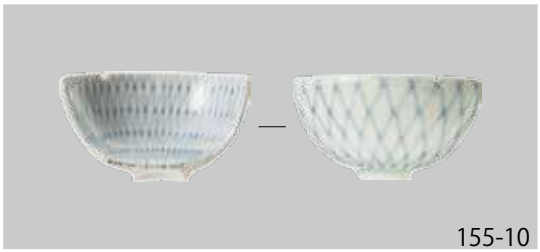
155-6

155-7

155-8

155-11

155-9

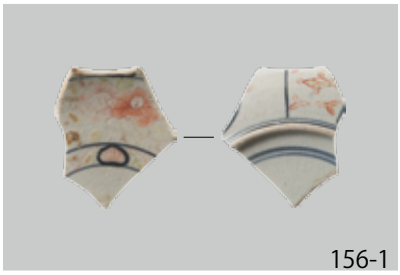

155-10

155-12

155-13

155-14

155-15


156-1

156-2

156-5

156-3

156-4

156-6

第3-1遺構面SK06出土遺物(2)

156-7

156-8

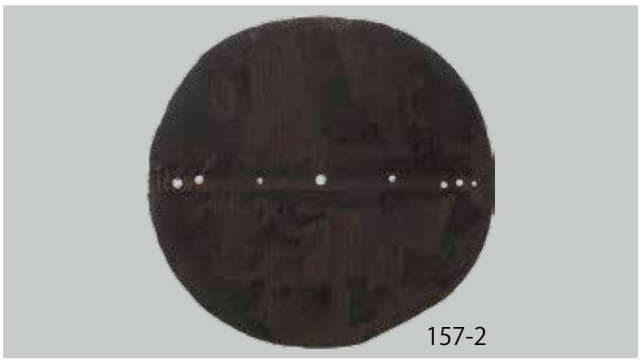
156-9

156-10

156-11

156-12

157-1


157-2

157-3　157-4

157-7

157-8

157-5　157-6

157-9

157-10

第3-1遺構面 SK06出土遺物(3)

図版46　第16ブロック(16-6区)

159-1

159-2

159-3

159-4

159-5

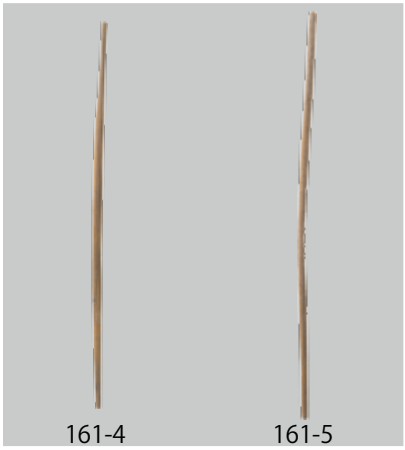
159-6

159-7

159-8

第3-1遺構面 SK07出土遺物

161-1


161-4 161-5

161-2

161-3

161-6

第3-1遺構面 SK08出土遺物

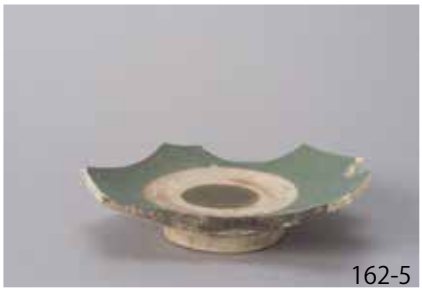
162-1

162-2

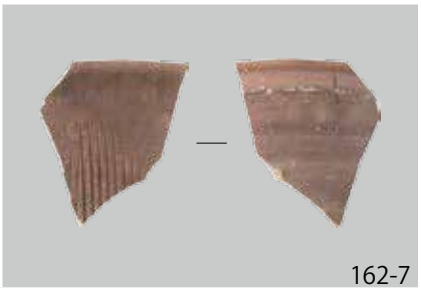
162-3

162-4

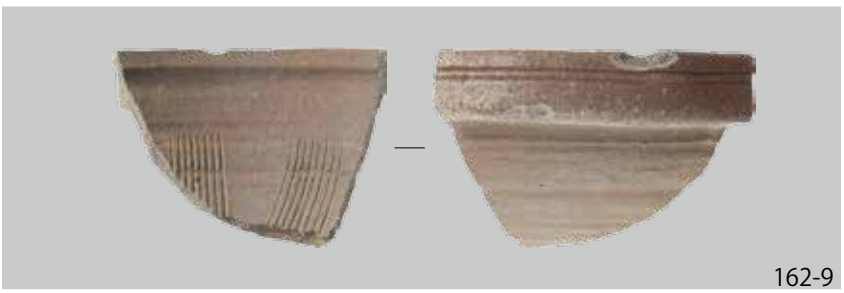
第3-1遺構面 遺構外出土遺物(1)

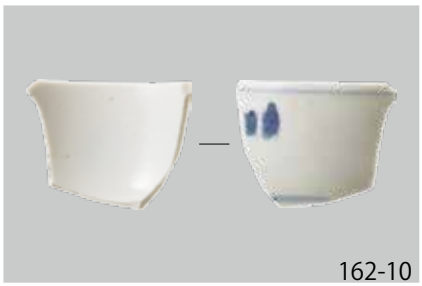

162-5

162-6


162-7

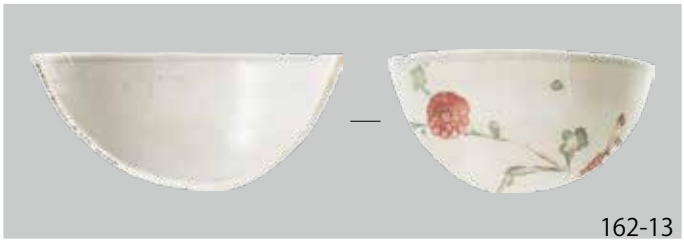
162-8


162-9


162-10

162-11

162-12


162-13

162-14

163-1

163-2

163-3

163-4

163-5

163-6

第3-1遺構面 遺構外出土遺物(2)

図版48　第16ブロック(16-6区)

163-7

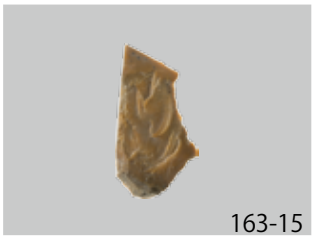
163-8

163-9

163-10

163-11

163-13


163-15

163-12

163-14

163-16

163-17

第3-1遺構面 遺構外出土遺物(3)

171-1

171-2

171-3

171-4

171-5

171-6

171-7

第3-2遺構面 SD04出土遺物(1)

171-8

172-1

172-2

172-3

172-4

172-5

172-6

173-1

173-3

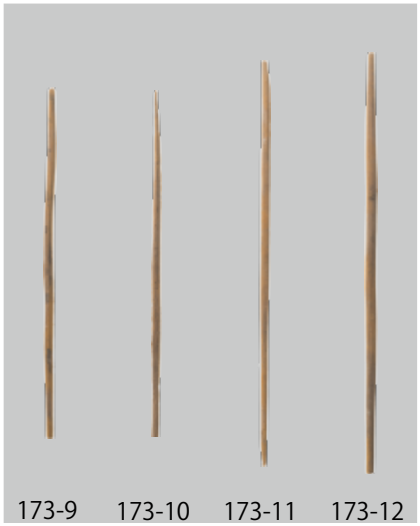
173-5

173-2

173-4

173-6

173-7
173-8


173-9　173-10　173-11　173-12

173-13

第3-2遺構面 SD04出土遺物(2)

図版50　第16ブロック(16-6区)

176-1

176-3

176-4

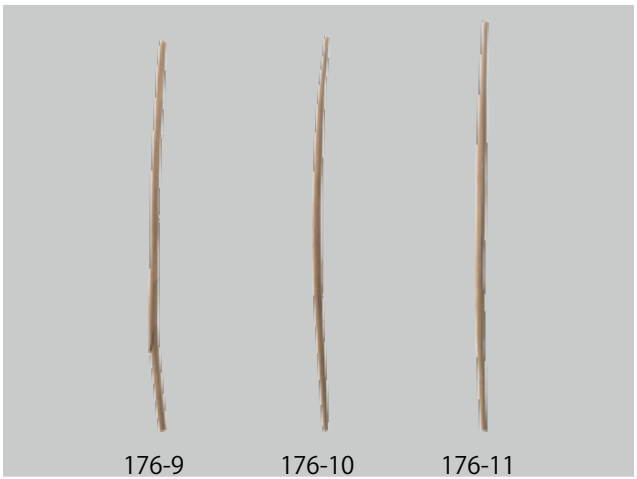
176-2

176-5

176-6

176-8

176-7


176-9　176-10　176-11

176-12

第3-2遺構面 SK09出土遺物

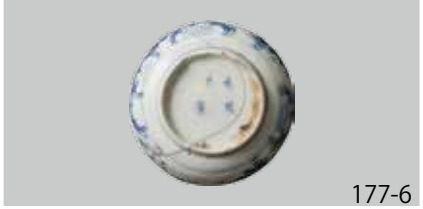
177-1

177-2

177-3

177-4

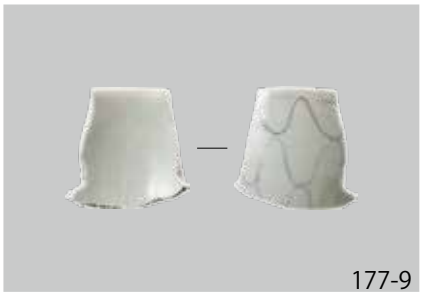
177-5

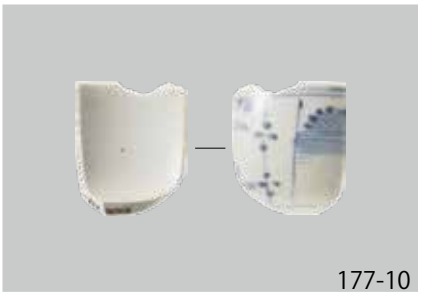

177-6

177-7

第3-2遺構面 遺構外出土遺物(1)

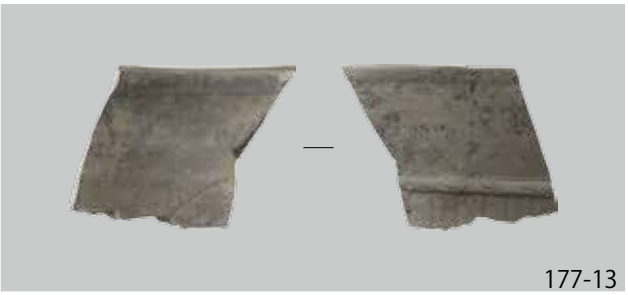
177-8


177-9


177-10

177-11

177-12


177-13

177-14

177-15

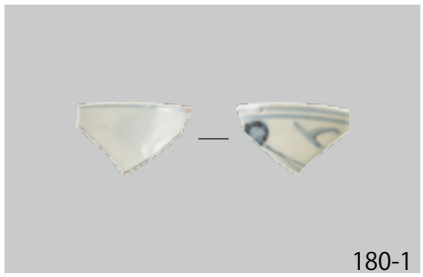
177-16

177-17

177-18

177-19

第3-2遺構面 遺構外出土遺物(2)


180-1

180-2

180-3

180-4

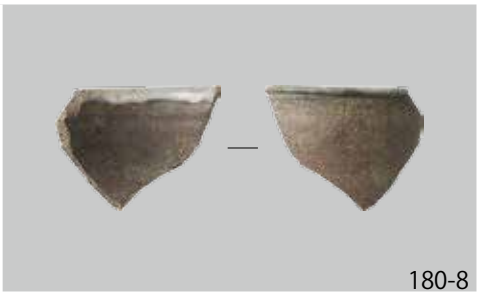
180-5

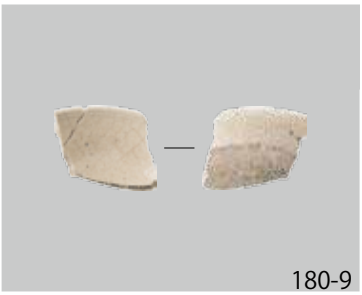
180-6

第4遺構面 SN01出土遺物(1)

図版52　第16ブロック(16-6区)

180-7


180-8

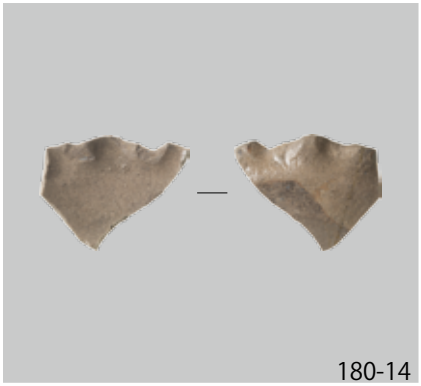

180-9

180-10

180-11

180-12

180-13


180-14

180-15

180-16

180-17

180-18

180-19

181-1

181-2

181-3

第4遺構面 SN01 出土遺物(2)

181-4

181-5

181-6

181-7

181-8

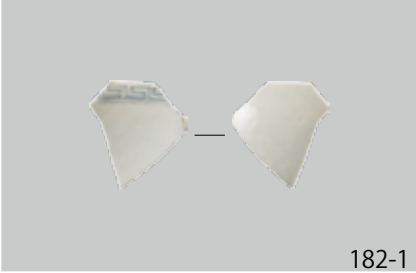
181-9

181-10

181-11

181-12

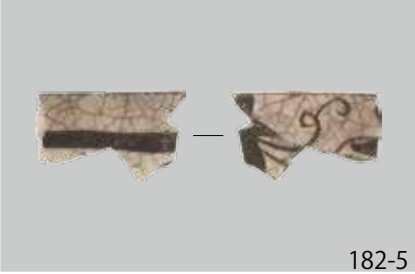
第4遺構面 SN01 出土遺物(3)


182-1

182-2

182-3

182-4


182-5

182-6

183-1

183-2

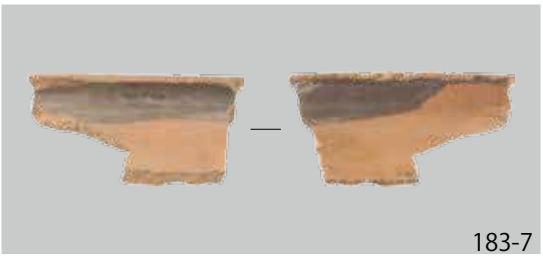
183-3

第4遺構面 遺構外出土遺物(1)

図版54　第16ブロック(16-6区)

183-4

183-5


183-7

183-6

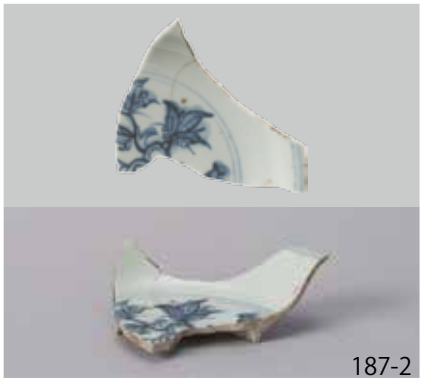
183-8

183-9

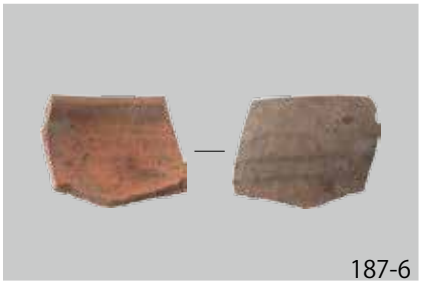
183-10

第4遺構面 遺構外出土遺物(2)

187-1


187-2

187-4


187-6

187-3

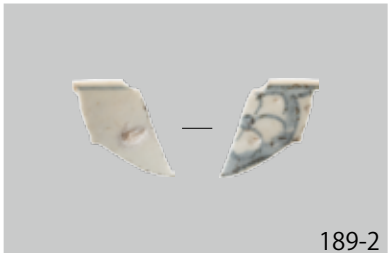
187-5

188-1

188-2

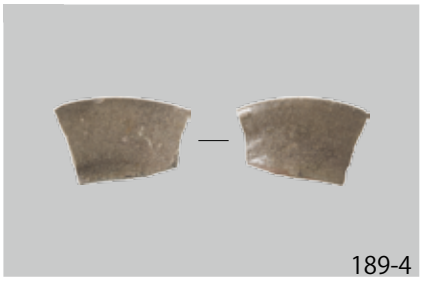
第5遺構面 SK11出土遺物

189-1


189-2

189-3

第5遺構面 遺構外出土遺物(1)


189-4

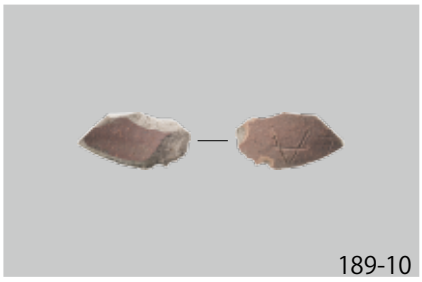
189-5

189-6

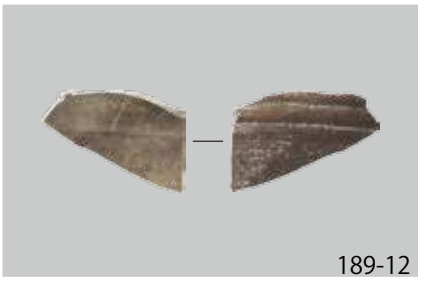
189-7

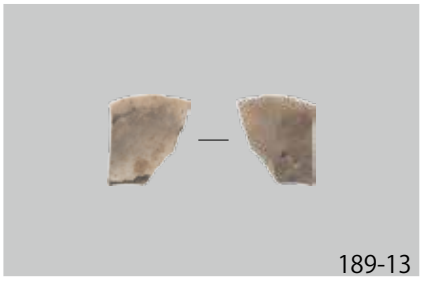
189-8

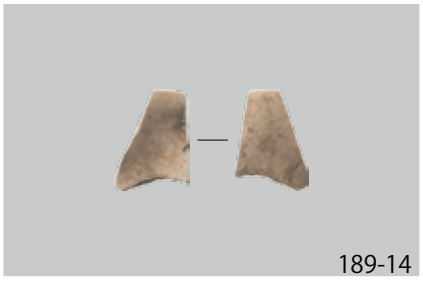
189-9


189-10

189-11


189-12


189-13


189-14

189-15

189-16

189-17

第5遺構面 遺構外出土遺物(2)

図版56　動物遺存体(1)

1
アワビ科
2
テングニシ
3
サザエ
4
イタヤガイ
5
イタヤガイ
6
イワガキ
8
ハマグリ
10
サルボウガイ
11
サルボウガイ
7
イワガキ
12
ヤマトシジミ
13
ヤマトシジミ
9
ハマグリ
15
エイ類
椎骨
16
エイ類
椎骨
18
ブリ属
椎骨
19
ブリ属
歯骨
14
サメ類
椎骨
17
フナ属
主鰓蓋骨
20
コチ科
歯骨
21
フグ科
歯骨

22
マダイ
上後頭骨
23
マダイ
前頭骨
24
マダイ亜科
主上顎骨
25
マダイ亜科
主鰓蓋骨
26
マダイ亜科
歯骨
27
マダイ亜科
前上顎骨
28
マダイ亜科
擬鎖骨
29
マダイ亜科
前鰓蓋骨
30
スズキ属
主上顎骨
31
スズキ属
歯骨
32
スズキ
主鰓蓋骨
38
スッポン
中腹骨板
39
スッポン
肩甲骨・前烏口骨
33
スズキ属
椎骨
34
コイ
下咽頭骨
35
タラ科
主上顎骨
36
ボラ科
主鰓蓋骨
37
ベラ科(コブダイ)
前上顎骨
40
カモ科
手根中手骨
41
カモ科
上腕骨
42
サギ科
足根中足骨
43
キジ科
脛足根骨
44
キジ科
大腿骨
45
ニワトリ
上腕骨
46
ニワトリ
中根中足骨

図版58　動物遺存体(3)

47
イノシシ類
下顎骨
48
イノシシ類
上顎骨
49
イノシシ類
脛骨
50
イノシシ類
肩甲骨
51
イノシシ類
大腿骨
52
イノシシ類
橈骨
53
イノシシ類
尺骨
54
ニホンジカ
肩甲骨
55
ニホンジカ
大腿骨
56
ニホンジカ
橈骨・尺骨
57
ニホンジカ
橈骨
58
ニホンジカ
中手骨

59
イヌ
頭蓋骨
60
イヌ
下顎骨
61
イヌ
脛骨
62
イヌ
橈骨
63
イヌ
尺骨
64
イヌ
肩甲骨
65
ネコ
上腕骨
66
オットセイ
上腕骨
68
ウシ
角(切断・加工痕あり)
70
ウシ
脛骨(切断痕あり)
67
タヌキ
下顎骨
69
ウシ
角(切断・加工痕あり)
71
ウシ
大腿骨(切断痕あり)
◀ 切断痕

報告書抄録

ふりがな	まつえじょうかまちいせき　だい 1 ぶろっく (とのまち 198-7 ほか)　だい 13 ぶろっく (みなみたまち 108-1 ほか)　だい 14 ぶろっく (みなみたまち 101-21 ほか)　だい 16 ぶろっく (みなみたまち 130-6 ほか・134-1 ほか)　そうかつへん
書名	松江城下町遺跡　第 1 ブロック (殿町 198-7 外)　第 13 ブロック (南田町 108-1 外)　第 14 ブロック (南田町 101-21 外)　第 16 ブロック (南田町 130-6 外・134-1 外)　総括編
副書名	城山北公園線都市計画街路事業に伴う松江城下町遺跡発掘調査報告書
巻次	8
シリーズ名	松江市文化財調査報告書
シリーズ番号	第 185 集
編著者名	小山泰生，石丸恵利子
編集機関	松江市教育委員会 （松江市歴史まちづくり部　まちづくり文化財課　埋蔵文化財調査室） 〒 690-8540　島根県松江市末次町 86 番地　　TEL：0852-55-5284
所在地	公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団 （埋蔵文化財課） 〒 690-0401　島根県松江市島根町加賀 1263-1　　TEL：0852-85-9210
発行年月日	平成 30(2018) 年　3 月

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	東経			
松江城下町遺跡 (殿町198-7 外)	松江市殿町 198 番地 7 外	32201	D1026-139	35° 28′ 23″ 133° 03′ 14″	20170626 ～ 20170808	32.3㎡	城山北公園線 都市計画街路事業
松江城下町遺跡 (南田町108-1 外)	松江市南田町 108 番地 1 外	32201	D1026-134	35° 28′ 22″ 133° 03′ 36″	20161027 ～ 20170324	162.7㎡	城山北公園線 都市計画街路事業
松江城下町遺跡 (南田町101-21 外)	松江市南田町 101 番地 21・22	32201	D1026-86	35° 28′ 21″ 133° 03′ 35″	20130627 ～ 20130930	67.5㎡	城山北公園線 都市計画街路事業
松江城下町遺跡 (南田町130-6 外)	松江市南田町 130 番地 6・8・9	32201	D1026-63	35° 28′ 21″ 133° 03′ 41″	20120702 ～ 20130315	214.4㎡	城山北公園線 都市計画街路事業
松江城下町遺跡 (南田町134-1 外)	松江市南田町 134 番地 1 外	32201	D1026-91	35° 28′ 21″ 133° 03′ 42″	20131105 ～ 20140708	479.0㎡	城山北公園線 都市計画街路事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
松江城下町遺跡	近世城下町	江戸時代	掘立柱建物 礎石建物 区画境溝 屋敷境溝 溝状遺構 石組水路 井戸 廃棄土坑 畠 祭祀遺構	陶器 磁器 土師器皿 土器 木製品 金属製品 石製品 瓦 動物遺存体	松江城下町遺跡における江戸時代初頭から幕末までを主体とした各遺構面では、城下町形成以前・城下町形成段階・城下町形成以後の嵩上げ造成面・城下町の解体などに関わる遺構を検出し、多量の遺物を得た。 調査面積が狭小範囲の調査区では近世武家屋敷内の表口に関連した遺構の検出が多く、調査面積が広範囲の調査区では近世武家屋敷内で掘立柱建物・礎石建物・屋敷境・廃棄土坑などの遺構を検出した。 城山北公園線都市計画街路事業に伴う松江城下町遺跡発掘調査の総括を行った。

松江市文化財調査報告書　第 185 集

城山北公園線都市計画街路事業に伴う

松江城下町遺跡発掘調査報告書 8

松江城下町遺跡

第　1 ブロック (殿町 198-7 外)

第 13 ブロック (南田町 108-1 外)

第 14 ブロック (南田町 101-21 外)

第 16 ブロック (南田町 130-6 外・134-1 外)

総括編

平成 30(2018) 年 3 月

編集・発行　島 根 県 松 江 市 教 育 委 員 会
公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団

印　　刷　有限会社　黒 潮 社
島根県松江市向島町 182-3